

Ⅲ 今井見切塚遺跡の調査

1. 遺跡の概要

調査対象域の全面積は、今井三騎堂遺跡を上回る148,500 m²という広大なものであるが、遺構の分布は丘陵頂部の1区(25,000 m²)と東側斜面の5区(57,600 m²)に集中しており、斜面勾配のきつい4区(11,000 m²)や西側斜面部の2区(22,000 m²)・3区(7,300 m²)・6区(13,200 m²)・7区(12,400 m²)などでは、極めて散漫な状況であった。また、こうした遺構分布に付随して、1・5区では層厚30～50 cm、面積約4万m²に及ぶ遺物包含層が存在し、草創期後半や前期後半を主体とした土器・石器類が多量に検出された。

検出された遺構は、竪穴住居40棟(草創期後半3・早期4・前期30・中期中葉1・時期不明2)、土坑258基(草創期後半4・早期1・前期71・中期22・後期1・時期不明159)、掘立柱建物8棟と屋外埋設土器3基(いずれも前期)の他に、時期の特定できない陥穴8基、集石土坑7基などがある。竪穴住居をはじめとする各遺構は、今井三騎堂遺跡と同様に草創期後半と前期後半の2時期を中心に構成されており、帰属時期を特定できない時期不明の遺構の大半が、この両期のいずれかに帰属するものと考えられる。ただし、草創期後半の遺構は5区に限定されるが、前期では1・5区の両地点に分散立地しており、その様態を異にしている。また、両期の集落形態は環状ではなく、弧状ないし直線状を呈している。

ところで、当遺跡は平成元年の宅地造成に伴い、赤堀町教育委員会によって部分的な発掘調査が実施されている。位置的には、5区南側のCN～CU-25～36グリッドを中心とした約3,000 m²の範囲に該当するが、前期の竪穴住居5棟と土坑14基の調査がなされている。その詳細については当該の報告書(松村・他1991)を参照されたいが、今回の当事業団の調査範囲と重複していることや、全体の集落内

容を検討する上で重要・不可欠であることから、赤堀町教育委員会の許可を得て、それらの遺構・遺物資料を再掲載することにした。また、今回の調査との混同を避けるために、赤堀町教育委員会による調査区域を「今井見切塚遺跡A地点」と呼称し、章末の664～690頁において「10. A地点の遺構と遺物」として、一括掲載してある。尚、遺構名称については、各番号の先頭に「A」を付して区別を図っており、付図2-2の遺跡全体図中においても同様に表記してある。

2. 竪穴住居

赤堀町教育委員会の調査によるA地点の5棟を含めると、計45棟の竪穴住居が存在している。その時期別の内訳は、草創期後半：井草I式期1棟・稻荷台式期2棟、早期：茅山上層式期4棟、前期：花積下層式期10棟(内1棟がA地点。以下()内は同内容を示す)・諸磯a式期11棟(3)・同b式期6棟(1)・同c式期8棟、中期中葉1棟、時期不明2棟である。尚、各竪穴住居については、遺物包含層(Ⅳ・Ⅴ層)の調査終了後に、あらためてローム層最上位のⅥ層上面を精査し、その検出・確認を行った。

草創期後半の竪穴住居は、今井三騎堂遺跡に比べて棟数が少ないが、同様に長方形の掘り込みを基本形態としている。内部構造としては、明瞭な炉を確認することはできず、また柱穴は深度が浅く脆弱なだけでなくその配列も規則性に乏しい。規模の面では、長辺3～4 m×短辺2～3 m、深さ20 cm前後の小規模なものが多いが、長辺が6 mを超えるやや大形のものもある。深度の浅い不規則な柱穴配置に見る上屋構造の脆弱さと、硬化面に乏しい床面状況からは、居住期間や使用頻度の低調さが窺える。出土土器は、小破片かつ僅少であり、完形に復元できるものは存在しない。また石器も量的に乏しく、不

定形な削器やスタンプ形石器・磨り石類を主体にして、稲荷台式期には三角錐形石器が組成するが、打製石器の存在は皆無である。

早期の竪穴住居は、基本的な形態や内部施設のあり方において草創期後半の事例と大差が無く、全体的に脆弱な住居構造であることが窺える。出土遺物の面では、土器は小破片が大半を占めるものの、完形品に近いものも僅かに存在する。また石器は、石鏃・削器・磨り石類を主体にして、打製石斧が一定量組成するのが特徴的である。

前期の竪穴住居については、花積下層式段階で隅丸形状の平面形態と4本主柱の構造がほぼ確立しているが、炉（地床炉）を設けることは希有であり、床面も硬化面が形成されずに軟弱である。諸磯a～c式期では、平面形態が隅丸長方形から円形に近似した隅丸正方形へと変遷するが、長辺4m前後のスタンダードな住居に混じって、長辺が7～8mを超える大形住居が諸磯b・c式期に散見されるようになる。柱構造は、4本主柱を基本にしつつ、床面積に応じて9・10・12本などのバラエティが認められる。炉は地床炉あるいは浅い掘り込み炉から土器埋設炉へと変遷し、大形住居では土器埋設炉の他に2～3カ所の地床炉が併存するケースもある。また、複数の土器埋設炉を有するものも多見され、この場合には建て替えに伴う炉の新設が想定される。各住居の床面には、踏み固めによる硬化面が顕著に認められ、かなりの長期間居住あるいは反復的居住を含めた使用頻度の高さを示すと考えられる。出土土器は、炉の埋設土器を除いて完形品に乏しく、破片が大半を占めているが、僅少な浮島・興津式系や大木式系、北白川下層式系などの土器片の伴出も認められる。出土石器は、不定形の削器や磨り石類を主体に石鏃・石匙・石錐・打製石斧・磨製石斧・石皿・砥石・多孔石などが組成するが、花積下層式期では環状の耳飾りや管玉状の装飾品の組成が特徴的である。

中期中葉の竪穴住居は僅かに1棟のみであるが、長径5.5mの楕円形状を呈し、4本主柱で地床炉を持つ。住居の規模・構造や棟数を含めて、今井三騎

堂遺跡のあり方と類似しており、当該期は集落を形成せずに1棟の住居が単独立地する傾向を窺うことができる。出土遺物には、複数の類型で構成されたかなり多数の土器片が認められ、また石器には少量ながらも石鏃・削器・打製石斧・磨り石類などが認められる。

尚、草創期後半と前期を中心とする竪穴住居からは、量的な多寡のばらつきはあるものの、黒曜石の原石・石核や剥片を出土するケースが多見される。ここでは、今井三騎堂遺跡の場合と同様に、時期別における黒曜石の流通システム解明へ向けた資料集積を目的として、X線回折試験による産地同定を実施し、その分析結果を691頁の「IV 科学的分析」に掲載した。また、18・20・29・33号住居の炉内や埋設土からは、炭化材小片や炭化種実が検出されているが、その樹種同定結果についても上記項目に掲載しており、黒曜石の産地同定と併せて参照頂きたい。

以下、各竪穴住居の内容について、その詳細を述べるが、埋設土層については時期毎に多くの共通性が認められることから、今井三騎堂遺跡の事例と同様に、その記載内容を次のように極力統一している。尚、これに当てはまらない場合や中期の竪穴住居に関しては、個々にその土層内容を記載してある。

●草創期後半の竪穴住居の標準埋設土層

a層：黒褐色土（10YR2/2）を主体に暗褐色土（10YR3/4）が10～20%混入。微量の炭化物粒を含む。締まり弱く、粘性を持つ黒ボク的な土。

b層：暗褐色土（10YR3/4）を主体に黒褐色土（10YR2/2）が10%混入。粘性に乏しく、かなり締まりのある土。

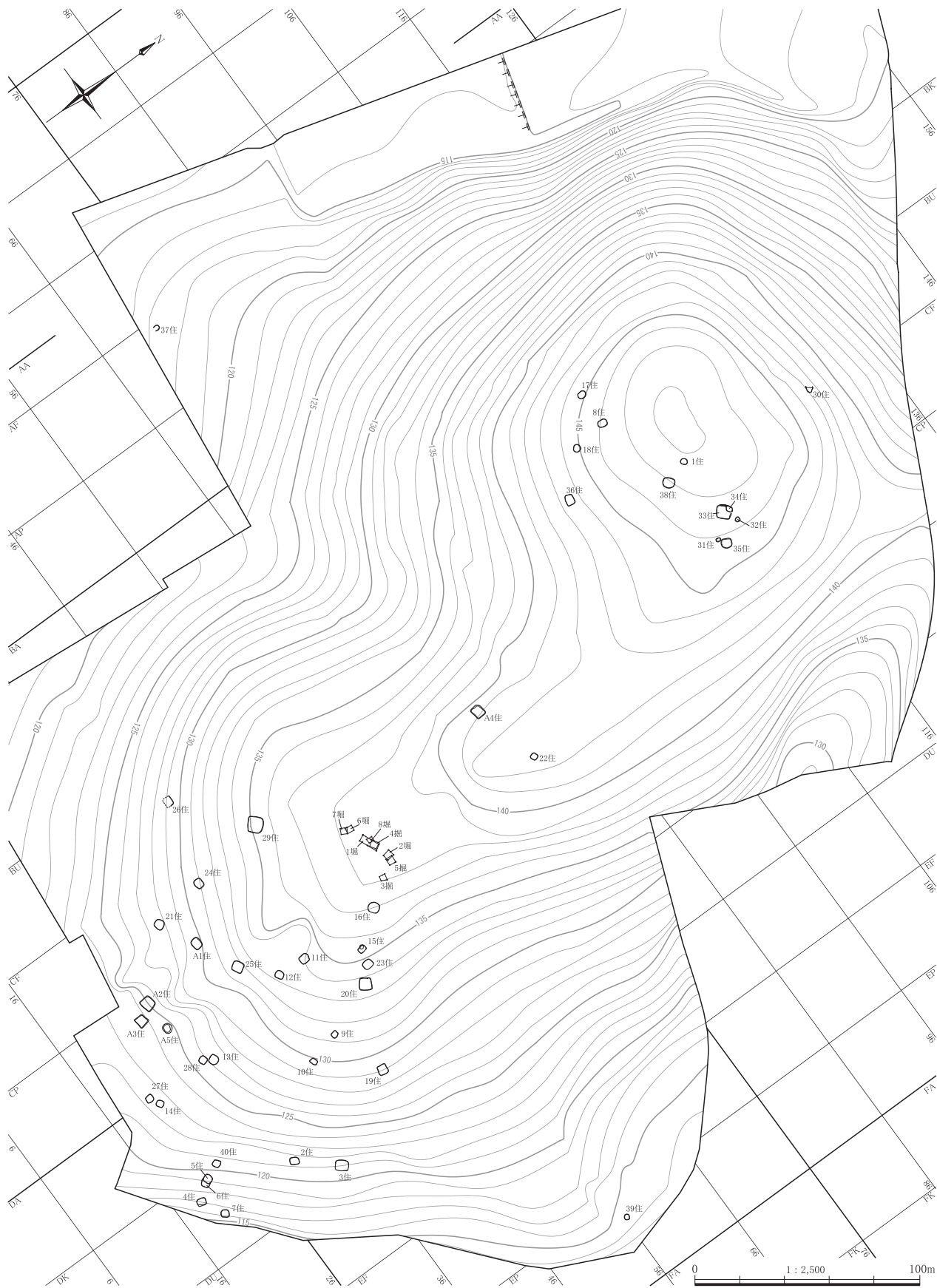
c層：暗褐色土（10YR3/4）とロームブロックとがほぼ1：1で混入。締まり弱く、やや粘性を持つ。

d層：ロームブロックを主体に暗褐色土（10YR3/4）が10～20%混入。締まり弱く、やや粘性を持つ。

●前期の竪穴住居の標準埋設土層

1層：黒色土（10YR2/1）を主体に黒褐色土（10YR2/3）が10～20%混入。少量の炭化物粒を含む。

III 今井見切塚遺跡の調査



第 263 図 今井見切塚遺跡の竪穴住居の分布

2層. 黒褐色土 (10YR2/3) を主体に黒色土 (10YR2/1) が各 20%前後混入。少量の炭化物粒を含む。

3層. ローム土を主体に黒褐色土 (10YR2/3) が 20 ~ 30%混入。微量の炭化物粒を含む。

4層. ローム土を主体に黒褐色土 (10YR2/3) が 10%混入。微量の炭化物粒を含む。

5層. 床面の掘方埋填土であり、ローム土を主体に黒褐色土 (10YR2/3) が 5%前後混入。

※ダッシュ付きの土層は、僅かな色調の違いにより分層されることを示す。

● 1号住居

位置 CD -110

写真 PL 110

面積 5.72 m²

方位 N 50 度 E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ楕円形に近似した隅丸形状を呈し、長辺 3.12 m×短辺 2.64 m、深さ 10 ~ 20 cmである。四辺の壁面は約 80 度前後の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はかなり湾曲して走行する。

床面 平坦地のローム層 (VI層) を最大 20 cm掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸面を持つが、傾斜の少ない平坦な床面である。全体的に踏み固めによる堅緻な面は認められず、軟弱な状態を呈する。

埋没土 薄層のために不明確だが、厚さ 20 cmの a・b層が自然埋没をしていると考えられる。

遺物 総数 79 点の遺物 (土器 53、石器 26) が存在するが、床面に密着したものは無く、その全てが埋没土上位の a 層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は小破片のみであり、井草 I 式の縄文 13 点 (1 ~ 11・13・14)・燃糸文 2 点 (12・15)・その他胴部破片 32 点の他に、花積下層式 1 点、型式不明 4 点などがある。また石器には、削器 2 点 (16・17)、磨り石

型式別点数

型式	井草 I	井草	花積下層	時期不明	総計
合計	16	32	1	4	53

分類別点数

井草 I 式		井草式		花積下層式		
分類	2	3	分類	不明	分類	2類
合計	3	13	合計	32	合計	1

縄文原体別点数

井草 I 式				
分類	2a	2b	9a	9b
合計	3	11	1	1

胎土別点数

胎土	型式	井草 I
A		16

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他		総計	
器種	削器類	磨石類	石皿	剥片	礫塊	
合計	2	3	1	18	2	26

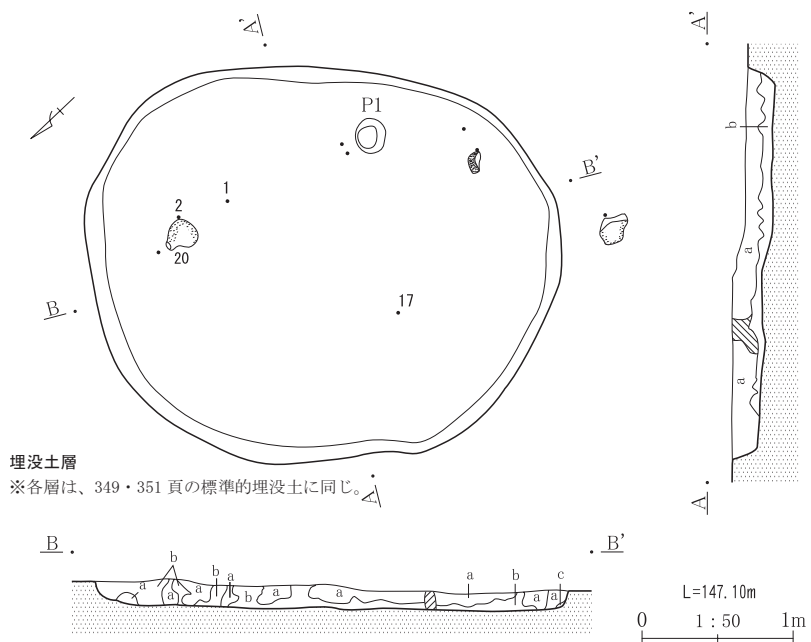
分類別点数

搔器・削器		磨石類		石皿		
分類	2類	分類	2類	4類	分類	3類
合計	2	形態	a	ac	合計	1
		合計	2	1		

石材別の点数と重量

搔器・削器			磨石類			石皿		
コード	1	2	コード	4	19	コード	4	
点数	1	1	点数	2	1	点数	1	
重量	21.2	1	重量	195	844	重量	2248	
剥片			礫塊					
コード	1	2	コード	4				
点数	15	3 (2)	点数	2				
重量	123	(5.5)	重量	734				

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量



第 264 図 1号住居

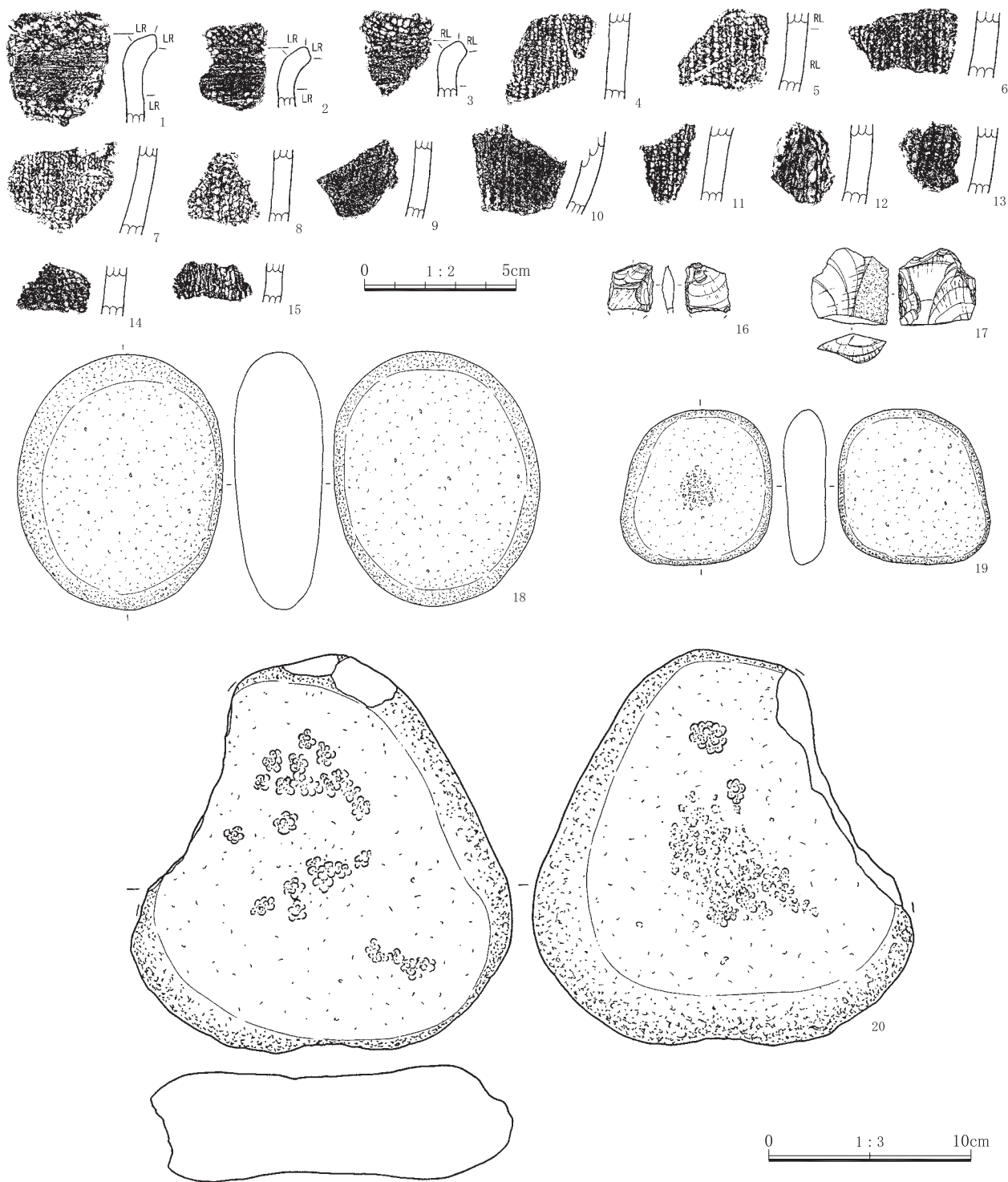
III 今井見切塚遺跡の調査

類3点 (18・19)、石皿1点 (20)、剥片18点、礫塊2点が組成するのみで、器種・数量ともに乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が井草I式により構成されることから、当該期の所産と想定され

る。(観察表：48・63頁)

その他 炉・柱穴・周溝は検出されなかった。



第265図 1号住居出土遺物

● 2号住居

位置 DP-30

写真 PL 109

面積 11.2 m²

方位 N 31 度 E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、長辺 4.13 m × 短辺 3.26 m、深さ 40 cm である。四辺の壁面は約 60 ~ 80 度の角度で掘り込まれ、各辺ともにほぼ直線的に走行する。

床面 勾配約 11 度の斜面地のローム層 (VI・VII 層) を最大 40 cm 掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約 23 cm の比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な状態を呈する。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、合計 10 本が確認されている。基本的な柱穴配列は、住居長軸に平行する P1 ~ P5 と P6 ~ P9 の 2 列配置の構造と考えられる。主な柱穴の芯心間の距離は P1 ~ P3 : 1.7 m、P3 ~ P5 : 0.9 m、P5 ~ P6 : 1.4 m、P6 ~ P7 : 0.9 m、P7 ~ P8 : 1.35 m、P8 ~ P9 : 0.8 m、P9 ~ P1 : 1.35 m である。また、各柱穴の規模 (径 × 深さ) は、P1 : 41 × 31 cm、P2 : 32 × 40 cm、P3 : 32 × 36 cm、P4 : 32 × 30 cm、P5 : 30 × 32 cm、P6 : 21 × 17 cm、P7 : 29 × 31 cm、P8 : 24 × 27 cm、P9 : 19 × 20 cm、P10 : 30 × 32 cm である。

埋没土 厚さ 40 cm の a・b 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 僅かに総数 30 点の遺物 (土器 9、石器 21) が存在するが、床面に密着したもの (1) は少なく、その大半が埋没土上位の a 層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は小破片のみであり、稲荷台式の原体がやや粗雑で散在的施文の捺糸文 3 点 (1・3・4) や無文 4 点 (2・5~7) が認められる。1 は肥厚・無文化した口唇部下が凹線状に窪むもので、新しい様相を見せている。尚、1・7 は同一個体。石器には、スタンプ形石器 2 点 (8・9)、磨り石類 3 点 (10・11)、剥片 14 点、礫塊 1 点が組成するのみであり、数量・器種ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が稲荷台式により構成されることから、当該期の所産と想定される。(観察表 : 48・63 頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

【2号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	総計
合計	9	9

分類別点数

稲荷台式

分類	2a	3	4	不明
合計	1	2	4	2

縄文原体別点数

稲荷台式

分類	9b	18
合計	3	4

胎土別点数

胎土	型式	稲荷台
A		7

(石器)

器種別点数

系列	使用痕系列		その他		総計
器種	スタンプ	磨石類	剥片	礫塊	
合計	3	3	14	1	21

分類別点数

スタンプ形石器

分類	1類	5類
合計	1	2

磨石類

分類	1類	2類	5類
形態	ac	a	a
合計	1	1	1

石材別の点数と重量

スタンプ形石器

コード*	4	15
点数	2	1
重量	574	574

磨石類

コード*	4	19
点数	2	1
重量	37.3	747

礫塊

コード*	19
点数	1
重量	34.7

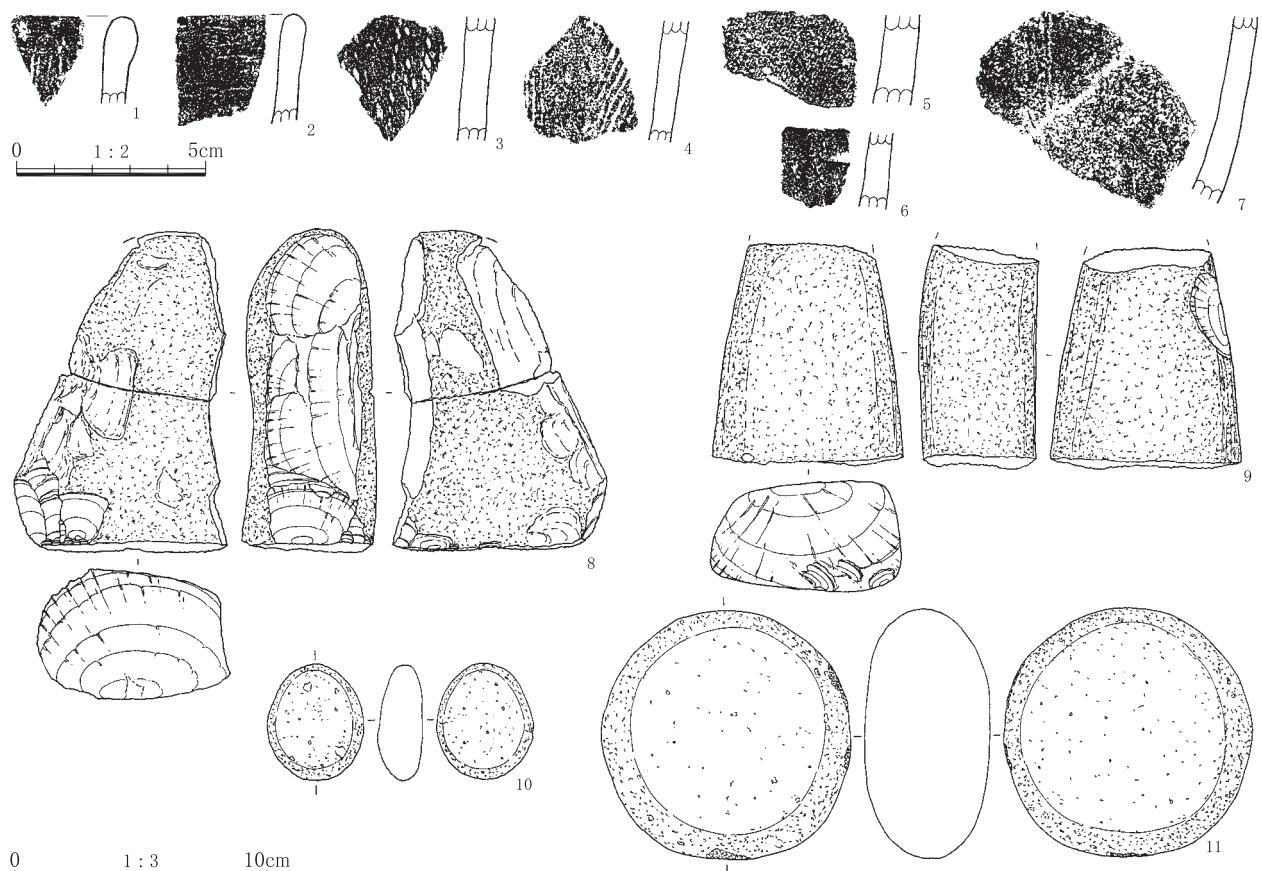
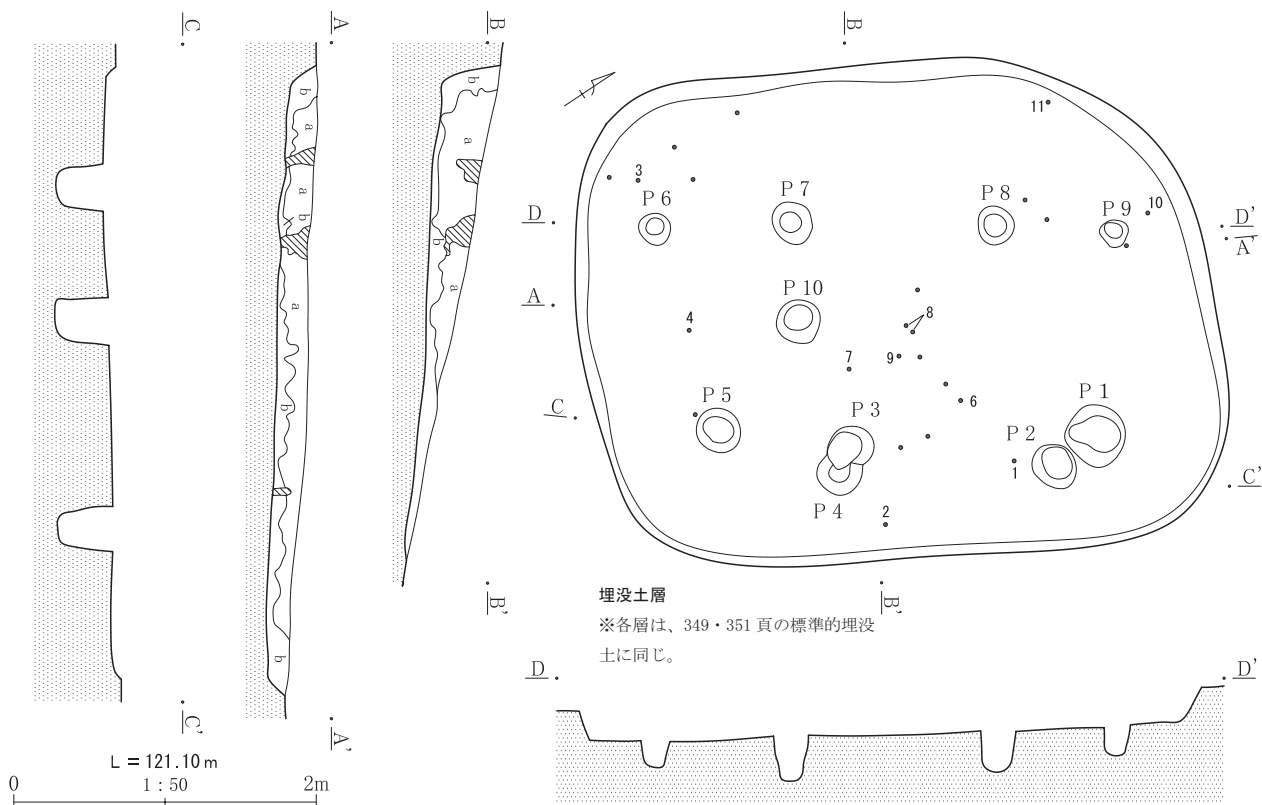
剥片

コード*	1	2
点数	11	3
重量	126	22.5

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	1	2

III 今井見切塚遺跡の調査



第 266 図 2号住居と出土遺物

● 3号住居

位置 DS-34 **写真** PL 111-112

面積 約 25 m² **方位** N 39 度 E

重複 北東隅や南東隅を時期不明の 30 号倒木痕により切られている。

形状 斜面地を浅く掘り下げているために、東辺の立ち上がりを確認できなかったが、等高線方向にはほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、長辺 5.93 m × 短辺約 4.8 m、深さ 54 cm である。残存する壁面は約 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれているが、その走行はやや湾曲している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、合計 17 本が確認されている。倒木痕の床面攪乱により欠落する柱穴の存在を考慮すれば、基本的には長軸に平行する P2 - P17 と P3 - P12 - P15 - P10 および P5 - P6 - P7 - P9 の 3 列配置の構造と推定される。主な柱穴の芯心間の距離は P2 ~ P17 : 1.6 m、P3 ~ P12 : 1.3 m、P12 ~ P15 : 1.3 m、P15 ~ P10 : 1.3 m、P5 ~ P6 : 1.3 m、P6 ~ P7 : 1.6 m、P7 ~ P9 : 1.4 m である。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1 : 30 × 25 cm、P2 : 29 × 24 cm、P3 : 23 × 14 cm、P4 : 17 × 19 cm、P5 : 20 × 24 cm、P6 : 30 × 17 cm、P7 : 20 × 19 cm、P8 : 26 × 21 cm、P9 : 27 × 18 cm、P10 : 29 × 28 cm、P11 : 32 × 19 cm、P12 : 31 × 28 cm、P13 : 28 × 20 cm、P14 : 30 × 19 cm、P15 : 24 × 32 cm、P16 : 36 × 27 cm、P17 : 34 × 28 cm である。P3・P4 をはじめ P6・P13、P8・P9、P12・P14 のように相互に近接する柱穴は、建て替えに伴って再敷設された可能性を示している。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層（VI・VII 層）を最大 54 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 43 cm の比高差で西側から東側方向へ急傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な状態を呈する。

埋没土 攪乱土の貫入や薄層などの状況もあり、やや不明瞭ではあるが、厚さ約 40 cm の a ~ c 層によって斜面上位方向から自然埋没していると考えられる。

遺物 総数 91 点の遺物（土器 33、石器 58）が埋没

土上位の a・b 層を中心に出土し、その大半は床面から浮いた状態であったが、9・15・21・23・25 ~ 27 などは床面に密着して出土している。土器は破片のみであり、稲荷台式の捺糸文 11 点（1・2・5 ~ 10・12）と、無文 12 点（3・4・11・13 ~ 20）の他に、花積下層式 1 点がある。尚、11・15・17 ~ 19 は同一個体。石器には、削器 2 点（21・23）、三角錐形石器 1 点（24）、石核 1 点（22）、磨り石類 5 点（25 ~ 27）、剥片 40 点、礫塊 9 点などが認められ、三角錐形石器が組成する点で注意を要する。

当住居の時期に関しては、出土土器が稲荷台式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：48・36 頁）

その他 炉と周溝は検出されなかった。

【3号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)				分類別点数				
型式別点数				稲荷台式				
型式	稲荷台	花積下層	総計	分類	2a	3	4	不明
合計	32	1	33	合計	4	7	12	9

縄文原体別点数				胎土別点数			
花積下層式		稲荷台式		胎土別点数			
分類	2類	分類	9a	9b	18	胎土	型式
合計	1	合計	1	12	10	胎土	稲荷台
						A	23

(石器)								
器種別点数								
系列	打製系列		使用痕系列		その他			総計
器種	削器類	三角錐	磨石類	剥片	石核	自然石	礫塊	
合計	2	1	5	40	1	1	8	58

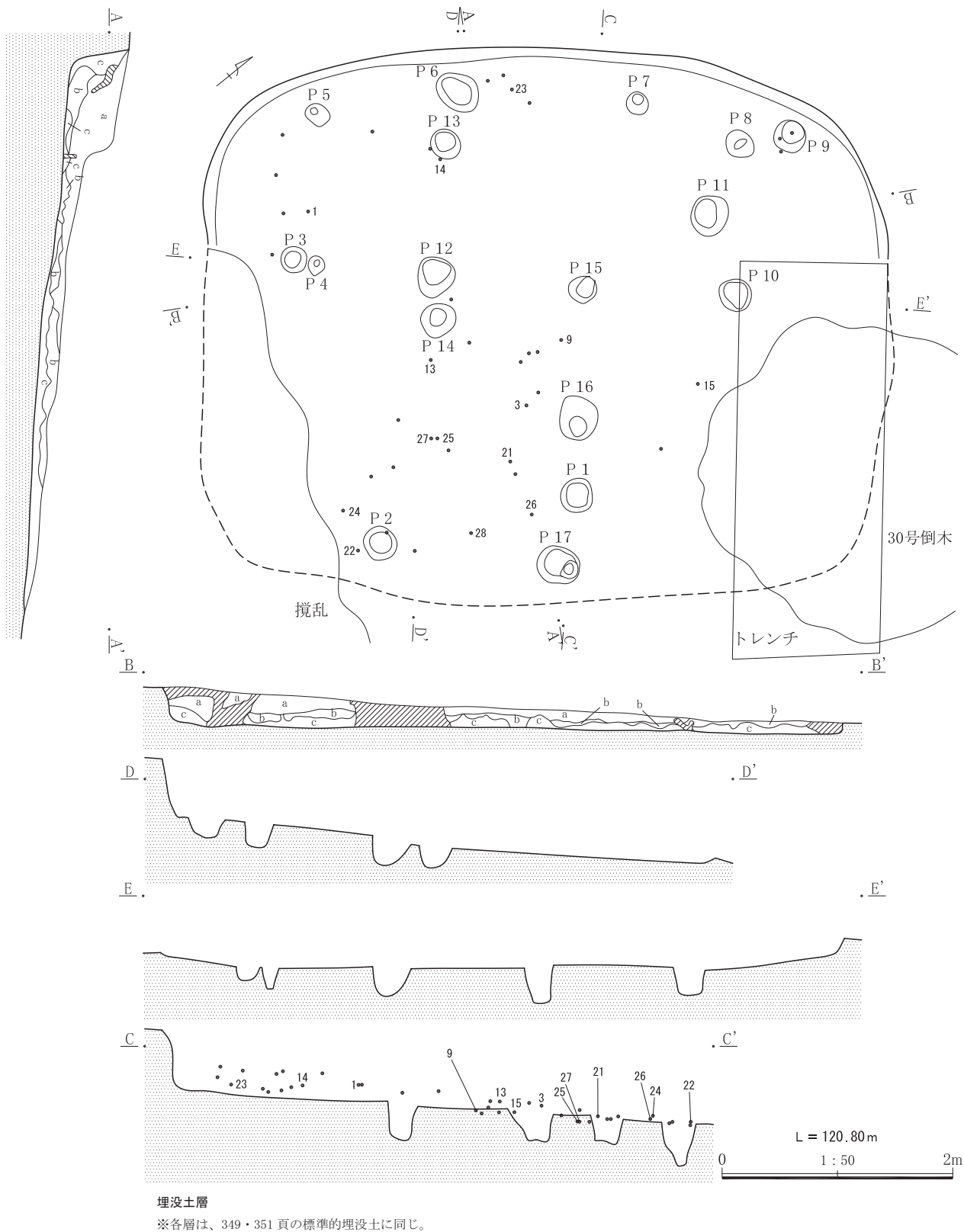
分類別点数			三角錐形石器			磨石類		
分類	1類	2類	分類	7類	分類	1類	2類	5類
合計	1	1	合計	1	形態	ac	a	ac
					合計	1	1	1
						a	ac	1
					合計	1	1	1

石材別の点数と重量			三角錐形石器		磨石類	
コード	点数	重量	コード	重量	コード	重量
	1	2.3		1		4
	1	1		1		19
	129	2.3		376		4
						1
						932
						448

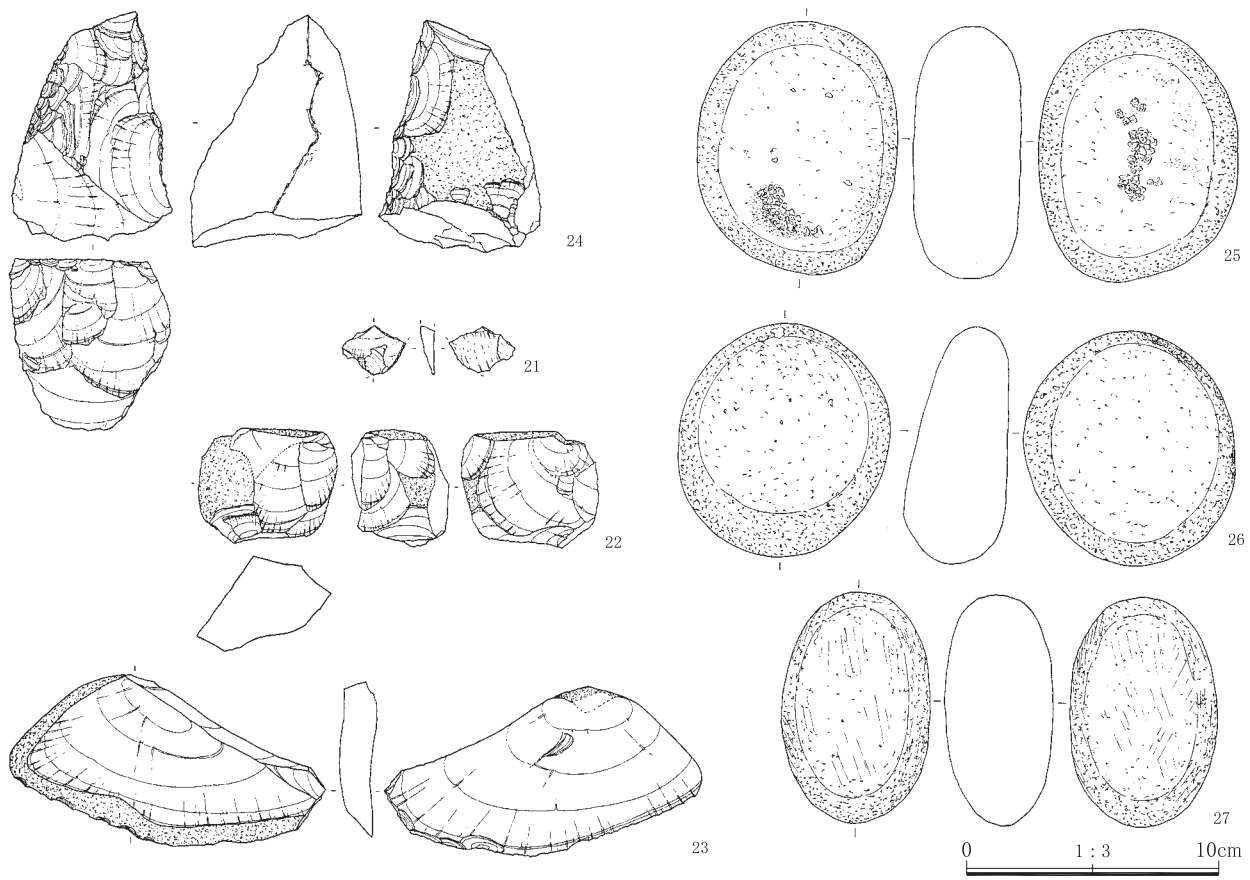
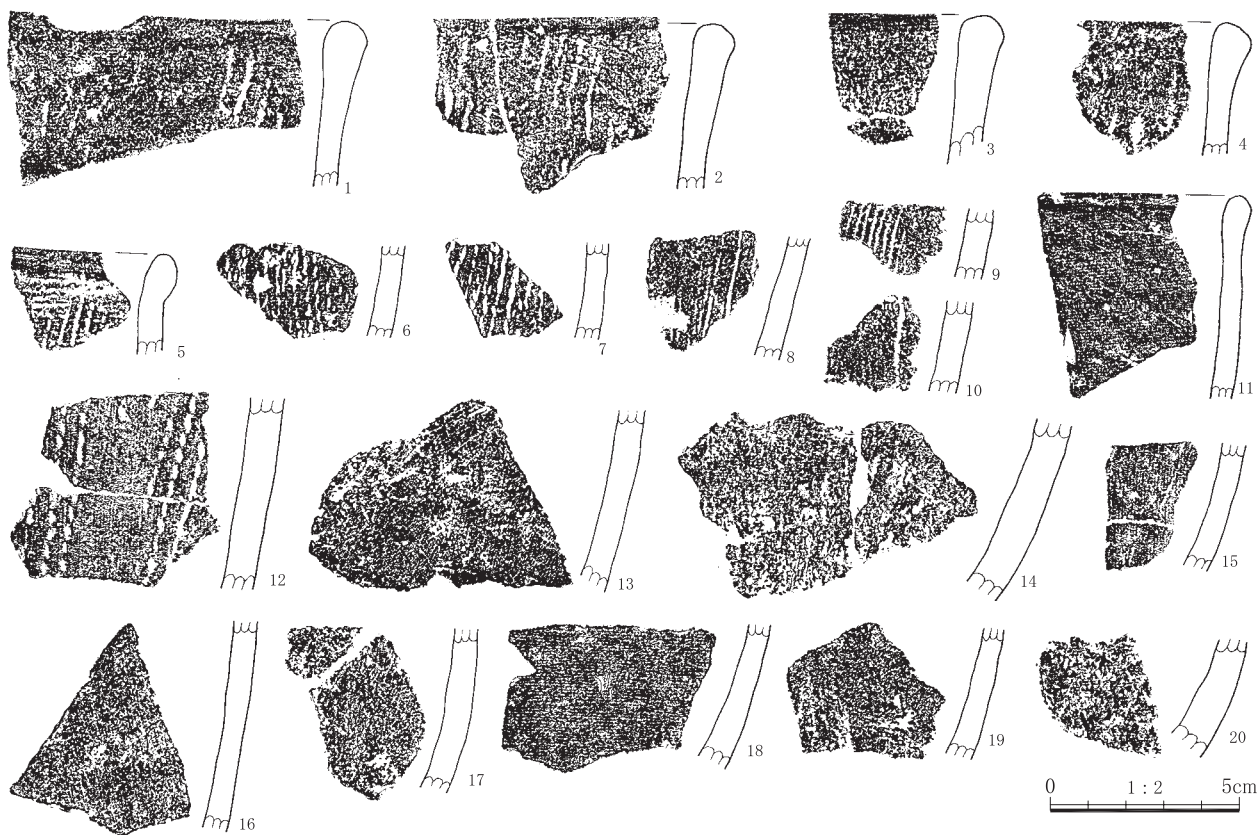
剥片		石核		礫塊		
コード	点数	重量	コード	点数	重量	重量
	1	2		1	1	4
	29	11		1	2	5
	189	26.4		129	124	81.3
					85.5	85.5

礫塊の被熱状況			被熱礫の石材別点数と重量	
分類	1	2	コード	重量
合計	3	5		9
				3
				10.1

III 今井見切塚遺跡の調査



第267図 3号住居



第 268 图 3 号住居出土遺物

● 4号住居

位置 DM-18 写真 PL 112

面積 約 11.6 m² 方位 N 14 度 E

形状 斜面地を掘り込むために、下位の東辺の立ち上がりを確認できなかったが、等高線方向にほぼ並行して南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 4.15 m × 短辺約 3.3 m、深さ 47 cm である。壁面は約 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、若干蛇行する西辺を除いてほぼ直線的に走行している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、8 本が確認されているが、基本的には P2・P3・P5・P7 の 4 本を支柱とする構造と考えられる。主な柱穴の芯心間の距離は、P2～P3：2.1 m、P3～P5：1.85 m、P5～P7：1.9 m、P7～P2：2.15 m である。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：24×29 cm、P2：24×29 cm、P3：24×18 cm、P4：24×24 cm、P5：21×22 cm、P6：25×24 cm、P7：23×20 cm、P8：23×23 cm である。

床面 勾配約 12 度の斜面地のローム層（VI・VII 層）を最大 47 cm 掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸面を持ち、自然地形と同様に約 53 cm の比高差で西側から東側方向へ急傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ 40 cm 前後の 1・2 層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 116 点の遺物（土器 34、石器 82）が埋没土上位を中心に出土し、その大半は床面から浮いた状態であったが、2・11・18・27・28 などは床面に密着して出土している。土器は、1 のように準完形品もあるが、そのほとんどが小破片である。早期の茅山上層式以降の貝殻条痕文 6 点（1～3・9・11・12）や擦痕文 5 点（4～8）が主体を占めるが、貝殻背圧痕（10）を持つものも認められる。この他に、稲荷台式 2 点、花積下層式 3 点、諸磯 a 式 1 点などがある。尚、5～7・9 は同一個体。石器には、石鏃 4 点（13～16）、削器 6 点（19・22～26）、打製石斧 4 点（17・18・20・21）、磨り石類 3 点（27・

28）、剥片 60 点、礫塊 4 点などが組成する。

当住居の時期に関しては、出土土器が早期末葉（茅山上層式以降）の条痕文土器を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：48・63 頁）

その他 炉と認定できるような焼土や被熱痕は存在せず、また周溝も検出されなかった。

【4号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	押型	条痕	花積下層	諸磯a	総計
合計	2	1	28	3	1	35

縄文原体別点数

条痕文系	分類	19a	19c
合計		5	5

分類別点数

稲荷台式	分類	不明
合計		2

押型文系	分類	不明
合計		1

花積下層式	分類	2類
合計		3

条痕文系

種別	b1	b	不明
合計	1	9	18

諸磯a式

分類	4類
合計	1

胎土別点数

胎土	型式	条痕
C		10

(石器)

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列		その他		総計
器種	石鏃	削器類	打斧	礫器	磨石類	剥片	礫塊	
合計	4	6	4	1	3	60	4	82

分類別点数

石鏃	分類	2類	5類	9類
合計		2	1	1

搔器・削器

分類	1類	2類
合計	2	4

打製石斧

分類	1類	2類
合計	3	1

磨石類

分類	2類	4類	5類
形態	ac	ac	a
合計	1	1	1

石材別の点数と重量

石鏃	コード	2	3	7
点数		1	1	2
重量		2.7	1.7	4.1

搔器・削器	コード	1	7
点数		5	1
重量		346	12.7

打製石斧

コード	1	3
点数	3	1
重量	289	122

礫器

コード	1
点数	1
重量	250

磨石類

コード	4
点数	3
重量	1083

剥片

コード	1	2	3	7	9
点数	34	4	2	7	13
重量	221	16.3	13.8	34.7	85.3

礫塊

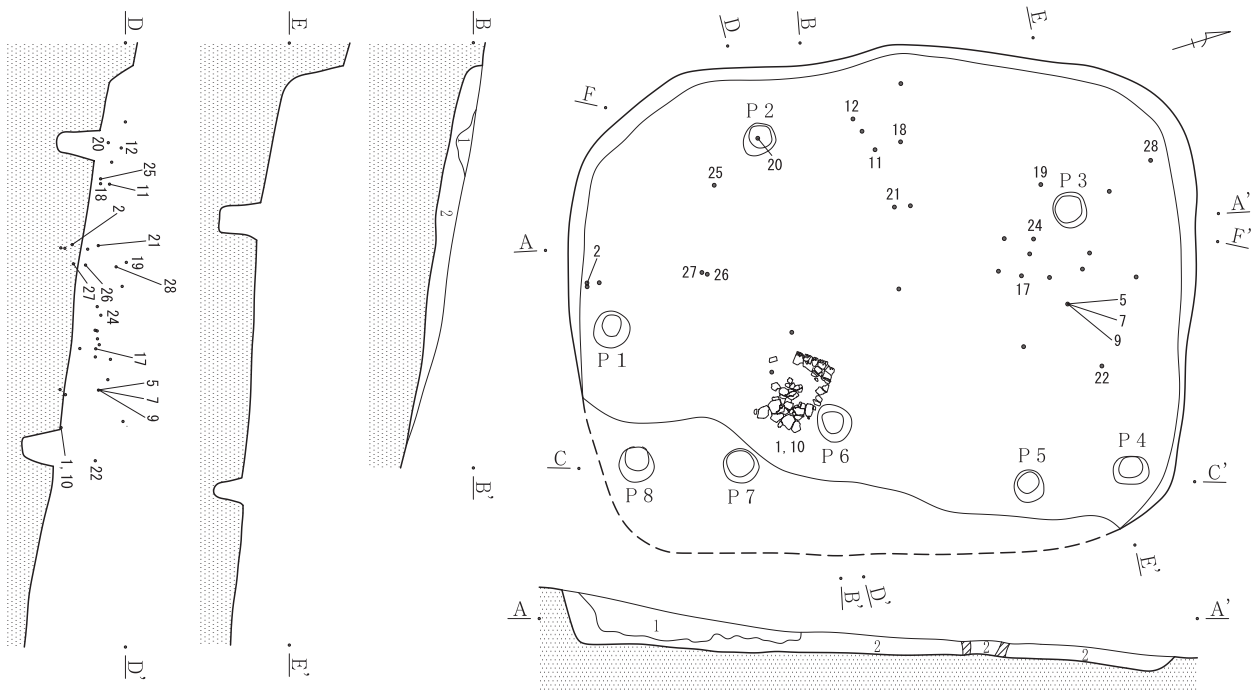
コード	4
点数	4
重量	81.9

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	1	3	4

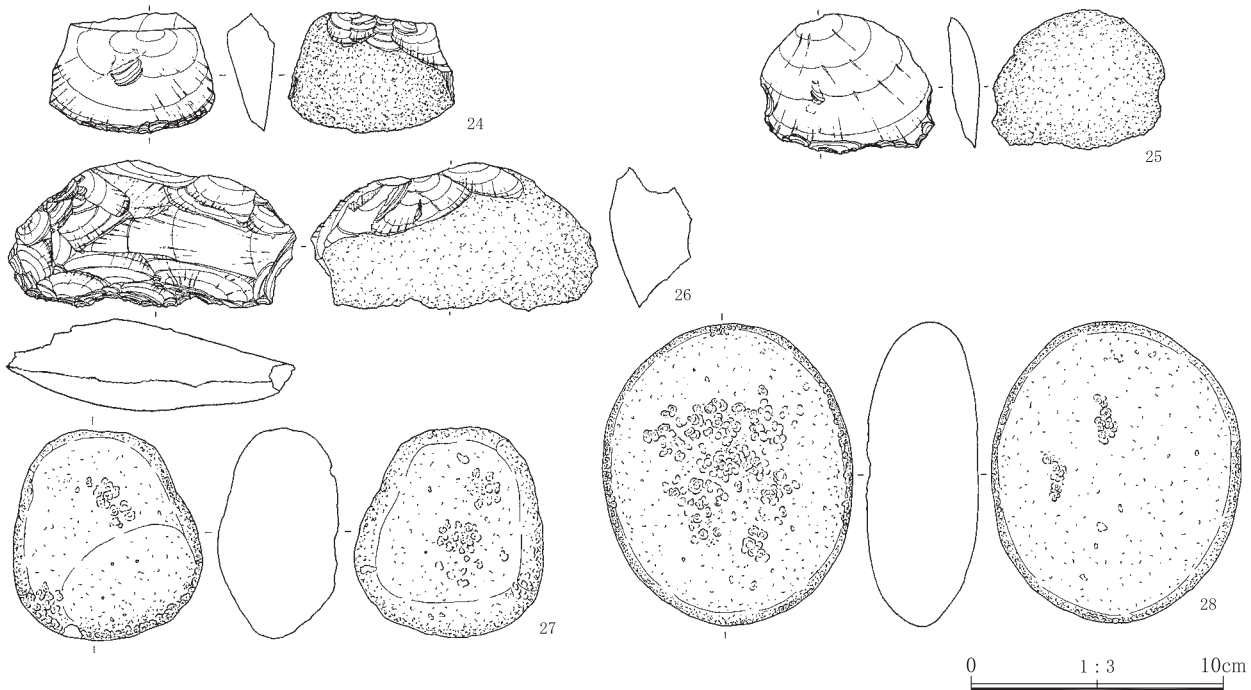
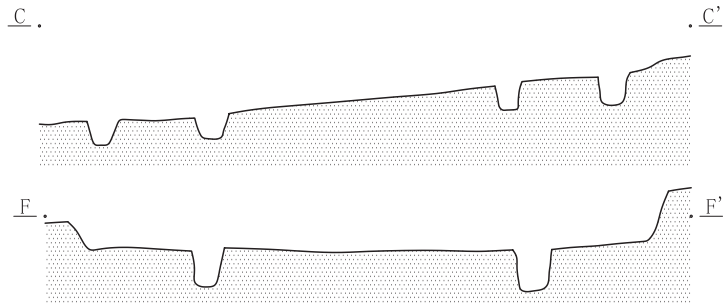
被熱礫の石材別点数と重量

コード	4
点数	1
重量	10



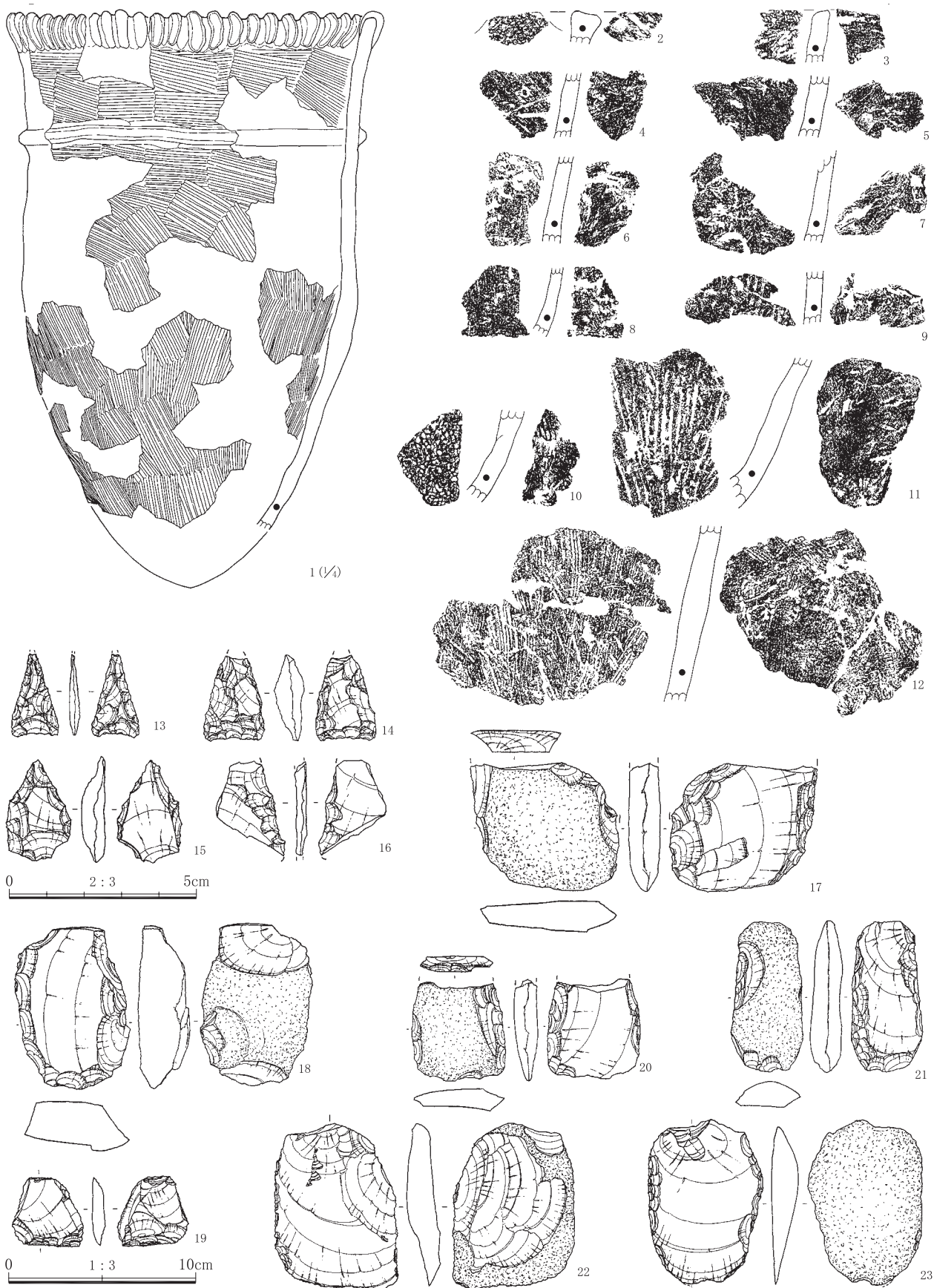
埋没土層

1. 暗褐色土（10YR3/4）を主体にローム土が10%混入。少量の炭化物粒含有。
2. 暗褐色土を主体にローム土が40%混入。少量の炭化物粒含有。



第 269 図 4 号住居と出土遺物

III 今井見切塚遺跡の調査



第 270 図 4号住居出土遺物

● 5号住居

位置 DL -21 写真 PL 113-114

面積 約 11.2 m² 方位 N 70 度 E

重複 埋没土の観察により、南辺側で6号住居を切つていると認定したが、確実ではなく、逆の可能性も否定できない。

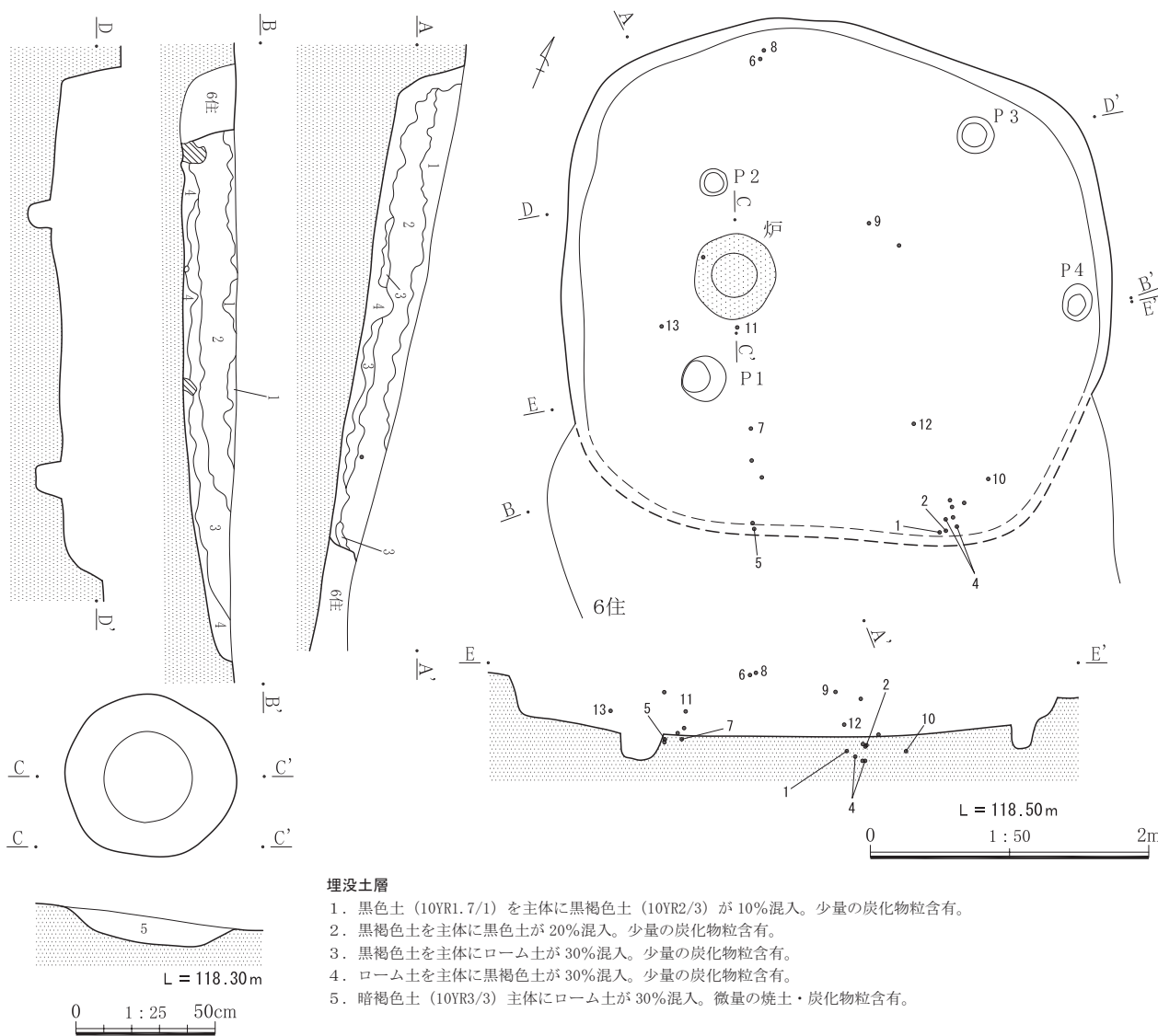
形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺 3.95 m × 短辺約 3.70 m、深さ 12 ~ 49 cm である。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、残存する各辺はやや外湾気味に張り出している。

炉 床面中央部から 50 cm ほど西壁寄りに、1 基が

確認された。円形状の掘り込み炉であり、直径 60 × 深さ 10 cm の規模を有する。壁面の被熱は顕著ではなく、埋没土にも微量の焼土や炭化物粒が含まれる程度である。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、4 本が確認されている。P1 ~ P4 の配列はやや規則性に欠けるが、4 本主柱の構造と考えられる。各柱穴の芯間距離は、P1 ~ P2:1.4 m、P2 ~ P3:1.9 m、P3 ~ P4:1.4 m、P4 ~ P1:2.8 m である。また、各柱穴の規模（径 × 深さ）は、P1 : 32 × 23 cm、P2 : 21 × 19 cm、P3 : 26 × 23 cm、P4 : 27 × 25 cm である。

床面 勾配約 12 度の斜面地のローム層（VI・VII層）



第 271 図 5号住居

III 今井見切塚遺跡の調査

【5号住居出土物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	条痕	花積下層	総数
合計	6	1	7

分類別点数

分類	条痕文系
合計	2
合計	6

花積下層式

分類	2類
合計	1

分類別点数

搔器・削器

分類	1類
合計	1

打製石斧

分類	1類	2類	3類	8類
合計	1	2	1	1

磨石類

分類	2類	5類
形態	ac	ac
合計	2	1

縄文原形別点数

分類	19a	19c
合計	3	3

胎土別点数

胎土	型式	条痕
C		6

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計		
器種	削器類	打斧	磨石類	剥片	自然石	
合計	1	5	3	5	1	15

石材別の点数と重量

搔器・削器

コート	28
点数	1
重量	25.3

打製石斧

コート	1	3	10
点数	3	1	1
重量	269	11.7	56.7

磨石類

コート	4
点数	3
重量	1071

剥片

コート	1	7
点数	4	1
重量	57.1	5



第 272 図 5号住居出土遺物

を最大 49 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 50 cm の比高差で北側から南側方向へ急傾斜している。炉の周辺を中心にして、若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 厚さ 50 cm 弱の 1～4 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 第 272 図に掲載した遺物は僅少であるが、調査当初は 6 号住居との重複関係に気付かず掘り下げたために、両住居の遺物を明確に区別することができずに取り上げたものが第 275 図に掲載してある。当住居に明確に帰属するのは総数 22 点（土器 7、石器 15）であり、1 点（4）を除いて埋没土上位の 1・2 層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は、早期茅山上層式以降の貝殻条痕文 3 点（1～3）や擦痕文 3 点（4・5）の他に、花積下層式 1 点がある。また、石器は削器 1 点（10）、打製石斧 5 点（6～9）、磨り石類 3 点（11～13）、剥片 5 点、礫塊 1 点などが組成する。

当住居の時期に関しては、出土土器が早期末葉（茅山上層式以降）の条痕文土器を主体とすることから、当該期の所産と想定されるが、第 275 図 17・30・31 の土器を考慮すれば花積下層式段階まで下る可能性もある。（観察表：48・36 頁）

その他 周溝は検出されなかった。

● 6 号住居

位置 DL -20 **写真** PL 113・114

面積 約 10 m² **方位** N 59 度 E

重複 北辺側約 1/3 が 5 号住居と重複するが、新旧関係は確定できない。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈すると推定される。規模は長辺 396 m × 短辺約 3.5 m、深さ 32 cm である。壁面は約 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、北辺を除く各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 5 号住居と重複することもあり、検出することができなかった。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、7 本が確認されている。各柱穴の配置は雑然かつ不規則であるが、P1～P4 の 4 本主柱構造と推定される。主柱穴の芯心間の距離は、P1～P2：1.7 m、P2～P3：1.35 m、P3～P4：1.5 m、P4～P1：1.7 m である。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：30×17 cm、P2：25×25 cm、P3：24×17 cm、P4：27×19 cm、P5：34×25 cm、P6：41×24 cm、P7：27×21 cm である。

床面 勾配約 12 度の斜面地のローム層（VI 層）を最大 32 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に北側から南側方向へ緩傾斜している。

踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 5 号住居との重複により判然としないが、厚さ約 30 cm の 1～3 層が自然埋没すると考えられる。

遺物 5 号住居の項で前述したように、両住居の重複関係により遺物の混在している可能性が高いが、当住居の帰属と認定したのは総数 37 点（土器 16、石器 21）である。いずれも埋没土上位の 1・2 層を中心にして、床面から浮いた状態で出土した。土器は、全て貝殻条痕文 16 点（1～7）で占められ、1・2・6・7 は同一個体。石器は、削器 4 点（13～15）、打製石斧 5 点（8～12）、スタンプ形 1 点、磨り石類 1 点（16）、剥片 9 点、礫塊 1 点などが組成するのみである。

当住居の時期に関しては、出土土器から早期末葉（茅山上層式以降）段階と推定されるが、5 号住居の事例と同様に花積下層式期まで下る可能性もある。

尚、第 275 図の 17～41 の混在遺物については、花積下層式 17 点（17・30・31）や早期条痕文 53 点（18～29）の他に、稻荷台式 1 点、早期沈線文 3 点、諸磯 a 式 3 点、同 b 式 3 点、同 c 式 1 点、型式不明 3 点などの土器と、石鏃 4 点（32～35）、石匙 1 点（36）、削器 4 点（39・40）、打製石斧 3 点（37・38・41）、剥片 36 点、礫塊 3 点などの石器が認められる。

（観察表：48・63 頁）

III 今井見切塚遺跡の調査

その他 周溝は検出されなかった。

【6号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	条痕	総数
合計	16	16

縄文原形別点数

分類	条痕文系
合計	19a
合計	9

(石器)

器種別点数

系列	打製系列		使用痕系列		その他		総計
	削器類	打斧	スタンプ	磨石類	剥片	自然石	
合計	4	5	1	1	9	1	21

分類別点数

条痕文系		
分類	2	不明
合計	9	7

胎土別点数

胎土	型式	
	条痕	
C		9

分類別点数

搔器・削器			打製石斧			スタンプ形石器		磨石類	
分類	1類	2類	分類	1類	2類	分類	8類	分類	2類
合計	1	3	合計	1	4	合計	1	形態	ac
								合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器			打製石斧		
コード	点数	重量	コード	点数	重量
	1	384		1	239
	3	80		4	92.6
	7	12		1	

スタンプ形石器

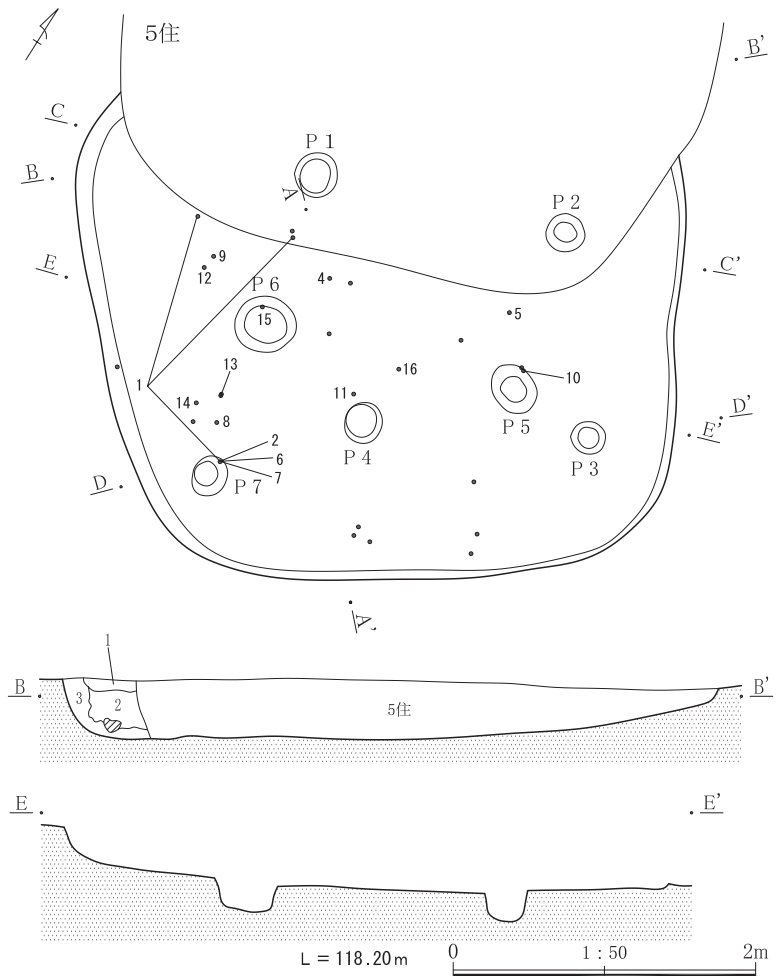
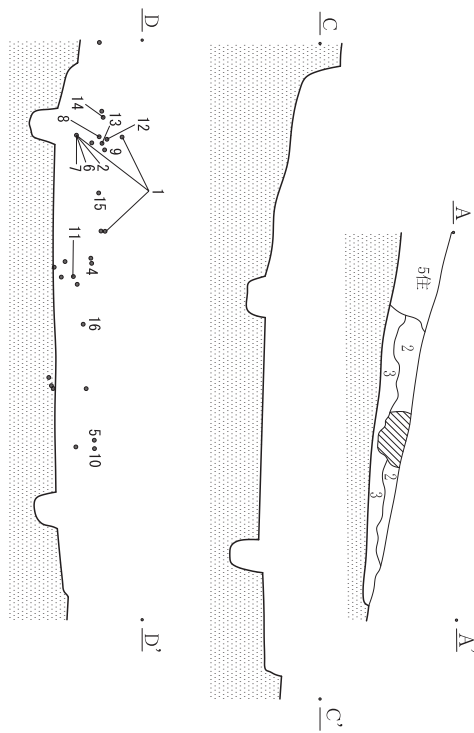
コード	点数	重量
	4	279
	1	

磨石類

コード	点数	重量
	4	529
	1	

剥片

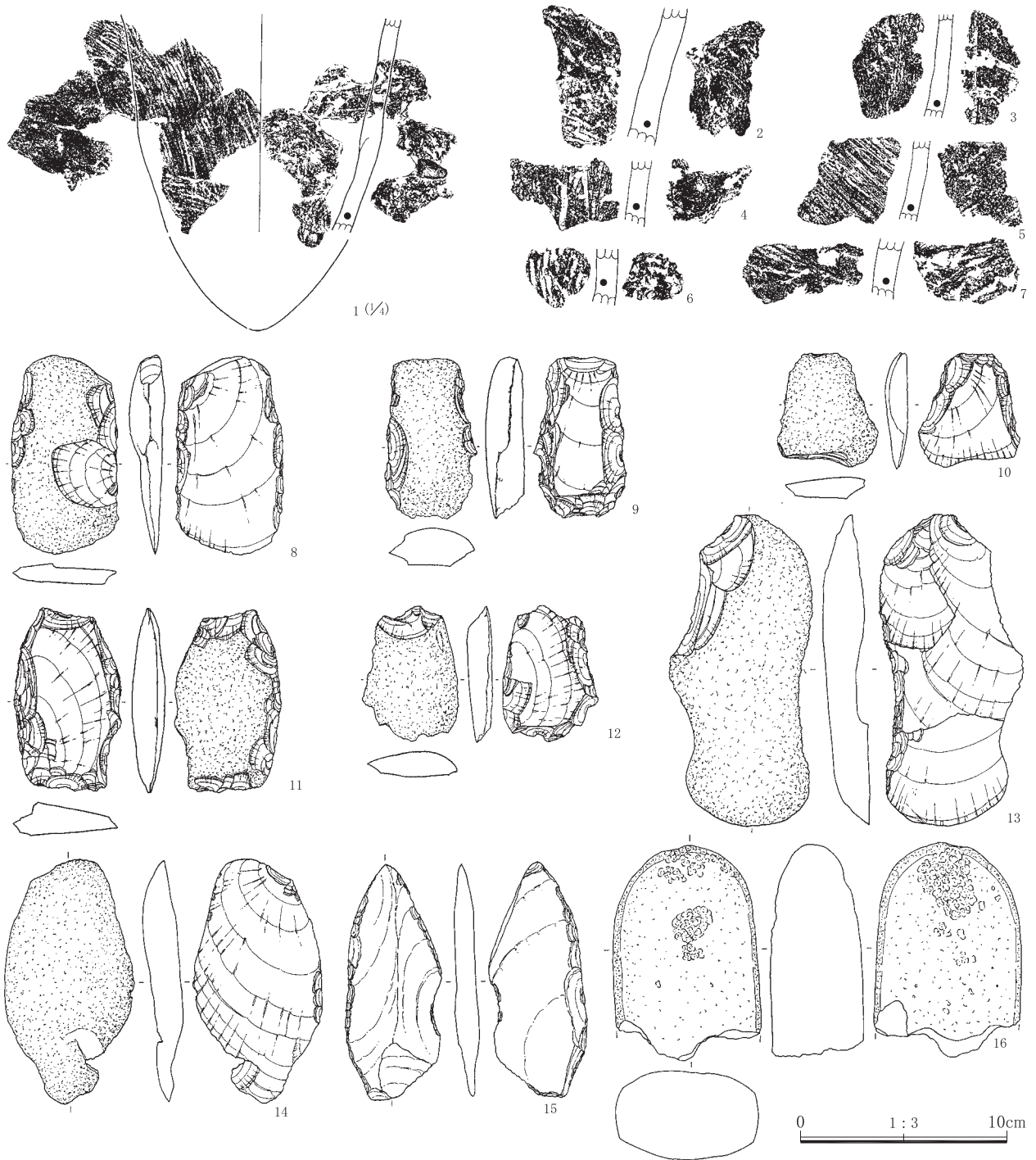
コード	点数	重量
	1	163
	2	1
	7	37.8
	9	20.2



埋没土層

1. 黒色土 (10YR1.7/1) を主体に黒褐色土 (10YR2/3) が 10% 混入。少量の炭化物粒含有。
2. 黒褐色土を主体に黒色土とローム土が各 20% 混入。少量の炭化物粒含有。
3. 黒褐色土とローム土が 1 : 1 で混入。少量の炭化物粒含有。

第 273 図 6 号住居



第 274 图 6 号住居出土遺物

III 今井見切塚遺跡の調査

【5・6号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	押型	条痕	花積下層	諸磯a	諸磯b
合計	1	3	53	17	3	3

諸磯c	時期不明	総計
1	3	84

分類別点数

条痕文系			諸磯a式		花積下層式	
分類	2	不明	分類	2類	分類	1類 2類
合計	19	34	合計	3	種別	不明 a 不明
					合計	1 14 2

諸磯b式		諸磯c式	
分類	3類	分類	1類
合計	3	合計	1

縄文原形別点数

条痕文系		花積下層式		胎土別点数		
分類	19a	分類	4c	型式	条痕	花積
合計	19	合計	14	C	19	14

(石器)

器種別点数

系列	打製系列				その他			総計
器種	石鏃	石匙	削器類	打斧	剥片	自然石	礫塊	
合計	4	1	4	3	36	2	1	51

分類別点数

石鏃				石匙	
分類	1類	2類	9類	分類	1類
合計	2	1	1	合計	1
搔器・削器				打製石斧	
分類	1類	2類	3類	分類	1類 2類
合計	1	2	1	合計	1 2

石材別の点数と重量

石鏃			石匙		搔器・削器		
コード	7		コード	7	コード	1	7
点数	4		点数	1	点数	2	2
重量	7.5		重量	15.4	重量	89.9	15

打製石斧

コード	1	16
点数	2	1
重量	241	463

礫塊

コード	4
点数	1
重量	371

剥片

コード	1	2	3	7	9
点数	24	1	1	3	7
重量	162	4.1	1.5	13.8	94.4

礫塊の被熱状況

分類	1	総計
合計	1	1

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4
点数	1
重量	371

● 7号住居

位置 DP -20

写真 PL 110

面積 9.45 m²

方位 N 30 度 E

重複 東辺中央部で時期不明の218号土坑を切って掘り込まれている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 3.71 m × 短辺 3.37 m、深さ 9 ~ 41 cm である。四辺の壁面は約 60 ~ 80 度の角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、10 本が確認されている。周壁の 20 ~ 40 cm 内側を巡っており、多数の支柱による構造と考えられる。主な柱穴の芯心間の距離は、P1 ~ P2 : 1.9 m、P2 ~ P3 : 1.15 m、P3 ~ P4 : 0.8 m、P4 ~ P5 : 0.55 m、P5 ~ P6 : 0.9 m、P6 ~ P7 : 0.7 m、P7 ~ P8 : 0.95 m、P8 ~ P9 : 0.6 m、P9 ~ P10 : 0.6 m、P10 ~ P11 : 1.15 m である。他に比べて P1 と P2 の間隔が広いが、その中間に掘方の弱い柱穴が存在した可能性もある。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1 : 17 × 22 cm、P2 : 18 × 21 cm、P3 : 20 × 18 cm、P4 : 21 × 20 cm、P5 : 18 × 18 cm、P6 : 22 × 20 cm、P7 : 17 × 21 cm、P8 : 21 × 28 cm、P9 : 20 × 17 cm、P10 : 22 × 17 cm である。P1・P2・P4 には、建て替えに付随した柱穴の掘り直しが認められる。

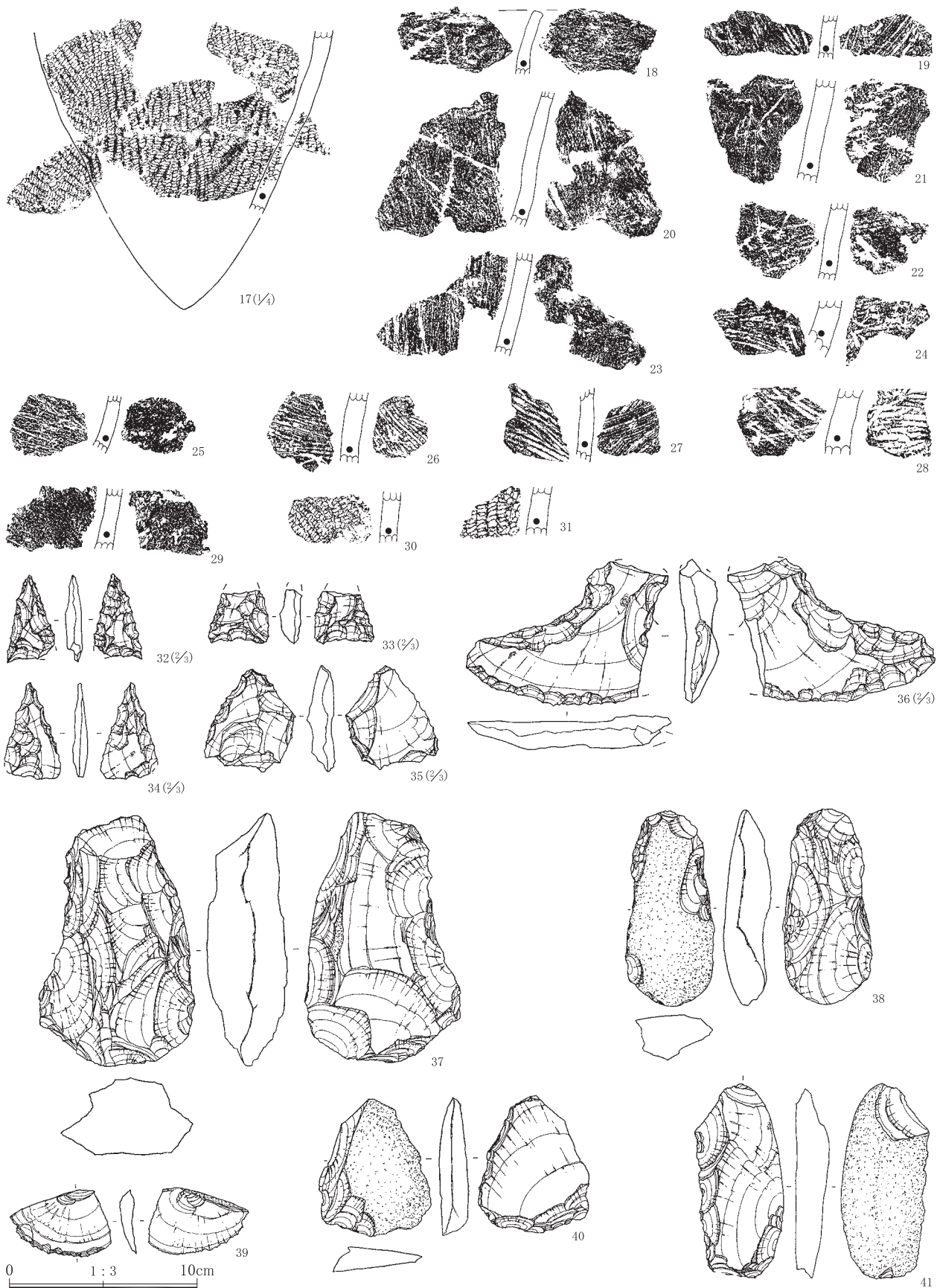
床面 勾配約 3 度の斜面地のローム層(VI層)を最大 41 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 42 cm の比高差で西側から東側方向急緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ 20 ~ 25 cm の 1 ~ 3 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 僅か 6 点の遺物(土器 4、石器 2)が埋没土上位の 1・2 層を中心に、床面から浮いた状態で出土した。土器は、早期の貝殻条痕文 2 点(1・2)と稲荷台式の無文 1 点(9)の他に型式不明 1 点が、また石器では打製石斧 1 点(4)と剥片 1 点が存在するのみである。

当住居の時期に関しては、僅少なながら早期末葉(茅山上層式以降)の条痕文土器が主体的であり、当該期の所産の可能性が高い。(観察表: 48・36 頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。



第 275 图 5·6 号住居出土遺物

III 今井見切塚遺跡の調査

【7号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	条痕	時期不明	総数
合計	1	2	1	4

分類別点数

分類	稲荷台式
合計	1

条痕文系

分類	条痕文系
合計	2

縄文原形別点数

分類	稲荷台式
合計	1

条痕文系

分類	条痕文系
合計	2

胎土別点数

胎土	型式	稲荷台	条痕
A		1	-
C		-	2

(石器)

器種別点数

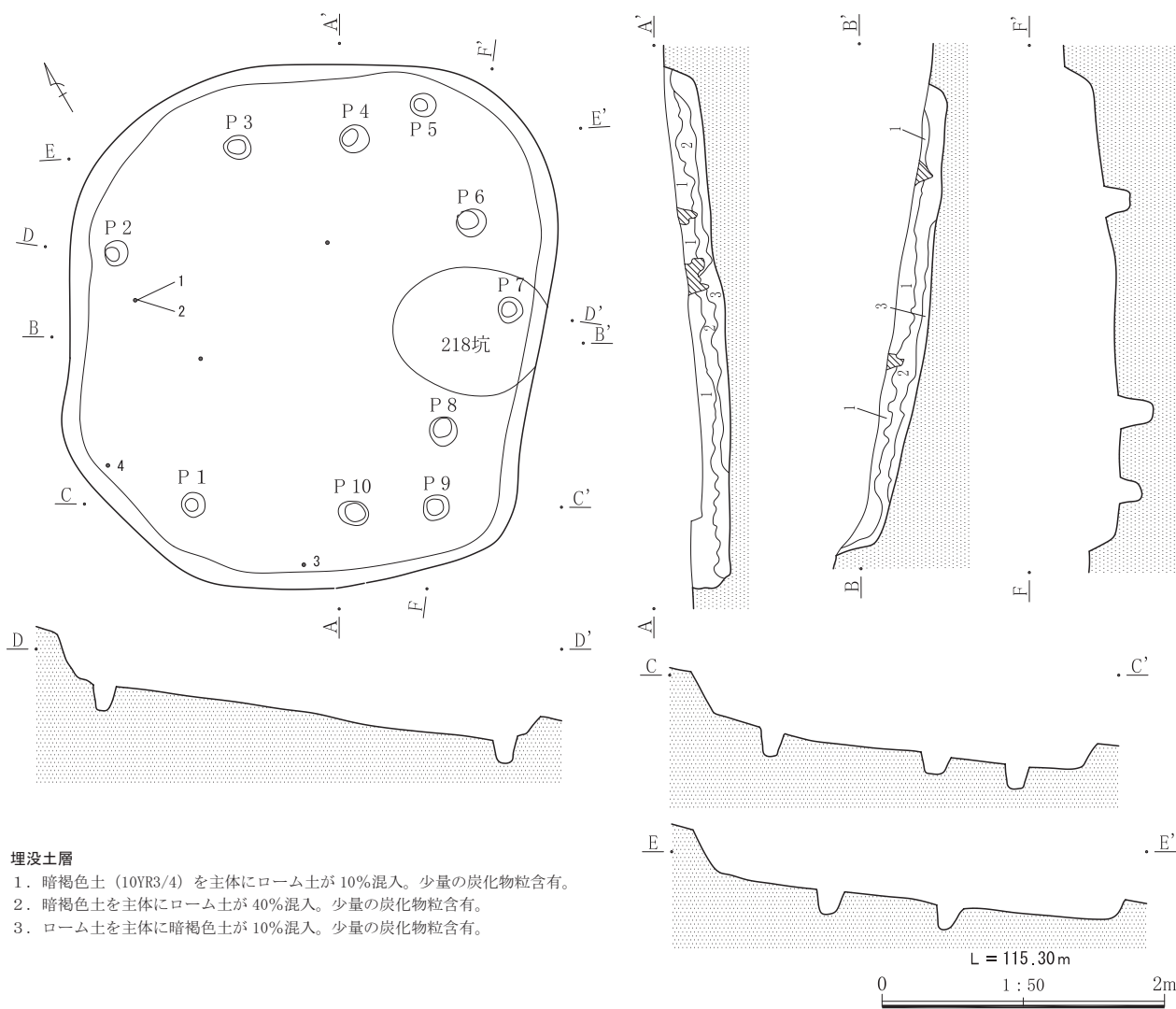
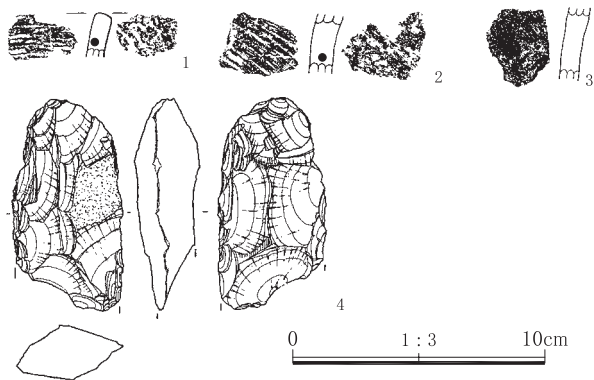
系列	打製系列	その他	総計
器種	打製石斧	剥片	
合計	1	1	2

分類別点数

分類	打製石斧
合計	1

石材別の点数と重量

打製石斧		剥片	
コード	1	コード	1
点数	1	点数	1
重量	84.4	重量	24.9



埋没土層

1. 暗褐色土 (10YR3/4) を主体にローム土が 10% 混入。少量の炭化物粒含有。
2. 暗褐色土を主体にローム土が 40% 混入。少量の炭化物粒含有。
3. ローム土を主体に暗褐色土が 10% 混入。少量の炭化物粒含有。

第 276 図 7号住居と出土遺物

● 8号住居

位置 BT-106 写真 PL 114

面積 10.73 m² 方位 N9度E

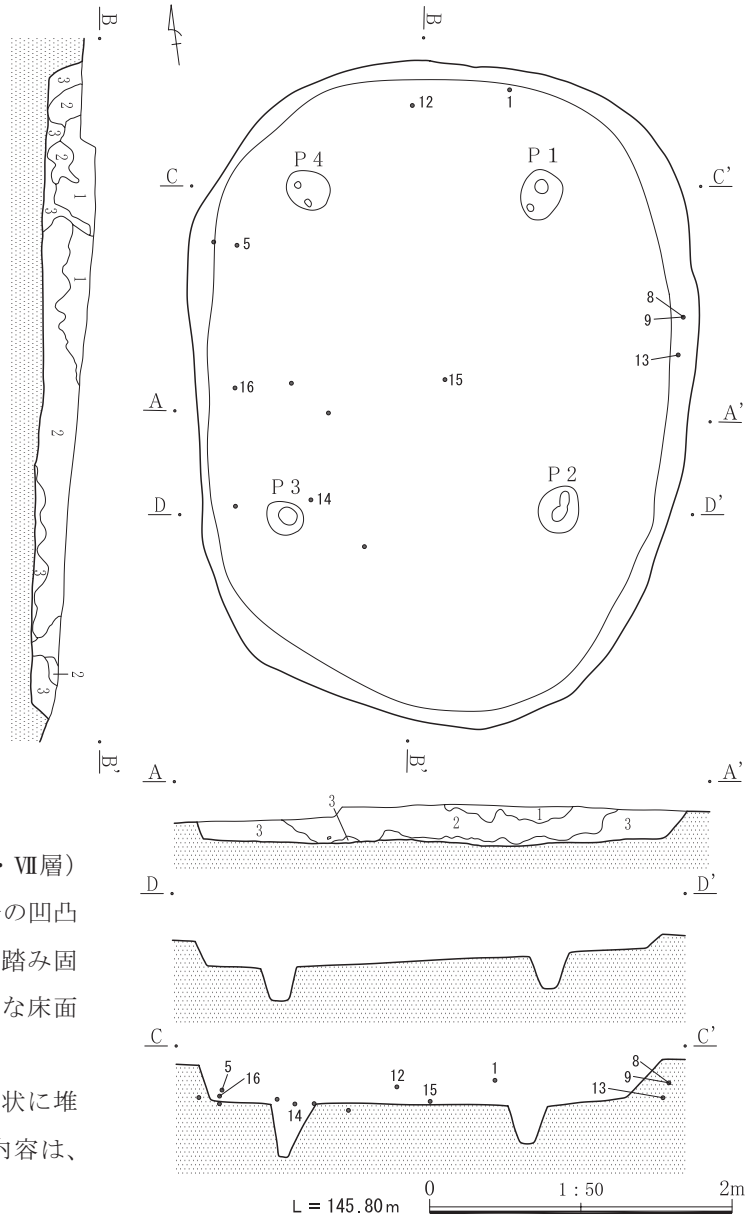
形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ隅丸長形状を呈し、規模は長辺4.40 m×短辺3.32 m、深さ10～23 cmである。四辺の壁面は約60～80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はやや外湾気味に張り出している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、4本が確認されている。P1～P4を連結した形状は、住居外形とほぼシンメトリーであり、4本支柱構造と考えられる。主な柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:2.20 m、P2～P3:1.80 m、P3～P4:2.20 m、P4～P1:1.60 mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:34×26 cm、P2:33×29 cm、P3:26×25 cm、P4:30×31 cmである。

床面 勾配約10度の斜面地のローム層(VI・VII層)を最大23 cm掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸面を持つが、傾斜の少ない平坦面をつくる。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ10～20 cmの1～3層がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示している。各層の内容は、諸磯式期住居の事例に類似している。

遺物 総数94点の遺物(土器14、石器80)が埋没土上位の2層を中心に出土し、13を除く全てが床面から浮いた状態であった。土器は、花積下層式3点(1・2)、諸磯a式3点(3)、同c式1点(4)、稻荷台式2点(5・6)、夏島式1点(7)、型式不明2点などがある。石器には石鏃未製品1点(11)、削器1点、打製石斧3点(12・13・15)、礫器1点(14)、磨り石類1点(16)、剥片69点、礫塊1点の他に、耳飾り1点(8)や管玉状の装飾品類2点(9・10)などが認められる。当住居の時期に関しては、草創期後半の撚糸文土器や諸磯式土器も混在するが、花積下層式土器や装身具類の存在から、当該期の所



埋没土層

※各層は、349・351頁の標準的埋没土に同じ。

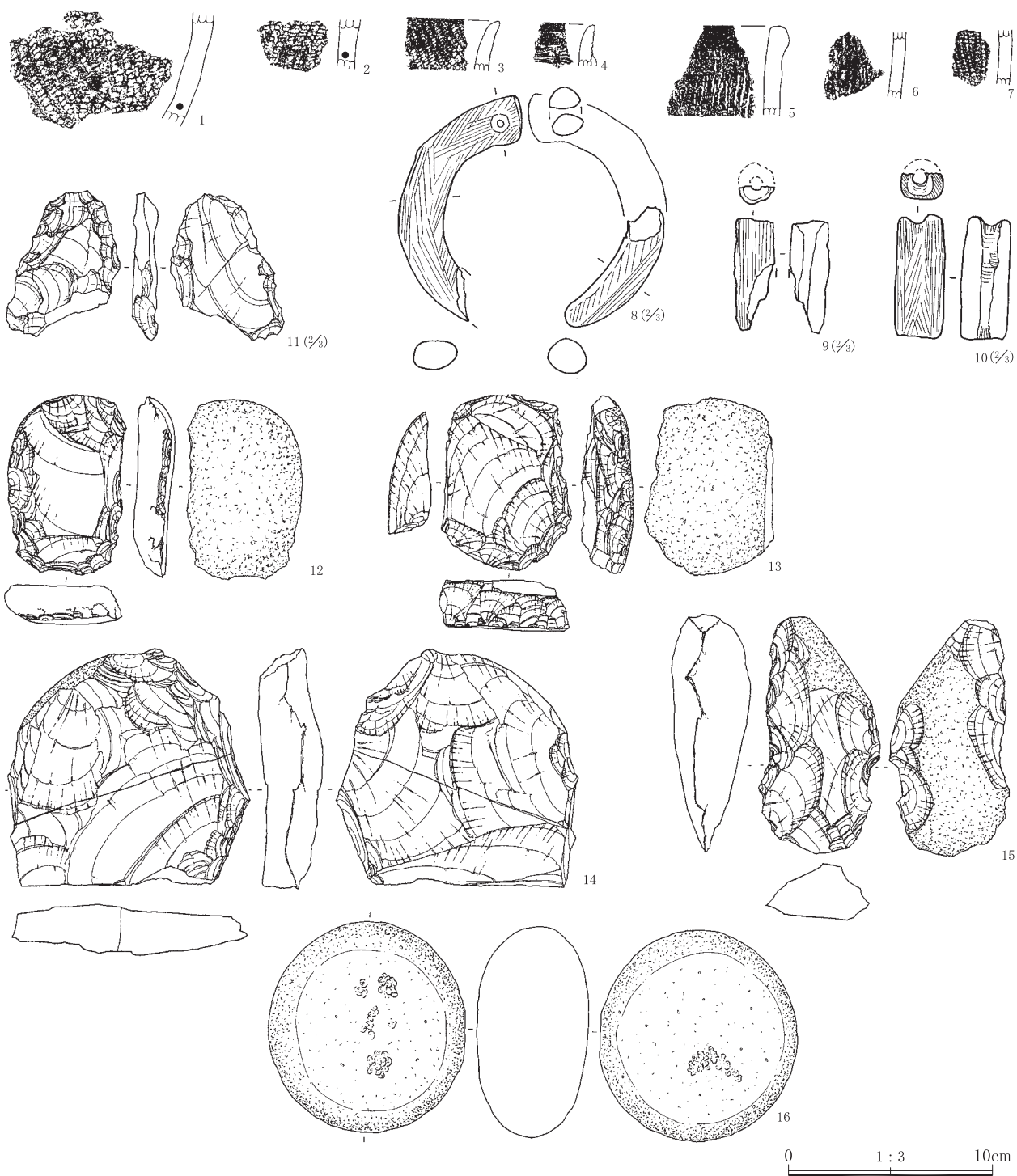
第277図 8号住居

産と想定される。

(観察表: 48・49・63頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

III 今井見切塚遺跡の調査



第 278 図 8 号住居出土遺物

【8号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	花積下層	諸磯a	諸磯c	時期不明	総計
合計	1	4	3	3	1	2	14

分類別点数

夏島式

分類	3
合計	1

稲荷台式

分類	2a	3	不明
合計	1	1	2

花積下層式

分類	2a類	2類
合計	2	1

諸磯a式

分類	4a類	4類
合計	1	2

諸磯c式

分類	1b2類
合計	1

縄文原形別点数

夏島式

分類	2b
合計	1

稲荷台式

分類	2b	9b
合計	1	1

花積下層式

分類	4a	4c
合計	1	1

諸磯a式

分類	2b
合計	1

諸磯c式

分類	18
合計	1

胎土別点数

胎土	型式	夏島	稲荷台	花積	諸磯a	諸磯c
A		1	1	—	1	1
B		—	1	—	—	—
C		—	—	2	—	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列				使用痕系列	複合技術系列	
器種	石鏃	削器類	打斧	礫器	磨石類	菅玉	耳飾
合計	1	1	3	1	1	2	1

その他		総計
剥片	礫塊	
69	1	80

分類別点数

石鏃

分類	9類
合計	1

搔器・削器

分類	3類
合計	1

打製石斧

分類	1類
合計	3

磨石類

分類	1類
形態	ac
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃

コード	2
点数	1
重量	6.6

搔器・削器

コード	1
点数	1
重量	2.1

打製石斧

コード	1	16
点数	2	1
重量	409	203

礫器

コード	6
点数	1
重量	548

磨石類

コード	4
点数	1
重量	690

菅玉

コード	41	52
点数	1	1
重量	3	3.4

玦状耳飾

コード	41
点数	1
重量	15.6

剥片

コード	1	2	4	9
点数	51	15	2	1
重量	260	65.5	3.9	46.8

礫塊

コード	4
点数	1
重量	539

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	1	1

●9号住居

位置 DG-42

写真 PL 115

面積 6.17 m²

方位 N 16度W

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ隅丸長方形形状を呈し、規模は長辺 3.00 m × 短辺 2.78 m、深さ 18 ~ 36 cm である。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、西辺を除く各辺はやや湾曲気味に走行している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、5本が確認されている。若干歪んではいるが、P1・P3 ~ P5による4本主柱構造と考えられる。主な柱穴の芯心間の距離は、P1 ~ P3 : 1.20 m、P3 ~ P4 : 1.65 m、P4 ~ P5 : 1.70 m、P5 ~ P1 : 1.85 m である。また、各柱穴の規模(径 × 深さ)は、P1 : 19 × 29 cm、P2 : 30 × 33 cm、P3 : 27 × 31 cm、P4 : 22 × 20 cm、P5 : 23 × 32 cm である。

床面 勾配約 3 度の斜面地のローム層(VI・VII層)を最大 36 cm 掘り込んで床面を構築する。かなりの凹凸面を持ち、自然地形と同様に約 10 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ約 40 cm の 1 ~ 3 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 153 点の遺物(土器 115、石器 38)の全てが、埋没土上位の 1・2 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は器形の判別できるものもあるが、ほとんどが小破片である。RL を主体とした 0 段多条縄文を全面に施文するが、口縁部に原体圧痕を附加するもの(1 ~ 3)もある。尚、4・24、7・13、8・10、16 ~ 19 は各々同一個体。石器には、石鏃 1 点(33)、有舌尖頭器 1 点(32)、石錐 1 点(34)、削器 1 点(35)、石皿 1 点(36)、剥片 32 点、礫塊 1 点などが組成する。

当住居の時期に関しては、出土土器が花積下層式により構成されることから、当該期の所産と想定される。(観察表 : 49・36 頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

III 今井見切塚遺跡の調査

【9号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	稲荷原	花積下層	諸磯b	諸磯c	時期不明	総数
合計	1	1	105	1	2	5	115

分類別点数

花積下層式					諸磯b式		諸磯c式		
分類	a類	1b類	1類	2a類	2類	分類	3類	分類	3類
合計	9	2	1	36	57	合計	1	合計	2

縄文原体別点数

花積下層式			
分類	4c	4c・21c	21ab
合計	43	2	1

胎土別点数

胎土	型式	花積
C		47

(石器)

器種別点数

系列	打製系列				使用痕系列		その他	総計
器種	有舌尖頭器	石鏃	石錐	削器類	石皿	剥片	礫塊	
合計	1	1	1	1	1	32	1	38

合計	1	合計	1	合計	1	合計	1
----	---	----	---	----	---	----	---

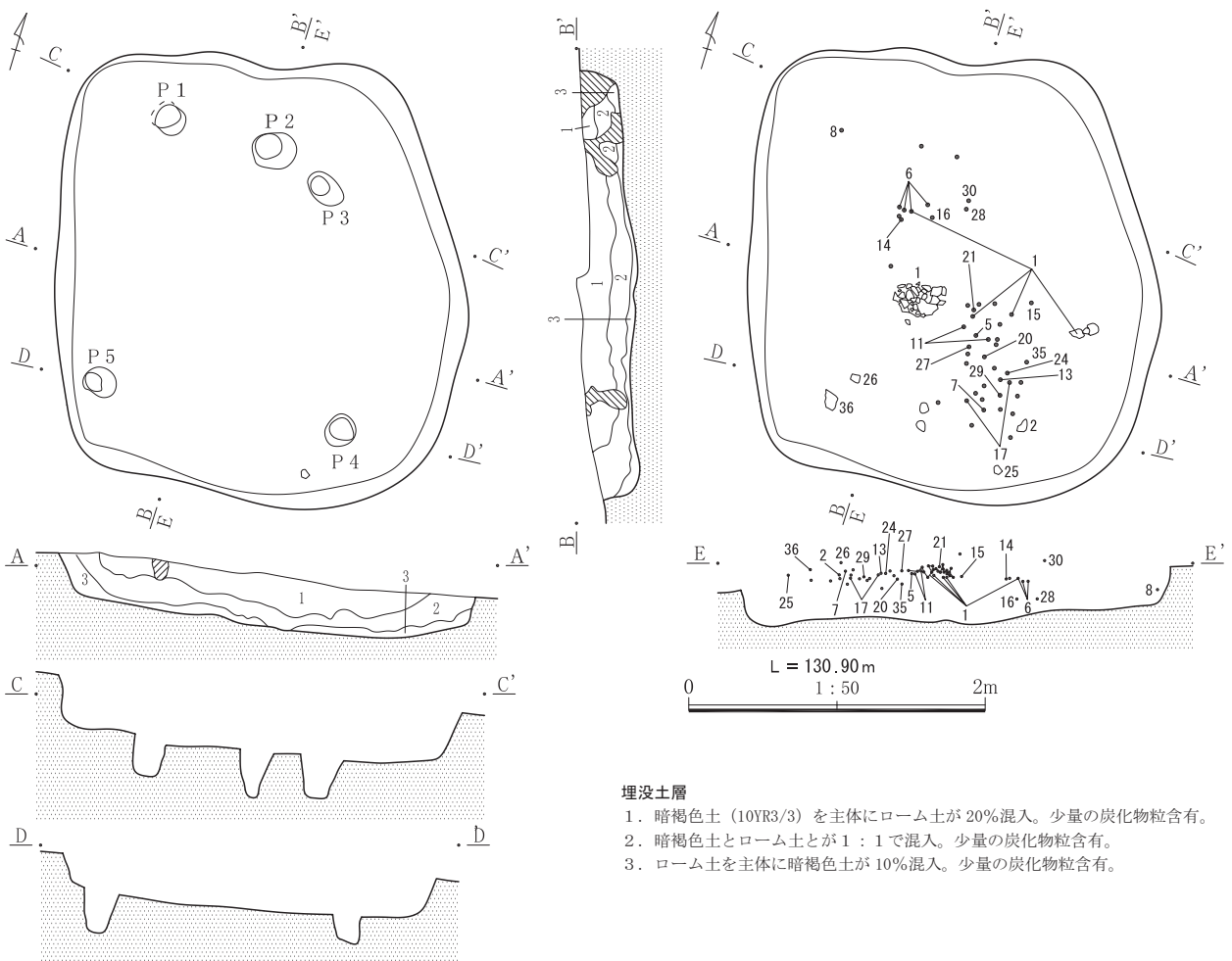
石材別の点数と重量

有舌尖頭器		石鏃		石錐		搔器・削器	
コード	2	コード	2	コード	2	コード	2
点数	1	点数	1	点数	1	点数	1
重量	1.8	重量	2.1	重量	1.1	重量	5.2

石皿		剥片		礫塊	
コード	4	コード	1 2	コード	4
点数	1	点数	8 24	点数	1
重量	307	重量	221 59.5	重量	3.8

礫塊の被熱状況

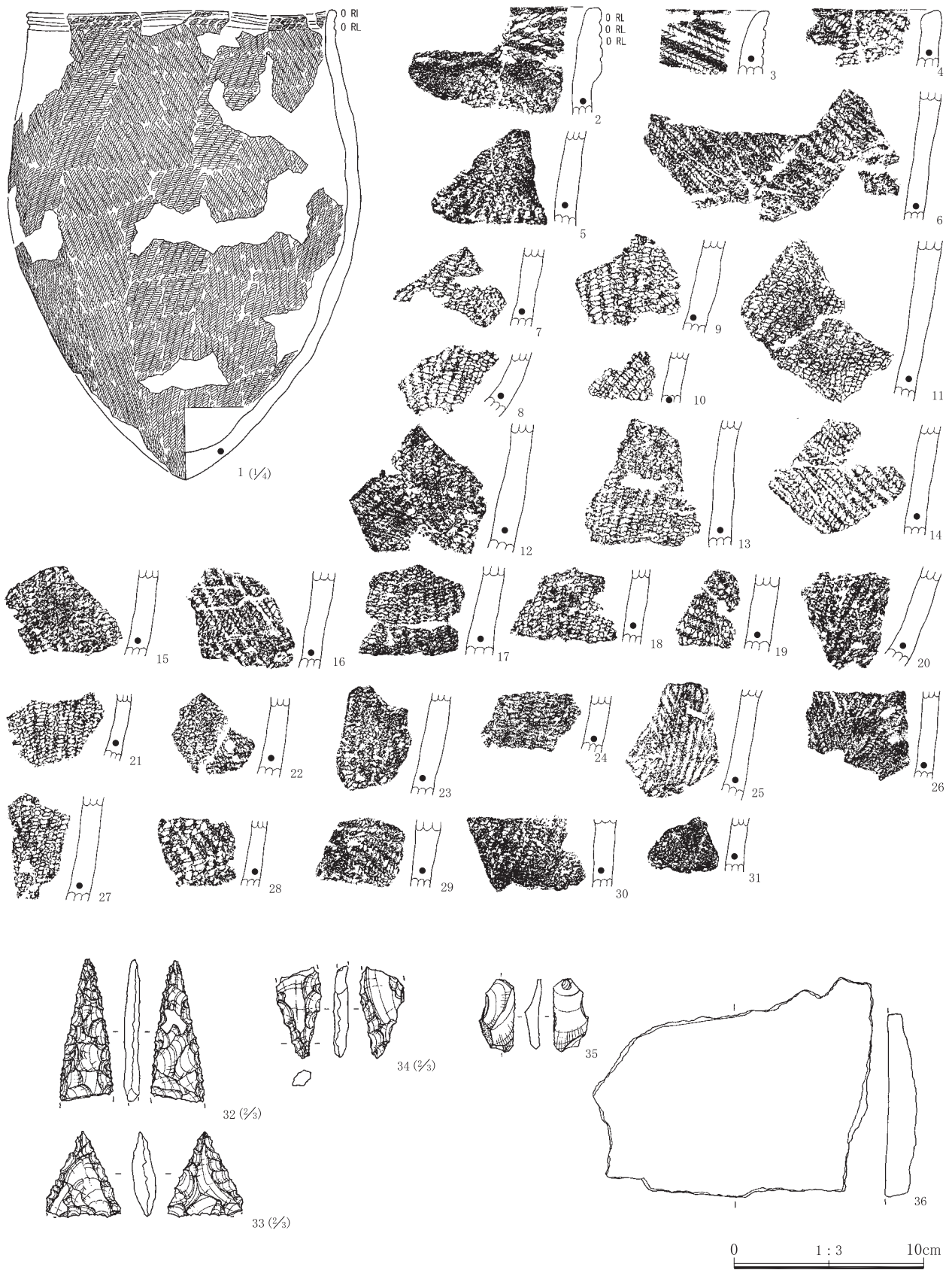
分類	2	総計
合計	1	1



埋没土層

1. 暗褐色土 (10YR3/3) を主体にローム土が20%混入。少量の炭化物粒含有。
2. 暗褐色土とローム土とが1:1で混入。少量の炭化物粒含有。
3. ローム土を主体に暗褐色土が10%混入。少量の炭化物粒含有。

第279図 9号住居



第 280 图 9 号住居出土遺物

● 10号住居

位置 DH-38 写真 PL 116

面積 6.23 m² 方位 N 71度E

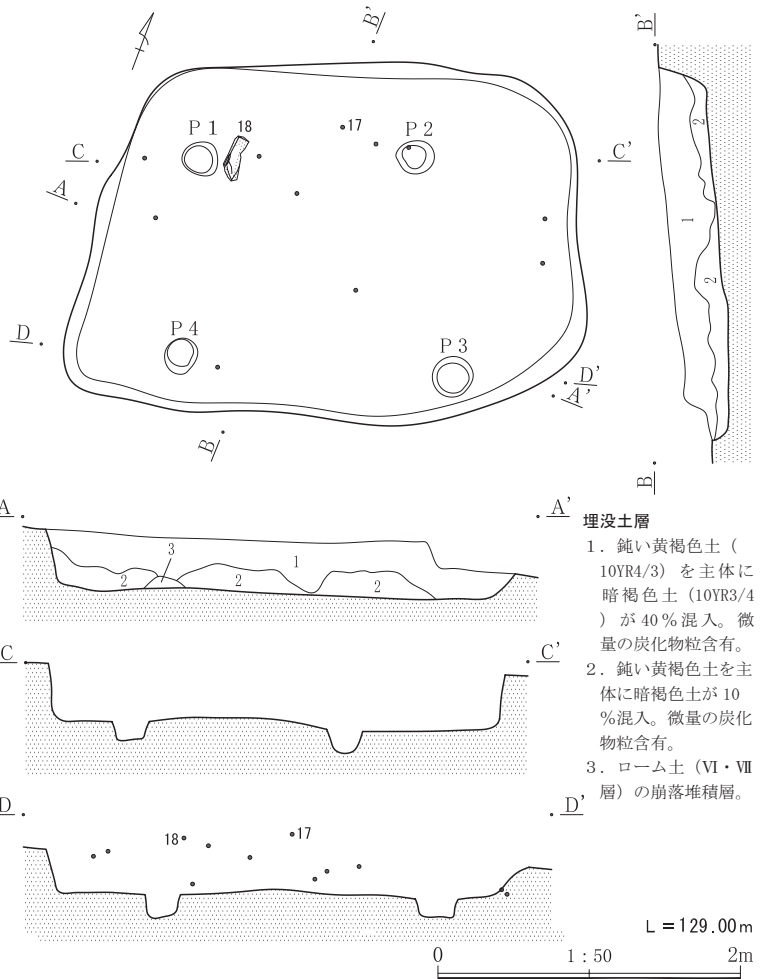
形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸台形状を呈し、規模は長辺3.37 m×短辺2.42 m、深さ9～39 cmである。四辺の壁面は約80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、4本が確認されている。P1～P4を連結した形状は、住居外形とほぼシンメトリーであり、4本主柱構造と考えられる。主柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:1.45 m、P2～P3:1.50 m、P3～P4:1.80 m、P4～P1:1.30 mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:24×17 cm、P2:23×18 cm、P3:26×14 cm、P4:24×17 cmである。

床面 勾配約8度の斜面地のローム層(VI・VII層)を最大39 cm掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約20 cmの比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ約40 cmの1・2層がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示している。

遺物 総数94点の遺物(土器43、石器51)の全てが、埋没土上位の1層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、0段多条RLを菱形状に全面施文する花積下層式が32点(3～12)と主体を占め、口縁部に原体圧痕を附加するものが5点(1)存在する。この他に、諸磯a式4点(2)、同b式1点、稲荷原式1点などが認められる。尚、1・12は同一個体。石器は器種・数量ともに乏しいが、削器1点(15)、礫器1点(14)、磨製石斧1点(13)、磨り石類2点(16・



第281図 10号住居

- 埋没土層
1. 鈍い黄褐色土(10YR4/3)を主体に暗褐色土(10YR3/4)が40%混入。微量の炭化物粒含有。
 2. 鈍い黄褐色土を主体に暗褐色土が10%混入。微量の炭化物粒含有。
 3. ローム土(VI・VII層)の崩落堆積層。

17)、石皿1点(18)などが組成する。

当住居の時期に関しては、花積下層式土器が主体的であることから、当該期の所産と想定される。

(観察表:49・63頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。



第 282 図 10 号住居出土遺物

III 今井見切塚遺跡の調査

【10号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷原	花積下層	諸磯a	諸磯b	総計
合計	1	37	4	1	43

分類別点数

花積下層式					諸磯a式			諸磯b式	
分類	1b類	2a類	2b類	2類	分類	4a類	4類	分類	3類
合計	5	12	9	11	合計	3	1	合計	1

縄文原形別点数

花積下層式			諸磯a式	
分類	4c	4c・21ab	分類	2a
合計	25	1	合計	3

胎土別点数

胎土	型式	花積	諸磯a
A	—	—	3
C	—	25	—
I	—	1	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	複合技術系列	その他			総計		
器種	削器類	礫器	磨石類	石皿	磨製石斧	剥片		石核	礫塊
合計	2	1	2	2	1	39	3	1	51

分類別点数

搔器・削器		磨石類		石皿		磨製石斧		
分類	2類	分類	3類	分類	4類	分類	1類	
合計	2	形態	a	ac	合計	2	合計	1
		合計	1	1				

石材別の点数と重量

搔器・削器			礫器		磨石類		
コト	点数	重量	コト	重量	コト	重量	
コト	1	2	コト	1	コト	9	19
点数	1	1	点数	1	点数	1	1
重量	14	2.5	重量	136	重量	228	510

石皿			磨製石斧		石核	
コト	点数	重量	コト	重量	コト	重量
コト	13	33	コト	10	コト	2
点数	1	1	点数	1	点数	3
重量	1751	90	重量	87.1	重量	69.8

剥片						礫塊	
コト	1	2	3	7	9	コト	4
点数	5	30	2	1	1	点数	1
重量	73.6	247	52.6	34.2	16.3	重量	36.3

礫塊の被熱状況

分類	1	総計
合計	1	1

被熱礫の石材別点数と重量

コト	4
点数	1
重量	36.3

● 11号住居

位置 CW-44

写真 PL 117・118

面積 14.1 m²

方位 N 6度W

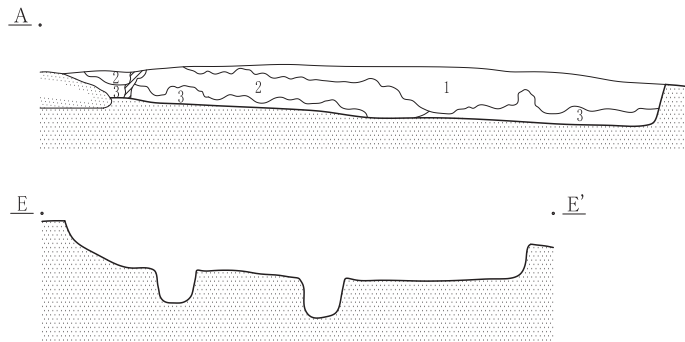
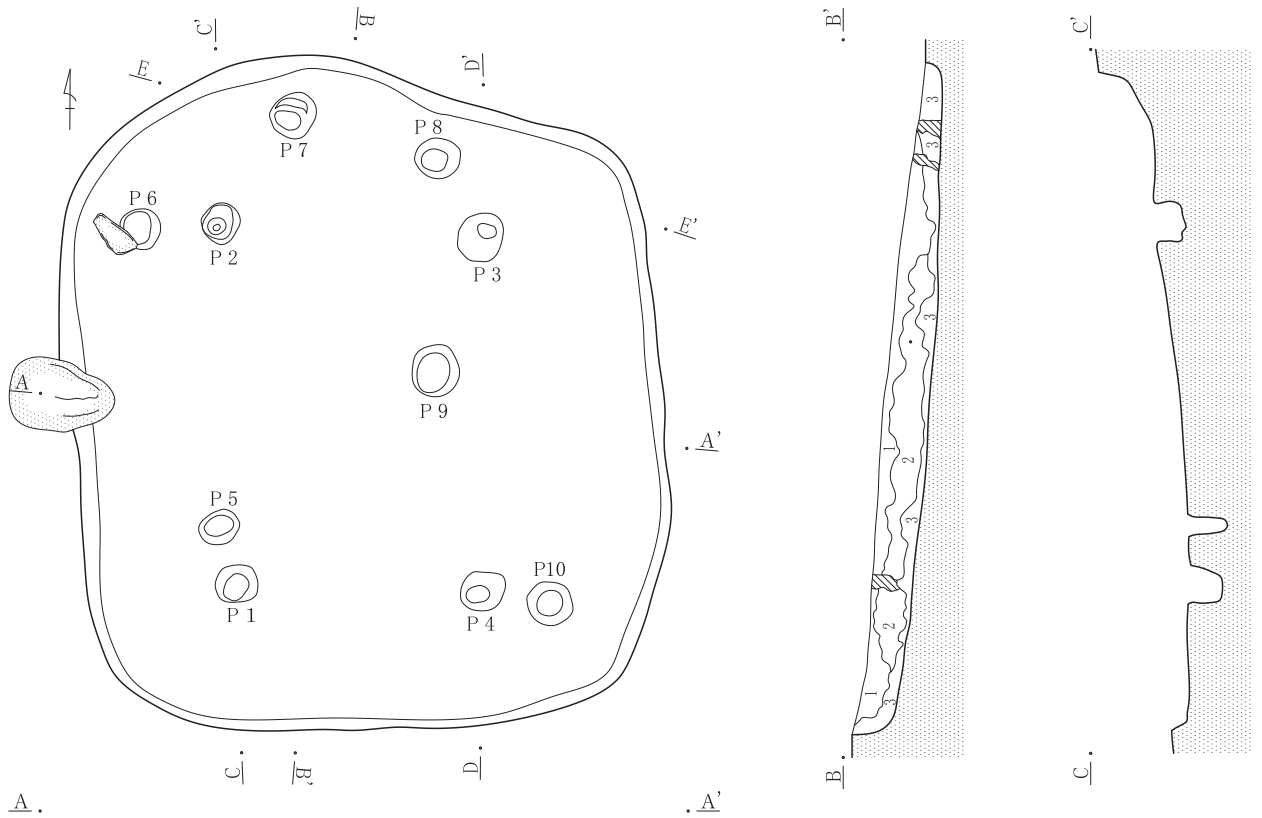
形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺 4.44 m × 短辺 3.90 m、深さ 10 ~ 34 cm である。四辺の壁面は約 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、北辺を除く各辺はほぼ直線的に走行している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、10 本が確認されているが、基本的に P1 ~ P4 の 4 本を主柱とする構造と考えられる。他の柱穴は、補助的な支柱かあるいは建て替えに伴い再敷設されたものと推定される。主柱穴の芯心間の距離は、P1 ~ P2 : 2.40 m、P2 ~ P3 : 1.80 m、P3 ~ P4 : 2.40 m、P4 ~ P1 : 1.60 m である。また、各柱穴の規模 (径 × 深さ) は、P1 : 29 × 21 cm、P2 : 27 × 21 cm、P3 : 33 × 25 cm、P4 : 29 × 25 cm、P5 : 27 × 25 cm、P6 : 28 × 18 cm、P7 : 31 × 27 cm、P8 : 30 × 25 cm、P9 : 35 × 21 cm、P10 : 30 × 25 cm である。

床面 勾配約 7 度の斜面地のローム層 (VI・VII 層) を最大 34 cm 掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約 35 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ 35 cm 前後の 1 ~ 3 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 150 点を数えるかなり多量の遺物 (土器 63、石器 87) が存在するが、1 点 (43) を除く他の全てが埋没土上位の 1・2 層を中心にして、床面から浮いた状態で出土した。土器は、花積下層式の 0 段多条 R L を菱形状に全面施文するもの 44 点 (2・3・5 ~ 33) や、口縁部に蕨手状の原体圧痕を施すもの (1・4) も見られる。この他に、諸磯 a 式 8 点、型式不明 7 点がある。尚、3・13、14・15・25、17・23・28、18・19 は各々同一個体である。石器は削器 7 点 (36 ~ 41)、打製石斧 2 点 (34・35)、磨り石類 2 点 (42・43)、石皿 1 点 (45)、耳飾り 1 点 (44) などが組成する。また、CW-44 グリッドから出土した第 511 図 232 の装飾品は、当住居出土の小破片と接合しており、元来は当住居に帰属していた可能性もある。これら以外に、南半部の床面に近接した 3 層の埋没土内から、クヌギに近似した多量の炭化種実が出土し (PL118b 参照)、C14 年代測定により cal BC5,075 ~ 5,205 の同定を得ている。この炭化種実の取上は、ある程度の形状を留めたものに限定

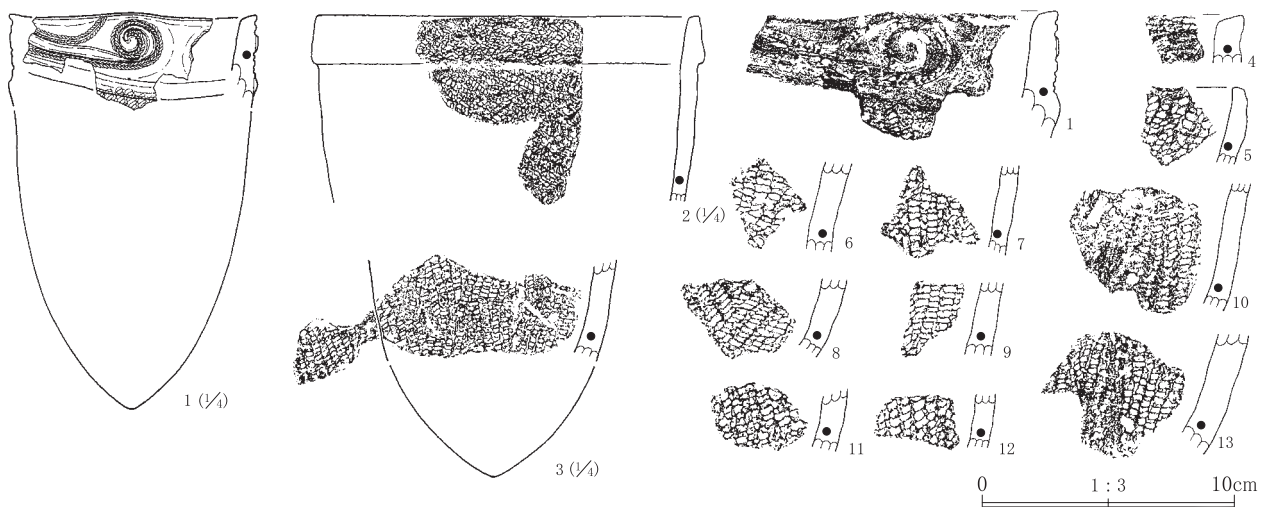


埋没土層

1. 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) を主体に暗褐色土 (10YR3/4) が 30% 混入。微量の炭化物粒含有。
2. 鈍い黄褐色土を主体に暗褐色土が 10% 混入。微量の炭化物粒含有。
3. ローム土を主体に暗褐色土が 10% 混入。少量の炭化物粒含有。

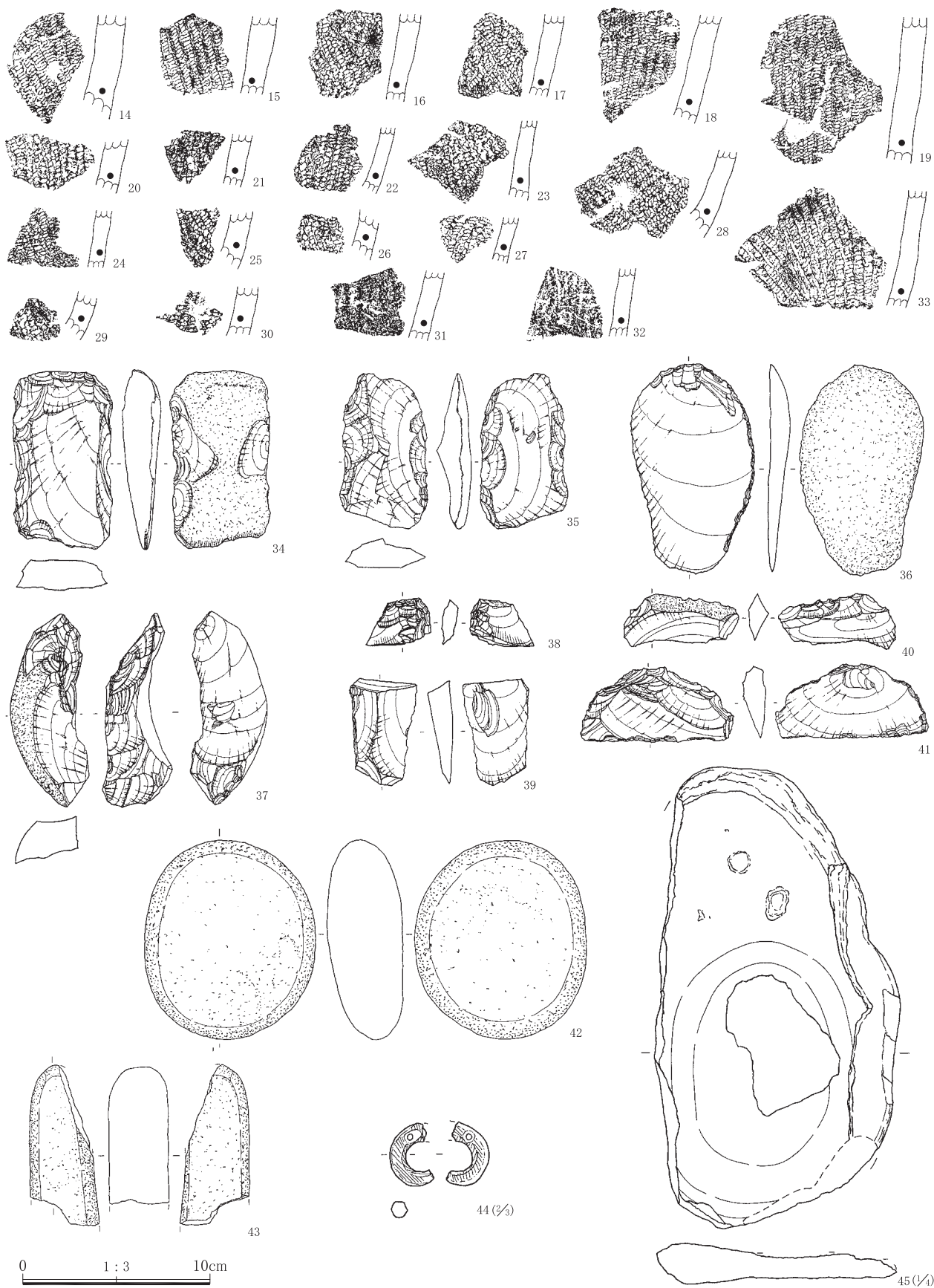
L = 133.70 m

0 1 : 50 2m

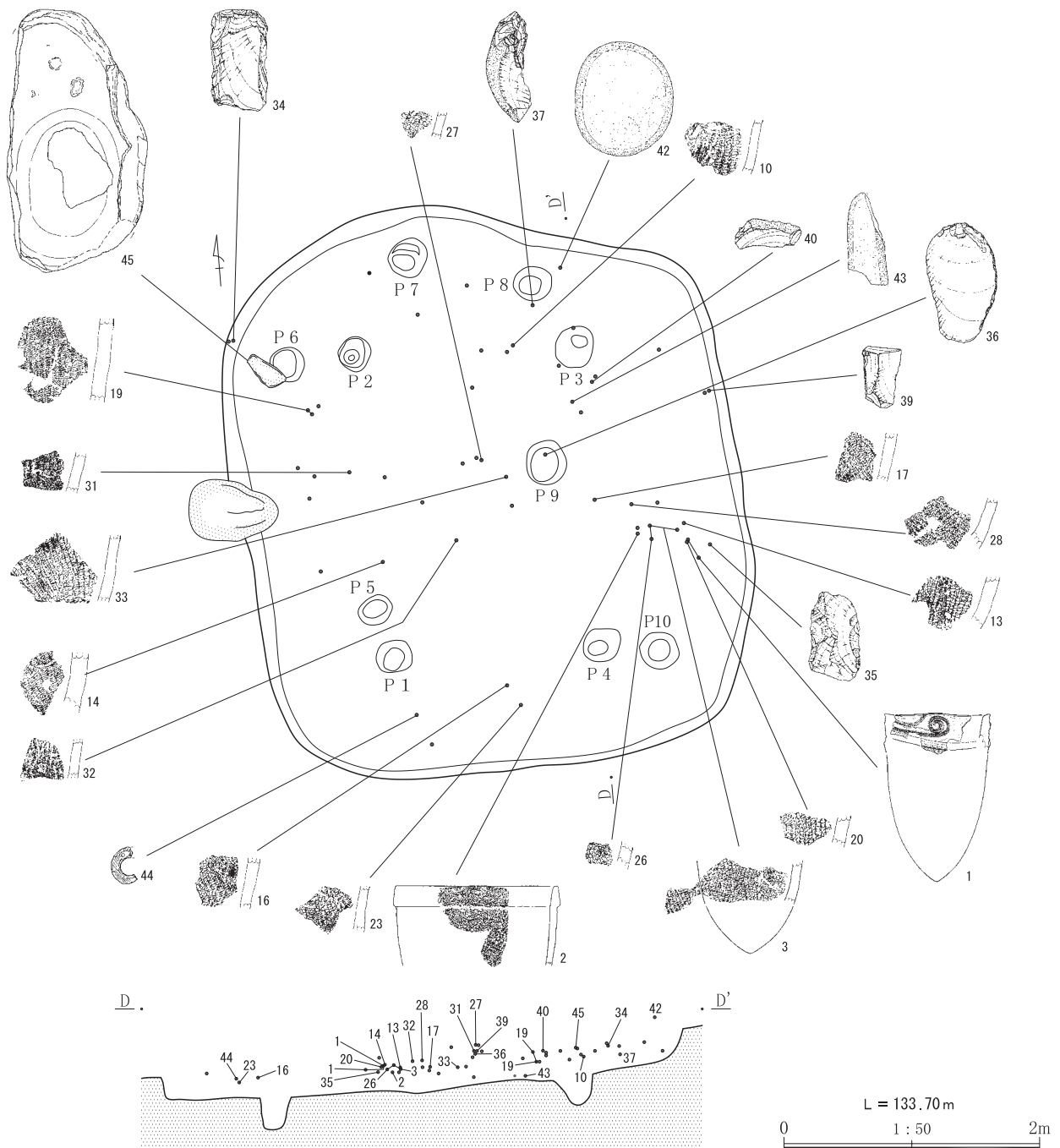


第 283 図 11 号住居と出土遺物

III 今井見切塚遺跡の調査



第 284 図 11 号住居出土遺物



第285図 11号住居

したため、正確な出土総点数は不明だが、分析では121個体が確認されている。詳細は、691頁の「IV科学的分析」を参照されたい。

当住居の時期に関しては、出土土器が花積下層式により構成されることから、当該期の所産と想定される。
(観察表:49・63・64頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

III 今井見切塚遺跡の調査

【11号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	花積下層	諸磯a	時期不明	総計
合計	1	47	8	7	63

縄文原形別点数

花積下層式

分類	4c	4c・21ab
合計	38	2

分類別点数

花積下層式

分類	1b類	2a類	2類
合計	3	37	7

諸磯a式

分類	2類	4類
合計	3	5

胎土別点数

胎土	型式	花積
C		38
H		2

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	複合技術系列	その他	総計			
器種	削器類	打斧	磨石類	石皿	玦状耳飾	剥片	礫塊	
合計	7	2	2	1	1	69	5	87

分類別点数

搔器・削器

分類	1類	2類
合計	4	3

打製石斧

分類	1類
合計	2

磨石類

分類	2類	3類
形態	a	a
合計	1	1

石皿

分類	2類
合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器

コード	1	2
点数	5	2
重量	287	9.7

打製石斧

コード	1	16
点数	1	1
重量	61.8	137

磨石類

コード	5	19
点数	1	1
重量	135	570

石皿

コード	13
点数	1
重量	2205

玦状耳飾

コード	53
点数	1
重量	0.8

礫塊

コード	4	9
点数	4	1
重量	1050	251

剥片

コード	1	2	4	7	9	12
点数	18	46	1	2	1	1
重量	129	165	1.9	12.2	2.8	1.2

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	3	2	5

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4	9
点数	2	1
重量	92.4	251

● 12号住居

位置 CW-40

写真 PL 118・119

面積 11.75 m²

方位 N 57 度 E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 3.95 m × 短辺 3.50 m、深さ 11 ~ 36 cm である。四辺の壁面は約 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、南辺

を除く各辺はやや外湾気味に張り出している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、7本が確認されているが、P1 ~ P4 の4本を基本とした支柱構造と考えられる。各支柱を連結した形状は、住居外形とほぼシンメトリーであり、その芯心間の距離は、P1 ~ P2 : 1.25 m、P2 ~ P3 : 1.50 m、P3 ~ P4 : 1.40 m、P4 ~ P1 : 1.60 m である。また、各柱穴の規模（径 × 深さ）は、P1 : 25 × 19 cm、P2 : 26 × 21 cm、P3 : 24 × 18 cm、P4 : 30 × 18 cm、P5 : 28 × 20 cm、P6 : 29 × 18 cm、P7 : 58 × 28 cm である。

床面 勾配約 7 度の斜面地のローム層（VI・VII層）を最大 36 cm 掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約 30 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

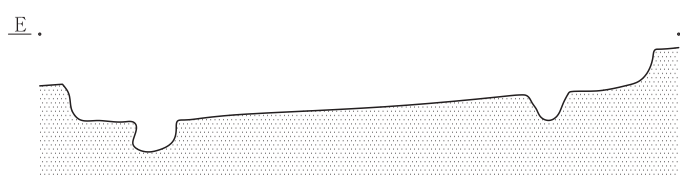
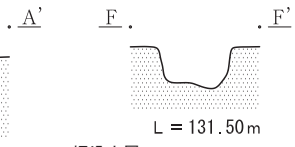
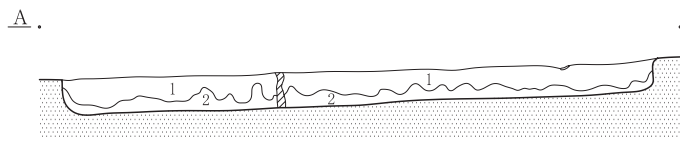
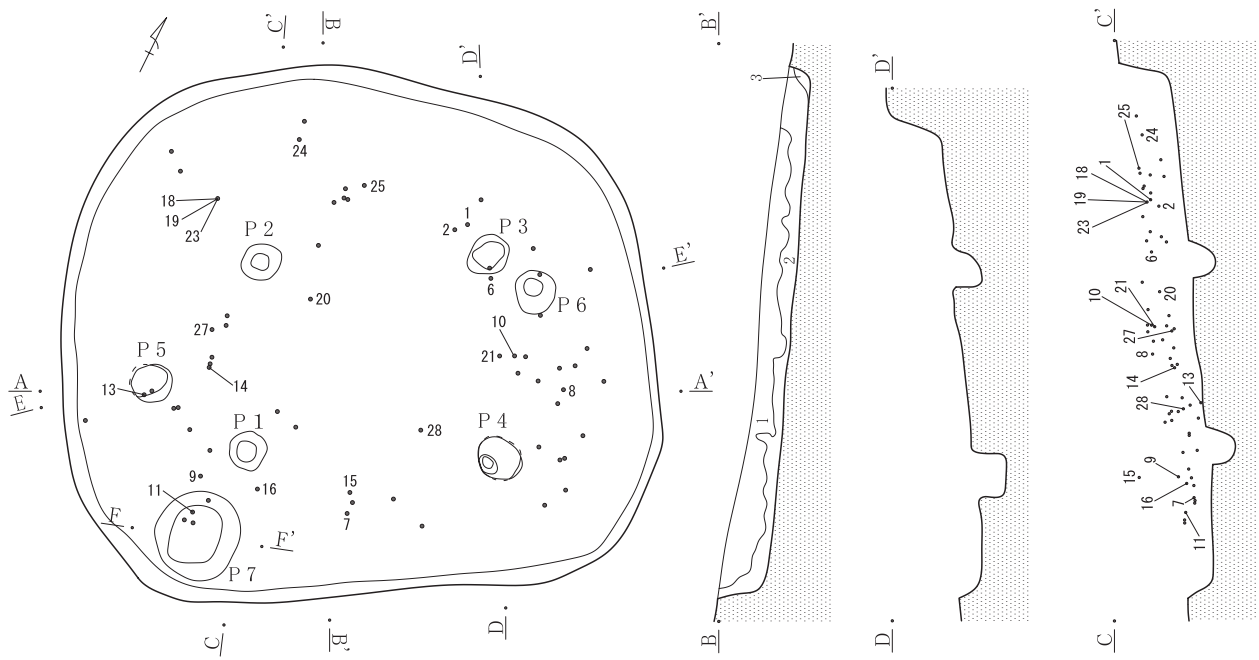
埋没土 厚さ 40 cm 弱の 1・2 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 109 点の遺物（土器 59、石器 50）が埋没土上位の 1 層を中心に出土しているが、床面に密着したものは少なく（13・28）、その大半は床面から浮いた状態であった。土器は小破片のみであるが、花積下層式の 0 段多条 RL を羽状あるいは菱形に全面施文するもの 47 点（3 ~ 7・9 ~ 25）や、口縁部に原体圧痕を附加するもの 4 点（1・2・8）などが認められる。これらの他に、稲荷台式 1 点、諸磯 a 式 2 点、同 c 式 1 点、型式不明 1 点などがある。尚、4・5、10・21、18・19・23・25 は各々同一個体である。石器に、石鏃 2 点（26・27）、削器 2 点、磨石類 1 点、多孔石 1 点（28）が組成するのみで、器種・数量ともに乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が花積下層式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：49・50・64 頁）

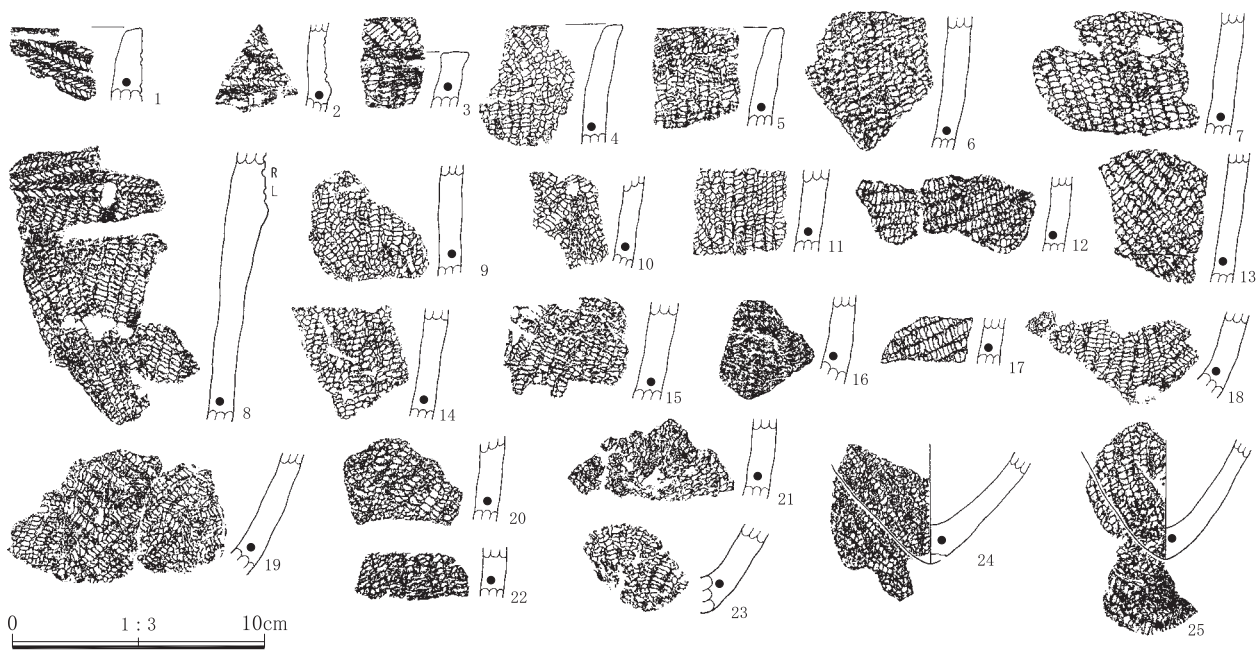
その他 炉と周溝は検出されなかった。



埋没土層

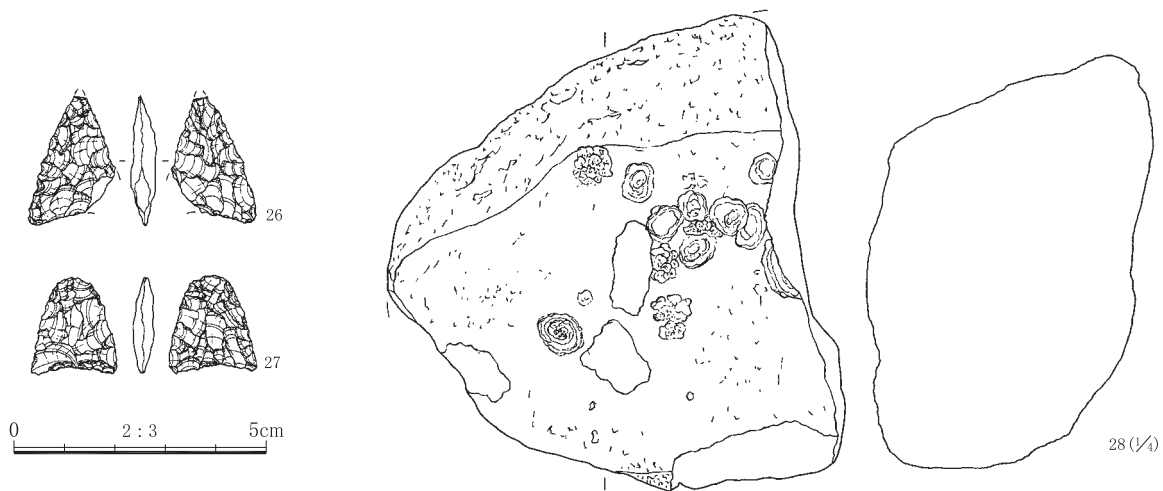
1. 黒色土 (10YR1.7/1) を主体に黒褐色土 (10YR2/3) が10%混入。少量の炭化物粒含有。
2. 黒褐色土を主体に黒色土とローム土が各20%混入。少量の炭化物粒含有。
3. ローム土を主体に黒色土が10%混入。少量の炭化物粒含有。

L = 132.00m 0 1 : 50 2m



第 286 図 12 号住居と出土遺物

III 今井見切塚遺跡の調査



第287図 12号住居出土遺物

【12号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	花積下層	諸磯a	諸磯c	時期不明	総数
合計	2	53	2	1	1	59

縄文原形別点数

分類	花積下層式		
	4c	4c・21ab	21ab
合計	25	1	1

胎土別点数

胎土	型式	
	花積	諸磯
C	27	

分類別点数

分類	花積下層式					諸磯a式		諸磯c式	
	1b類	1類	2a類	2類	3類	分類	4類	分類	2類
合計	3	1	24	23	2	合計	2	合計	1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	複合技術系列	その他		総計	
器種	石鎌	削器類	磨石類	多孔石	剥片		礫塊
合計	2	2	1	1	37	7	50

分類別点数

石鎌		挿器・削器		磨石類		多孔石	
分類	2類	分類	2類	分類	5類	分類	5類
合計	2	合計	2	形態	a	形態	bc
				合計	1	合計	1

石材別の点数と重量

石鎌		挿器・削器		磨石類		多孔石	
コト°	2	コト°	2	コト°	4	コト°	4
点数	2	点数	2	点数	1	点数	1
重量	2.8	重量	4.1	重量	8.8	重量	7999

剥片

剥片					礫塊	
コト°	1	2	7	9	コト°	4
点数	9	25	2	1	点数	7
重量	162	124	10.5	5	重量	2518

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	1	6	7

被熱礫の石材別点数と重量

コト°	4
点数	1
重量	1008

● 13号住居

位置 DA-29

写真 PL 119

面積 13.8 m²

方位 N 21 度W

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺 4.22 m × 短辺 4.15 m、深さ 3 ~ 18 cm である。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、北辺と西辺を除く他辺はやや外湾気味に張り出している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、9本が確認されている。若干偏在しているが、P1・P3・P5・P6の4本を主柱とする構造と考えられ、P2・P4などの柱穴は補助的のものあるいは建て替えに伴い再敷設された可能性がある。主な柱穴の芯心間の距離は、P1 ~ P3 : 1.80 m、P3 ~ P5 : 2.10 m、P5 ~ P6 : 1.50 m、P6 ~ P1 : 2.30 m である。また、各柱穴の規模(径 × 深さ)は、P1 : 26 × 20 cm、P2 : 30 × 25 cm、P3 : 20 × 26 cm、P4 : 24 × 29 cm、P5 : 24 × 16 cm、P6 : 24 × 15 cm、P7 : 29 × 19 cm、P8 : 20 × 33 cm、P9 : 24 × 30 cm である。

床面 勾配約 7 度の斜面地のローム層(VI層)を最大 18 cm 掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約 47 cm の比高差で北側から南側方向へ急傾斜している。敷き床ほどではないが、柱穴 P2・P3 の周辺を中心にして若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 厚さ約 20 cm の 1・2 層が堆積するが、自然埋没状況を示すと考えられる。

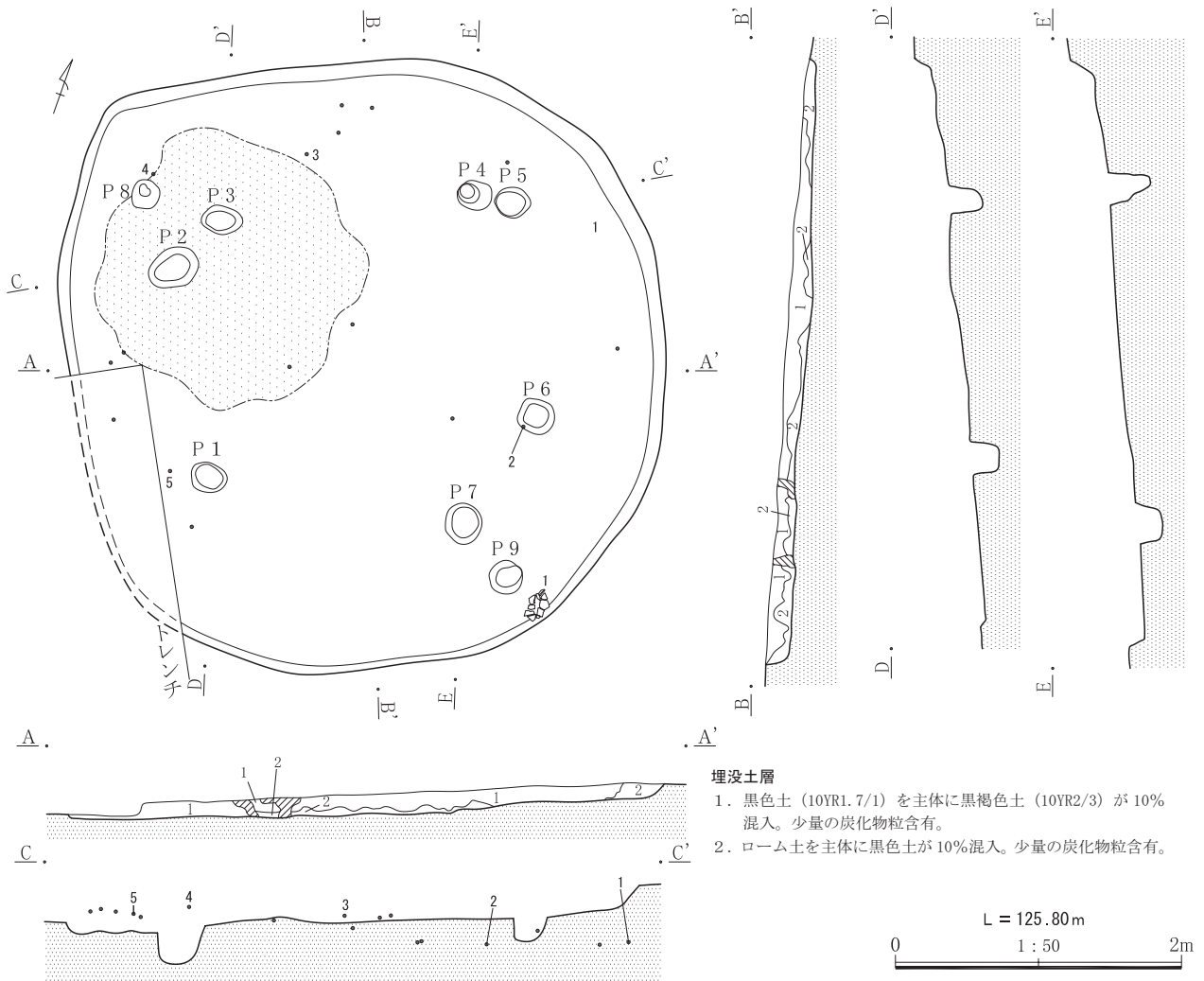
遺物 僅か 22 点の遺物（土器 5、石器 17）が埋没土上位の 1 層を中心に出土しているが、床面に密着したものは少なく（3・4）、その大半は床面から浮いた状態であった。花積下層式土器が 3 点（1）の他に、諸磯 a 式 1 点、型式不明 1 点などがある。石器は、削器 1 点（3）、礫器 1 点（2）、打製石斧 1 点（4）、磨り石類 1 点（5）、剥片 11 点、礫塊 2 点

などが組成する。

当住居の時期に関しては、出土土器が花積下層式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

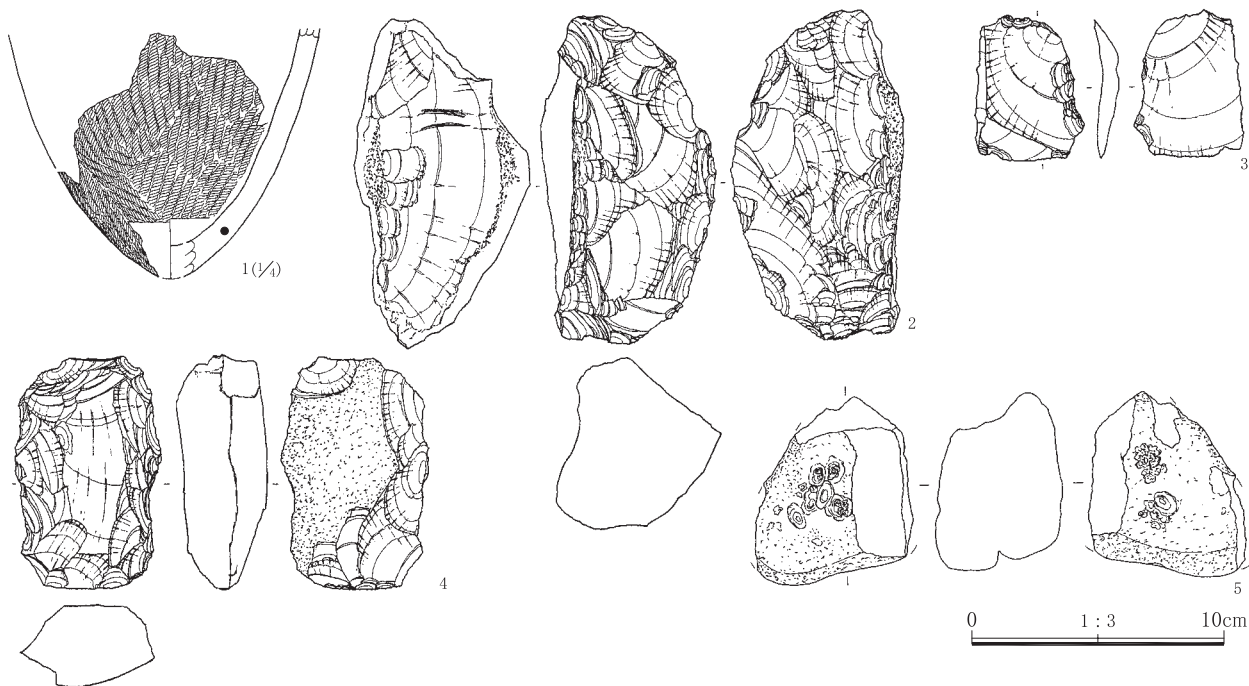
（観察表：50・64 頁）

その他 炉と周溝は検出されなかった。



第 288 図 13 号住居

III 今井見切塚遺跡の調査



第 289 図 13号住居出土遺物

【13号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	花積下層	諸磯a	時期不明	総計
合計	3	1	1	5

分類別点数

花積下層式

分類	2a類	2類
合計	1	2

諸磯a式

分類	4類
合計	1

縄文原体別点数

花積下層式

分類	4c
合計	1

胎土別点数

胎土	型式	花積
C		1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列		使用痕系列		その他		総計
器種	削器類	打斧	礫器	磨石類	剥片	礫塊	
合計	1	1	1	1	11	2	17

分類別点数

搔器・削器

分類	2類
合計	1

打製石斧

分類	1類
合計	1

磨石類

分類	4類
形態	abc
合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器

コード	1
点数	1
重量	28.3

打製石斧

コード	1
点数	1
重量	233

礫器

コード	3
点数	1
重量	611

磨石類

コード	4
点数	1
重量	195

剥片

コード	1	2	9
点数	9	1	1
重量	83.7	2.2	21.9

礫塊

コード	4
点数	2
重量	348

礫塊の被熱状況

分類	1	総計
合計	2	2

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4
点数	2
重量	348

● 14号住居

位置 DB-21

写真 PL 120

面積 8.18 m²

方位 N 58 度 E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 3.41 m × 短辺 3.04 m、深さ 6 ~ 34 cm である。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、南辺を除く各辺はやや外湾気味に張り出している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、4本が確認されている。P1 ~ P4 を連結した形状は、住居外形とほぼシンメトリーであり、4本支柱構造と考えられる。支柱穴の芯心間の距離は、P1 ~ P2 : 2.20 m、P2 ~ P3 : 1.85 m、P3 ~ P4 : 1.80 m、P4 ~ P1 : 1.40 m である。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1 : 28 × 18 cm、P2 : 32 × 20 cm、P3 : 28 × 18 cm、P4 : 27 × 15 cm である。

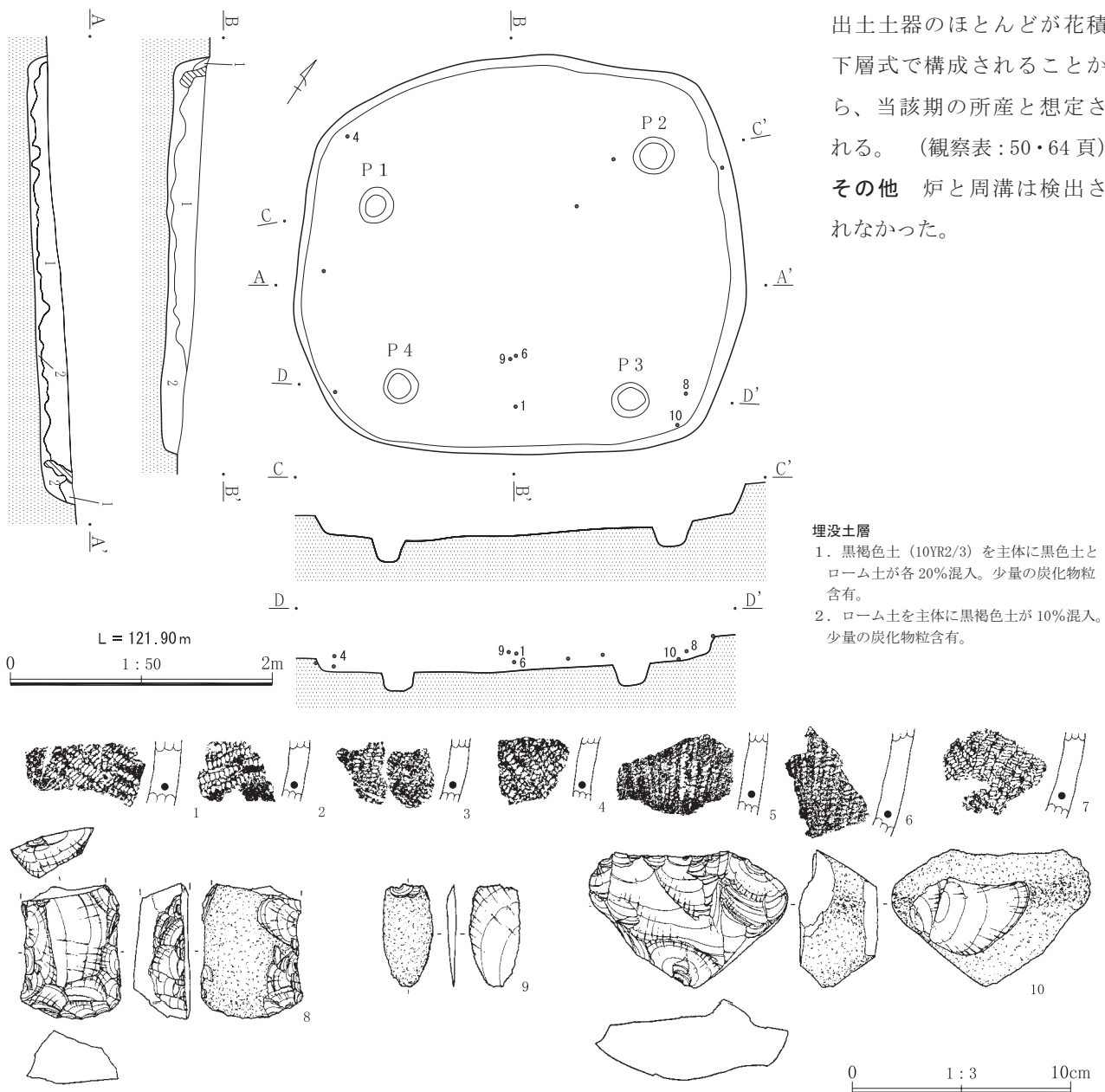
床面 勾配約5度の斜面地のローム層（VI層）を最大34cm掘り込んで床面を構築する。自然地形と同様に約14cmの比高差で北側から南側方向へ僅かに緩傾斜しているが、ほぼ平坦で凹凸面も少ない。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ35cm前後の1・2層がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示している。

遺物 僅か39点の遺物（土器22、石器17）が存在

するが、床面に密着したもの（4・8・10）は少なく、その大半が埋没土上位の1層を中心に、床面から浮いた状態で出土した。土器は小破片の花積下層式を主体とし、0段多条縄文を羽状あるいは菱形状に全面施文する。LR縄文（1・2）も僅かに認められるが、RLが主体的である。この他に、稻荷台式1点がある。尚、5・6は同一個体である。石器は、削器1点（9）、打製石斧1点（8）、礫器1点（10）、剥片13点、礫塊1点などが組成するに過ぎない。

当住居の時期に関しては、出土土器のほとんどが花積下層式で構成されることから、当該期の所産と想定される。（観察表：50・64頁）
その他 炉と周溝は検出されなかった。



第290図 14号住居と出土遺物

III 今井見切塚遺跡の調査

【14号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	条痕	花積下層	総計
合計	1	1	20	22

分類別点数

分類	花積下層式	
	2a類	2b類
合計	6	2

縄文原体別点数

分類	花積下層式	
	4c	4d
合計	6	2

胎土別点数

胎土	型式	
	花積	花積
C	8	

(石器)

器種別点数

系列	打製系列		その他		総計
	器種	打製	器種	打製	
合計	1	1	1	13	17

分類別点数

分類	搔器・削器		打製石斧	
	2類	1類	1類	1類
合計	1		1	

石材別の点数と重量

コト°	搔器・削器		打製石斧		礫器	
	点数	重量	点数	重量	点数	重量
	1	5.5	1	86.3	1	201

剥片

コト°	1	2	3
点数	11	1	1
重量	49	2.1	9.6

礫塊

コト°	4
点数	1
重量	45.8

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	1	1

● 15号住居

位置 DA -50

写真 PL 116

面積 8.25 m²

方位 N 9度W

重複 西側で時期不明の倒木痕を切っている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 3.60 m × 短辺 2.61 m、深さ 3 ~ 24 cm である。掘り込み深度が浅いために壁面の状態は不明瞭だが、各辺はほぼ直線的に走行している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、1本が確認されたのみであり、全体的な構造は不明。柱穴 P1 の規模 (径 × 深さ) は、22 × 22 cm である。

床面 勾配約 5 度の斜面地のローム層 (VI層) を最大 24 cm 掘り込んで床面を構築する。傾斜および凹凸面の少ない平坦な床面であるが、踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な状態を呈する。

埋没土 厚さ 20 cm 前後の薄層であるために不明確だが、他の住居と同様に黒褐色土が堆積しており、自然埋没と考えられる。

遺物 僅か 33 点の遺物 (土器 5、石器 28) の全てが、埋没土上位の 2 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は小破片のみだが、花積下層式 3 点 (1 ~ 3) と諸磯 a 式 2 点 (4・5) がある。また石器は、削器 1 点 (11)、打製石斧 5 点 (6 ~ 10・14)、磨り石類 2 点 (12・13)、剥片 17 点、礫塊 2 点などが組成するのみで、器種・数量ともに乏しい。6 の打製石斧は、両側中央部に抉入をもつ分銅形であり、異時期の混入品と考えられる。また、14 は凹み石類の破片を再加工した打製石斧である。

当住居の時期に関しては、花積下層式と諸磯 a 式の出土土器の数量が拮抗しており確定できない。

(観察表: 50・64 頁)

その他 精査にかかわらず、炉と周溝は検出されなかった。

【15号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	花積下層	諸磯a	総計
合計	3	2	5

分類別点数

分類	花積下層式		諸磯a式	
	2a類	2b類	4a類	4b類
合計	3		2	

縄文原体別点数

分類	花積下層式		諸磯a式	
	4c	4d	2b	2c
合計	3		2	

胎土別点数

胎土	型式		花積	諸磯a
	A	C		
A	-		-	2
C	2		2	-
H	1		1	-

(石器)

器種別点数

系列	打製系列		使用痕系列		その他	総計
	器種	打製	器種	打製		
合計	1	6	2	17	2	28

分類別点数

分類	打製石斧			磨石類	
	2類	1類	2類	4類	5類
合計	1	2	2	2	1

石材別の点数と重量

コト°	搔器・削器		打製石斧					
	点数	重量	コト°	点数	重量	コト°	点数	重量
	27	1	171	1	3	5	10	4

磨石類

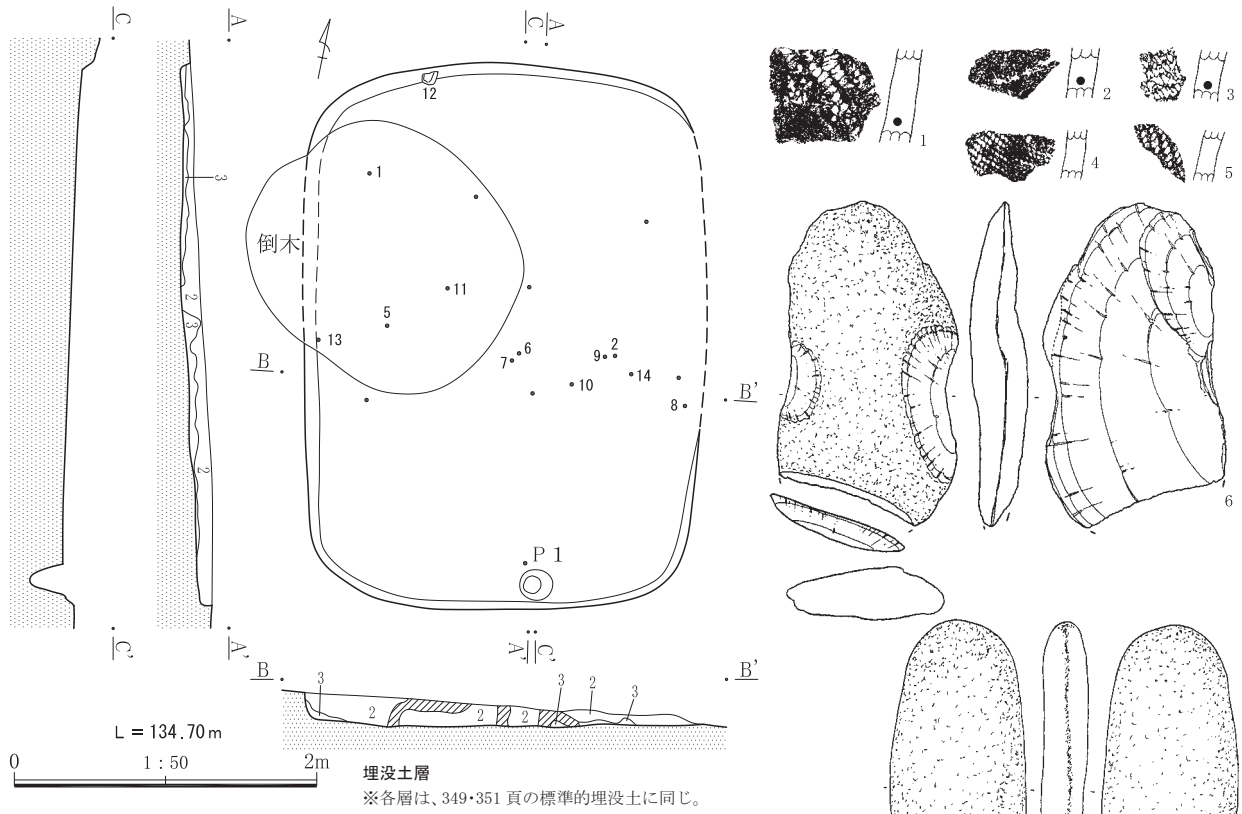
コト°	1	2	9	37
点数	8	7	1	1
重量	115	11.5	0.4	0.1

礫塊

コト°	4
点数	2
重量	24.4

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	2	2



第 291 図 15 号住居と出土遺物

III 今井見切塚遺跡の調査

● 16号住居

位置 CW-53 写真 PL 121・122

面積 約 19.1 m² 方位 N 51 度 E

重複 北壁際で諸磯 a 式期の 49 号土坑を切っている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 5.12 m × 短辺約 4.7 m、深さ 27 cm である。四辺の壁面は約 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はやや外湾気味に張り出している。

炉 床面中央部からやや東壁寄りに、1 基が確認された。楕円形状の僅かな掘り込み炉であり、長径 40 × 短径 36 × 深さ 8 cm の規模を有する。内部には僅かな焼土の堆積が認められる程度で、壁面の被熱・赤化も微弱である。

床面 勾配約 4 度の斜面地のローム層 (VI 層) を最大 27 cm 掘り込んで床面を構築する。傾斜および凹凸面の少ない平坦な床面であり、炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 厚さ 20 cm 前後の薄層で多くの攪乱が貫入するために不明瞭だが、自然埋没状況を示すと考えられる。

遺物 総数 704 点に及ぶ多量の遺物 (土器 275、石器 429) が埋没土上位の 1・2 層を中心に出土し、その大半は床面から浮いた状態であったが、9・13・17・20・22・48・51・57・65・67 などは床面に密着して出土している。土器は、花積下層式の 0 段多条縄文を羽状に全面施文するもの 246 点 (1・2・4・5・8~39) や、口縁部に 2 段の原体圧痕を附加するもの 5 点 (3・6・7) が主体を占める。縄文は RL が主体的であるが、LR (27・30) や両者を併用するもの (4・26・28・29)、附加条第 1 種 (5・10・11) も散見される。この他に、井草式 1 点、稲荷台式 2 点、諸磯 a 式 13 点、同 c 式 1 点、中期後半 2 点、型式不明 5 点などがある。尚、5・10・11、34・37 は各々同一個体である。石器は、石鏃 7 点 (40~43・45~47、42・45~47 は未製品)、石錐 2 点 (44・48)、削器 11 点 (57~61)、打製石斧 9 点 (49

【16号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	稲荷台	花積下層	諸磯a	諸磯c	中期後半不明	時期不明	総数
合計	1	2	251	13	1	2	5	275

分類別点数

花積下層式				諸磯a式			諸磯c式			
分類	1a類	2a類	2b類	2	分類	2類	3類	4類	分類	3類
合計	5	39	76	131	合計	4	2	7	合計	1

縄文原体別点数

花積下層式					
分類	4c	4d	4cd	4c・21c	7d
合計	98	2	3	1	17

胎土別点数

胎土	型式	花積
C		113
H		7

(石器)

器種別点数

系列	打製系列				使用痕系列		
器種	石鏃	石錐	削器類	打斧	礫器	磨石類	石皿
合計	7	2	11	9	1	10	1

その他			総計
剥片	自然石	礫塊	
369	1	18	429

分類別点数

石鏃				
分類	1類	2類	3類	9類
合計	1	1	1	4

石錐		打製石斧				石皿		
分類	2類	分類	1類	2類	7類	8類	分類	5類
合計	2	合計	1	6	1	1	合計	1

磨石類				搔器・削器		
分類	2類	4類	5類	分類	1類	2類
形態	ac	abc	a ac	合計	2	9
合計	3	1	4 2			

石材別の点数と重量

石鏃		石錐		搔器・削器	
コード	2	5	コード	1	2
点数	6	1	点数	1	1
重量	17.2	1	重量	7.2	1.1
			コード	1	2
			点数	8	3
			重量	551	12.5

打製石斧			礫器		磨石類	
コード	1	3	6	コード	1	4
点数	7	1	1	点数	1	10
重量	749	84	46.4	重量	179	2560

石皿		礫塊			
コード	13	コード	2	4	33
点数	1	点数	1	16	1
重量	3220	重量	14.6	630	70.5

剥片						
コード	1	2	3	4	7	9
点数	97 (96)	248 (240)	4	1	5	8
重量	(520)	(689)	79.9	3.5	10.7	34.4

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

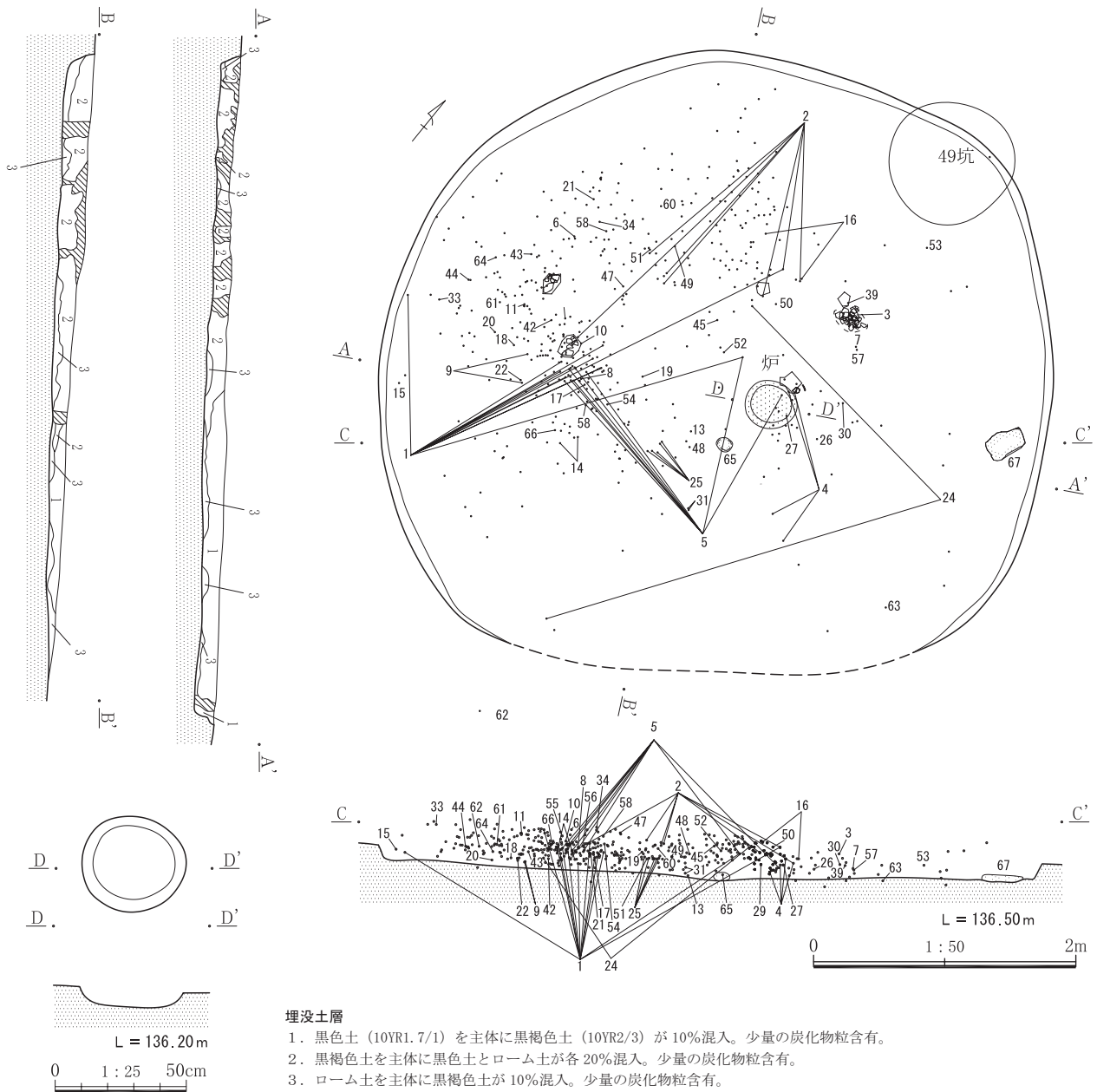
33	37	38
1	3	2
2	2.8	0.5

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	3	15	18

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4
点数	3
重量	148



～56)、礫器1点(62)、磨り石類10点(63～66)、石皿1点(67)、剥片369点、礫塊19点などが組成する。

当住居の時期に関しては、出土土器が花積下層式

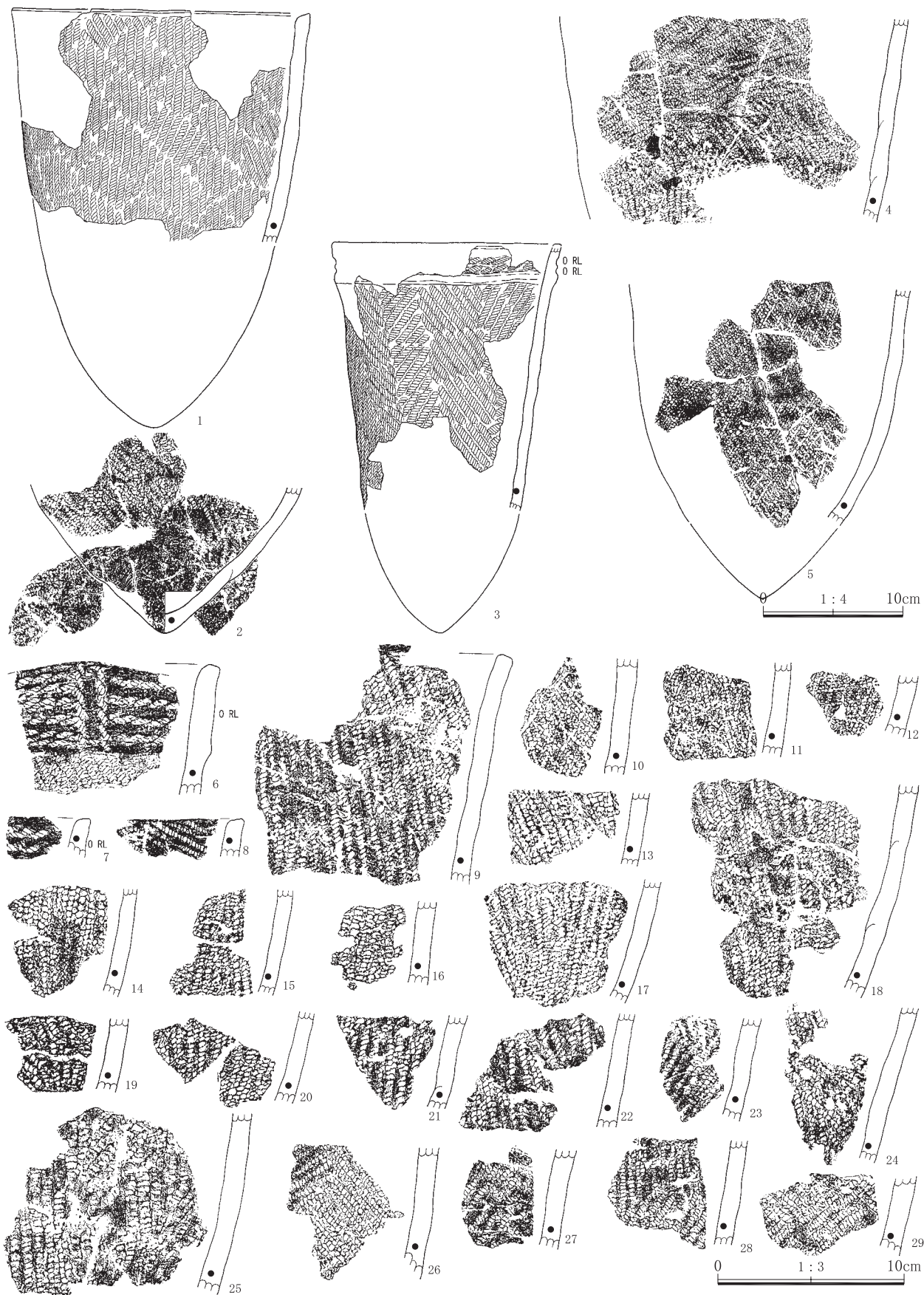
を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表:50・64頁)

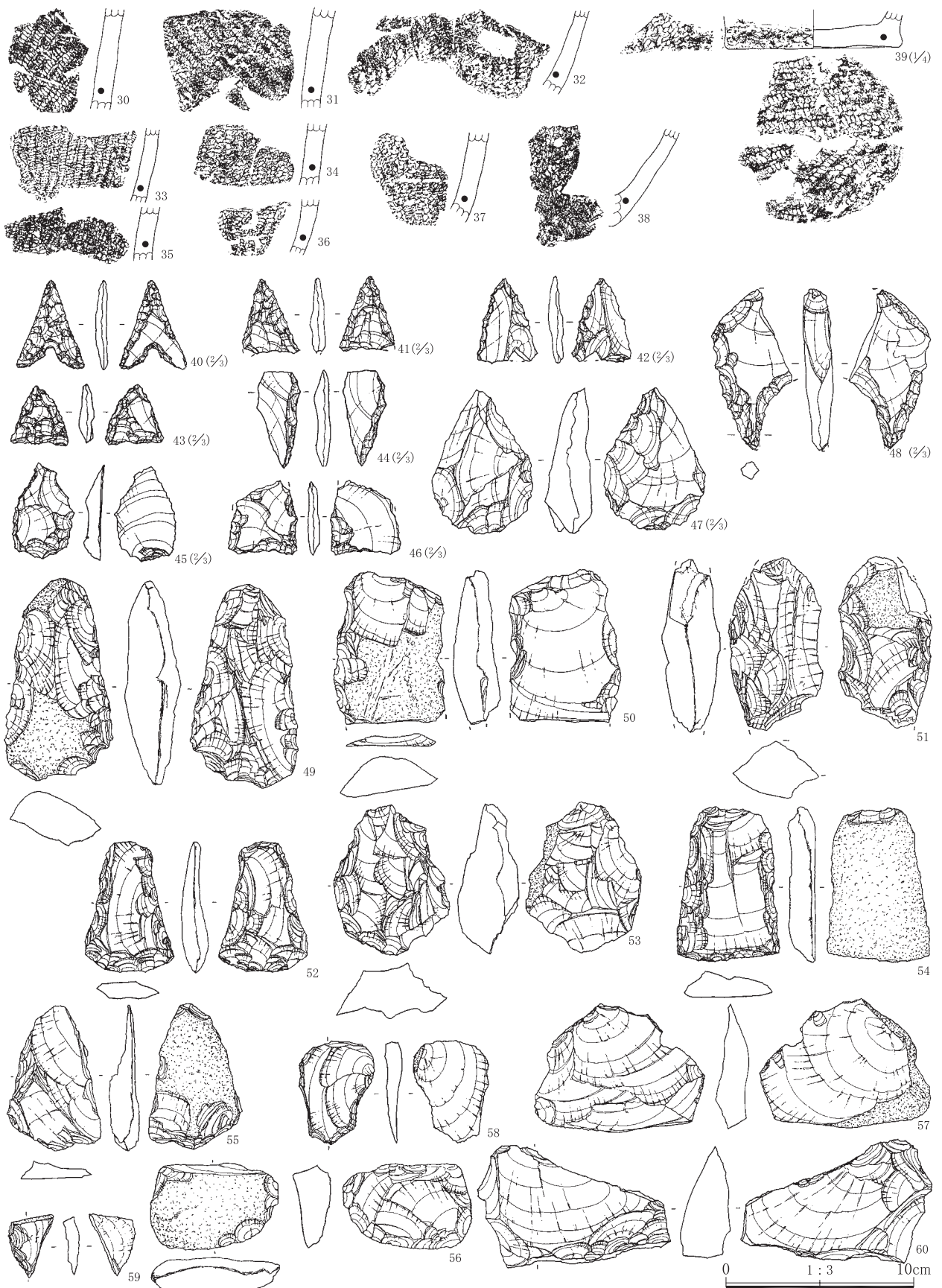
その他 精査にかかわらず、柱穴と周溝は検出されなかった。

第292図 16号住居

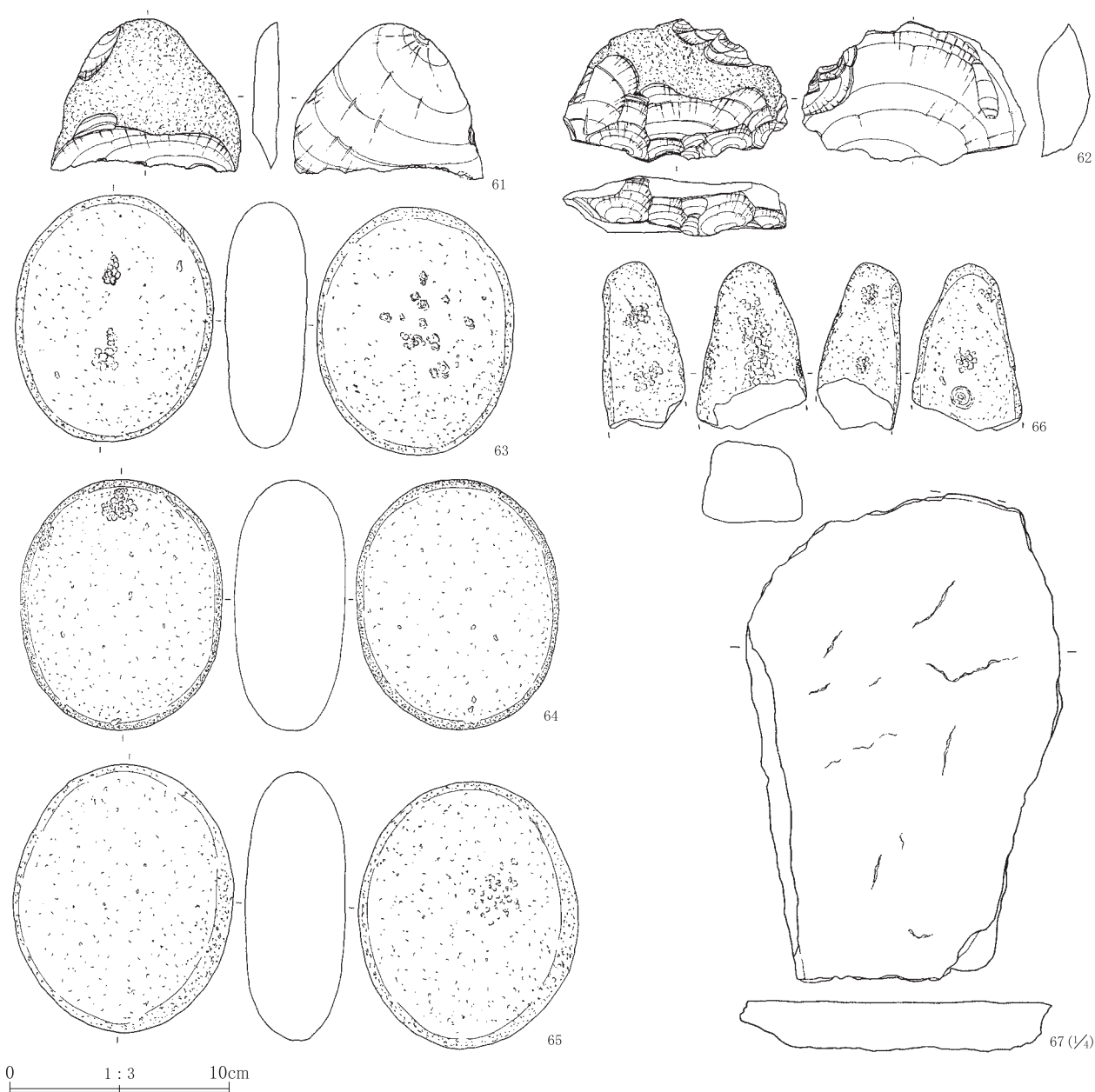
III 今井見切塚遺跡の調査



第 293 図 16号住居出土遺物(1)



第 294 图 16 号住居出土遺物 (2)



第 295 図 16 号住居出土遺物 (3)

● 17 号住居

位置 B P -106

写真 P L 122

面積 8.60 m²

方位 N 5 度 W

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ楕円形状を呈し、規模は長軸 3.87 m × 短軸 3.12 m、深さ 5 ~ 43 cm である。壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれている。

炉 北西壁に近接して、1 基が確認された。体部下半を欠損する深鉢土器 (1) を埋設し、その掘方

は直径 25 cm × 深さ 20 cm の円筒形状である。土器内には黒褐色土が堆積し、少量の焼土粒を含有する程度であるが、土器には顕著な被熱風化が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、1 本を確認し得たのみであり、柱構造については不明である。柱穴 P1 の規模 (径 × 深さ) は、23 × 46 cm である。

床面 勾配約 6 度の斜面地のローム層 (VI 層) を最大 43 cm 掘り込んで床面を構築する。傾斜および凹凸面の少ない平坦な床面であり、炉の周辺を中心にし

て若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。
埋没土 厚さ 30 cm 前後の 1～4 層がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示している。

遺物 僅かに総数 11 点の遺物（土器 5、石器 6）が存在するが、1 点（6）を除いた全てが埋没土上位の 1・2 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯 a 式の米字文 3 点（2）と全面縄文 1 点（1）、それに中期後半 1 点などがある。また、石器は石鏃 2 点（3・4）と打製石斧 2 点（5・6）、砥石 1 点、剥片 1 点が組成するのみである。尚、4 の黒曜石製石鏃について X 線回折試験による産地同定を行い、神津島産との結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯 a 式により構成されることから、当該期の所産と想定される。（観察表：50・64 頁）

その他 周溝は検出されなかった。

【17号住居出土遺物の分類一覧】

（土器）

型式別点数

型式	諸磯a	中期後半 不明	総計	分類	1c類	4a類
合計	4	1	5	合計	3	1

分類別点数

諸磯a式

縄文原体別点数

諸磯a式

分類	2b
合計	4

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a
A		4

（石器）

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計
器種	石鏃 打斧	砥石	剥片	
合計	2 2	1	1	6

分類別点数

石鏃

分類	2類	10類
合計	1	1

打製石斧

分類	8類
合計	2

砥石

分類	1類
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃

コード	7	12
点数	1	1
重量	0.6	0.7

打製石斧

コード	1	4
点数	1	1
重量	34.9	85.2

砥石

コード	1
点数	1
重量	103

剥片

コード	1
点数	1
重量	43.4

● 18号住居

位置 B T -102

写真 P L 120

面積 7.68 m²

方位 N 48 度W

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ若干歪んだ隅丸正方形形状を呈し、規模は長辺 3.46 m × 短辺 3.33 m、深さ 8～27 cm である。四辺の壁面は約 60～80 度の角度で掘り込まれ、各辺はやや外湾気味に張り出している。

炉 床面のほぼ中央部に、1 基が確認された。楕円形状の地床炉であり、長径 37 × 短径 31 cm の範囲に焼土が薄く散布していた。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、6 本が確認されているが、P2～P5 の 4 本を支柱とする構造と考えられる。P1 については、他時期の土坑の可能性もある。支柱穴の芯心間の距離は、P2～P3：1.70 m、P3～P4：1.80 m、P4～P5：1.80 m、P5～P2：1.85 m である。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：44 × 21 cm、P2：25 × 25 cm、P3：23 × 21 cm、P4：22 × 20 cm、P5：22 × 26 cm、P6：25 × 25 cm である。

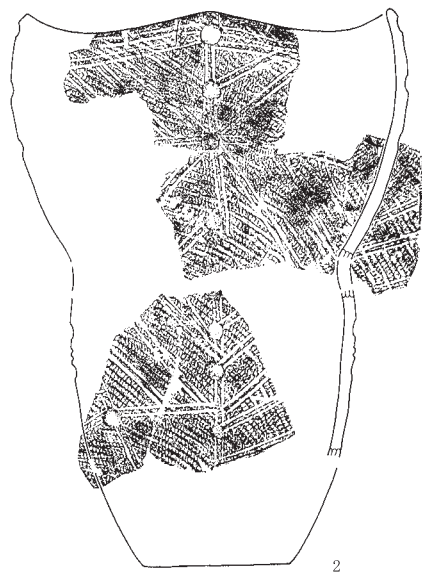
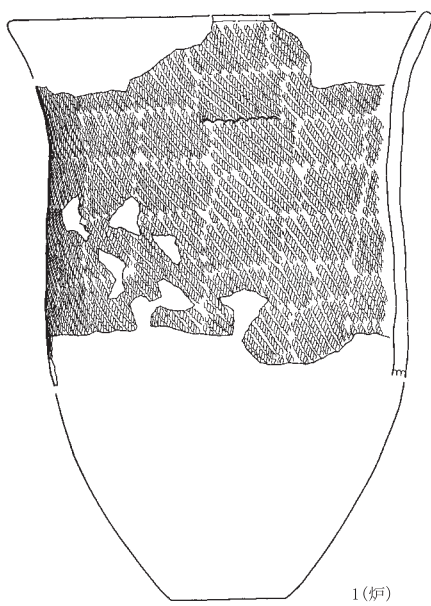
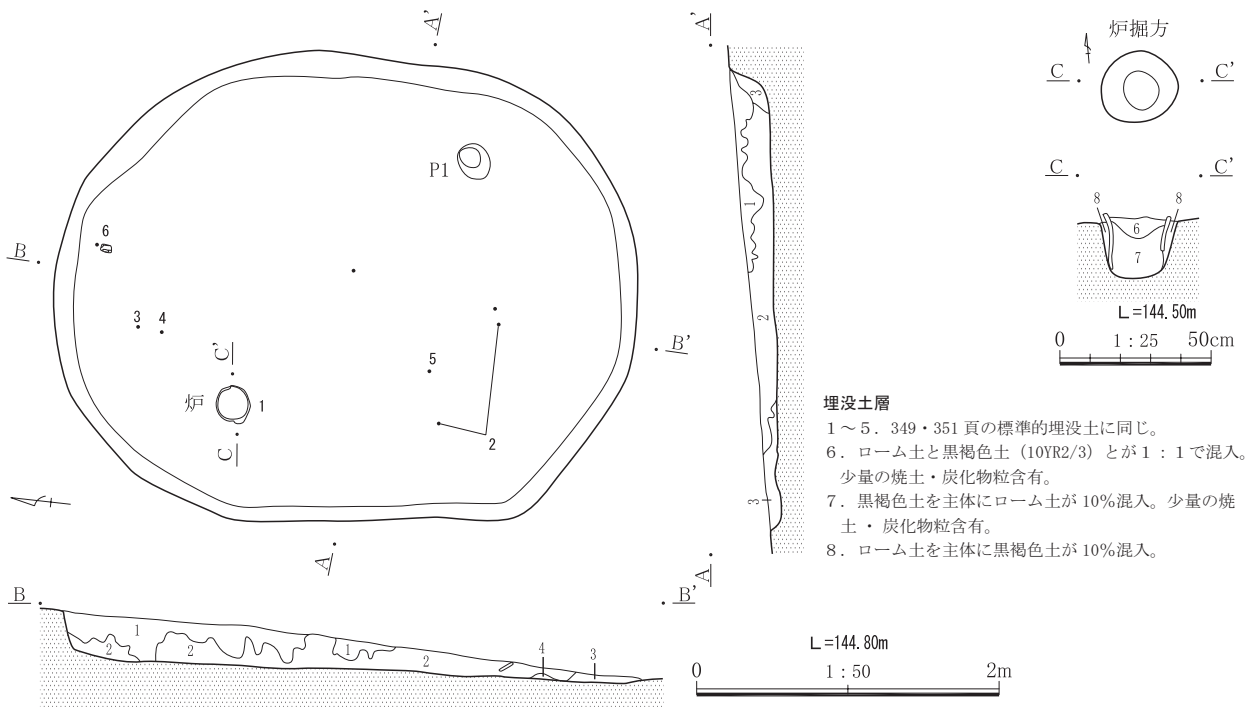
床面 勾配約 5 度の斜面地のローム層（VI 層）を最大 27 cm 掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約 17 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。また、敲き床ほどではないが、炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによる僅かな硬化面が認められる。

埋没土 厚さ 30 cm 弱の 2・3 層がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示している。

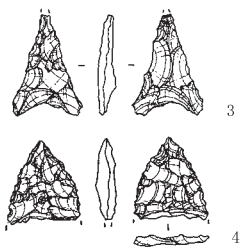
遺物 僅か 10 点の遺物（土器 2、石器 8）が存在するが、その全てが埋没土上位の 2 層を中心に、床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯 a 式の文様構成不明の縄文施文 1 点（2）と夏島式の縄文 1 点（1）が、また石器では削器 1 点（3）、磨り石類 1 点（4）、剥片 6 点が存在するのみである。これらの遺物の他に、柱穴 P1 の埋没土中よりケヤキの炭化材小片が出土したが、C14 年代測定の結果、cal BC2345～2395 の年代値を得ている。詳細は 691 頁の「IV 科学的分析」を参照されたい。

当住居の時期に関しては、出土遺物が僅少なため

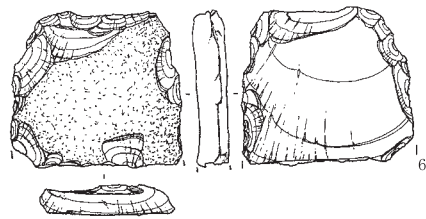
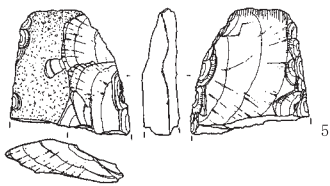
III 今井見切塚遺跡の調査



0 1:4 10cm



0 2:3 5cm



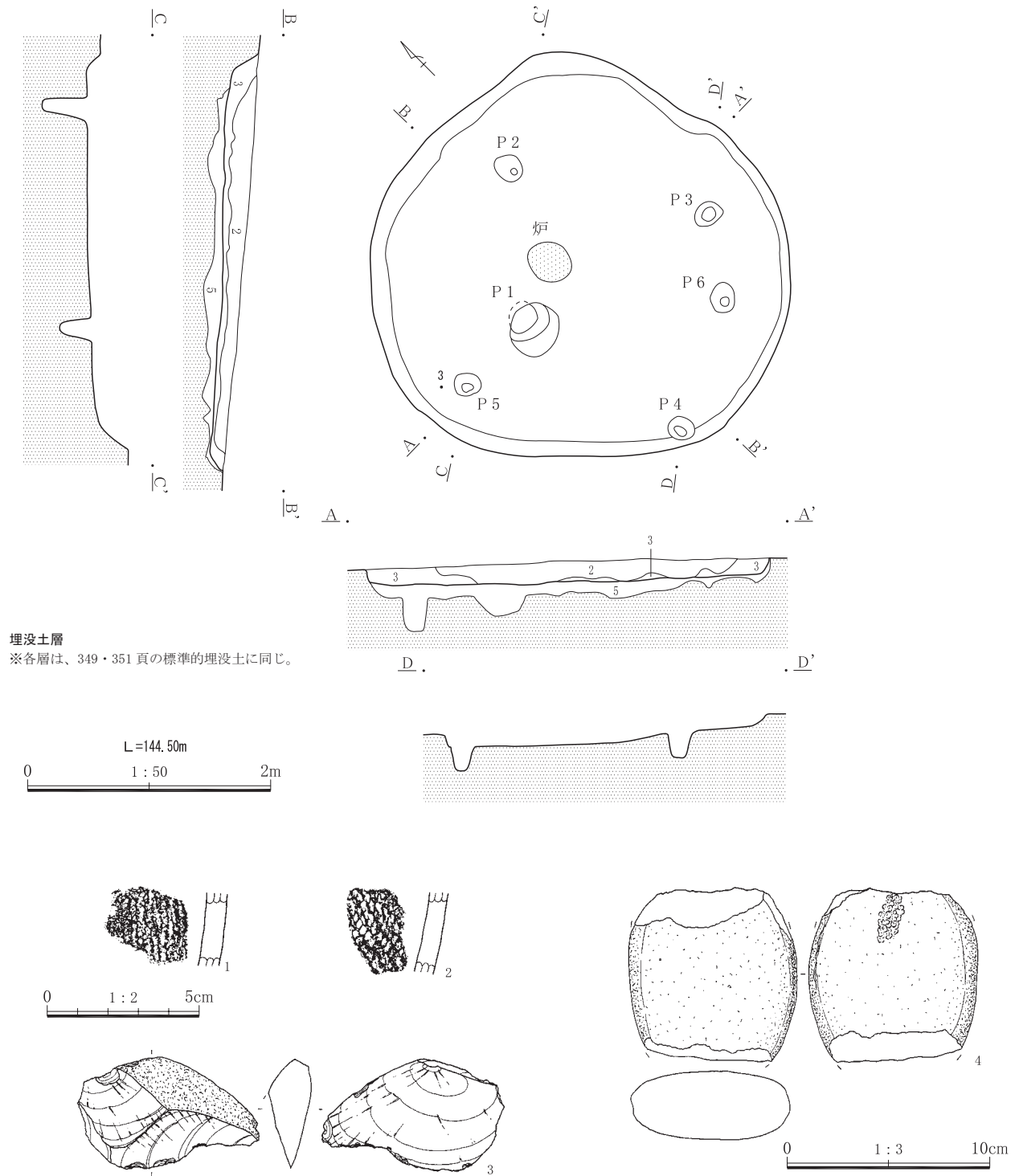
0 1:3 10cm

第296図 17号住居と出土遺物

に確定できないが、屋内炉と4本支柱の住居構造を
考慮すれば、諸磯a式に比定される可能性が高い。

(観察表：50・64頁)

その他 周溝は検出されなかった。



第297図 18号住居と出土遺物

III 今井見切塚遺跡の調査

【18号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	諸磯a	総計
合計	1	1	2

縄文原形別点数

夏島式

分類	2b
合計	1

諸磯a式

分類	2b
合計	1

分類別点数

夏島式

分類	b
合計	1

諸磯a式

分類	4a類
合計	1

胎土別点数

胎土	型式	夏島	諸磯a
A		1	1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計
器種	搔器・削器	磨石類	剥片	
合計	1	1	6	8

分類別点数

搔器・削器

分類	1類
合計	1

磨石類

分類	2類
形態	ac
合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器

コード	1
点数	1
重量	79

磨石類

コード	19
点数	1
重量	372

剥片

コード	1	2
点数	4	2
重量	12.1	2

● 19号住居

位置 DM-44

写真 PL 123・124

面積 16.27 m²

方位 N 84度W

重複 北西隅で時期不明の号住居と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺4.45 m×短辺4.36 m、深さ25～80 cmである。四辺の壁面は約80～85度の垂直に近い角度で整然と掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 北壁に近接して、3基が確認された。1・2号炉は、ともに口縁部と体部下半を欠損する深鉢土器(1・3)を埋設し、その掘方は1号が直径23 cm×深さ19 cm、2号が直径25 cm×深さ17 cmの円筒形状である。両土器内には暗褐色土が堆積し、焼土粒をほとんど含有せず、また土器にも微弱な被熱風化が認められる程度である。3号炉は不定形状の地床炉であり、長径72×短径52 cmの範囲に焼土の散布が認められる。尚、各炉の時間的な先後関係は不明。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、5本が確認されているが、P2～P5の4本を支柱とする構造と考えられる。支柱穴の芯心間の距離は、P2～P3:1.80 m、P3～P4:2.80 m、P4～P5:2.20 m、P5～P2:2.75 mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、

【19号住居出土遺物の内容一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	諸磯a	諸磯b	時期不明	総計
合計	1	128	2	8	139

分類別点数

諸磯a式

分類	1類	2類		3類		4類		分類	3類
種別	b	a1	b1	b2	不明	不明	a	不明	
合計	1	62	6	3	9	1	9	37	2

諸磯b式

縄文原形別点数

諸磯a式

分類	2a	2b	5b	14c	18
合計	1	35	7	31	7

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a
A		44
B		37

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他			総計
器種	石鏃	削器類	磨石類	剥片	石核	礫塊
合計	1	2	6	30	2	6

分類別点数

石鏃

分類	1類
合計	1

搔器・削器

分類	2類
合計	2

磨石類

分類	4類	5類
形態	ac	a
合計	3	3

石材別の点数と重量

石鏃

コード	12
点数	1
重量	1.1

搔器・削器

コード	1
点数	2
重量	33.1

磨石類

コード	4
点数	6
重量	2596

石核

コード	2	12
点数	1	1
重量	22.2	9.1

礫塊

コード	4
点数	6
重量	316

剥片

コード	1	2	3	7	12
点数	13	1	1	2	13
重量	121	2.9	146	144	6.2

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	3	3	6

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4
点数	3
重量	187

P1:30×52 cm、P2:30×46 cm、P3:29×56 cm、P4:27×45 cm、P5:21×45 cmである。

床面 勾配約9度の斜面地のローム層(VI～VIII層)を最大80 cm掘り込んで床面を構築する。傾斜および凹凸面の少ない平坦な床面であり、炉の周辺や支柱穴の内側を中心にして、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められる。

埋没土 厚さ30～80 cmの2～6層がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示している。また、層さ20～

30 cmの4～6層は、ローム土を主体とした締まりの脆弱な埋没土であり、土屋根等に被覆・使用されていた土が崩落・堆積した可能性もある。

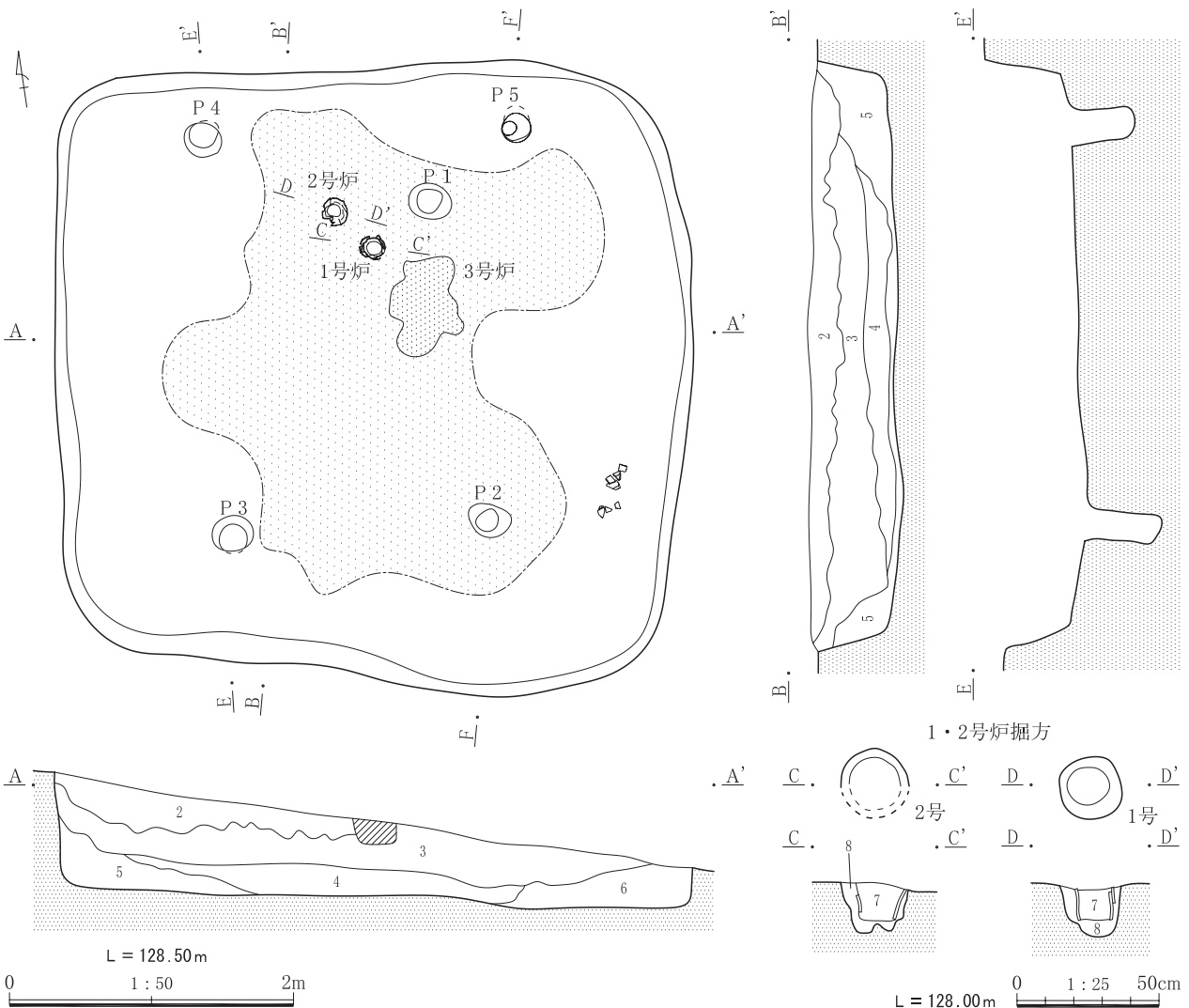
遺物 総数186点の遺物（土器139、石器47）が、埋没土上位の2・3層を中心に出土し、その全てが床面から浮いた状態であった。土器は、諸磯a式の肋骨文62点（4～10・12・15）・波状沈線文9点（2・3）・米字文1点（11）・全面縄文1点（1）・構成不明45点（12～16）の他に、稻荷台式1点、諸磯b式2点、型式不明8点などがある。尚、5・6・8～10・12・15は同一個体である。石器に石鏃1点（17）、

削器2点（18・19）、磨り石類6点（20・21）、石核2点、剥片30点、礫塊6点などが組成するのみで、器種・数量ともに乏しい。また、黒曜石製の製品（17）や石核・剥片類15点の内の14点について、X線回折試験による産地同定を行い、蓼科系11点を主体に、和田峠系2（星ヶ塔）2点、高原山系1点などを確認している。

当住居の時期については、出土土器が諸磯a式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：50・64頁）

その他 周溝は検出されなかった。



埋没土層

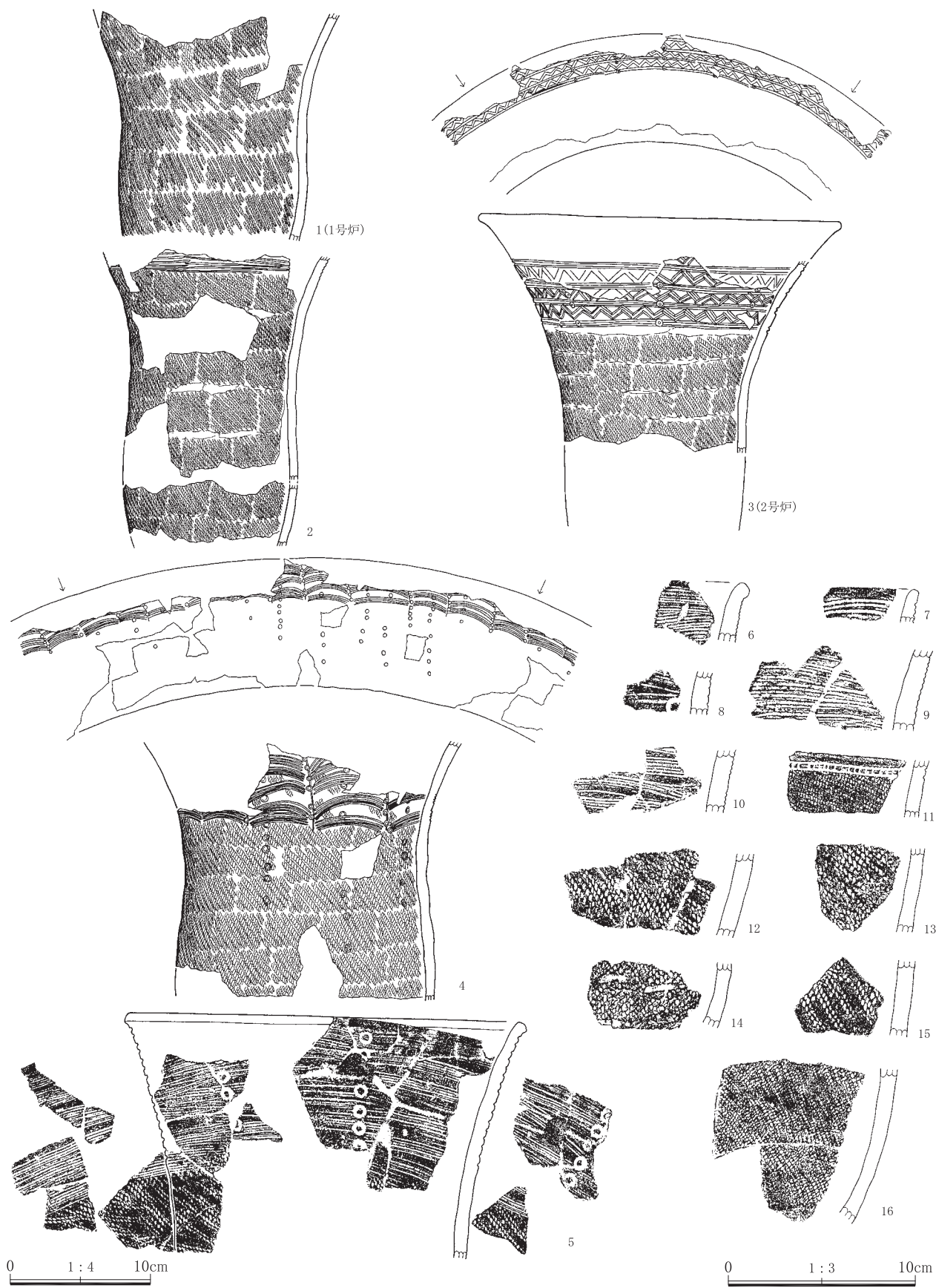
- 2. 黒褐色土（10YR2/3）を主体に黒色土（10YR2/1）が20%混入。少量の炭化物粒含有。
- 3. ローム土を主体に黒褐色土が10%混入。少量の炭化物粒含有。
- 4. 暗褐色土（10YR3/4）とローム土とが1：1で混入。少量の炭化物粒含有。
- 5. ローム土を主体に暗褐色土が10%混入。少量の炭化物粒含有。
- 6. ローム土を主体に暗褐色土が20%混入。少量の炭化物粒含有。
- 7. 暗褐色土を主体にローム土が5%混入。少量の炭化物粒含有。
- 8. ローム土を主体に暗褐色土が10%混入。

第298図 19号住居(1)

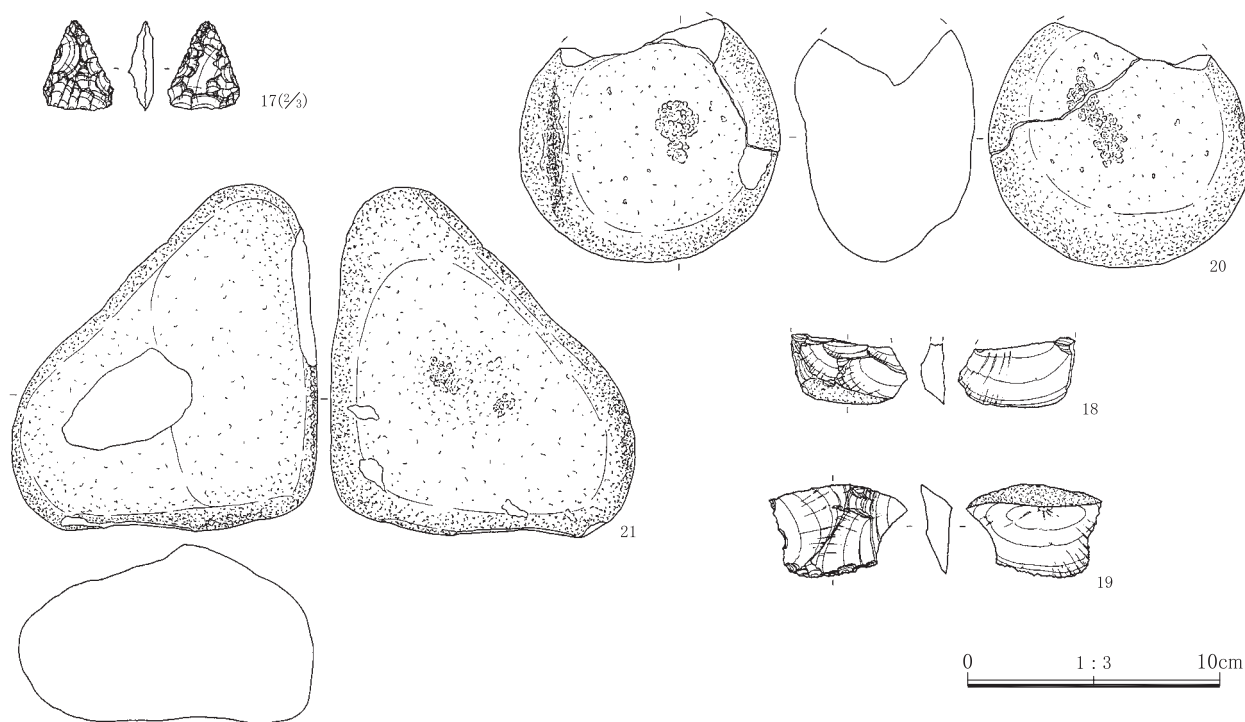
III 今井見切塚遺跡の調査



第 299 図 19 号住居 (2)



第 300 图 19 号住居出土遺物 (1)



第301図 19号住居出土遺物(2)

● 20号住居

位置 DD-48 写真 PL 125～127

面積 26.60 m² 方位 N 31度E

重複 25～28号土坑と重複するが、25・26号土坑を切っているものの、他の土坑との新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ正方形に近似した隅丸台形状を呈し、規模は長辺5.61m×短辺5.55m、深さ16～75cmである。四辺の壁面は約70～85度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

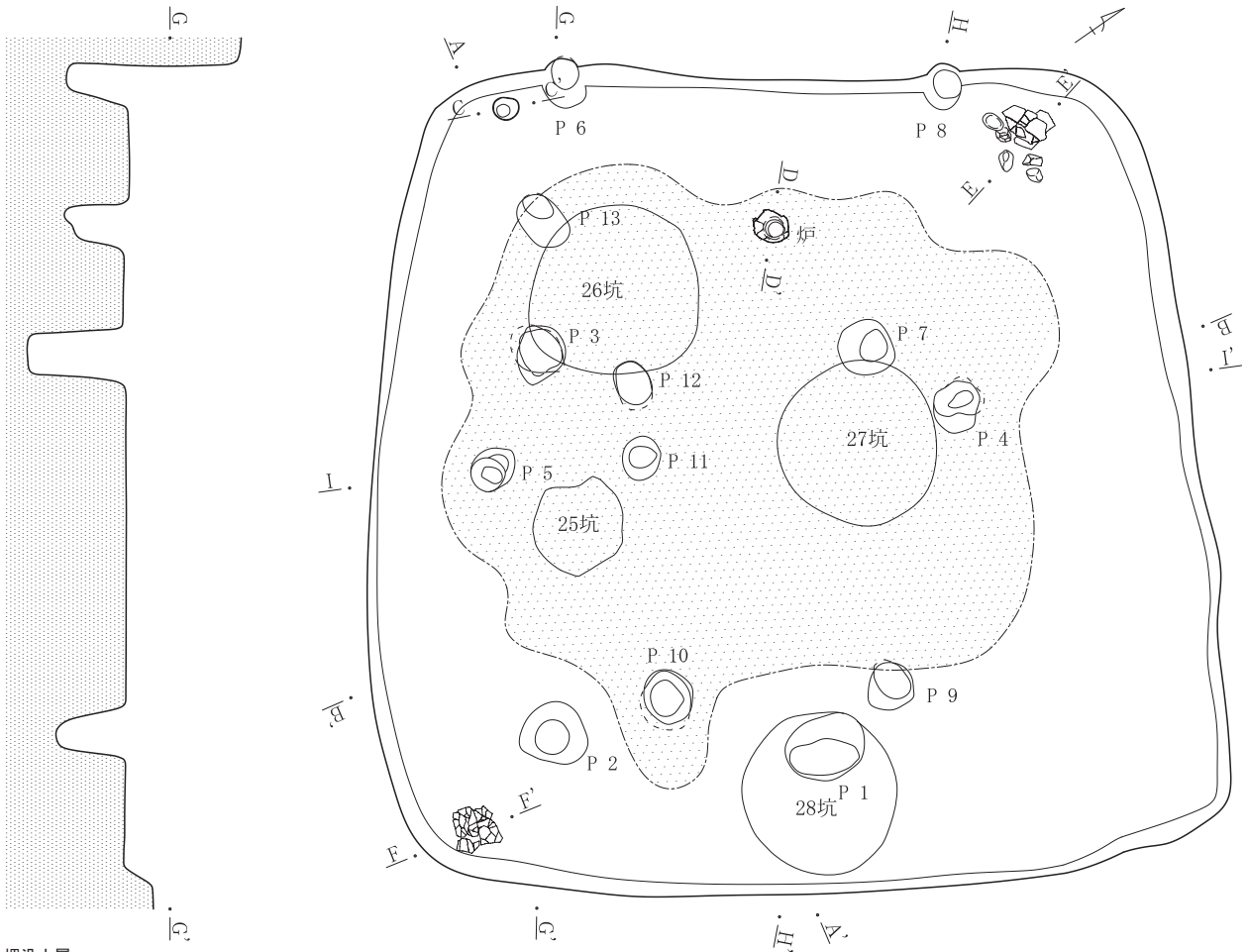
炉 西壁中央部に近接して、1基が確認された。体部下半を欠損する深鉢土器(1)を埋設し、その掘方は直径22cm×深さ23cmの円筒形状である。土器内には少量の焼土粒を含有する暗褐色土が堆積し、土器には微弱な被熱風化が認められる程度で、使用状況の乏しさを窺わせる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、13本が確認されている。住居外形の短軸方向に沿って、P2-P3-P6とP1-P7-P8の6本・2列配置を基本とし

た支柱構造と考えられる。これ以外に、P10-P12-P6とP9-P4-P8の配列も認められ、先の配列との時間的先後関係は不明であるが、建て替えに付随して再敷設されたことを窺わせる。主な柱穴の芯心間の距離は、P2～P3:2.65m、P3～P6:1.90m、P1～P7:2.80m、P7～P8:1.80m、P10～P12:2.15m、P12～P6:2.20m、P9～P4:2.00m、P4～P8:2.15mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:43×53cm、P2:44×41cm、P3:40×64cm、P4:35×27cm、P5:33×47cm、P6:33×42cm、P7:37×38cm、P8:31×48cm、P9:34×46cm、P10:36×57cm、P11:30×56cm、P12:30×43cm、P13:27×41cmである。

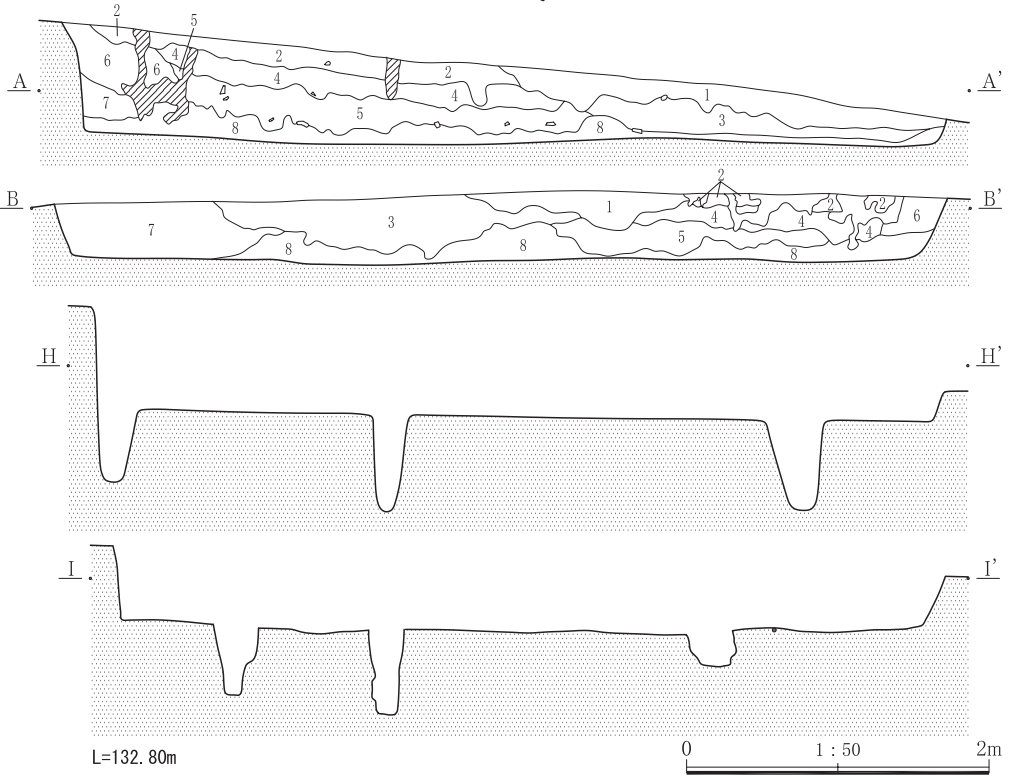
床面 勾配約8度の斜面地のローム層(VI～VIII層)を最大75cm掘り込んで床面を構築する。傾斜および凹凸面の少ない平坦な床面であり、炉の周辺や支柱穴の内側を中心にして、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められる。

埋没土 厚さ20～75cmの1～8層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。



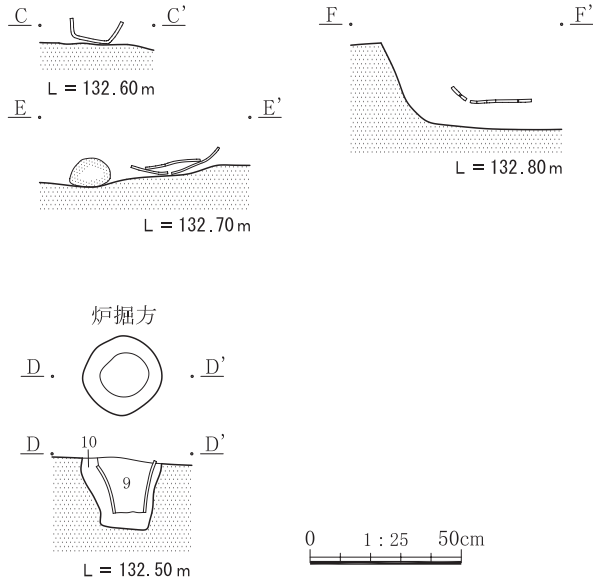
埋没土層

1. 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) とローム土とが 1 : 1 で混入。微量の炭化物粒含有。
2. 暗褐色土 (10YR3/4) と鈍い黄褐色土とが 1 : 1 で混入。少量の炭化物粒含有。
3. 暗褐色土を主体に鈍い黄褐色土が 30% 混入。少量の炭化物粒含有。
4. 暗褐色土を主体に鈍い黄褐色土が 20% 混入。少量の炭化物粒含有。
5. 黒褐色土 (10YR2/3) を主体にローム土が 10% 混入。多量の炭化物粒含有。
6. 鈍い黄褐色土とローム土とが 1 : 1 で混入。少量の炭化物粒含有。
7. ローム土を主体に鈍い黄褐色土が 30% 混入。微量の炭化物粒含有。
8. ローム土を主体に黒褐色土が 10% 混入。少量の炭化物粒含有。
9. 暗褐色土を主体にローム土が 30% 混入。少量の焼土・炭化物粒含有。
10. 暗褐色土とローム土とが 1 : 1 で混入。微量の炭化物粒含有。



第 302 図 20 号住居 (1)

III 今井見切塚遺跡の調査



第303図 20号住居(2)

【20号住居出土物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	花積下層	黒浜	諸磯a	諸磯b	大木系	時期不明	総計
合計	1	11	53	1271	2	3	55	1396

分類別点数

花積下層式				黒浜式			諸磯b式		
分類	1類	2類	3類	分類	2類	3類	分類	1類	2類
合計	1	9	1	合計	2	51	合計	1	1

諸磯a式

分類	1類			2類							
種別	a	c	不明	a1	b3	c1	c2	d1	d2	d4	不明
合計	19	26	12	17	4	1	1	12	7	6	55

3類				4類			
	a1	b1	b2	不明	a	b	不明
	1	3	3	5	230	8	861

縄文原形別点数

諸磯a式

分類	1a	2a	2b	5a	5b	7a	7b	7f	14c
合計	4	34	86	10	78	22	7	19	10

	14d	16a	16b	18
	6	1	10	48

胎土別点数

胎土 型式	A	B	C	D	E	F	G	I	J
諸磯a	262	10	33	5	9	1	8	4	6

(石器)

器種別点数

系列	打製系列						使用痕系列			
	尖頭器	石鏃	削器類	打斧	三角錐	礫器	磨石類	敲石	石皿	砥石
合計	1	3	11	2	1	1	32	1	4	3

その他			総計
剥片	自然石	礫塊	
149	4	102	314

分類別点数

石鏃			搔器・削器			打製石斧			
分類	1類	2類	3類	分類	1類	2類	分類	1類	8類
合計	1	1	1	合計	4	7	合計	1	1

磨石類

分類	2類	3類	4類				5類						
形態	abc	ac	a	abc	a	abc	ac	b	a	ab	ac	b	bc
合計	4	5	1	2	4	2	4	1	4	1	1	2	1

三角錐形石器

分類	7類
合計	1

敲石

分類	3類
形態	ac
合計	1

石皿

分類	4類	5類
合計	3	1

砥石

分類	1類
合計	3

石材別の点数と重量

尖頭器			石鏃			搔器・削器			
コード	2	コード	2	コード	1	2	コード	1	2
点数	1	点数	3	点数	9	2	点数	9	2
重量	3.6	重量	3.6	重量	373	12.6	重量		

打製石斧			三角錐形石器			礫器			敲石		
コード	1	コード	5	コード	1	コード	1	コード	9		
点数	2	点数	1	点数	1	点数	1	点数	1		
重量	110	重量	159	重量	120	重量	314				

磨石類						石皿	
コード	3	4	5	9	18	コード	4
点数	1	26	1	3	1	点数	4
重量	251	9055	200	425	768	重量	551

砥石			礫塊				
コード	9	23	コード	4	34	37	39
点数	2	1	点数	99	1	1	1
重量	197	35.4	重量	19655	94.3	307	38.4

剥片

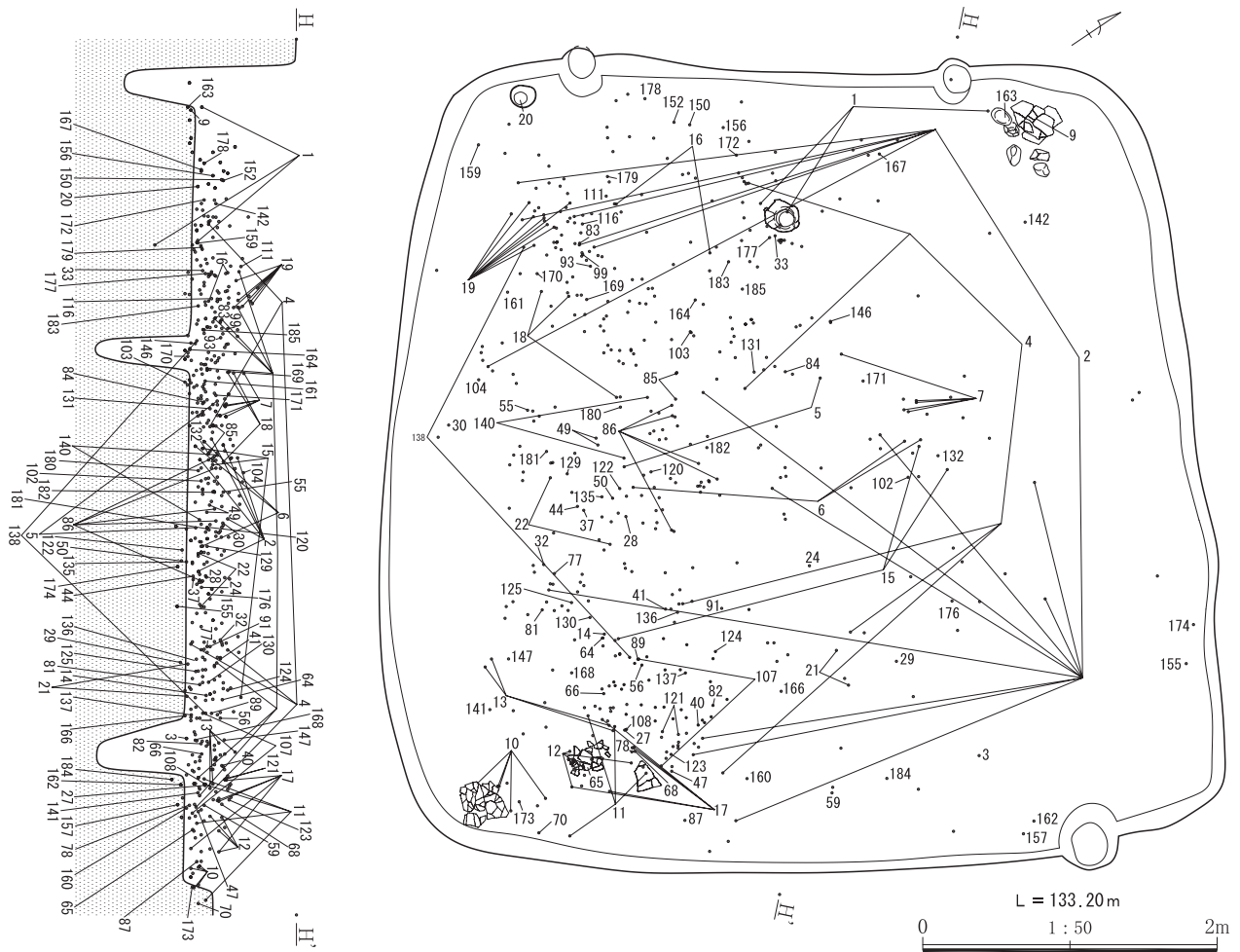
コード	1	2	3	7	9	12	37	51
点数	85	44	1	4	9	3	1	2
重量	641	179	5.8	11.8	73.1	3.7	120	9.5

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	66	36	102

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4	37
点数	65	1
重量	11736	307



第304図 20号住居 (3)

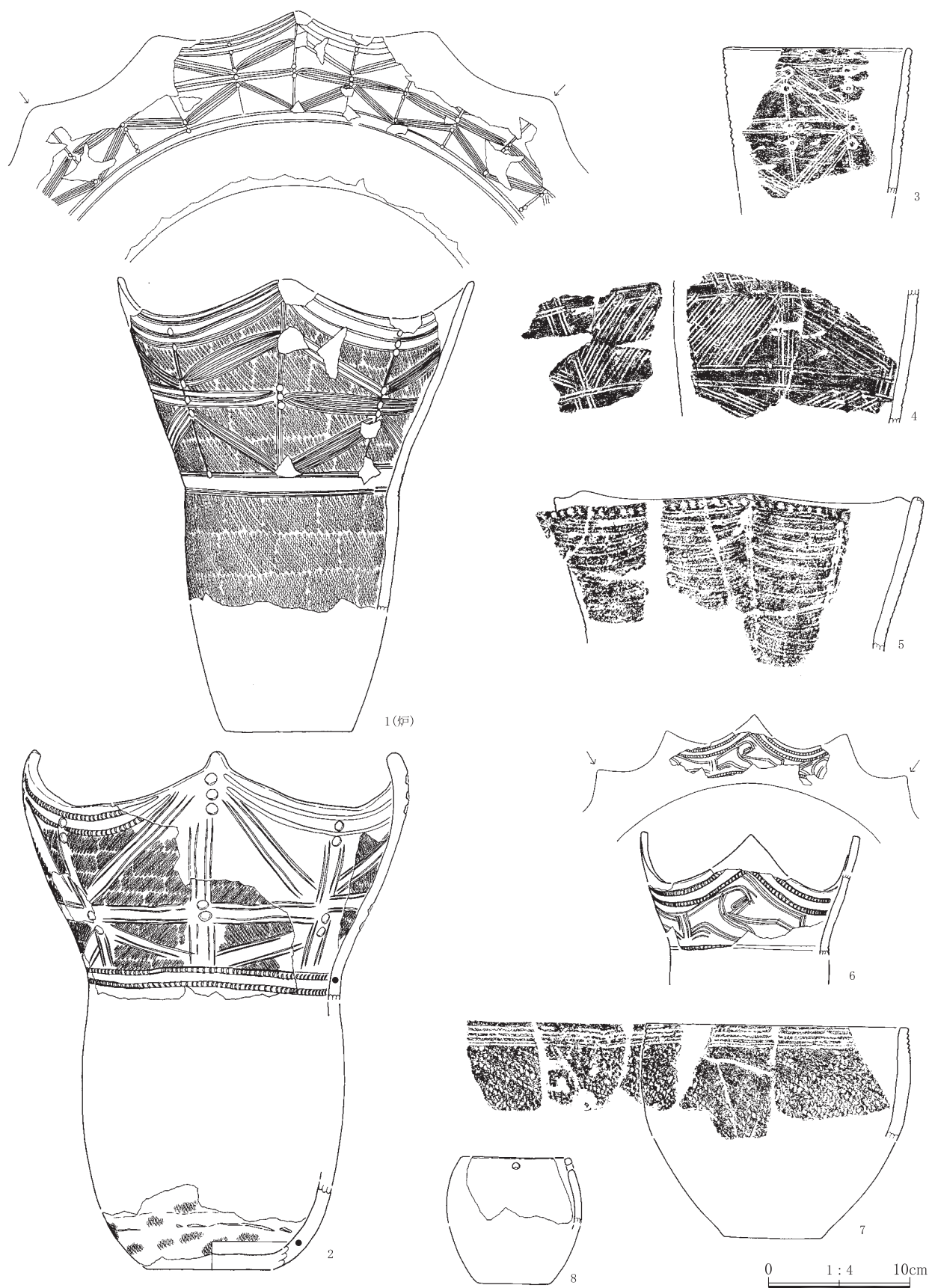
遺物 総数1,710点もの多量の遺物(土器1,396、石器314)が埋没土上位の1~4層を中心に出土し、その大半は床面から浮いた状態であったが、19点(9・10・20・29・50・78・103・107・122・135・137・159・160・163・164・166・170・173)は床面に密着して出土している。土器は、諸磯a式の米字文57点(1~4・22~26・29~31)、肋骨文17点(5・27・28・32~34・36・37・39・40・42・56・58)、波状沈線文4点(43~46)、平行爪形文19点(47~55・59・60・63・79)、平行沈線文6点(7)、変形木葉文12点(6・35・57・61・62)、縦位円形竹管文2点(38・41)、全面縄文23点(9~14・64~78・80・81)、無文の浅鉢4点(8)、構成不明1,075点(15~21・82~140)などがある。この他に、稲荷台式1点、黒浜式54点、諸磯b式2点、大木式系3点、型式不明55点が存在する。尚、24・25・29・

30、32・36・42、43・45、69・72、76・77、82・90、87・88、89・94、93・95~97・101、113・124は各々同一個体である。一方、石器には石鏃3点(141~143)、石槍1点(144)、削器11点(148~155)、打製石斧2点(146)、礫器1点(147)、三角錐形1点(145)、敲石1点(159)、磨り石類33点(162~182)、石皿4点(183~185)、砥石3点(156~158)、剥片149点、礫塊106点などが組成する。これらの遺物の他に、柱穴P1の埋没土中よりコナラ節の炭化材小片が出土している。

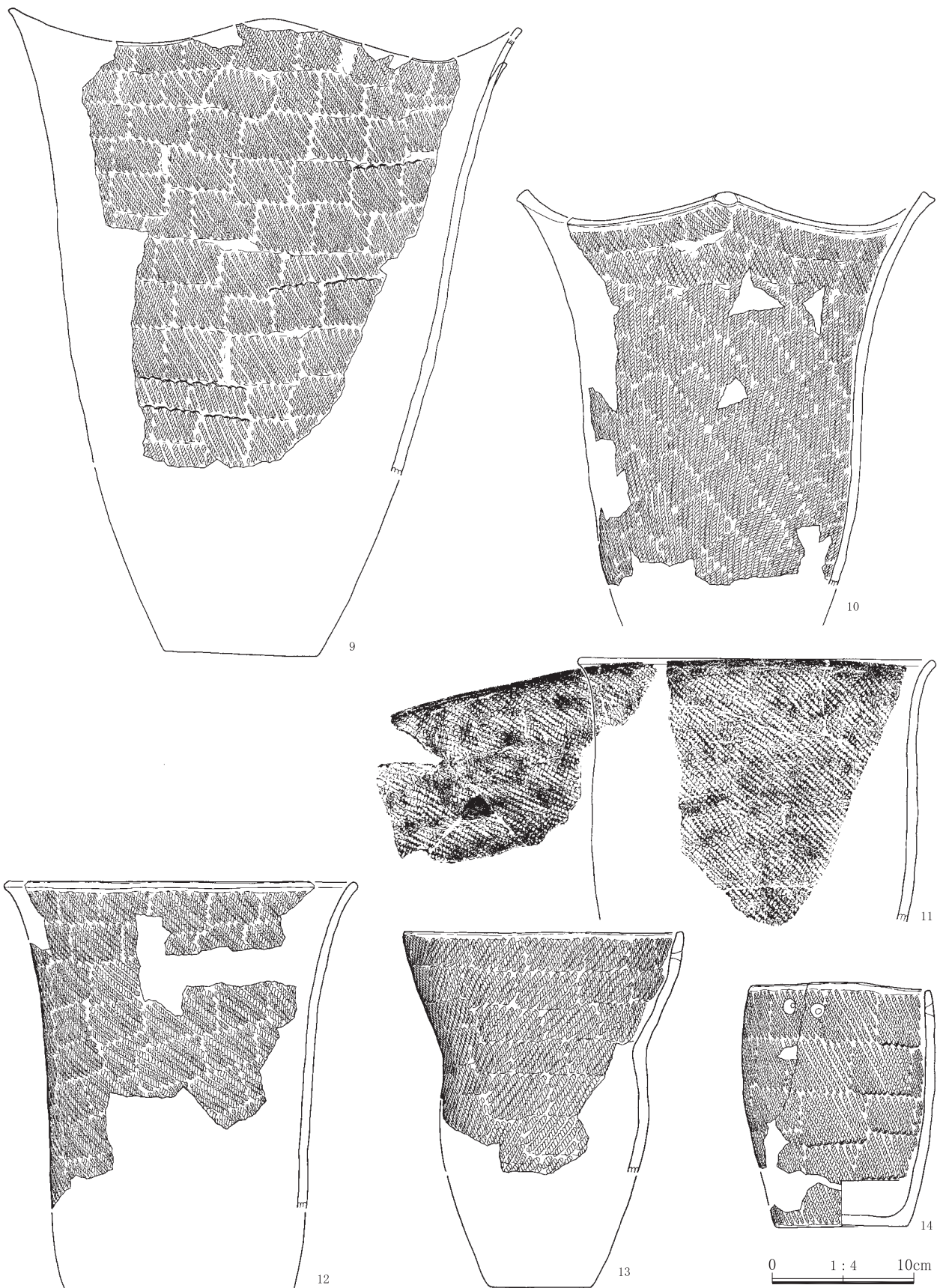
当住居の時期に関しては、炉埋設土器をはじめとする出土土器の大半が、諸磯a式に比定されることから、当該期の所産と想定される。

(観察表:50~52・64・65頁)

その他 周溝は検出されなかった。

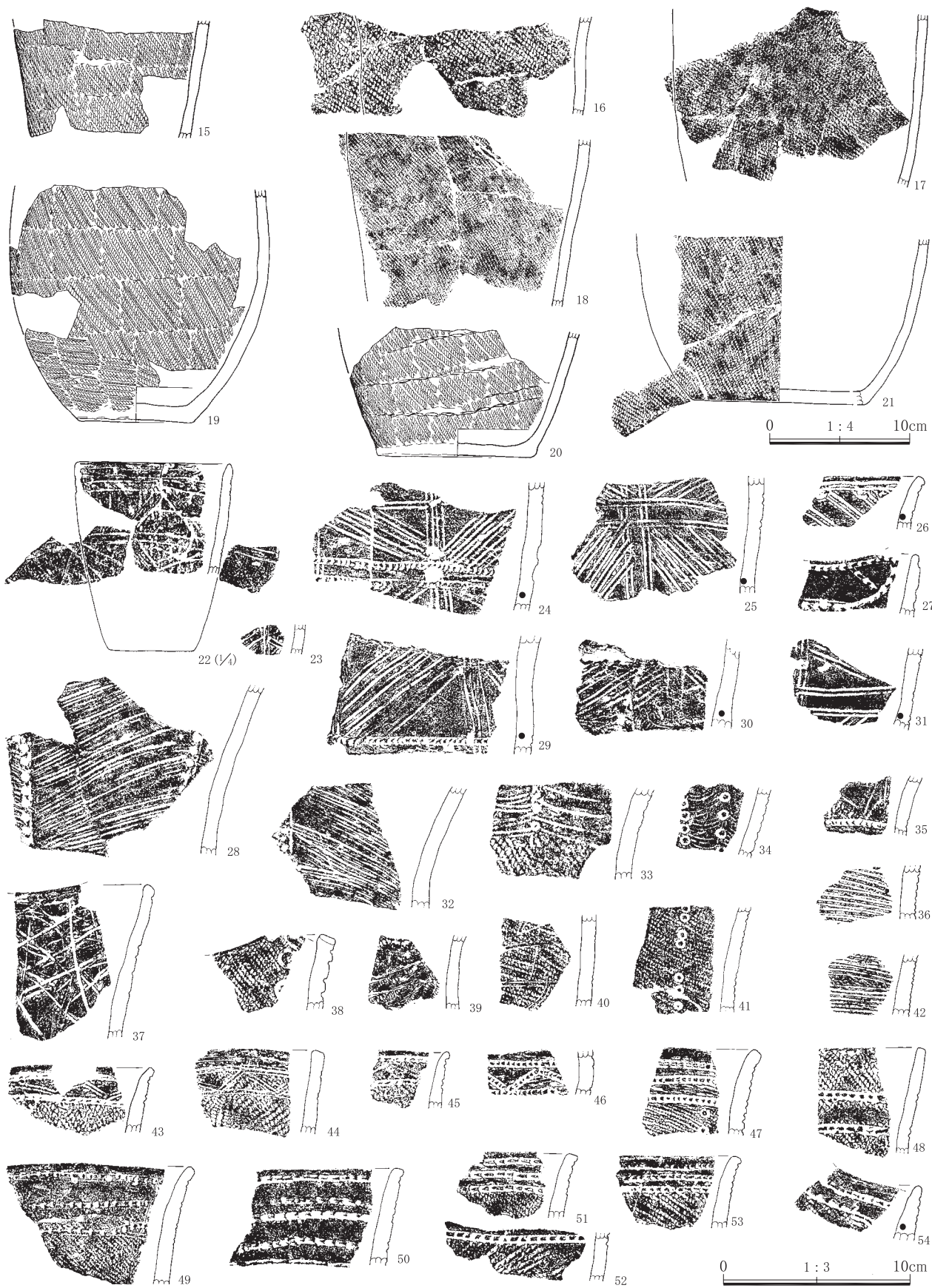


第 305 図 20 号住居出土遺物 (1)

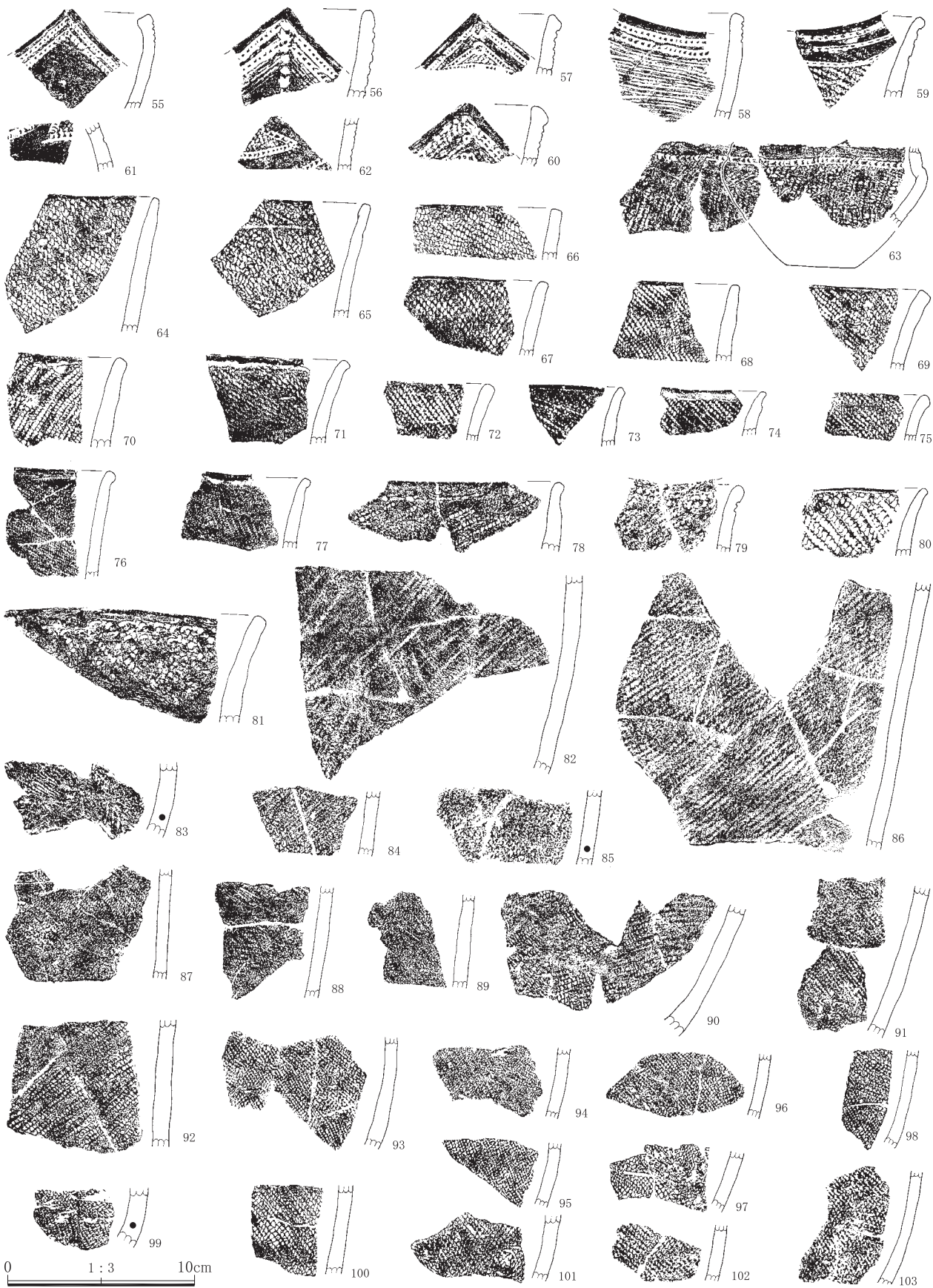


第 306 图 20 号住居出土遺物 (2)

III 今井見切塚遺跡の調査

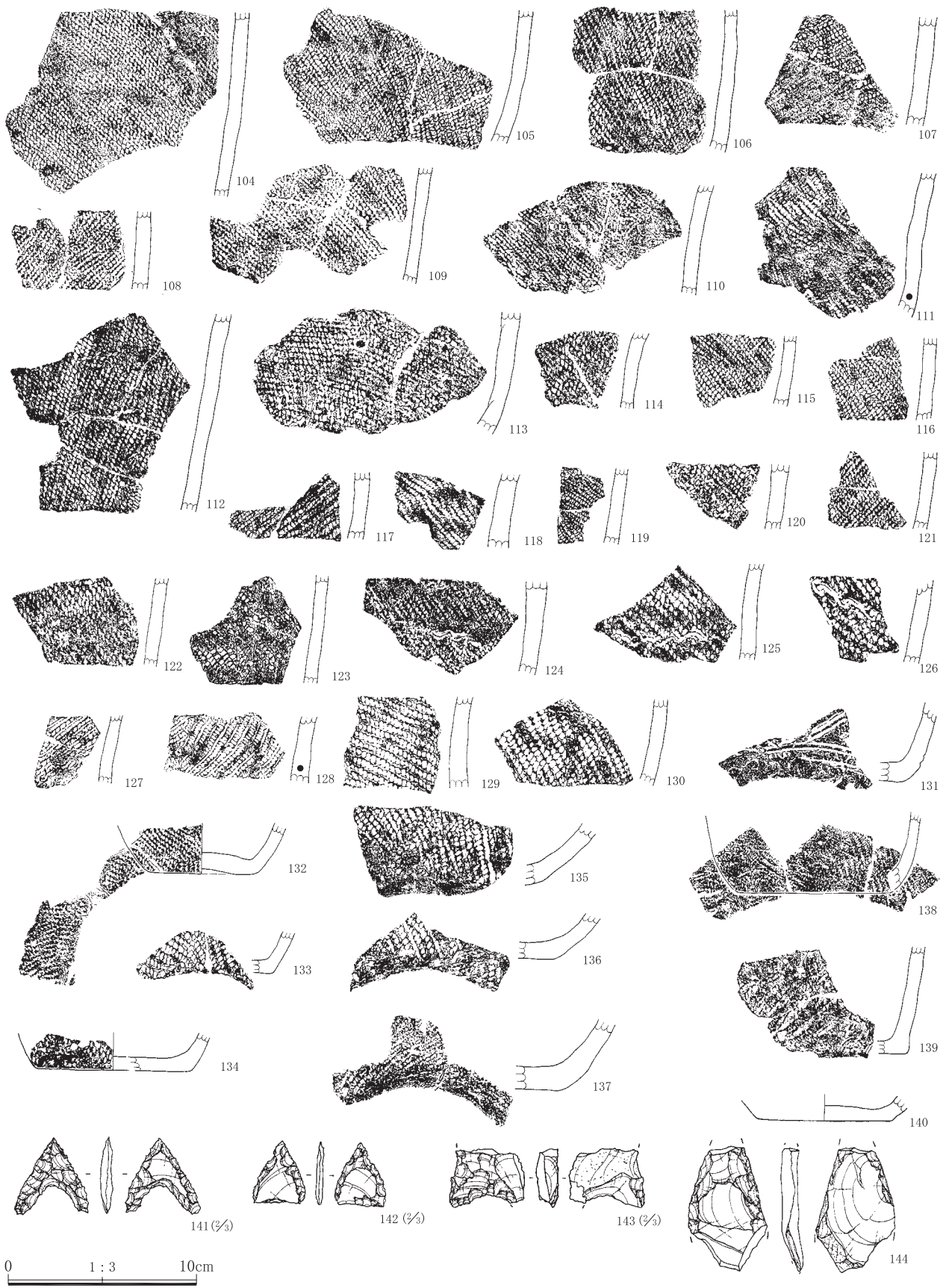


第 307 図 20 号住居出土遺物 (3)

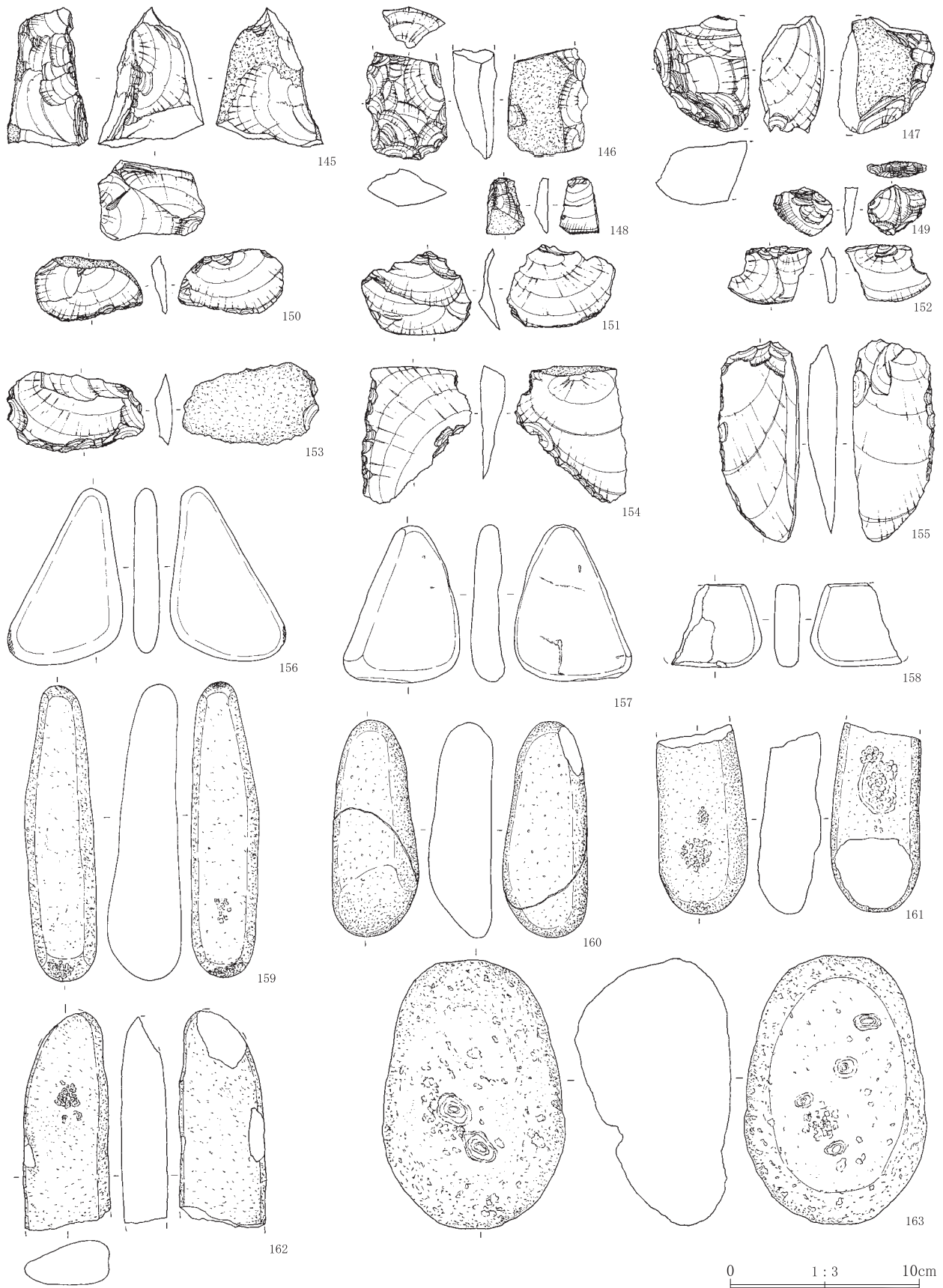


第 308 图 20 号住居出土遺物 (4)

III 今井見切塚遺跡の調査



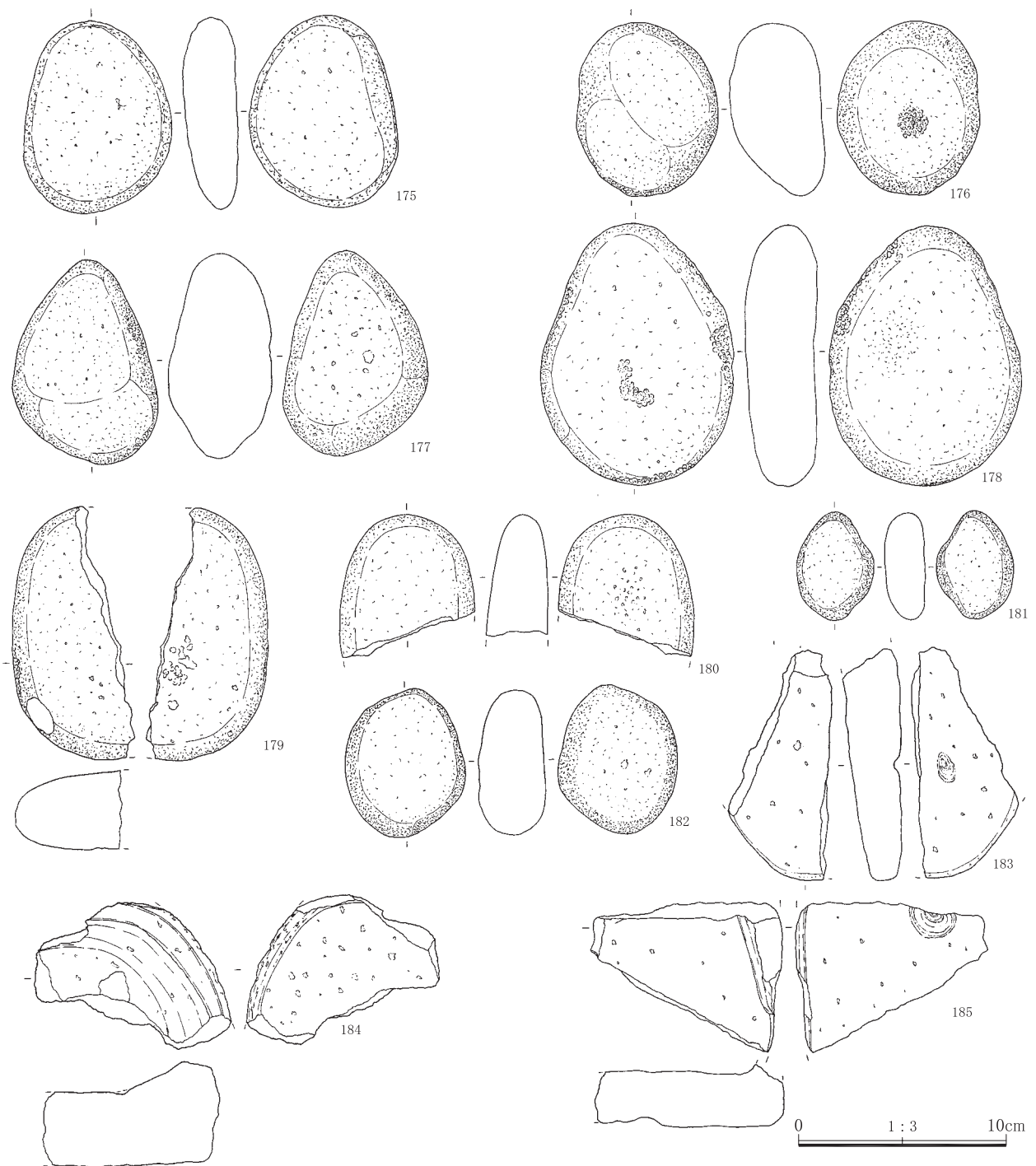
第 309 図 20 号住居出土遺物 (5)



第 310 图 20 号住居出土遺物 (6)



第311図 20号住居出土遺物(7)



第 312 图 20 号住居出土遺物 (8)

● 21号住居

位置 CK-33

写真 PL 128

面積 14.58 m²

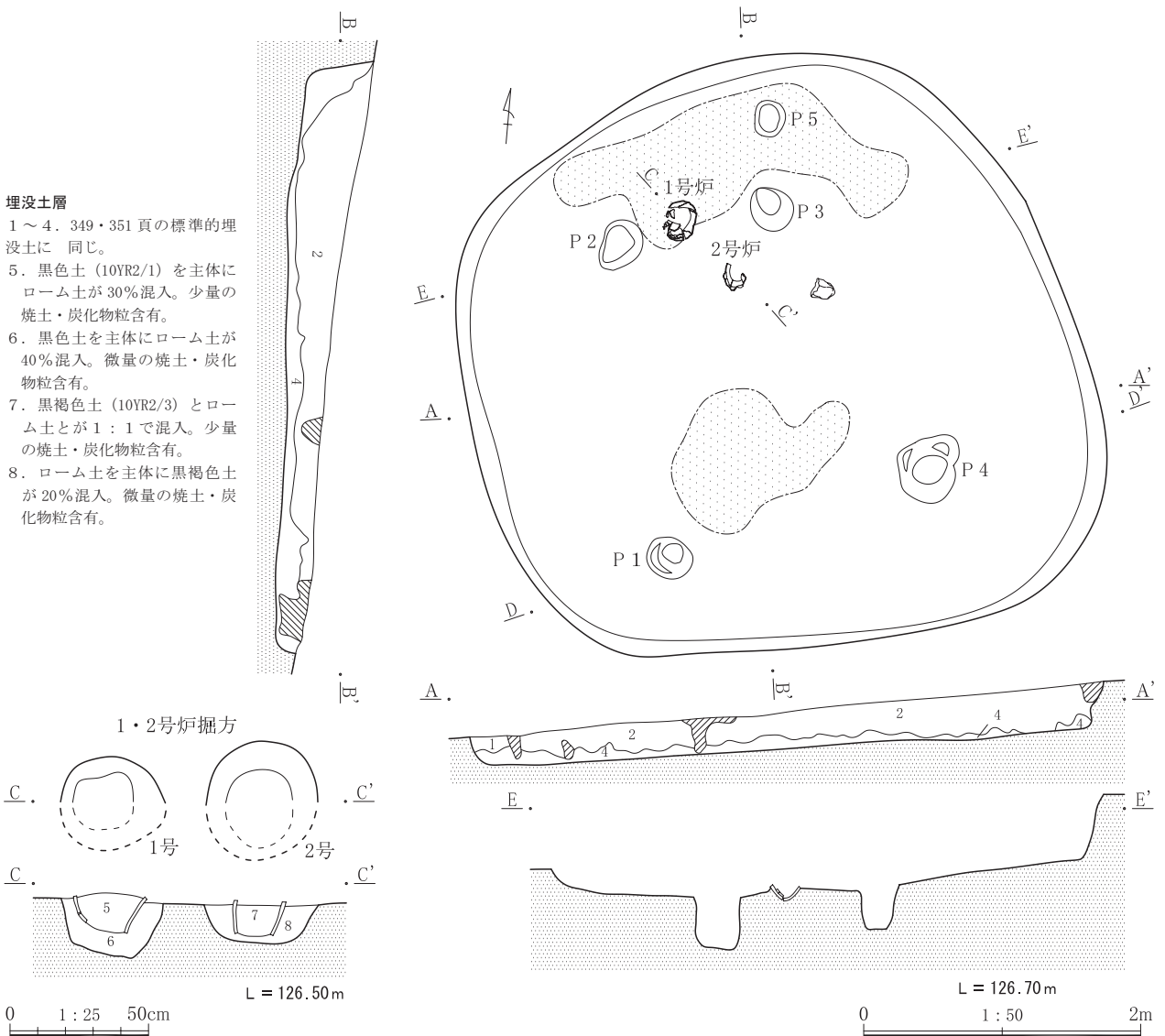
方位 N 75 度 E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つやや歪んだ隅丸正方形を呈し、規模は長辺4.38 m×短辺4.28 m、深さ8～49 cmである。四辺の壁面は約80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、北・東辺はやや外湾気味に張り出している。

炉 北壁に近接して、2基が確認された。1・2号炉ともに、口縁部と体部下半を欠損する深鉢土器(1・2)を埋設し、その掘方は1号が直径38 cm×深さ20 cm、2号が直径40 cm×深さ14 cmの円筒形

状である。両炉ともに土器内には黒褐色土が堆積し、少量の焼土粒を含有する程度であるが、土器には被熱風化が認められる。床面上に僅かに突出する埋設土器上端の比高差から、時間的に1号が2号よりも新しいと判断される。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、5本が確認されているが、P1～P4の4本を支柱とする構造と考えられる。支柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:2.30 m、P2～P3:1.15 m、P3～P4:2.30 m、P4～P1:2.00 mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:32×44 cm、P2:39×37 cm、P3:34×32 cm、P4:51×45 cm、P5:26×32 cmである。P1やP4の



第313図 21号住居(1)

柱穴には、掘り直しの痕跡も認められ、補修あるいは建て替えの存在を示唆している。

床面 勾配約8度の斜面地のローム層（VI・VII層）を最大49cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約26cmの比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。1号炉の周辺や中央部付近を中心にして、敲き床状の硬化面が認められる。

埋没土 厚さ20～50cmの2・4層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数134点の遺物（土器86、石器48）が埋没土上位の2層を中心に出土し、その大半は床面から浮いた状態であったが、5・25・30・32・36・37などは床面に密着して出土している。土器は、諸磯a式の波状沈線文12点（1・3・6・9・11～13・18・19・25）、縦位円形竹管文2点（4）、平行爪形文4点（7・8・14）、肋骨文2点（10）、木葉文7点（5・15・16・22）、構成不明50点（2・17・20・21・23・24・26～28）などがある。この他に、稻荷台式1点、型式不明1点がある。5は浅鉢土器。尚、13・18・19・25は同一個体である。石器は、削器3点（32～34）、打製石斧2点（30・31）、磨製石斧1点（29）、磨り石類4点（35・36）、石皿1点（38）、砥石1点（36）、剥片31点、礫塊5点などが組成する。また、総数4点の黒曜石剥片について、X線回折試験による産地同定を行い、蓼科系2点、高原山系2点という結果を得た。

当住居の時期に関しては、炉埋設土器をはじめとする出土土器が、いずれも諸磯a式に比定されることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：52・65頁）

その他 周溝は検出されなかった。

【21号住居出土遺物の分類一覧】

（土器）

型式別点数

型式	稻荷台	諸磯a	時期不明	総計
合計	2	83	1	86

縄文原体別点数

諸磯a式

分類	2a	2b	2d	5b	7b	14c	18
合計	5	15	1	6	2	5	6

分類別点数

諸磯a式

分類	1類	2類							
種別	不明	a1	b1	b2	b3	c2	d1	d4	不明
合計	1	2	7	3	2	2	1	3	5

3類				4類	
a1	b1	b2	不明	a	不明
2	1	2	2	15	35

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a
A		38
B		2

（石器）

器種別点数

系列	打製系列		使用痕系列			複合技術系列		その他		総計
器種	削器類	打斧	磨石類	石皿	砥石	磨製石斧	剥片	礫塊		
合計	3	2	4	1	1	1	31	5	48	

分類別点数

搔器・削器

分類	1類	2類
合計	2	1

打製石斧

分類	1類	2類
合計	1	1

石皿

分類	5類
合計	1

磨製石斧

分類	4類
合計	1

磨石類

分類	1類	4類	5類	
形態	ac	a	a	b
合計	1	1	1	1

砥石

分類	1類
合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器

コード	1
点数	3
重量	79.8

打製石斧

コード	1	9
点数	1	1
重量	65	115

磨石類

コード	4	34
点数	3	1
重量	595	23.9

石皿

コード	4
点数	1
重量	151

砥石

コード	9
点数	1
重量	32

磨製石斧

コード	5
点数	1
重量	7.2

剥片

コード	1	2	3	7	12
点数	17	6	1	3	4
重量	179	18.1	11.4	23.2	9.3

礫塊

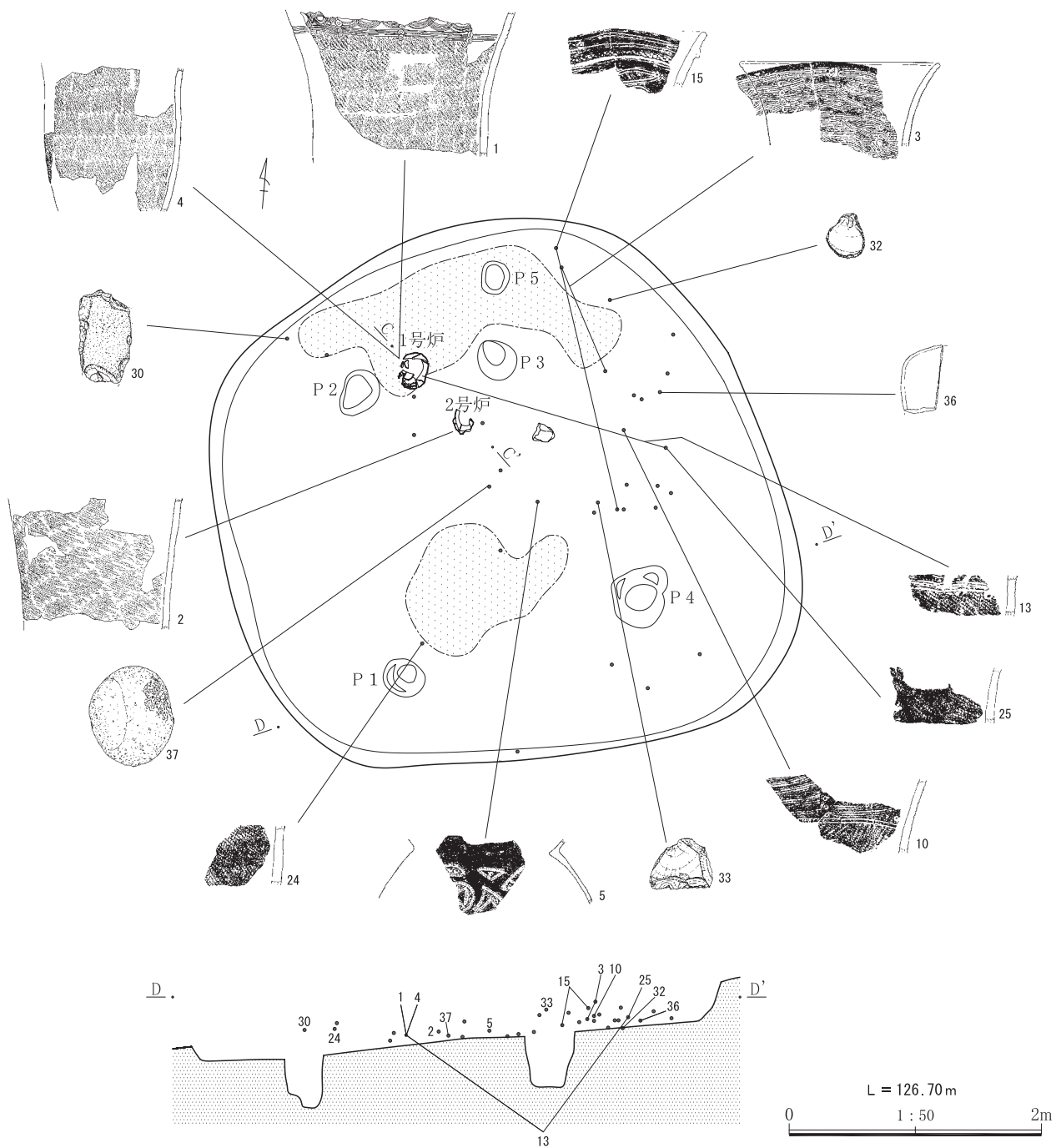
コード	4	34
点数	2	3
重量	1037	11.9

礫塊の被熱状況

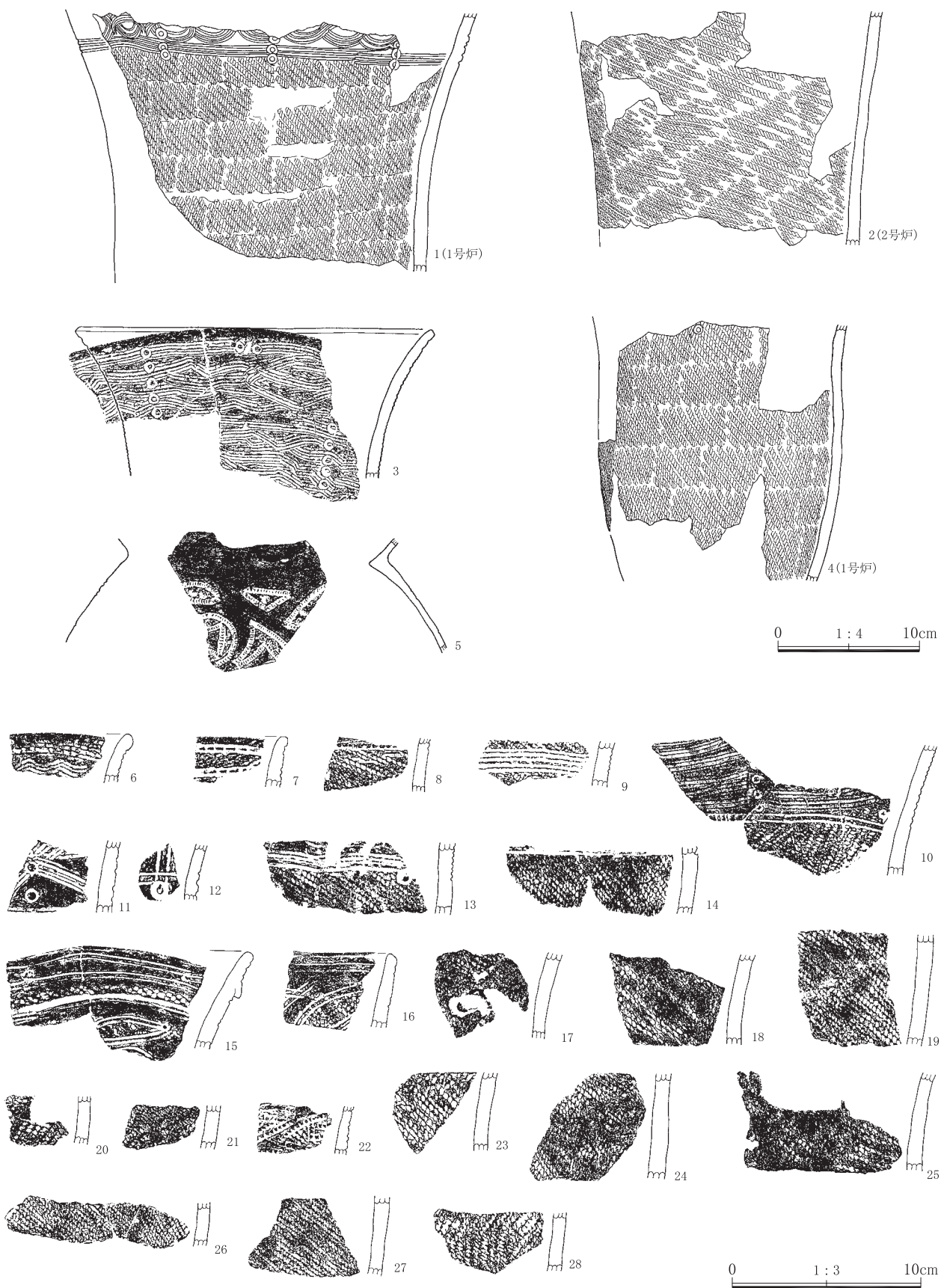
分類	1	2	総計
合計	1	4	5

被熱礫の石材別点数と重量

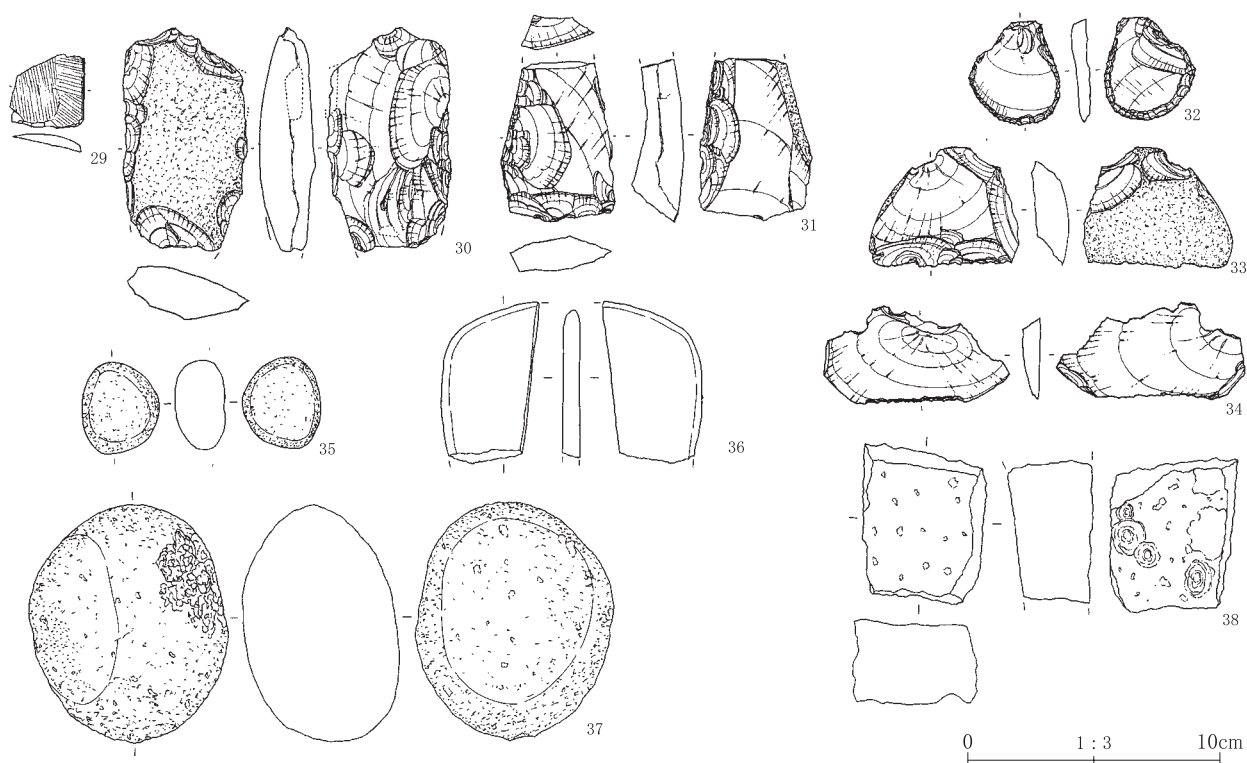
コード	4
点数	1
重量	112



第314図 21号住居(2)



第315图 21号住居出土遺物(1)



第316図 21号住居出土遺物(2)

● 22号住居

位置 CT-78

写真 PL 130

面積 6.80 m²

方位 N 69度E

重複 北西隅で時期不明の住居と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺 3.01 m × 短辺 2.87 m、深さ 9 ~ 28 cm である。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部と北壁に近接した 2 箇所で確認された。1 号炉は体部下半を欠損する深鉢土器(1)を埋設し、その掘方は直径 30 cm × 深さ 20 cm の円筒形状である。また、土器の北・西側を 2 点の磨り石類(2・3)により圍繞している。土器内の埋設土に焼土はほとんど存在しないが、土器には被熱風化が認められる。2 号炉は不定形状の地床炉であり、長径 74 × 短径 60 cm の範囲に焼土の散布が認められる。尚、各炉の時間的な先後関係は不明。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、5 本が確認されている。P2 - P4 - P5 の位置関係から、住居外形とほぼシンメトリーに 4 本の支柱が配置される構造と想定され、北西隅での支柱検出を試みたが、基盤のローム層に攪乱があり、その存在を確認することができなかった。主な柱穴の芯心間の距離は、P2 ~ P4 : 1.70 m、P4 ~ P5 : 1.40 m である。また、各柱穴の規模(径 × 深さ)は、P1 : 28 × 27 cm、P2 : 21 × 22 cm、P3 : 25 × 25 cm、P4 : 30 × 27 cm、P5 : 33 × 30 cm である。

床面 勾配約 5 度の斜面地のローム層(VI層)を最大 28 cm 掘り込んで床面を構築する。傾斜や凹凸面の少ない平坦な床面であり、炉の周辺や支柱の内側を中心にして、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められる。

埋設土 厚さ 15 ~ 30 cm の 2 ~ 4 層がレンズ状に堆積し、自然埋設状況を示している。

遺物 僅か 20 点の遺物(土器 16、石器 4)が埋設土上位の 2 層を中心に出土しているが、第 318 図に

掲載した炉埋設土器（1）や石器2点（2・3）を除いて、全て床面から浮いた状態であった。土器は、炉埋設土器をはじめとする全面縄文7点（1）の他に、構成不明9点などがあるが、いずれも少破片のために掲載していない。石器は磨り石類2点（1・2）と礫塊2点が組成するのみで、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、炉埋設土器を含めて諸磯a土器が主体的であることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：52・65頁）

その他 周溝は検出されなかった。

【22号住居出土遺物の分類一覧】

（土器）

型式別点数

型式	諸磯a	総計
合計	16	16

分類別点数

諸磯a式

分類	4a類	4
合計	7	9

縄文原体別点数

諸磯a式

分類	5b
合計	7

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a
A		7

（石器）

器種別点数

系列	使用痕系列	その他	総計
器種	磨石類	礫塊	
合計	2	2	4

分類別点数

磨石類

分類	2類
形態	abc
合計	2

石材別の点数と重量

磨石類

コード	4
点数	2
重量	1280

礫塊

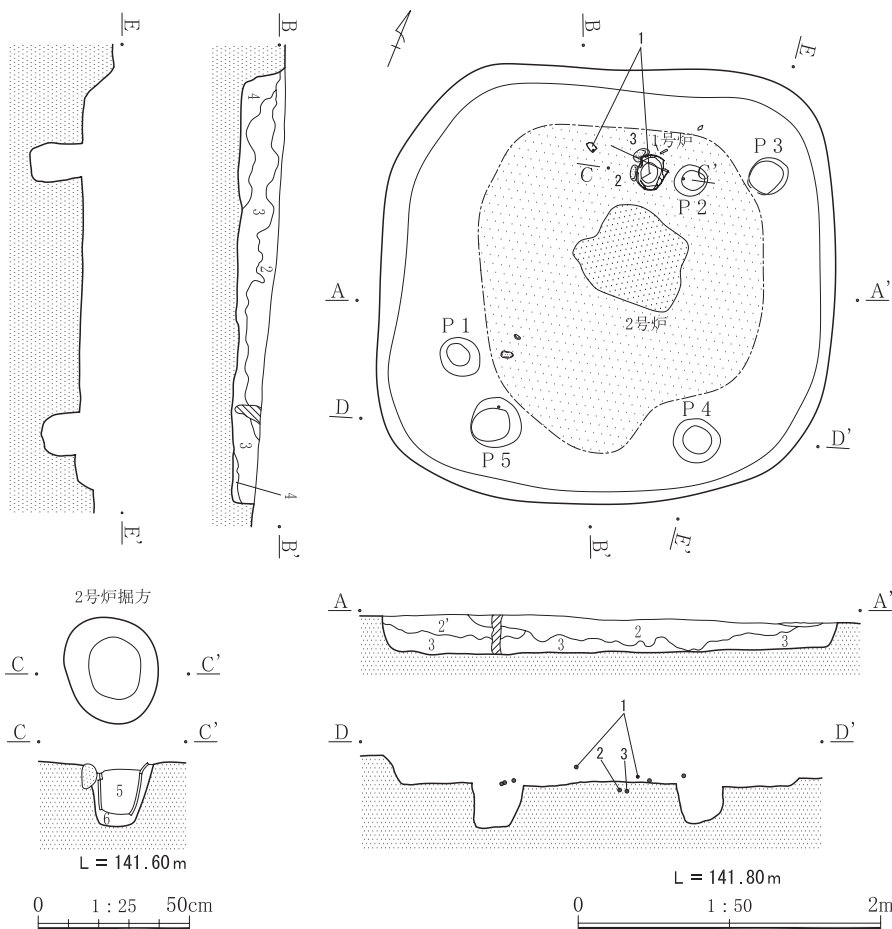
コード	4
点数	2
重量	201

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	1	1	2

被熱礫の石材別点数と重量

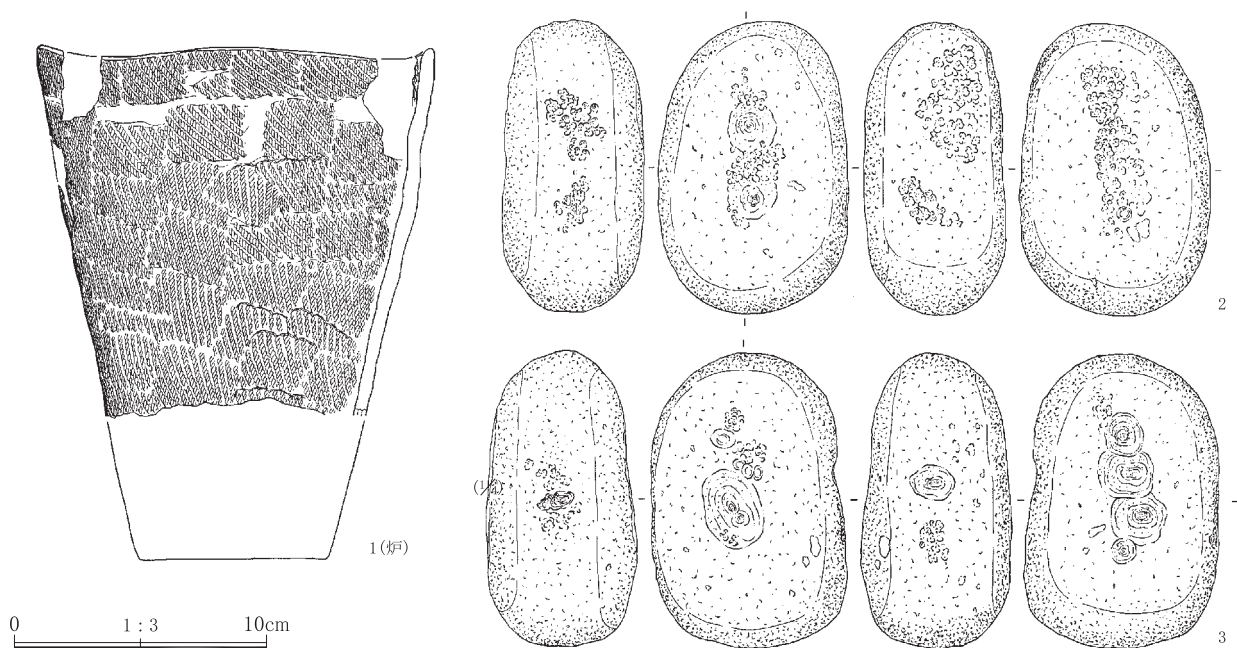
コード	4
点数	1
重量	126



埋没土層

- 1～4. 349・351頁の標準的埋没土と同じ。
- 2'. 黒褐色土（10YR2/3）とローム土とが1：1で混入。少量の炭化物粒含有。
- 5. 暗褐色土（10YR3/3）を主体にローム土が5%混入。焼土は見られず、少量の炭化物粒含有。
- 6. ローム土の埋填層で、焼土・炭化物粒を含まない。

第317図 22号住居



第318図 22号住居出土遺物

● 23号住居

位置 DC -49

写真 PL 131・132

面積 約 15 m²

方位 N 6 度W

重複 西壁側で時期不明の225号土坑を切っている。

形状 斜面地を掘り込むために、東辺の立ち上がりを確認できなかったが、等高線方向に並行して南北に長軸を持つ隅丸長形状を呈すると推定される。規模は長辺 4.53 m × 短辺約 3.8 m、深さ 4 ~ 24 cmである。壁面は約 70 度前後の角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

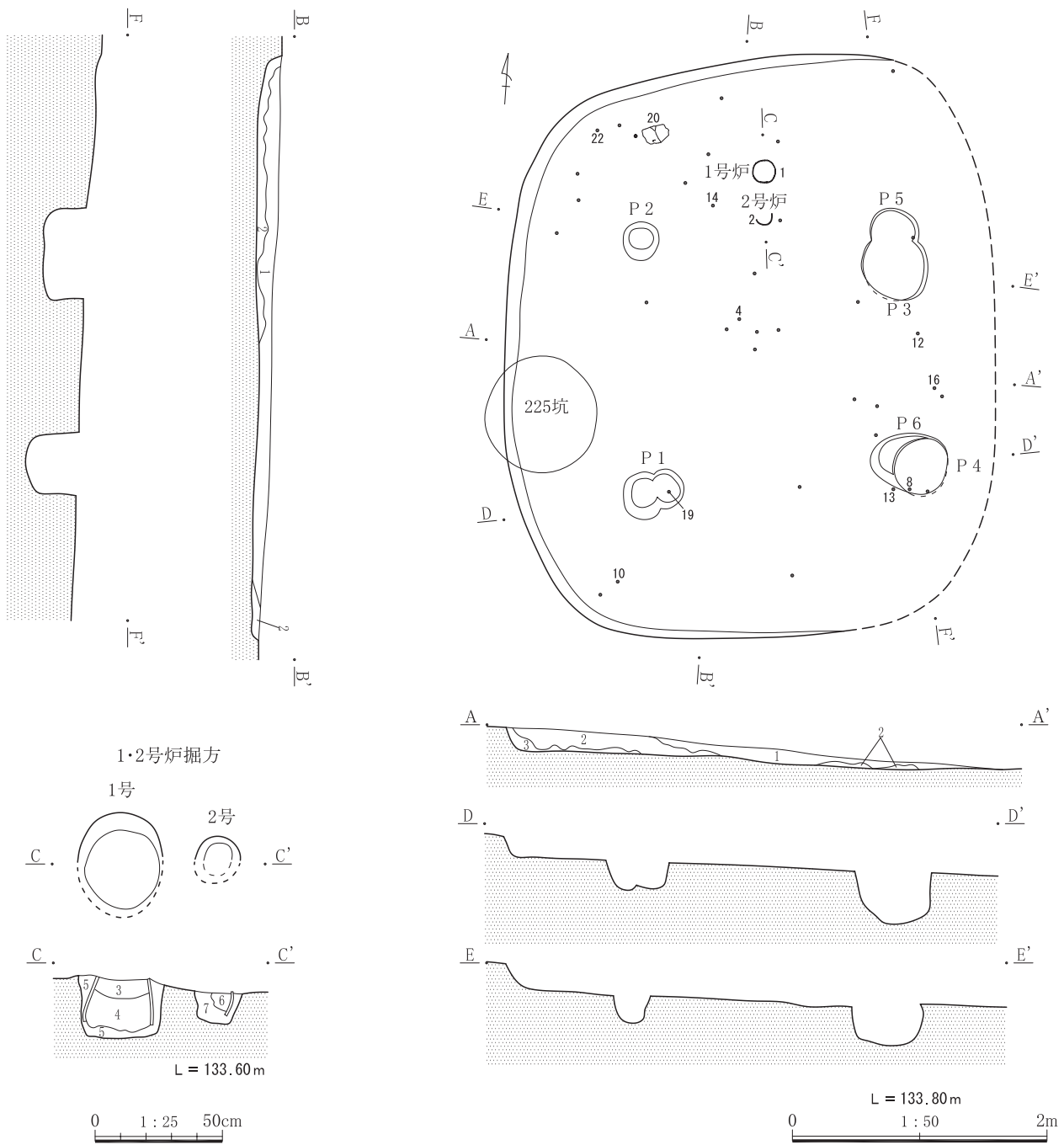
炉 北壁に近接して2基が確認された。1号炉は体部下半を欠損する深鉢土器(1)を逆位に埋設し、その掘方は直径 34 cm × 深さ 24 cmである。2号炉は口縁部と体部下半を欠損する深鉢土器(2)の半身を埋設し、その掘方は直径 17 cm × 深さ 13 cmと小さい。土器内の埋設土に焼土はほとんど存在しないが、土器には被熱風化が認められる。床面上に僅かに突出する埋設土器上端の比高差から、時間的に1号が2号よりも新しいと判断される。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、掘り直しの痕跡を含めて6本が確認されているが、基本的に4本

を主柱とする構造であり、P2を除いた各柱穴には補修あるいは建て替えに伴う再敷設の痕跡が認められる。主柱穴の芯心間の距離は、P1 ~ P2 : 2.00 m、P2 ~ P5 : 2.00 m、P5 ~ P4 : 1.90 m、P4 ~ P1 : 2.20 mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1 : 39 × 24 cm、P2 : 30 × 22 cm、P3 : 50 × 32 cm、P4 : 48 × 43 cm、P5 : 39 × 35 cm、P6 : 40 × 37 cmである。
床面 勾配約5度の斜面地のローム層(VI層)を最大24 cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約17 cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋設土 厚さ20 cm前後の1・2層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

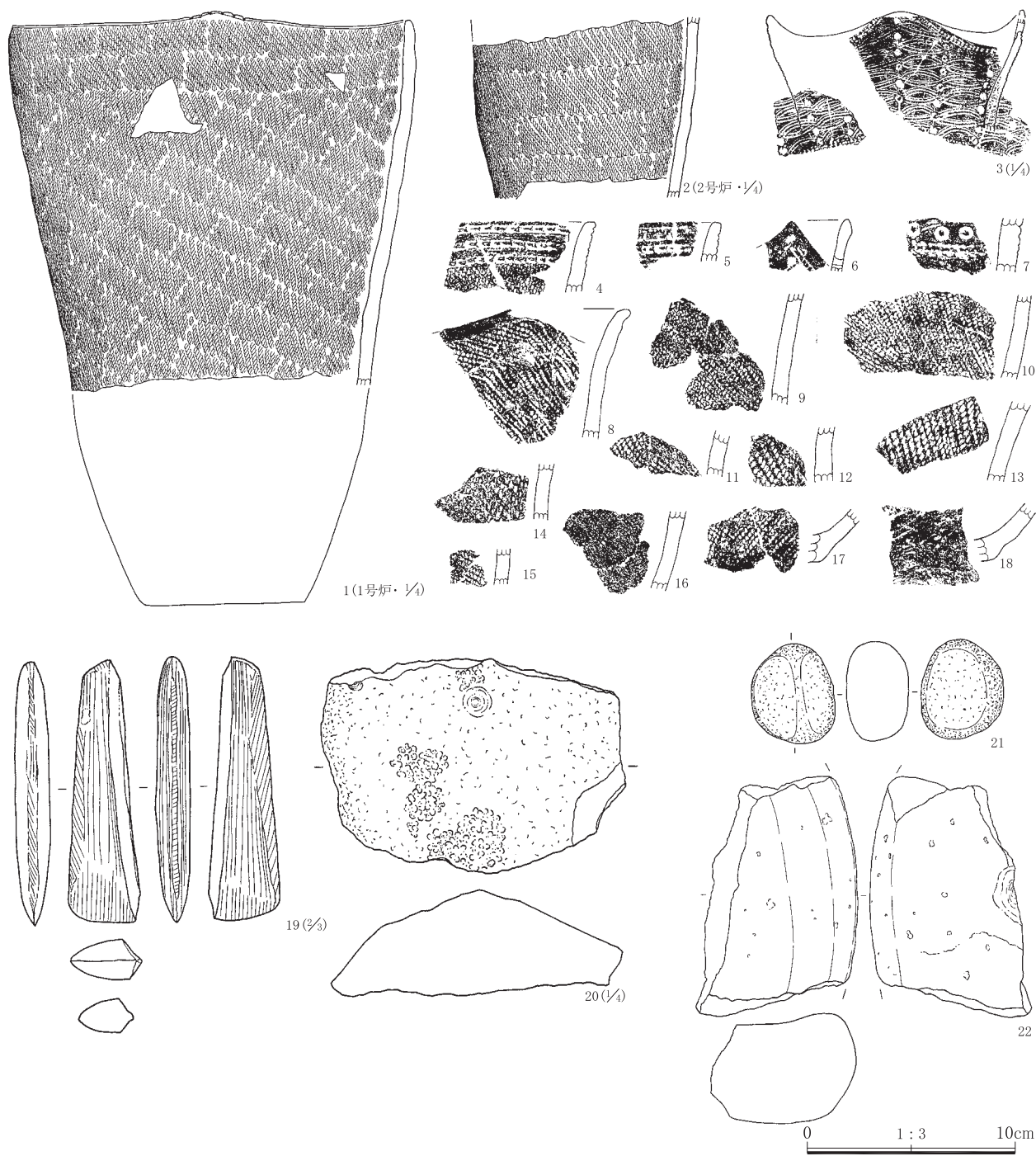
遺物 総数110点の遺物(土器84、石器26)が埋設土上位の1・2層を中心に出土し、その大半は床面から浮いた状態であったが、13・14・16・20・22などは床面に密着して、また19は柱穴P1の埋設土中より出土している。土器は炉埋設土器を除いて小破片のみであり、諸磯a式の肋骨文5点(3)、縦位円形竹管文1点(6)、平行爪形文10点(4・5・7・



埋没土層

1. 黒色土 (10YR2/1) と暗褐色土 (10YR3/3) とが 1 : 1 で混入。
少量の炭化物粒含有。
2. 暗褐色土を主体にローム土が 30% 混入。少量の炭化物粒含有。
3. ローム土を主体に褐色土が 10% 混入。微量の炭化物粒含有。
4. 黒色土を主体に暗褐色土が 20% 混入。多量の炭化物粒含有。
5. 暗褐色土を主体にローム土が 10% 混入。少量の炭化物粒含有。
6. 暗褐色土を主体に黒色土が 30% 混入。少量の炭化物粒含有。
7. 暗褐色土とローム土とが 1 : 1 で混入。少量の炭化物粒含有。

第 319 図 23 号住居



第320図 23号住居出土遺物

9・15)、木葉文1点、全面縄文2点(1・8)、沈線文5点、無文2点(18)、構成不明31点(2・10～14・16・17)などがある。この他に、稻荷台式1点、花積下層式11点、型式不明15点がある。尚、4・9・15は同一個体である。石器は、磨り石類1点(21)、石皿2点(22)、多孔石1点(20)、剥片10点、礫塊11点、それに擦り切り技法による磨製石斧的な垂飾

1点(19)などが組成するのみで、器種・数量ともに乏しい。

当住居の時期に関しては、炉埋設土器を含めて諸磯a式土器により構成されることから、当該期の所産と想定される。

(観察表:52・65頁)

その他 周溝は検出されなかった。

【23号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稻荷台	花積下層	諸磯a	時期不明	総計
合計	1	11	57	15	84

分類別点数

花積下層式 諸磯a式

分類	2類	2類					3類		4類	
		種別	a1	c1	d2	d4	不明	不明	a	c
合計	11	5	1	9	1	5	1	12	2	21

縄文原体別点数

諸磯a式

分類	2b	5b	7a	7b	17	18
合計	13	2	2	1	2	10

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a
A		29
B		1

(石器)

器種別点数

系列	使用痕系列	複合技術系列		その他		総計	
器種	磨石類	石皿	多孔石	石製品	剥片		礫塊
合計	1	2	1	1	10	11	26

分類別点数

磨石類

分類	2類
形態	a
合計	1

石皿

分類	5類
合計	2

多孔石

分類	5類
形態	bc
合計	1

石材別の点数と重量

磨石類

コード	4
点数	1
重量	59.5

石皿

コード	4
点数	2
重量	1324

多孔石

コード	4
点数	1
重量	2020

石製品

コード	42
点数	1
重量	13.6

剥片

コード	1	2
点数	8	2
重量	99.2	1.7

礫塊

コード	4	9	39
点数	9	1	1
重量	1482	4.4	841

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	5	6	11

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4
点数	5
重量	1081

● 24号住居

位置 C I -39

写真 P L 133

面積 13.20 m²

方位 N 89 度 E

重複 床面中央部で時期不明の211号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。当住居廃絶後に211号土坑が掘り込まれている可能性もある。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺4.50 m×短辺3.83 m、深さ27～73 cmである。四辺の壁面は約70～80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、南辺を除く各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 北壁に近接して、1基が確認された。口縁部

と体部下半を欠損する深鉢土器(1)を埋設し、その掘方は直径22 cm×深さ13 cmの円筒形状である。土器内の埋没土は微量の焼土を含み、土器には被熱風化が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、6本が確認されているが、P1～P4の4本を支柱とする構造と考えられる。支柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:1.80 m、P2～P3:1.60 m、P3～P4:1.10 m、P4～P1:1.70 mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:34×37 cm、P2:34×56 cm、P3:28×30 cm、P4:26×33 cm、P5:43×38 cm、P6:31×33 cmである。

床面 勾配約10度の斜面地のローム層(VI・VII層)を最大74 cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約22 cmの比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。炉の周辺を中心にして、若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

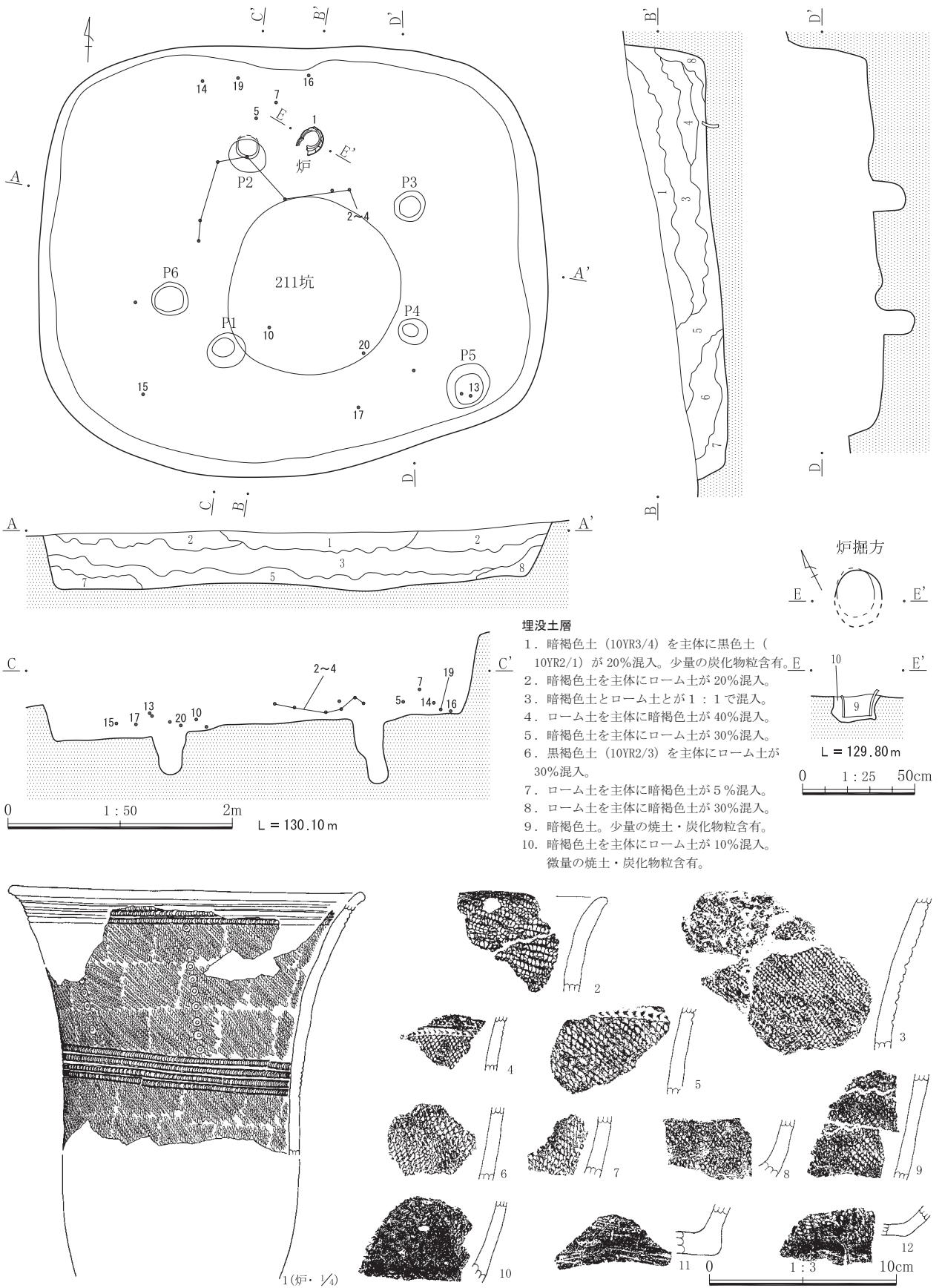
埋没土 厚さ30～80 cmの1～8層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数53点の遺物(土器34、石器18)が埋没土上位の1～3層を中心に出土したが、床面に密着したものは少なく(16・19)、その大半は床面から浮いた状態であった。土器は炉埋設土器を除いて小破片のみであり、縦位円形竹管文8点(1・3)、平行爪形文2点(4・5)、全面縄文2点(2)、構成不明22点(6～12)などがある。また石器は、削器3点(14～16)、礫器1点(13)、石核1点(18)、ハンマー1点(19)、磨り石類2点(17・20)、剥片8点、礫塊2点などが組成する。

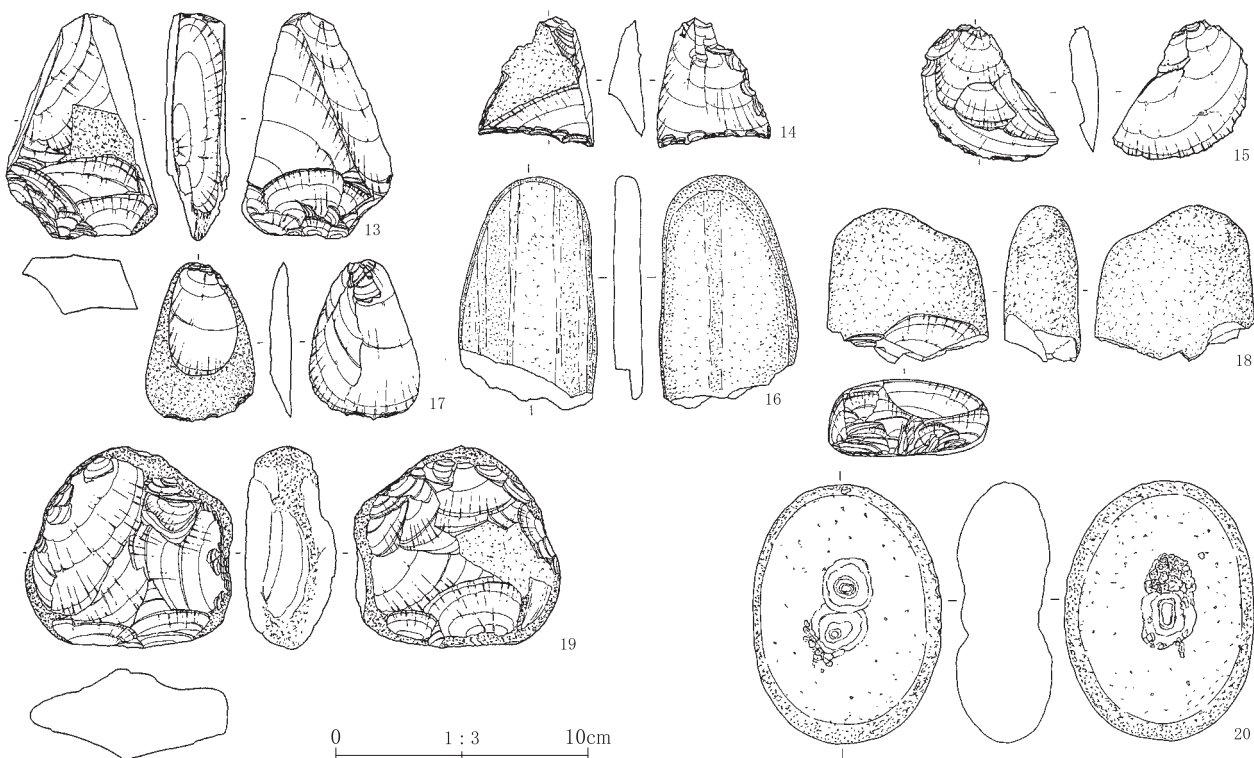
当住居の時期に関しては、炉埋設土器を含めて諸磯a式土器で構成されることから、当該期の所産と想定される。(観察表:52・53・65頁)

その他 周溝は検出されなかった。

III 今井見切塚遺跡の調査



第 321 図 24 号住居と出土遺物



第 322 図 24 号住居出土遺物

【24号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯a	総計
合計	34	34

分類別点数
諸磯a式

分類	2類	4類		
種別	c2	d4	a	不明
合計	8	2	10	14

縄文原体別点数

諸磯a式

分類	2b	5b	7b	17
合計	9	1	8	2

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a
A		18
B		1
F		1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他				総計	
器種	削器類	礫器	磨石類	敲石	剥片	石核	自然石	
合計	3	1	2	1	8	1	2	18

分類別点数

搔器・削器

分類	2類
合計	3

磨石類

分類	2類	
形態	abc	不明
合計	1	1

敲石

分類	4類
形態	c
合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器

コード	1	7
点数	1	2
重量	27.1	55.3

礫器

コード	16
点数	1
重量	143

磨石類

コード	4	14
点数	1	1
重量	386	96.8

敲石

コード	9
点数	1
重量	288

剥片

コード	1	2	3	9
点数	5	1	1	1
重量	103	2.7	52.3	12.3

石核

コード	1
点数	1
重量	171

● 25 号住居

位置 CS-37

写真 PL 134・135

面積 20.02 m²

方位 N 59 度 E

重複 南半部で諸磯 b 式期および時期不明の 60・215 号土坑を切っている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸正形状を呈し、規模は長辺 4.98 m × 短辺 4.75 m、深さ 24 ~ 88 cm である。四辺の壁面は約 80 度前後の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 北壁に近接して、2 基が確認された。1・2 号炉ともに、口縁部と体部下半を欠損する深鉢土器 (1・2) を埋設し、その掘方は 1 号が直径 34 cm × 深さ 15 cm、2 号が直径 40 cm × 深さ 15 cm の円筒形状である。各土器内の埋設土は少量の焼土を含み、土器には被熱風化が認められる。床面上に僅かに突出する埋設土器上端の比高差から、時間的に 1 号が 2 号よりも新しいと判断される。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、10 本が確認されているが、基本的に住居外形とシンメトリーに 4

III 今井見切塚遺跡の調査

本支柱を配置する構造と考えられる。P1 や P4 周辺の柱穴は、修復や建て替え時に再敷設されたものであろう。主な柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:3.10 m、P2～P4:2.50 m、P4～P5:2.20 m、P5～P1:2.40 mである。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1:34×39 cm、P2:37×77 cm、P3:30×47 cm、P4:28×41 cm、P5:36×56 cm、P6:53×60 cm、P7:34×46 cm、P8:36×84 cm、P9:23×69 cm、P10:29×72 cmである。

床面 勾配約8度の斜面地のローム層（VI～VIII層）を最大88 cm掘り込んで床面を構築する。傾斜や凹凸面は少ないが、壁際に比べて床面中央部が約15 cmほど窪んでいる。また、炉の周辺や支柱の内側を中心にして、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められるが、当該床面は2号炉に伴う古段階のものとは判断される。1号炉の新段階の床面は、明確に把握できなかったものの、埋設土器上端の高さから見て2号炉段階よりも5 cm前後上位であることが推定される。

埋設土 厚さ30～90 cmの1～5層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数305点の多量の遺物（土器241、石器64）が埋設土中位の1層下位～3層を中心に出土したが、床面に密着したものは少なく（8・9・40・44・50）、その大半は床面から浮いた状態であった。土器は炉埋設土器を除いて小破片が多いが、主なものとしては諸磯b式の波状・渦巻状爪形文5点（1・8・33）・波状・渦巻状沈線文8点（27・28・32）・浮線文1点（34）・不明沈線文4点・構成不明1点（2）や、北白川下層式1点（17）、それに諸磯a式の肋骨文1点（11）・波状沈線文19点（7・10・14～16）・木葉文14点（4）・変形木葉文1点（13）・縦位円形竹管文1点（12）・構成不明140点（3・5・6・9・18～26）が認められある。この他に、黒浜式14点（29～31・35～38）、稲荷台式5点、花積下層式6点、型式不明3点などがある。尚、22・23は同一個体である。石器は、石鏃3点（39～41）、削器1点

【25号住居出土遺物の分類一覧】

（土器）

型式別点数

型式	稲荷台	花積下層	黒浜	諸磯a	諸磯b	時期不詳	総計
合計	5	6	14	194	19	3	241

分類別点数

花積下層式		黒浜式			諸磯b式						
分類	2類	分類		2a類	3類	分類		1類		2類	4類
合計	6	合計		3	11	種別	c1	c2	不明	b1	a
合計	6	合計		3	11	合計	8	5	4	1	1

諸磯a式

分類	2類					3類			4類		5類
種別	a2	b1	b2	b3	c2	不明	a1	b1	不明	a	不明
合計	1	1	17	1	1	17	12	1	2	42	98

縄文原体別点数

黒浜式		諸磯a式										
分類	12c	分類		2a	2b	3a	7a	7b	12b	12c	17	18
合計	8	合計		28	21	13	1	1	5	3	1	3

諸磯b式

分類	2a	2b	5b	18
合計	5	7	1	2

胎土別点数

胎土	型式	黒浜	諸磯a	諸磯b
A		—	71	15
B		—	5	—
C		8	—	—
D		—	1	—

（石器）

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列		複合技術系列		その他		総計
器種	石鏃	削器類	打斧	磨石類	石皿	磨製石斧	剥片	礫塊		
合計	3	1	5	4	1	2	40	8		64

分類別点数

石鏃		搔器・削器		打製石斧						
分類	1類	2類	分類		2類	3類	8類			
合計	1	2	合計		1	合計		2	1	2

磨石類

分類	1類	2類	3類	
形態	a	a	abc	a
合計	1	1	1	1

石皿

分類	5類
合計	1

磨製石斧

分類	1類
合計	2

石材別の点数と重量

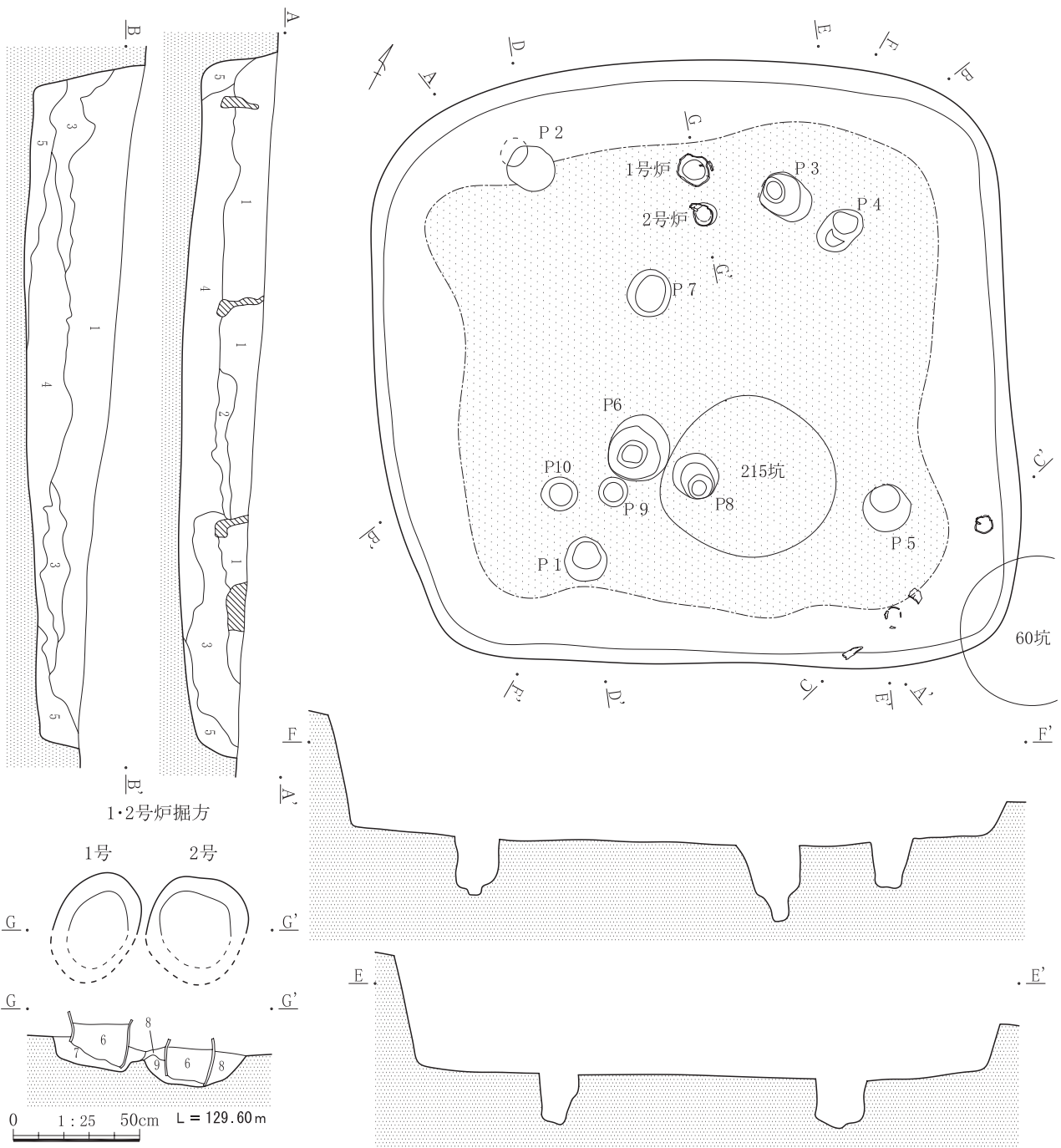
石鏃			搔器・削器			打製石斧		
コード	点数	重量	コード	点数	重量	コード	点数	重量
	1	7		1	31.8		1	255
	2	1.2		1			5	
	2.6							
磨石類			石皿			磨製石斧		
コード	点数	重量	コード	点数	重量	コード	点数	重量
	4	19		33	42.4		10	748
	3	1		1			2	
	316	411						
剥片			礫塊					
コード	点数	重量	コード	点数	重量			
	1	2		4	34			
	2	3		5	3			
	3	4		5	3			
	7	9		5	3			
	26	24.9		5	3			
	3	349		5	3			
	4	56.9		5	3			
	5	9.2		5	3			
	316	24.9		5	3			
	3	349		5	3			
	4	56.9		5	3			
	5	9.2		5	3			

礫塊の被熱状況

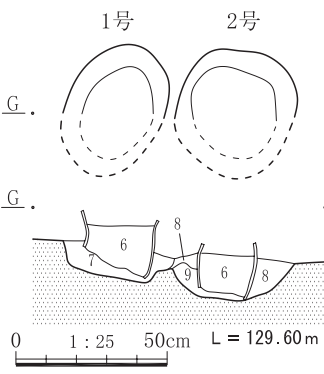
分類	1	2	総計
合計	4	4	8

被熱礫の石材別点数と重量

コード	点数	重量
	4	1693
	4	
	4	

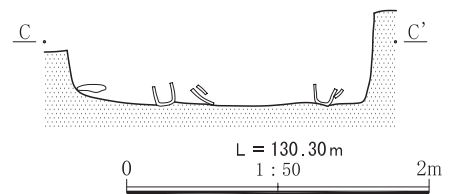


1・2号炉掘方

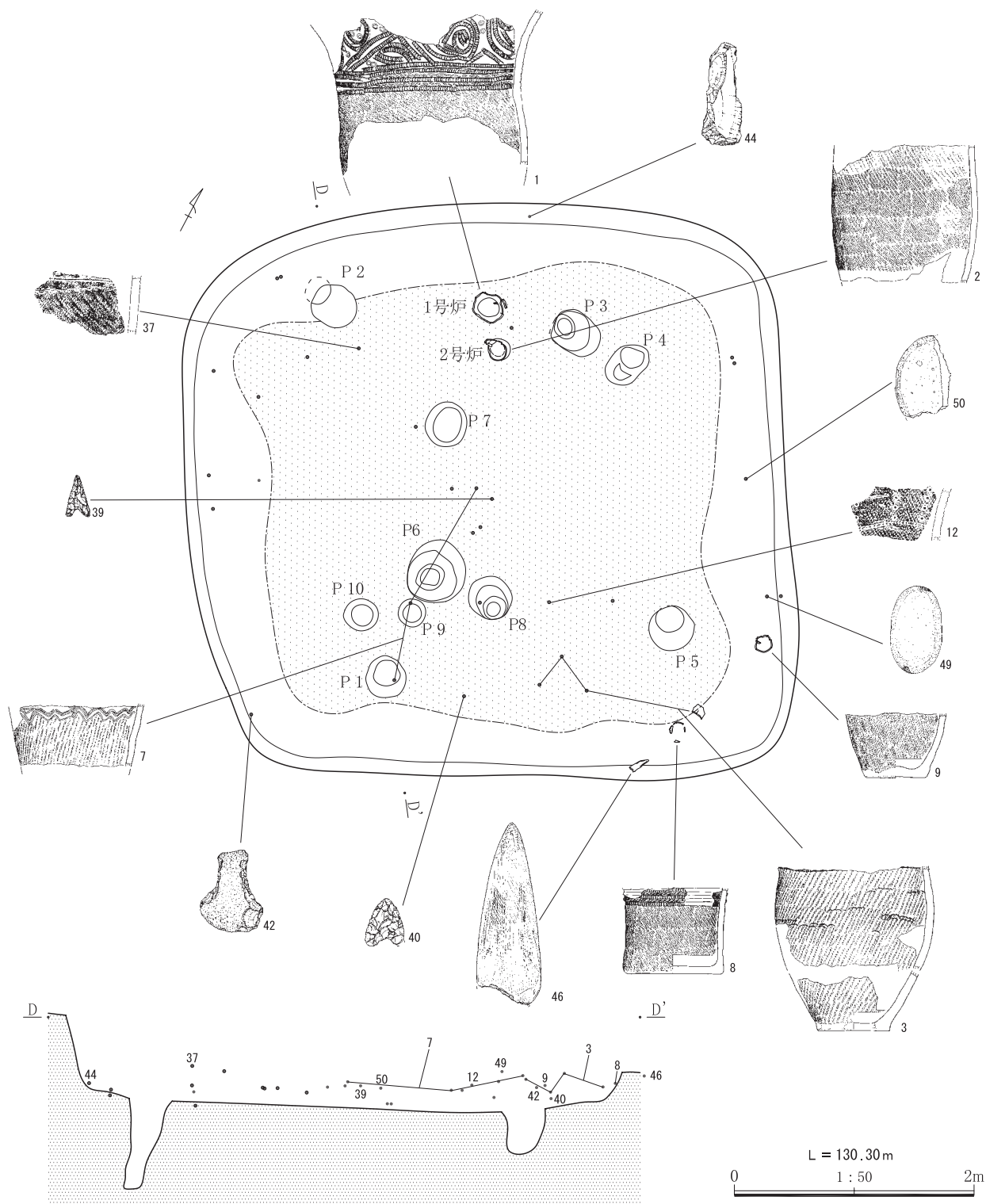


埋没土層

1. 黒褐色土 (10YR2/3) を主体に黒色土 (10YR2/1) とローム土が各 20%前後混入。
2. 黒色土を主体に黒褐色土が 30%混入。少量の炭化物粒含有。
3. ローム土を主体に黒褐色土が 20 ~ 30%混入。微量の炭化物粒含有。
4. 黒褐色土を主体にローム土が 40%混入。少量の炭化物粒含有。
5. ローム土を主体に黒褐色土が 10%混入。微量の炭化物粒含有。
6. 暗褐色土 (10YR3/4)。少量の焼土・炭化物粒含有。
7. 褐色土 (10YR4/6) を主体にローム土が 5%混入。微量の焼土・炭化物粒含有。
8. 褐色土を主体にローム土が 30%混入。微量の焼土・炭化物粒含有。
9. 褐色土とローム土とが 1 : 1で混入。微量の焼土・炭化物粒含有。



第 323 図 25号住居 (1)



第324図 25号住居(2)

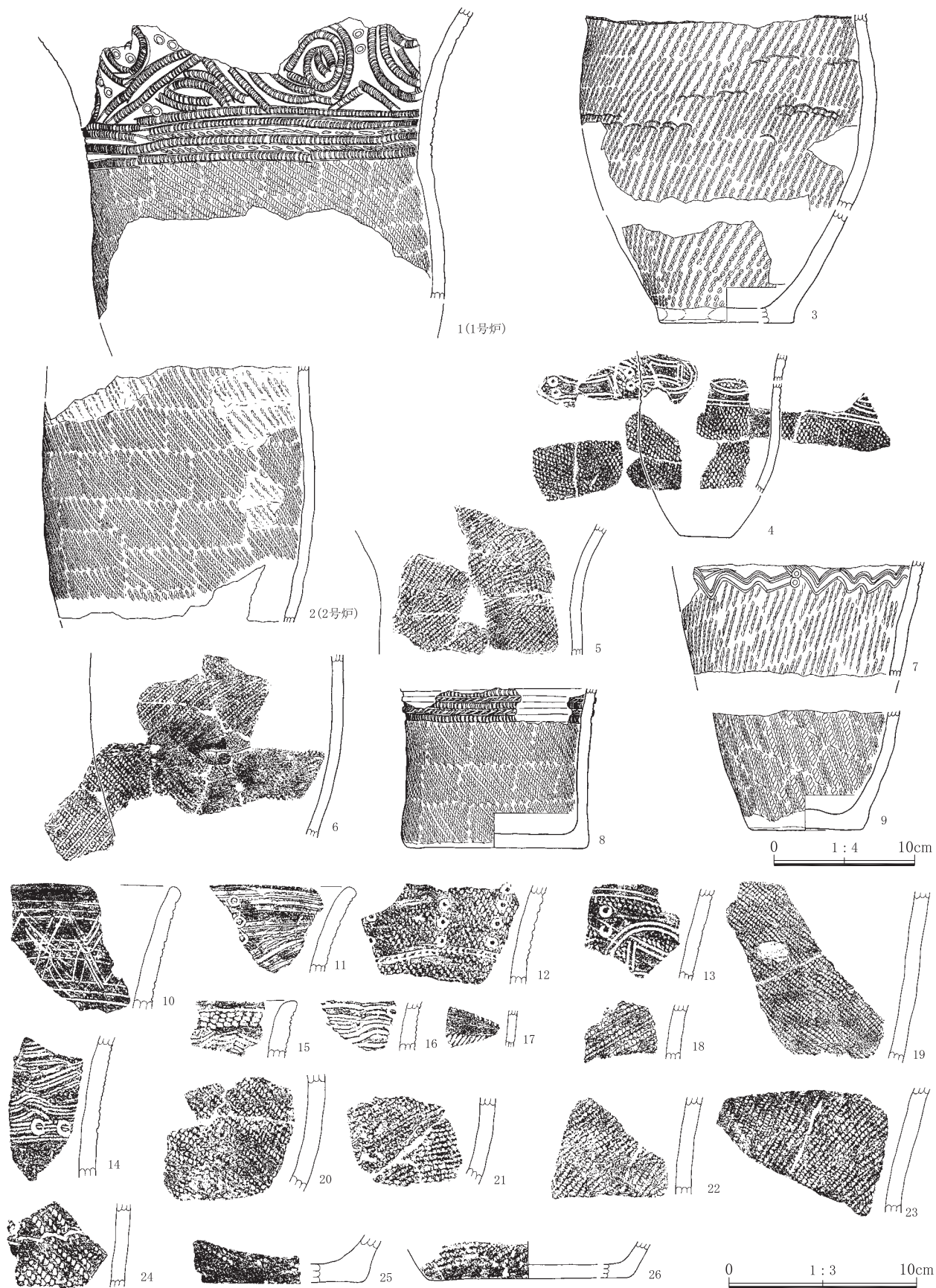
(45)、打製石斧5点(42～44)、磨製石斧2点(46・47)、磨り石類4点(48～51)石皿片1点、剥片40点、礫塊8点などが組成する。

当住居の時期に関しては、出土土器には黒浜式を

はじめ諸磯a式も存在するが、炉埋設土器が諸磯b式に比定されることから、当該期の所産と想定される。

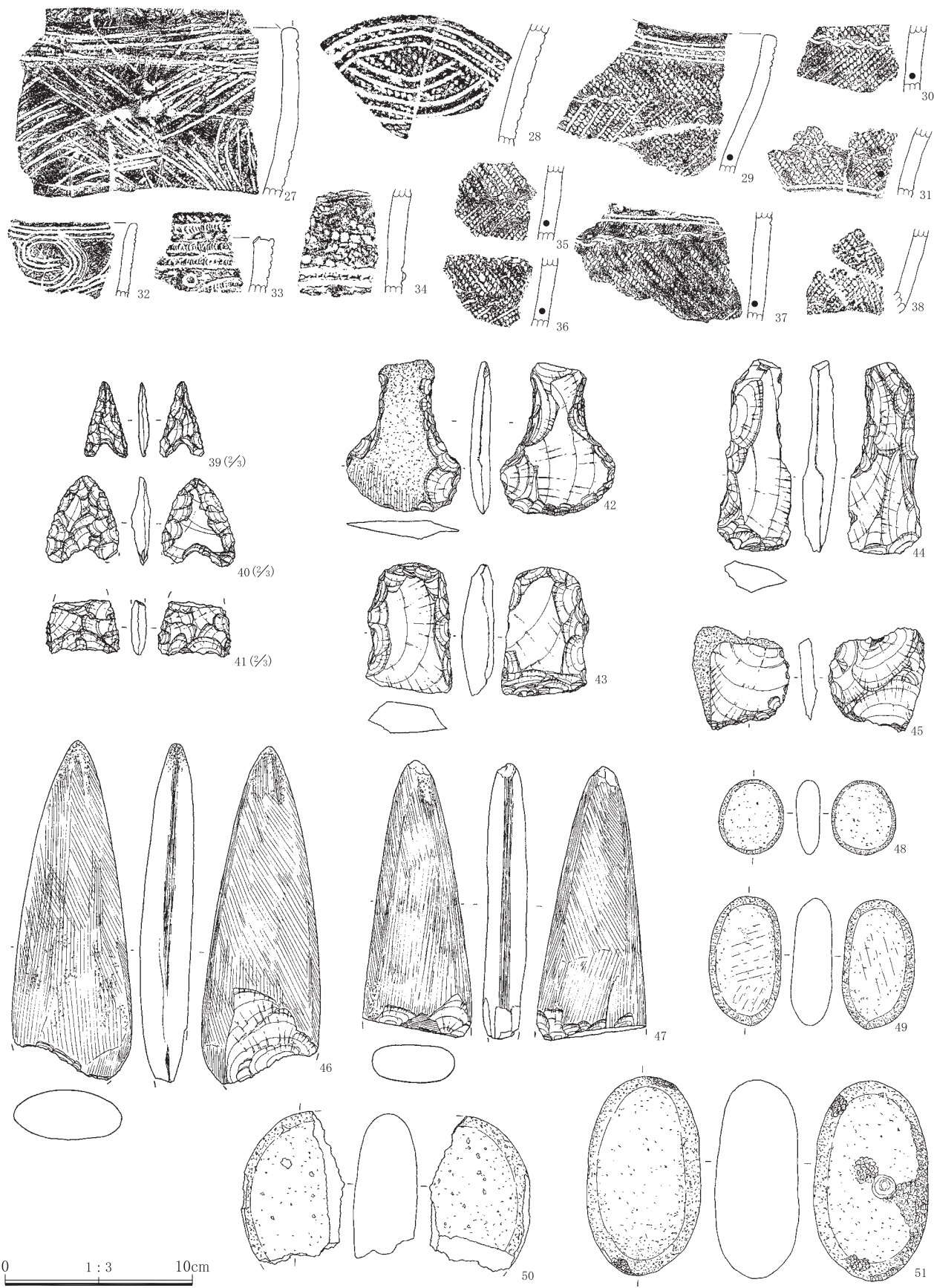
(観察表:53・65頁)

その他 周溝は検出されなかった。



第 325 图 25 号住居出土遺物 (1)

III 今井見切塚遺跡の調査



第326図 25号住居出土遺物(2)

● 26号住居

位置 BY-42

写真 PL 129

面積 約 15 m²

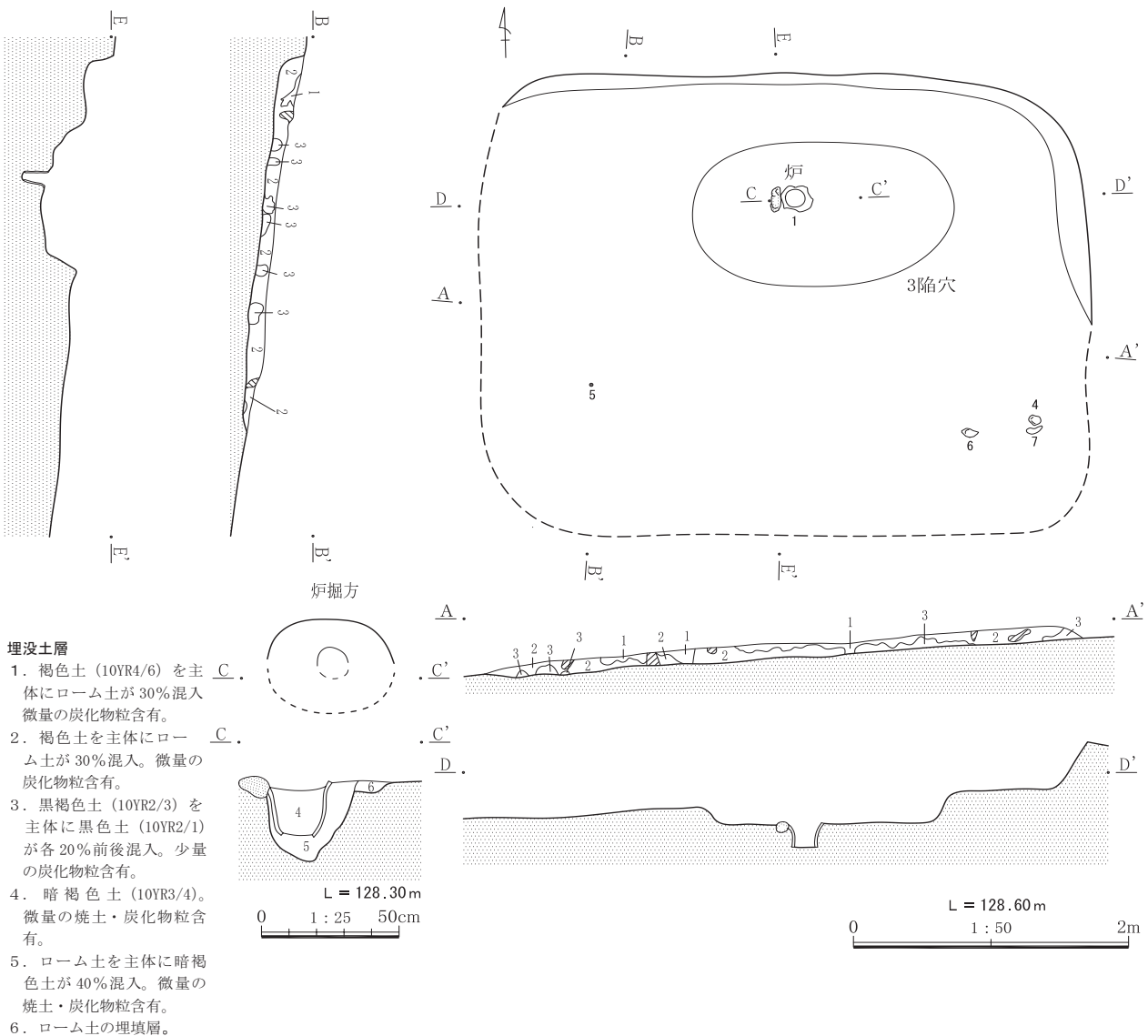
方位 N 88 度 W

重複 床面中央部のやや北壁寄りで、時期不明の3号陥穴を切っている。

形状 斜面地を浅く掘り込むために、下方の南辺と西辺の立ち上がりを確認できなかったが、等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長形状を呈すると推定される。規模は長辺約 4.4 m × 短辺約 3.6 m、深さ 16 cm である。残存する壁面は約 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、直線的に走行

している。

炉 床面中央部から北壁寄りに、1基が確認された。口縁部と体部下半を欠損する深鉢土器(1)を埋設し、その掘方は直径 33 cm × 深さ 32 cm の挿り鉢状である。また、土器の西側に近接して長さ約 20 cm × 幅 12 cm の亜角礫を配置している。土器内の埋没土は微量の焼土粒を含み、土器には被熱風化が認められる。当炉は3号陥穴の埋没土を削平してその上位に設置されているが、この埋没土が圧密沈下などで約 20 cm ほど陥没したために、炉自体が床面下に潜り込む状態となっている。



第 327 図 26 号住居

III 今井見切塚遺跡の調査

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI層) を最大 16 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 30 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。炉の周辺を中心に、若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 厚さ約 20 cm の 1 ~ 3 層が堆積し、自然埋没状況を示している。

遺物 僅か総数 32 点の遺物 (土器 27、石器 5) が埋没土の 1・2 層を中心に出土したが、炉埋設土器を除いて他の全てが床面から浮いた状態であった。土器は、諸磯 b 式の多段波状沈線文 18 点 (1)・爪形文 3 点 (2・3)・構成不明 2 点の他に、黒浜式 4 点が存在するのみである。石器も削器 3 点 (5~7)、打製石斧 1 点 (4)、礫塊 1 点のみであり、器種・数量ともに乏しい。

当住居の時期に関しては、諸磯 b 式土器が主体的であることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 53・65 頁)

その他 精査にもかかわらず、柱穴と周溝は検出されなかった。

【26号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	黒浜	諸磯b	総計
合計	4	23	27

胎土別点数

胎土	型式	諸磯b
A		21

分類別点数

分類	黒浜式
合計	4

諸磯b式

分類	1類		
種別	b2	d2	不明
合計	18	3	2

縄文原形別点数

分類	諸磯b式
合計	21

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	その他	総計
器種	削器類	打斧	礫塊
合計	3	1	1
			5

分類別点数

分類	搔器・削器	
合計	2	1

打製石斧

分類	打製石斧	
合計	1	

石材別の点数と重量

コード	搔器・削器	重量
1	10	
2	1	
重量	174	118

打製石斧

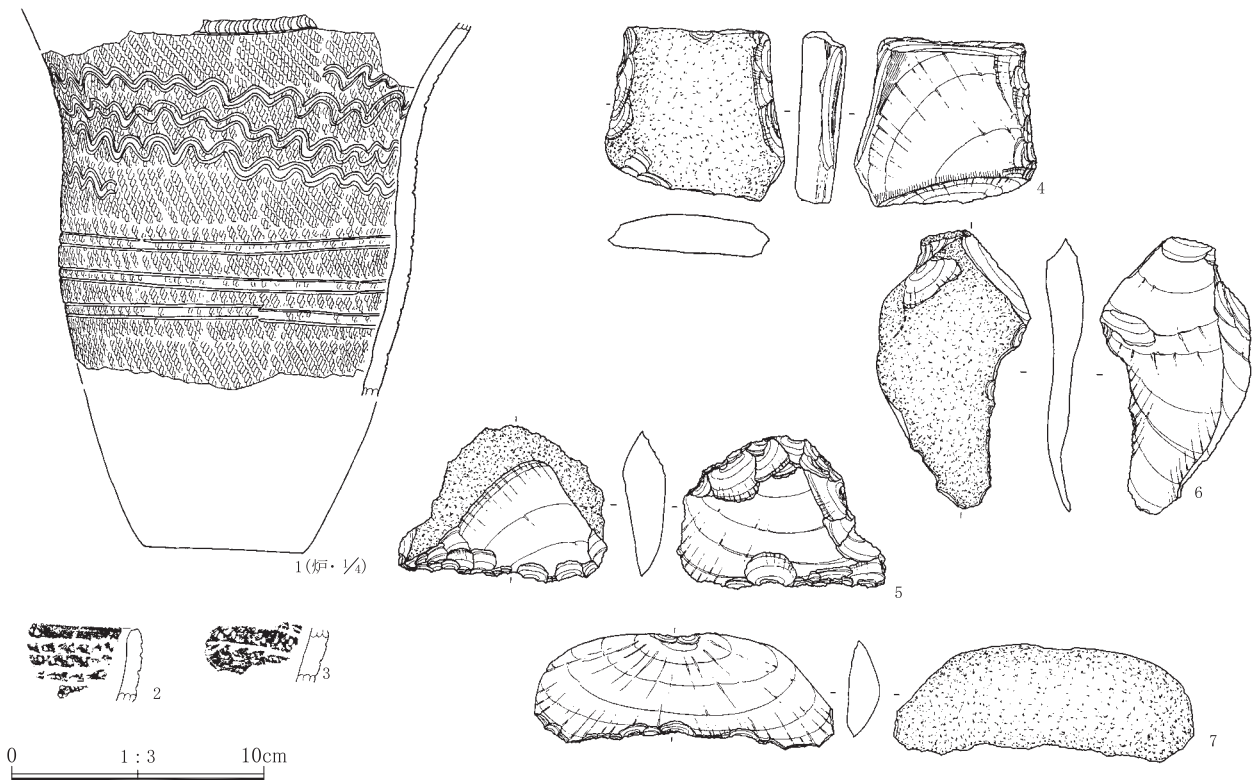
コード	6
点数	1
重量	135

礫塊

コード	4
点数	1
重量	1150

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	1	1



第 328 図 26 号住居出土遺物

● 27号住居

位置 DA-21

写真 PL 136

面積 8.90 m²

方位 N 4度E

重複 北西隅で時期不明の住居と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺 3.51 m × 短辺 3.31 m、深さ 25 ~ 61 cm である。四辺の壁面は約 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、南・西辺はほぼ直線的に走行するが、北・東辺はやや外湾気味に張り出している。

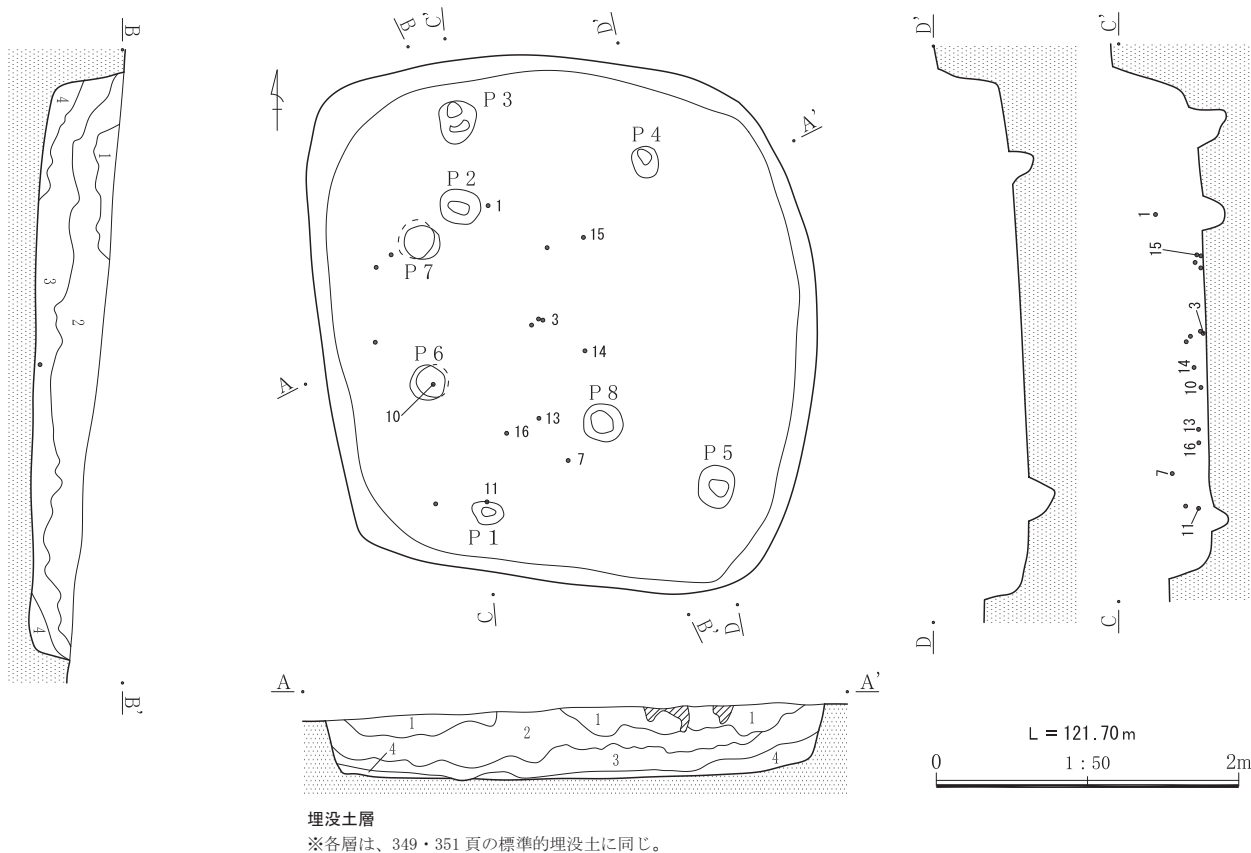
柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、8本が確認されている。P1 ~ P4 を連結した形状は、住居外形とシンメトリーではないが、P1 - P2 - P4 - P5 の4本を支柱とした構造と考えられる。他の柱穴は、補

助あるいは建て替えに伴ない、再敷設された可能性もある。支柱穴の芯心間の距離は、P1 ~ P2: 2.05 m、P2 ~ P4: 1.30 m、P4 ~ P5: 2.25 m、P5 ~ P1: 1.50 m である。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1: 21 × 12 cm、P2: 27 × 17 cm、P3: 27 × 21 cm、P4: 21 × 17 cm、P5: 28 × 20 cm、P6: 23 × 33 cm、P7: 24 × 31 cm、P8: 27 × 21 cm である。

床面 勾配約 6 度の斜面地のローム層（VI ~ VIII 層）を最大 61 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 16 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ約 60 cm の 1 ~ 4 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 僅かに総数 49 点の遺物（土器 16、石器 33）



第 329 図 27号住居

III 今井見切塚遺跡の調査

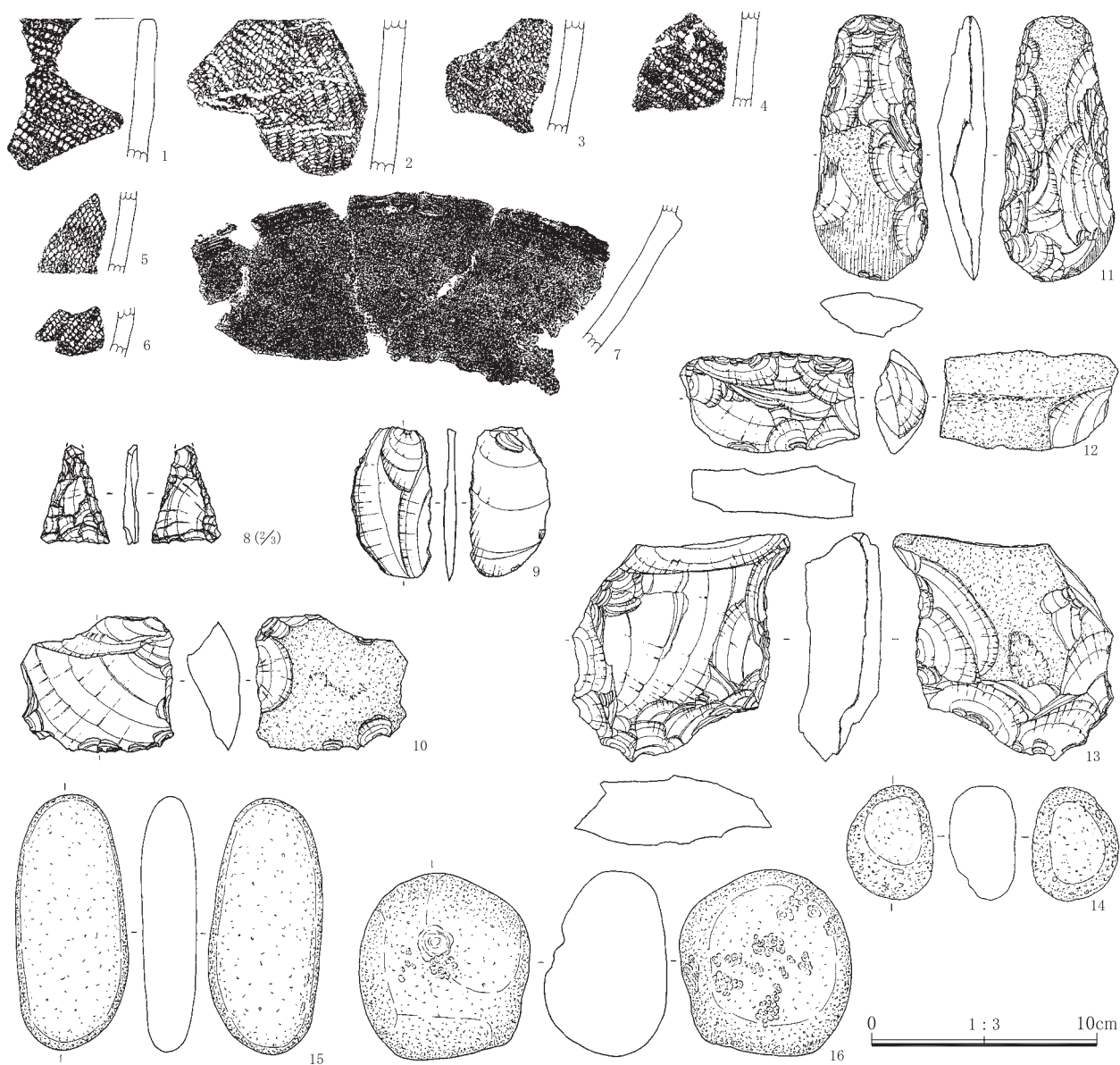
が出土しているが、床面に密着したものは1点(3)のみで、その他は埋没土上・中位の2・3層を中心に床面から浮いた状態であった。土器は、諸磯b式の全面縄文1点(1)、構成不明5点(2~6)、無文浅鉢2点(7)の他に、稲荷台式1点、早期条痕文3点、黒浜式2点、型式不明3点などがある。石器には石鏃1点(8)、削器3点(9・10)、打製石斧1点(11)、礫器1点(13)、磨り石類3点(14~16)、石核1点(12)、剥片18点、礫塊5点などが組

成する。

当住居の時期に関しては、諸磯b式土器が主体的であることから、当該期の所産と想定される。

(観察表：53・65頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。



第330図 27号住居出土遺物

【27号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	条痕	黒浜	諸磯b	時期不明	総計
合計	1	2	2	8	3	16

分類別点数

黒浜式

分類	3類
合計	2

諸磯b式

分類	4a類	4c
合計	6	2

縄文原形別点数

諸磯b式

分類	2b	14c	18
合計	4	2	2

胎土別点数

胎土	型式	諸磯b
A		8

(石器)

器種別点数

系列	打製系列				使用痕系列		その他		総計
器種	石鏃	削器類	打斧	礫器	磨石類	剥片	石核	礫塊	
合計	1	3	1	1	3	18	1	5	33

分類別点数

石鏃

分類	1類
合計	1

搔器・削器

分類	2類	3類
合計	2	1

打製石斧

分類	2類
合計	1

磨石類

分類	2類	4類
形態	a	a abc
合計	1	1 1

石材別の点数と重量

石鏃

コード	1
点数	1
重量	0.8

搔器・削器

コード	1
点数	3
重量	127

打製石斧

コード	5
点数	1
重量	119

礫器

コード	1
点数	1
重量	380

磨石類

コード	4
点数	3
重量	691

剥片

コード	1	2	4	7	37
点数	13	1	1	2	1
重量	182	0.6	26.6	5.6	8.8

石核

コード	1
点数	1
重量	102

礫塊

コード	4
点数	5
重量	426

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	5	5

● 28号住居

位置 DA-28

写真 PL 132

面積 9.30 m²

方位 N 74度E

重複 南西隅で時期不明の117・214号土坑と重複する。明確な新旧関係は把握できなかったが、214号土坑が当住居に後出する可能性が高い。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺3.56m×短辺3.49m、深さ18～42cmである。四辺の壁面は約70～80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、6本が確認されている。若干歪んだ配列ではあるが、P1～P4の

4本を主柱とした構造と考えられる。主柱穴の芯心間の距離は、P1～P2：1.50m、P2～P3：1.90m、P3～P4：1.10m、P4～P5：1.50mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1：37×36cm、P2：29×17cm、P3：26×18cm、P4：32×20cm、P5：21×15cm、P6：37×24cmである。

床面 勾配約7度の斜面地のローム層(VI・VII層)を最大42cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約25cmの比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ40cm前後の1～6層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。3層は多量の焼土粒を含み、214号土坑の埋没土上層に相当する可能性が高い。

遺物 総数178点の遺物(土器149、石器29)が出土しているが、床面に密着したものはなく、その全てが埋没土上位の1～3層を中心に床面から浮いた状態であった。主な土器は、諸磯b式の平行沈線文67点(1～14)・爪形文3点(15・19)・渦巻状浮線文2点(16・17)・構成不明9点(36・39)と、諸磯a式の米字文1点(30)・肋骨文2点(18・21)・波状沈線文4点(24・27・29・32)・鋸歯状沈線文1点(20)・円形竹管文1点(28)・平行爪形文5点(22・23・25・26・31)・構成不明26点(33～35・37・38・40～43)などが混在する。この他に、稲荷台式3点、花積下層式8点、黒浜式1点、型式不明10点がある。尚、1～12、16・17、34・40の各破片は各々同一個体である。石器は石鏃1点(44)、磨り石類5点(45～48)、多孔石1点(49)、剥片9点、礫塊13点などが組成するのみで、器種・数量ともに乏しい。

当住居の時期に関しては、諸磯b式土器が主体的であることから、石器を含め当該期の所産と想定される。(観察表：53・54・65頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

III 今井見切塚遺跡の調査

【28号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	花積下層	黒浜	諸磯a	諸磯b	時期不明	総計
合計	3	8	1	46	81	10	149

分類別点数

花積下層式		黒浜式		諸磯b式						
分類	2類	分類	3類	1類			2類	4類		
合計	8	合計	1	種別	c1	c2	不明	b1	a	不明
				合計	49	3	18	2	2	7

諸磯a式

分類	1類										2類		4類	
種別	b	a1	b1	b2	b3	c	d1	d2	d4	不明	a	不明		
合計	1	2	3	1	1	1	2	2	1	4	13	15		

縄文原体別点数

諸磯a式					諸磯b式					
分類	2b	7b	14c	17	18	分類	1a	2b	17	18
合計	16	1	1	1	8	合計	47	4	2	3

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a	諸磯b
A		26	56
B		1	-

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	複合技術系列	その他		総計
器種	石鏃	磨石類	多孔石	剥片	礫塊	
合計	1	5	1	9	13	29

分類別点数

石鏃		磨石類					多孔石	
分類	2類	分類	1類	2類	4類	5類	分類	5類
合計	1	形態	ac	abc	ac	ac	形態	b
		合計	1	1	2	1	合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		磨石類		多孔石		
コード	2	コード	4	19	コード	4
点数	1	点数	4	1	点数	1
重量	0.6	重量	1091	113	重量	10000

剥片

コード	1	2	7	9
点数	5	2	1	1
重量	10	2.4	2.8	5

礫塊

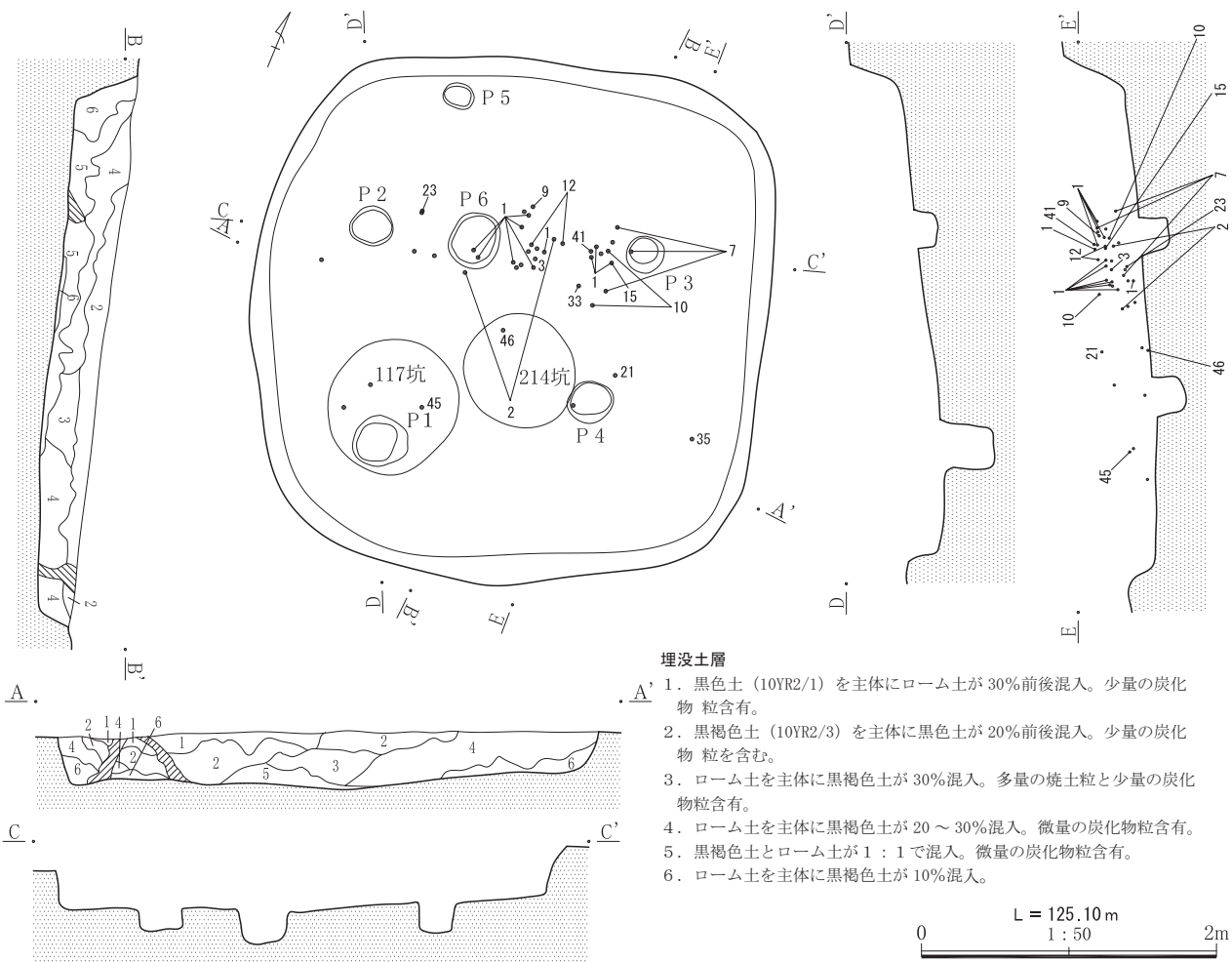
コード	4	34
点数	12	1
重量	946	14.8

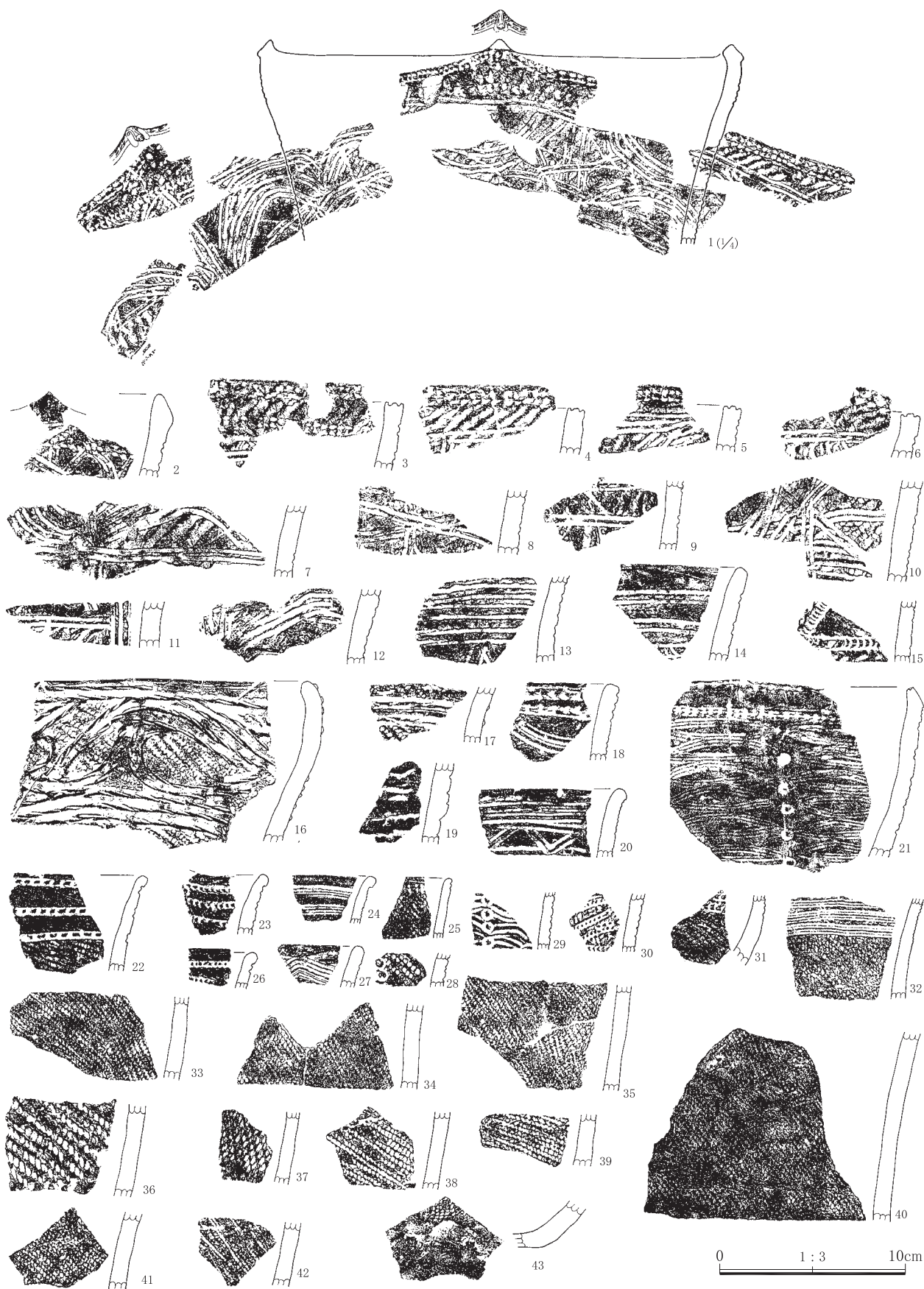
礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	9	4	13

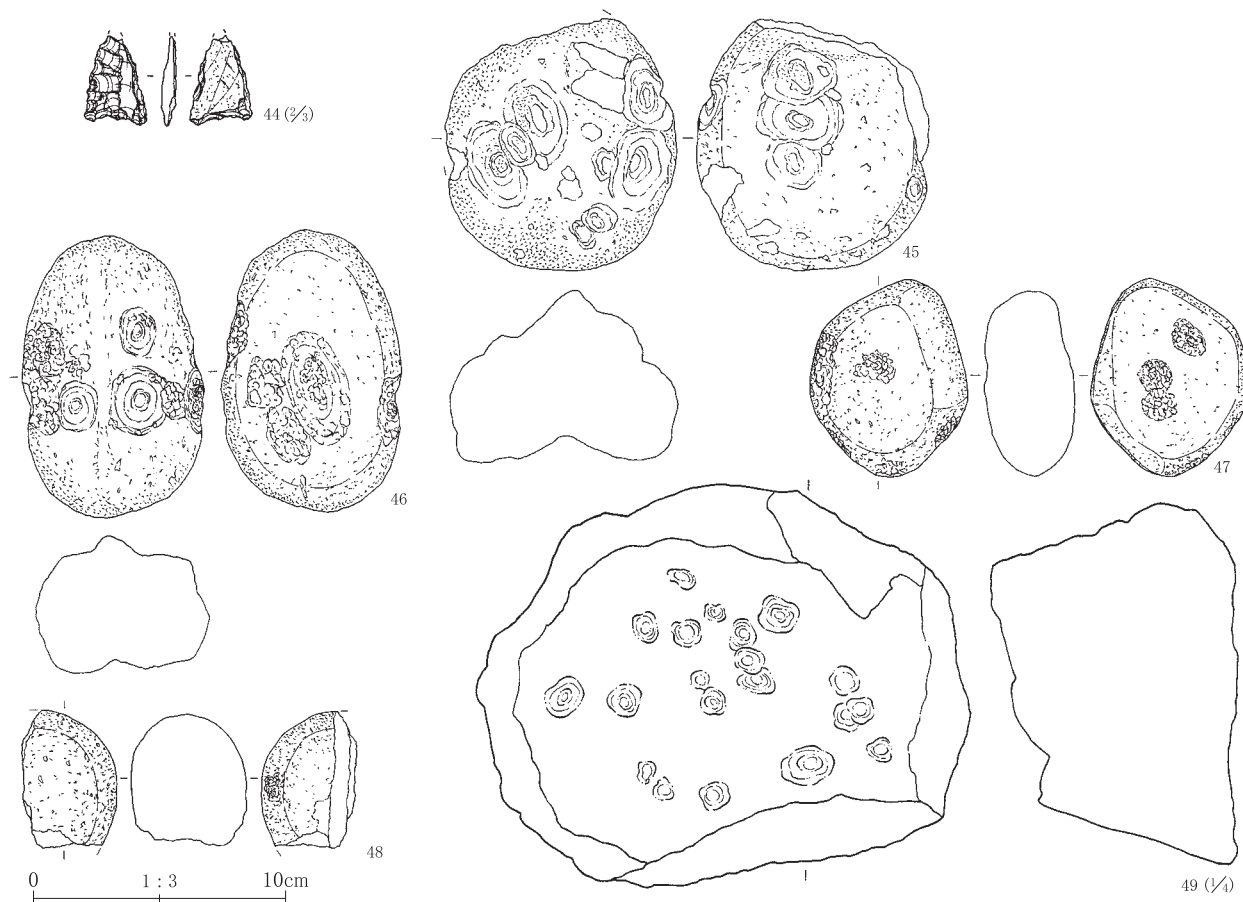
被熱礫の石材別点数と重量

コード	4
点数	9
重量	565





第 332 图 28 号住居出土遗物 (1)



第333図 28号住居出土遺物(2)

● 29号住居

位置 CH-48

写真 PL 137・138

面積 41.80 m²

方位 N 47度W

重複 北西隅で時期不明の120・224号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺7.22 m × 短辺6.98 m、深さ32～98 cmである。四辺の壁面は約80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、北辺はやや外湾気味に張り出すが、他辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部からやや東壁寄りに、2基が確認された。1号炉は楕円形状の掘り込み炉であり、長径49 × 短径29 × 深さ9 cmの規模を有する。内部には黒褐色土が堆積し、焼土粒を5%含む程度だが、周辺の床面は被熱により赤化し、顕著な焚火行為を窺わせる。2号炉は楕円形状の地床炉であり、長径

81 × 短径64 cmの範囲に焼土の散布が認められる。尚、各炉の時間的な先後関係は不明である。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、11本が確認されているが、P9とP10については床面下の精査によってかろうじて下半部を確認したために、上端の形状が不明である。住居長軸に平行して3列を配置するが、北側および南側には4本を、その中間には3本を単位に配列した合計11本の支柱構造と考えられる。尚、P5には掘り直しが認められ、補修あるいは建て替えに伴って再敷設された可能性が高い。各支柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:2.00 m、P2～P3:2.10 m、P3～P4:1.80 m、P4～P5:2.20 m、P5～P6:1.60 m、P6～P7:2.25 m、P7～P8:2.10 m、P8～P9:1.25 m、P9～P10:1.50 m、P10～P11:1.65 m、P2～P11:2.45 m、P11～P7:2.30 mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:39 × 56 cm、P2:42 × 39 cm、P3:36 × 60 cm、P4:35

(観察表: 54・65 頁)

× 65 cm、P5 : 33 × 57 cm、P6 : 36 × 50 cm、P7 : 34 × 48 cm、P8 : 30 × 40 cm、P9 : 35 × 42 cm、P10 : 23 × 40 cm、P11 : 28 × 73 cmである。尚、P1・P3～P8については埋没土の断面観察を実施したが、その全てから直径 10～15 cmの柱痕を確認した。

床面 勾配約 8 度の斜面地のローム層 (VI～X II 層) を最大約 1 m 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 21 cmの比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。炉の周辺や支柱に圍繞された内側を中心にして、踏み固めによる敲き床状の硬化面が顕著に認められる。

埋没土 厚さ 32～98 cmの 1～9 層がレンズ状に堆積し、斜面上位の北方向からの自然埋没状況を示している。壁際に厚く堆積する 6～9 層は、X I・X II 層のローム土をベースにしており、周堤あるいは土屋根に積み土されていたものが、崩落した可能性が高い。

遺物 出土遺物は、住居面積に比べて総数 174 点 (土器 115、石器 59) とかなり少量である。床面に密着したものは少なく (1・3・11・27・29・33)、その大半は埋没土上位の 1～3 層を中心に床面から浮いた状態であった。主な土器は、諸磯 b 式の浮線文 18 点 (2・9～11)・爪形文 2 点 (5・6)・平行沈線文 10 点 (3・4)・渦巻状沈線文 2 点 (7・8)・構成不明 18 点 (18・20～22・24) と、諸磯 a 式の肋骨文 2 点 (16)・変形木葉文 5 点 (12～15)・全面縄文 1 点 (17)・構成不明 34 点 (1・19・23) などがある。この他に、黒浜式 1 点、諸磯 c 式 1 点、型式不明 21 点が認められる。尚、3・4 の各破片は同一個体である。石器は、石鏃 4 点 (25～28、26・27 は未製品)、石匙 1 点 (29)、礫器 1 点 (30)、磨り石類 6 点 (31～36)、多孔石 1 点 (37)、剥片 40 点、礫塊 6 点などが組成する。また、4 点の黒曜石剥片について X 線回折試験による産地同定を行い、全て蓼科系という結果を得ている。この他に、埋没土中よりクリの炭化材小片が出土している。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯 b 式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

その他 周溝は検出されなかった。

【29号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	時期不明	総計
合計	1	42	50	1	21	115

分類別点数

黒浜式		諸磯a式				諸磯c式		
分類	3類	2類		3類		4類		
合計	1	種別	a1	不明	b1	b2	a	不明
合計	1	合計	1	1	2	3	16	19

諸磯b式

分類	1類			2類				3類	4類	
種別	c1	c2	不明	a1	b1	b2	不明	a1	a	不明
合計	3	2	7	11	2	2	3	2	7	11

縄文原体別点数

諸磯a式					
縄文原体	2b	5b	7b	17	18
合計	9	1	10	1	1

諸磯b式

縄文原体	2b	2c	5b	17	18
合計	18	1	1	4	5

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a	諸磯b
A		21	23
B		—	6
F		1	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列	複合技術系列	その他		総計
	石鏃	石匙	礫器	磨石類	多孔石	剥片	礫塊	
合計	4	1	1	5	2	40	6	59

分類別点数

石鏃			石匙		
分類	5類	9類	10類	分類	1類
合計	1	2	1	合計	1

磨石類

分類	2類	3類	4類	
形態	abc	ac	abc	bc
合計	1	1	1	2

多孔石

分類	5類	
形態	b	
合計	2	

石材別の点数と重量

石鏃			石匙		礫器	
コード	1	2	コード	2	コード	5
点数	2	2	点数	1	点数	1
重量	7.1	1.2	重量	2.4	重量	449
磨石類			多孔石		礫塊	
コード	4	16	コード	4	コード	4
点数	4	1	点数	2	点数	6
重量	4739	637	重量	1715	重量	1624

剥片

コード	1	2	7	9	12	34
点数	11	7	16	1	4	1
重量	204	45.1	99.2	0.2	7.2	5.1

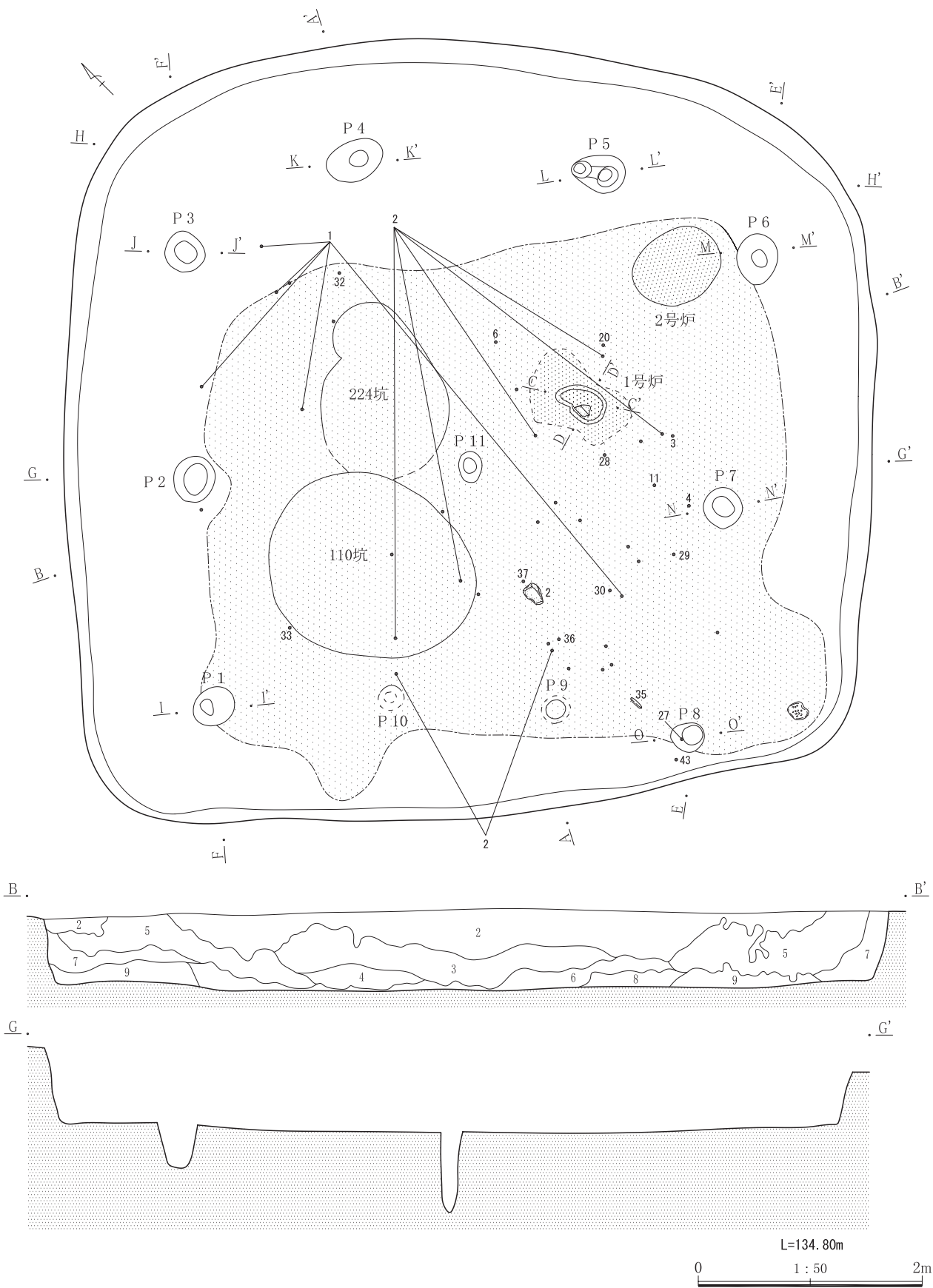
礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	2	4	6

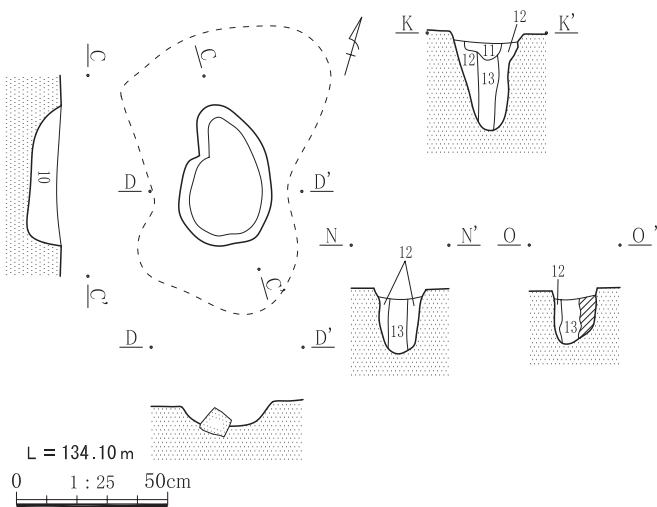
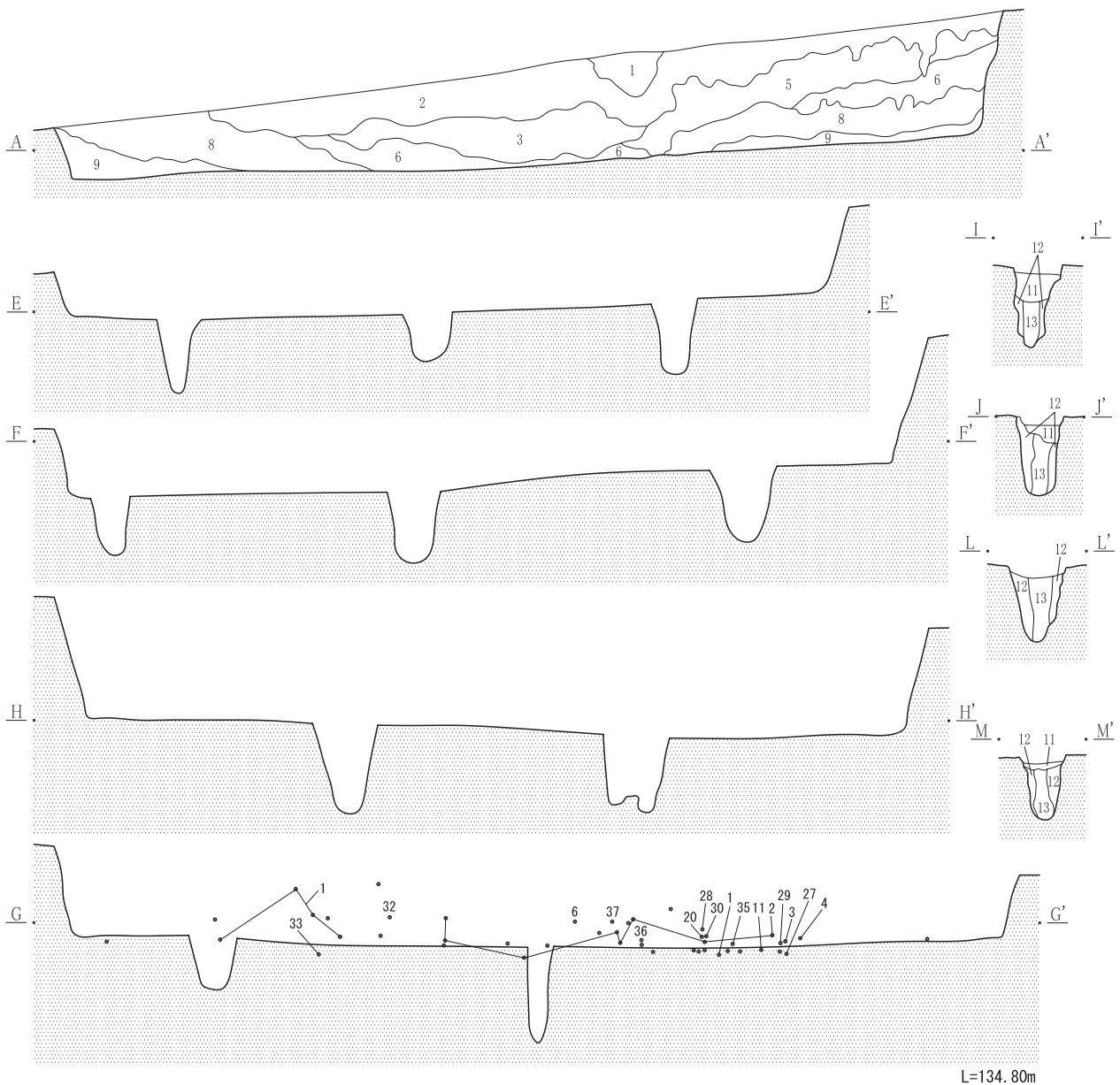
被熱礫の石材別点数と重量

コード	4	
点数	2	
重量	351	

III 今井見切塚遺跡の調査

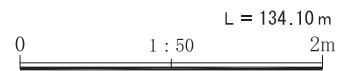


第 334 図 29 号住居 (1)

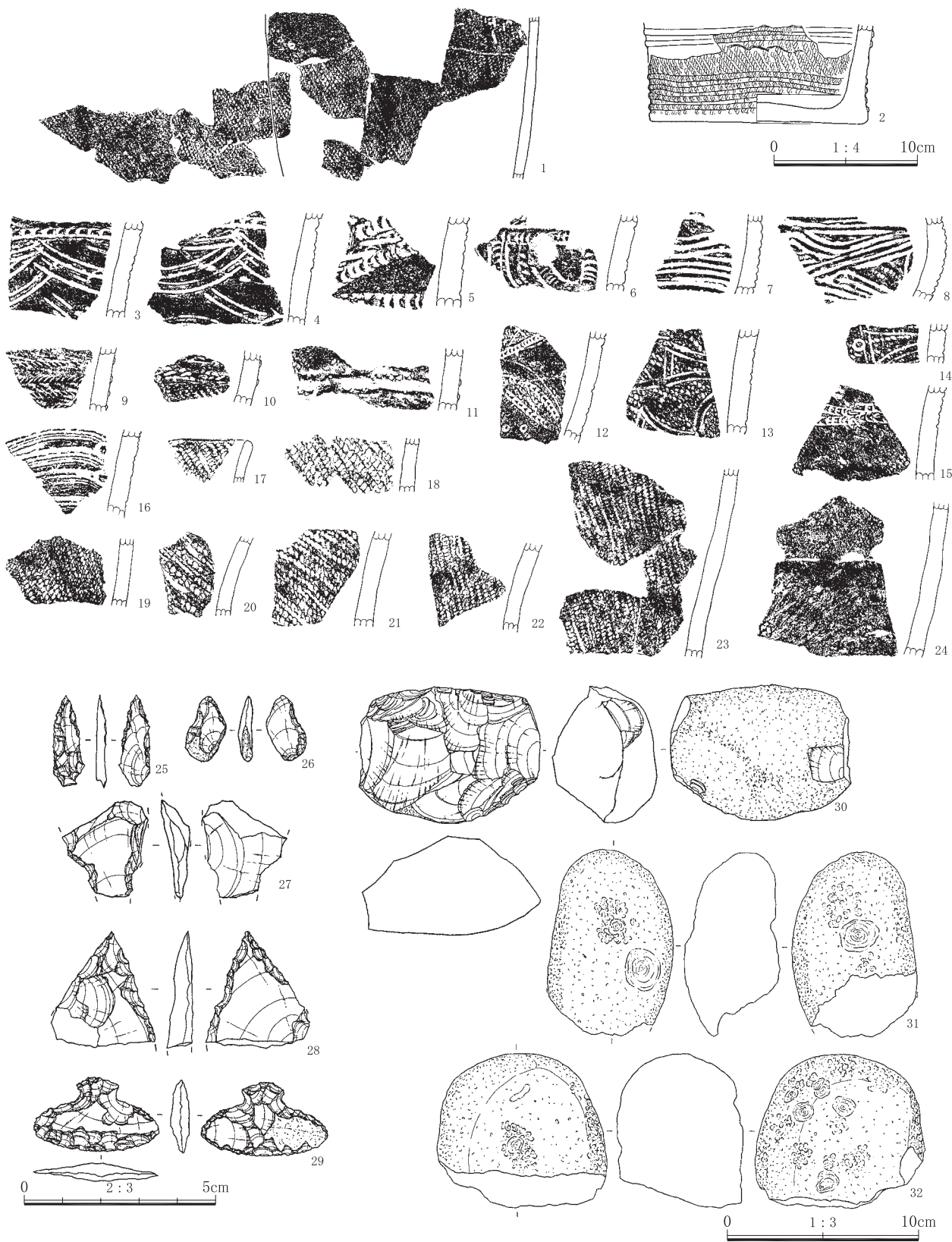


埋没土層

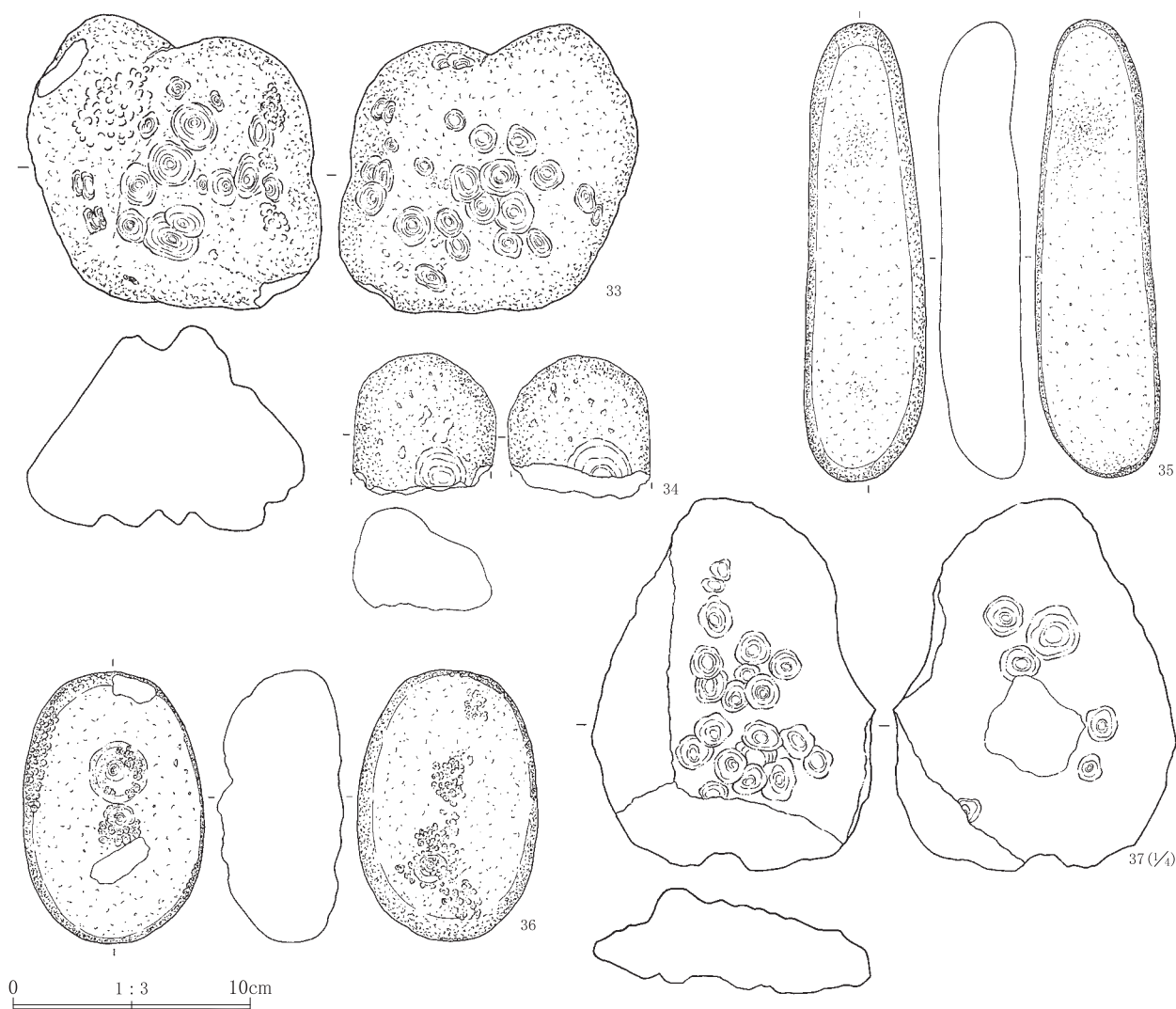
1. 黒褐色土 (10YR2/3) を主体にローム土が10%混入。
2. 黒褐色土と暗褐色土 (10YR3/4) とが1 : 1で混入。
3. 黒褐色土を主体に暗褐色土が25%混入。少量の焼土・炭化物粒含有。
4. 黒色土 (10YR2/1) を主体に黒褐色土が30%混入。少量の焼土・炭化物粒含有。
5. 黒色土や黒褐色土・暗褐色土が各30%混入。中量の焼土・炭化物粒含有。
6. ローム土 (X I・X II層) を主体に黒褐色土が20%混入。少量の焼土・炭化物粒含有。
7. 黒褐色土 (10YR2/3) を主体にローム土が10%混入。微量の焼土・炭化物粒含有。
8. ローム土を主体に黒褐色土が10%混入。微量の焼土・炭化物粒含有。
9. ローム土を主体に黒褐色土が5%混入。微量の焼土・炭化物粒含有。
10. 黒褐色土とローム土とが1 : 1で混入。5%の焼土粒と中量の炭化物粒含有。



第 335 図 29 号住居 (2)



第 336 図 29 号住居出土遺物 (1)



第 337 図 29 号住居出土遺物 (2)

● 30 号住居

位置 CE -127

写真 PL 136

面積 不明

方位 不明

形状 現在の農道に西半部を切られているために不
 確実ではあるが、斜面地の等高線方向にほぼ並行し
 て、東西に長軸を持つ隅丸方形状を呈すると推定さ
 れる。規模は短辺 2.92 m、深さ 13 cm である。掘
 り込み深度が浅く、壁面の状態も確定的ではない。

炉 ほぼ床面中央部と想定される位置に、1 基が
 確認された。体部下半を欠損する深鉢土器 (1) を
 埋設し、その掘方は長径 35 cm × 深さ 12 cm の円筒形
 状である。埋設土内の焼土は僅少であるが、土器や
 それと接する掘方埋土には顕著な被熱風化あるいは

焼土化が認められる。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI 層) を最
 大 13 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少な
 いが、自然地形と同様に約 10 cm の比高差で南側から北
 側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は
 認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋設土 厚さ 10 cm 前後の 1 層が堆積するのみで、全
 体的な埋設状況を把握することはできない。

遺物 僅か 7 点の遺物 (土器 6、石器 1) が出土し
 ているが、床面に密着したものはなく、全て埋設土
 中からの出土である。土器は、諸磯 c 式の集合沈線
 文 + 貼付文 2 点 (1・2) と無文 4 点 (3・4) の
 みである。尚、3・4 は同一個体である。石器は、

III 今井見切塚遺跡の調査

剥片 1 点が存在するのみである。

当住居の時期に関しては、諸磯 c 式土器が主体的であることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 54 頁)

その他 柱穴と周溝は検出されなかった。

【30号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯c	総計
合計	6	6

分類別点数

諸磯c式

分類	1類	4類	
種別	b2	c	d
合計	1	1	4

縄文原体別点数

諸磯c式

分類	18
合計	6

胎土別点数

胎土	型式	諸磯c
A		6

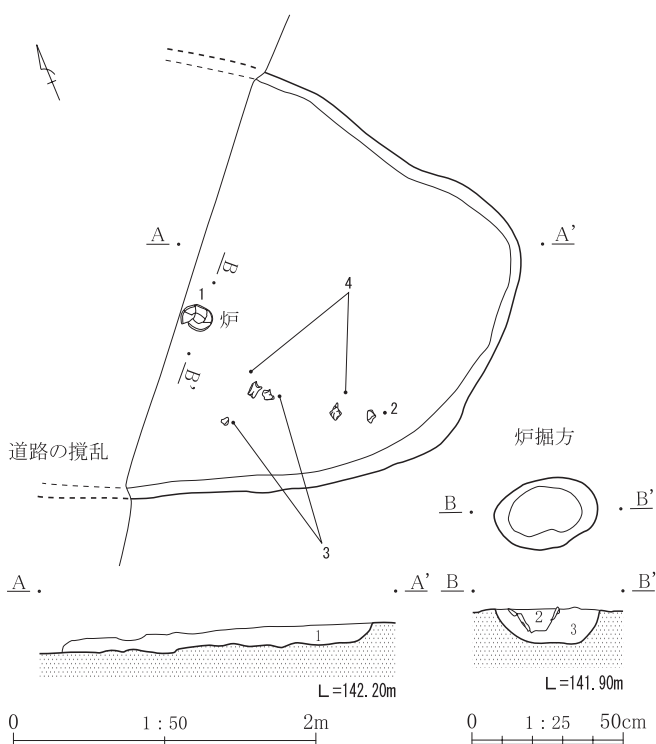
(石器)

器種別点数

系列	その他	総計
器種	剥片	
合計	1	1

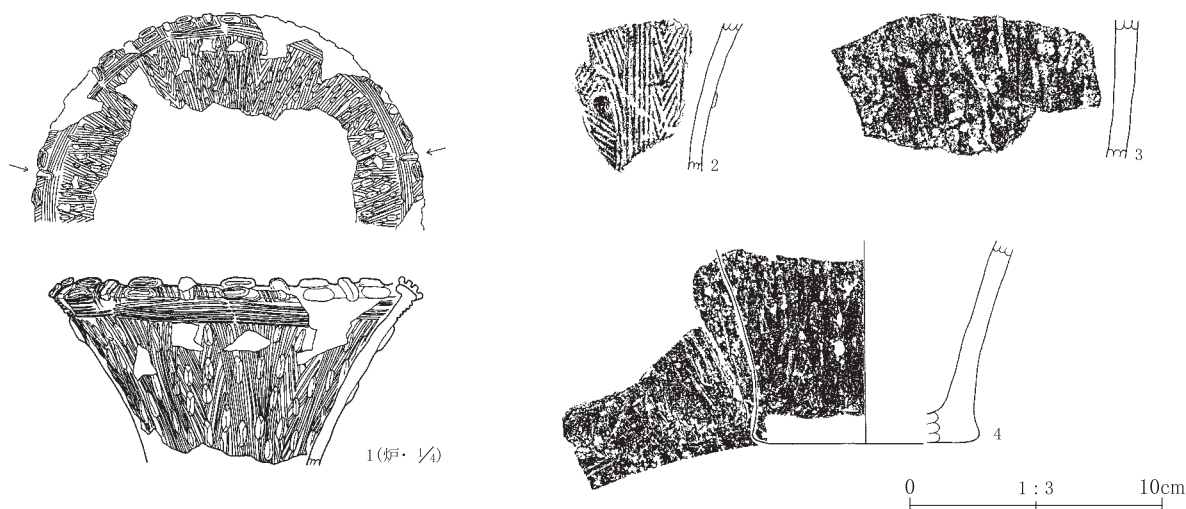
石材別の点数と重量

剥片	コト
点数	1
重量	12.3



埋没土層

1. 暗褐色土 (10YR3/3)。少量の炭化物粒含有。
2. 暗褐色土 (10YR3/4)。微量の焼土・炭化物粒含有。
3. 暗褐色土 (10YR3/3)。土器に接する部分は焼土化し、少量の炭化物粒含有。



第 338 図 30 号住居と出土遺物

● 31号住居

位置 CL-109 写真 PL 136

面積 2.00 m² 方位 N 22 度 E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 2.14 m × 短辺 1.68 m、深さ 23 ~ 31 cm である。四辺の壁面は約 60 度の緩い角度で掘り込まれ、各辺はやや外湾気味に張り出している。

床面 勾配約 5 度の斜面地のローム層 (VI・VII 層) を最大 31 cm 掘り込んでいるが、南半部が後世の攪乱により原形をとどめていないことから、詳細は不明である。ただし、残存部分には踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な状態を呈する。

埋没土 最下部に厚さ 10 cm 前後の 1 層が堆積するの

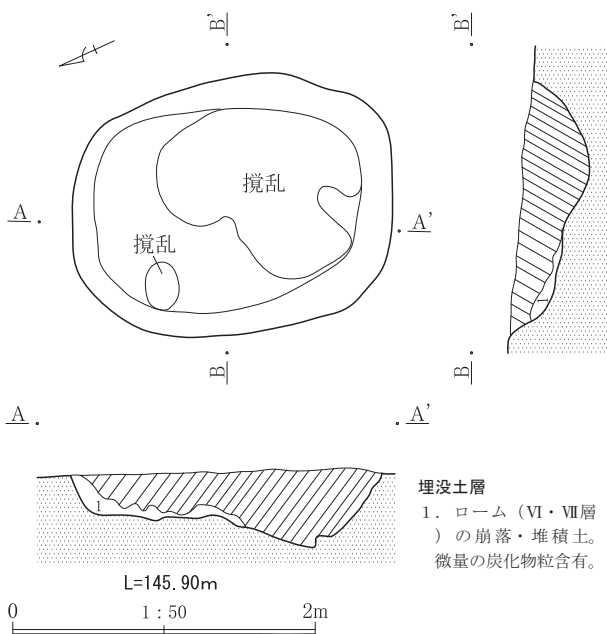
みであり、全体的な埋没状況は不明である。

遺物 僅か 26 点の遺物 (土器 14、石器 12) が存在するのみで、いずれも攪乱層を含む埋没土上位より出土した。諸磯 c 式の集合沈線文 9 点 (1 ~ 5) や型式不明 5 点 (6) などの土器片と、石鏃未製品 1 点 (7) や削器 1 点 (8)、それに剥片 10 点の石器がある。尚、2 ~ 4 の土器片は同一個体である。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯 c 式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 54・65 頁)

その他 極めて小規模であることや、炉・柱穴も存在しないことを考慮すれば、竪穴住居ではなく土坑に分類すべきであるが、32号住居との兼ね合いもあり、参考資料として掲載しておきたい。



【31号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯c	時期不明	総計
合計	9	5	14

分類別点数

諸磯c式			
分類	3b	3c	3
合計	1	7	1

縄文原形別点数

諸磯c式		
分類	2b	18
合計	1	7

胎土別点数

胎土	型式	
	諸磯c	時期不詳
A	7	1
F	1	—

(石器)

器種別点数

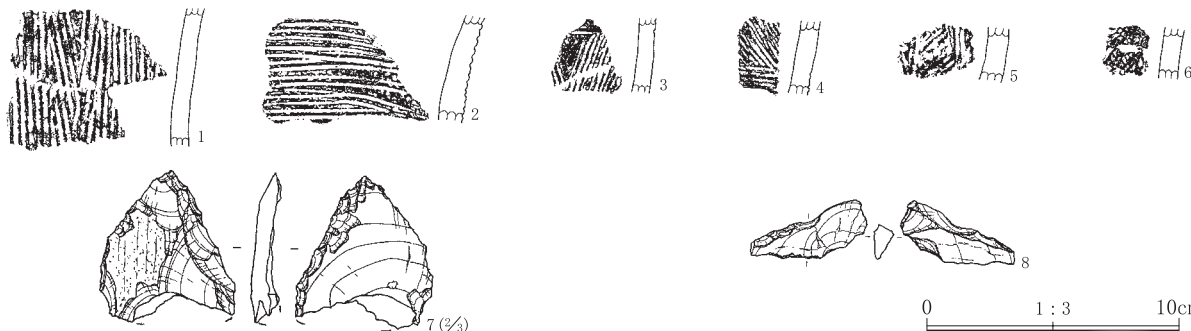
系列	打製系列	その他	総計
器種	石鏃 削器類	剥片	
合計	1 1	10	12

分類別点数

石鏃		削器・削器	
分類	9類	分類	2類
合計	1	合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		削器・削器		剥片				
コード	2	コード	2	コード	1	2	7	12
点数	1	点数	1	点数	3	1	1	5
重量	3.6	重量	6	重量	8.7	1.5	2.9	4.9



第 339 図 31 号住居と出土遺物

III 今井見切塚遺跡の調査

● 32号住居

位置 CL-112 写真 PL 138

面積 2.60 m² 方位 N 15度W

重複 東壁で時期不明の110号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸台形状を呈し、規模は長辺2.14 m × 短辺1.88 m、深さ35～55 cmである。四辺の壁面は約70～80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

床面 勾配約10度の斜面地のローム層(VI・VII層)を最大55 cm掘り込んで床面を構築する。傾斜や凹凸面の少ない平坦な床面であるが、踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ30～50 cmの1・2層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数369点の遺物(土器135、石器237)が存在するが、床面に密着したものは皆無であり、その全てが埋没土上位の1層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯c式の集合沈線文72点(1・3～13)、集合沈線文+縄文1点(17)、貼付文+集合沈線文2点、縄文8点(2・14～16)の他に、井草式1点、黒浜式1点、諸磯a式8点、型式不明42点などがある。尚、4・5は同一個体である。石器は、石鏃5点(18～20・22・23)、石錐1点(21)、削器5点(25～27)、打製石斧2点(28・29)、石核7点、剥片211点、礫塊2点などが組成する。28の打製石斧は刃部角度が80度前後であり、搔器の可能性もある。また、黒曜石製の製品(18～20・23～26)や石核・剥片類を含めた186点の内の52点について、X線回折試験による産地同定を行い、和田峠系2(星ヶ塔)34点、蓼科系18点という結果を得た。

当住居の時期に関しては、出土土器のほぼ全てが諸磯c式であることから、当該期の所産と想定される。(観察表:54・66頁)

その他 31号住居とほぼ同様に、極めて小規模であ

り、また炉・柱穴・周溝なども存在しない点で堅穴住居の要件を欠く。しかし、土坑とするには規模が大きく、かつ形態的にも類例がないことなどを考慮して、堅穴住居に分類しておきたい。

【32号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	黒浜	諸磯a	諸磯c	時期不明	総計
合計	1	1	8	83	42	135

分類別点数

黒浜式		諸磯a式		諸磯c式						
分類	2類	分類	4類	分類	1類	3類			4類	
合計	1	合計	8	種別	不明	a	b	c	不明	c
合計	2	合計	4	合計	2	4	1	15	53	8

縄文原形別点数

諸磯c式			
分類	2b	3b	18
合計	1	8	19

胎土別点数

胎土		型式	諸磯c
A			24
F			4

(石器)

器種別点数

器種	打製系列					その他				総計
	石鏃	石錐	削器類	打斧	くさび	剥片	石核	自然石	礫塊	
合計	5	1	5	2	1	211	7	1	1	234

分類別点数

石鏃				石錐		
分類	2類	3類	9類	分類	1類	
合計	1	2	2	合計	1	
搔器・削器			打製石斧			
分類	1類	2類	不明	分類	2類	8類
合計	1	3	1	合計	1	1

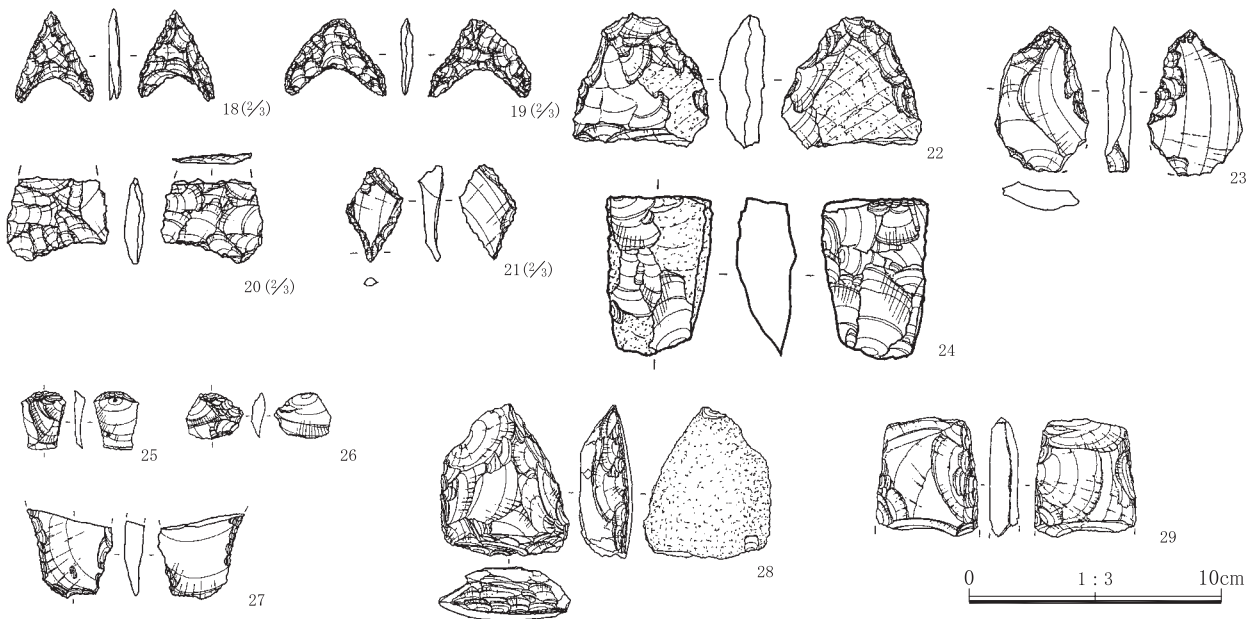
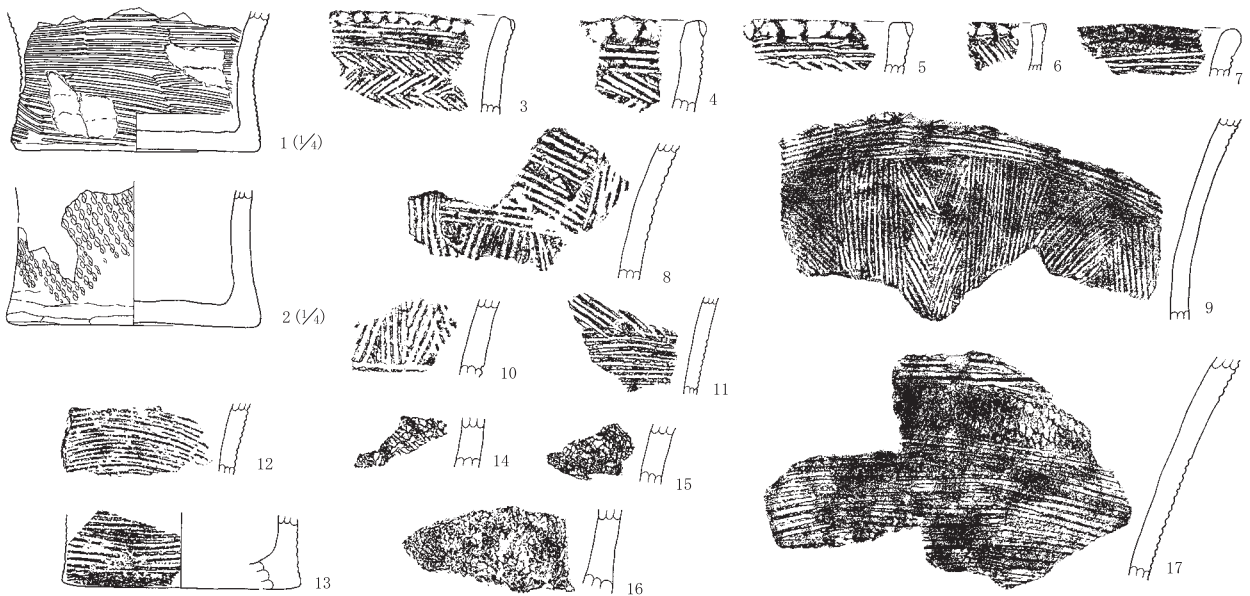
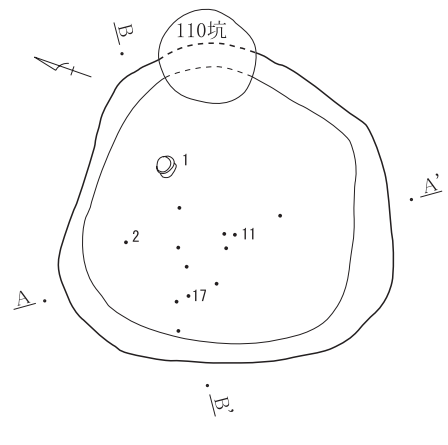
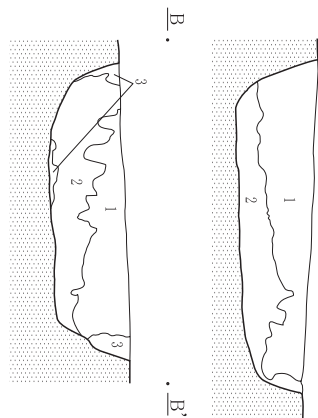
石材別の点数と重量

石鏃			石錐		搔器・削器			
コード	2	12	コード	7	コード	1	12	
点数	1	4	点数	1	点数	1	4	
重量	6.3	4.5	重量	0.7	重量	8.7	6	
打製石斧			剥片					
コード	1	コード	1	2	9	12		
点数	2	点数	28	11	2	170		
重量	98.6	重量	84.3	20.5	19.1	149		
くさび形石器		石核		礫塊		礫塊の被熱状況		
コード	12	コード	12	コード	4	分類	2	総計
点数	1	点数	7	点数	1	合計	1	1
重量	9.7	重量	54.7	重量	20.8			

埋没土層

1. 黒褐色土 (10YR2/3) とローム土とが 1 : 1 で混入。少量の炭化物粒含有。
2. 黒褐色土を主体にローム土が 25% 混入。少量の炭化物粒含有。
3. ローム (VI・VII層) の崩落・堆積土。微量の炭化物粒含有。

L=145.90m
0 1 : 50 2m



第 340 図 32 号住居と出土遺物

● 33号住居

位置 CK-111 写真 PL 139～141

面積 35.10 m² 方位 N度EW

重複 北西隅を諸磯c式期の34号住居により切られる。また同期の73・74号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ正方形に近似した隅丸長方形を呈し、規模は長辺6.66m×短辺6.27m、深さ42～87cmである。四辺の壁面は約80度前後の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。西辺の一部にテラス状の段差が認められるが、建て替えに伴う拡張の痕跡の可能性もある。

炉 南壁と北壁の2カ所に近接して、2基が確認された。1号炉は体部下半を欠損する深鉢土器(1)を埋設し、その掘方は直径30cm×深さ17cmの円筒形状である。土器内の埋設土には約5%の焼土粒が含まれる程度で、土器自体の被熱風化も顕著ではない。また、2号炉は円形状の地床炉であるが、直径52cmの範囲に僅かな焼土が散在し、長時間使用の痕跡に乏しい。尚、各炉の時間的な先後関係は不明。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、9本が確認されているが、74号土坑との重複により検出できなかったP7の存在を含め、住居長軸に平行して1列3本を3列に配置する9本の支柱構造と考えられる。P1・P3には掘り直しの痕跡が認められ、またP8にはP9が近接するなど、建て替えに伴う再敷設の状況が看取される。各支柱穴の芯心間の距離は、P1A～P2:2.05m、P2～P3A:1.40m、P3A～P4:2.40m、P4～P5:2.60m、P5～P6:1.70m、P8～P1A:2.10m、P2～P10:2.40m、P10～P6:2.30mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1A:37×87cm、P1B:40×82cm、P2:33×79cm、P3A:36×102cm、P3B:27×80cm、P4:37×54cm、P5:33×50cm、P6:36×75cm、P8:34×73cm、P9:40×29cm、P10:34×65cmである。

床面 勾配約4度の斜面地のローム層(VI～IX層)を最大87cm掘り込んで床面を構築する。傾斜や凹凸

面の少ない平坦な床面であり、炉の周辺や主柱の内側を中心にして、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められる。

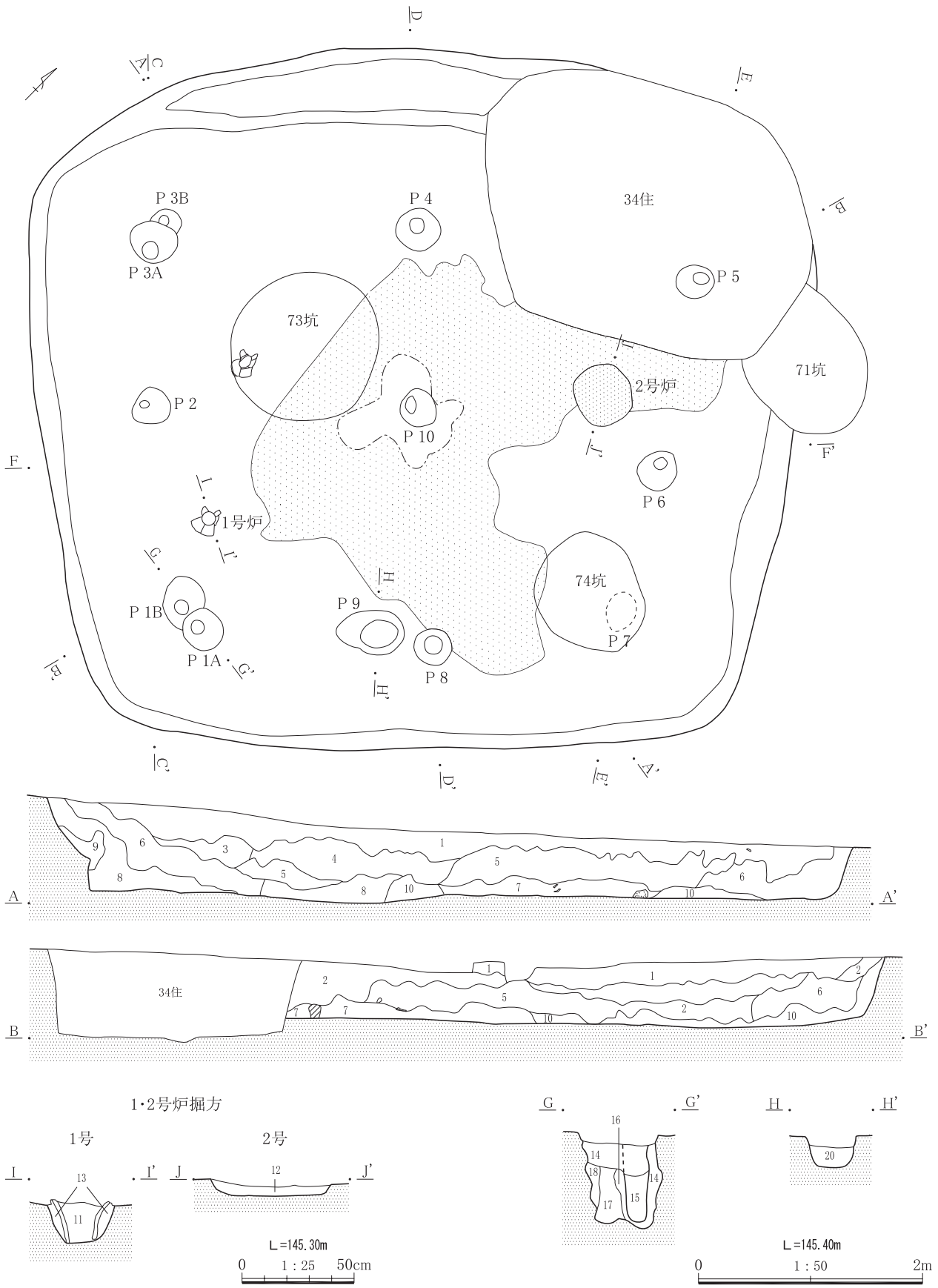
埋設土 厚さ42～87cmの1～10層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋設状況を示している。

遺物 総数706点の多量の遺物(土器330、石器376)が存在するが、床面に密着したものは少なく(6・16・18・19・35・64・75・77・82)、その大半は埋設土上位の1～5層を中心に床面から浮いた状態で出土した。主な土器は、諸磯c式の集合沈線文+貼付文22点(1・8～10・12～14)・集合沈線文104点(3・4・11・16～24・31・32)・縄文施文22点(2・5・27～29)・無文14点(6・7・15・30・33)や、諸磯b式の浮線文2点(34)・渦巻状沈線文12点(35・36)・平行沈線文1点・構成不明3点(37)、それに浮島・興津式系3点(25・26)などがある。この他に、井草式23点、夏島式1点、稲荷台式6点、諸磯a式2点、中期前半3点、型式不明78点も認められる。尚、9・10、13・14、19・24の各破片は各々同一個体である。石器は、石鏃3点(38・39・42)、尖頭器2点(40・41)、石錐3点(43～45)、石匙2点(46・47)、削器12点(50・52～58)、打製石斧2点(48は未製品・49)、礫器1点(62)、磨り石類42点(68～90)、砥石5点(63～67)、多孔石3点(91)、石核12点(51・59～61)、剥片194点、礫塊95点などが組成する。また、黒曜石製の製品(39～41・43・46・47・50)や石核(51・59・60)剥片類を含めた136点の内の45点について、X線回折試験による産地同定を行い、和田峠系2(星ヶ塔)25点、蓼科系20点という結果を得ている。この他に、埋設土中よりクリの炭化材小片が出土している。

当住居の時期に関しては、出土土器が炉埋設土器をはじめとして諸磯c式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

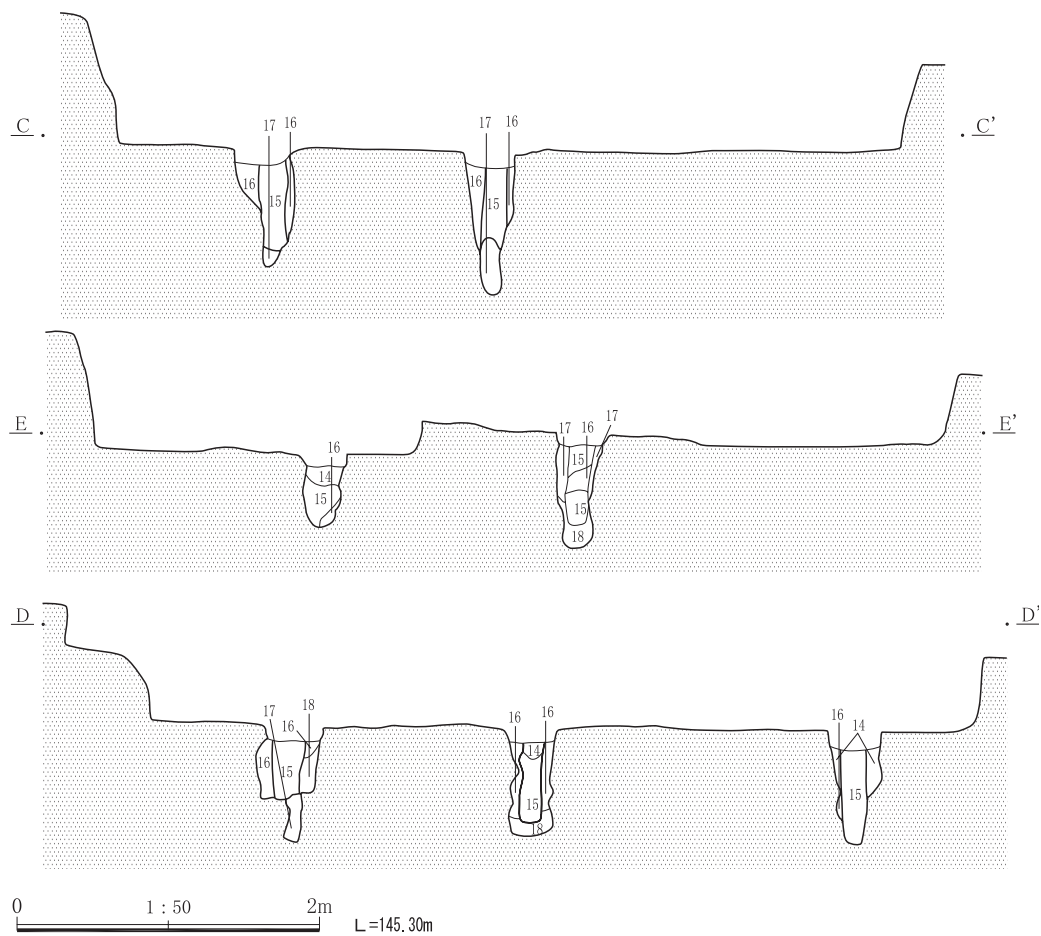
(観察表:54・55・66頁)

その他 周溝は検出されなかった。



第 341 图 33 号住居 (1)

III 今井見切塚遺跡の調査



埋没土層

1. 黒褐色土 (10YR2/3) を主体に暗褐色土 (10YR3/4) が 40% 混入。少量の炭化物粒含有。
2. 暗褐色土とローム土 (VI層) とが 1 : 1 で混入。少量の炭化物粒含有。
3. 暗褐色土を主体に黒褐色土が 40% 混入。多量の焼土粒と少量の炭化物粒含有。
4. 暗褐色土を主体に黒褐色土が 30% 混入。少量の炭化物粒含有。
5. ローム土 (VI層) を主体に暗褐色土が 30% 混入。微量の炭化物粒含有。
6. 暗褐色土を主体に黒褐色土が 40% 混入。微量の炭化物粒含有。
7. 暗褐色土を主体に黒暗褐色土が 30% 混入。少量の炭化物粒含有。
8. 暗褐色土を主体にローム土が 5% 混入。
9. ローム土 (VI・VII層) を主体に褐色土が 10% 混入。少量の炭化物粒含有。
10. 黒褐色土を主体に暗褐色土が 10% 混入。微量の炭化物粒含有。
11. 暗褐色土を主体にローム土と焼土粒が 5% 混入。微量の炭化物粒含有。
12. 暗褐色土を主体にローム土が 5% 混入。微量の焼土・炭化物粒含有。
13. ローム土を主体に暗褐色土が 20% 混入。微量の炭化物粒含有。
14. VIII層ローム土とXI層ローム土とが 1 : 1 で混入。微量の炭化物粒含有。
15. VIII層ローム土とXI層ローム土とが 2 : 1 で混入。少量の炭化物粒含有。柱痕部分。
16. VIII層ローム土とXI層ローム土とが 1 : 3 で混入。少量の炭化物粒含有。
17. VIII層ローム土とXI層ローム土とが 3 : 1 で混入。少量の炭化物粒含有。
18. VIII層ローム土とXI層ローム土とが 2 : 3 で混入。少量の炭化物粒含有。

第 342 図 33 号住居

【33号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	夏島	稲荷台	諸磯a	諸磯b	諸磯c	浮・興	中期前平不明	時期不明	総計
合計	23	1	6	2	18	196	3	3	78	330

分類別点数

諸磯a式

分類	4類
合計	2

諸磯b式

分類	1類	2類	3類	4類			
種別	不明	b2	不明	a2	不明	a	不明
合計	1	1	1	2	10	1	2

諸磯c式

分類	1類			2類			3類			4類		
種別	a	b2	不明	不明	a	c	不明	c	d	不明		
合計	1	11	10	3	1	32	71	22	14	31		

浮島・興津式系

種別	b1	e	不明
合計	1	1	1

縄文原形別点数

諸磯b式

分類	1a	2b
合計	1	3

諸磯c式

分類	1a	2b	18
合計	14	9	58

浮島・興津式系

分類	18
合計	2

胎土別点数

胎土	型式	諸磯b	諸磯c	浮・興
A		3	80	2
D		1	1	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列							使用痕系列		複合技術系列		その他				総計
器種	尖頭器	石鏃	石錐	石匙	削器類	打斧	礫器	磨石類	砥石	多孔石	剥片	石核	自然石	礫塊		
合計	2	3	3	2	12	2	1	42	5	3	194	12	1	94	376	

分類別点数

石鏃	石錐	石匙	搔器・削器	打製石斧								
分類	2類	9類	分類	1類	分類	1類	2類	分類	7類	8類		
合計	2	1	合計	3	合計	2	合計	2	10	合計	1	1

磨石類

分類	1類			2類			3類			4類					5類		
形態	a	ac	c	a	abc	ac	a	abc	a	ab	abc	ac	bc	c	a	ac	b
合計	1	2	1	3	3	4	2	1	2	4	5	6	1	1	3	2	1

砥石

分類	1類	2類
合計	4	1

多孔石

分類	4類		5類
形態	abc	b	bc
合計	1	1	1

石材別の点数と重量

尖頭器

コード	12
点数	2
重量	1.8

石鏃

コード	2	5	12
点数	1	1	1
重量	9	0.6	0.8

石錐

コード	1	5	12
点数	1	1	1
重量	3.3	0.9	1

石匙

コード	12
点数	2
重量	7

搔器・削器

コード	1	5	12
点数	8	1	3
重量	320	54.2	11

打製石斧

コード	1
点数	2
重量	192

礫器

コード	1
点数	1
重量	255

磨石類

コード	4	18	25
点数	40	1	1
重量	16722	375	722

砥石

コード	23
点数	5
重量	189

多孔石

コード	4
点数	3
重量	10184

剥片

コード	1	2	7	9	12
点数	55	12	5	6	116
重量	736	49.1	44.6	133	152

石核

コード	1	12
点数	1	11(9)
重量	214	(93.5)

礫塊

コード	4	9
点数	93(92)	1
重量	(29290)	61.2

礫塊の被熱状況

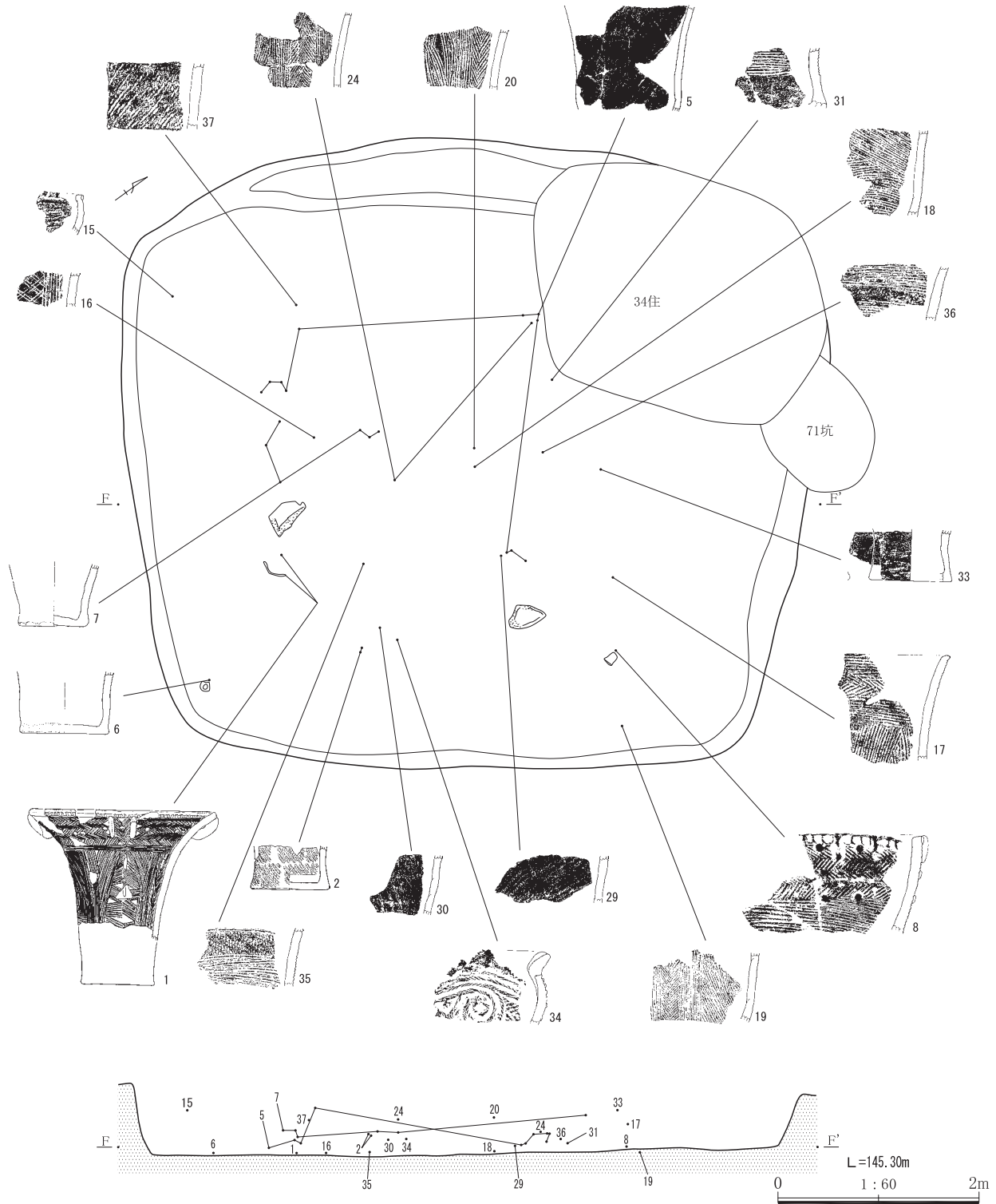
分類	1	2	総計
合計	49	45	94

被熱礫の石材別点数と重量

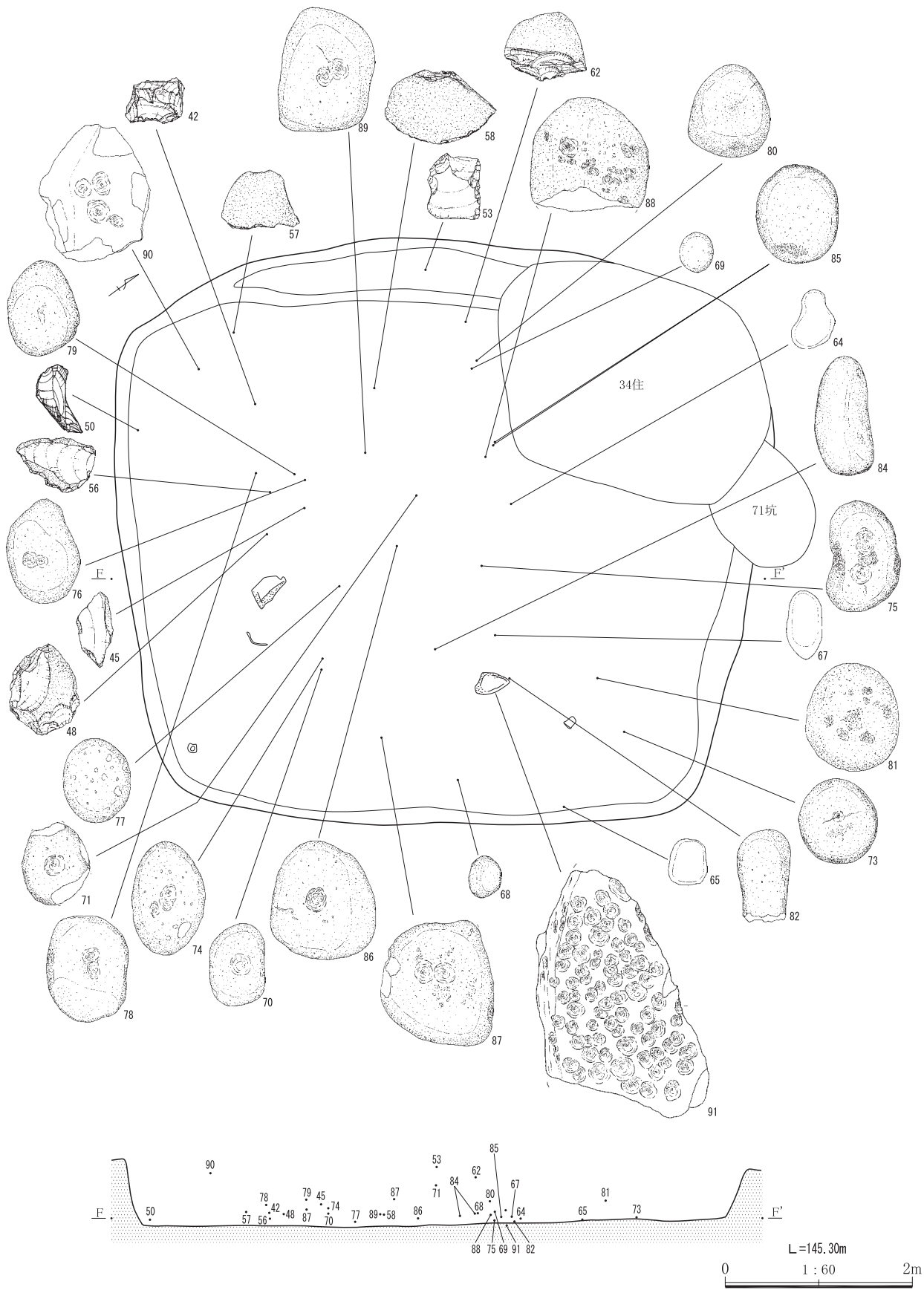
コード	4	9
点数	48	1
重量	10538	61.2

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

III 今井見切塚遺跡の調査

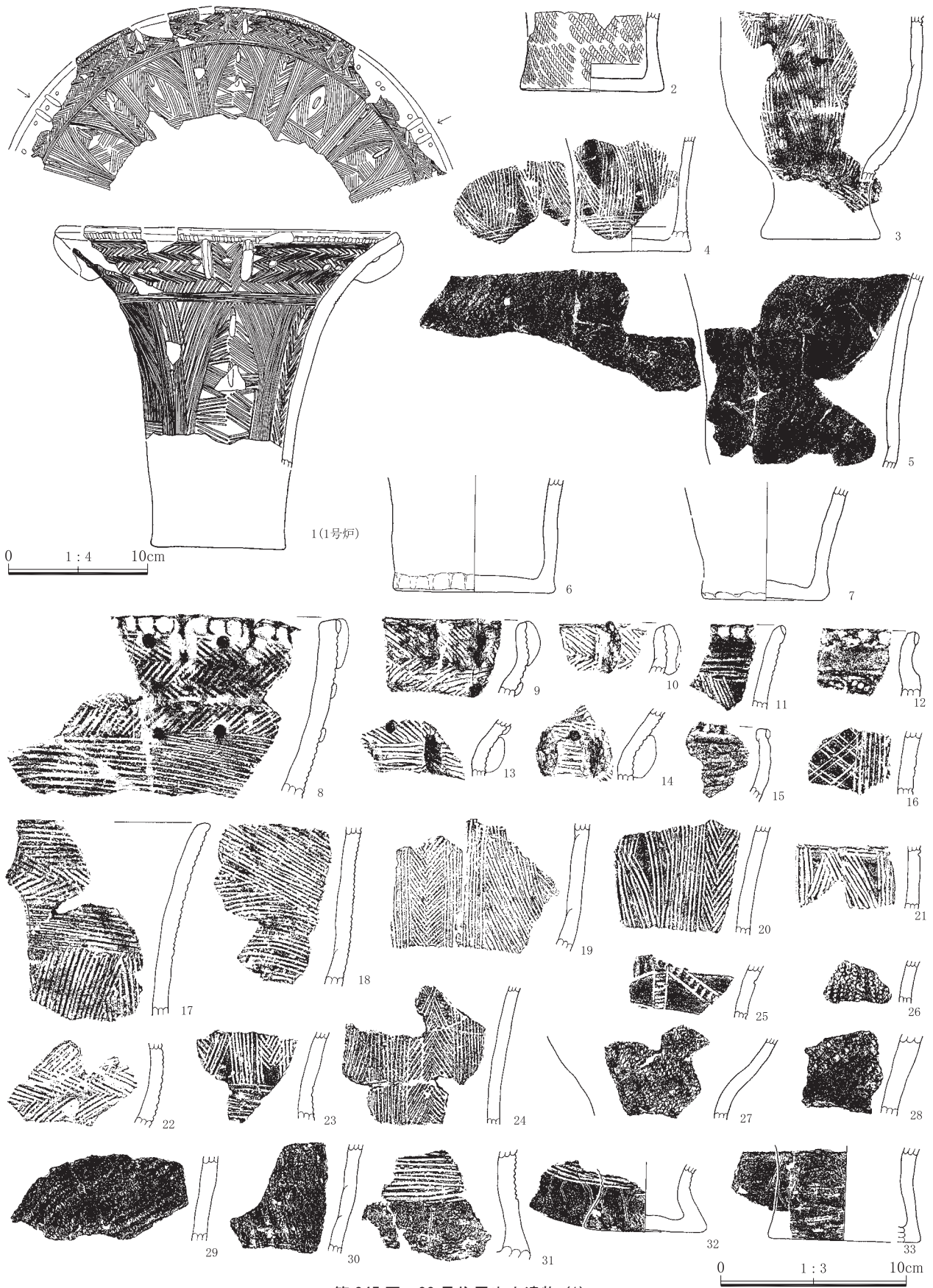


第 343 図 33 号住居 (3)

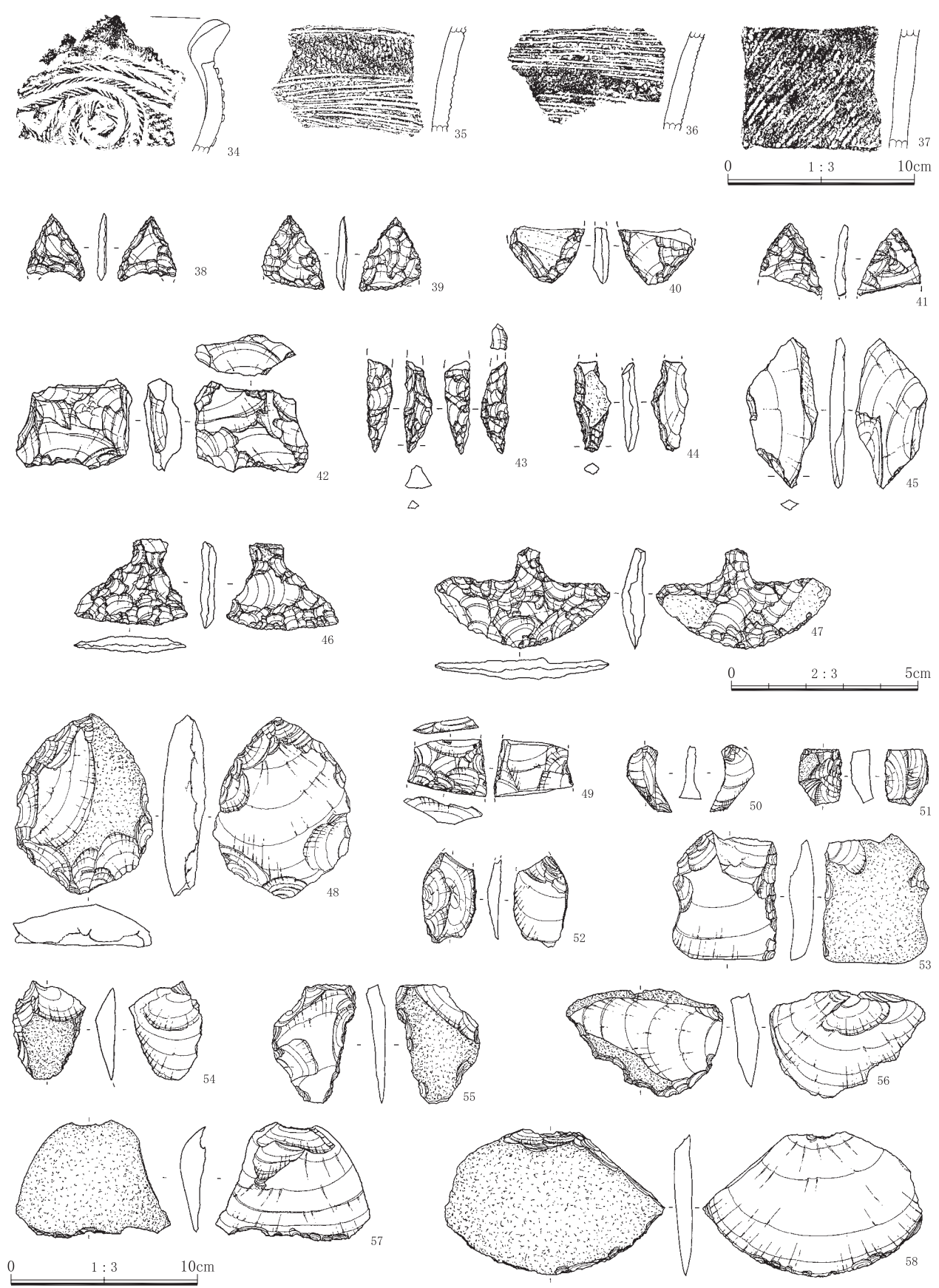


第 344 图 33 号住居 (4)

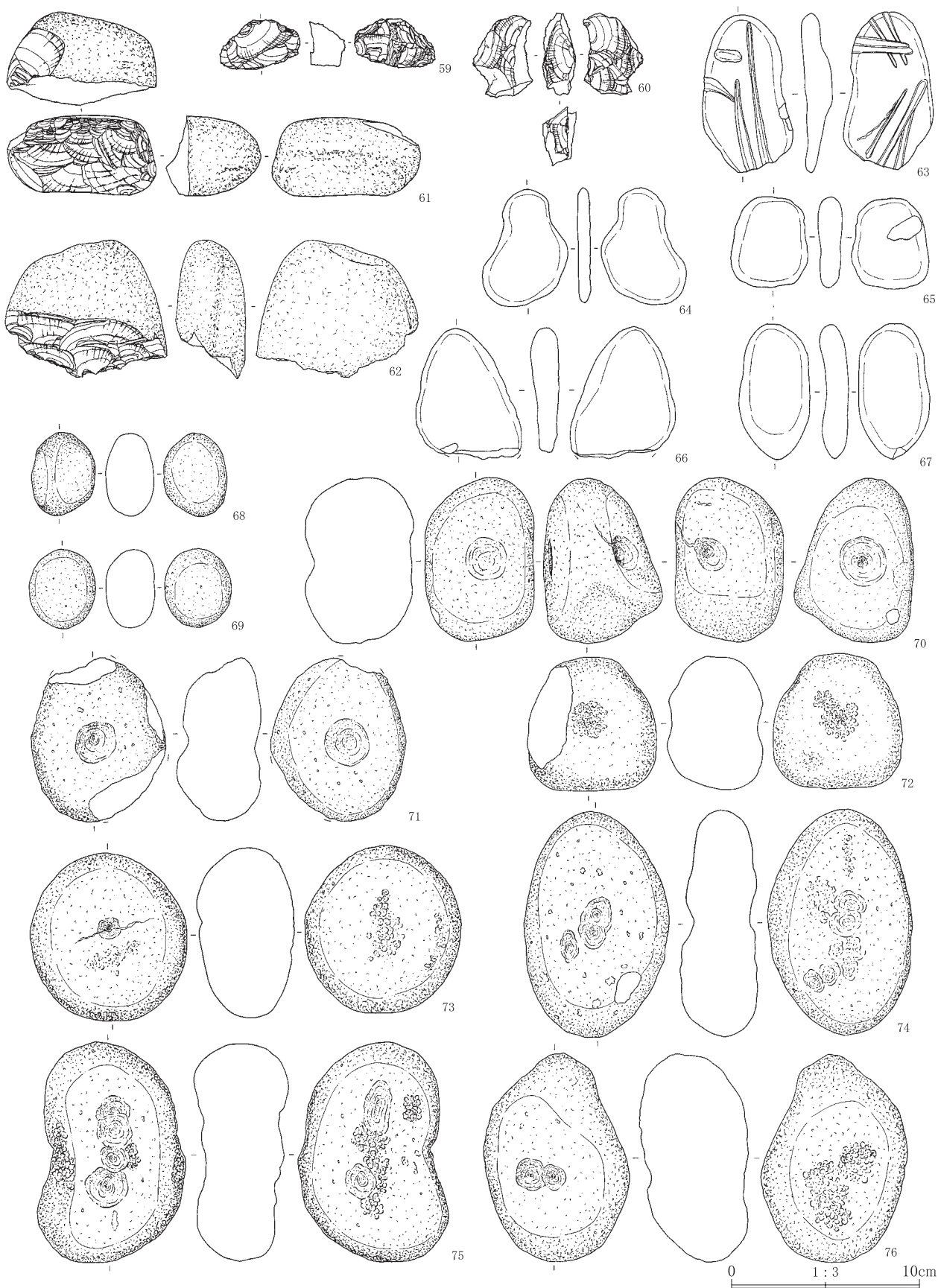
III 今井見切塚遺跡の調査



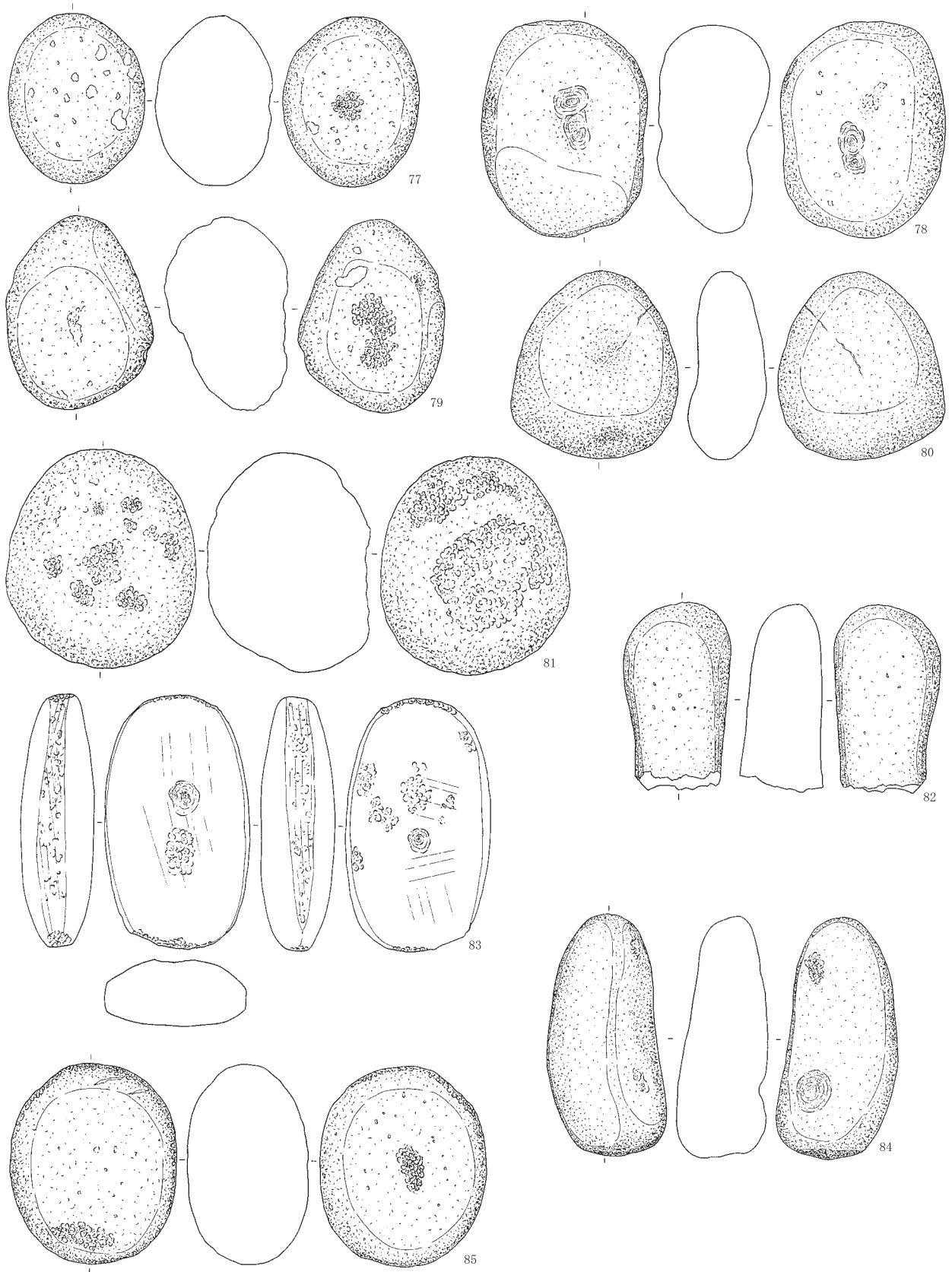
第 345 図 33 号住居出土遺物 (1)



第 346 图 33 号住居出土遺物 (2)

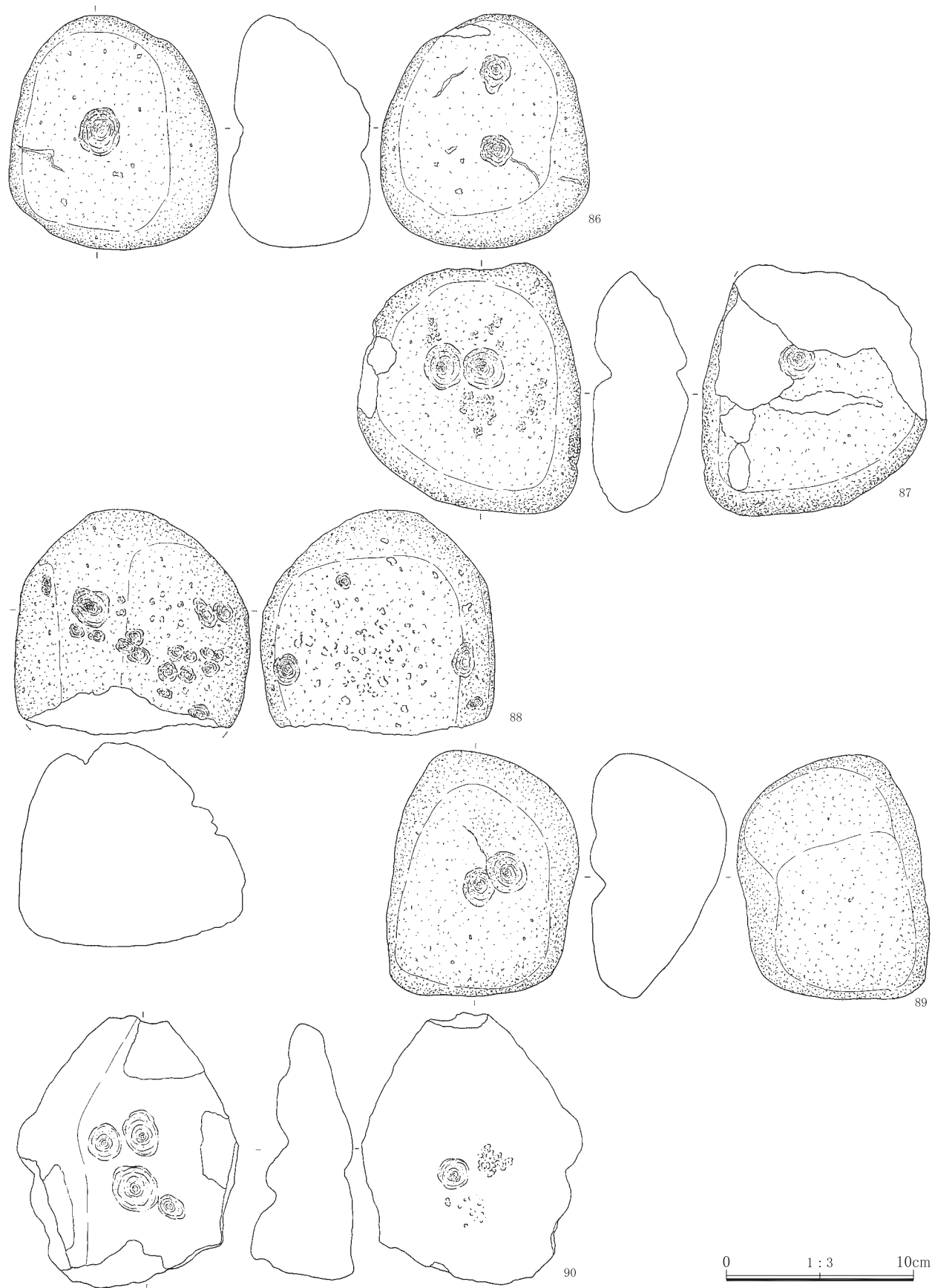


第 347 図 33 号住居出土遺物 (3)

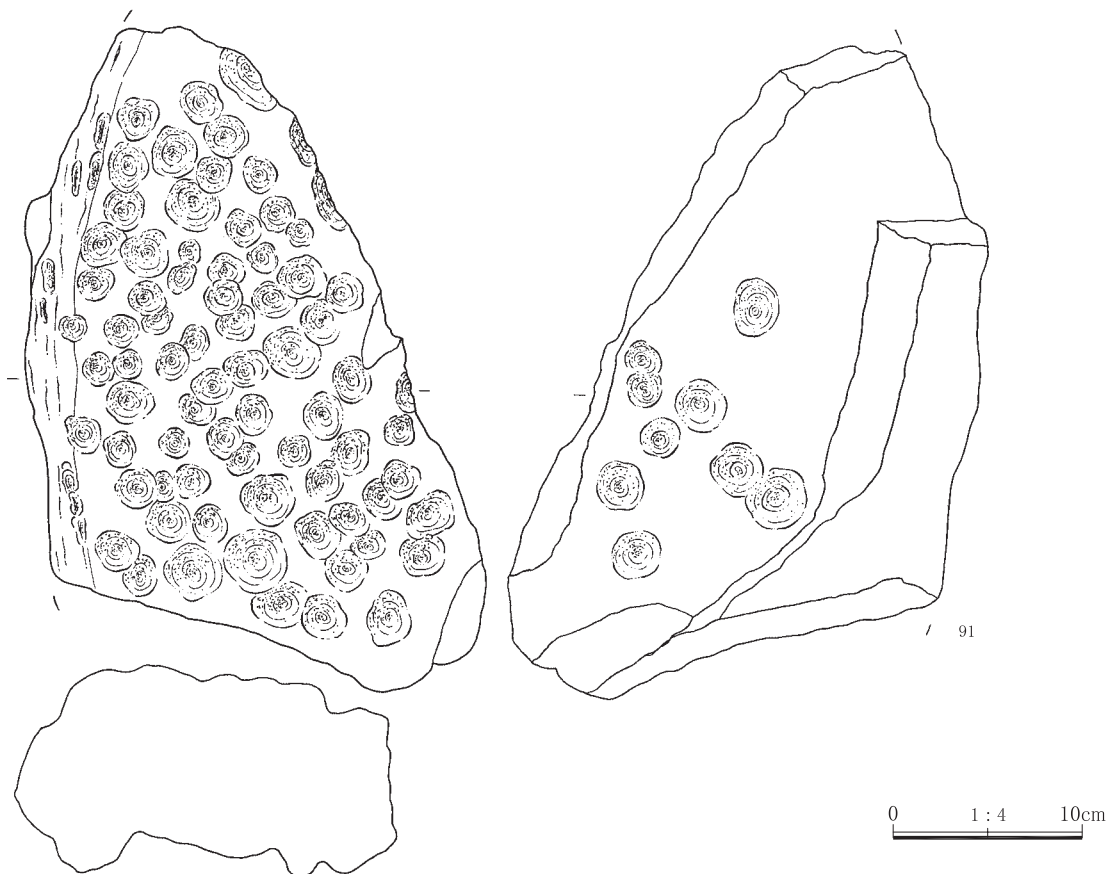


第 348 图 33 号住居出土遺物 (4)

III 今井見切塚遺跡の調査



第349図 33号住居出土遺物(5)



第350図 33号住居出土遺物(6)

● 34号住居

位置 CK-112

写真 PL 141

面積 5.12 m²

方位 N 58度E

重複 33号住居を切っているが、北壁を共有しており、建て替えにより縮小された状況を示唆している。また、南東隅で諸磯c式期の71号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、東西に長軸を持つ平行四辺形に近似した隅丸長方形を呈し、規模は長辺3.00m×短辺2.30m、深さ73～78cmである。四辺の壁面は約80度前後の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

床面 勾配約4度の斜面地のローム層(VI～IX層)を最大78cm掘り込んで床面を構築する。傾斜や凹凸面の少ない平坦な床面であるが、踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ約80cmの1～8層がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示している。

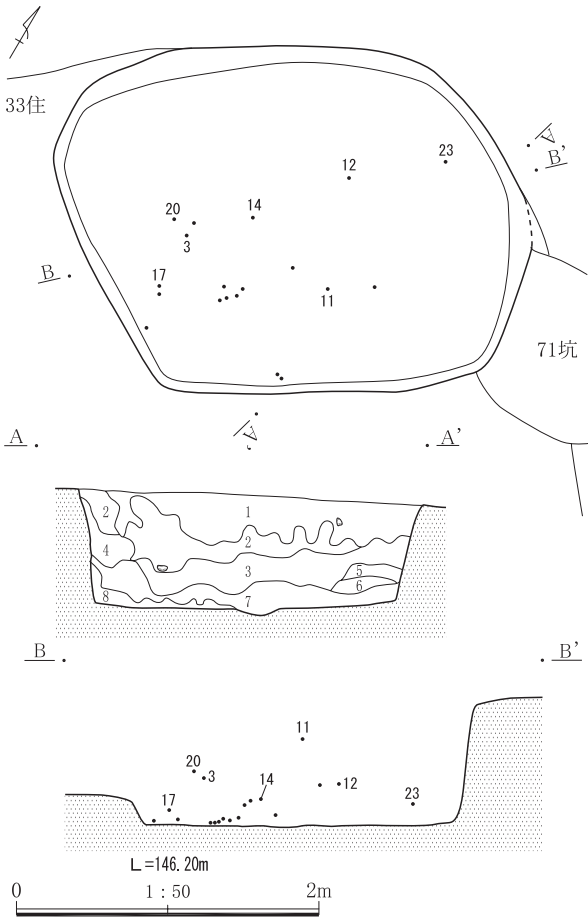
遺物 総数79点の遺物(土器45、石器34)が存在するが、床面に密着したものは皆無であり、埋没土上位の1～3層を中心に床面から浮いた状態で出土した。主な土器は、諸磯c式の集合沈線文22点(1～5・7・8・10)、集合沈線文+縄文1点(9)、縄文施文5点(11～13)、構成不明1点(15)などや、諸磯b式1点(6)、浮島・興津式系1点(14)などがある。この他に、井草式2点、稻荷台式1点、早期沈線文3点、型式不明8点が混在する。尚、4・10、11・13の各破片は各々同一個体である。石器は、削器2点(16・17)、磨り石類7点(18～23)、石核1点、剥片10点、礫塊14点などが組成するのみであり、器種・数量ともに乏しい。また、黒曜石の石核や剥片類6点の内の2点について、X線回折試験による産地同定を行い、全て和田峠系2(星ヶ塔)という結果を得ている。

III 今井見切塚遺跡の調査

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯c式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

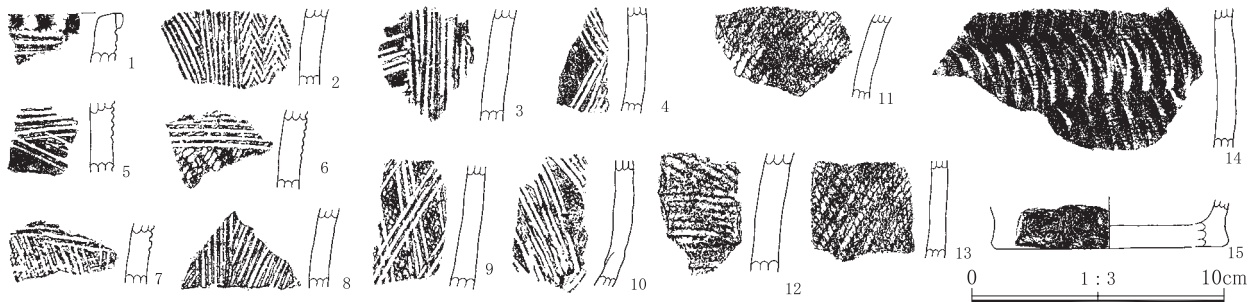
(観察表: 55・66頁)

その他 精査にもかかわらず、炉・柱穴・周溝は検出されなかった。



埋没土層

1. 黒褐色土 (10YR2/3) を主体に暗褐色土 (10YR3/4) が40%混入。少量の炭化物粒含有。
2. 暗褐色土を主体に黒褐色土が40%混入。少量の炭化物粒含有。
3. 黒褐色土を主体に暗褐色土やローム土が各5%混入。少量の炭化物粒含有。
4. ローム土 (VI・VII層) を主体に褐色土が10%混入。少量の炭化物粒含有。
5. 黒褐色土と暗褐色土とが1:1で混入。少量の炭化物粒含有。
6. ローム土 (VI・VII層) を主体に褐色土が5%混入。少量の炭化物粒含有。
7. 暗褐色土を主体に黒褐色土が30%混入。少量の炭化物粒含有。
8. ローム土 (VI・VII層) の崩落・混土層。



第351図 34号住居と出土遺物

【34号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	稲荷台	沈線	諸磯b	諸磯c	浮・興	時期不明	総計
合計	2	1	3	1	29	1	8	45

分類別点数

諸磯b式		諸磯c式							
分類	3c類	分類	3a類	3b類	3c類	3	4c類	4d類	4
合計	1	合計	1	1	7	14	3	1	2

浮島・興津式系

浮島・興津式系		縄文原形別点数			浮島・興津式系		
分類	2a	諸磯b式	諸磯c式		分類	18	
合計	1	分類	2b	分類	2a	2b	18
		合計	1	合計	2	2	9

胎土別点数

胎土	型式	諸磯b	諸磯c	浮・興
A		1	11	1
B		—	2	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他			総計
器種	搔器・削器	磨石類	剥片	石核	礫塊	
合計	2	7	10	1	14	34

分類別点数

搔器・削器		磨石類					
分類	2類	2類			4類		
合計	2	形態	a	abc	ac	abc	ac
		合計	2	1	1	2	1

石材別の点数と重量

搔器・削器		磨石類		剥片			
コード	1	コード	4	コード	1	9	12
点数	2	点数	7	点数	4	1	5
重量	47.6	重量	3667	重量	19.4	18.8	11

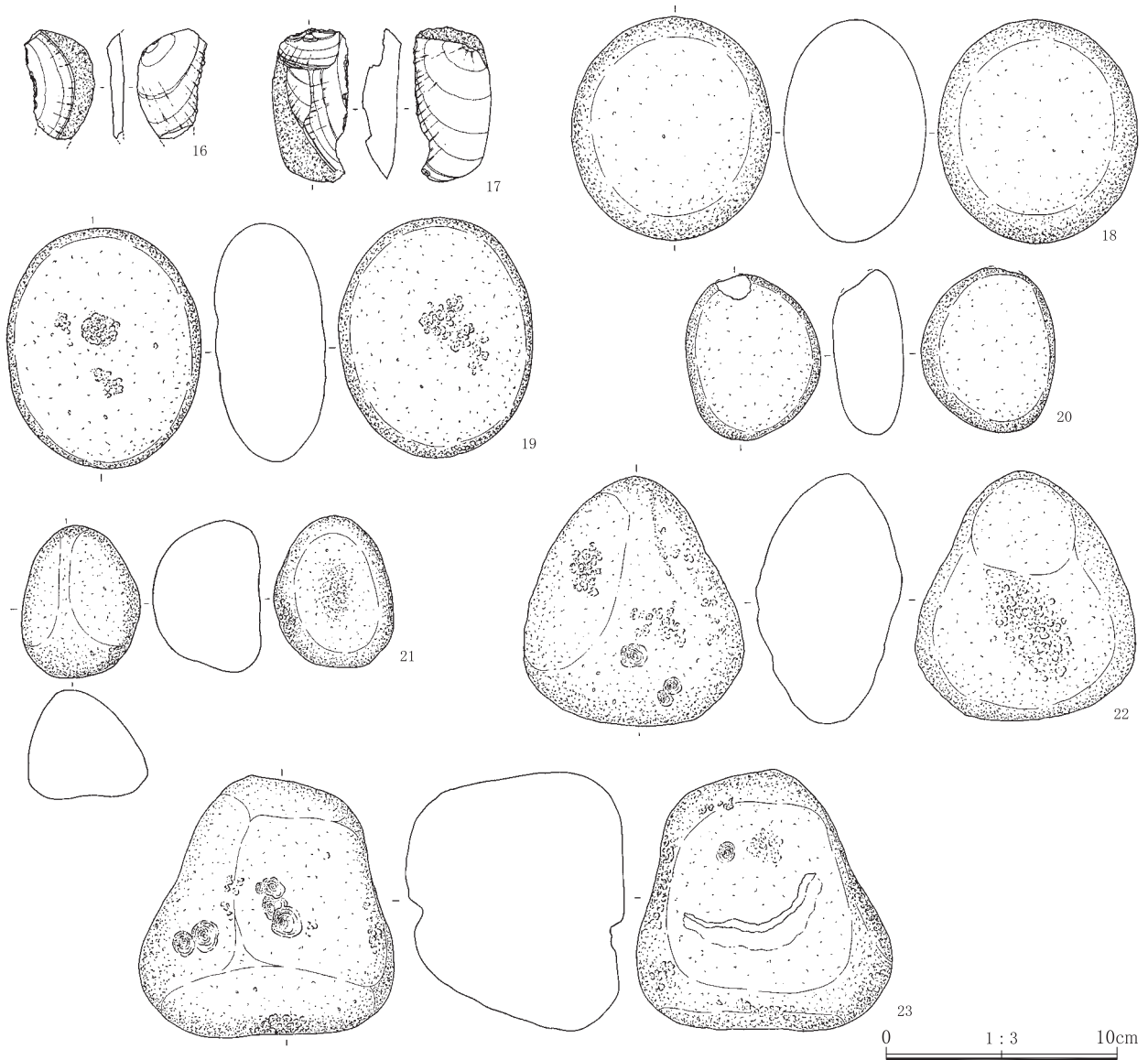
石核		礫塊			
コード	12	コード	4	7	37
点数	1	点数	12	1	1
重量	6.3	重量	1680	239	30.3

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	10	4	14

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4	37
点数	9	1
重量	1234	30.3



第 352 図 34 号住居出土遺物

● 35 号住居

位置 CN-109

写真 PL 141

面積 14.67 m²

方位 N 26 度 E

重複 北西隅および南側で、諸磯 c 式期の 72・75 号土坑と重複するが、新旧関係は不明。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形形状を呈し、規模は長辺 4.81 m × 短辺 4.31 m、深さ 14 ~ 62 cm である。四辺の壁面は約 60 ~ 70 度の角度で掘り込まれ、東辺を除く各辺はほぼ直線的に走行している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、4 本が確認さ

れているが、P1 ~ P4 を連結した形状は住居外形とシンメトリーにならない。南東隅に近接して、未検出の柱穴 1 本が存在したと推定されるが、床面に倒木によると思われる不定形な土壌攪乱があり、確認できなかった。

主な柱穴の芯心間の距離は、P3 ~ P4 : 2.15 m、P4 ~ P1 : 2.30 m である。また、各柱穴の規模 (径 × 深さ) は、P1 : 35 × 42 cm、P2 : 47 × 31 cm、P3 : 44 × 34 cm、P4 : 34 × 21 cm である。

床面 勾配約 6 度の斜面地のローム層 (VI ~ VIII 層) を最大 62 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少

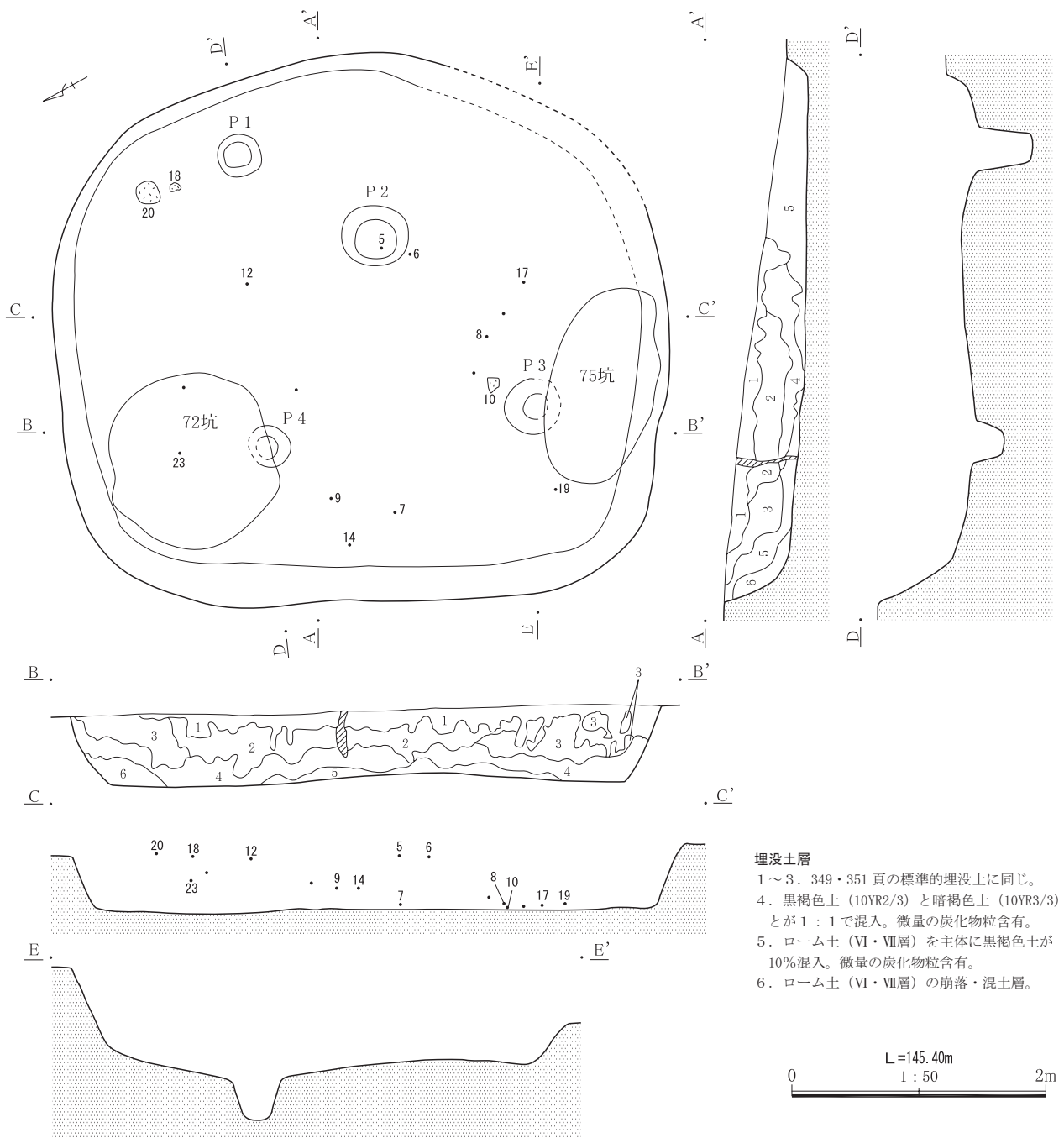
III 今井見切塚遺跡の調査

ないが、自然地形と同様に約 15 cm の比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

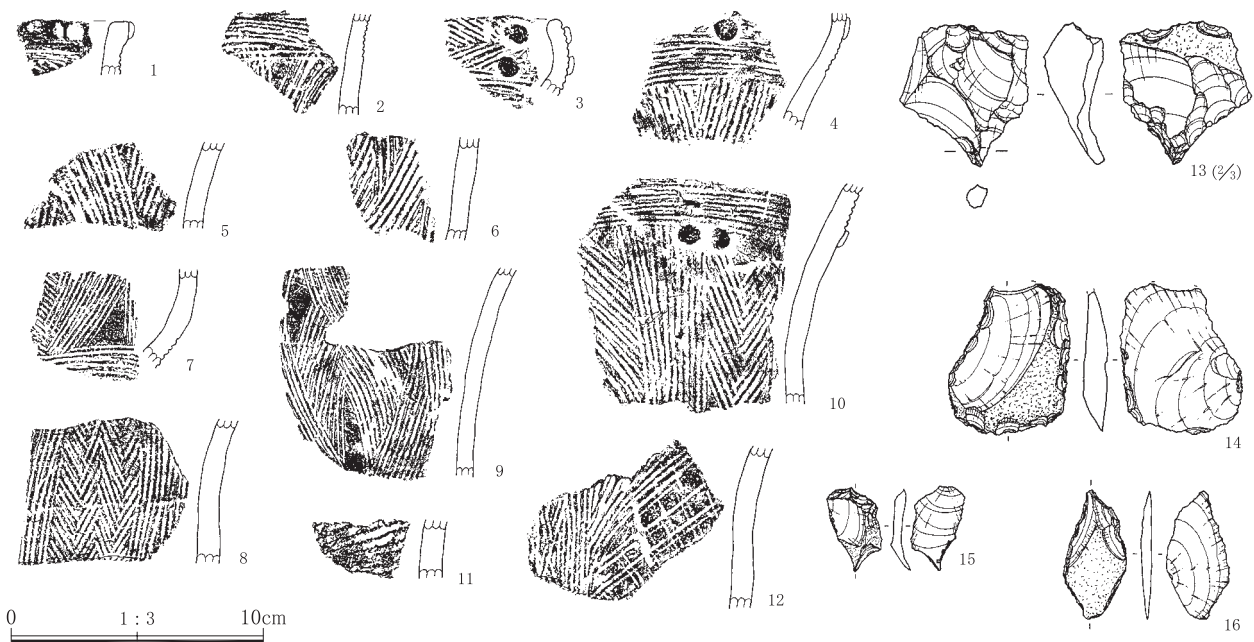
埋没土 厚さ 14 ~ 62 cm の 1 ~ 6 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 128 点の遺物（土器 53、石器 75）が存

在するが、床面に密着したもの（5・6）は少なく、その大半は埋没土上位の 1 ~ 3 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯 c 式の集合沈線文 + 貼付文 3 点（3・4・10）、集合沈線文 23 点（1・2・5 ~ 9・12）、縄文施文 5 点（11）の他に、井草式 1 点、諸磯 b 式 9 点、後期前半 1 点、型式不明 11 点などがある。尚、2・12、3・4・10、5・



第 353 図 35 号住居



第354図 35号住居出土遺物(1)

6、7・9の各破片は各々同一個体である。石器は、石錐1点(13)、削器5点(14～16)、打製石斧1点(17)、磨り石類4点(18・19・21・22)、多孔石2点(20・23)、剥片60点、礫塊2点などが組成する。また、黒曜石製の製品(13・15)や剥片類を含めた31点の内の30点について、X線回折試験による産地同定を行い、和田峠系1(東餅屋・西餅屋)10点、和田峠系2(星ヶ塔)11点、蓼科系9点という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が小破片ながらいずれも諸磯c式によって構成されることから、当該期の所産と想定される。(観察表:55・56頁)
その他 精査にもかかわらず、炉・柱穴・周溝は検出されなかった。

【35号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	諸磯b	諸磯c	後期前半	時期不明	総計
合計	1	9	31	1	11	53

分類別点数

諸磯b式		諸磯c式						
分類	3類	分類	1類	3類			4類	
合計	9	種別	b2	a	c	不明	c	不明
合計	9	合計	3	1	10	12	1	4

縄文原形別点数

諸磯c式		
分類	1a	18
合計	1	14

胎土別点数

型式		諸磯c
胎土	A	11
	B	4

(石器)

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列	複合技術系列	その他		総計
器種	石錐	削器類	打斧	磨り石類	多孔石	剥片	礫塊	
合計	1	5	1	4	2	60	2	75

分類別点数

石錐		搔器・削器		打製石斧		多孔石		
分類	2類	分類	1類	2類	分類	2類	分類	4類
合計	1	合計	2	3	合計	1	形態	abc
							合計	2

磨り石類

分類	1類	2類	4類
形態	a	ac	abc
合計	1	2	1

石材別の点数と重量

石錐		磨り石類		
コート	12	コート	4	20
点数	1	点数	3	1
重量	4.7	重量	1564	442

搔器・削器

コート	1	9	12
点数	2	1	2
重量	35.3	10.2	3.9

打製石斧

コート	1
点数	1
重量	166

多孔石

コート	4
点数	2
重量	6298

剥片

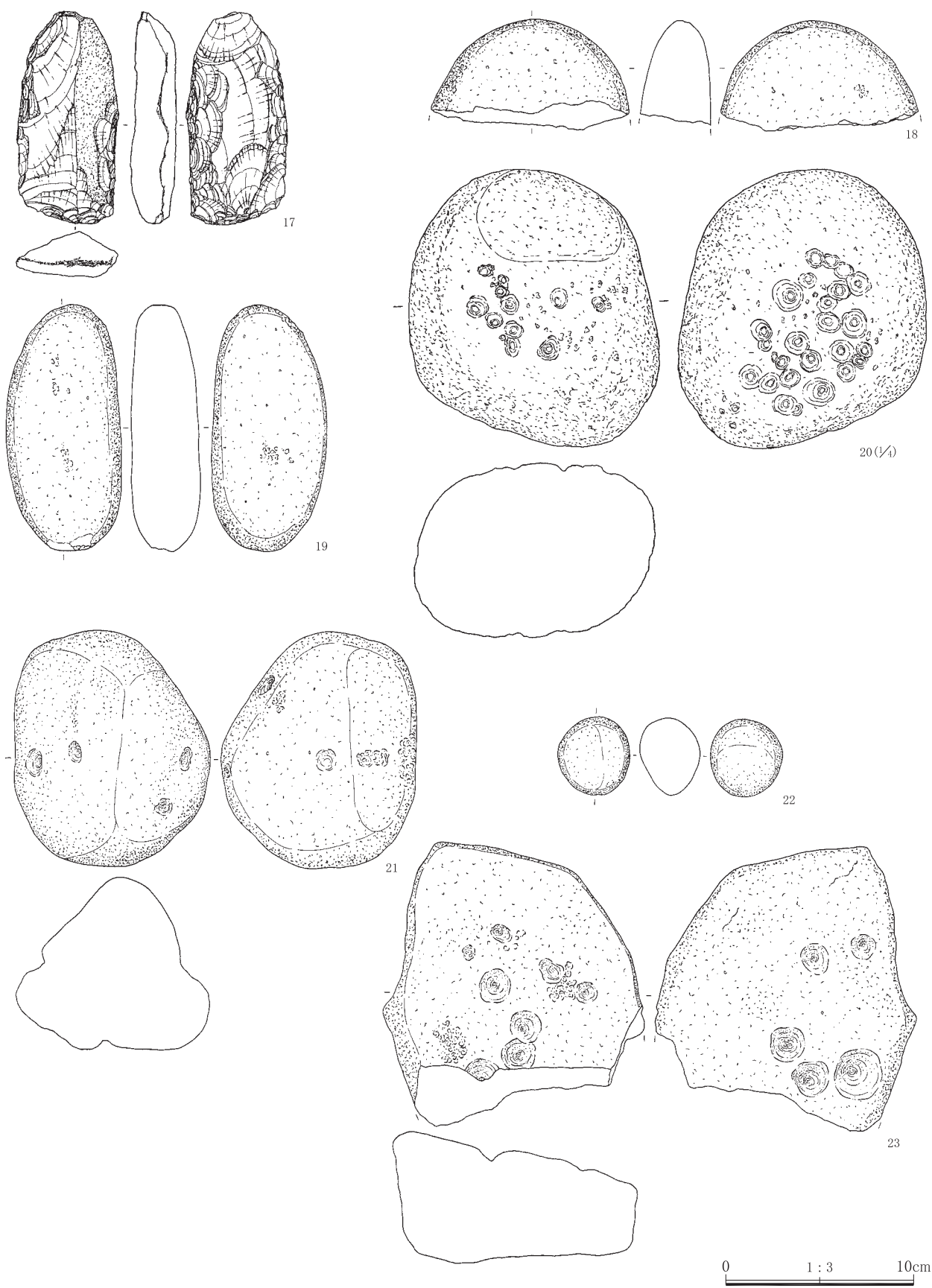
コート	1	2	7	9	12	33	礫塊	
コート							コート	4
点数	23	3	1	4	28	1	点数	2
重量	141	6.1	4.2	20.2	52.2	0.4	重量	119

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	1	1	2

被熱礫の石材別点数と重量

コート	4
点数	1
重量	22.3



第 355 図 35 号住居出土遺物 (2)

● 36号住居

位置 BX -98

写真 PL 142・143

面積 15.43 m²

方位 N 82度W

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 4.82 m × 短辺 3.80 m、深さ 6～39 cmである。四辺の壁面は約 70～80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部から南壁と西壁寄りの2カ所で、2基が確認された。1号炉は体部下半を欠損する深鉢土器（1）を埋設し、その掘方は直径 30 cm × 深さ 10 cmの挿り鉢状である。土器内の埋設土は少量の焼土粒を含む程度だが、土器には被熱風化が認められる。2号炉は楕円形状の浅い掘り込み炉であり、長径 36 × 短径 22 × 深さ 8 cmの規模を持つ。埋設土内には焼土の堆積が乏しいが、壁面は部分的ながら被熱により焼土化している。尚、両炉の時間的な先後関係は不明。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、4本が確認されている。P1～P4を連結した形状は、住居外形とほぼシンメトリーであり、4本主柱の構造と考えられる。各主柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:2.15 m、P2～P3:2.70 m、P3～P4:2.40 m、P4～P1:3.00 mである。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1:28 × 32 cm、P2:34 × 33 cm、P3:23 × 51 cm、P4:30 × 50 cmである。

床面 勾配約5度の斜面地のローム層（VI・VII層）を最大 39 cm掘り込んで床面を構築する。傾斜や凹凸面の少ない平坦な床面であるが、踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋設土 厚さ約 40 cmの2～3層がレンズ状に堆積し、自然埋設状況を示している。

遺物 総数 154 点の遺物（土器 102、石器 52）が存在するが、床面に密着したもの（33・40）は少なく、その大半は埋設土上位の2層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯c式の集合沈線文+貼付文 23 点（1・14～18）、集合沈線文 32 点（2・3・

【36号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯c	浮・興	時期不明	総計
合計	80	3	19	102

分類別点数

諸磯c式

浮島・興津式系

分類	1類				3類				4類				分類	5
	b2	不明	c	d	不明	b	c	d	不明					
合計	15	8	24	1	7	5	4	5	11	合計	3			

縄文原形別点数

諸磯c式

浮島・興津式系

分類	1a	18
合計	9	45

分類	18
合計	3

胎土別点数

胎土	型式		諸磯c	浮・興
	諸磯c	浮島・興津式系		
A	54	3		

(石器)

器種別点数

器種	打製系列				使用痕系列	複合技術系列
	石鏃	削器類	打斧	礫器		
合計	1	7	1	1	5	1

その他			総計
剥片	自然石	礫塊	
31	2	3	52

分類別点数

石鏃

搔器・削器

打製石斧

分類	10類
合計	1

分類	1類	2類
合計	3	4

分類	2類
合計	1

磨石類

多孔石

分類	1類	4類
形態	ac	a abc
合計	1	2

分類	4類
形態	bc
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃

搔器・削器

打製石斧

コード	12
点数	1
重量	0.8

コード	1	4	12
点数	4	1	2
重量	150	217	12.5

コード	1
点数	1
重量	29.1

礫器

磨石類

多孔石

コード	1
点数	1
重量	235

コード	4
点数	5
重量	1796

コード	4
点数	1
重量	3011

剥片・砕片

礫塊

コード	1	7	12
点数	17	3	11
重量	253	42.4	4.5

コード	1	4
点数	1	2
重量	2.6	980

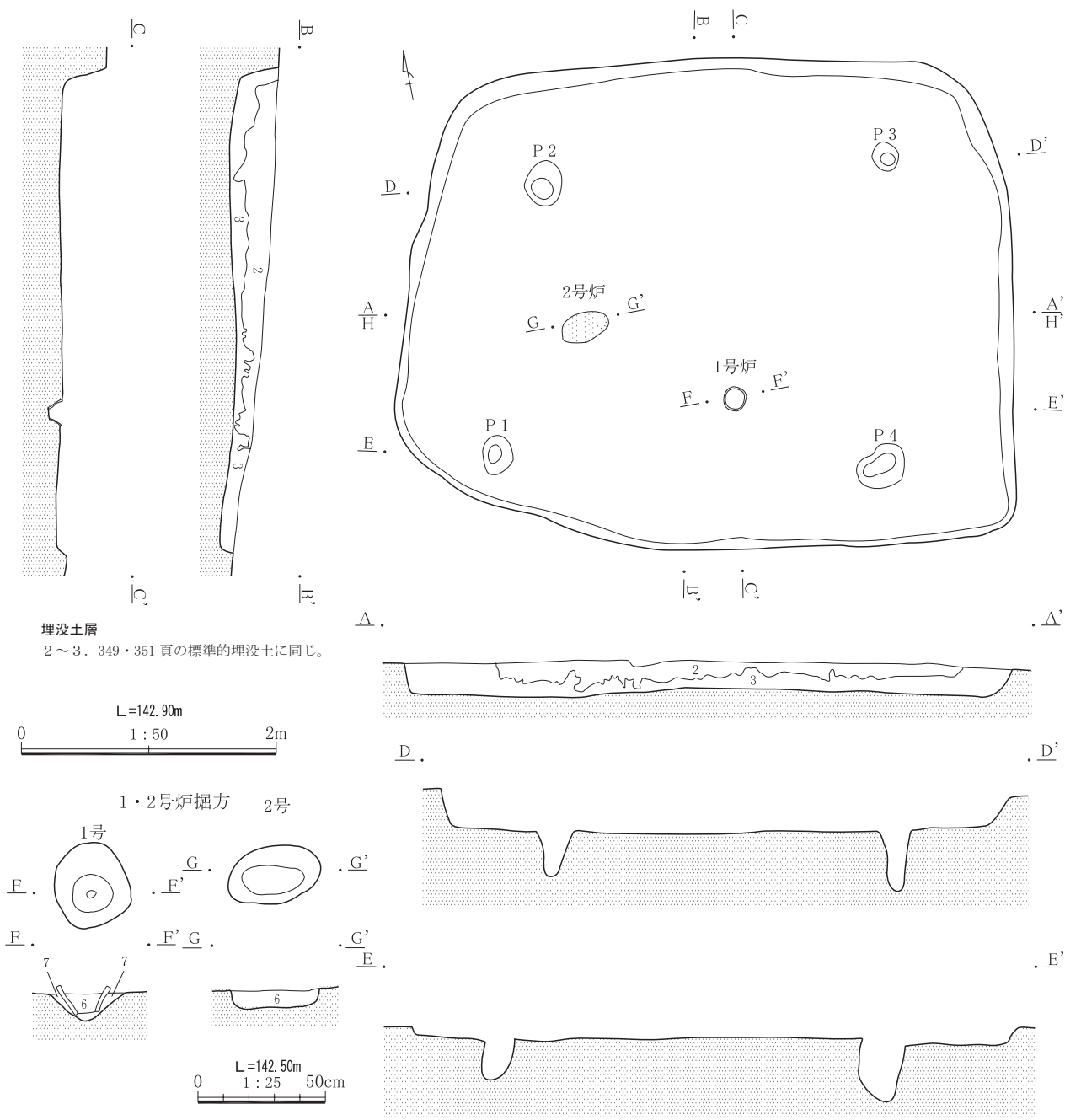
礫塊の被熱状況

被熱礫の石材別点数と重量

分類	1	2	総計
合計	2	1	3

コード	4
点数	2
重量	980

III 今井見切塚遺跡の調査



第 356 図 36 号住居 (1)

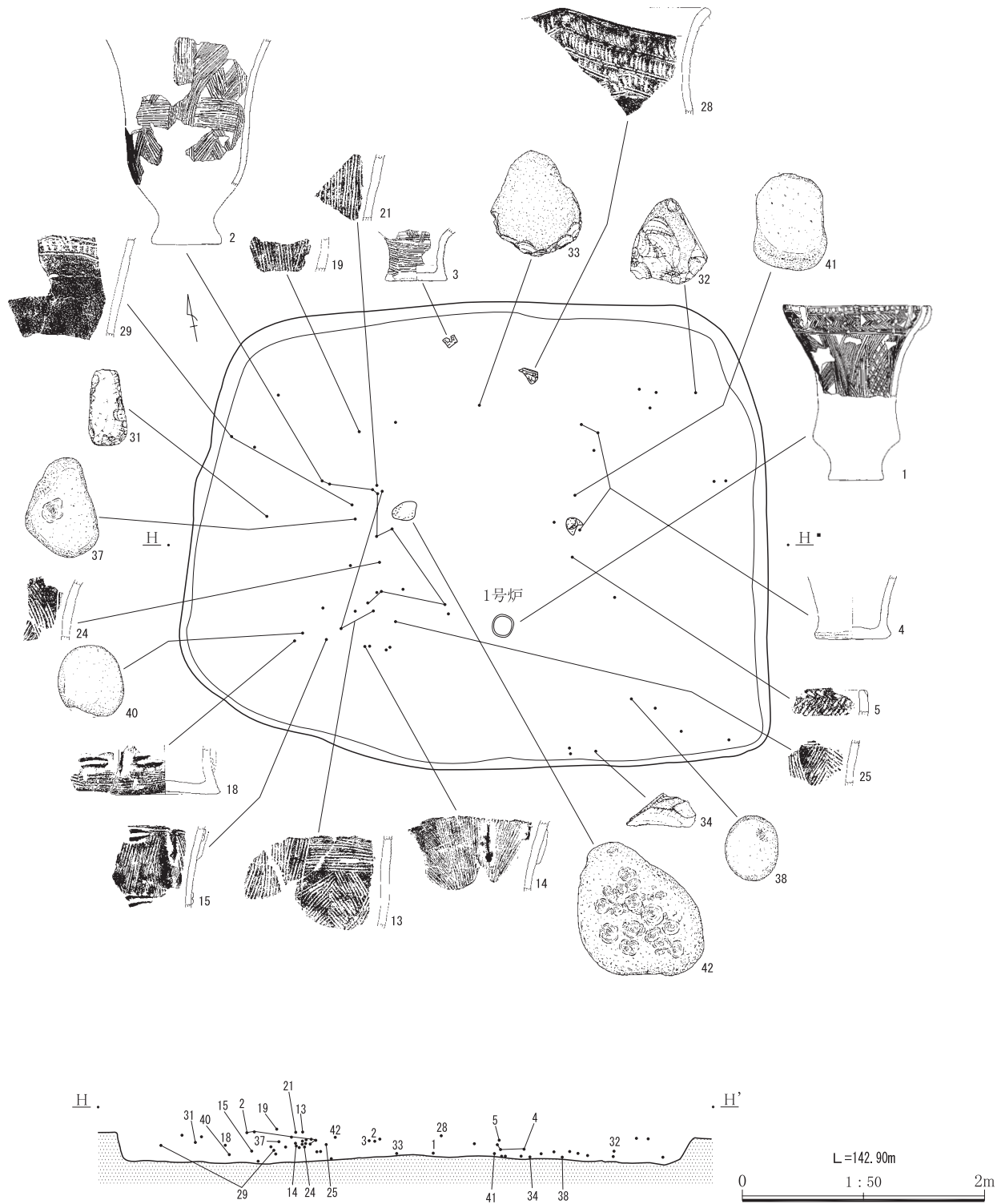
13・19～26)、全面縄文 20 点 (5～12)、無文 5 点 (4・27) と、浮島・興津式系 3 点 (28・29) の他に、型式不明 19 点などがある。尚、5・8・10、6・7・9・11・12、13・19・21～24、28・29 の各破片は各々同一個体である。石器は、石鏃 1 点 (30)、削器 7 点 (34～36)、打製石斧 1 点 (31)、礫器 1 点 (32)、磨り石類 5 点 (37～41)、多孔石 1 点 (42)、剥片 31 点、礫塊 5 点などが組成する。また、黒曜石製の製品 (30)

や剥片類を含めた 14 点の全てについて、X線回折試験による産地同定を行い、和田峠系 1 (東餅屋・西餅屋) 11 点、和田峠系 2 (星ヶ塔) 1 点、高原山系 2 点という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯 c 式によって構成されており、当該期の所産と想定される。

(観察表: 55・66・67 頁)

その他 周溝は検出されなかった。

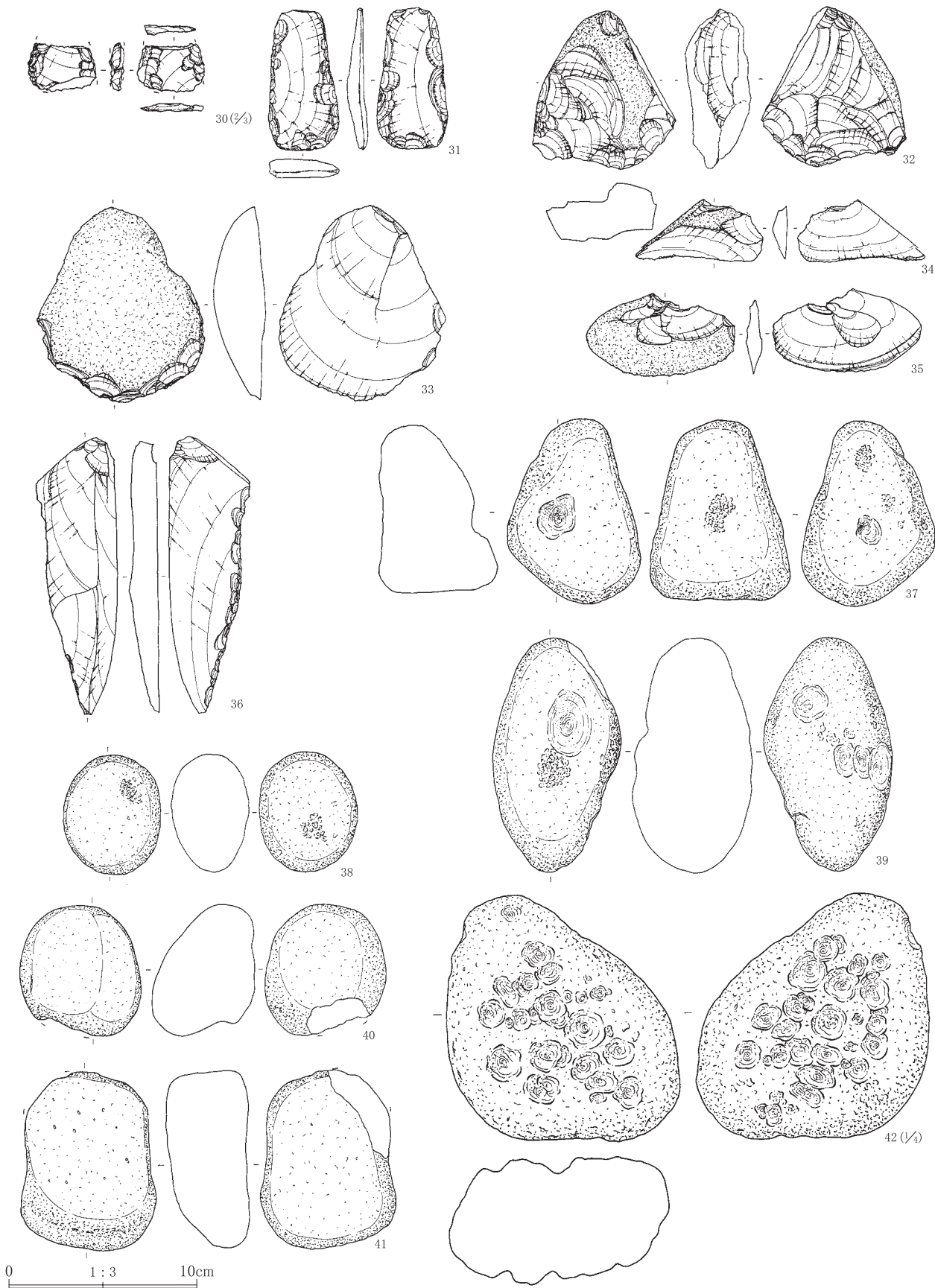


第357图 36号住居(2)

III 今井見切塚遺跡の調査



第 358 図 36 号住居出土遺物 (1)



第359图 36号住居出土遗物(2)

● 37号住居

位置 AG-72

写真 PL 143

面積 不明

方位 N 80度W

形状 現代の畑耕作による削平を受け、南辺の立ち上がりを確認できないが、斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長形状と推定される。残存する短辺は2.24 m、深さ22 cmである。残存不良のために壁面の状況は判然としないが、各辺はやや外湾気味に張り出している。

炉 床面中央部からやや南壁寄りに、1基が確認された。楕円形状の地床炉であり、長径31×短径25 cmの範囲に焼土の散布が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、東壁に接して2本が確認されただけであり、その構造は判然としない。各柱穴の芯心間の距離は、P1～P2：1.35 mである。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：32×27 cm、P2：27×25 cmであり、P2の上位には磨り石（12）が落ち込んでいた。

【37号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	条痕	花積下層	諸磯b	諸磯c	十三菩提	時期不明	総計
合計	2	7	7	6	1	10	33

分類別点数

花積下層式			諸磯b式			諸磯c式		十三菩提式
分類	2a類	2類	分類	2類	4類	分類	4c類	分類
合計	3	4	種別	b2	c	不明	合計	6
			合計	1	1	5	合計	1

縄文原体別点数

花積下層式		諸磯b式		諸磯c式		十三菩提式		
分類	4a	分類	2a	18	分類	1a	2b	分類
合計	3	合計	1	1	合計	1	5	合計
								18
								1

胎土別点数

胎土	型式	花積下層	諸磯b	諸磯c	十三菩提
A	—	—	2	—	1
B	—	—	—	5	—
C	3	—	—	—	—
F	—	—	—	1	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計	
器種	搔器・削器	磨石類	剥片 自然石		
合計	2	4	11	2	19

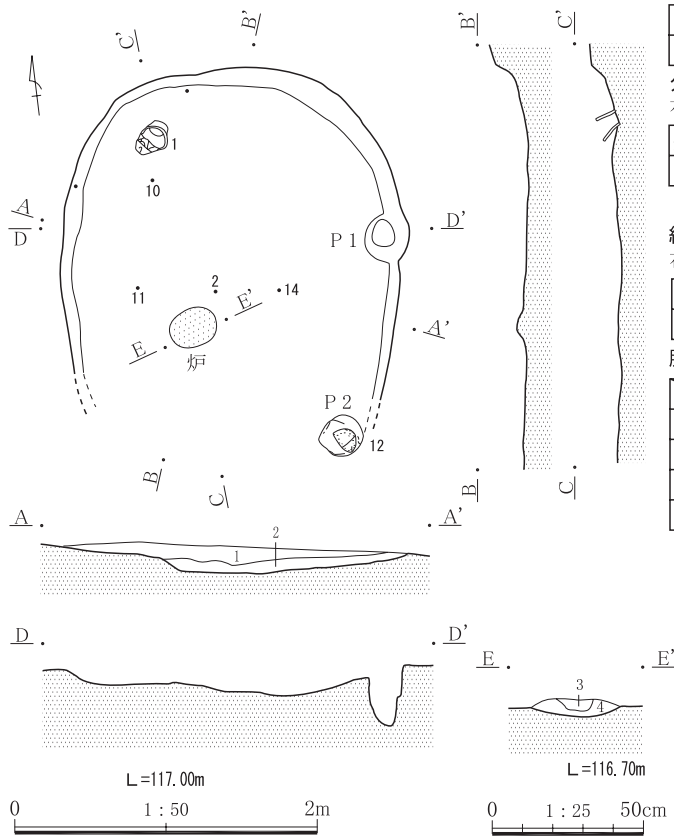
分類別点数

搔器・削器		磨石類				
分類	2類	分類	2類	4類		
合計	2	形態	ac	b	c	ac
		合計	1	1	1	1

石材別の点数と重量

搔器・削器		磨石類		
コード	2	28	コード	4
点数	1	1	点数	4
重量	2.4	33.2	重量	1964

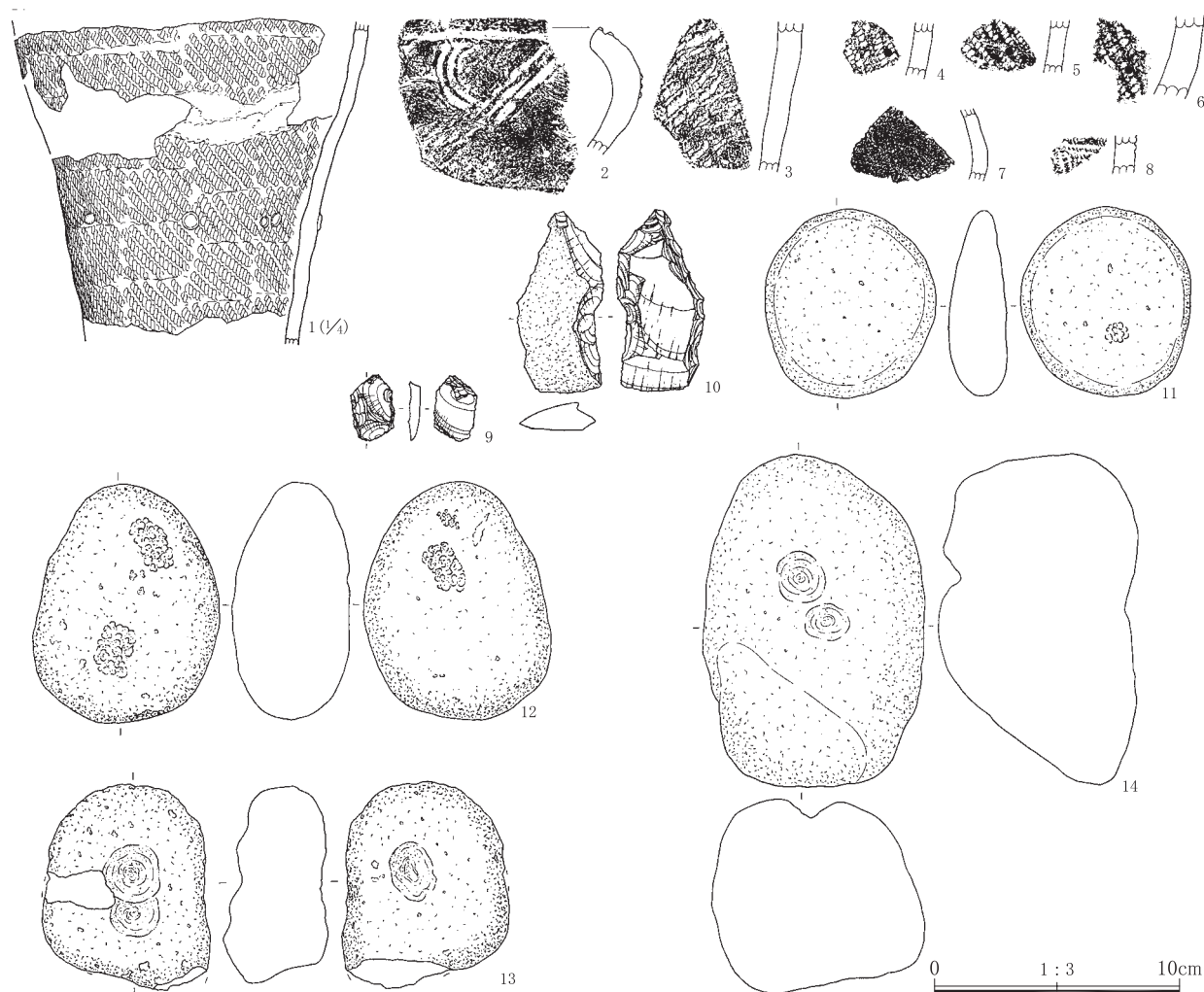
剥片					
コード	1	2	7	9	37
点数	5	3	1	1	1
重量	23.6	8.3	1.5	1.1	9.4



埋没土層

1. 暗褐色土（10YR3/4）を主体に黒褐色土が40%混入。少量の炭化物粒含有。
2. 暗褐色土とローム土とが1：1で混入。微量の炭化物粒含有。
3. 焼土ブロックを主体にローム土が10%混入。少量の炭化物粒含有。
4. ローム土を主体に焼土粒が5%混入。微量の炭化物粒含有。

第360図 37号住居



第 361 図 37 号住居出土遺物

床面 緩斜面地のローム層（Ⅵ・Ⅶ層）を最大 22 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸の多い床面であり、踏み固めによる硬化面も認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 薄層ながら厚さ 20 cm の 1・2 層がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示すと考えられる。

遺物 僅かに 52 点の遺物（土器 33、石器 19）が存在するが、床面に密着したもの（1・2）は少なく、その大半は埋没土上位の 1 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯 c 式の縄文施文 6 点（1・3）の他に、諸磯 b 式の浮線文 1 点（2）・無文浅鉢 1 点（7）・構成不明 5 点や、花積下層式 7 点（4～6）、十三菩提式 1 点（8）、型式不明 10 点などがある。石器は、削器 2 点（9・10）、磨り石類

4 点（11～14）、剥片 11 点、礫塊 2 点などが組成するのみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、床面に密着して出土した 1 の諸磯 c 式土器の存在から、当該期の所産と想定される。（観察表：55・67 頁）

その他 周溝は検出されなかった。

III 今井見切塚遺跡の調査

● 38号住居

位置 CD -108 写真 PL 144・145

面積 18.22 m² 方位 N 47 度 E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 5.47 m × 短辺 4.66 m、深さ 16 ~ 48 cm である。四辺の壁面は約 60 ~ 70 度の緩い角度で掘り込まれ、各辺はやや外湾気味に張り出している。

炉 床面のほぼ中央部に、1 基が確認された。楕円形状の地床炉であり、長径 27 × 短径 15 cm の範囲に焼土の散布が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、4 本が確認されている。P1 ~ P4 を連結した形状は、住居外形とほぼシンメトリーであり、4 本主柱の構造と考えられる。各柱穴の断ち割り調査により、直径約 20 ~ 25 cm の柱痕を確認した。各柱痕の芯心間の距離は、P1 ~ P2 : 2.15 m、P2 ~ P3 : 2.65 m、P3 ~ P4 : 2.30 m、P4 ~ P1 : 2.60 m である。また、各柱穴の規模（径 × 深さ）は、P1 : 40 × 49 cm、P2 : 45 × 61 cm、P3 : 43 × 44 cm、P4 : 48 × 61 cm である。

床面 勾配約 3 度の斜面地のローム層（VI・VII層）を最大 48 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 18 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。また、炉の周辺や主柱の内側を中心にして、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められる。

埋没土 厚さ約 50 cm の 1 ~ 3 層がレンズ状に堆積し、自然埋没状況を示している。

遺物 総数 706 点の多量の遺物（土器 559、石器 147）が存在するが、床面に密着したもの（3・45・48）は少なく、その大半は埋没土上位の 1 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。主な土器は、中期中葉の阿玉台 II 式 8 点（29・30）、藤内式 34 点（1 ~ 5・7 ~ 10・17・23・24・32 ~ 34）、井戸尻式 25 点（18 ~ 22・25 ~ 28・31・35 ~ 39）、大木 8a 式 15 点（6・11 ~ 16）などがある。この他に、井草式 17 点、稻荷台式 3 点、早期沈線文 1 点、花積下層式 1 点、黒浜式 3 点、諸磯 a 式 2 点、同 b 式 2 点、同

【38号住居出土遺物の分類一覧】

（土器）

型式別点数

型式	井草	稻荷台	早期沈線	花積下層	黒浜	諸磯a	諸磯b
合計	17	3	1	1	3	2	2

諸磯c	浮・興	阿玉 II	藤内	井戸尻	大木8a	中期前半	晩期
14	1	8	34	25	15	192	1

型式	時期不明	土製品	総計
合計	236	4	559

分類別点数

花積下層式		黒浜式		3類
分類	2類	分類	2類	
種別	不明	種別	不明	
合計	1	合計	1	2

諸磯a式		諸磯b式		諸磯c式		土製品			
分類	4類	分類	3類	分類	1類	3類	分類	1類	2類
合計	2	合計	2	合計	1	13	合計	3	1

縄文原形別点数

阿玉台 II 式					藤内式				土製品	
分類	18	分類	1a	2a	2b	18	分類	2b	18	
合計	8	合計	14	11	1	8	合計	1	1	

井戸尻式					大木8a式					
分類	1a	2a	2b	9a	18	分類	1a	2b	7a	17
合計	7	2	1	3	12	合計	4	2	6	3

胎土別点数

胎土	型式	阿玉 II	藤内	井戸尻	大木8a	土製品
A		8	33	24	15	2
E		-	-	1	-	-

（石器）

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列			その他			総計
器種	石鏃	削器類	打斧	磨石類	石皿	剥片	石核	自然石	礫塊	
合計	1	3	3	4	1	63	1	9	62	

分類別点数

石鏃		挿器・削器		打製石斧		
分類	2類	分類	2類	分類	2類	8類
合計	1	合計	3	合計	1	2

磨石類				石皿	
分類	2類	4類	5類	分類	5類
形態	ac	a	ac	a	
合計	1	1	1	1	

石材別の点数と重量

石鏃		挿器・削器		打製石斧		磨石類		
コード	7	コード	1	コード	1	4	コード	4
点数	1	点数	3	点数	1	1	点数	4
重量	1.3	重量	48.1	重量	98	26.4	重量	577

石皿		剥片							
コード	4	コード	1	2	4	7	9	12	
点数	1	点数	52	4	1	1	3	2	
重量	407	重量	406	4.9	16	9.8	15.3	0.4	

石核		礫塊		
コード	1	コード	2	4
点数	1	点数	1	61
重量	47.3	重量	6.7	3799

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	23	39	62

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4
点数	23
重量	1726

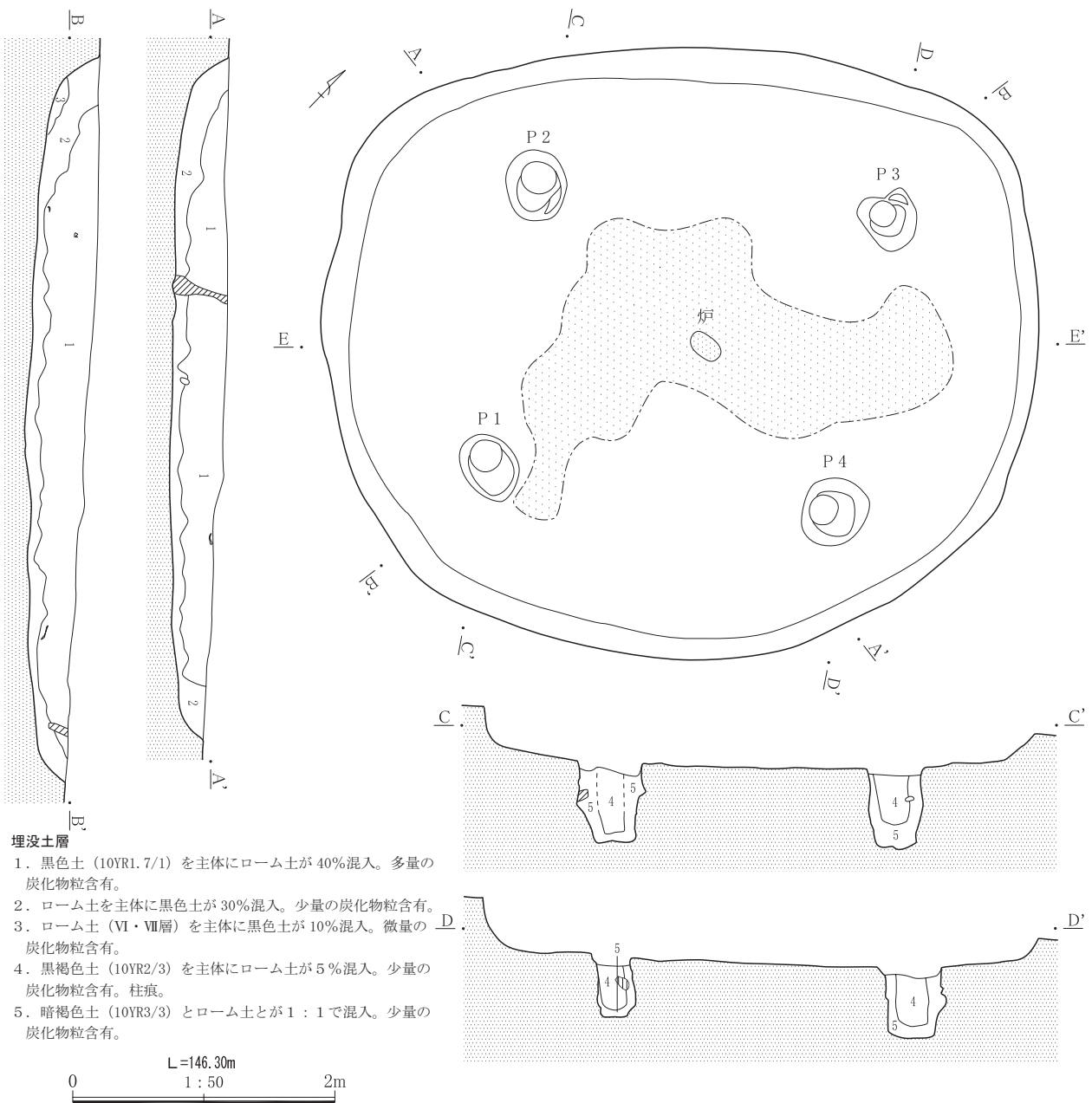
c 式 14 点、浮島・興津式系 1 点、型式不明 236 点が混在する。尚、1・8・9、3・23、5・10、18・19、38・39 の各破片は各々同一個体である。石器は、石鏃 1 点 (42)、削器 4 点 (44・45・48)、打製石斧 2 点 (43・47)、磨り石類 4 点 (49～51)、石皿片 1 点、石核 1 点 (46)、剥片 63 点、礫塊 71 点などが組成する。44 の打製石斧は、石核の可能性もある。これら以外の遺物として、土器片を再利用した円盤状

土製品 2 点 (40・41) や土偶破片 1 点がある。

当住居の時期に関しては、出土土器が多岐にわたっているために確定できないが、総体的には阿玉台Ⅱ～Ⅲ式併行期に比定される可能性が高い。

(観察表: 55・56・57 頁)

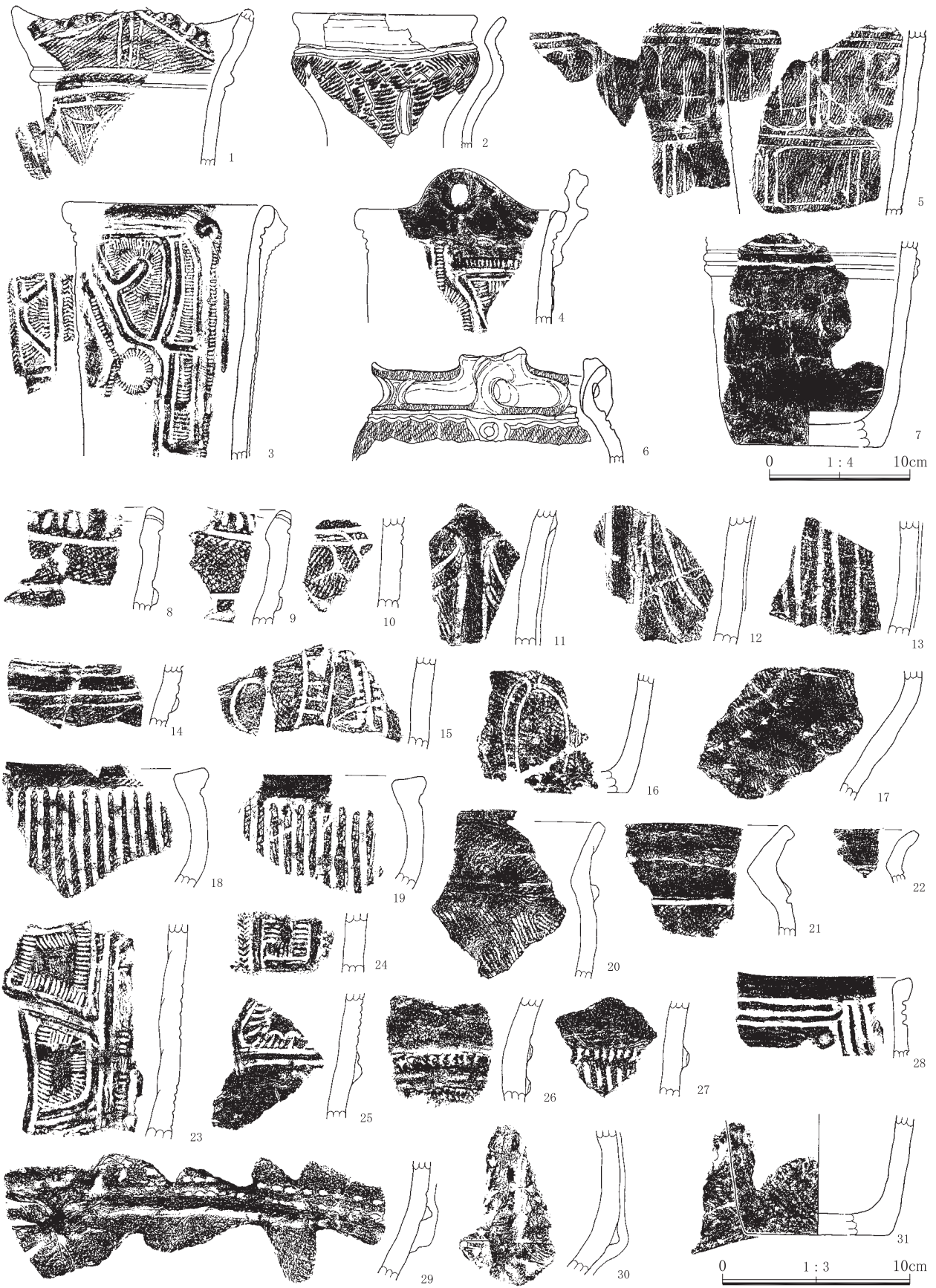
その他 今井見切塚遺跡内では、中期の竪穴住居は当住居 1 棟のみであり、その単独立地性が注目される。周溝は検出されなかった。



第 362 図 38 号住居 (1)



第 363 図 38 号住居 (2)



第 364 图 38 号住居出土遺物 (1)

III 今井見切塚遺跡の調査



第 365 図 38 号住居出土遺物 (2)

● 39号住居

位置 ER-56

写真 PL 146

面積 4.15 m²

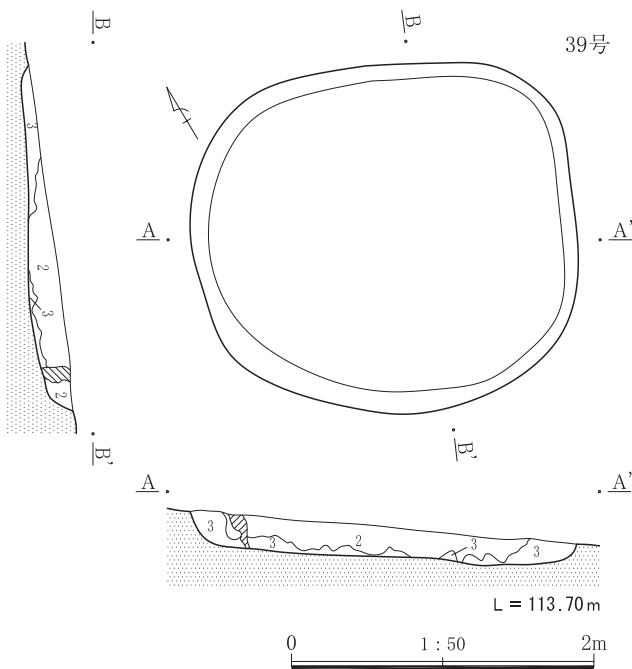
方位 N 63 度W

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺 254 m × 短辺 231 m、深さ 27 cm と小さい。四辺の壁面は約 60 度前後の緩い近い角度で掘り込まれ、各辺はやや外湾気味に張り出している。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI 層) を最大 27 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 15 cm の比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ 30 cm 弱の 2・3 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

その他 炉・柱穴・周溝などの内部施設が存在せず、また出土遺物も皆無であることを考慮すれば、竪穴住居ではない可能性もある。しかし、フラットな床面や埋没土層は縄文時代前期の住居の場合と同様の性状を持っており、ここでは竪穴住居に分類した。



埋没土層

※各層は、349・351 頁の標準的埋没土に同じ。

第 366 図 39 号住居

● 40号住居

位置 DK-22

写真 PL 146

面積 8.95 m²

方位 N 64 度E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸台形状を呈し、規模は長辺 3.50 m × 短辺 3.22 m、深さ 12 ~ 41 cm である。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、東辺を除く各辺はほぼ直線的に走行している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、8 本が確認されている。若干歪んだ配列ではあるが、P2 - P3 - P5 - P6 の 4 本を基本とする支柱構造と考えられる。他の柱穴は補助的なものと推定される。各支柱穴の芯心間の距離は、P2 ~ P3 : 1.20 m、P3 ~ P5 : 2.10 m、P5 ~ P6 : 1.65 m、P6 ~ P2 : 1.70 m である。また、各柱穴の規模 (径 × 深さ) は、P1 : 26 × 41 cm、P2 : 28 × 34 cm、P3 : 22 × 32 cm、P4 : 23 × 36 cm、P5 : 25 × 68 cm、P6 : 32 × 46 cm、P7 : 22 × 19 cm、P8 : 26 × 27 cm である。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI・VII 層) を最大 41 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 30 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。また、部分的ではあるが、北半部の支柱の内側を中心にして、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められる。

埋没土 厚さ約 40 cm の 1 ~ 5 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 僅か 7 点の遺物 (土器 2、石器 5) が、埋没土上位の 1・2 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、稻荷台式 1 点 (1) と諸磯 a 式 1 点 (2) のみであり、石器には削器 1 点 (3) と石皿破片 1 点 (4)、それに剥片 2 点、礫塊 1 点が認められるに過ぎない。出土遺物から当住居の帰属時期を確定することはできないが、住居形態・4 本支柱・埋没土層などの諸要素からみて、諸磯 a 式期の可能性が高い。 (観察表 : 56・67 頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

III 今井見切塚遺跡の調査

【40号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	諸磯a	総計
合計	1	1	2

分類別点数

稲荷台式		諸磯a式	
分類	2a	分類	4a類
合計	1	合計	1

分類別点数

搔器・削器		石皿	
分類	1類	分類	3類
合計	1	合計	1

縄文原体別点数

稲荷台式		諸磯a式	
分類	18	分類	2b
合計	1	合計	1

胎土別点数

胎土	型式	
	稲荷台	諸磯a
A	1	1

石材別の点数と重量

搔器・削器		石皿		剥片		礫塊	
コート	1	コート	47	コート	1	コート	4
点数	1	点数	1	点数	2	点数	1
重量	21.9	重量	4104	重量	9.5	重量	31.5

(石器)

器種別点数

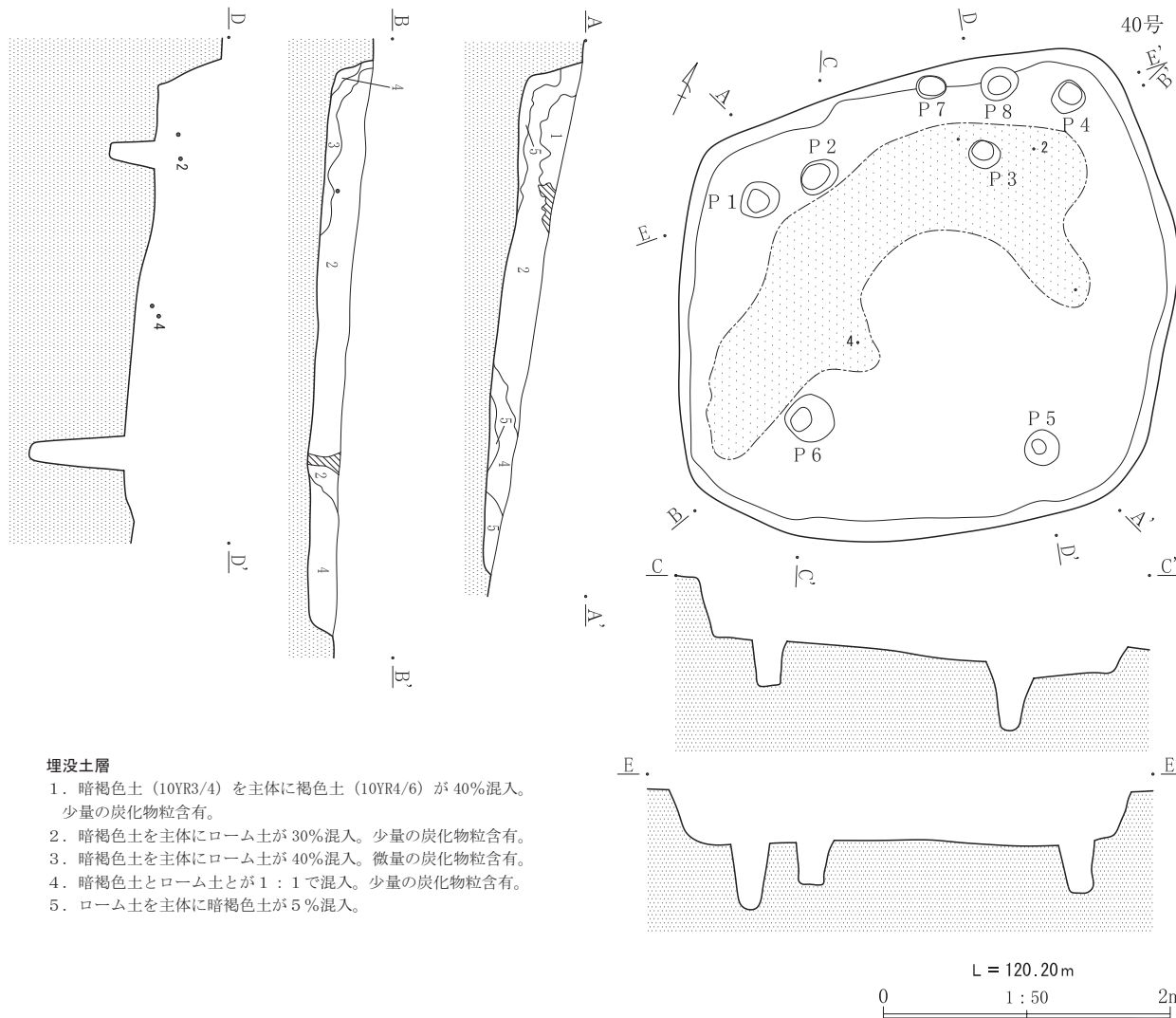
系列	打製系列	使用痕系列	その他		総計
器種	搔器・削器	石皿	剥片	礫塊	
合計	1	1	2	1	5

礫塊の被熱状況

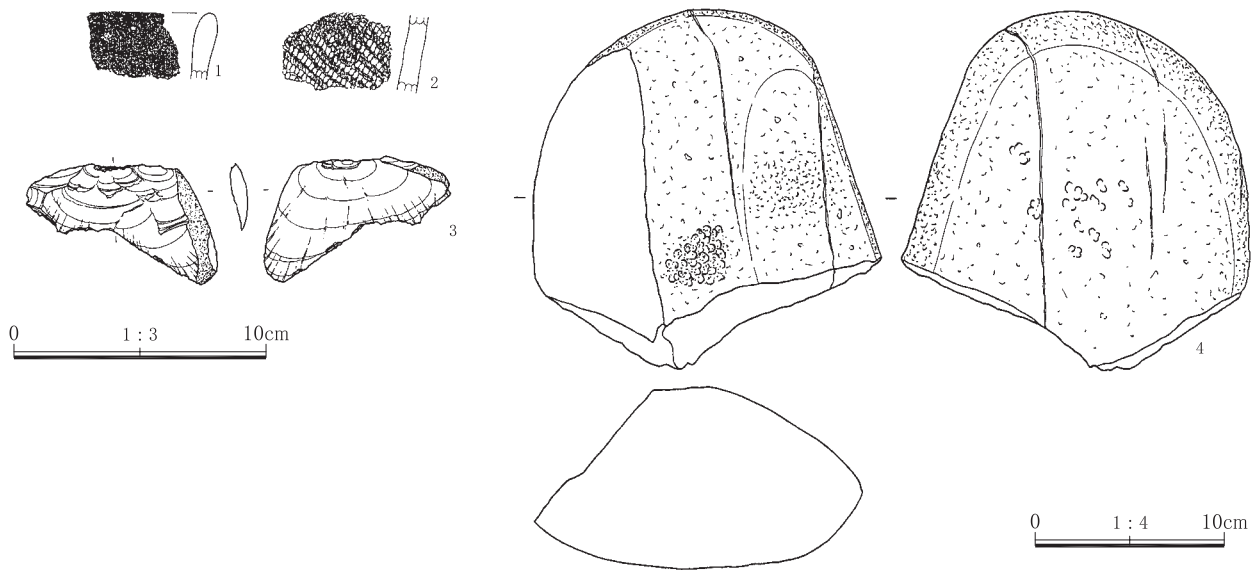
分類	1	総計
合計	1	1

被熱礫の石材別点数と重量

コート	4
点数	1
重量	31.5



第367図 40号住居



第 368 図 40 号住居出土遺物

3. 掘立柱建物

CJ～CV - 46～61 グリッドにまたがる約 2,500 m²の範囲から、掘立柱建物と推定される直径 20～50 cm、深さ 30～80 cm 前後の約 180 個の柱穴を検出している。その検出にあたっては、堅穴住居の確認面である VI 層（ローム層最上位面）上面では、多数の樹木根の貫入もあり、明確に把握することができなかった。しかし、当地点では VI～VII 層にかけて旧石器時代遺物の存在が確認されていたことから、この調査過程の VI 層下面において、1 号掘立柱建物の柱穴を確認したことが、その検出の発端となった。その後、同箇所を中心にして VI 層上面を 5～10 cm 掘り下げての精査を行い、最終的に前述の範囲から柱穴群を確認し得た。

180 個に及ぶ柱穴の中で、その配列状況から掘立柱建物として復元・確認できたのは、僅かに 8 棟のみである。その内容は長辺 3 本×短辺 2 本の 6 本柱を基本とする長形状建物（2×1 間）1 棟と、長・短辺 2 本の 4 本柱による長形状建物（1×1 間）3 棟および正形状建物（1×1 間）4 棟である。調査の都合上、全ての建物の柱穴について断ち割り

調査を実施することができなかったが、いくつかについては、柱痕と推定される埋没土（1・5・9 層）を確認している。また、他の埋没土の質的内容は、前期の諸磯式期の遺構埋没土と類似点が多く、その帰属時期を考定する上で重視される。各柱間の寸法には、2.1 m、2.8 m、3.5 m、4.2 m などのかんりの規格性が認められ、いずれも 35 cm や 70 cm の倍数に該当する点で、何らかの「尺度」が用いられていたことを示すものとして注目される。また、1・3・5・8 号掘立の柱穴埋没土中からは、諸磯 a～b 式期の土器片や石皿片が出土しており、構築時期を示唆すると共に、何らかの儀礼に伴う土器・石器片の埋填行為の存在を窺わせる。

各掘立柱建物の長軸の方位は、東西方向を基本とするグループ（1・4・5 号）と南北方向を基本とするグループ（2・3・6～8 号）に分かれるが、各グループ単位での方位的なぶれが約 30 度前後に収まっており、ある程度の方向性を意識して構築されていることが看取される。尚、1・4・8 号、2・5 号、6・7 号の各掘立柱建物は、相互に重複しており、少なくともその構築が複数期にわたるものであること示しているが、その時期は各柱穴内から出土している土器を考慮すれば、諸磯 a～b 式期段階

III 今井見切塚遺跡の調査

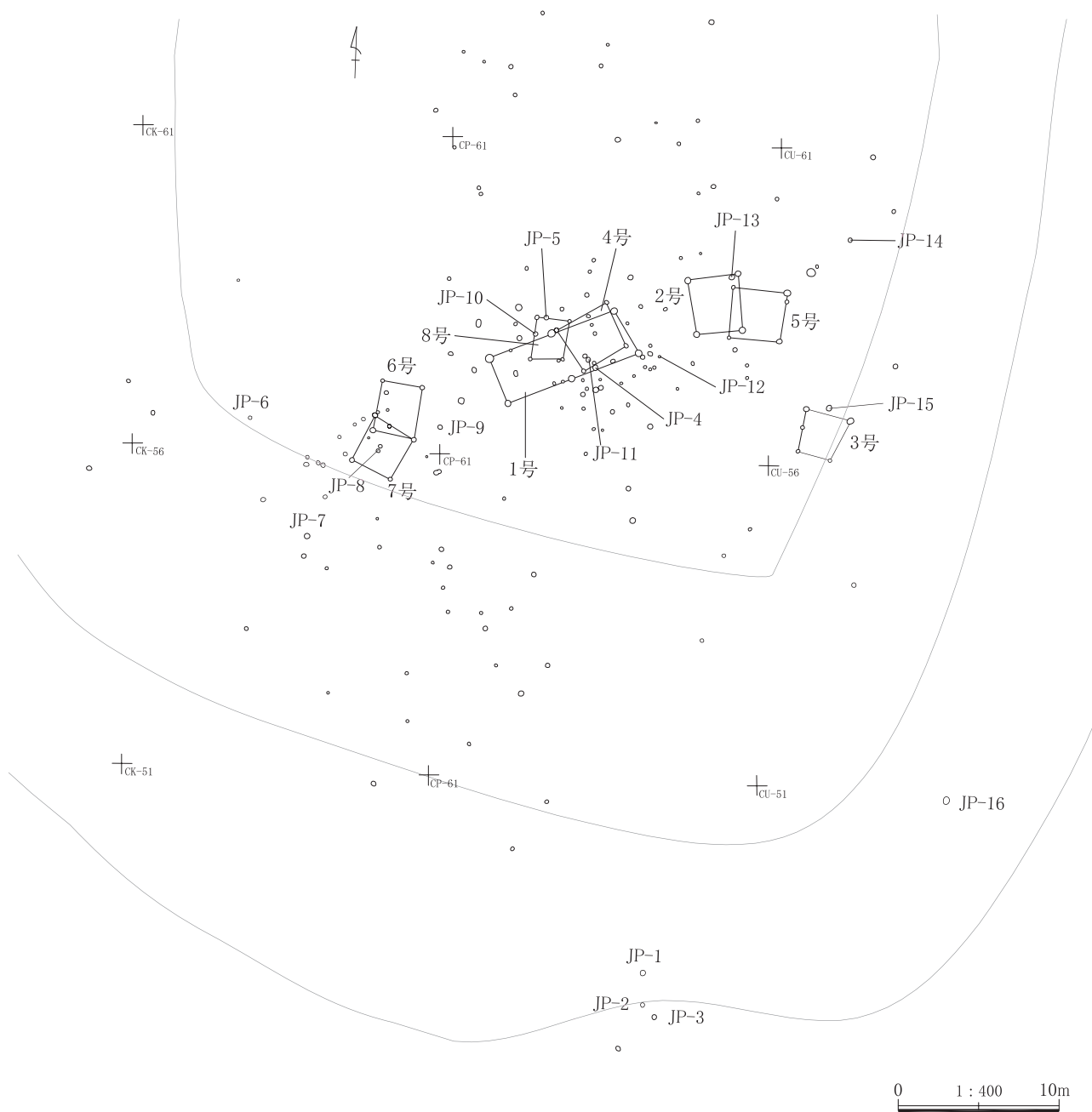
と推定される。

1～8号掘立柱建物やその他の柱穴が群在する地点は、およそ2地点に分かれて散在する竪穴住居群や土坑群が希薄となっているエリアであり、その構築にあたっては何らかの意図的な配置を窺うことができる。

尚、前述の掘立柱建物以外の柱穴については、JP 6～JP16号の埋没土中から、諸磯 a～b 式の土器

片が出土している。また、断ち割り調査を行って柱痕の確認を試みたが、その痕跡（直径 10～20 cm）を明瞭にとどめているものは数個（第 374 図 JP1・JP3・JP4・JP5・JP11 号）に過ぎなかった。こうした点を考慮すれば、その全てが掘立柱建物の柱穴に限定することはできず、樹木痕や小動物による攪乱などが少なからず混在している可能性もある。

（観察表：56・67 頁）



第 369 図 掘立柱建物跡全体図と柱穴群の分布

● 1号掘立

位置 C Q -57 **写真** P L 147
面積 30.28 m² **方位** N 66 度 E
重複 東半部で4号掘立と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ長方形を呈し、規模は長軸8.30～8.70 m×短軸3.05 mである。長軸方向の柱通りは直線的で、極めて整然としている。

柱穴 長軸3本、短軸2本の6本柱構造で、各柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:4.20 m、P2～P3:4.15 m、P3～P4:3.05 m、P4～P5:4.45 m、P5～P6:4.20 m、P6～P1:3.00 mである。長軸方向では、4.2 mあるいは4.5 mを、短軸では3.1 m前後を基本とした柱間と考えられる。また各柱穴の規模（径×深さ）は、P1:約50×49 cm、P2:47×73 cm、P3:44×61 cm、P4:43×50 cm、P5:41×34 cm、P6:40×68 cmである。P2・P5・P6では、断ち割り調査により直径20 cm前後の柱痕（1・5層）を確認している。

遺物 柱穴P2～P4の埋没土中から、6点の遺物（土器2、石器4）が検出されている。P4からは底面に近接して石皿破片（2）と自然礫が各1点出土し、同様にP2では剥片が1点、P3では諸磯a・b式の土器片2点（1）と剥片が1点出土している。P4の石皿については、支石として意識的に埋填された可能性が高い。

その他 帰属時期の特定はできないが、柱穴内の出土遺物を重視すれば、諸磯a・b式期のいずれかに該当する可能性が高い。

● 2号掘立

位置 C S -58 **写真** P L 147
面積 15.58 m² **方位** N 9 度 W
重複 東側1/3が5号掘立と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ台形に近似した長方形を呈し、規模は長軸3.40～3.50 m×短軸2.85～3.20 mである。

柱穴 長・短軸各2本の4本柱構造で、各柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:3.20 m、P2～P3:3.50 m、P3～P4:2.90 m、P4～P1:3.40 mである。長軸は3.5 m前後を、短軸は3 m前後を基本にすると考えられる。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1:40×84 cm、P2:37×45 cm、P3:40×51 cm、P4:37×57 cmである。尚、P1・P2の埋没土断面で、直径20 cm前後の柱痕を確認している。

遺物 柱穴P2の埋没土中より諸磯b式の土器片1点（1）が、またP3内より花積下層式1点がそれぞれ検出されている。

● 3号掘立

位置 C U -56 **写真** P L 148
面積 7.80 m² **方位** N 12 度 E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ台形状を呈し、規模は長軸2.65～2.80 m×短軸2.10～2.80 mである。

柱穴 長・短軸各2本の4本柱構造であり、各柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:2.80 m、P2～P3:2.80 m、P3～P4:2.10 m、P4～P1:2.65 mである。長軸は2.8 m前後を、短軸は2.1 mと2.8 mを基本としていることが窺える。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1:36×37 cm、P2:37×41 cm、P3:23×38 cm、P4:25×46 cmである。尚、P2には掘り直しの痕跡が認められる。

遺物 柱穴P2の埋没土中より、諸磯b式の土器片1点（1）が検出されたのみである。

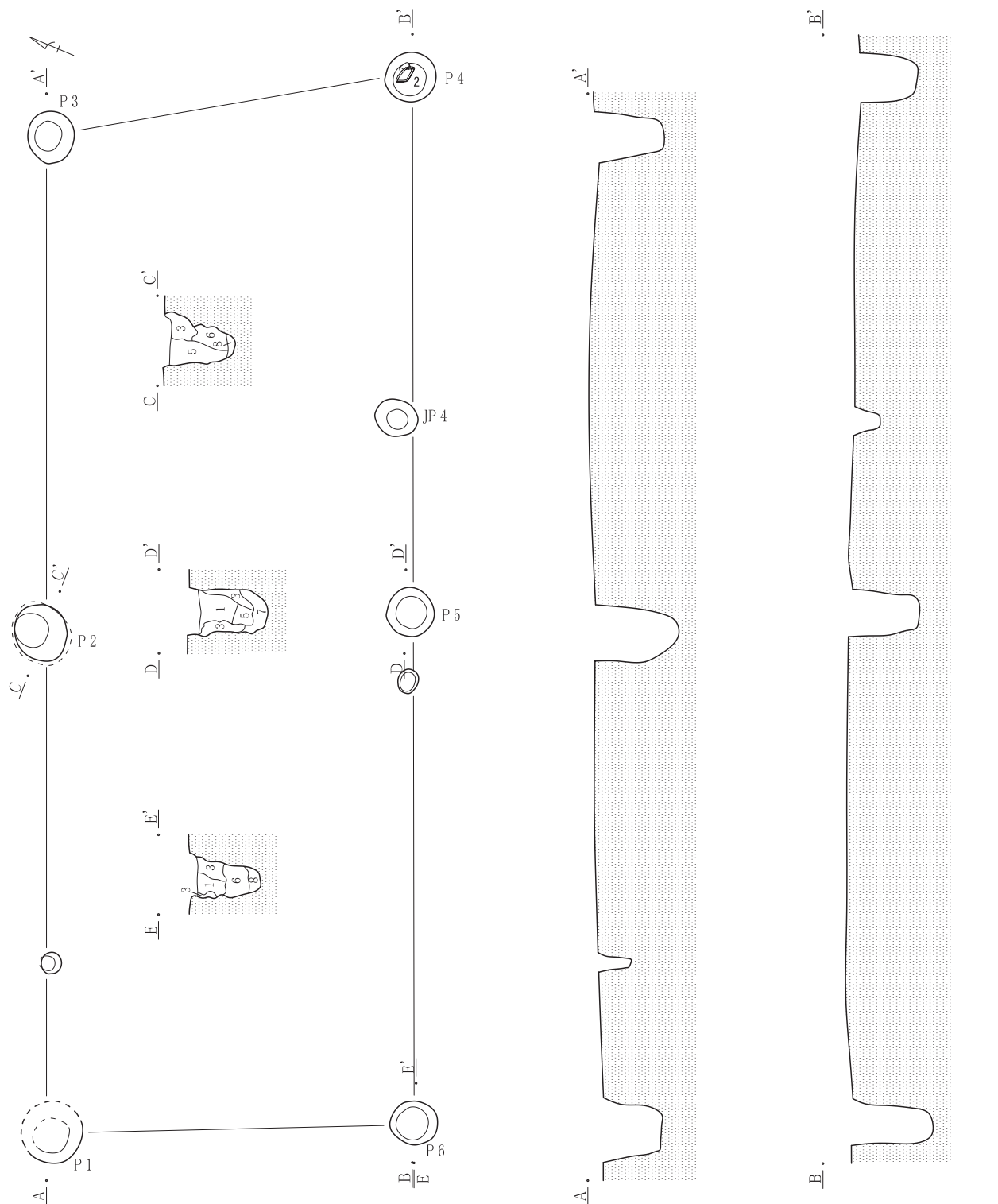
● 4号掘立

位置 C R -58 **写真** P L 148
面積 15.98 m² **方位** N 60 度 E
重複 1号掘立と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ正方形を呈し、規模は長軸3.10～3.55 m×短軸2.95～3.05 mである。

柱穴 長・短軸各2本の4本柱構造であり、各柱穴

III 今井見切塚遺跡の調査



埋没土層（1～8号に共通）

1. 黒褐色土（10YR2/3）を主体にローム土が10%前後混入。多量の炭化物粒含有。柱痕。
2. 暗褐色土（10YR3/3）を主体にローム土が20%混入。少量の炭化物粒含有。
3. 暗褐色土とローム土が1：1で混入。少量の炭化物粒含有。
4. 黒褐色土を主体にローム土が30%前後混入。多量の炭化物粒含有。
5. 暗褐色土とローム土が1：1で混入。中量の炭化物粒含有。柱痕。
6. 暗褐色土とローム土が1：1で混入。微量の炭化物粒含有。
7. ローム土（XI・XII層）の崩落・混土層。少量の炭化物粒含有。
8. ローム土（VI・VII層）を主体に黒褐色土が20%前後混入。少量の炭化物粒含有。
9. 暗褐色土を主体にローム土が10%混入。多量の炭化物粒含有。柱痕。

第370図 5区1号掘立

の芯心間の距離はP1～P2:3.10 m、P2～P3:3.55 m、P3～P4:3.00 m、P4～P1:3.10 mである。長軸は3.5 mと3.1 mを、短軸は3.1 mを基本にすると考えられる。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:26×32 cm、P2:29×36 cm、P3:26×30 cm、P4:25×45 cmである。尚、P1・P2の埋没土断面で、直径15 cm前後の柱痕を確認している。

遺物 柱穴P2の埋没土中より諸磯b式の土器片1点(1)、P4では同b式と調整剥片が各1点が検出されている。

● 5号掘立

位置 CT-58 **写真** PL 148

面積 10.35 m² **方位** N 85 度W

重複 西側1/4が2号掘立と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ正方形を呈し、規模は長軸3.15～3.30 m×短軸3.00～3.10 mである。

柱穴 長・短軸各2本の4本柱構造で、各柱穴の芯心間の距離はP1～P2:3.30 m、P2～P3:3.00 m、P3～P4:3.15 m、P4～P1:3.10 mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:25×21 cm、P2:40×51 cm、P3:32×26 cm、P4:21×19 cmである。

遺物 柱穴P2の埋没土中より、諸磯b式の土器片1点(1)が検出されたのみである。

● 6号掘立

位置 CN-56 **写真** PL 148

面積 14.68 m² **方位** N 9 度E

重複 南側1/3が7号掘立と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ長方形を呈し、その規模は長軸3.20～3.30 m×短軸2.50～2.60 mである。

柱穴 長・短軸各2本の4本柱構造である。各柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:2.50 m、P2～P3:3.30 m、P3～P4:2.60 m、P4～P1:3.20 mである。また、

各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:24×36 cm、P2:29×35 cm、P3:31×29 cm、P4:36×50 cmである。尚、P4の土層断面にて柱痕の検出を試みたが、明確に把握することはできなかった。

遺物 柱穴内からの出土遺物は皆無であった。

● 7号掘立

位置 CN-56 **写真** PL 148

面積 8.45 m² **方位** N 27 度E

重複 北側1/4が6号掘立と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ長方形を呈し、規模は長軸2.80～3.10 m×短軸2.75～2.85 mである。

柱穴 長・短軸各2本の4本柱構造であり、各柱穴の芯心間の距離はP1～P2:2.85 m、P2～P3:2.80 m、P3～P4:2.75 m、P4～P1:3.10 mである。長・短軸共に、2.8 mを基本にしていることが窺える。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:32×34 cm、P2:31×30 cm、P3:27×33 cm、P4:31×22 cmである。尚、P2は6号掘立のP3と同一であり、こうした柱穴の共有関係の想定が正しいとすれば、6号掘立とは時間的にも近接した有機的関係を持つと考えられる。

遺物 実測図としては掲載していないが、柱穴P1の埋没土中より調整剥片1点が検出されている。

● 8号掘立

位置 CQ-58 **写真** PL 148

面積 5.13 m² **方位** N 1 度E

重複 南半部が1号掘立と重複するが、新旧関係は不明である。

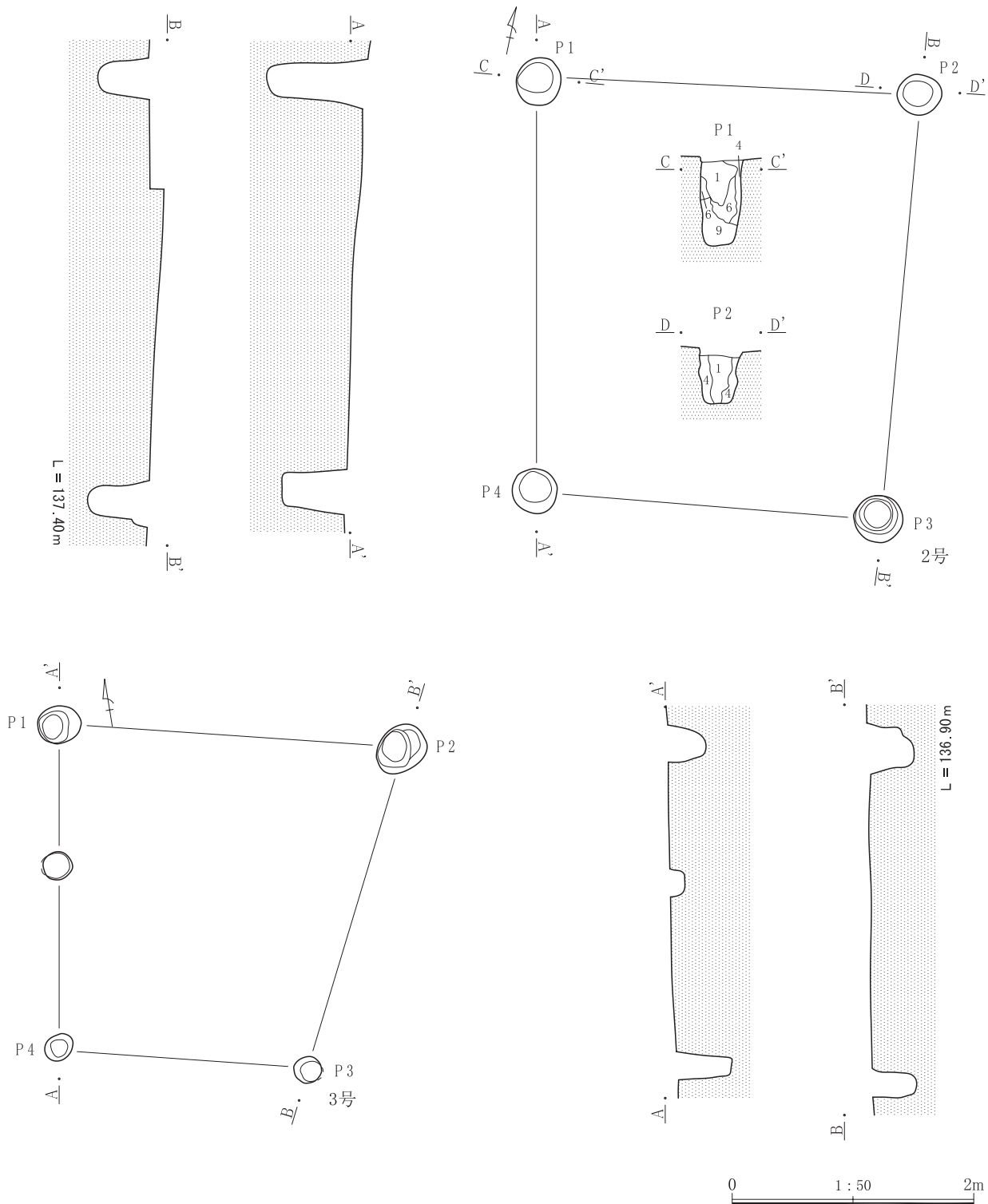
形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ長方形を呈し、規模は長軸2.45～2.60 m×短軸2.05 mである。

柱穴 長・短軸各2本の4本柱構造であり、各柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:2.05 m、P2～P3:2.45 m、P3～P4:2.05 m、P4～P1:2.60 mである。長軸は2.5 m前後を、短軸は2.1 m前後を各々基本と

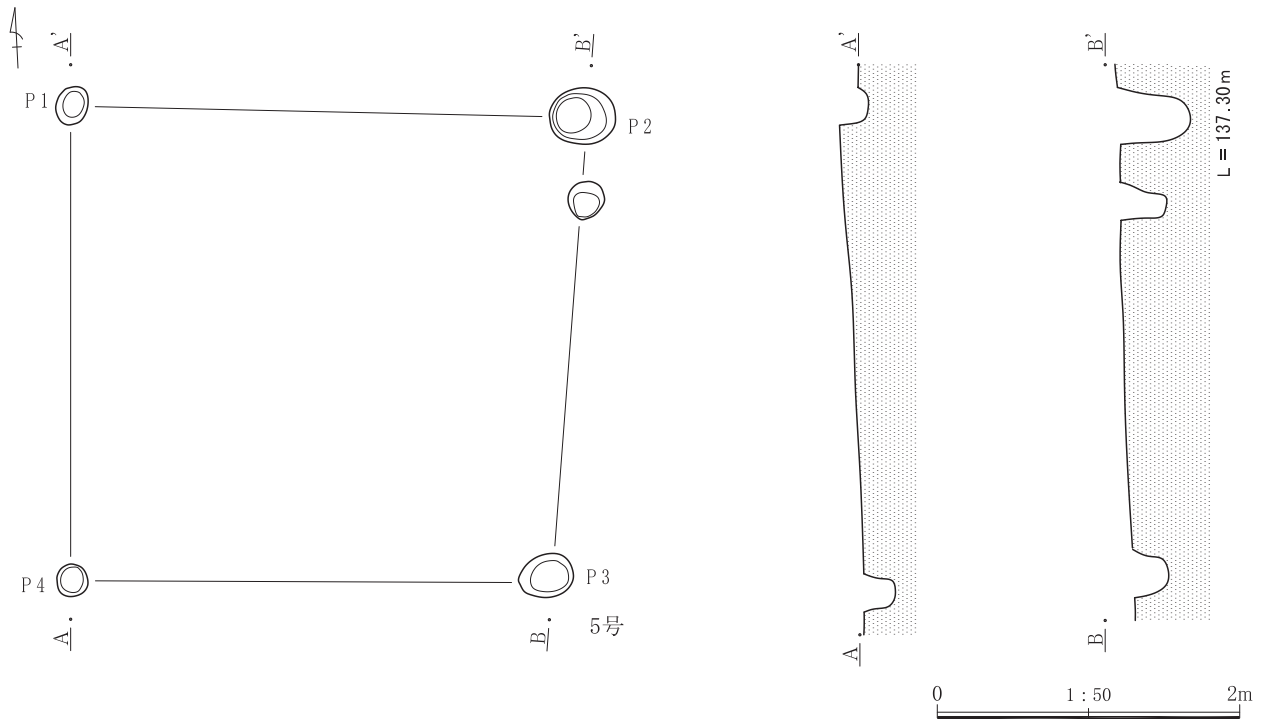
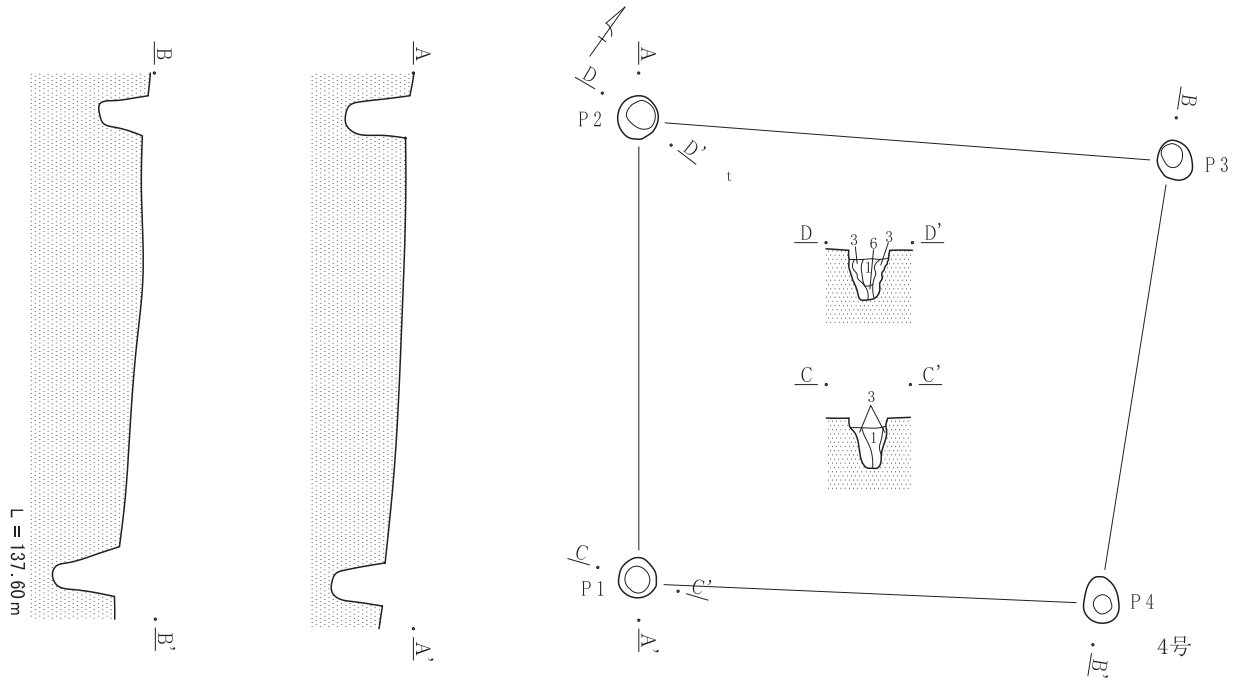
III 今井見切塚遺跡の調査

していることが窺える。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：28×32 cm、P2：21×46 cm、P3：20×40 cm、P4：24×37 cmである。

遺物 柱穴P4の埋没土中より、型式不明の土器片1点（1）が検出されたのみである。

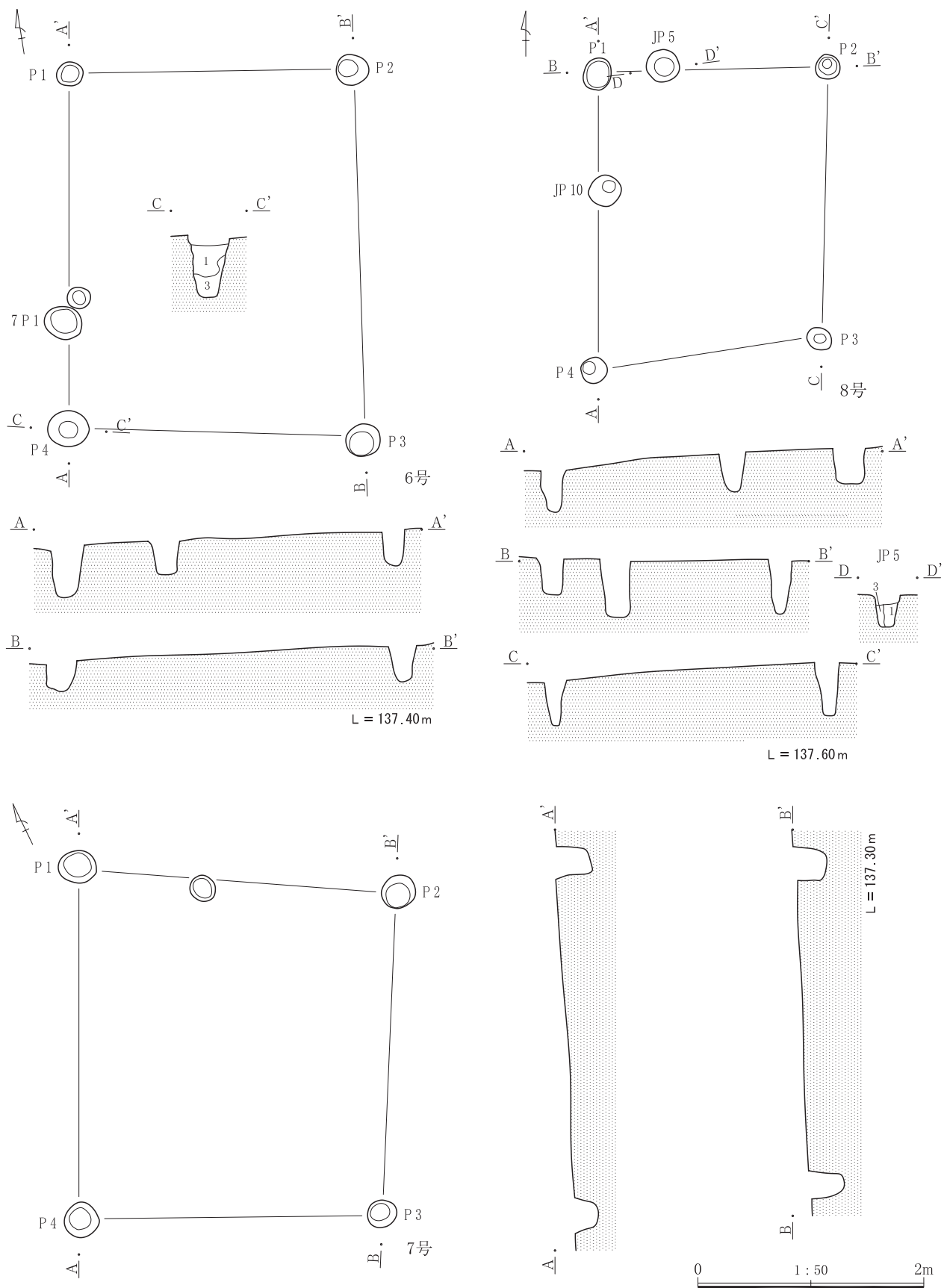


第371図 5区2号掘立・3号掘立



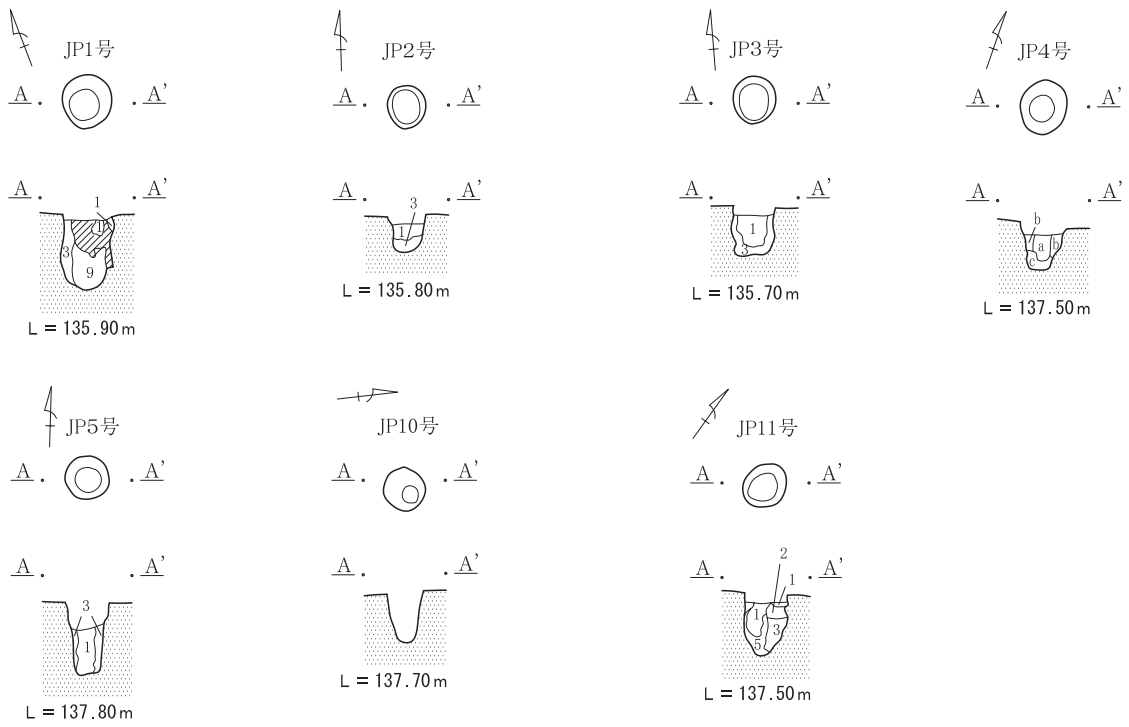
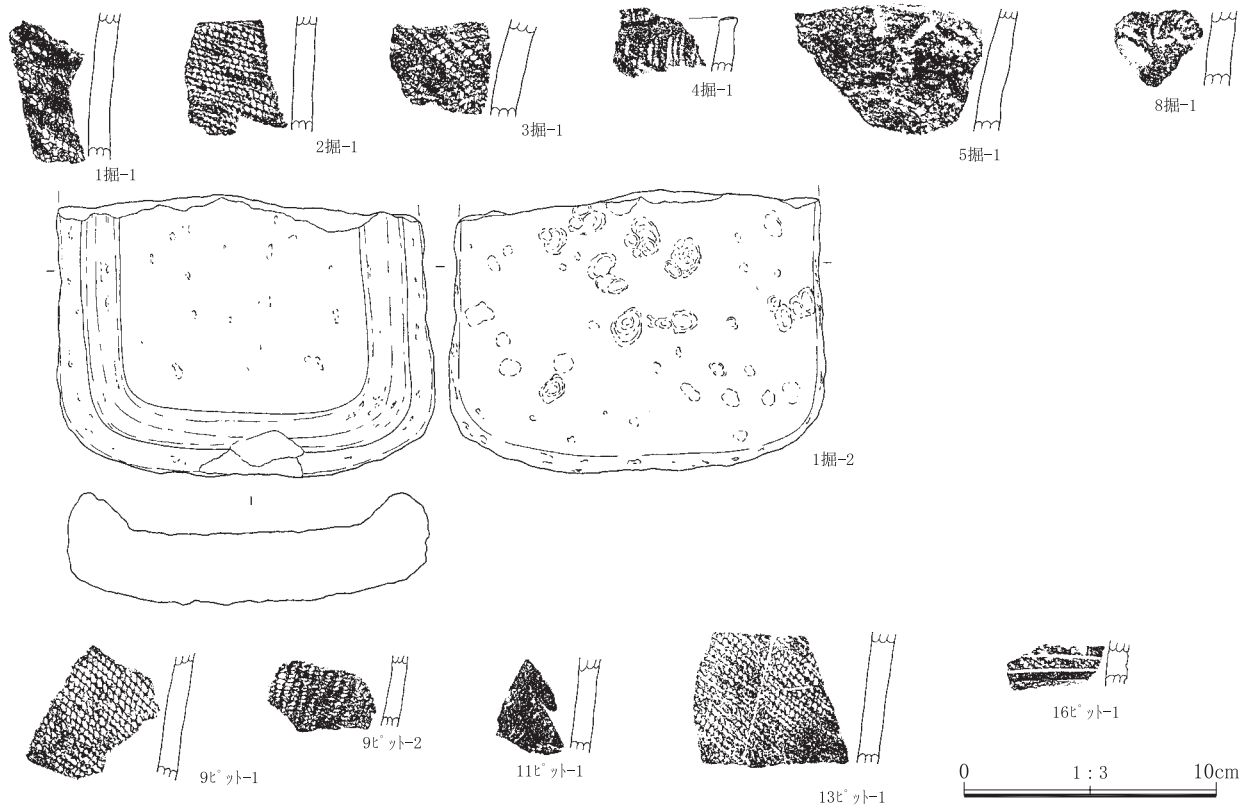
第 372 图 5 区 4 号掘立・5 号掘立

III 今井見切塚遺跡の調査



第 373 図 5 区 6 号掘立・7 号掘立・8 号掘立

3. 掘立柱建物



第 374 図 掘立柱建物の出土遺物と柱穴群

4. 土 坑

総計 258 基の土坑を検出したが、それらの調査にあたっては、Ⅳ・Ⅴ層の縄文遺物包含層を調査・除去後にⅥ層のローム土上面にてプランを確認し、半掘して埋没土層の観察を行った。帰属時期を明示するような遺物を伴出する土坑は、全体の 40% 弱の 100 基にとどまるが、その内訳は草創期後半 4 基、早期 1 基、前期花積下層式期 7 基、黒浜式期 2 基、諸磯 a 式期 40 基、同 b 式期 11 基、同 c 式期 12 基 (浮島・興津式期 1 基を含む)、中期 22 基、後期前半 1 基となる。ただし、その時期比定にあたっては、完形土器を含む一括遺物を出土する土坑は少なく、複数期にわたる土器片が混入するケースが多々見られることから、数量的に主体を占める土器型式を重視した。残り 158 基の時期不明な土坑については、埋没土の特徴を重視すればその大半が諸磯 a～c 式期に帰属すると推定される。

この埋没土層については、前述した竪穴住居の場合と同様に、各土坑相互間で類似性が認められることから、その記述内容を以下のように類型化した。内容的には、今井三騎堂遺跡における土坑とも共通するものであり、また、堆積土層の内容がこれと異なる場合には、個別に記載してある。

1 層. 褐色土 (10YR4/4)。2 層が樹木根により攪乱された部分に相当する。少量の炭化物粒を含む。

2 層. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体に褐色土 (10YR4/4) が 30～40% 混入。多量の炭化物粒を含む。

3 層. 褐色土 (10YR4/4) を主体にローム土が 20～30% 混入。微量の炭化物粒を含む。

4 層. 褐色土 (10YR4/4) とローム土が 1:1 で混入。少量の炭化物粒を含む。

5 層. 壁面のローム土の崩落・堆積層。

※ダッシュ付きの土層は、僅かな色調の違いにより分層されることを示す。

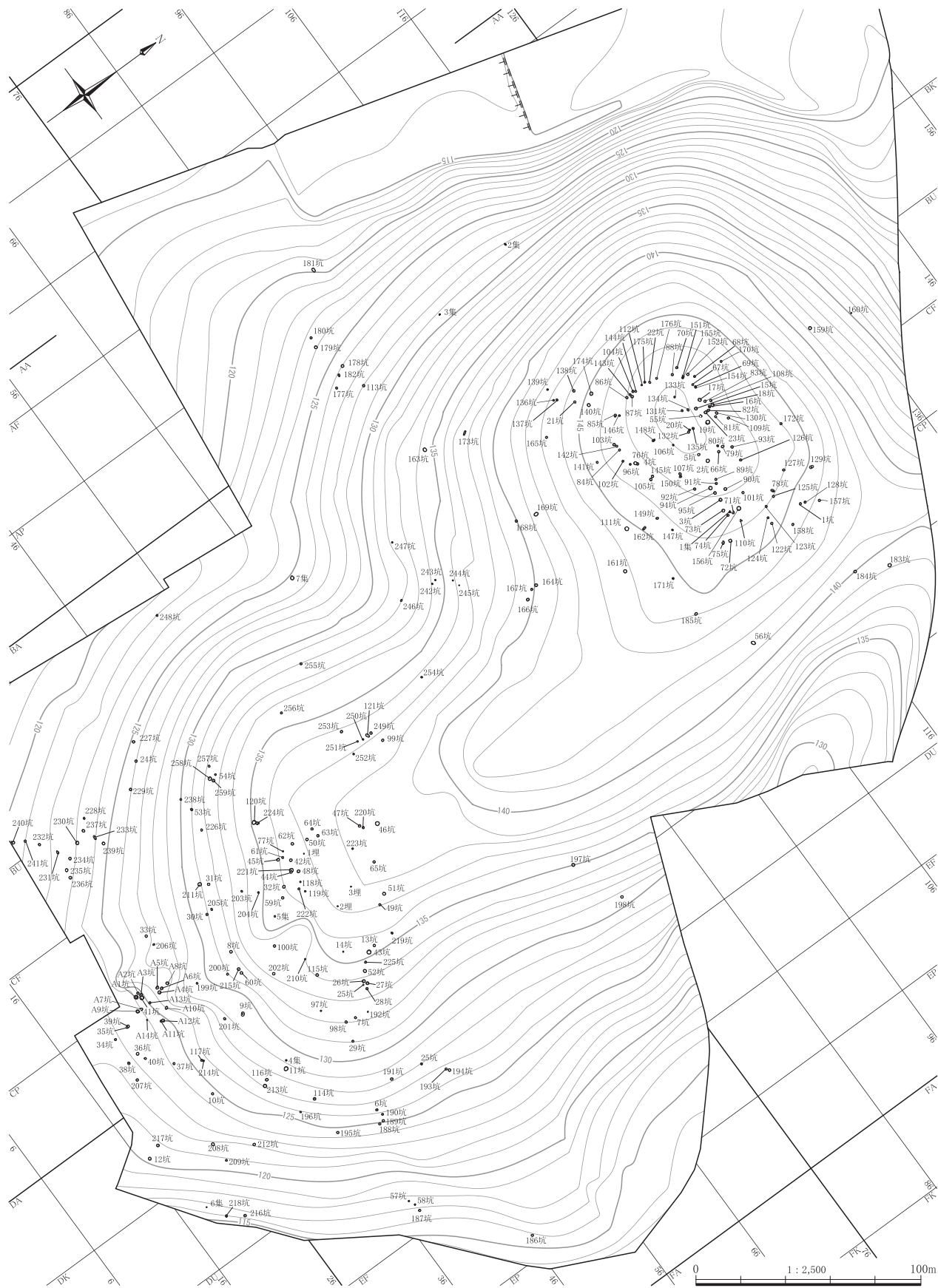
各土坑の規模は、直径 1～1.5 m、深さ 0.5～1 m 程度のものが最も多く、その平面形も円形を基本

としている。また、断面形状を観察すると、円筒形状と共に壁面がオーバーハングする袋状のものが主体を占めているが、基本的には袋状形態の開口部付近が崩落して、最終的に円筒状に変化したものと推定される。これら以外には、平面形が楕円形状のものも僅少認められる。

埋没土の上・中位を中心にして、土器片や削器・打製石斧・磨り石類・剥片などの石器を少量伴出する土坑が多数を占める一方で、複数個の完形土器や石皿などを伴出するものも僅少ながら存在する。前者は貯蔵穴としての機能・用途を、また後者は墓坑的な用途を各々想定できるが、形態的には両者ともに円形・袋状を基本にしており、大差が認められない。

また、各土坑の分布域は、竪穴住居が集中する丘陵頂部の 1 区や東側斜面の 5 区にほぼ限定されており、両遺構の密接な関係と共に、総体的には集落内に設置されていることが窺える。さらに、両者の関係で注目されるのは、諸磯 a～c 式期の 20・24・25・29・33 号住居などでは、廃絶後の播り鉢状となった埋没中途段階で、ほぼその中央部に土坑が掘り込まれている点である。第一義的には、土坑の掘削に伴う労力の省力化を意図したものと理解されるが、その機能・用途を含めての検討が必要であろう。

尚、各土坑の規模・形状・出土遺物等の詳細については、498 頁の第 7 表に記載してあるのでそちらを参照頂き、ここでは各時期別に見た土坑の特徴や様相について、概括的な記述を行いたい。



第 375 図 今井見切塚遺跡の土坑の分布

III 今井見切塚遺跡の調査

(1) 草創期後半～早期の土坑

A. 草創期後半

当該期には1～4号(第376図)の4基が存在する。各土坑の平面形態は円形であり、1・4号は深度が約20cmと浅いために不明であるが、70～80cmの深度を持つ2・3号は、壁面がオーバーハングする袋状を呈すると考えられる。出土遺物(第377図)は、土器片を主体にしていずれの土坑でも僅少量であり、特筆すべき出土状況は見当たらない。また、埋没土の堆積状態は自然埋没状況を示しており、形態的にも貯蔵穴としての用途が推定される。

1・3・4号の出土土器は、2号ともに井草1式を主体としているが、他に花積下層式や諸磯b・c式を含んでおり、厳密には草創期後半に限定できない可能性もある。ただし、これらの土坑が当該期であるとすれば、同期の1号住居の比較的近縁に散在しており、居住空間内に貯蔵穴が設置されていることを示すと考えられる。

尚、出土遺物が僅少なために確定的ではないが、上記以外の土坑で井草I式期に帰属する可能性のあるものとして、112・144・159号が、また同様に稲荷台式期としては、125・143・149号などが存在する。

【井草式期土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	井草I	稲荷台	花積下層	諸磯b
合計	7	13	2	1	1

諸磯c	時期不明	総計
2	4	25

分類別点数

井草I式

分類	1	2	3	不明
合計	1	1	11	7

稲荷台式

分類	3
合計	2

縄文原体別点数

井草I式

分類	2b	9b
合計	12	1

稲荷台式

分類	2b	9b
合計	1	1

胎土別点数

胎土	型式	井草I	稲荷台
A		10	2
B		1	—
D		2	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計		
器種	削器類	打斧	磨石類	剥片	礫塊	
合計	1	1	4	11	2	19

分類別点数

搔器・削器

分類	2類
合計	1

打製石斧

分類	2類
合計	1

磨石類

分類	2類	4類	4類	5類
形態	abc	ac	abc	ab
合計	1	1	1	1

石材別の点数と重量

搔器・削器

コード	1
点数	1
重量	105

打製石斧

コード	1
点数	1
重量	53.2

磨石類

コード	4
点数	4
重量	179.2

剥片

コード	1	2	7	9	12
点数	6	1	1	2	1
重量	32	1.2	29.2	18.5	5.1

礫塊

コード	4
点数	2
重量	121

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	1	1	2

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4
点数	1
重量	19.3

【稲荷台式期土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	時期不明	総計
合計	3	2	5

(石器)

器種別点数

系列	その他		総計
器種	剥片	礫塊	
合計	8	1	9

石材別の点数と重量

剥片

コード	1	7	9	12
点数	5	1	1	1
重量	36.6	11.1	0.3	1.6

礫塊

コード	4
点数	1
重量	3034

B. 早期

5号(第376図)の1基が存在するのみである。旧石器時代のトレンチ試掘調査中に検出したため、上半部が削平されているが、直径1.1m×深さ0.9mで円形の袋状形態を持つと考えられる。出土遺物(第377図)は、田戸下層式の土器片4点を主体に石鏃1点が存在するが、極めて僅少である。当該期の竪穴住居は存在せず、土坑のみが単独立地する状況にある。

尚、出土遺物が僅少なために確定的ではないが、209号も当該期に帰属する可能性がある。

【田戸下層式期土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	田戸下層	黒浜	時期不明	総計
合計	1	4	1	2	8

縄文原体別点数

田戸下層式	
分類	18
合計	4

分類別点数

胎土		型式	
胎土	型式	田戸下層	
B		4	

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	その他	総計
器種	石鏃	剥片	
合計	1	4	5

分類別点数

石鏃	
分類	5類
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		剥片			
コード	5	コード	1	2	9
点数	1	点数	2	1	1
重量	1.1	重量	53	0.7	0.6

【花積下層式期土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	花積下層	諸磯a	時期不明	総計
合計	135	8	12	155

胎土別点数

胎土		型式	
胎土	型式	花積下層	
C		40	

縄文原体別点数

花積下層式				
分類	2a類	2b類	2類	3c類
合計	22	5	95	13

分類別点数

花積下層式				
分類	4a	4b	12a	17
合計	25	1	13	1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他			総計				
器種	石鏃	削器類	打斧	スタンプ形	磨石類		剥片	石核	自然石	礫塊
合計	3	7	2	1	1	921	3	9	5	952

分類別点数

石鏃			搔器・削器			打製石斧	
分類	1類	9類	分類	1類	2類	分類	2類
合計	1	2	合計	2	5	合計	2

スタンプ形石器

分類	3類
合計	1

磨石類

分類	4類
形態	a
合計	1

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4
点数	3
重量	379

石材別の点数と重量

石鏃		搔器・削器			打製石斧	
コード	2	コード	1	2	コード	1
点数	3	点数	2	5	点数	2
重量	12.1	重量	134	49.3	重量	205

スタンプ形石器

コード	4
点数	1
重量	673

磨石類

コード	4
点数	1
重量	829

石核

コード	1	2
点数	1	2
重量	340	35.8

剥片

コード	1	2	3	7	9
点数	44(31)	872(270)	1	1	3
重量	(155)	(436)	27.4	7.3	47.1

礫塊

コード	4
点数	5
重量	2066

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	3	2	5

(2) 前期の土坑

A. 花積下層式～黒浜式期

6～14号(第376～381図)の9基が存在し、13・14号が黒浜式期で、他は花積下層式期である。平面形状では、円形(7・8・10～14号)と楕円形(6・9号)の2タイプに分かれ、前者の7・8号は明確に袋状形態を持つ。規模的には、直径が1m前後を主体にして2m前後(9・11号)や0.5m(14号)のものがあり、深度も30～70cmを主体に20cmに満たないもの(10・11号)など、いくつかのバラエティがある。

これら土坑の埋没土には、6号を代表例として円錐形状堆積が認められ、自然埋没状況を示す点を重視すれば、そのほどんどに貯蔵穴としての機能・用途を推定できるが、遺物(第377～379図)の出土状況や内容・数量には、各土坑単位でかなり大きな違いが認められる。例えば、比較的多量の遺物が出土するのは9～11号であるが、9号では花積下層式の土器片74点を主体に、石鏃・削器・打製石斧・磨石類・石核など9点の石器類がある。また、10号もこれに類似して、花積下層式の土器片26点が存在する。一方、11号では平均1.4gのチャートの調整小剥片875点と同石材による石鏃未製品1点や削器3点が出土し、土器片は花積下層式が7点到過ぎない。

このように、出土遺物の内容は異なるが、いずれも掘削深度が浅い点で共通しており、その機能・用途を反映している可能性もある。ただし、多量の調整小剥片を出土する11号については、石鏃や削器などの小形品を主体とした製作途上の屑片や失敗品を廃棄した土坑と考えられる。黒浜式期の大型土器片を出土した14号は、規模・形態的には土坑というよりも柱穴の可能性もある。尚、9号の2～12、10号の1～3・12・13、13号の1～5、14号の3・4などの土器片は、各々同一個体である。

これらの各土坑は、いずれも南東斜面の5区に分

III 今井見切塚遺跡の調査

布し、花積下層式期の場合には8～16号住居との関係が考えられるが、黒浜式期については堅穴住居は存在せず、土坑のみが単独立地する状況にある。

尚、出土遺物が僅少なために確定的ではないが、上記以外の土坑で花積下層式期に帰属する可能性のあるものとして、115・145・199・202・212号の5基が、また同様に黒浜式期としては、114・161・225号などの3基が存在する。

【黒浜式期土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	黒浜	諸磯a	総計
合計	1	15	3	19

分類別点数

黒浜式			諸磯a式		
分類	2d類	3類	分類	2c2類	4a類
合計	1	14	合計	2	1

縄文原体別点数

黒浜式			諸磯a式	
分類	2b	12c	分類	2b
合計	5	1	合計	3

胎土別点数

胎土	型式	黒浜	諸磯a
A		—	3
C		6	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	その他		総計
器種	削器類	剥片	自然石	
合計	1	29	1	31

分類別点数 搔器・削器

分類	2類
合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器		剥片					
コード*		コード*					
コード*	2	コード*	1	2	7	9	12
点数	1	点数	2	18	2	2	5(2)
重量	9.6	重量	45.3	107	10.4	1.9	(0.2)

(*)内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

B. 諸磯a式期

15～54号(第381・385・389・393・396図)の40基が存在している。平面形状は全て円形を基調とするもので占められているが、壁面がオーバーハングして袋状形態を呈するものは、15・21・25～31・38・39・43・45・47・50・51・52号の17基であり、他は円筒形状である。規模は、直径が1～1.5m程度のものが主体的であり、直径約2m前後のもの(19・41・46号)は少ない。掘削深度は、30cmに満たないもの(16・24・34・46号)は僅少で、1m前後のものが多数を占める。各土坑の埋没土は、黒褐色土と

ローム土とが互層堆積するもの(26・27・52号)と、レンズ状や円錐形状の堆積をする前者以外のものとに分かれる。前者については人為的な埋め戻しが想定されるが、後者は自然埋没状況を示すと考えられる。両者ともに、機能的には貯蔵穴としての形態を有しているものの、最終的な用途については断定できない。

出土遺物(第380・382～384・386～388・390～392図)は、諸磯a式の土器片を主体に、削器・磨石類などの石器が少量認められるが、合計40点以上の遺物を出土する土坑として、15・16・20・24・26・33・36・38・40・43・50号があり、この中で36・43号は130点以上に及ぶ遺物を出土している。これらの遺物は多くの場合、埋没土の上～中位を中心に出土するが、18号では上端部に口縁部と胴部下半を欠失する深鉢土器(第382図18坑-1)を正位に埋置し、40号では底面から約10cm上位にほぼ完形の深鉢土器(第390図40坑-1)が横転した状態で出土している。また、17号では製品や剥片類を含めた5点の黒曜石が出土し、その内の4点についてX線回折試験による産地同定を実施したところ、和田峠系1(東餅屋・西餅屋)2点、和田峠系2(星ヶ塔)2点という結果を得ている。同様に、26号からはオニグルミの炭化核破片、45号からはクリの炭化材片が出土しているが、それらの詳細は黒曜石分析を含めて691頁の「IV 科学的分析」を参照されたい。尚、掲載した遺物の中で、15号の8・9、10・11、17号の3・4、19号の2～4、20号の5・13、11・16、24号の2～4、8～12、24号の2・3、26号の5・7、28号の1・5、3・6、29号の1・5、2～4・6・7、30号の1・2、36号の15・16、39号の1～4・8、43号の1・2、6～8・10、45号の6・9、52号の3～5、53号の2～4、は各々同一個体である。

上記の各土坑は、丘陵頂部の1区や南東斜面の5区を中心に分布しており、同区内に占地する諸磯a式期の17～24号住居との関連性が推定される。また27・28号は、20号住居の廃絶後の埋没中途段階で、ほぼその中央部に掘り込まれた可能性が想定される

【諸磯a式期土坑出土遺物分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	夏島	稲荷台	条痕	花積下層	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	中期前半	時期不明	土製品	総計
合計	4	3	10	1	33	20	1063	92	3	1	103	4	1337

分類別点数

諸磯a式

分類	1類				2類											3類					
	a	c	d4	不明	a1	a2	a	b1	b2	b3	b	c1	c2	c3	d1	d2	d3	d4	不明	a1	b1
合計	4	3	1	1	14	7	20	16	4	3	2	2	4	3	5	6	2	7	157	3	5

分類	3類			4類				不明	黒浜式		諸磯b式									
	b2	b	不明	a	b	c	不明		分類	3類	分類	1類		2類		3類	4類			
合計	7	6	8	177	1	23	557	15	分類	20	分類	b1	b	c2	不明	b2	c1	不明	a1	a
											合計	1	14	4	2	1	2	3	1	64

縄文原形別点数

黒浜式

分類	2b	12a
合計	1	2

諸磯b式

分類	2b	7d	18
合計	5	1	3

諸磯a式

分類	1a	1b	2a	2b	5b	7a	7b	12a	14c	14d	17	18
合計	6	2	23	129	10	1	18	1	5	3	9	37

胎土別点数

胎土	型式	黒浜	諸磯a	諸磯b
A		—	215	8
B		—	9	—
C		2	1	—
D		—	10	1
E		1	11	—
F		—	1	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列						使用痕系列				複合技術系列		その他			総計
器種	石鏃	石錐	石匙	削器類	打斧	礮器	刃ノ形	磨石類	石皿	砥石	磨斧	多孔石	剥片	自然石	礮塊	
合計	1	3	2	15	3	1	1	14	6	1	1	2	117	4	71	242

分類別点数

石鏃		石錐		石匙		搔器・削器				打製石斧		スタンプ形石器		石皿					
分類	9類	分類	2類	分類	1類	分類	1類	2類	3類	不明	分類	2類	3類	分類	4類	分類	2類	4類	5類
合計	1	合計	3	合計	2	合計	4	7	1	3	合計	2	1	合計	1	合計	3	1	2
砥石		磨製石斧		多孔石		磨石類				3類		4類		5類					
分類	2類	分類	4類	分類	4類	5類	分類	2類		3類		4類		5類					
合計	1	合計	1	形態	b	c	形態	ab	abc	ac	bc	a	ac	a	abc	bc	a	ab	
				合計	1	1	合計	1	1	1	1	1	2	1	2	1	2	1	

石材別の点数と重量

石鏃		石錐		搔器・削器				打製石斧		礮器		スタンプ形石器					
コード	3	コード	1	2	コード	1	2	3	9	コード	1	コード	15				
点数	1	点数	2	1	点数	5	1	1	1	点数	1	点数	1				
重量	2.2	重量	10	4.5	重量	171	3.6	17.1	1.4	重量	87.7	重量	219				
重量		重量			重量					重量		重量					
磨石類				石皿			砥石		磨製石斧		多孔石						
コード	4	9	18	19	コード	4	13	14	コード	9	コード	10	コード	4			
点数	11	1	1	1	点数	3	2	1	点数	1	点数	1	点数	1			
重量	5488	812	947	798	重量	6881	1809	1226	重量	53.8	重量	45.2	重量	844			
剥片						礮塊											
コード	1	2	3	4	7	9	12	33	34	38	コード	1	2	4	9	34	38
点数	40	31(30)	4	1	9	7	3	3	3	1	点数	1	1	66	1	1	1
重量	451	(121)	19	11.2	86.9	76.1	10.7	14	21.8	125	重量	156	8	9755	21.6	130	162

礮塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	45	26	71

被熱礮の石材別点数と重量

コード	1	2	4	9
点数	1	1	42	1
重量	156	8	3626	21.6

III 今井見切塚遺跡の調査

が、特に27号は人為的な埋没状況を示す点で、その機能・用途や廃絶住居との有機的関係が注目される。

尚、出土遺物が僅少なために確定的ではないが、上記以外の土坑で諸磯a式期に帰属する可能性のあるものとして、117・132・138・151・191・203・207・222号の7基が存在する。

C. 諸磯b式期

55～65号(第396～399図)の11基が存在している。平面形状は、56号の楕円形を除いて、全て円形を基調としている。壁面がオーバーハングして袋状形態を呈するものは、58・63～65号の4基であり、他は円筒形状である。規模は、円形状土坑の場合、そのほとんどが直径1～1.5mの大きさであるが、掘削深度が30cmに満たないもの(57・59・60号)も認められる。56号は、斜面地の等高線方向にほぼ直交して東西に長軸を持つ楕円形の土坑であり、長径2.04×短径1.43×深さ0.53mの規模を持ち、4点の完形浅鉢土器を伴出する点でも他の土坑とは異質である。各土坑の埋没土の状況を観察すると、56号のようにローム土主体の互層堆積により人為的な埋め戻しが明確なケースは、他の円形状土坑には認められない。しかし、黒褐色土とローム土とが互層堆積するものには、63・65号の2基が存在し、他のレンズ状や円錐形状の堆積をするものとも異なっている。円形状土坑におけるこのような様態差が、何に起因するのか明らかではないが、63・65号は56号と同様に人為的な埋め戻し行為を想定でき、用途的に異なる可能性もある。自然埋没状況を示す他の土坑については、機能・用途面で貯蔵穴としての利用が想定される。

出土遺物(第392～395図)には、諸磯b式の土器片を主体に諸磯a式が少なからず認められるものの完形品には乏しく、石器は磨石類などが僅かに存在するのみである。ただし、前述したように、56号では斜面下方の東壁面に沿って、4個体の完形の浅鉢土器(第394図56坑-1～4)が整然と配置された状態で出土している。これらの土器は、2が正

【諸磯b式期土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	井草I	花積下層	黒浜	諸磯a	諸磯b
合計	5	1	8	3	87	164

諸磯c	中期前半	中期後半	時期不明	総計
2	2	5	45	322

分類別点数

諸磯a式

分類	1類		2類			3類		4類		
種別	c	不明	a1	b3	d2	不明	a1	不明	a	不明
合計	1	3	1	1	1	14	2	6	10	48

諸磯b式

分類	1類					2類				
種別	a1	a2	a	b2	e2	不明	a1	b1	b2	b3
合計	2	2	1	1	1	8	1	3	5	1

2類		3類					4類			諸磯c式	
d2	不明	a1	a2	b	c	不明	a	c	不明	分類	3類
1	68	1	1	1	5	2	15	4	41	合計	2

胎土別点数

胎土 型式	A	B	C	E	F	G
諸磯a	16	—	—	—	—	—
諸磯b	34	3	—	1	5	2

縄文本体別点数

諸磯a式

分類	2a	2b	7b	17	18
合計	4	6	1	3	2

諸磯b式

分類	1a	2a	2b	3a	6a	7b	14c	17	18
合計	2	4	17	3	1	2	1	6	9

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	複合技術系列	その他			総計	
器種	石鏃	刃ノ形	磨石類	磨製石斧	剥片	自然石	礫塊	
合計	1	1	2	1	55	1	33	94

分類別点数

石鏃		スタンプ形石器		磨石類		磨製石斧		
分類	2類	分類	1類	分類	2類	5類	分類	5類
合計	1	合計	1	形態	abc	a	形態	a
				合計	1	1	合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		スタンプ形石器		磨石類		磨製石斧		
コード	2	コード	4	コード	4	19	コード	4
点数	1	点数	1	点数	1	1	点数	1
重量	0.9	重量	478	重量	305	504	重量	61.8

剥片

コード	1	2	3	4	6	7	9
点数	21	13(12)	2	1	3	8	7
重量	84.5	(25.6)	137	9.5	13.6	64.4	13

礫塊

礫塊の被熱状況		被熱礫の石材別点数と重量					
コード	4	分類	1	2	総計	コード	4
点数	33	合計	27	6	33	点数	27
重量	3408					重量	3280

位の状態であったが、1・3・4は逆位に伏せられると共に、1の上位に4の一部が乗り、さらにその上に3が重なるという状態であった。また、いずれの土器も底面から10～15cmほど浮き上がっており、少なくとも底面に直接置かれた状態ではなかったことを示している。楕円形状の形態や人為的埋没状況を加味すれば、当土坑が墓坑である可能性は非常に高いと言えるが、これらの土器はその出土状況から見て、副葬品と言うよりも遺体の一部を覆うような、例えば「鉢被り」的に配置されたことも想定できよう。

他の事例としては、62・64号から50点を超える遺物が、埋没土の上～中位を中心に検出されており、特に62号では口縁部と体部下半を欠失した深鉢土器1点（第395図62坑-1）が横転した状態で出土しているのが注目される。尚、55号の3・5、57号の3～5、58号の1・2、60号の2・3は、各々同一個体である。

56号以外の各円形状土坑は、南東斜面の5区を中心に分布しており、丘陵頂部の1区には55号の1基が存在するのみである。これは当該期の竪穴住居が1区には占地せずに、5区に集中していることと有機的な関連性を持つためであろう。一方、墓坑と想定される56号については、1区の遺構集中域から50mほど東側に離れて単独立地しており、貯蔵穴が居住空間内に組み込まれているのに対して、墓域がいわば日常的な居住空間から外れた場所に設置されていることを窺わせる。

尚、出土遺物が僅少なために確定的ではないが、上記以外の土坑で諸磯b式期に帰属する可能性のあるものとしては、111・120・130・187・220・224・258号の7基が存在する。

D. 諸磯c式期

66～77号（第399図）の12基が存在している。平面形状は、楕円形状の71・75号を除いて、全て円形状を基本としている。壁面がオーバーハングして袋状形態を呈するものは、72・73・75号の3基であり、他は円筒形状である。規模については、円形状

土坑の場合、そのほとんどが直径1～1.5mの範囲に収まるが、掘削深度が30cm以下の浅いもの（67・68号）も認められる。一方、楕円形土坑では、長径2m×短径1m×深さ1m前後の規模を有する。各土坑の埋没土の状況を観察すると、ローム土を多量に含む黒褐色土が互層堆積する72・73・75・76号のような事例と、レンズ状や円錐形状の堆積をする他事例とに分離される。前者のケースは、人為的な埋め戻しが行われたことを示唆しているが、楕円形態を持つ75号と円形状の72・73・76号との間に、どのような機能・用途的な差異があるのか判然としない。後者のケースについては、自然埋没状況を示す点を重視すれば、貯蔵穴としての利用を想定できる。

出土遺物（第397・398・400・401図）の内容は、完形土器を出土する土坑は無く、いずれも諸磯c式の土器片を中心にして、その前段階の土器型式が混在する。一方、石器については、僅少なながらも削器や磨石類などがかなり普遍的に存在し、これに石鏃や打製石斧が加わるケースも認められる。また、72・75号では黒曜石の石核が各1点検出されており、注意を要する。これらの遺物は、埋没土の上～中位を中心に出土し、意識的な埋置状況は認められないが、76号では浮島・興津式系や大木式系の土器を含む600点弱もの多量の遺物が存在するなど、特異なあり方を示すものもある。これらの他に、71・72・75・76号では製品や剥片類を含めた10点前後に黒曜石が用いられているが、X線回折試験による産地同定を実施したところ、和田峠系2（星ヶ塔）が主体的であることが判明している。また、76号ではオニグルミの核破片とクリの炭化材片が出土しているが、それらの詳細は691頁の「IV 科学的分析」を参照されたい。尚、掲載した遺物の中で、66号の1・3、76号の2・3・7、10・11、15・16、20・21、28・46、29・35・36、30・31・33・37・39、32・35・36・38は、各々同一個体である。

上記の各土坑は、丘陵頂部の1区に集中分布しているが、これは当該期の竪穴住居が1区にほぼ限定されていることと強い関連性を持つと考えられ、貯

III 今井見切塚遺跡の調査

蔵穴としての土坑が集落内に組み入れられていることを示している。また73・74号は、33号住居の廃絶後の掘り鉢状となった埋没中途段階で、ほぼその中央部に掘り込まれているが、土坑掘削に伴う省力化を意図したのか、あるいは住居の廃絶行為や土坑の機能・用途の差を反映しているのか、注意を要するあり方である。特に、73号は人為的な埋没が想定される点で、墓坑的な用途も考慮される。ただし、

副葬品等の出土遺物からは、明確に墓坑と認定できるものは存在せず、前段階の諸磯b式期で認められたような居住空間内外での様態については判然としない。

尚、出土遺物が僅少なために確定的ではないが、前述以外の土坑で諸磯c式期に帰属する可能性のあるものとしては、108・146・175号の3基が存在する。

【諸磯c式期土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	夏島	稲荷台	花積下層	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	浮・興	中期前半	時期不明	土製品	総計
合計	16	3	7	1	2	39	13	346	17	5	150	1	600

分類別点数

諸磯b式				浮島・興津式系				土製品	諸磯c式													
分類	2類	3類	4類	種別	d1	d	e	不明	分類	3類	分類	1類			3類				4類			
合計	1	1	11	合計	5	2	4	6	合計	1	種別	a1	b2	不明	a	b	c	d	不明	c	d	不明
合計	1	1	11	合計	5	2	4	6	合計	1	合計	4	17	29	2	2	22	1	119	13	9	128

縄文原形別点数

諸磯c式							浮島・興津式系土製品			
分類	2a	2b	6a	7a	18	d	分類	18	分類	2b
合計	6	4	3	2	51	3	合計	11	合計	1

胎土別点数

胎土	型式	諸磯c	浮・興	土製品
A		68	9	1
B		2	—	—
C		—	—	—
G		—	2	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列				使用痕系列		その他				総計
器種	石鏃	石錐	削器類	打斧	磨石類	剥片	石核	原石	自然石	礫塊	
合計	4	2	16	6	19	109	3	1	2	158	320

分類別点数

石鏃				石錐		
分類	2類	3類	9類	分類	1類	2類
合計	1	1	2	合計	1	1

搔器・削器

搔器・削器		打製石斧				
分類	1類	2類	分類	1類	2類	8類
合計	3	13	合計	3	2	1

磨石類

分類	1類		2類		4類				5類	
形態	a	a	abc	ac	a	abc	ac	bc	a	ac
合計	1	4	1	2	2	1	3	1	3	1

石材別の点数と重量

石鏃			石錐			搔器・削器				打製石斧			磨石類	
コード	点数	重量	コード	点数	重量	コード	点数	重量	コード	点数	重量	コード	点数	重量
コード	5	12	コード	1	2	コード	1	2	6	12	コード	1	6	9
点数	1	3	点数	1	1	点数	10	2	1	3	点数	4	1	1
重量	0.8	2.7	重量	2.5	0.8	重量	397	11.8	51.8	8.2	重量	254	151	17.7
コード	1	12	コード	2		コード	4	9	34		コード	4	15	
点数	1	2	点数	1		点数	156	1	1		点数	18	1	
重量	39	28.8	重量	98.3		重量	13072	40.6	65.3		重量	4176	69.7	

剥片

コード	1	2	3	4	7	9	12	13	33	34
点数	48	7	3	2	5	12	27	2	1	2
重量	417	34.5	26.7	8.2	44.2	71.9	35.4	18.6	36.2	30.7

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	95	63	158

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4	9
点数	94	1
重量	9488	40.6

(3) 中・後期の土坑

A. 中 期

78～99号(第402・407・413図)の22基が存在している。出土土器により時期別に分類すれば、阿玉台Ⅱ式併行期には78・79・82・84～86号の6基が、阿玉台Ⅲ～Ⅳ式併行期には80・81・83・87～97号

の14基が、加曾利E1・E2式期には98・99号の2基が存在する。各土坑の平面形状は、楕円形状の78号を除いて、全て円形状を基本としている。壁面がオーバーハングして明瞭な袋状形態を呈するものは、87・88・93・98号の4基であるが、86・90・94号なども掘削当初は袋状であった可能性が高い。規模については、円形状土坑の場合、そのほとんどが直径

【中期前半土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	夏島	稻荷台	条痕	花積下層	諸磯a	諸磯b	諸磯c	五領ヶ台Ⅱ	阿玉台Ⅱ	阿玉台Ⅲ	新道	藤内	井戸尻	大木8a
合計	10	3	4	1	6	15	10	39	1	11	4	3	12	56	10

型式	馬高	中期前半	時期不明	土製品	総計
合計	1	305	149	1	641

分類別点数		縄文原形別点数				
土製品	分類 1類	五領ヶ台Ⅱ式	阿玉台Ⅱ式	阿玉台Ⅲ式	新道式	
合計	1	分類 18	分類 18	分類 18	分類 2a	18
		合計 1	合計 11	合計 4	合計 1	2

藤内式			井戸尻式						大木8a式				馬高式系		土製品		
分類	1a	18	縄原体	1a	2a	2b	3b	4a	17	18	縄原体	1a	2a	2b	18	縄原体	18
合計	2	10	合計	4	10	2	1	1	1	37	合計	3	3	3	1	合計	1

胎土別点数

胎土	型式	五領ヶ台Ⅱ	阿玉台Ⅱ	阿玉台Ⅲ	新道	藤内	井戸尻	大木8a	馬高	土製品
A		1	6	—	3	12	47	9	1	1
B		—	—	—	—	—	1	—	—	—
D		—	1	4	—	—	2	1	—	—
E		—	4	—	—	—	—	—	—	—
F		—	—	—	—	—	5	—	—	—
G		—	—	—	—	—	1	—	—	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列						使用痕系列		複合技術系列		その他			総計
器種	石鎌	石錐	石匙	削器類	打斧	くさび形	磨石類	砥石	多孔石	剥片	石核	自然石	礫塊	
合計	5	1	1	22	11	1	12	1	1	157	3	4	140	359

分類別点数

石鎌			石錐	
分類	3類	10類	分類	2類
合計	2	3	合計	1

石匙		搔器・削器			打製石斧			砥石		磨石類			多孔石								
分類	1類	分類	1類	2類	分類	1類	2類	8類	分類	1類	分類	2類	分類	2類							
合計	1	合計	6	16	合計	3	5	3	合計	1	形態	a	abc	ac	a	abc	ac	a	c	形態	b
											合計	1	1	1	3	2	1	2	1	合計	1

石材別の点数と重量

石鎌				石錐		石匙		搔器・削器			打製石斧				
コード	1	2	12	コード	1	コード	1	コード	1	2	5	コード	1	16	30
点数	2	1	2	点数	1	点数	1	点数	19	2	1	点数	9	1	1
重量	2.1	0.8	0.6	重量	24	重量	12.4	重量	744	3.3	54	重量	987	110	29.3

くさび形石器		磨石類		多孔石		砥石		石核		礫塊		
コード	2	コード	4	コード	4	コード	1	コード	1	12	コード	4
点数	1	点数	12	点数	1	点数	1	点数	1	2	点数	140(139)
重量	3.2	重量	3269	重量	5200	重量	83	重量	83.7	19	重量	(28604)

剥片

コード	1	2	3	7	9	12	34	37
点数	106	6	2	7	26	7(6)	1	2
重量	805	19.7	21.1	37.5	145	(7.6)	0.5	6.3

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	95	63	158

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4	9
点数	94	1
重量	9488	40.6

III 今井見切塚遺跡の調査

1 m前後であり、1.5 mを超えるようなケースは94号の1基のみである。また、掘削深度は50～70 cmのものが大半を占め、30 cm以下の浅いもの(80・84号)は僅少である。一方、楕円形土坑では、長径1.8 m×短径1.1 m×深さ40 cm前後の規模をもつ。

各土坑の埋没土の状況は、ローム土を多量に含む黒褐色土が互層堆積する85～87号のような事例もあるが、これら以外はレンズ状や円錐形状の堆積をしている。前者は、埋め戻しなどの人為的埋没状況を、後者は自然的埋没状況をそれぞれ示すと考えられる。

遺物(第403～406・408～412図)の出土状況で特筆されるのは、89・90・92・95・97・98号の6基では、埋没土の上～中位にかけた位置から、完形あるいは一部を欠損するだけの深鉢土器や浅鉢土器が出土している点である。その個体数としては、89・90・92号は2個体、95・97・98号は1個体であり、いずれも横転した状態であった。このように、土坑内に完形土器が随伴する頻度の高さは、赤城村三原田遺跡

や北橋村房谷戸遺跡・道訓前遺跡などの同期土坑でも認められ、当遺跡のみに限定されない、いわば中期前半の特徴とも言える現象である。と同時に、こうした土器の出土状況が、土坑の機能・用途を含めてどのように理解できるのかが問題であろう。ただし、上記の事例では、完形土器が単独的に出土しているわけではなく、かなり多数の土器片や石器類を伴出している。

尚、不確実ではあるが、247号も中期前半に比定されると考えられる。

B. 後期

100号の1基が存在するのみである。その平面形状は円形で、壁面がオーバーハングして明瞭な袋状形態を呈する。規模は、直径1 m×深さ0.45 mである。埋没土の状況は、b・c層にローム土の混入が認められるが、自然あるいは人為的な埋没状況を示すのか確定できない。

出土遺物(第412図)では、口縁部と底部の一部を欠失する堀之内2式期の深鉢土器1点(第412図100坑-1)が、底面に横転・密着して押しつぶされた状態で出土している点が特筆される。他に、輝石安山岩の亜角礫7点が、前述の深鉢土器に近接出土している点も注意される。

当該期の遺構は、堅穴住居を含めて100号土坑のみであり、丘陵地利用の希薄さを窺うことができる。

【中期後半土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	花積下層	諸磯a	加曾利E1	加曾利E2	曾利	中期後半	総計
合計	2	1	5	1	1	4	14

縄文原形別点数

加曾利E1式

分類	2b	4b	18
合計	3	1	1

加曾利E2式

分類	18
合計	1

曾利式系

分類	18
合計	1

胎土別点数

胎土	型式	加曾利E1	加曾利E2	曾利
A		5	1	1

(石器)

器種別点数

系列	使用痕系列	その他		総計
器種	磨石類	剥片	礫塊	
合計	2	1	11	14

分類別点数

磨石類

分類	2類
形態	abc ac
合計	1 1

石材別の点数と重量

磨石類

コード	4
点数	2
重量	956

剥片

コード	3
点数	1
重量	13.6

礫塊

コード	4
点数	11
重量	3590

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	5	6	11

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4
点数	5
重量	1771

【堀之内2式期土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯a	堀之内2	総計
合計	2	1	3

分類別点数

諸磯a式

分類	4類
合計	2

縄文原体別点数

堀之内2式

分類	18
合計	1

胎土別点数

胎土	堀之内2
△	1

(石器)

器種別点数

系列	その他		総計
器種	剥片	礫塊	
合計	4	7	11

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	7	7

石材別の点数と重量

剥片		
コード	1	2
点数	1	3
重量	3.4	2.5

礫塊

コード	4
点数	7
重量	3996

(4) 時期不明の土坑

帰属時期を明示するような遺物を随伴しない土坑は、合計 119 基が存在する。各土坑番号が順不同のため、その詳細は第 7 表を参照頂きたいが、121・127・169・181・192・205・231・233・248 号の 9 基が楕円形、173 号の 1 基が長方形の平面形状を有する他は、全て円形状を基本としている。また、全体の形態が袋状のものは、110・174・189・190・197・198・211・221・236～241・259 号の 14 基であり、いずれも平面形が円形の土坑に限定されている。規模としては、円形状土坑の場合は直径 1 m 前後で深さが 50～80 cm となるものが主体を占めているが、直径 1.5～2 m の大きなもの（140・156・163・183・211・213・221・230 号）や、掘削深度が 30 cm に満たないもの（101～103・118・119・123・124・128・133・134・137・141・147・152・154・158・163・164・167・171・176・178・183・184・193～195・210・213・223・227・232・245・252・253 号）などがあり、機能・用途差を反映していることも考慮される。また、直径が 50 cm 以下の 160・192・245 号は、掘立柱建物の柱穴あるいは樹木痕の可能性もある。

一方、楕円形の土坑では、長径 2 m×短径 1 m×深さ 50 cm 前後の規模を持つものが多い。長方形の土坑もこれに類似するが、短径が 0.7 m とやや細身である。

各土坑の埋没土は、その平面形状に関わりなく、レンズ状や円錐形状の堆積状態を示すものが大半を占めており、黒褐色土とローム土とが互層堆積して明瞭に人為的埋没状態を示すものは、149・181・186 号の 3 基にとどまっている。ただし、前者の全てが自然埋没と断定できるほどの根拠には乏しい状況である。埋没土の色調・含有物・性状などは、前期の竪穴住居の例に極めて類似しており、その大半が前期に帰属する可能性が高い。尚、122・125・134・149・181 号の 5 基については、表土（I 層）に近似した埋没土が堆積しており、現代の土坑に比定されよう。

竪穴住居との関係で注目されるのは、諸磯 a～c 式期の 24・25・29 号住居の廃絶後に、その埋没中途段階で、各々の中央部付近に掘り込まれた可能性の高い 120・211・215・224 号の存在である。時期的には、当該住居に近接した所産であることが推察されるが、窪地状となった竪穴住居の跡地利用が、単に掘削行為の省力化だけに止まらない可能性も、考慮する必要があるだろう。

出土遺物（第 412・414・416 図）については、調整剥片を主体として、石鏃・削器・打製石斧・三角錐形石器・磨製石斧・磨石類などが認められるが、その数量は極めて僅少である。また、106・119・234・257 号では、埋没土の上・中位から直径 15～25 cm 大の垂角礫が出土しており、埋没途中での混入ではなく、意識的に配置された可能性もある。

III 今井見切塚遺跡の調査

第7表 土坑の規模一覧

	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm)		出土遺物
						長さ	深さ	
1	1区	CO-119	井草I	円形	袋状	105	90	井I, 6, 諸b1
2	1区	CE-113	井草I	円形	円筒状	150	148	井I, 5, 不1
3	1区	CI-112	井草I	円形	円筒状	145	140	井I, 6, 諸c2, 不1, 斧1, 磨2
4	1区	CA-106	井草I	円形	円筒状	110	(70)	井I, 2, 花1, 削1
5	1区	CD-113	田戸下層	円形	袋状	110	97	夏1, 田下4, 黒1, 不2, 鎌1
6	5区	DR-41	花積下層	楕円形	円筒状	105	82	花1
7	5区	DC-44	花積下層	円形	袋状	83	(80)	花5, 削1
8	5区	CR-38	花積下層	円形	袋状	110	108	花9, 諸a4, 不3
9	5区	CX-35	花積下層	楕円形	楕円状	190	128	花74, 諸a3, 不3, 鎌1, 削3, 斧2, 磨1, 核2
10	5区	DD-27	花積下層	円形	楕円状	120	118	花26, 諸a1
11	5区	DG-35	花積下層	円形	円筒状	197	173	花7, 諸a4, 不4, 鎌1, 削3, 剥875
12	5区	DF-17	花積下層	円形	円筒状	138	129	花4
13	5区	DB-51	黒浜	円形	円筒状	111	104	31 黒9
14	5区	CY-48	黒浜	円形	楕円状	61	50	68 黒1, 諸a3
15	1区	BX-115	諸磯a	円形	袋状	117	110	71 稲6, 諸a21, 不1, 磨2, 剥6
16	1区	BY-117	諸磯a	円形	円筒状	119	100	32 夏1, 稲1, 黒1, 諸a23, 諸c3, 不5, 鎌1, 剥5
17	1区	BX-116	諸磯a	円形	円筒状	154	136	47 諸a11, 不1, 削2, 磨1, 皿2, 剥10
18	1区	BY-117	諸磯a	円形	円筒状	147	140	75 諸a5, 磨1, 剥4
19	1区	CA-116	諸磯a	円形	円筒状	175	173	78 諸a4, 磨2, 剥3
20	1区	CA-113	諸磯a	円形	円筒状	85	76	43 諸a73, 剥6
21	1区	BP-105	諸磯a	円形	袋状	97	95	36 諸a5
22	1区	BS-113	諸磯a	円形	円筒状	107	80	85 諸a22, 諸b1, 不1, 削1, 剥2
23	1区	BT-116	諸磯a	円形	円筒状	143	130	47 井1, 稲1, 諸a11, 不6, 多1, 剥1
24	5区	BY-42	諸磯a	円形	楕円状	111	110	19 諸a44, 不1
25	5区	DD-47	諸磯a	円形	袋状	63	60	60 井1, 花1, 諸a17, 不11, 剥2
26	5区	DD-48	諸磯a	円形	袋状	122	115	61 黒5, 諸a24, 不14, 磨1, 剥7
27	5区	DD-48	諸磯a	円形	袋状	110	107	76 花2, 黒2, 諸a12, 砥1, 剥1
28	5区	DE-47	諸磯a	円形	袋状	111	103	105 花1, 黒1, 諸a14, 不10, 剥1
29	5区	DI-43	諸磯a	円形	袋状	95	88	60 諸a25, 剥4
30	5区	CW-38	諸磯a	円形	円筒状	92	85	65 諸a19, 不7, 剥1
31	5区	CJ-40	諸磯a	円形	円筒状	112	98	52 諸a9, 削2, 剥2
32	5区	CO-47	諸磯a	円形	楕円状	136	120	49 諸a3
33	5区	CK-31	諸磯a	円形	円筒状	120	105	90 糸1, 花1, 諸a37, 磨2, 皿2, 剥3
34	5区	CR-21	諸磯a	円形	円筒状	99	93	20 諸a27, 不4, 剥1
35	5区	CR-23	諸磯a	円形	楕円状	85	80	63 花1, 諸a14, 不1
36	5区	CU-23	諸磯a	円形	楕円状	132	118	71 黒1, 諸a126, 不4
37	5区	CX-25	諸磯a	円形	円筒状	101	92	36 花1, 諸a3, 剥2
38	5区	CU-21	諸磯a	円形	袋状	125	113	123 花1, 諸a31, 不2, 鎌1, 斧1, 剥4
39	5区	CR-23	諸磯a	円形	袋状	116	(82)	60 諸a13, 磨2, 剥1
40	5区	CV-23	諸磯a	円形	円筒状	100	86	52 花3, 諸a33, 不5, 剥2
41	5区	CP-27	諸磯a	円形	円筒状	160	156	12 花2, 諸a20, 不4, 剥2
42	5区	CW-49	諸磯a	円形	円筒状	123	117	26 諸a11, 剥2
43	5区	DD-50	諸磯a	円形	袋状	160	155	105 稲1, 花9, 黒1, 諸a132, 諸b1, 不11, 土製4
44	5区	CN-48	諸磯a	円形	袋状	115	97	67 諸a10, 剥1

地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm)		出土遺物	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm)		出土遺物
					長径	短径							長径	短径	
82	1区	BY-116	阿玉台Ⅱ	凹形	凹筒状	123	100	52	諸b1, 中前9, 五Ⅱ1, 阿Ⅱ2, 磨1, 剝2	117	5区	CY-28	諸a1, 皿1		
83	1区	BX-117	阿玉台Ⅲ	凹形	凹筒状	114	105	38	諸a1, 諸b2, 諸c2, 中前33, 阿Ⅲ4, 新1, 藤5, 大8a3, 削1, 剝10, 椀1	118	5区	CP-48	不明		
84	1区	BW-106	阿玉台Ⅱ	凹形	凹筒状	100	87	30	花1, 中前10, 阿Ⅱ4, 不1	119	5区	CQ-48	不明		
85	1区	BT-108	藤内	凹形	凹筒状	130	108	64	稻1, 花1, 諸a3, 諸b1, 諸c1, 中前2, 藤3, 不14, 鐵1, 斧1, 磨1, 敲1, 剝2	120	5区	CI-48	不明		
86	1区	BS-110	藤内	凹形	凹筒状	110	95	47	井3, 稻1, 花2, 諸a2, 諸c1, 中前12, 藤6, 不7, 削1, 斧1, 磨1, 砥1, 剝5	121	7区	CG-64	不明		
87	1区	BS-110	井戸尻	凹形	袋状	114	110	72	稻1, 花2, 諸a3, 諸b1, 諸c1, 中前3, 井戸2, 大8a2, 鐵1, 削3, 錐1, 斧1, 磨1, 剝19	122	1区	CO-115	不明		
88	1区	BT-116	井戸尻	凹形	袋状	96	90	62	井1, 斧1, 諸a2, 諸c3, 中前5, 井戸6, 不1, 磨2, 剝5	123	1区	CM-114	不明		
89	1区	CG-113	井戸尻	凹形	凹筒状	100	89	34	井2, 諸c1, 中前5, 井戸7, 不11, 削2, 磨1, 剝6, 核1	124	1区	CN-115	不明		
90	1区	CI-113	井戸尻	凹形	凹筒状	131	129	51	諸a2, 諸c4, 中前79, 井戸8, 大8a2, 削4, 匙1, 斧3, 磨1, 剝34	125	1区	CL-117	不明		
91	1区	CH-112	井戸尻	凹形	凹筒状	100	100	32	井2, 諸c1, 中前11, 井戸1, 不1, 鐵1, 剝3	126	1区	CG-116	不明		
92	1区	CC-110	井戸尻	凹形	凹筒状	113	110	51	夏1, 中前42, 井戸4, 削2	127	1区	CK-119	不明		
93	1区	CP-116	井戸尻	凹形	凹筒状	110	107	65	諸c2, 中前1, 井戸2, 不2, 鐵1, 削1, 核1	128	1区	CO-119	不明		
94	1区	CH-111	井戸尻	凹形	凹筒状	156	156	73	夏1, 稻1, 諸a1, 諸c5, 中前16, 井戸5, 不15, 鐵1, 斧2, 磨1, 剝9, 核1	129	1区	CI-122	不明		
95	1区	CH-112	井戸尻	凹形	凹筒状	121	115	48	夏2, 諸b2, 諸c7, 中前43, 阿Ⅱ5, 井戸8, 不18, 削3, 斧1, 磨1, 剝16	130	1区	CA-117	不明		
96	1区	BY-106	井戸尻	凹形	凹筒状	83	83	33	諸b1, 諸c2, 中前11, 井戸3, 不3, 削1, 剝1	131	1区	BA-113	不明		
97	5区	BD-42	加曾利E1	凹形	槽鉢状	142	130	43	井戸1, 大8a1	132	1区	BA-113	不明		
98	5区	DE-43	加曾利E1	凹形	凹筒状	112	98	56	花2, 諸a1, 中後4, E15, 磨2, 剝1	133	1区	BV-114	不明		
99	7区	CI-65	加曾利E2	凹形	凹筒状	116	100	28	E21, 草1	134	1区	BW-114	不明		
100	5区	CT-42	堀之内2	凹形	袋状	100	98	50	諸a2, E21, 堀21, 剝4	135	1区	CA-114	不明		
101	1区	CJ-114	不明	凹形	凹筒状	105	100	24	磨1	136	1区	BA-103	不明		
102	1区	BX-105	不明	凹形	凹筒状	93	81	24	削1, 剝1	137	1区	BX-103	不明		
103	1区	BT-108	不明	凹形	凹筒状	90	75	20	削1, 剝1	138	1区	BO-106	不明		
104	1区	BS-111	中期?	凹形	凹筒状	105	96	33	井1, 中前3, 不2, 斧1, 磨1, 剝12	139	1区	BW-102	不明		
105	1区	CC-107	中期?	凹形	凹筒状	119	107	59	中前1, 斧1, 剝2	140	1区	BQ-106	不明		
106	1区	CA-111	不明	凹形	凹筒状	82	71	32	削1	141	1区	BW-103	不明		
107	1区	CD-110	中期?	凹形	凹筒状	123	94	24	諸c2, 中前4, 不2, 削1, 剝4	142	1区	BW-106	不明		
108	1区	BY-117	諸磯c?	凹形	凹筒状	113	102	29	諸c3, 削1, 剝1	143	1区	BS-110	不明		
109	1区	CB-118	不明	凹形	凹筒状	111	100	25	中前3, 磨1, 剝2	144	1区	BS-111	不明		
110	1区	CL-112	不明	凹形	袋状	76	66	88	砥1, 砥原1	145	1区	CC-107	不明		
111	1区	CF-101	諸磯b?	凹形	袋状	165	165	113	黒2, 諸b2, 不2, 磨斧1	146	1区	BV-106	不明		
112	1区	BS-112	井草?	凹形	凹筒状	74	70	36	井1, 不2, 磨2	147	1区	CI-105	不明		
113	3区	AV-87	不明	凹形	凹筒状	106	99	60	磨1	148	1区	BY-109	不明		
114	5区	DK-35	黒浜?	凹形	槽鉢状	133	125	62	稲1, 黒1, 削1, 剝21	149	1区	CG-105	不明		
115	5区	CY-44	花積下層?	凹形	槽鉢状	125	120	35	花2, 剝6, 核1	150	1区	CE-110	不明		
116	5区	DG-33	不明	凹形	凹筒状	138	117	39	三1, 剝1	151	1区	BU-116	不明		

III 今井見切塚遺跡の調査

	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm)		出土遺物	
						長径	短径		
162	1区	CG-103	不明	円形	円筒状	180	87	66	
163	1区	DQ-88	不明	円形	円筒状	172	147	27	
164	1区	CE-89	不明	円形	円筒状	89	78	27	
165	1区	DQ-100	不明	円形	円筒状	99	92	72	
166	1区	CF-88	不明	円形	円筒状	136	118	35	
167	1区	CE-89	不明	円形	円筒状	107	96	20	
168	1区	BW-92	不明	円形	円筒状	108	106	32	
169	1区	BW-94	不明	楕円形	円筒状	197	148	65	
170	1区	BV-121	不明	円形	円筒状	92	85	72	
171	1区	CM-102	不明	円形	円筒状	90	87	23	
172	1区	CF-122	不明	円形	円筒状	98	98	56	剥1
173	1区	BK-93	不明	楕円形	円筒状	214	69	38	
174	1区	BP-107	不明	円形	袋状	126	125	90	剥1
175	1区	BS-113	諸磯 c ?	円形	円筒状	87	86	30	諸c, 剥1
176	1区	BS-114	不明	円形	円筒状	85	82	28	剥1
177	3区	AX-84	不明	円形	円筒状	98	87	36	
178	3区	AV-86	不明	円形	円筒状	137	123	25	
179	3区	AS-85	不明	円形	円筒状	137	133	55	
180	3区	AR-85	不明	円形	円筒状	105	100	33	
181	3区	AL-90	不明	楕円形	円筒状	185	118	52	
182	3区	AW-85	不明	円形	円筒状	132	85	96	
183	4区	DA-122	不明	円形	円筒状	160	152	19	
184	4区	CV-118	不明	円形	円筒状	142	124	22	
185	4区	CR-102	不明	円形	円筒状	140	112	66	
186	5区	EM-46	不明	円形	円筒状	105	95	80	
187	5区	EC-37	諸磯 b ?	円形	円筒状	102	95	60	諸b2
188	5区	DS-41	不明	円形	円筒状	104	97	41	
189	5区	DS-41	不明	円形	袋状	108	97	68	
190	5区	DR-41	不明	円形	袋状	92	84	52	
191	5区	DO-44	諸磯 a ?	円形	袋状	98	95	62	夏2, 諸a3, 剥1
192	5区	DG-46	不明	楕円形	楕鉢状	62	43	54	剥1
193	5区	DQ-49	不明	円形	円筒状	96	95	20	
194	5区	DR-49	不明	円形	円筒状	123	116	16	
195	5区	DP-35	不明	円形	円筒状	115	103	24	
196	5区	DL-33	不明	円形	楕鉢状	87	69	59	
197	5区	DG-74	不明	円形	袋状	128	124	55	
198	5区	DN-76	不明	円形	袋状	116	108	41	
199	5区	CR-32	花積下層?	円形	円筒状	88	80	50	花1
200	5区	CS-36	不明	円形	円筒状	95	90	36	剥1
201	5区	CV-33	不明	円形	楕鉢状	116	95	45	
202	5区	CV-40	花積下層?	円形	円筒状	111	110	25	花2, 鐵1
203	5区	CM-43	諸磯 a ?	円形	楕鉢状	90	70	46	諸a1
204	5区	CN-44	不明	円形	楕鉢状	73	69	39	諸a2
205	5区	CM-39	不明	楕円形	円筒状	116	77	52	剥3, 剥2
206	5区	CL-31	不明	円形	円筒状	95	77	48	
207	5区	CW-21	諸磯 a ?	円形	楕鉢状	114	108	35	諸a1
208	5区	DI-23	不明	円形	円筒状	140	130	58	
209	5区	DK-23	早期条痕	円形	円筒状	91	81	50	条1
210	5区	CV-44	不明	円形	円筒状	58	54	19	
211	5区	CI-39	不明	円形	袋状	153	147	37	
212	5区	DI-27	花積下層?	円形	円筒状	119	110	50	花2, 剥1
213	5区	DC-32	不明	円形	円筒状	156	149	30	
214	5区	DA-28	不明	円形	円筒状	80	73	49	
215	5区	DI-37	不明	円形	円筒状	140	130	39	
216	5区	DO-21	不明	円形	円筒状	120	115	32	
217	5区	DE-18	不明	円形	円筒状	128	122	63	剥6
218	5区	DR-20	不明	円形	円筒状	110	90	25	
219	5区	DB-53	不明	円形	円筒状	94	(86)	41	
220	5区	CO-58	諸磯 b ?	円形	円筒状	100	93	45	諸b2, 剥1
221	5区	CN-48	不明	円形	円筒状	174	150	72	
222	5区	CP-48	諸磯 a ?	円形	円筒状	94	85	17	諸a3
223	5区	CP-55	不明	円形	楕鉢状	75	70	34	
224	5区	CH-48	諸磯 b ?	円形	円筒状	121	115	17	諸b2
225	5区	CP-49	黒浜?	円形	袋状	88	90	50	黒1
226	6区	CE-43	不明	円形	円筒状	103	84	34	
227	6区	BQ-43	不明	円形	円筒状	125	108	32	
228	6区	BU-33	不明	円形	円筒状	103	80	31	
229	6区	BU-39	不明	円形	円筒状	121	107	79	
230	6区	BW-31	不明	円形	円筒状	158	143	38	剥1
231	6区	BV-29	不明	楕円形	円筒状	158	94	32	
232	6区	BT-27	不明	円形	円筒状	112	93	23	
233	6区	BW-33	不明	楕円形	円筒状	209	87	45	
234	6区	BX-29	不明	円形	円筒状	125	109	37	
235	6区	BX-28	不明	円形	円筒状	140	113	36	
236	6区	BV-28	不明	円形	袋状	102	100	76	
237	6区	BV-32	不明	円形	袋状	119	104	80	
238	6区	CI-43	不明	円形	袋状	80	74	39	磨1
239	6区	BX-33	不明	円形	袋状	130	103	86	
240	6区	BR-25	不明	円形	袋状	(126)	117	48	
241	6区	BS-26	不明	円形	袋状	100	95	89	
242	7区	BW-80	不明	円形	円筒状	72	62	38	
243	7区	BW-81	不明	円形	円筒状	72	63	37	
244	7区	BX-82	不明	円形	円筒状	59	58	50	
245	7区	BV-82	不明	円形	円筒状	42	39	17	
246	7区	BV-76	不明	円形	円筒状	105	72	33	
247	7区	BP-79	中期?	円形	円筒状	74	63	25	中前2
248	7区	BC-53	不明	楕円形	円筒状	96	69	65	
249	7区	CG-65	不明	円形	円筒状	117	111	44	
250	7区	CG-64	不明	円形	円筒状	78	62	27	
251	7区	CG-63	不明	円形	円筒状	78	70	42	

地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm)		出土遺物
					長さ	深さ	
252	7区 CH-62	不明	円形	円筒状	77	74	23
253	7区 CE-62	不明	円形	円筒状	113	102	30
254	7区 CF-73	不明	円形	円筒状	80	67	32
255	7区 CI-63	不明	円形	円筒状	104	97	60
256	7区 CW-58	不明	円形	円筒状	101	98	52
257	7区 CX-48	不明	円形	円筒状	98	87	37
258	7区 CA-47	諸磯b?	円形	袋状	150	143	70 諸b1
259	7区 CA-47	不明	円形	袋状	115	114	58

※ () 内は推定値

出土遺物の凡例

井：井草式、夏：夏島式、稻：稻荷台式、田下：田戸下層式、条：早期末条痕文、花：花積下層式、黒：黒浜式、諸a：諸磯a式、諸b：諸磯b式、諸c：諸磯c式、浮：浮島・興津式系、大5b：大木5b式系、中前：中期前半、中後：中期後半、五II：五領ヶ台II式、阿II：阿玉台II式、阿III：阿玉台III式、新：新道式、藤：藤内式、井戸：井戸尻式、E1：加曾利E1式、E2：加曾利E2式、大8a：大木8a式、曾：曾利式系、堀2：堀之内2式、不：型式不明。鎌：石鎌、消：消器、弁：打製石弁、礫：礫器、磨斧：磨製石斧、磨：磨石類、又：スゾブ型石器、皿：三角形石器、皿：石皿、台：台石、砥：砥石、剥：剥片、核：石核、砥原：砥石原石、

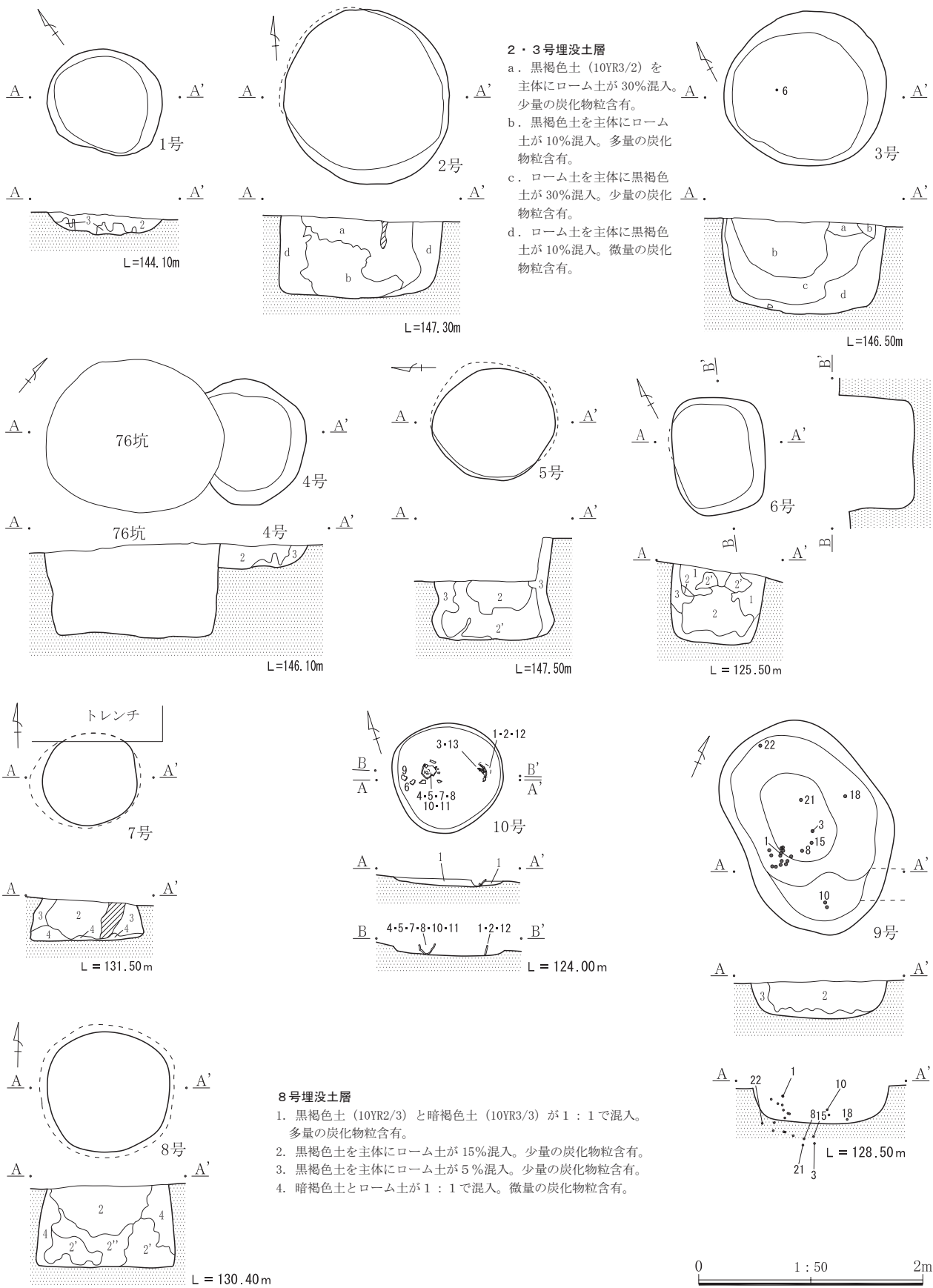
第8表 今井見切塚遺跡A地点の土坑規模一覧

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模		出土遺物
						長さ	深さ	
A1	5区	CO-26	諸磯a・b	円形	円筒状	185	173	47 諸a14, 諸b29, 削2, 斧1, 剥10
A2	5区	CO-26	諸磯a・b	円形	袋状	113	108	58 諸a4, 諸b11
A3	5区	CP-27	前期?	円形	円筒状	150	131	24
A4	5区	CQ-28	前期?	円形	円筒状	149	143	
A5	5区	CP-29	前期?	円形	円筒状	145	122	35
A6	5区	CP-29	諸磯a	円形	円筒状	136	122	50 諸a4
A7	5区	CQ-26	諸磯a・b	円形	円筒状	不明	110	30 諸a4, 諸b2
A8	5区	CP-30	諸磯a・b	円形	円筒状	145	123	20 花1, 諸a86, 諸b37
A9	5区	CQ-25	諸磯b	円形	円筒状	160	143	34 諸b2
A10	5区	CR-28	諸磯b	楕円形	円筒状	139	102	38
A11	5区	CS-27	前期?	円形	円筒状	不明	97	35
A12	5区	CS-27	前期?	円形	円筒状	141	123	82
A13	5区	CQ-27	諸磯a?	円形	袋状	94	88	60
A14	5区	CR-26	諸磯a?	円形	袋状	60	54	56

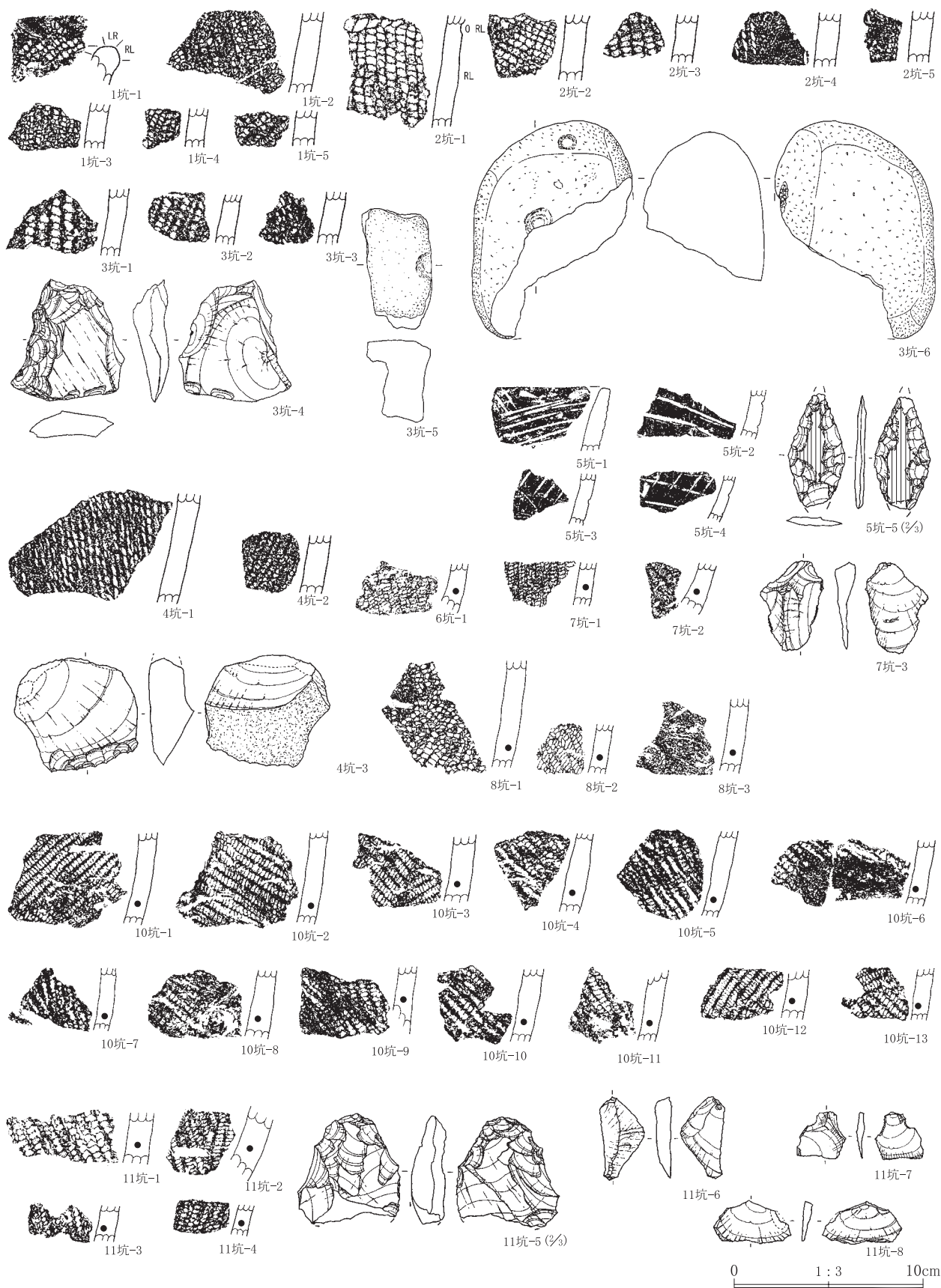
出土遺物の凡例

花：花積下層式、諸a：諸磯a式、諸b：諸磯b式、消：消器
 弁：打製石弁、剥：剥片

III 今井見切塚遺跡の調査

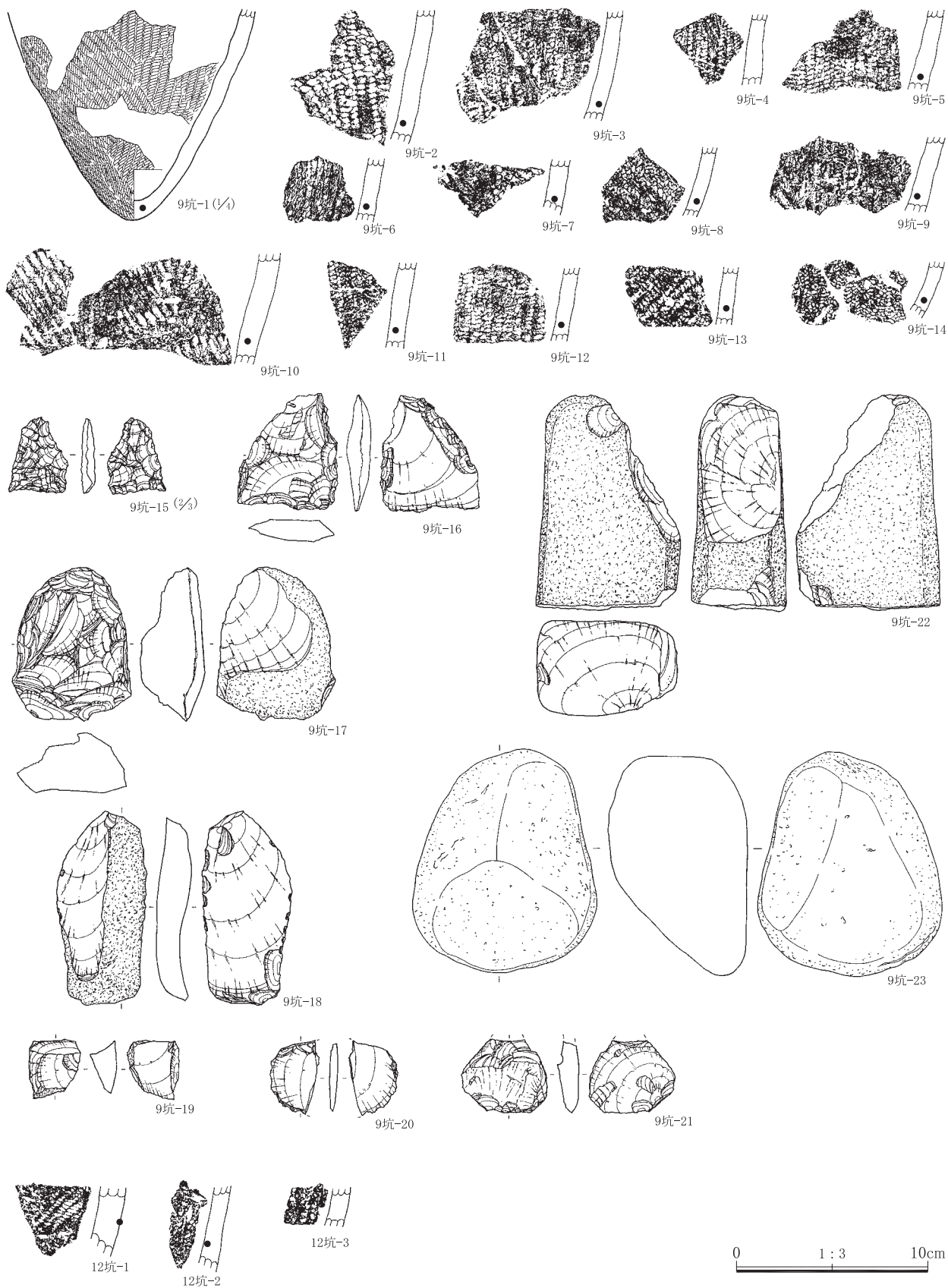


第376図 1号土坑～10号土坑

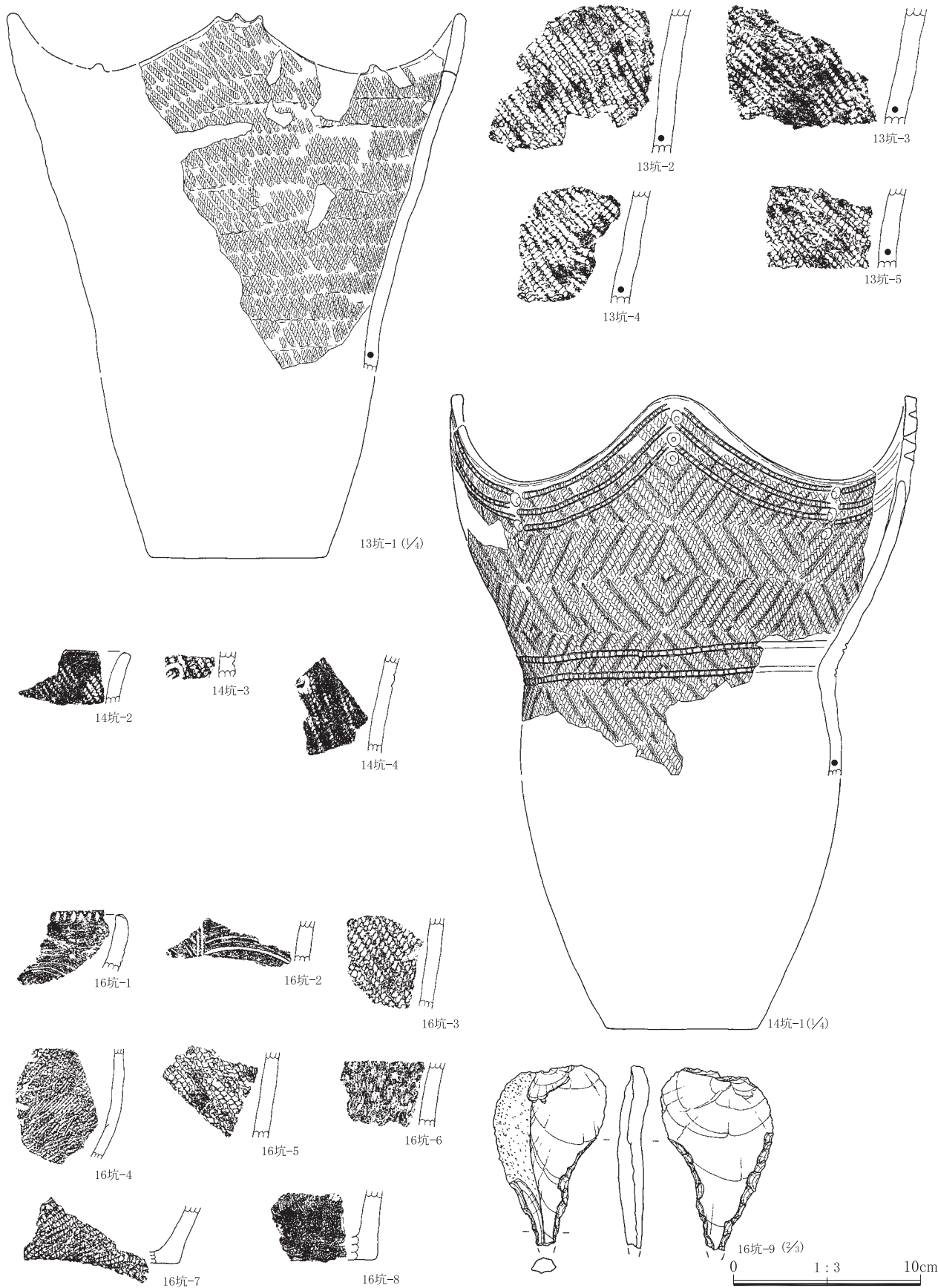


第 377 图 土坑出土遺物 (1)

III 今井見切塚遺跡の調査

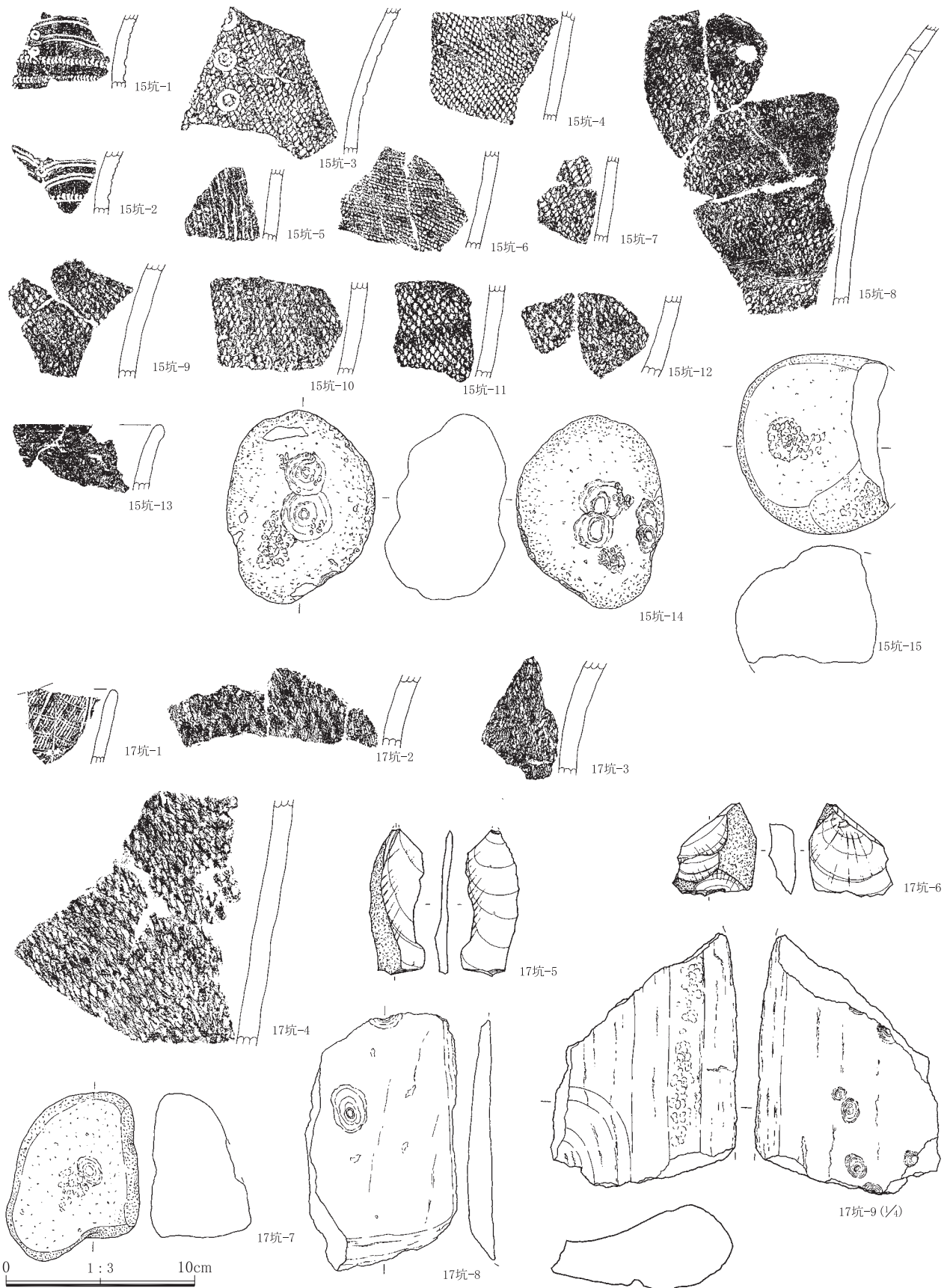


第 378 図 土坑出土遺物 (2)

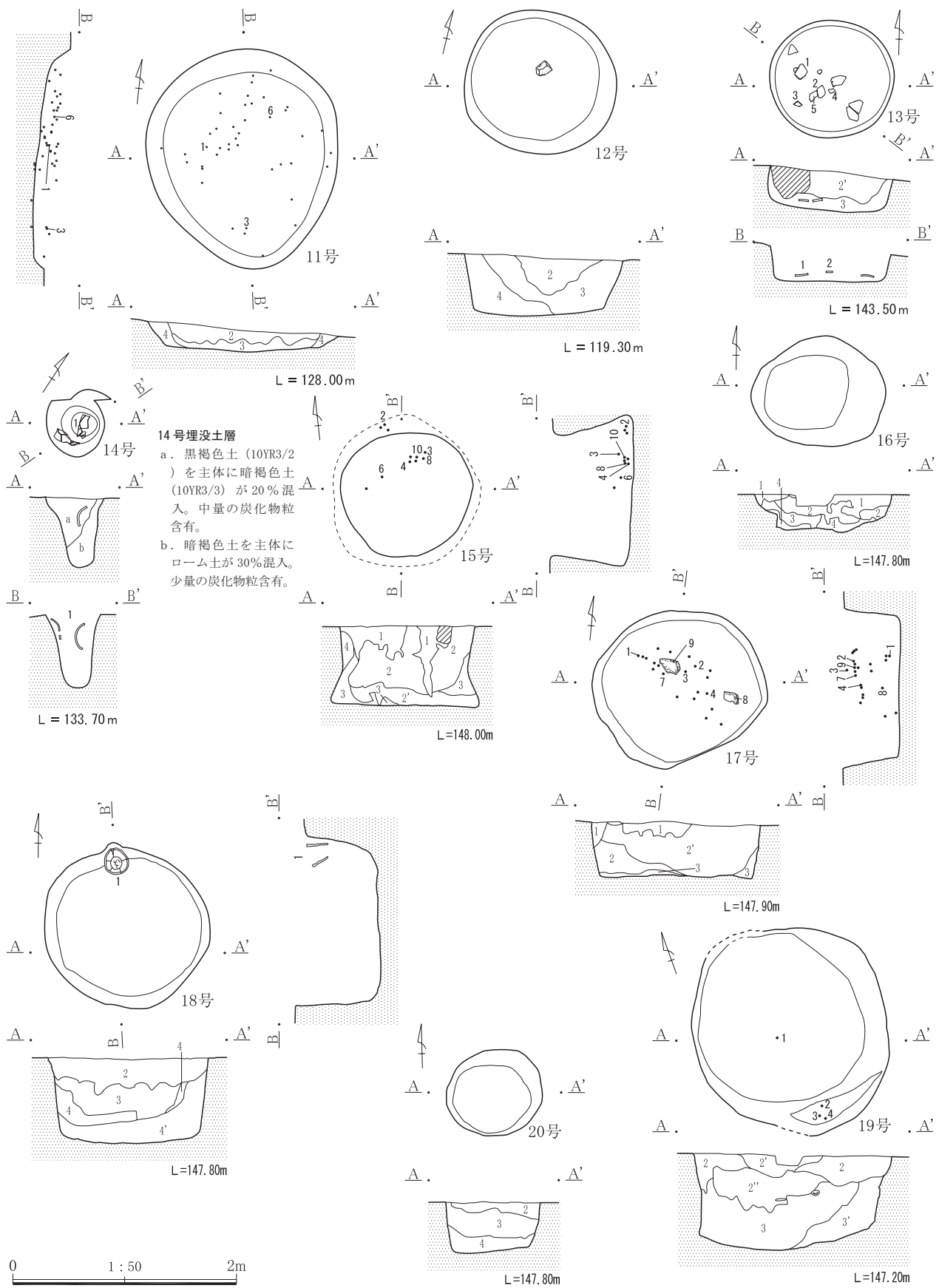


第 379 图 土坑出土遗物 (3)

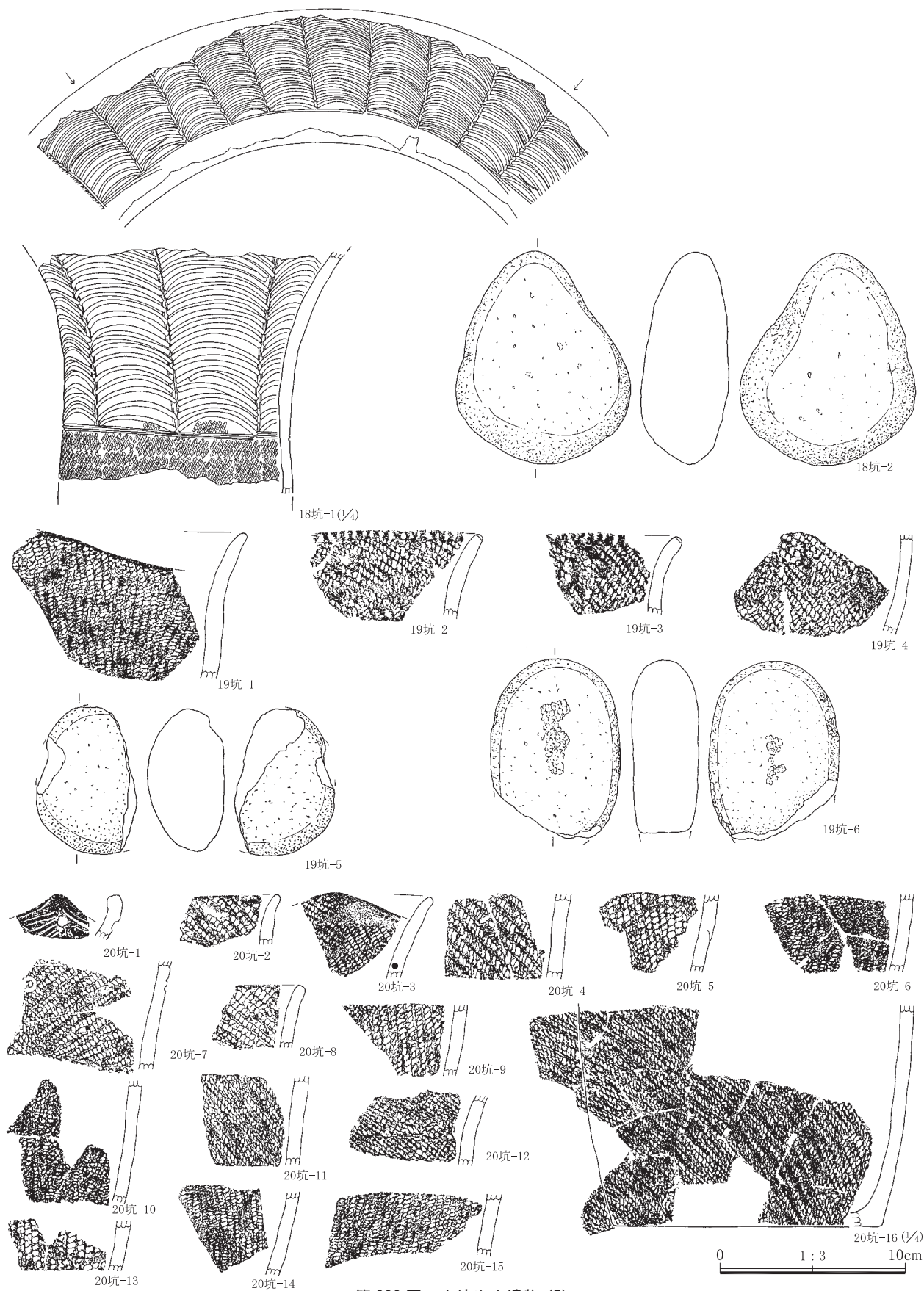
III 今井見切塚遺跡の調査



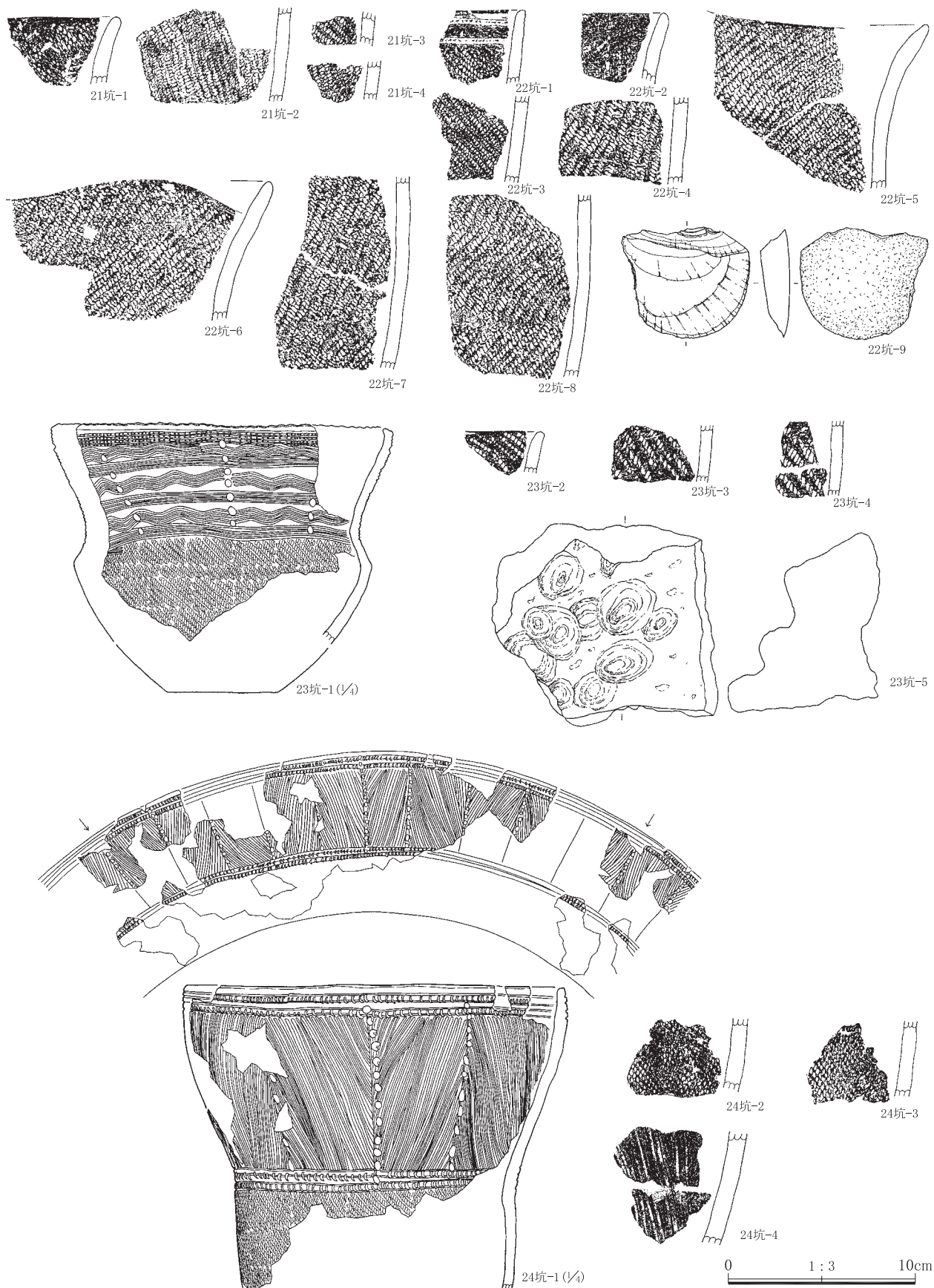
第 380 図 土坑出土遺物 (4)



第 381 図 11 号土坑 ~ 20 号土坑

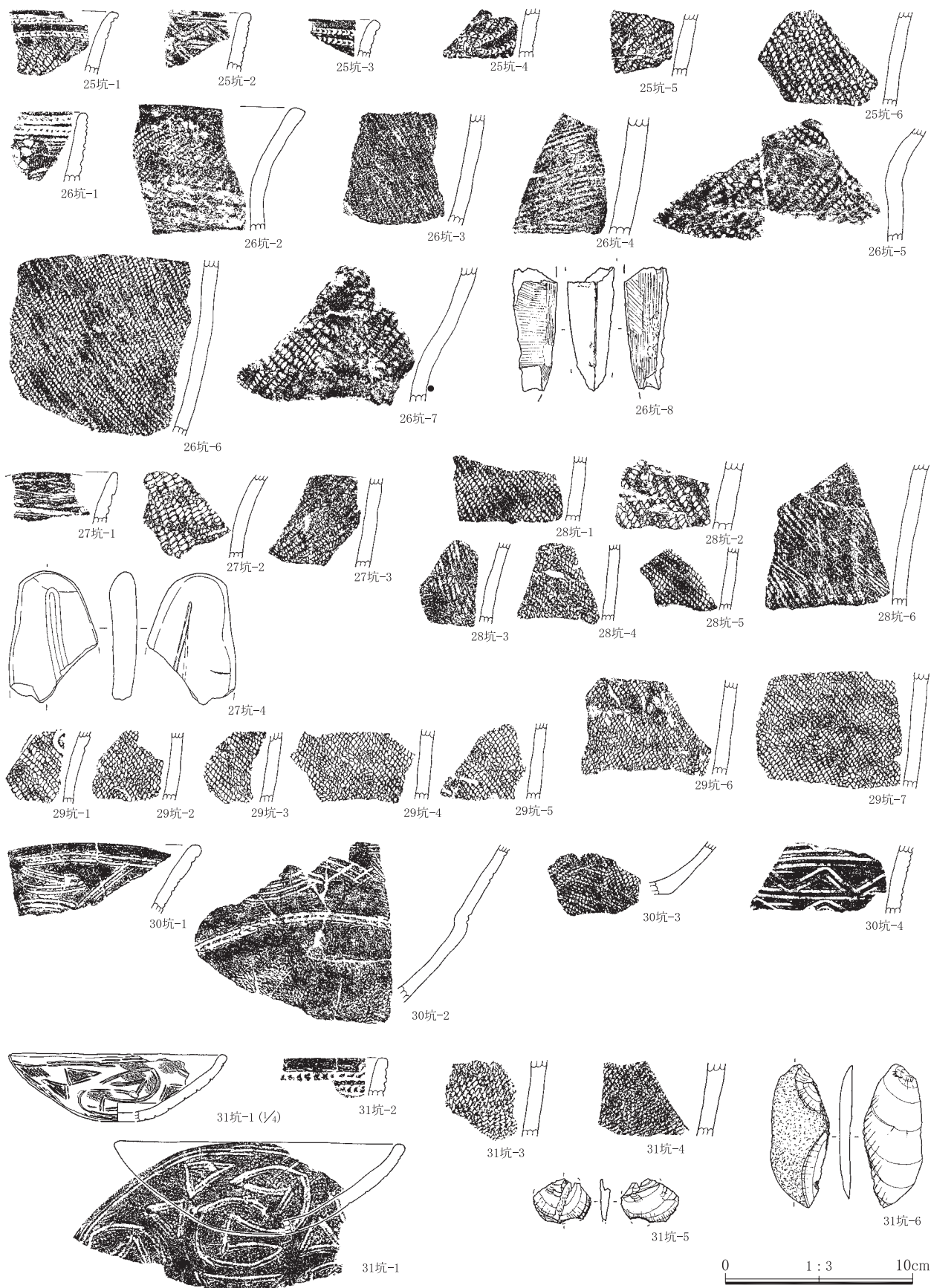


第 382 図 土坑出土遺物 (5)



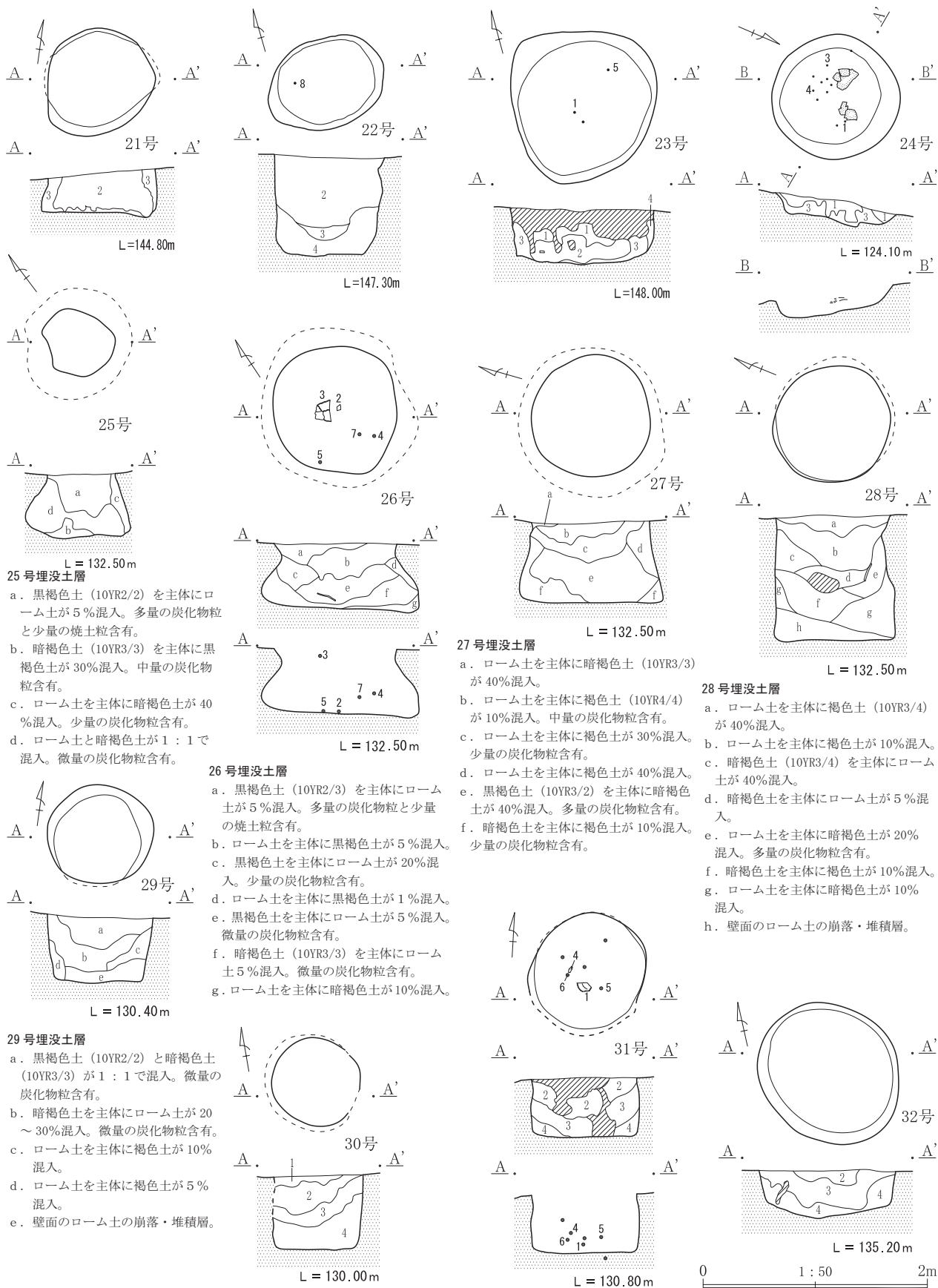
第 383 图 土坑出土遗物 (6)

III 今井見切塚遺跡の調査



第 384 図 土坑出土遺物 (7)

4. 土坑



25号埋没土層

- a. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体にローム土が5%混入。多量の炭化物粒と少量の焼土粒含有。
- b. 暗褐色土 (10YR3/3) を主体に黒褐色土が30%混入。中量の炭化物粒含有。
- c. ローム土を主体に暗褐色土が40%混入。少量の炭化物粒含有。
- d. ローム土と暗褐色土が1:1で混入。微量の炭化物粒含有。

26号埋没土層

- a. 黒褐色土 (10YR2/3) を主体にローム土が5%混入。多量の炭化物粒と少量の焼土粒含有。
- b. ローム土を主体に黒褐色土が5%混入。
- c. 黒褐色土を主体にローム土が20%混入。少量の炭化物粒含有。
- d. ローム土を主体に黒褐色土が1%混入。
- e. 黒褐色土を主体にローム土が5%混入。微量の炭化物粒含有。
- f. 暗褐色土 (10YR3/3) を主体にローム土5%混入。微量の炭化物粒含有。
- g. ローム土を主体に暗褐色土が10%混入。

29号埋没土層

- a. 黒褐色土 (10YR2/2) と暗褐色土 (10YR3/3) が1:1で混入。微量の炭化物粒含有。
- b. 暗褐色土を主体にローム土が20~30%混入。微量の炭化物粒含有。
- c. ローム土を主体に褐色土が10%混入。
- d. ローム土を主体に褐色土が5%混入。
- e. 壁面のローム土の崩落・堆積層。

27号埋没土層

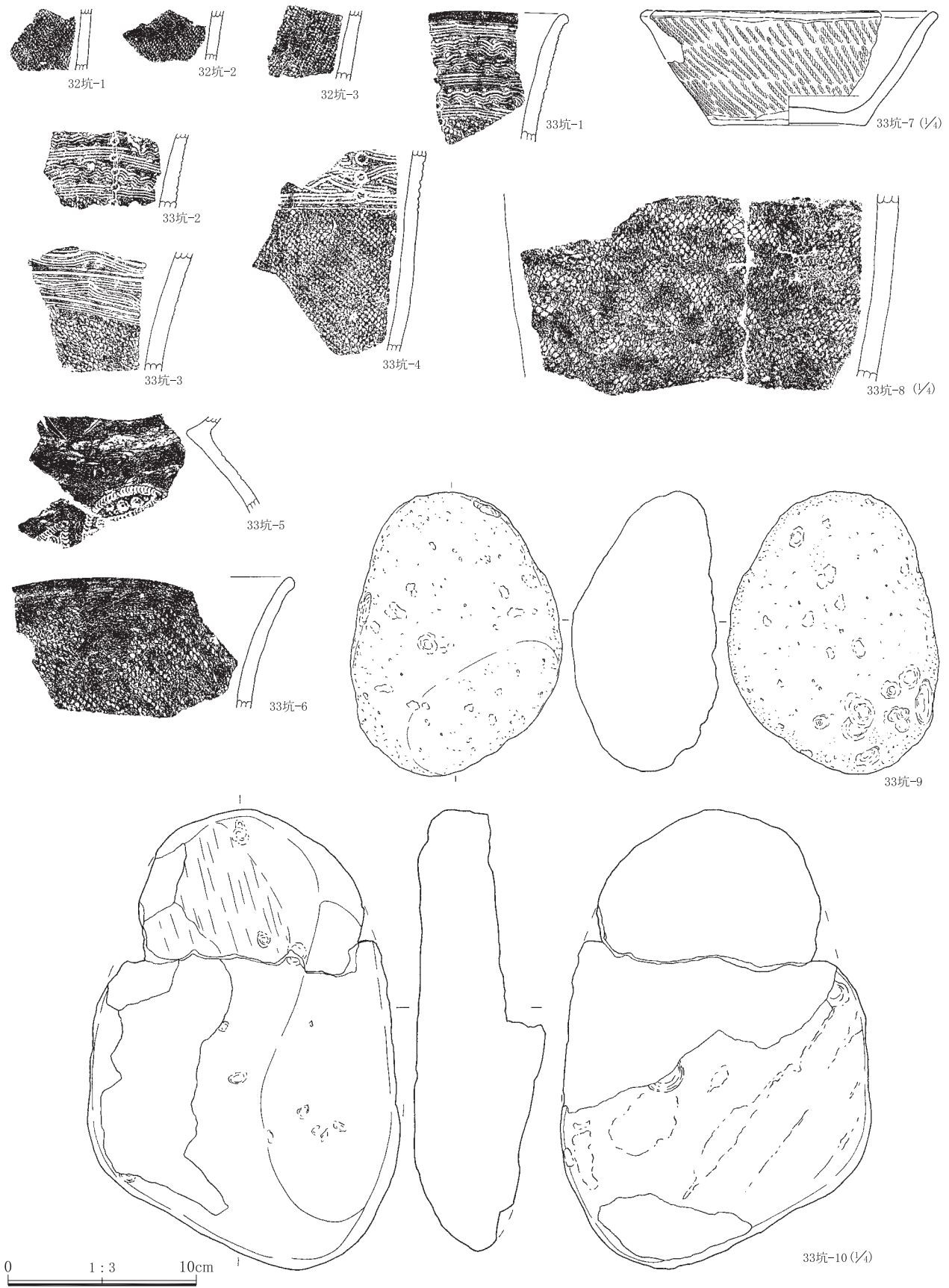
- a. ローム土を主体に暗褐色土 (10YR3/3) が40%混入。
- b. ローム土を主体に褐色土 (10YR4/4) が10%混入。中量の炭化物粒含有。
- c. ローム土を主体に褐色土が30%混入。少量の炭化物粒含有。
- d. ローム土を主体に褐色土が40%混入。
- e. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体に暗褐色土が40%混入。多量の炭化物粒含有。
- f. 暗褐色土を主体に褐色土が10%混入。少量の炭化物粒含有。

28号埋没土層

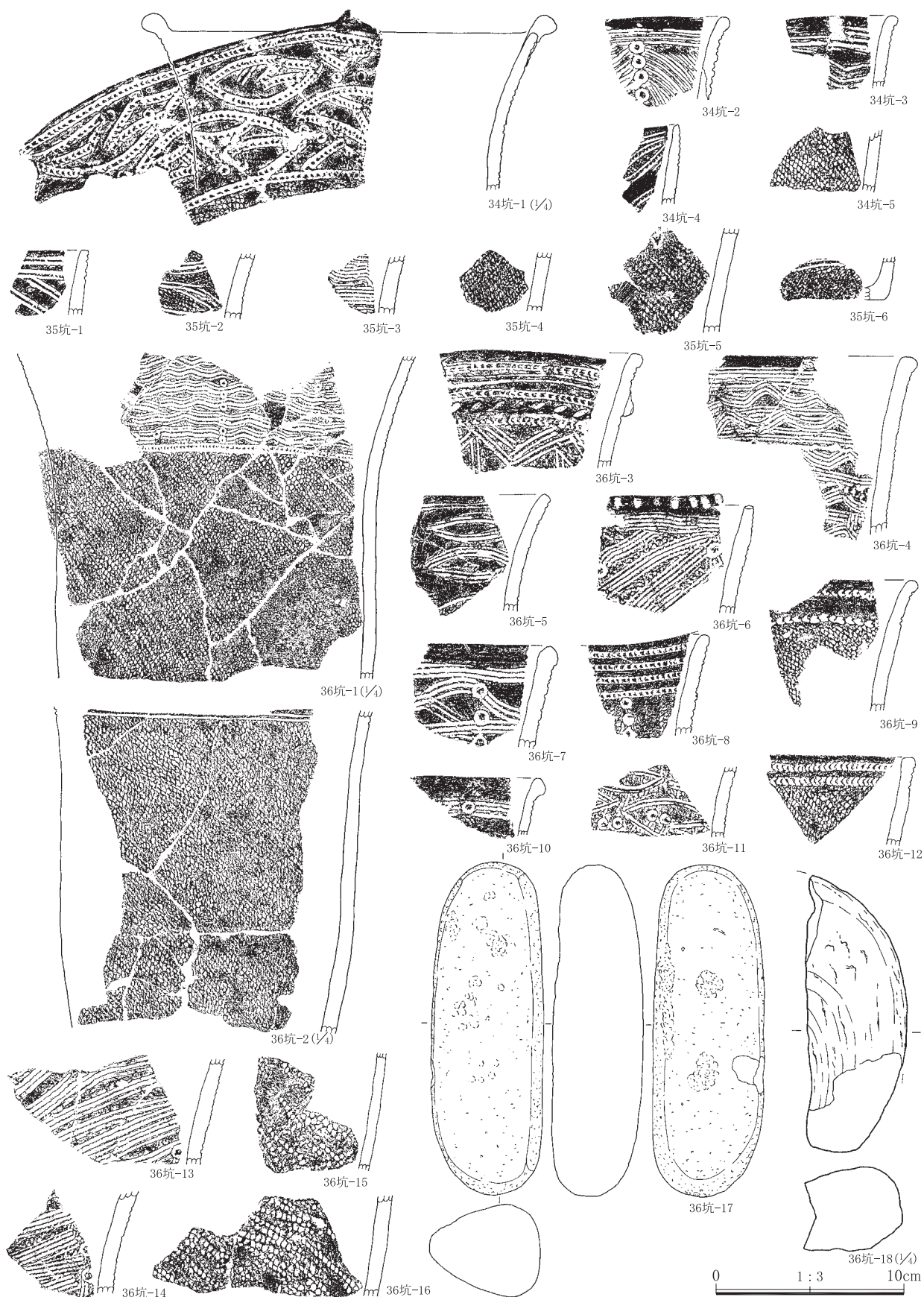
- a. ローム土を主体に褐色土 (10YR3/4) が40%混入。
- b. ローム土を主体に褐色土が10%混入。
- c. 暗褐色土 (10YR3/4) を主体にローム土が40%混入。
- d. 暗褐色土を主体にローム土が5%混入。
- e. ローム土を主体に暗褐色土が20%混入。多量の炭化物粒含有。
- f. 暗褐色土を主体に褐色土が10%混入。
- g. ローム土を主体に暗褐色土が10%混入。
- h. 壁面のローム土の崩落・堆積層。

第385図 21号土坑~32号土坑

III 今井見切塚遺跡の調査

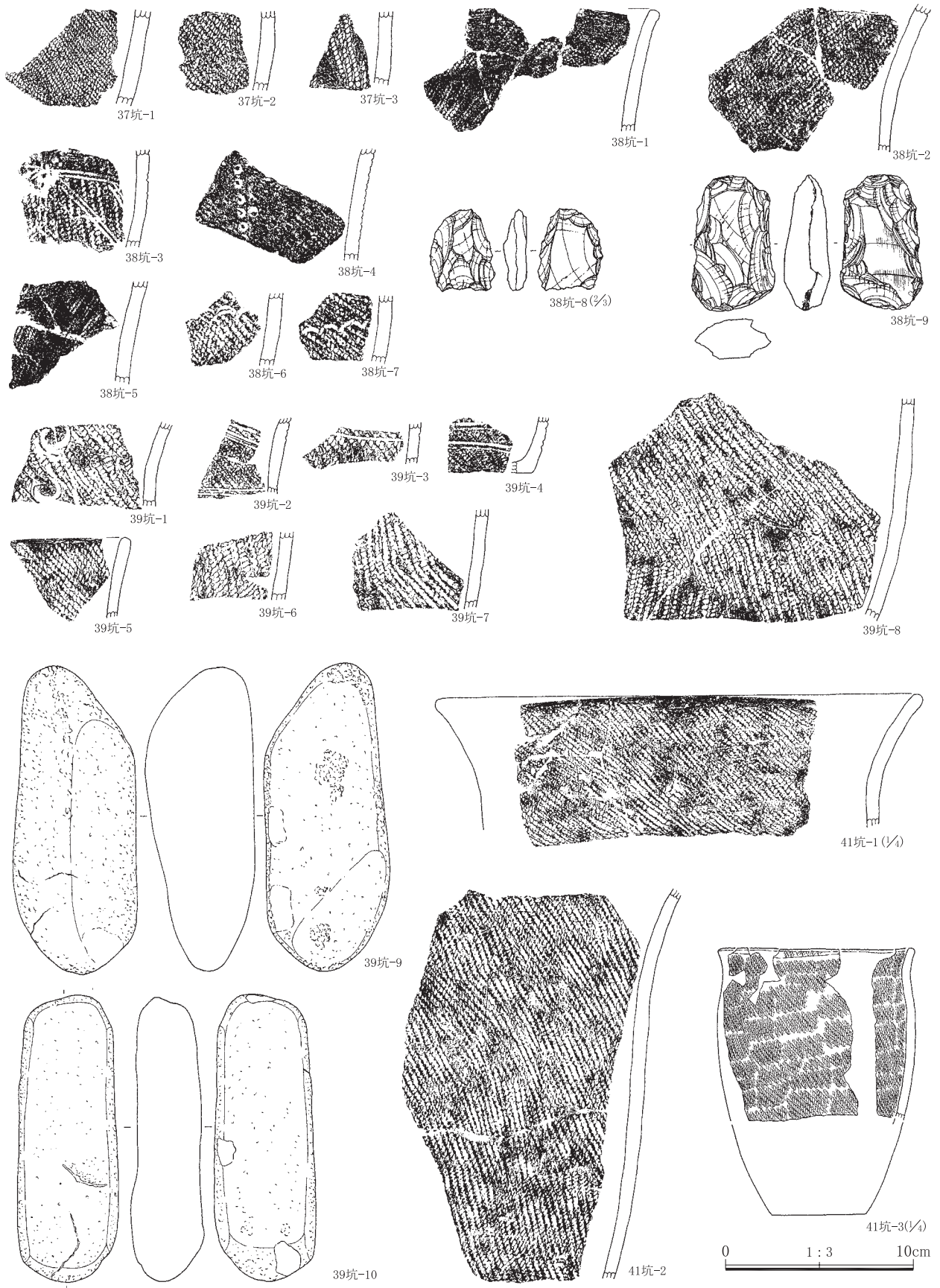


第386図 土坑出土遺物(8)



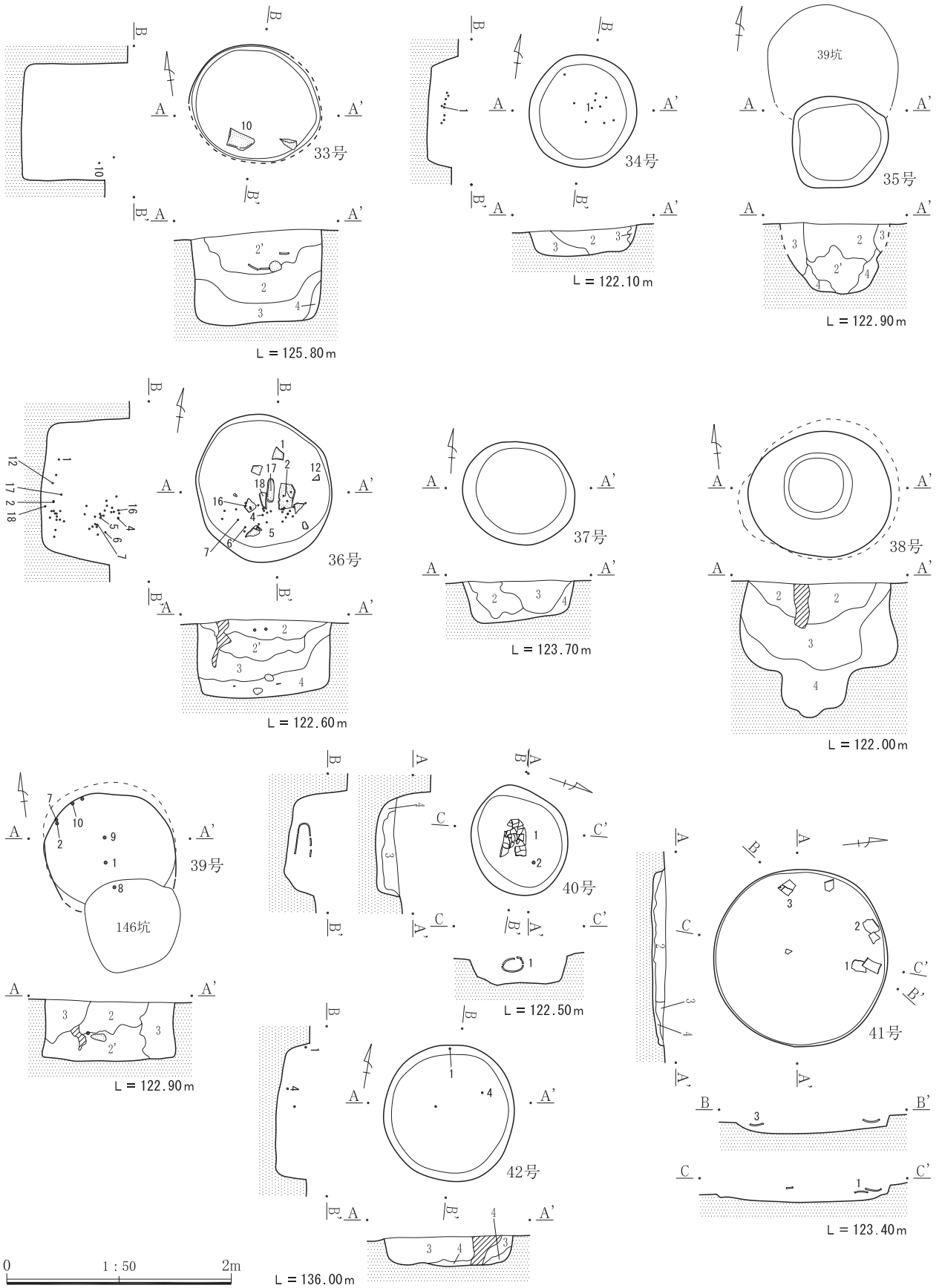
第 387 图 土坑出土遗物 (9)

III 今井見切塚遺跡の調査



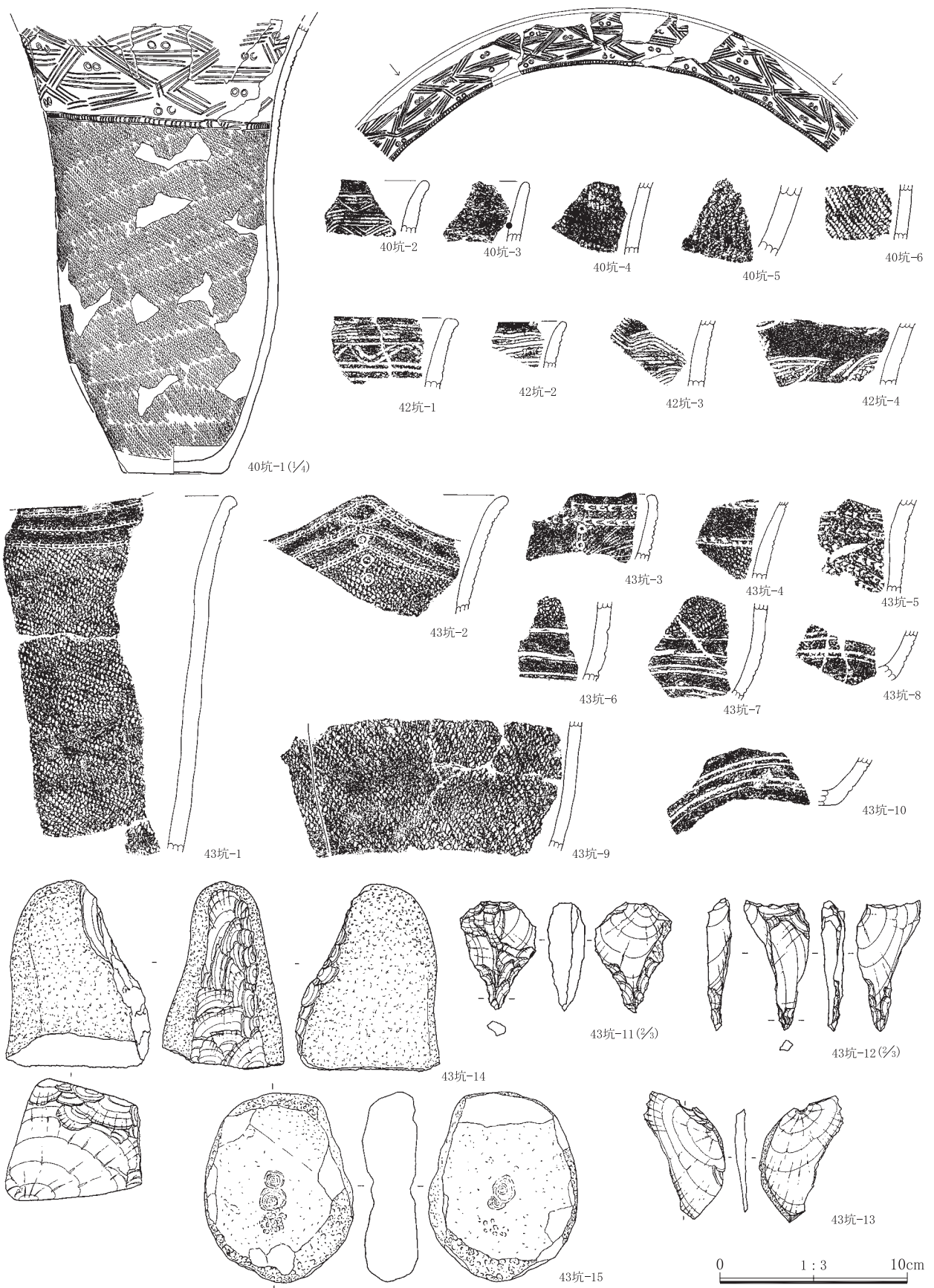
第 388 図 土坑出土遺物 (10)

4. 土坑

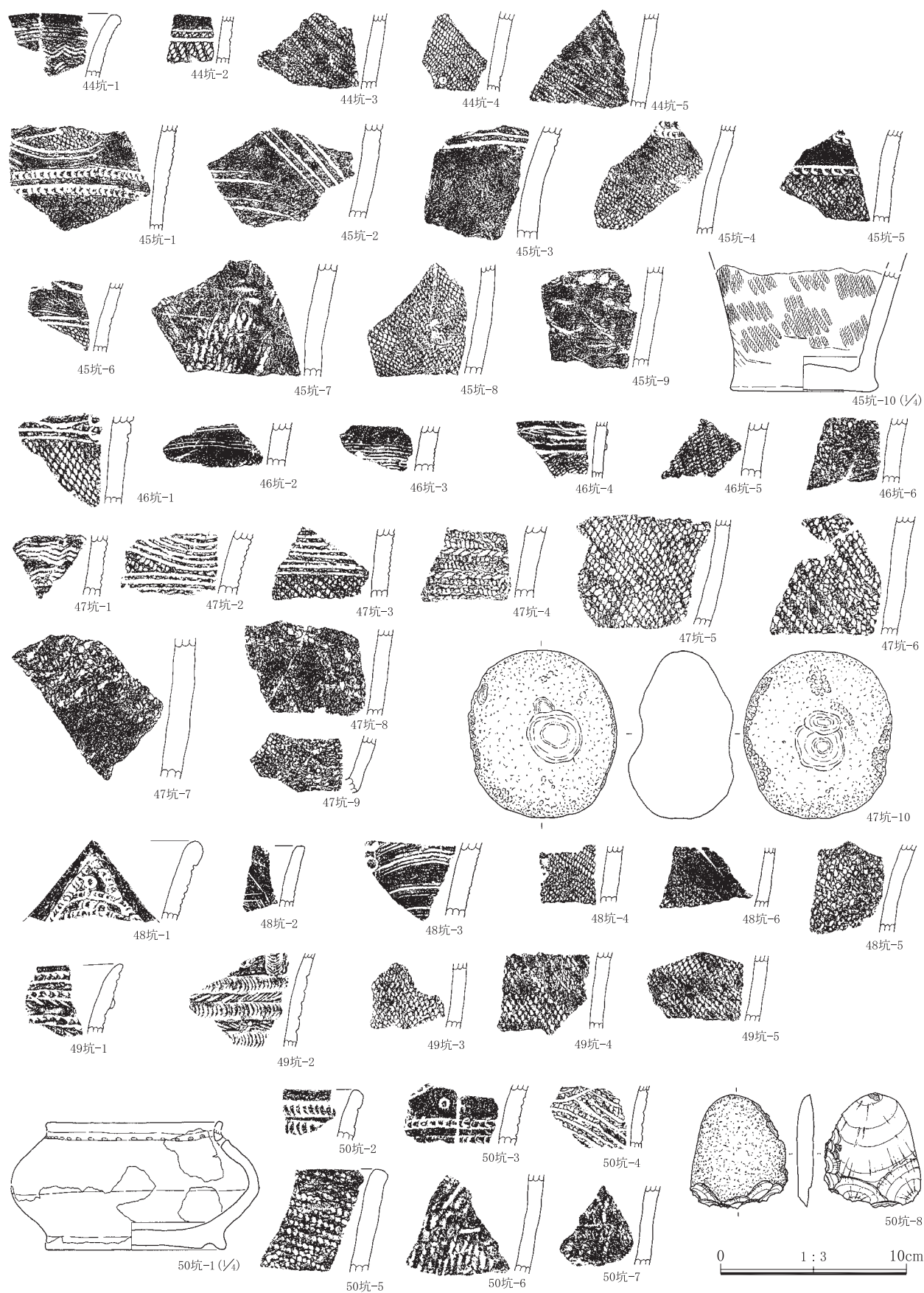


第389图 33号土坑~42号土坑

III 今井見切塚遺跡の調査

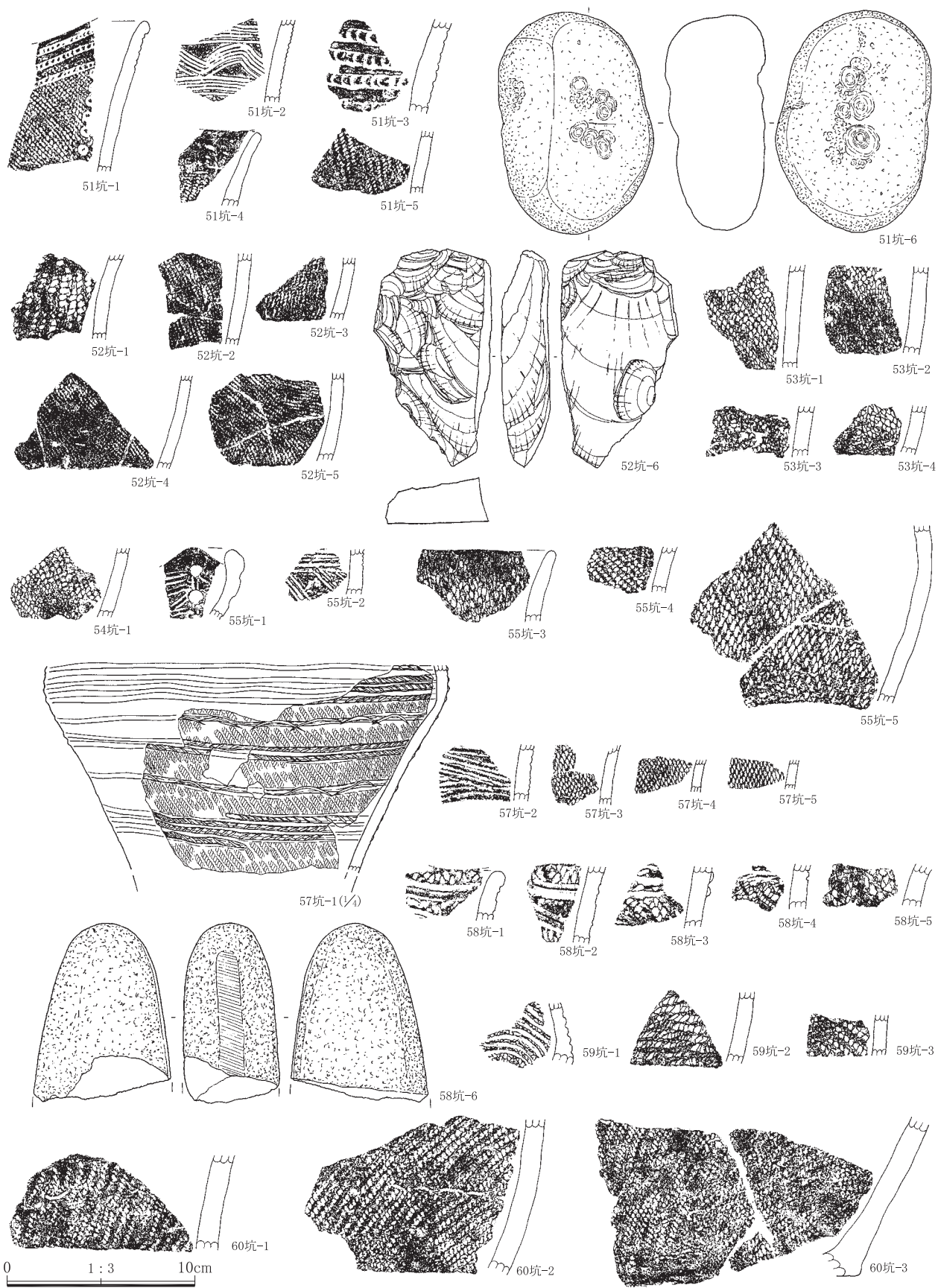


第 390 図 土坑出土遺物 (11)

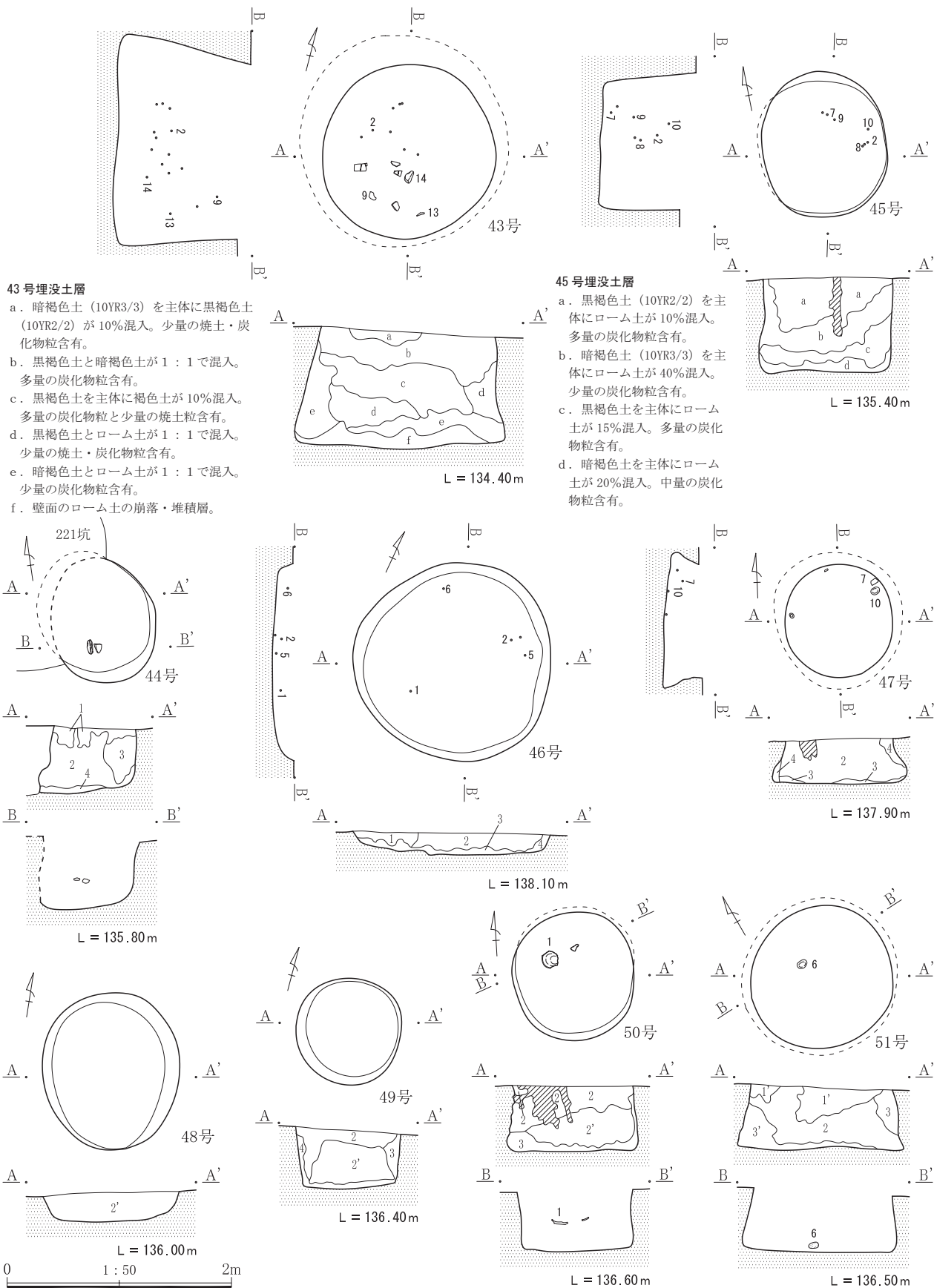


第 391 图 土坑出土遺物 (12)

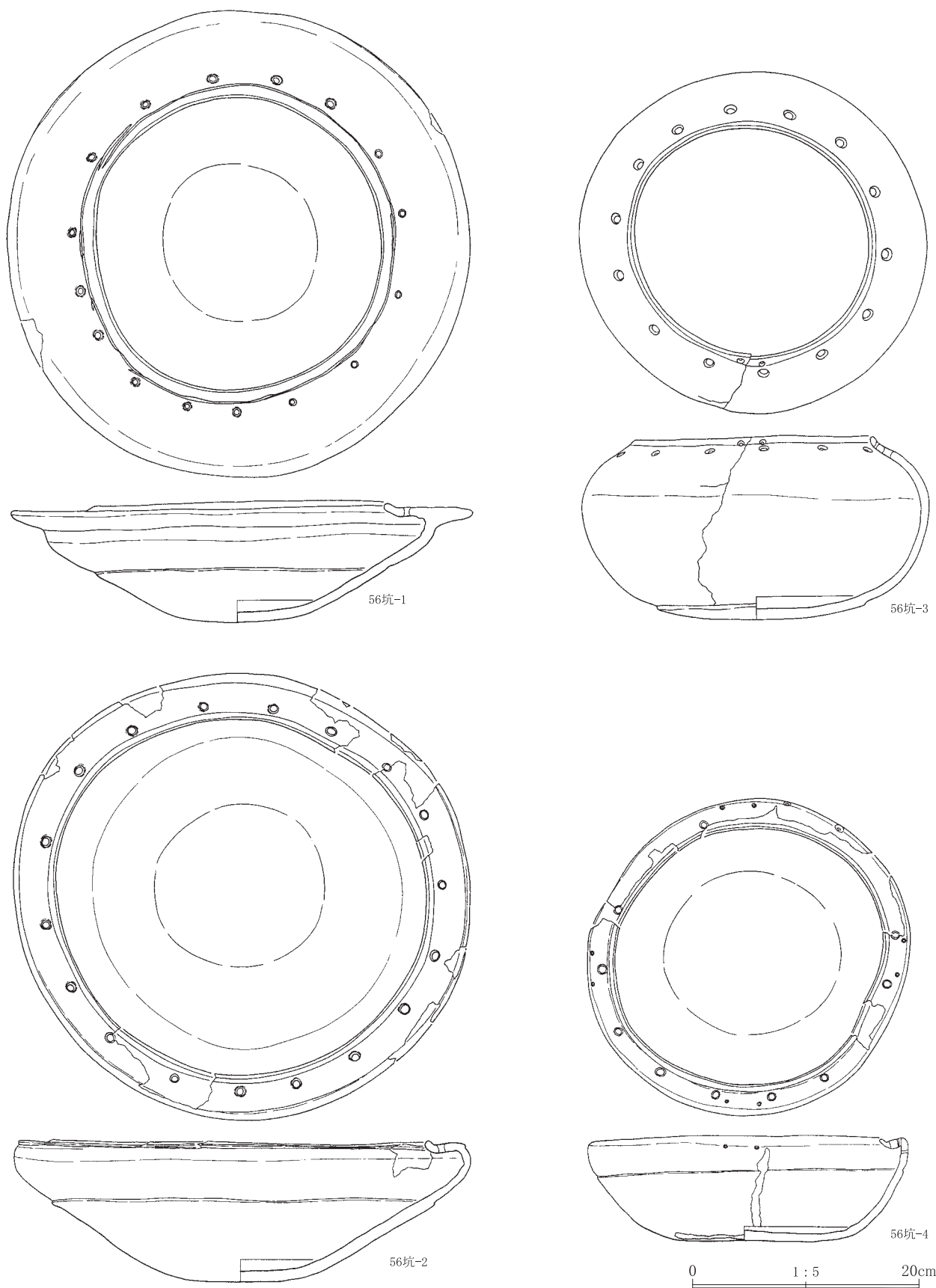
III 今井見切塚遺跡の調査



第 392 図 土坑出土遺物 (13)



第393図 43号土坑~51号土坑

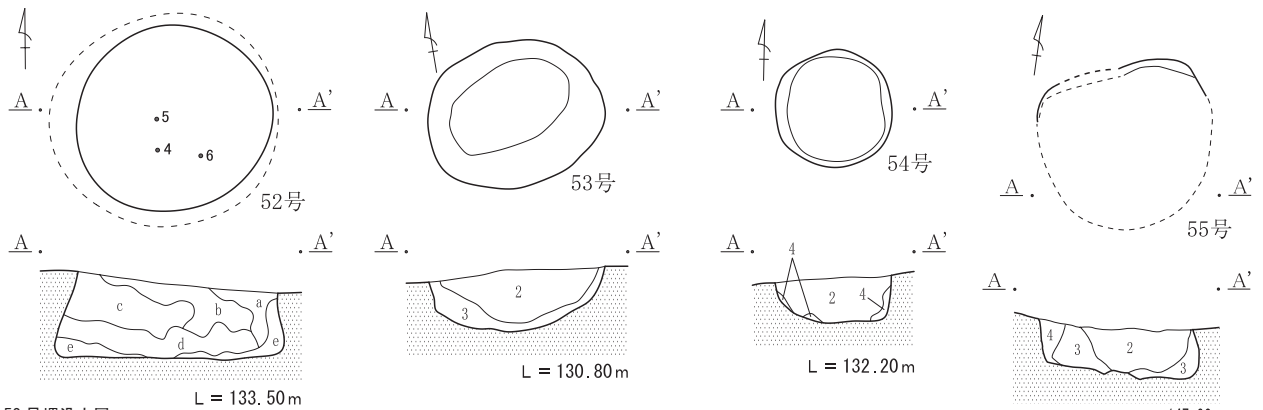


第 394 図 土坑出土遺物 (14)



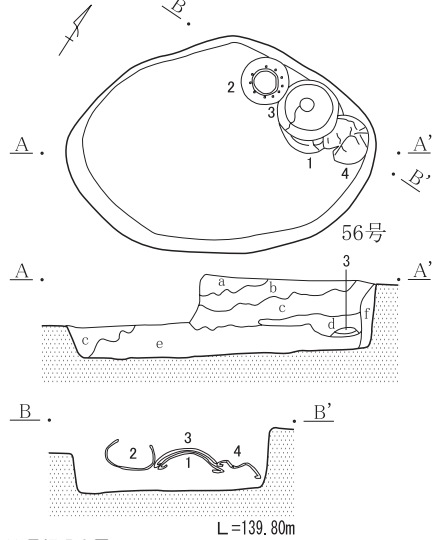
第 395 图 土坑出土遺物 (15)

III 今井見切塚遺跡の調査



52号埋没土層

- a. ローム土を主体に暗褐色土 (10YR3/3) が30%混入。少量の炭化物粒含有。
- b. 暗褐色土を主体にローム土が40%混入。中量の炭化物粒と少量の焼土粒含有。
- c. 褐色土 (10YR3/4) ローム土を主体に褐色土が10%混入。少量の炭化物粒含有。
- d. 黒褐色土 (10YR2/2) と暗褐色土が1:1で混入。多量の炭化物粒含有。
- e. 暗褐色土を主体にローム土が20~30%混入。微量の炭化物粒含有。

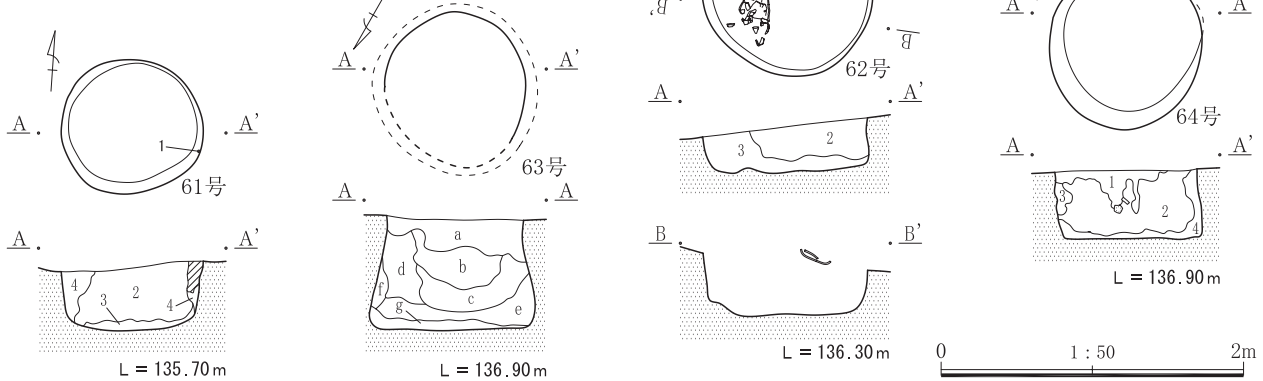


56号埋没土層

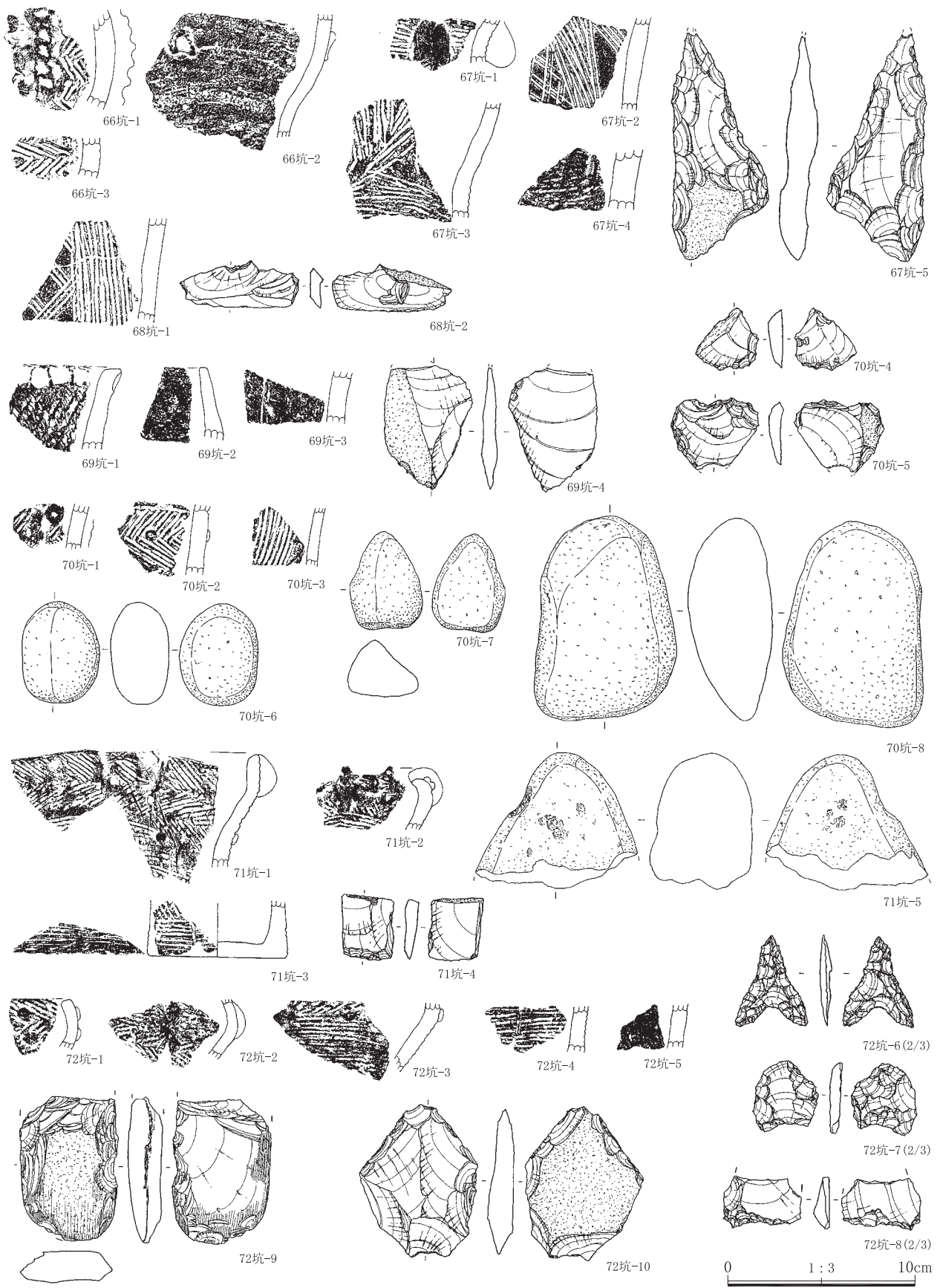
- a. ローム土を主体に黒褐色土 (10YR2/2) が30%混入。縮まり脆弱。
- b. 黒褐色土を主体にローム土30%混入。縮まり脆弱。
- c. ロームの混土層。IX層を主体にVI~VIII層が30%混入。縮まり脆弱。
- d. ロームの混土層。VI~VIII層を主体にIX~X層が30%混入。縮まり脆弱。

63号埋没土層

- a. ローム (VI・VII層) の混土層。少量の焼土・炭化物粒含有。
- b. 暗褐色土 (10YR3/4) を主体にローム土が5%混入。中量の炭化物粒と少量の焼土粒含有。
- c. 暗褐色土。中量の炭化物粒と少量の焼土粒含有。
- d. 暗褐色土を主体にローム土が5%混入。中量の炭化物粒と少量の焼土粒含有。
- e. ローム (XI・XII層) の混土層。微量の炭化物粒含有。
- f. 壁面のローム土 (VII~XI層) の崩落・堆積層。
- g. 壁面のローム土 (XII層) の崩落・堆積層。

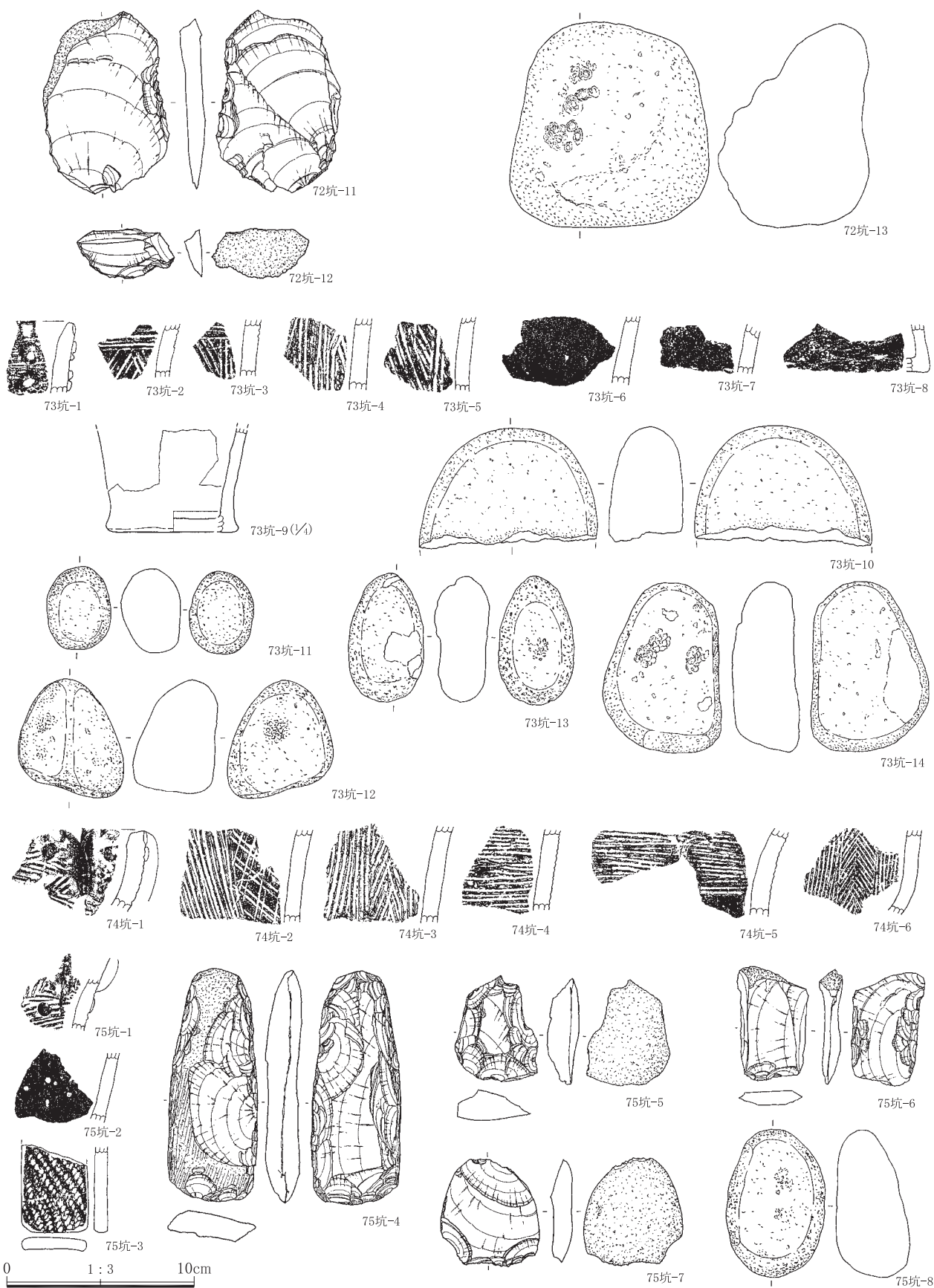


第396図 52号土坑~64号土坑

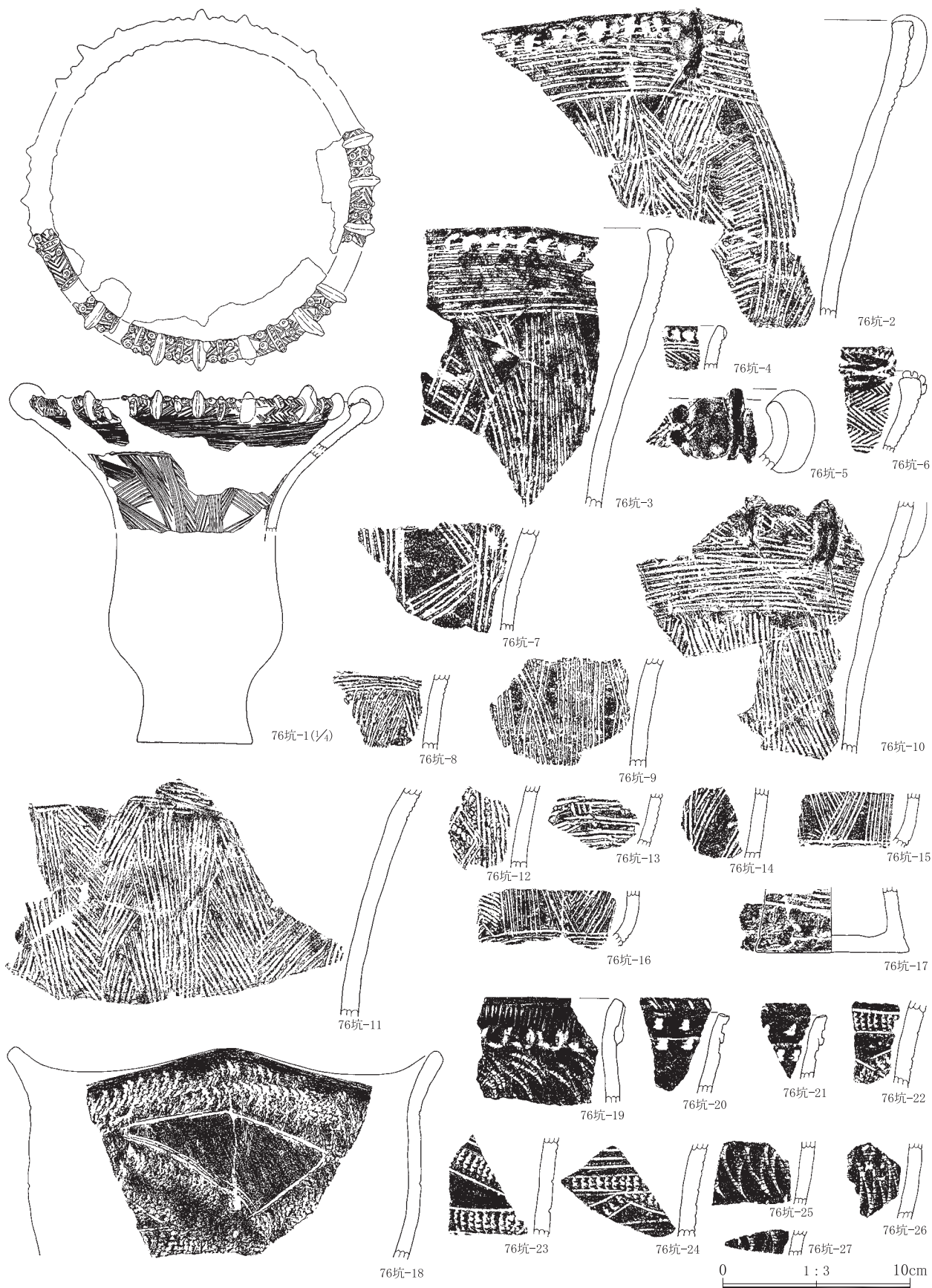


第 397 图 土坑出土遺物 (16)

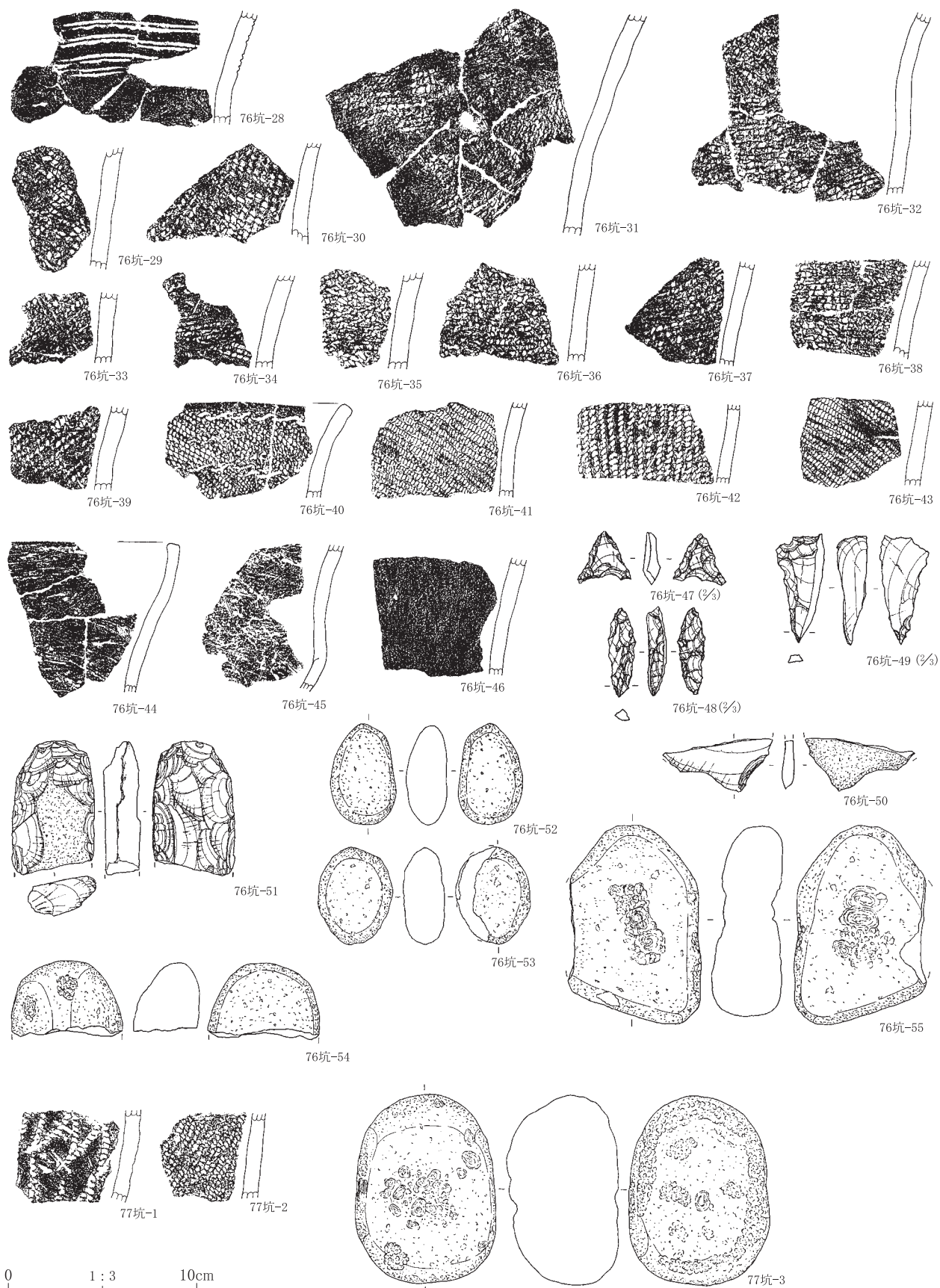
III 今井見切塚遺跡の調査



第 398 図 土坑出土遺物 (17)

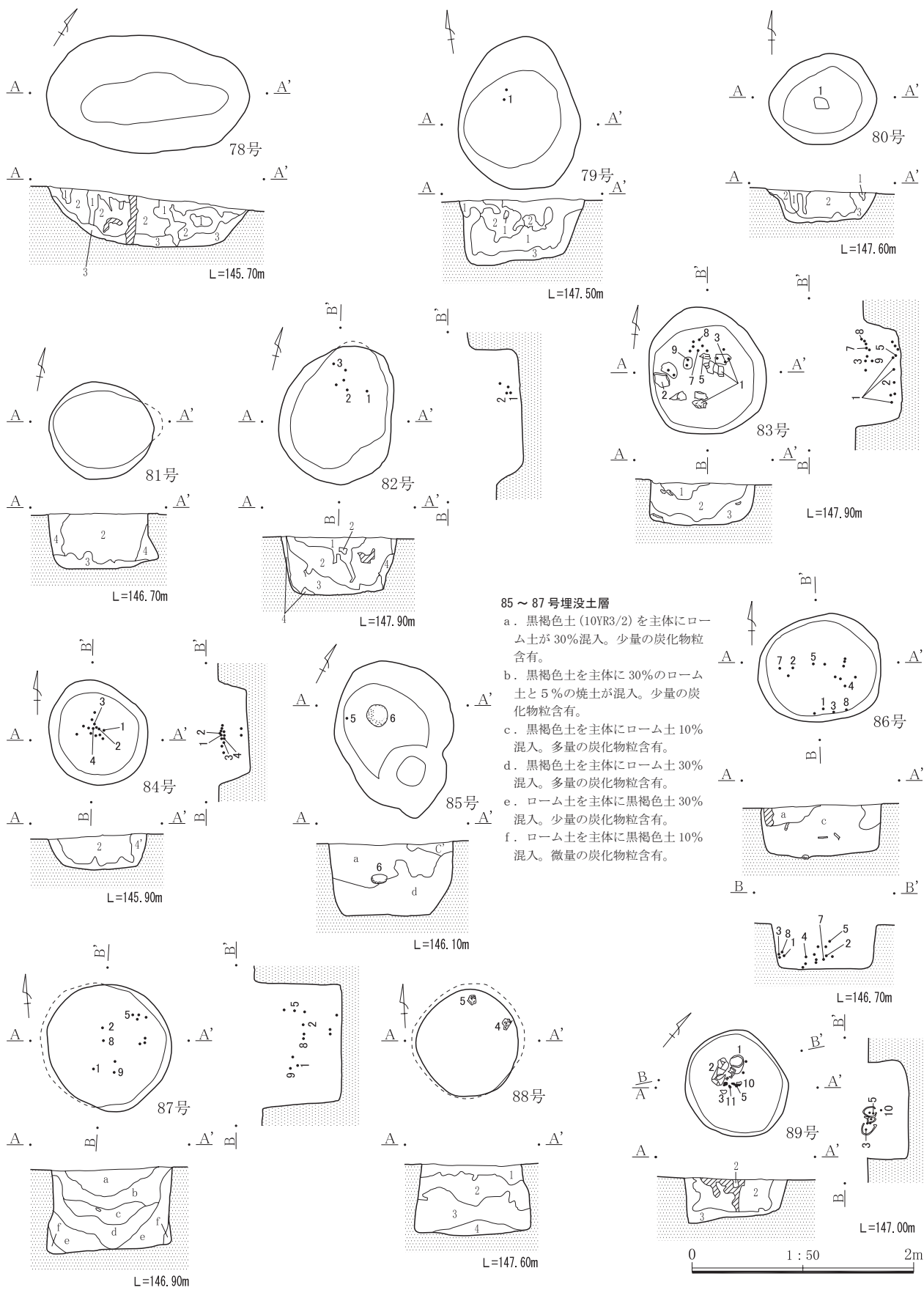


第 400 図 土坑出土遺物 (18)



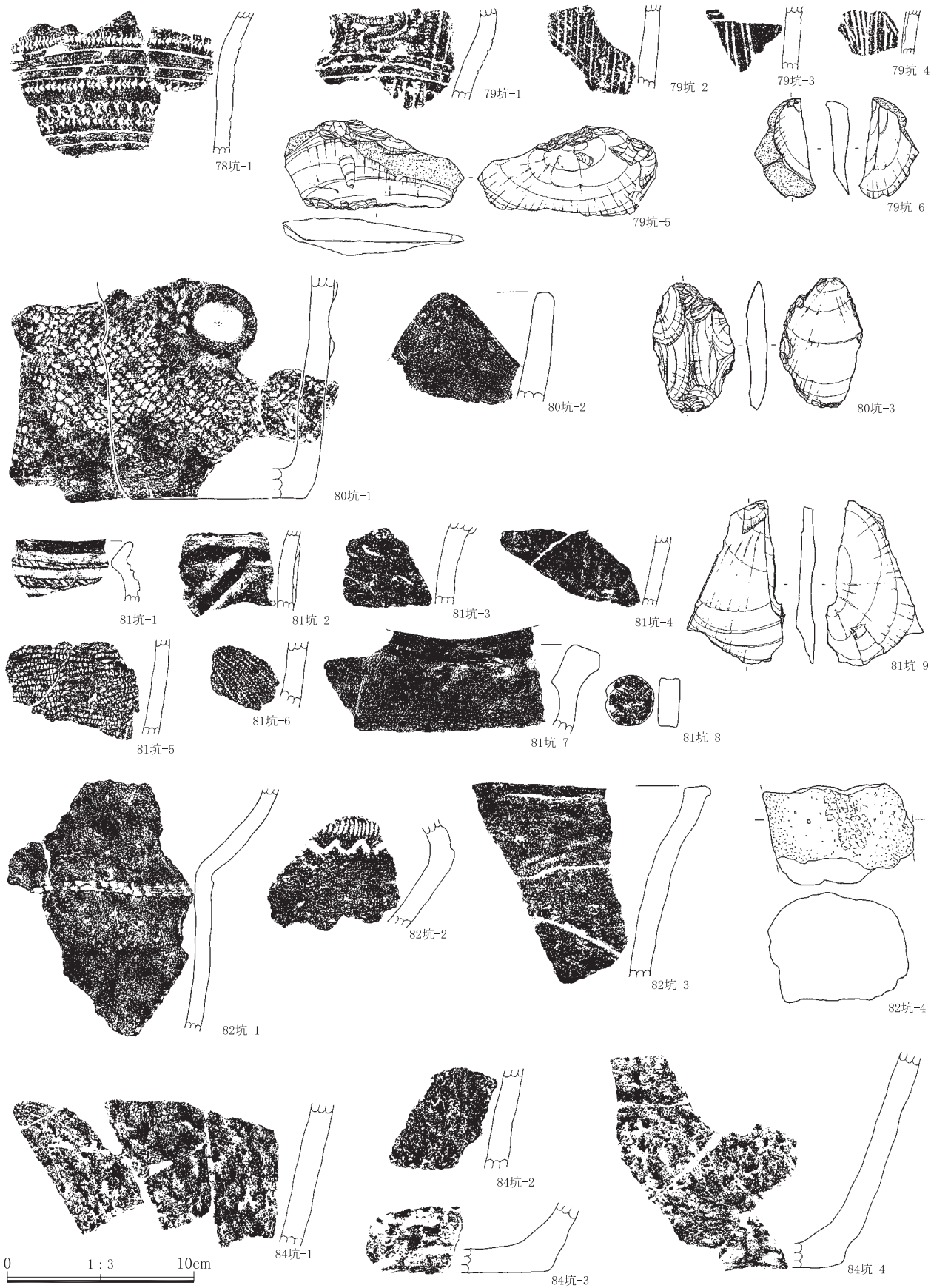
第 401 图 土坑出土遺物 (19)

III 今井見切塚遺跡の調査



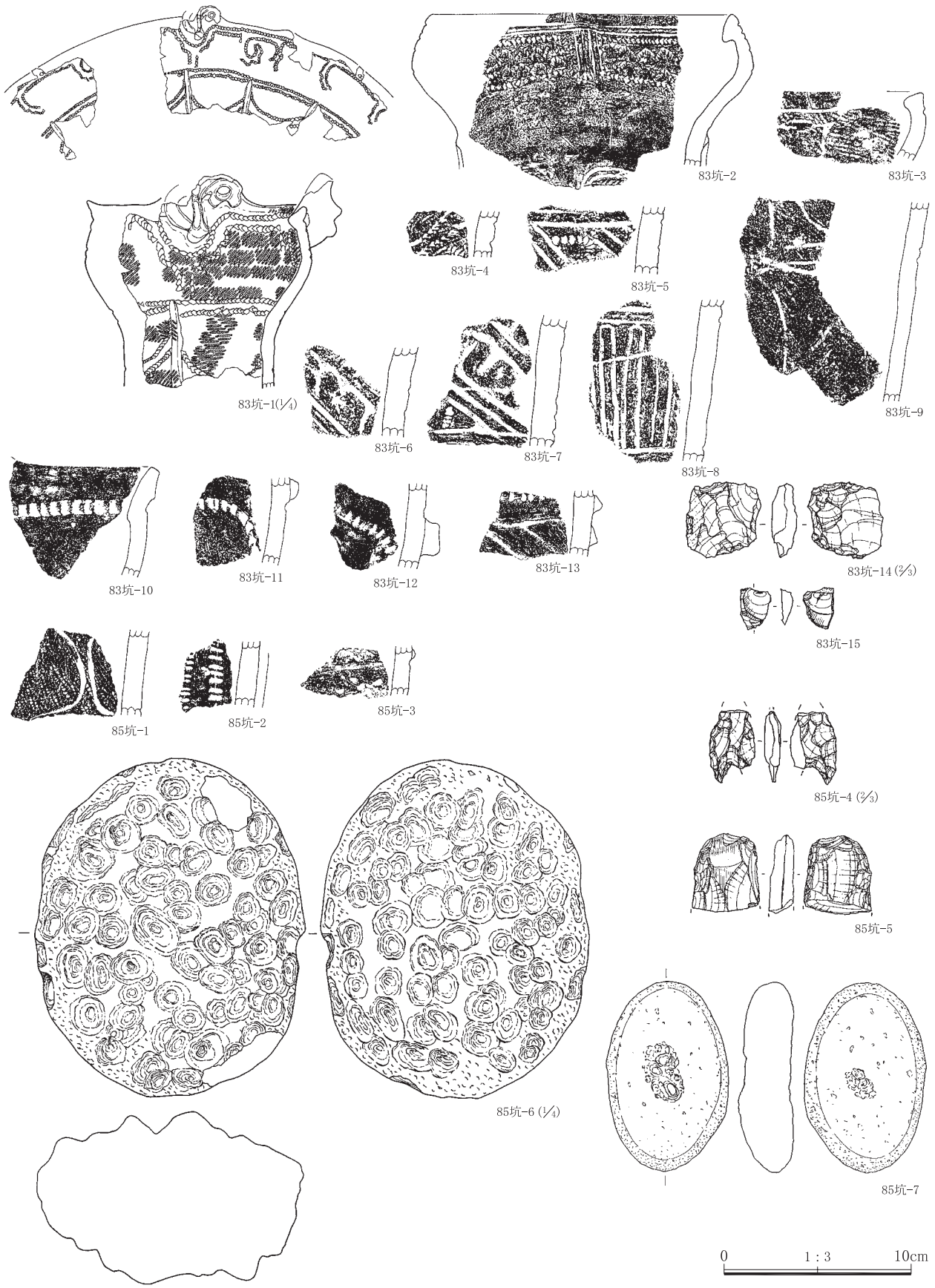
第 402 図 78 号土坑 ~ 89 号土坑

4. 土坑

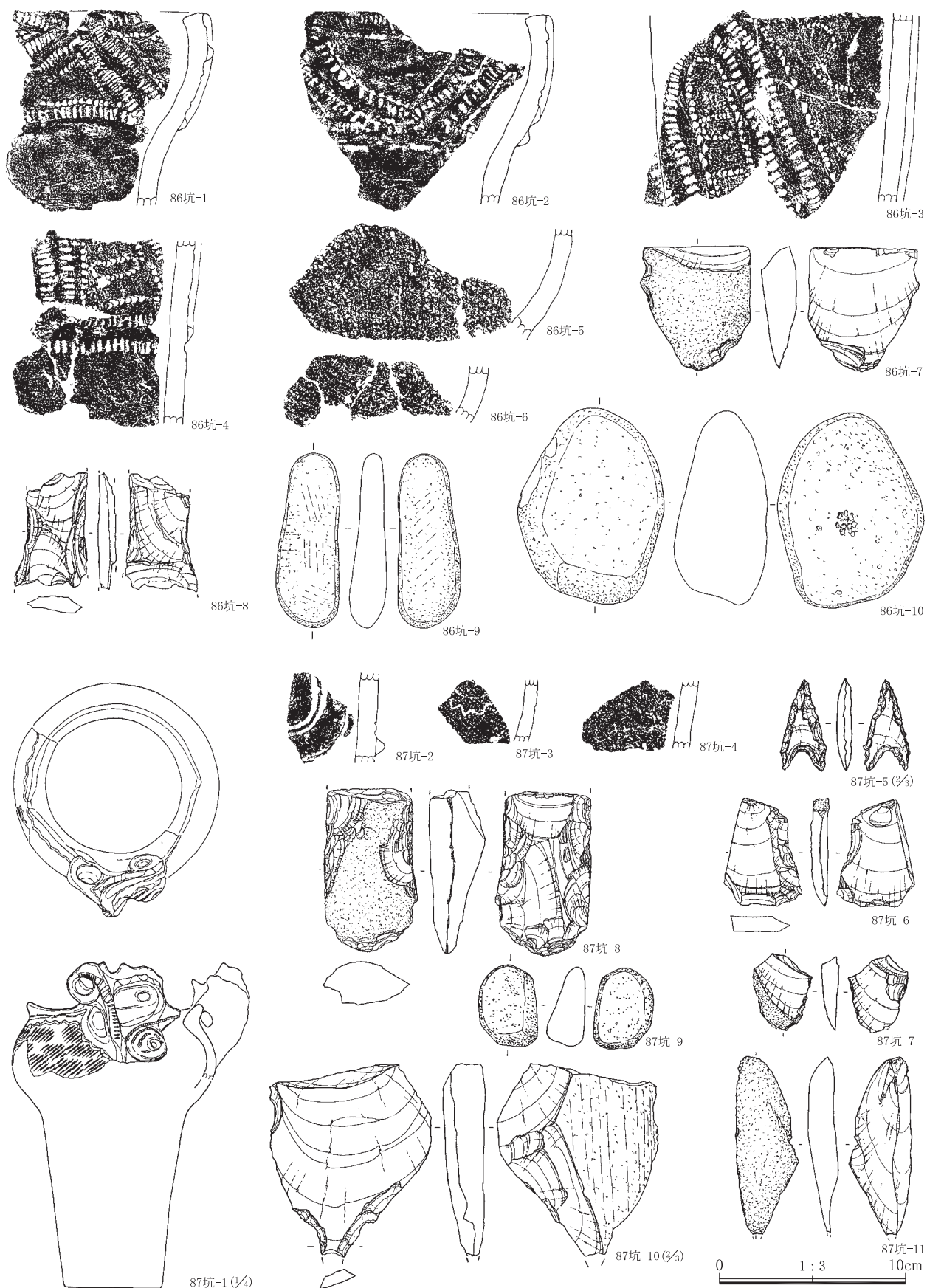


第 403 图 土坑出土遺物 (20)

III 今井見切塚遺跡の調査

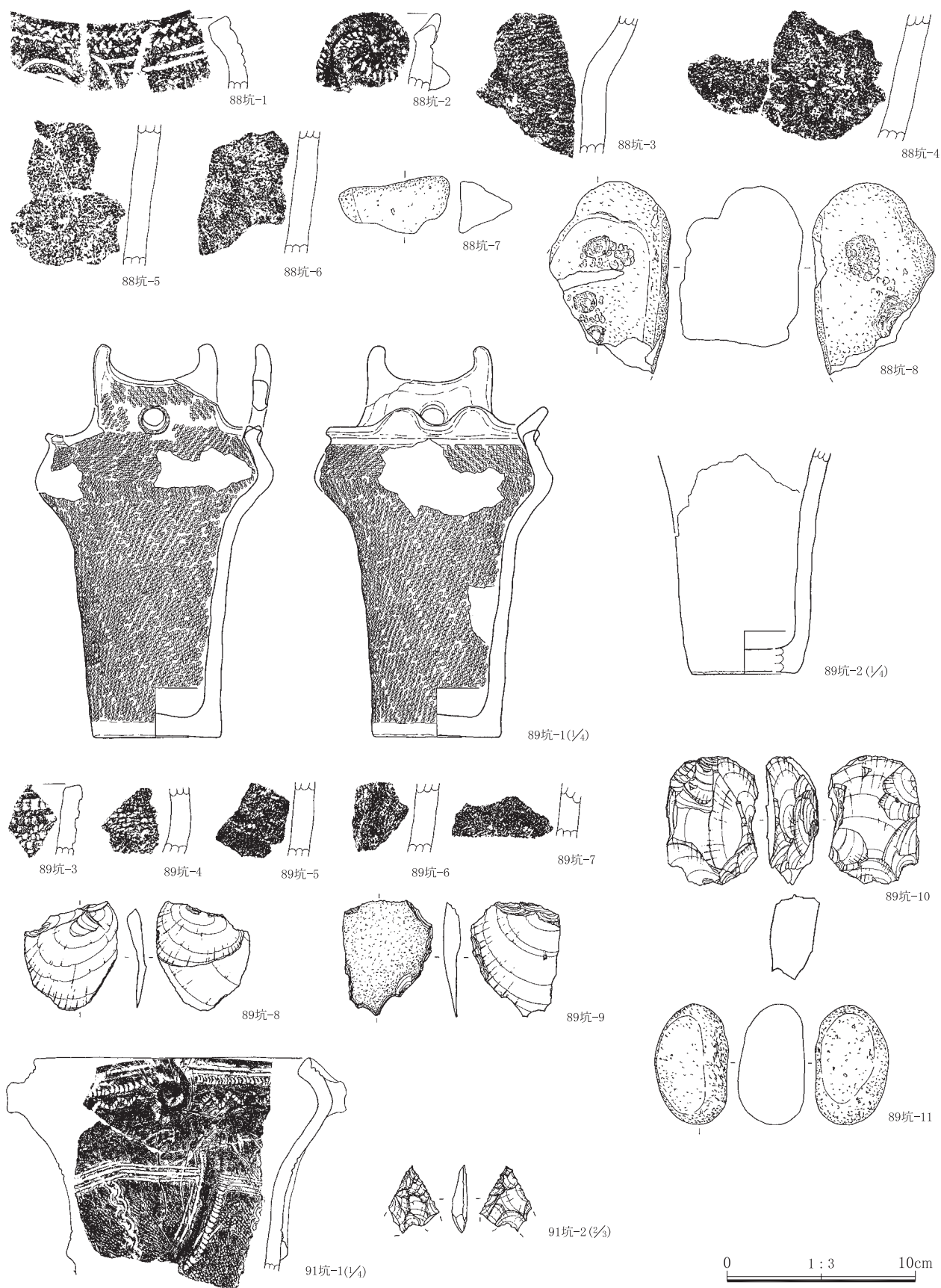


第 404 図 土坑出土遺物 (21)

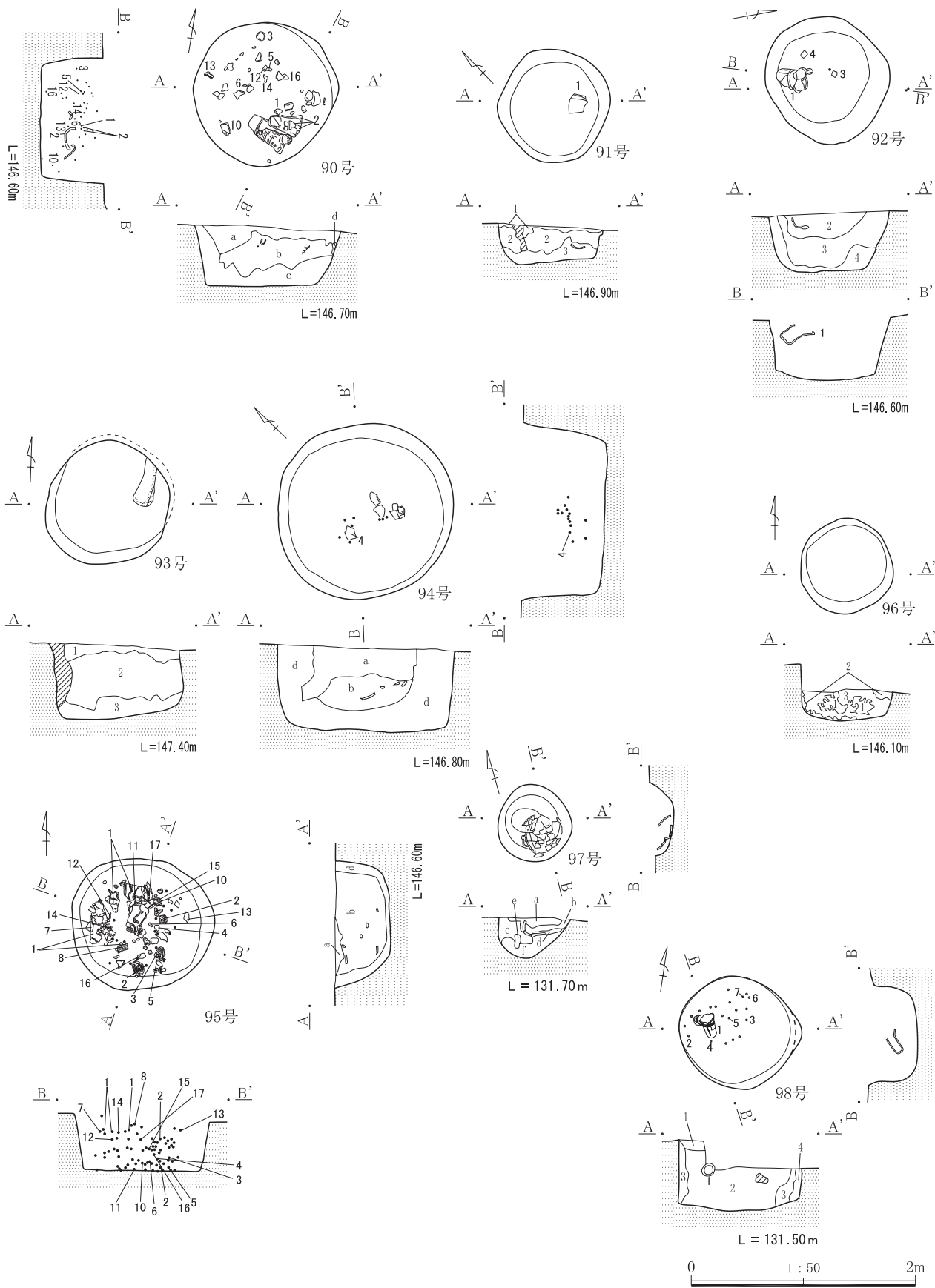


第 405 图 土坑出土遗物 (22)

III 今井見切塚遺跡の調査

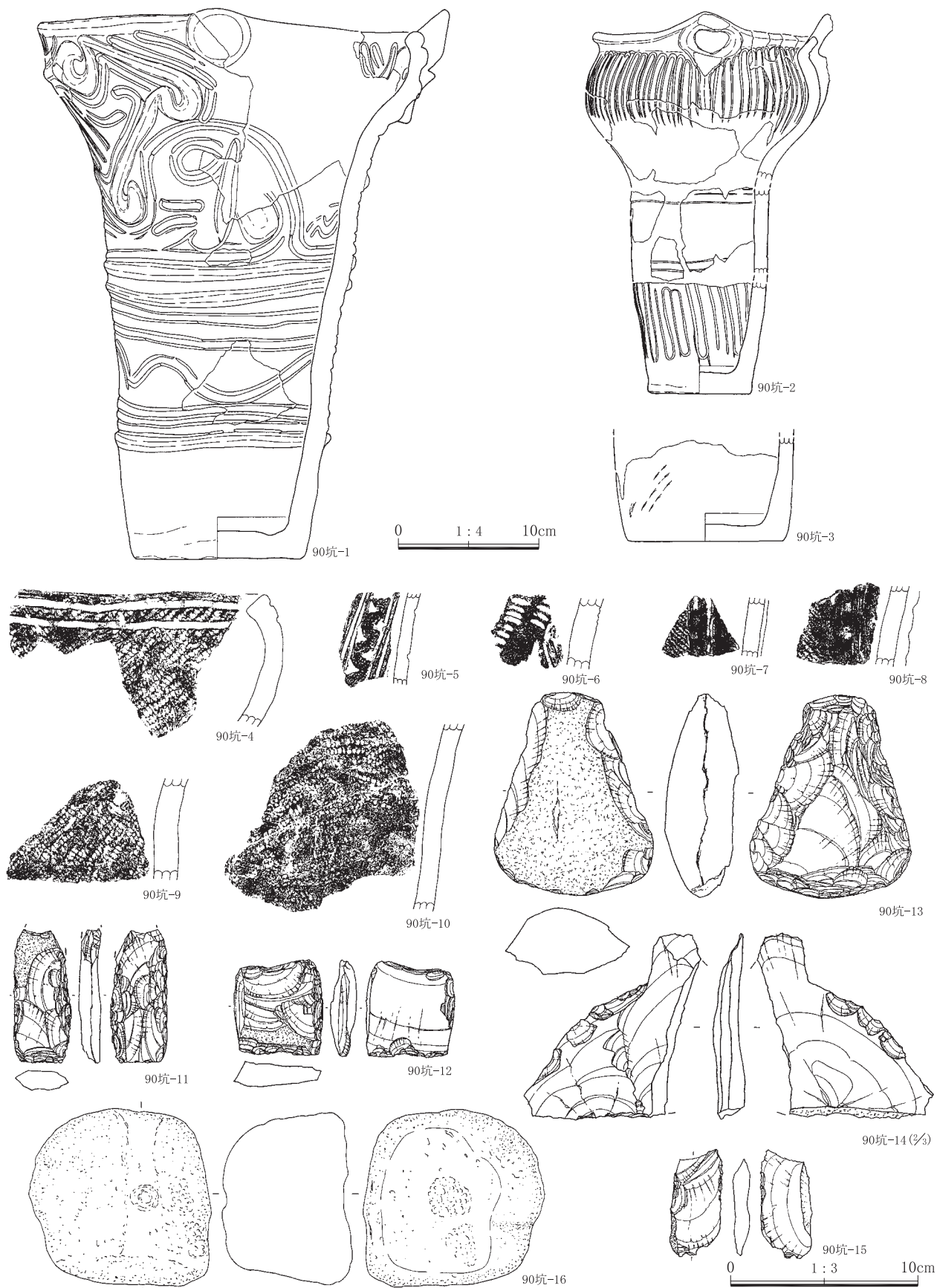


第 406 図 土坑出土遺物 (23)



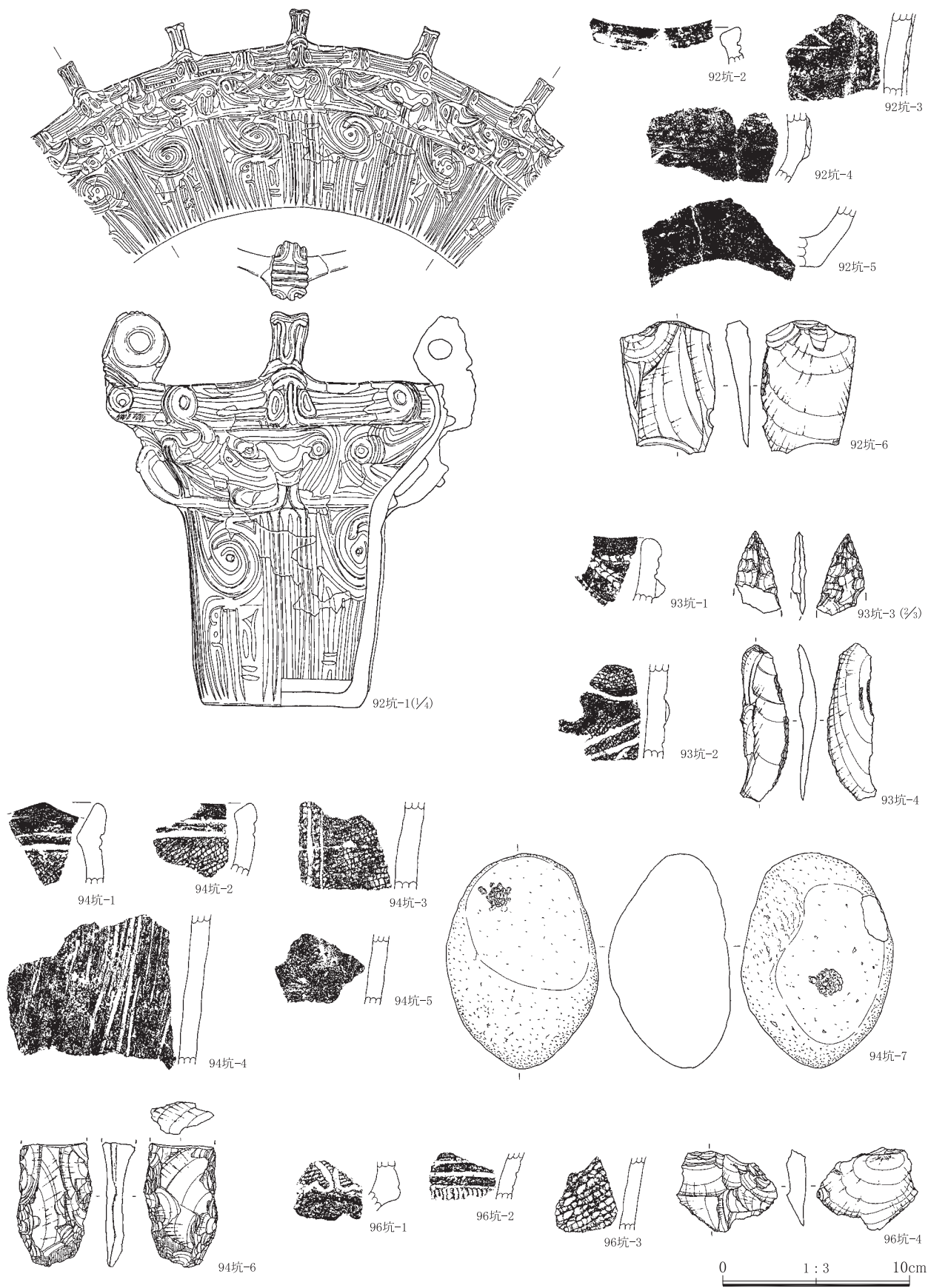
第407图 90号土坑~98号土坑

III 今井見切塚遺跡の調査

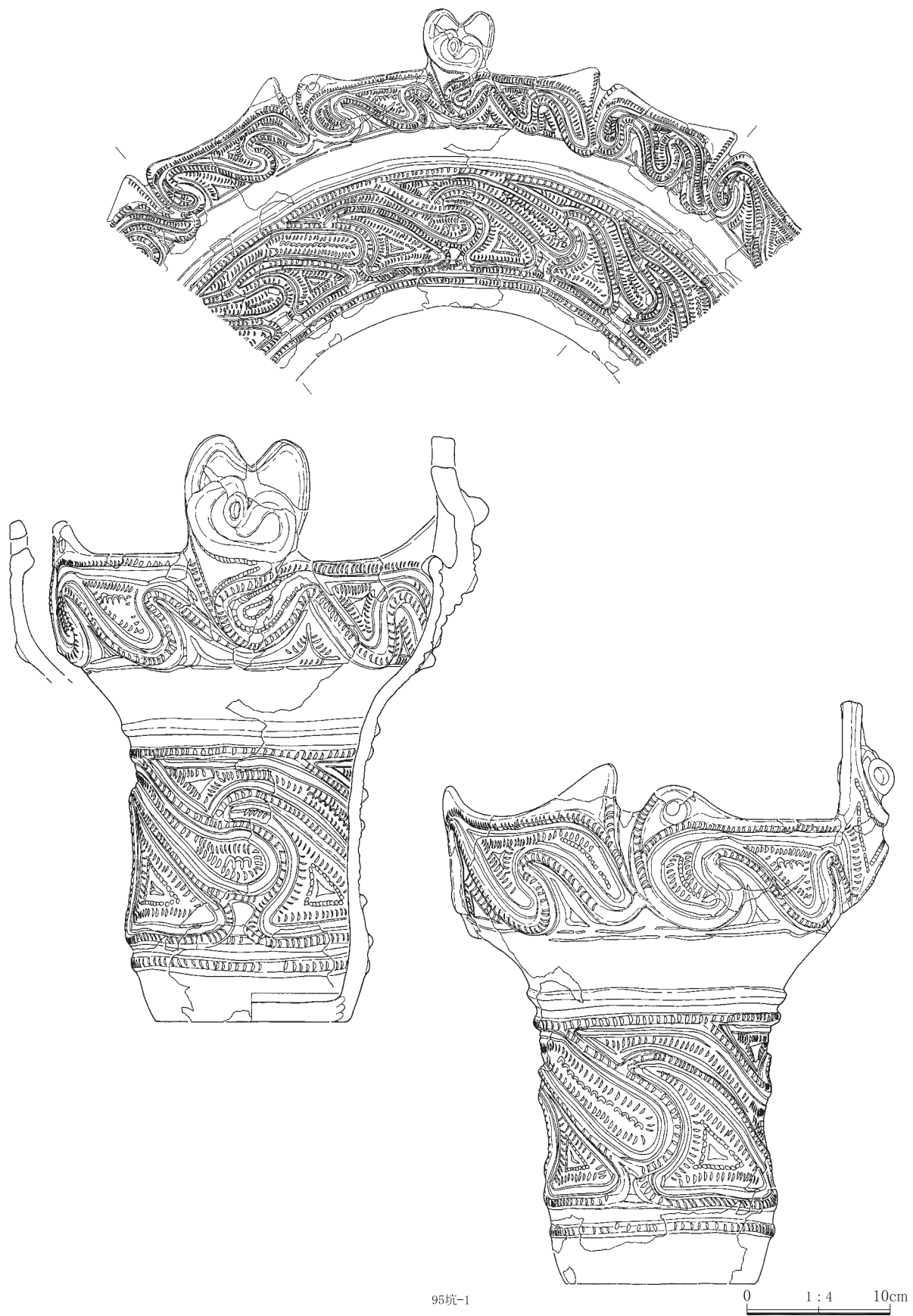


第 408 図 土坑出土遺物 (24)

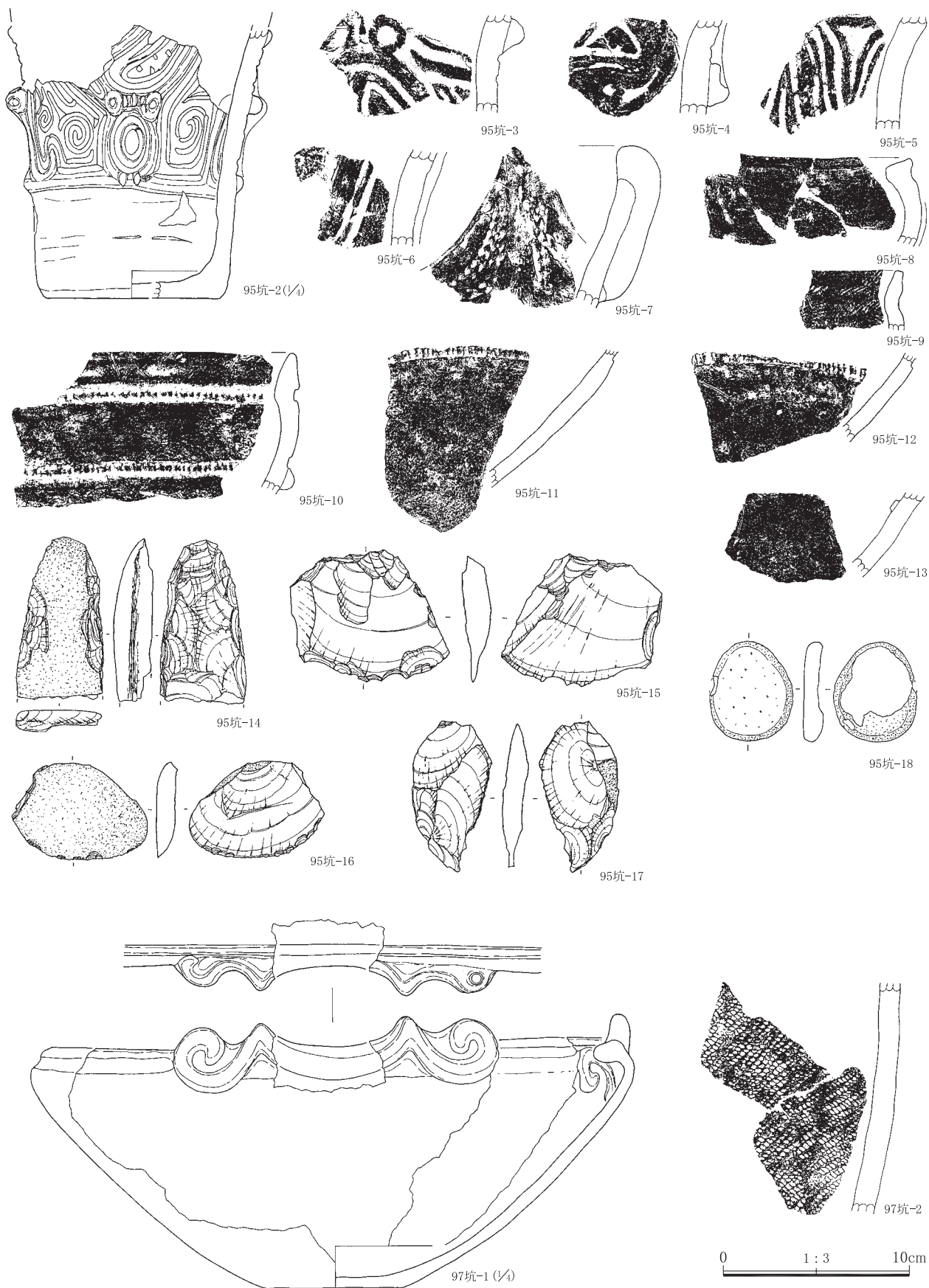
4. 土坑



第 409 图 土坑出土遺物 (25)

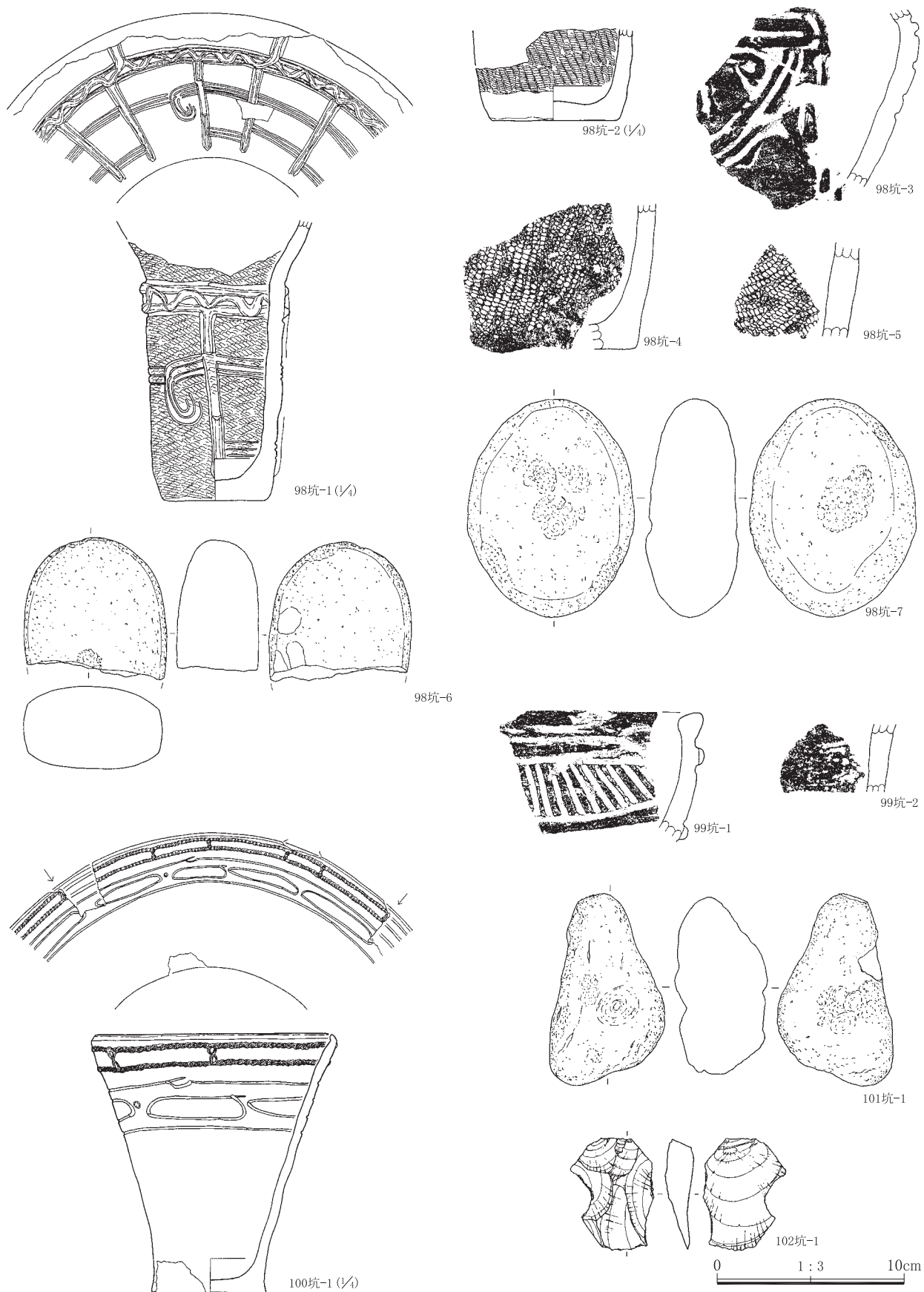


第 410 図 土坑出土遺物 (26)

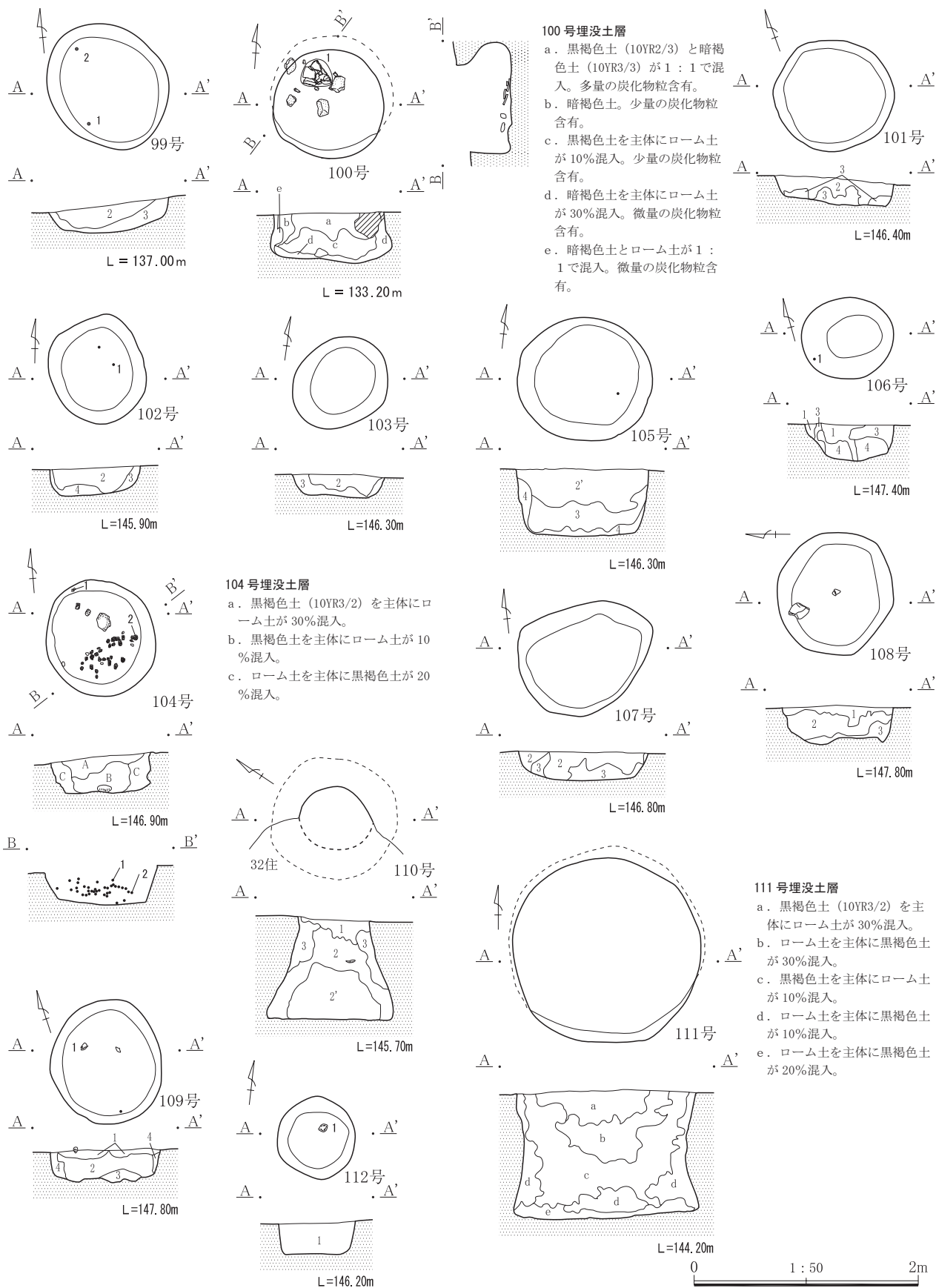


第 411 图 土坑出土遗物 (27)

III 今井見切塚遺跡の調査

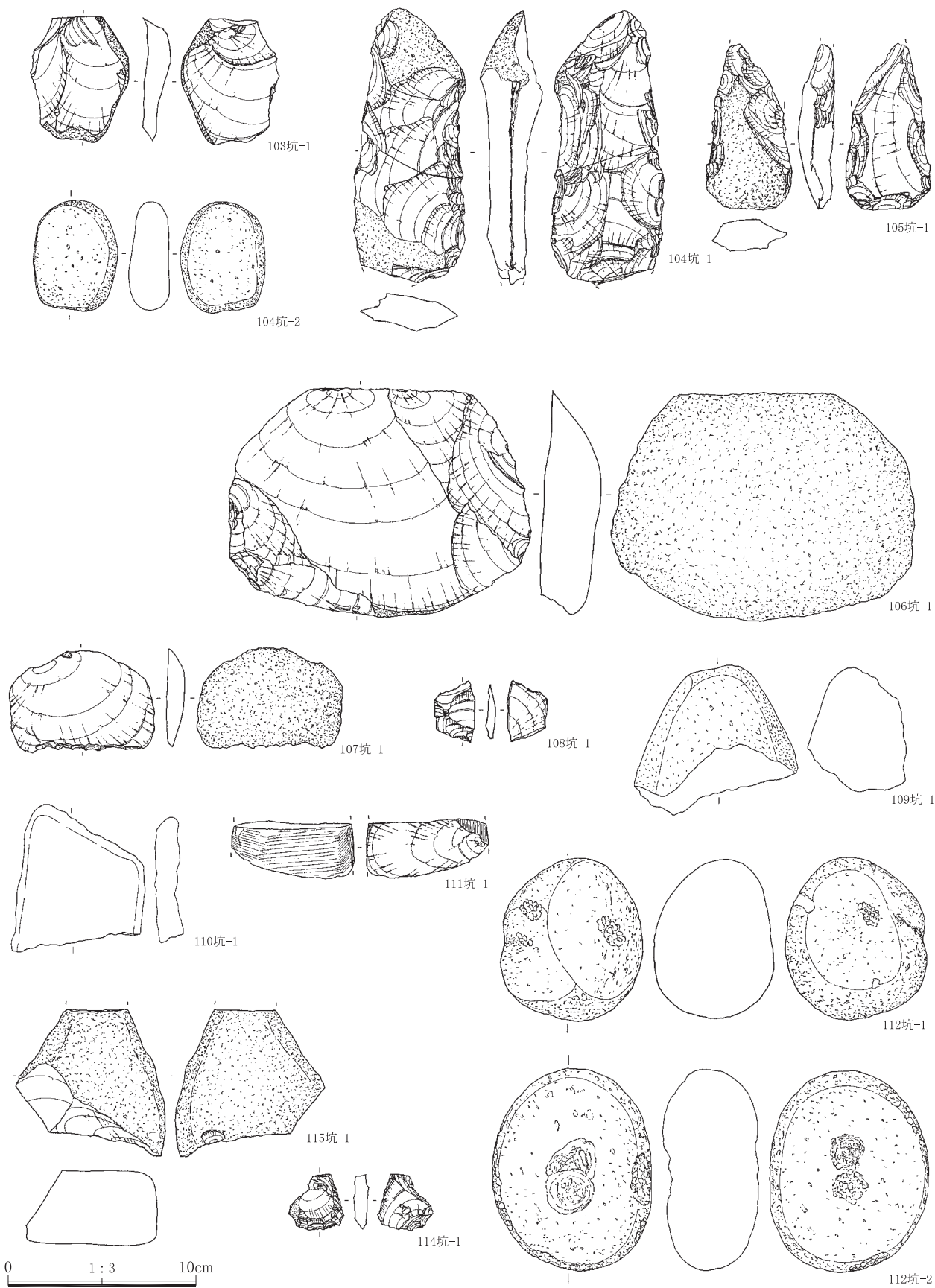


第 412 図 土坑出土遺物 (28)

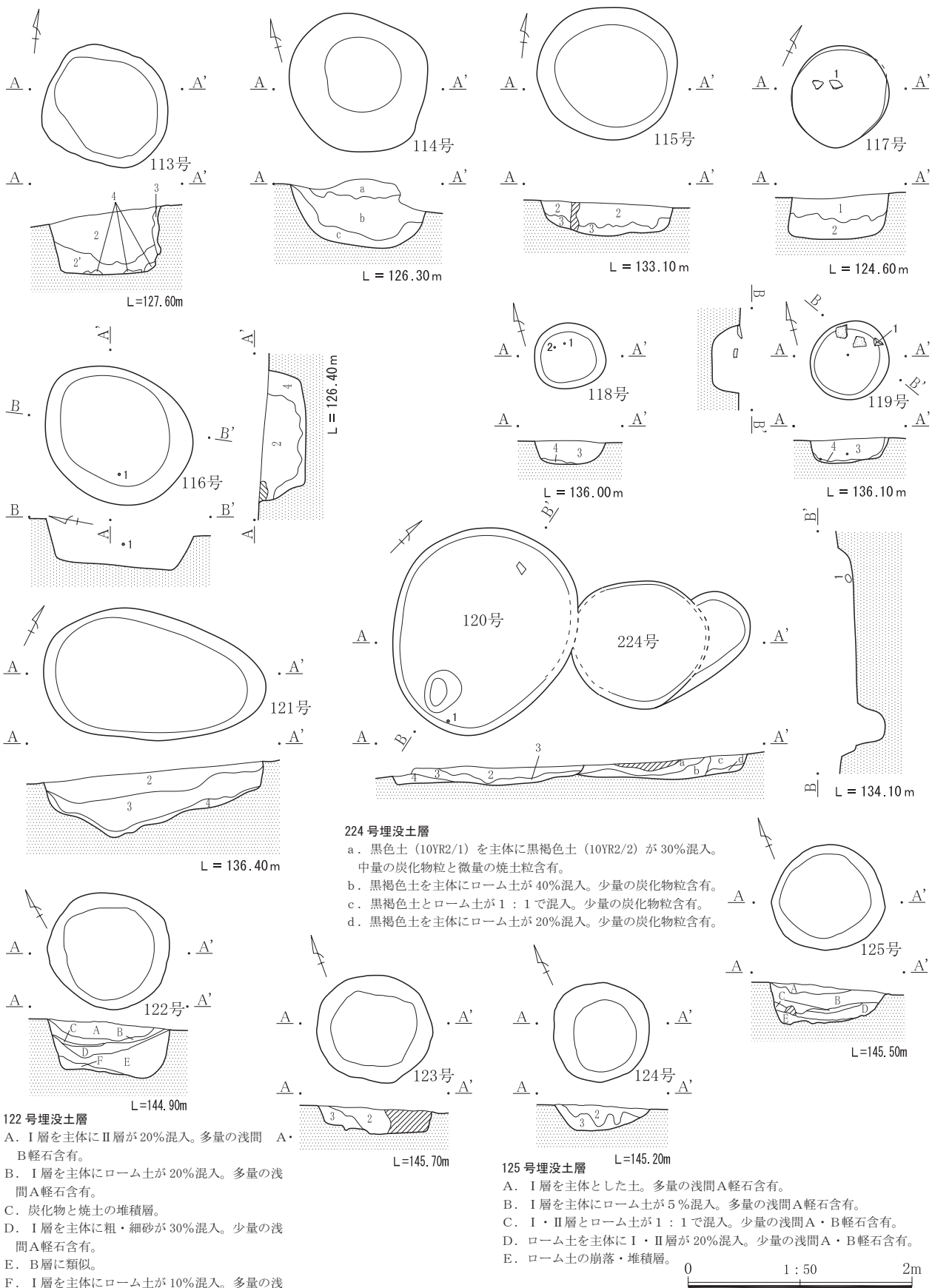


第 413 図 99 号土坑～112 号土坑

III 今井見切塚遺跡の調査



第 414 図 土坑出土遺物 (29)



224号埋没土層

- a. 黒色土 (10YR2/1) を主体に黒褐色土 (10YR2/2) が30%混入。中量の炭化物粒と微量の焼土粒含有。
- b. 黒褐色土を主体にローム土が40%混入。少量の炭化物粒含有。
- c. 黒褐色土とローム土が1:1で混入。少量の炭化物粒含有。
- d. 黒褐色土を主体にローム土が20%混入。少量の炭化物粒含有。

122号埋没土層

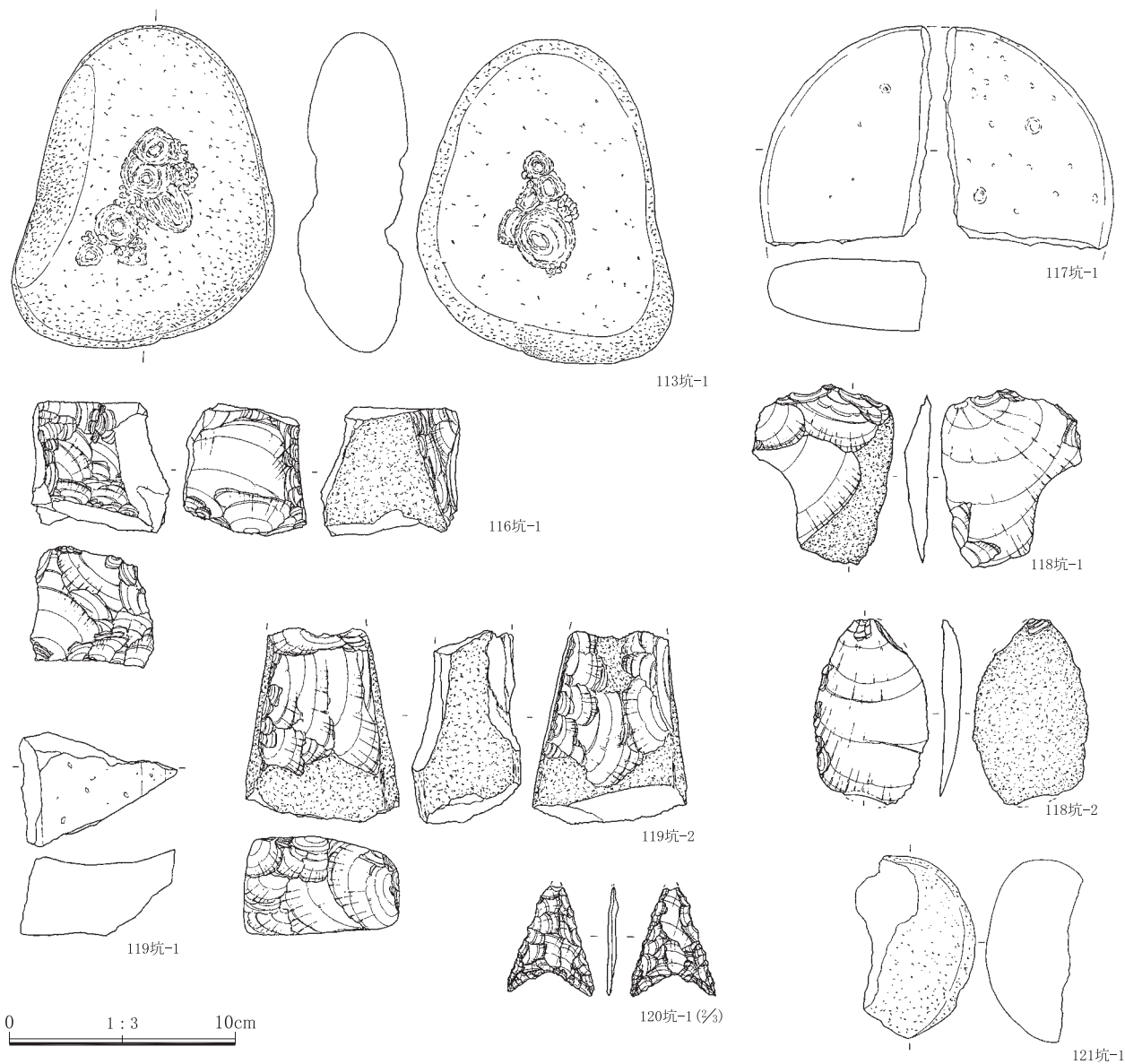
- A. I層を主体にII層が20%混入。多量の浅間A・B軽石含有。
- B. I層を主体にローム土が20%混入。多量の浅間A軽石含有。
- C. 炭化物と焼土の堆積層。
- D. I層を主体に粗・細砂が30%混入。少量の浅間A軽石含有。
- E. B層に類似。
- F. I層を主体にローム土が10%混入。多量の浅間A軽石含有。

125号埋没土層

- A. I層を主体とした土。多量の浅間A軽石含有。
- B. I層を主体にローム土が5%混入。多量の浅間A軽石含有。
- C. I・II層とローム土が1:1で混入。少量の浅間A・B軽石含有。
- D. ローム土を主体にI・II層が20%混入。少量の浅間A・B軽石含有。
- E. ローム土の崩落・堆積層。

第415図 113号土坑～125号土坑・224号土坑

III 今井見切塚遺跡の調査

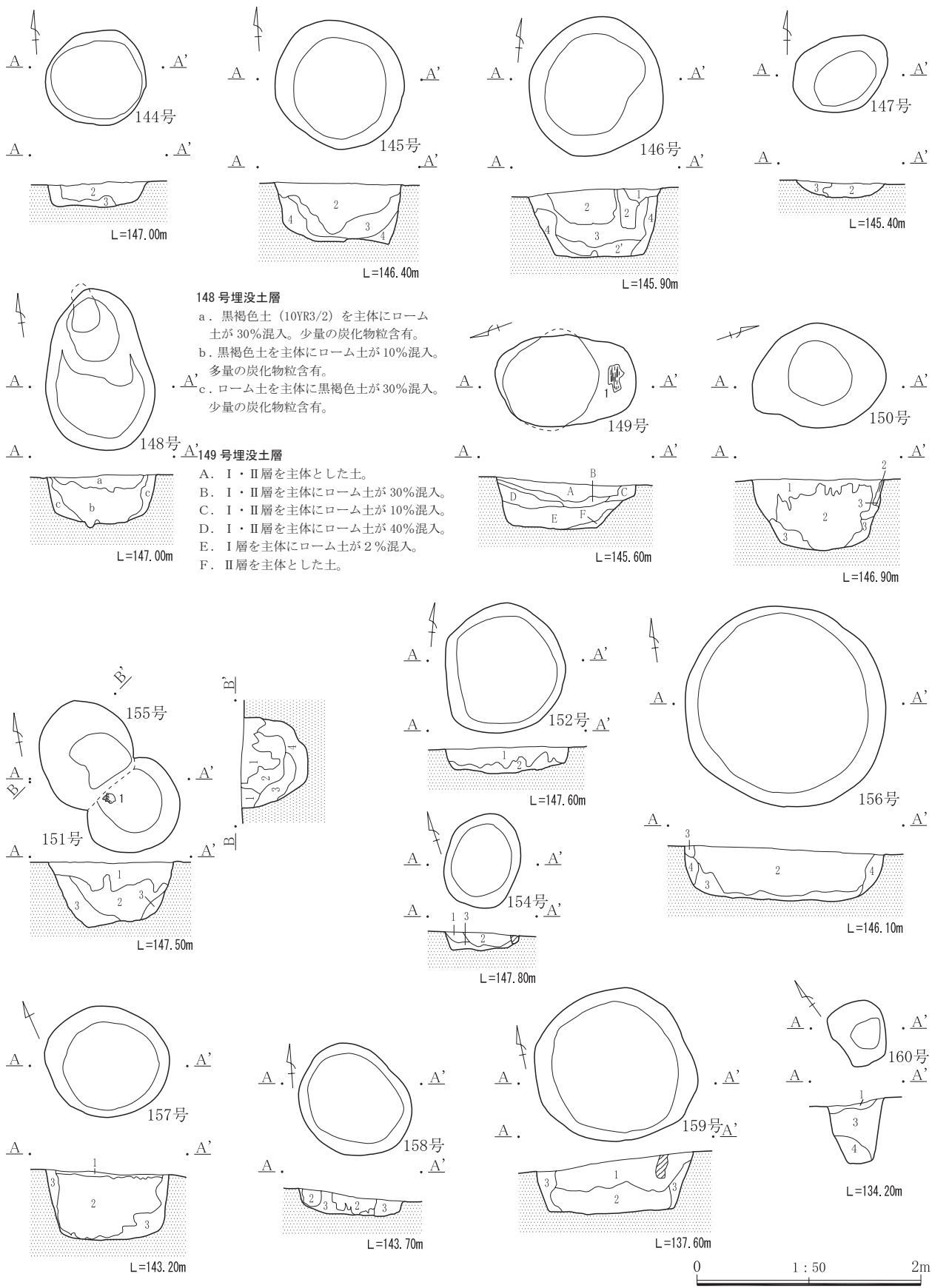


第 416 図 土坑出土遺物 (30)

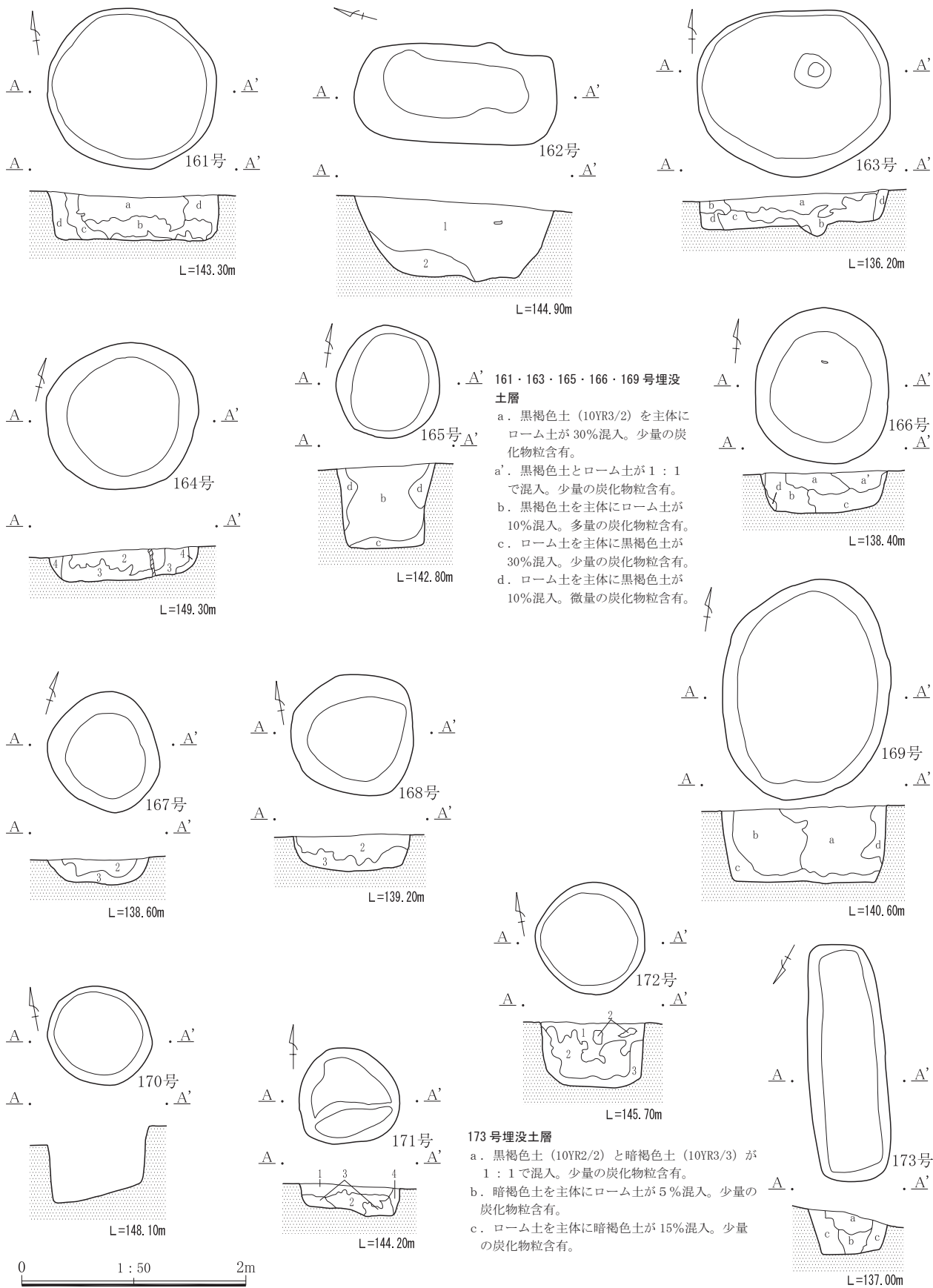


第 417 図 126 号土坑～143 号土坑

III 今井見切塚遺跡の調査

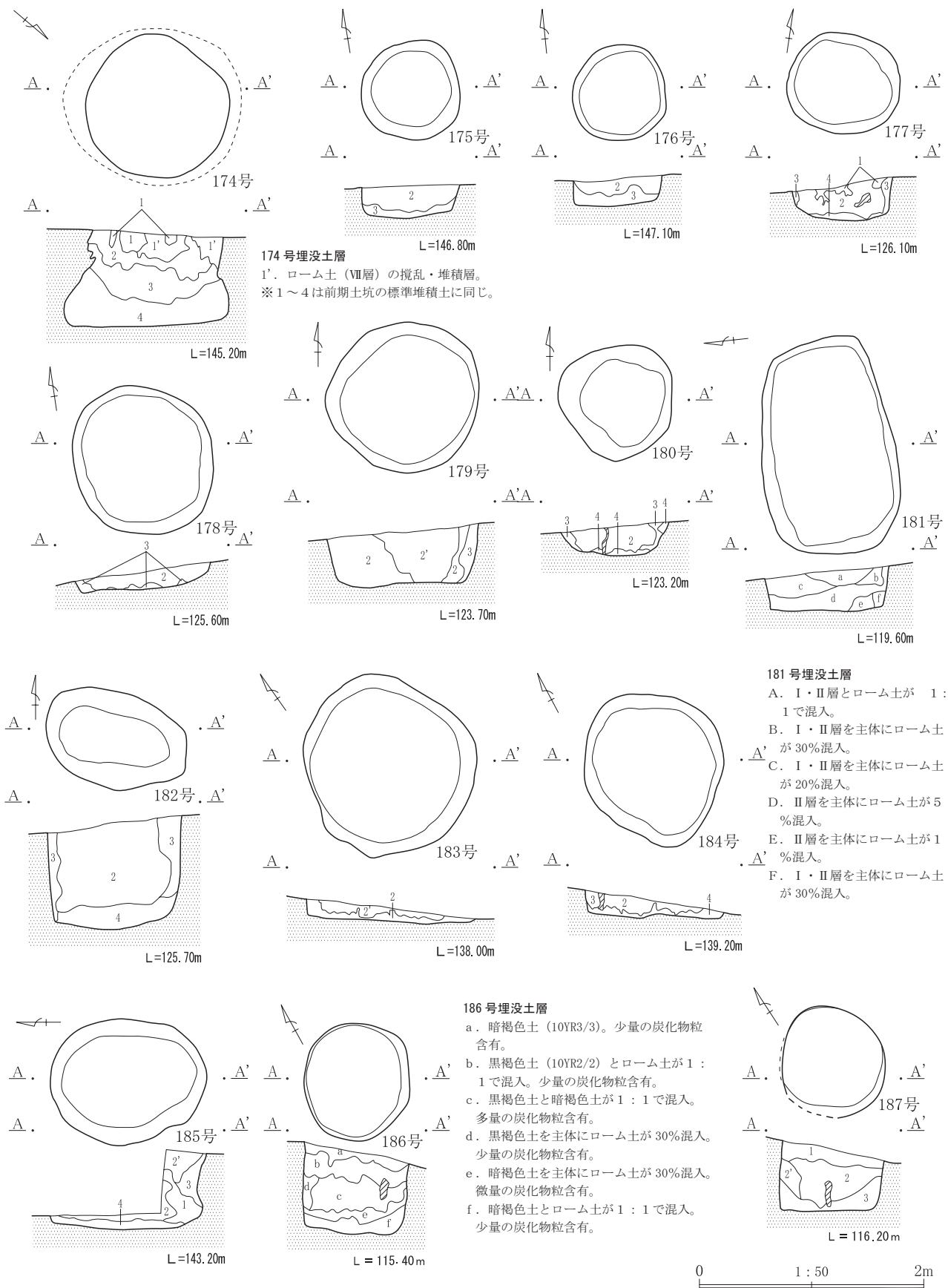


第418図 144号土坑～152号土坑・154号土坑～160号土坑



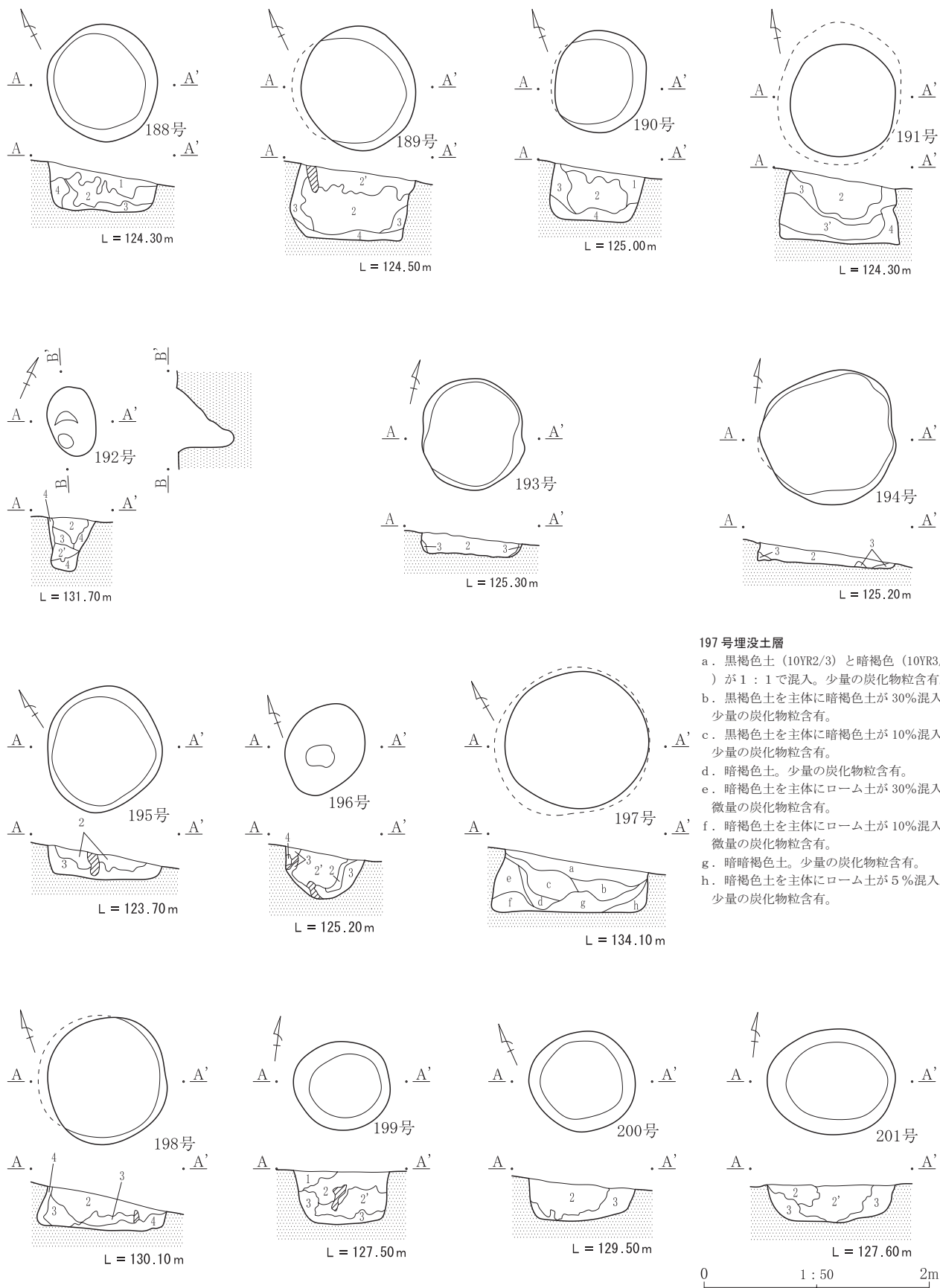
第419図 161号土坑～173号土坑

III 今井見切塚遺跡の調査



第420図 174号土坑～187号土坑

4. 土坑



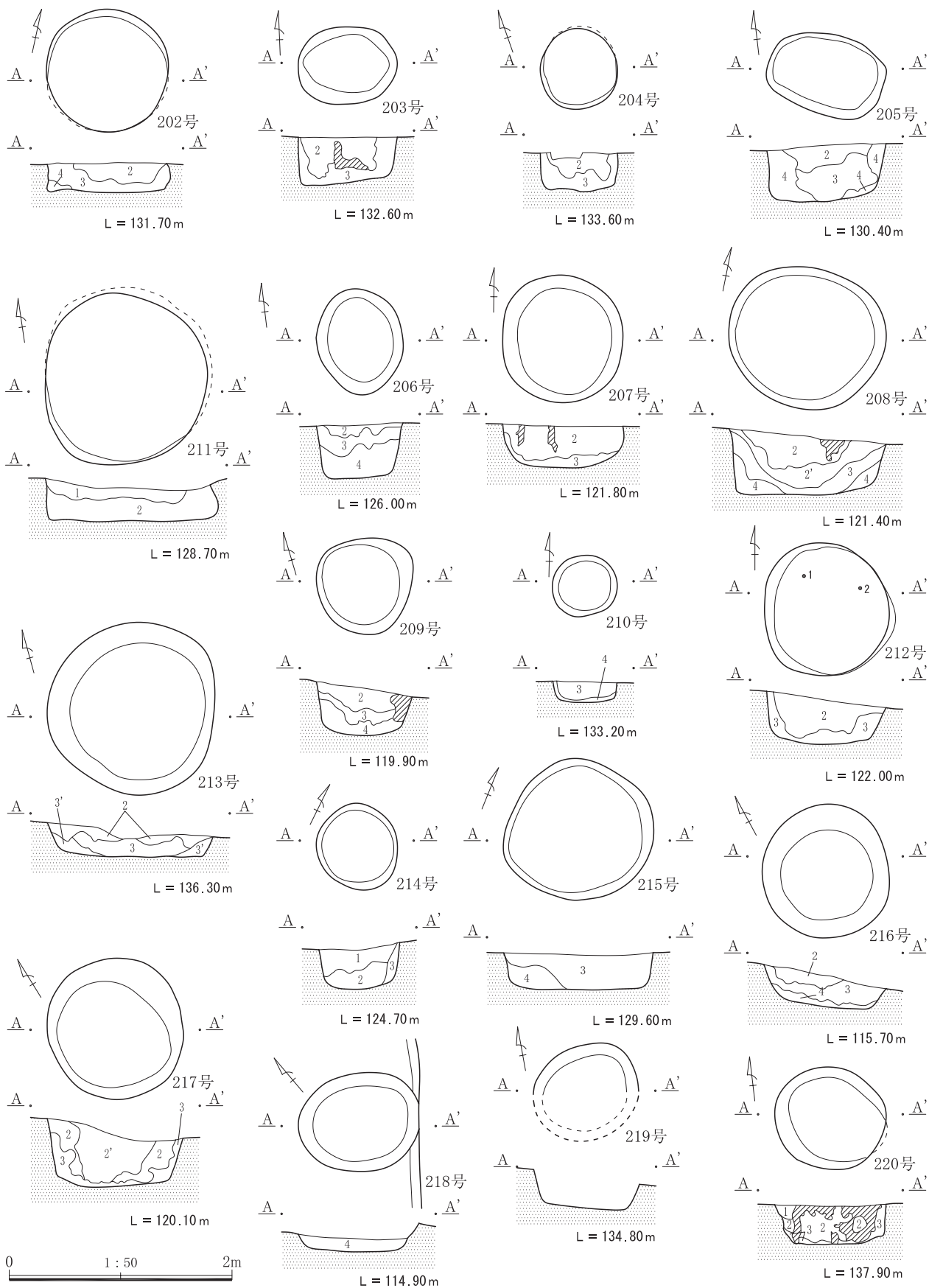
197号埋没土層

- a. 黒褐色土 (10YR2/3) と暗褐色 (10YR3/4) が 1 : 1 で混入。少量の炭化物粒含有。
- b. 黒褐色土を主体に暗褐色土が 30%混入。少量の炭化物粒含有。
- c. 黒褐色土を主体に暗褐色土が 10%混入。少量の炭化物粒含有。
- d. 暗褐色土。少量の炭化物粒含有。
- e. 暗褐色土を主体にローム土が 30%混入。微量の炭化物粒含有。
- f. 暗褐色土を主体にローム土が 10%混入。微量の炭化物粒含有。
- g. 暗暗褐色土。少量の炭化物粒含有。
- h. 暗褐色土を主体にローム土が 5%混入。少量の炭化物粒含有。



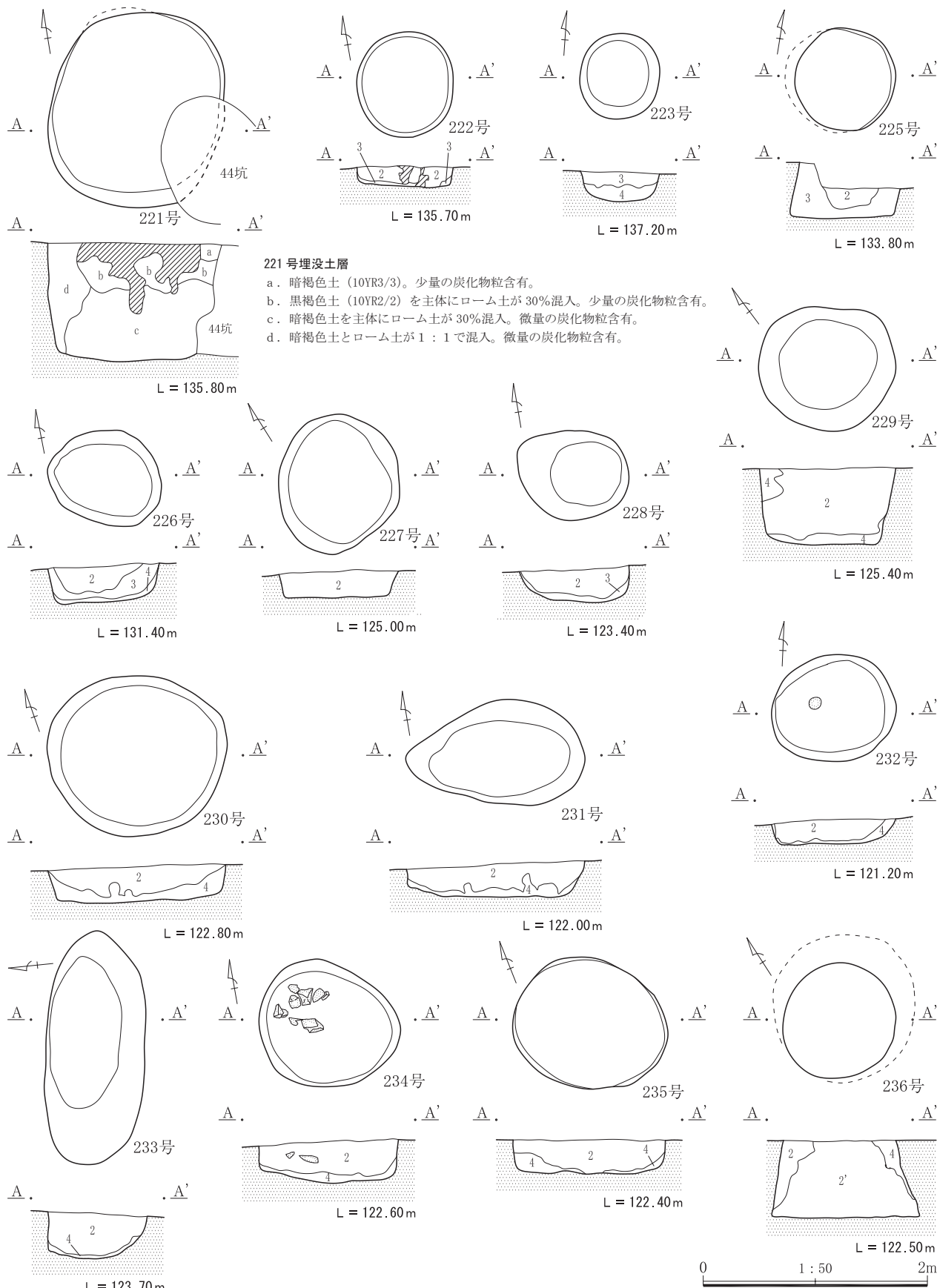
第 421 図 188 号土坑～ 201 号土坑

III 今井見切塚遺跡の調査



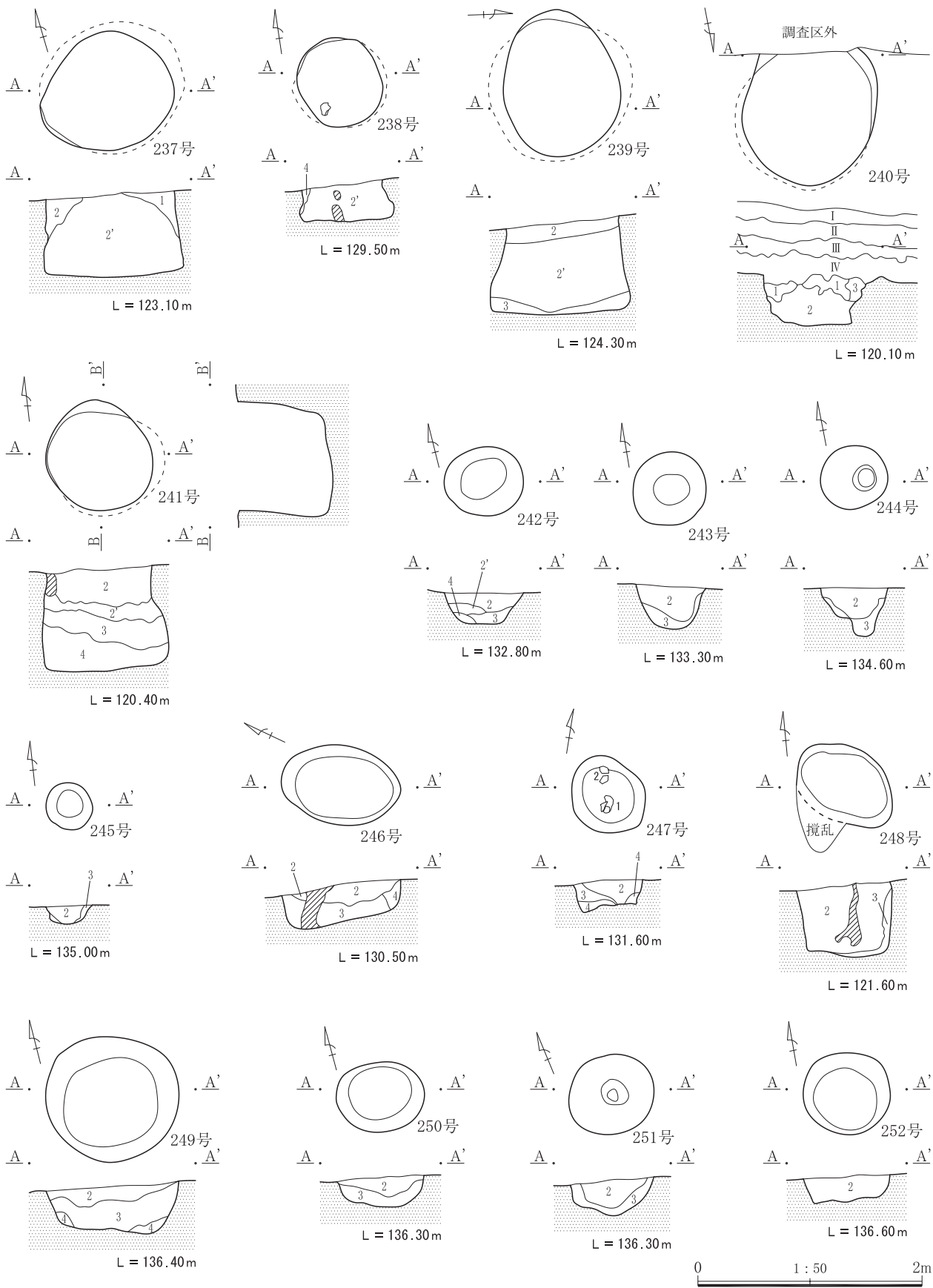
第 422 図 202 号土坑～220 号土坑

4. 土坑



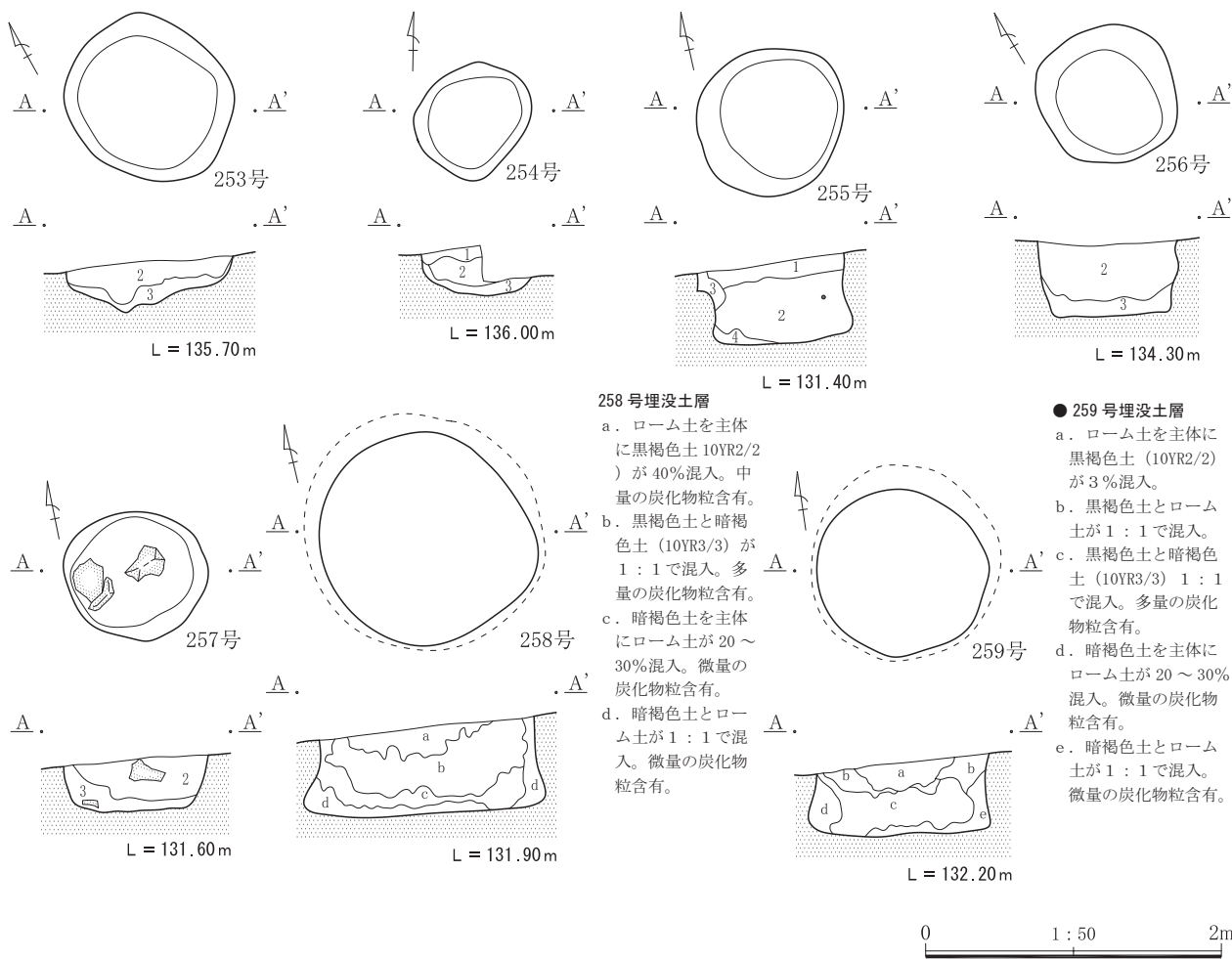
第 423 図 221 号土坑～223 号土坑・225 号土坑～236 号土坑

III 今井見切塚遺跡の調査



第 424 図 237 号土坑～252 号土坑

4. 土坑



第 425 図 253 号土坑 ~ 259 号土坑

5. 陥 穴

丘陵の南側稜線に当たる6・7区を中心にして、8基が検出されている。この内の7基（1～7号）については、斜面地の等高線方向にほぼ直交して東西に長軸を持つと共に、相互に5～10mの間隔を置いて南北方向を基軸に直線的に配置されている。ちなみに、最北端の4号と最南端の2号との距離は、50mを測る。各陥穴の規模・形状等については、第9表に掲載してあるので参照頂きたいが、開口部の平面形状はともに楕円形を呈し、長径1.5～2m×短径0.8～1.1m×深さ1～1.5mの類似した規模を有する。また、底面の平面形状は隅丸長方形を呈して平坦であり、壁面は80度前後の垂直に近い角度で掘り込まれている。さらに、底面の中央部には逆茂木を打設あるいは埋填したと想定される直径20～30cm、深さ50～75cmの小ピットが1基存在し、各陥穴ともに規模・形態を含めてかなり斉一的な様相を呈している。この小ピット内の埋没土層の観察では、1・4～7号で直径10～15cmの逆茂木の痕跡が確認され、特に1・7号では坑底部で逆茂木を固定するために使用したと推定される直径10cm前後の垂角礫1～2点も検出されている。各陥穴の埋没土の状況は、黒褐色土や暗褐色土がレンズ状に堆積

しており、自然埋没したことを示しているが、4～7号では埋没土の断面スライス調査を実施したにもかかわらず、坑底面上位で逆茂木の痕跡を確認することはできなかった。

1～7号については、前述したように南北方向を基軸にして、ほぼ一定した間隔で直線的に配置されており、個々の陥穴が単独で存在したのではなく、相互に有機的関連性を保持しつつ、同一時間内で設置・機能していたことが想定される。地形との関連では、稜線から若干西側にずれた位置に、等高線とその長軸がほぼ平行するように穿鑿されている点に注意される。ちなみに、長軸線の方位はN70～114度Eであり、長軸方向を一定範囲内に揃える意識を窺うことができる。

各陥穴の出土遺物については、極めて希薄な状況であり、僅かに1・2号において前期諸磯b式の土器片や砥石片が検出されているに過ぎない。これらの土器片が、各陥穴の帰属時期を示す可能性はあるが、3号の埋没後にその上位に構築された諸磯b式の26号住居との関係を重視すれば、時期的には同期をさらに遡るだけでなく、集落が形成されていない早期段階に比定されることも考慮される。尚、1号の第428図1～3の土器片は、ともに同一個体である。

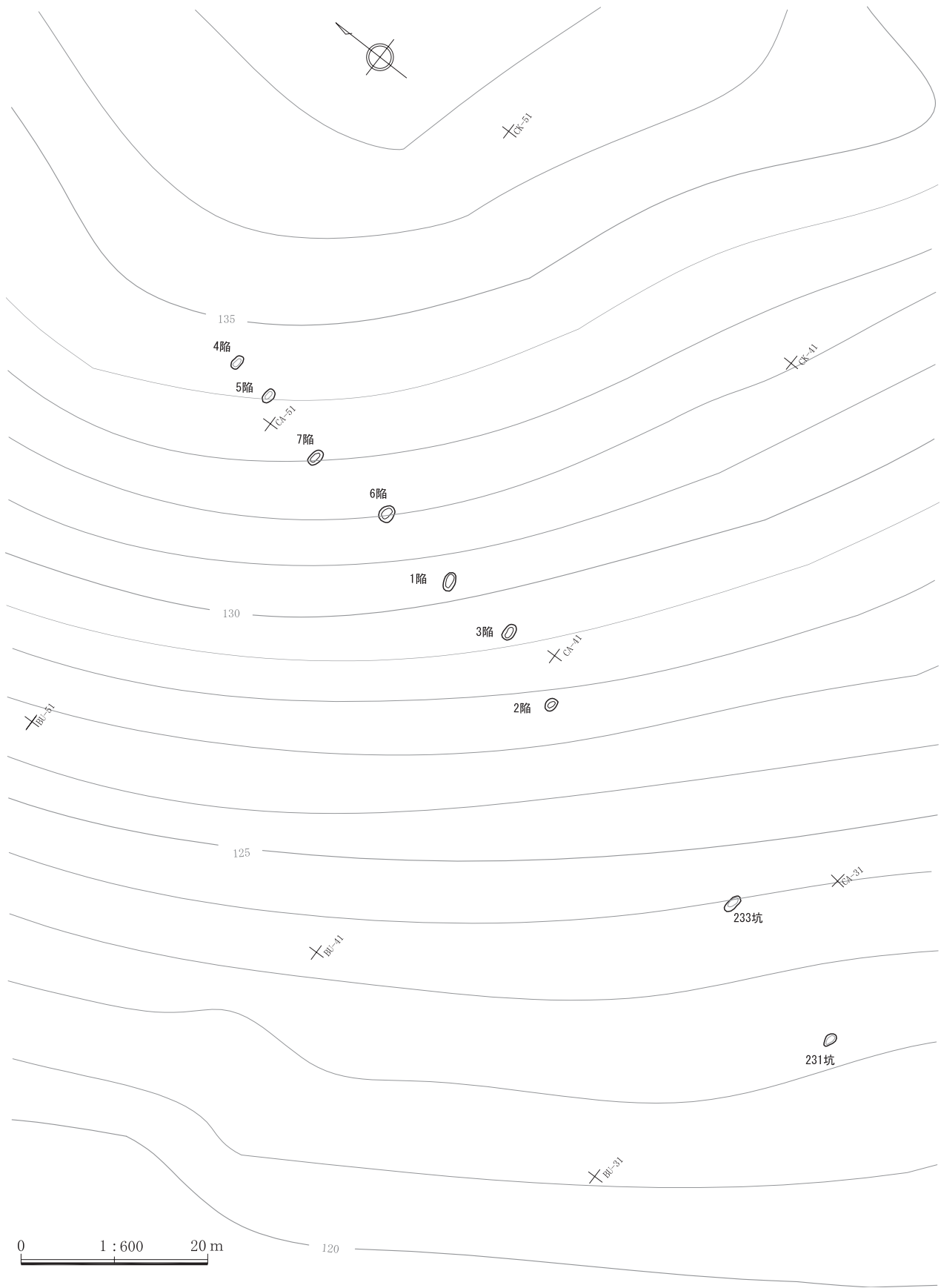
(遺物観察表：62・69頁、写真：P L 180・181)

第9表 陥穴の規模一覧

番号	地区	位置	時期	方位	平面形	規模 (cm)			出土遺物
						長径	短径	深さ	
1	6区	BY-44	早期?	N70E	楕円形	202	117	155	諸b14, 砥1
2	6区	BX-40	早期?	N100E	楕円形	141	107	128	諸b3
3	6区	BY-42	早期?	N84E	楕円形	183	114	104	
4	7区	CA-52	早期?	N94E	方形	150	82	126	
5	7区	CA-51	早期?	N114E	楕円形	156	109	110	
6	7区	CA-47	早期?	N97E	楕円形	189	135	150	
7	7区	CA-49	早期?	N95E	楕円形	180	114	135	
8	1区	BV-117	早期?	N76E	楕円形	142	98	154	

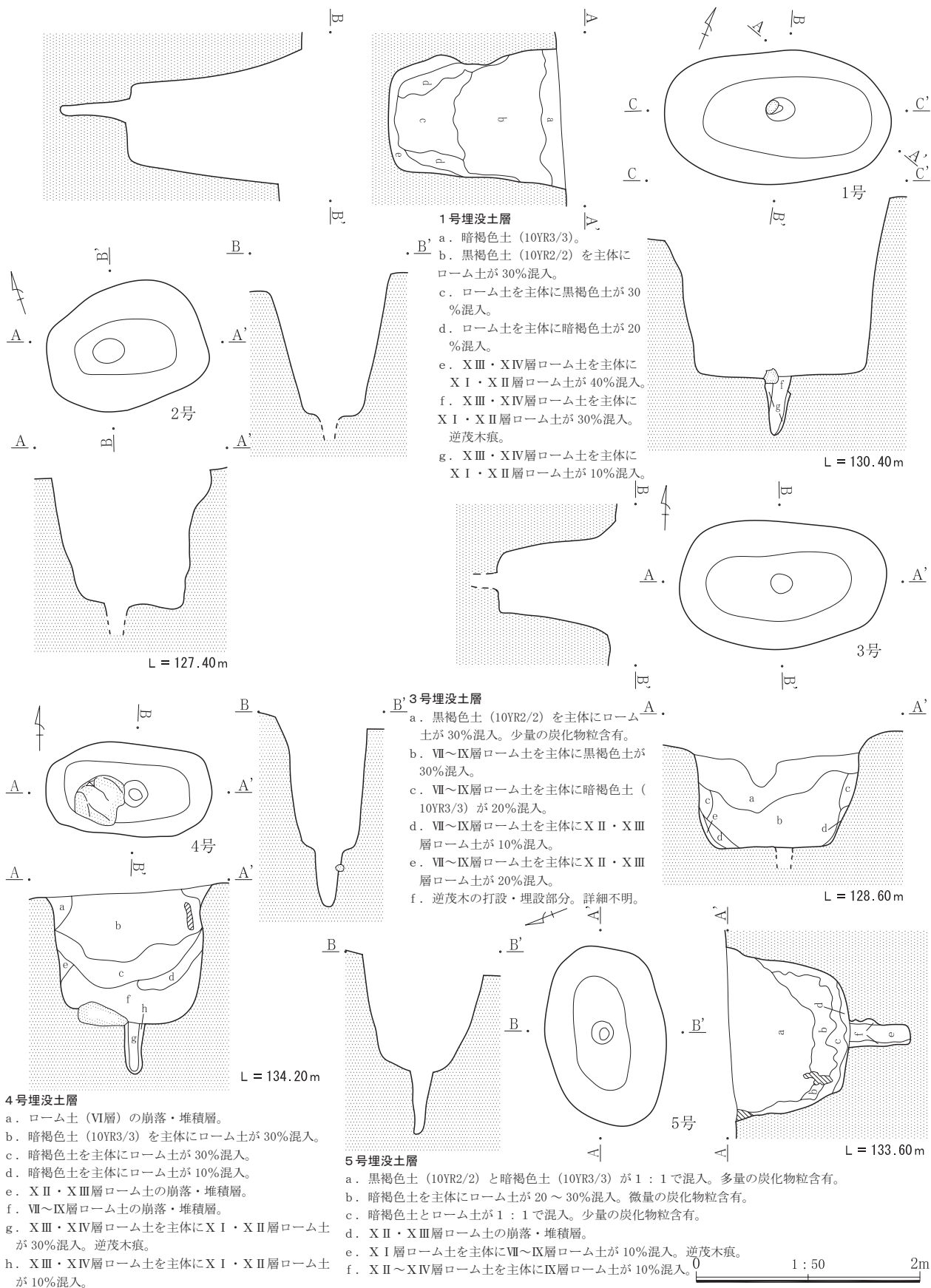
出土遺物の凡例

諸b：諸磯b式、砥：砥石

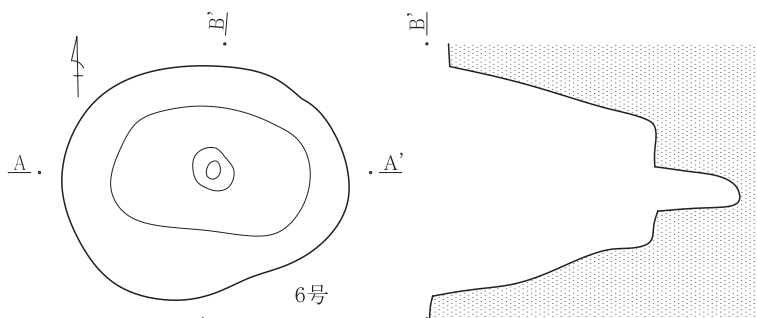


第 426 図 今井見切塚遺跡の陥穴の分布

III 今井見切塚遺跡の調査

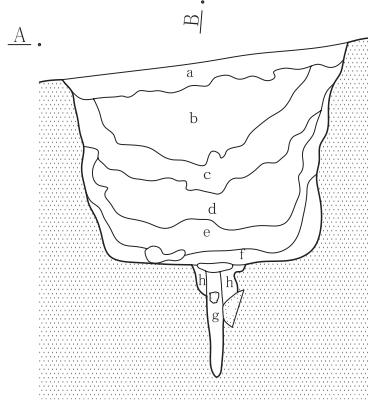


第427図 1号陥穴～5号陥穴



6号埋没土層

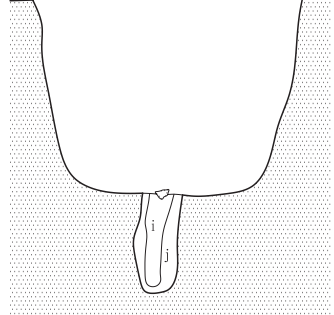
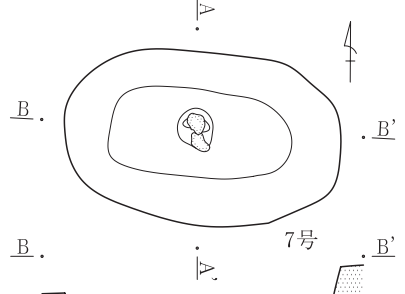
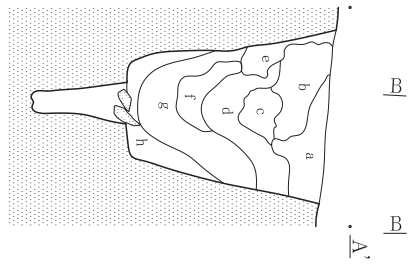
- a. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体にローム土が5%混入。多量の炭化物粒含有。
- b. VI~VIII層ローム土を主体に黒褐色土が5%混入。
- c. 黒褐色土と暗褐色土 (10YR3/3) が1:1で混入。多量の炭化物粒含有。
- d. 暗褐色土を主体にローム土が30%混入。
- e. 暗褐色土とローム土が1:1で混入。少量の炭化物粒含有。
- f. XI~XIII層ローム土の崩落・堆積層。
- g. XI・XII層ローム土を主体にXIII・XIV層ローム土が30%混入。逆茂木痕。
- h. XIII・XIV層ローム土を主体にXI・XII層ローム土が30%混入。



L = 131.50m

8号埋没土層

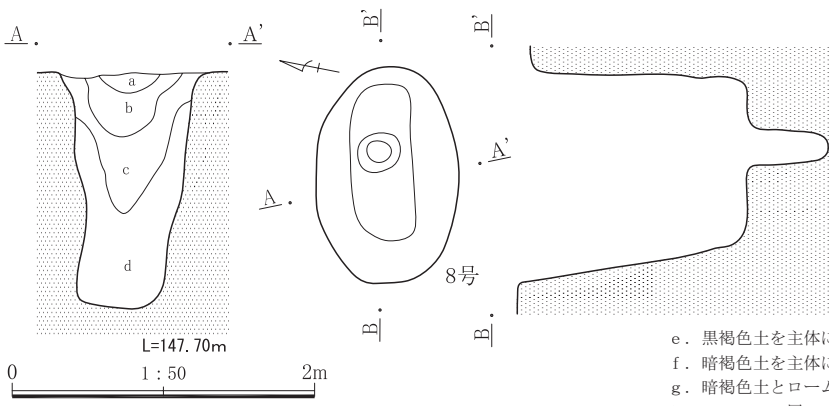
- a. 暗褐色土 (10YR3/3) とローム土が1:1で混入。少量の炭化物粒含有。
- b. 黒褐色土 (10YR2/2) と褐色土が1:1で混入。多量の炭化物粒含有。
- c. 暗褐色土を主体にローム土が30%混入。微量の炭化物粒含有。
- d. 暗褐色土とローム土が1:1で混入。少量の炭化物粒含有。



L = 132.60m

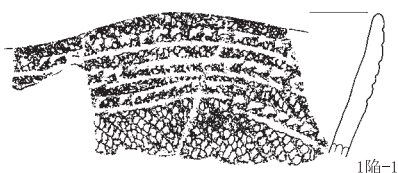
7号埋没土層

- a. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体にローム土が40%混入。
- b. 黒褐色土を主体にローム土が30%混入。
- c. VI・VII層ローム土を主体に黒褐色土が10%混入。
- d. 黒褐色土と暗褐色土 (10YR3/3) が1:1で混入。
- e. 黒褐色土を主体にローム土が10%混入。多量の炭化物粒含有。
- f. 暗褐色土を主体にローム土が30%混入。微量の炭化物粒含有。
- g. 暗褐色土とローム土が1:1で混入。
- h. XII~XIV層ローム土の崩落・堆積層。
- i. XII層ローム土を主体にXI・XIII層ローム土が10%混入。逆茂木痕。
- j. XIII・XIV層ローム土を主体にXII層ローム土が30%混入。



L=147.70m

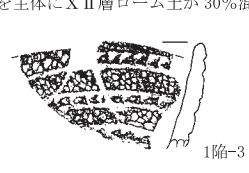
0 1:50 2m



1陥-1



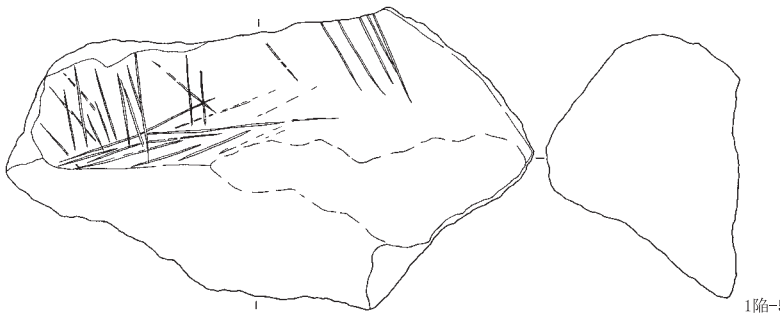
1陥-2



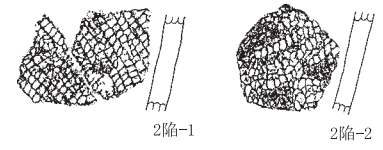
1陥-3



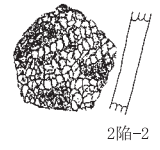
1陥-4



1陥-5



2陥-1



2陥-2

0 1:3 10cm

第 428 図 6号陥穴~8号陥穴

6. 集石土坑

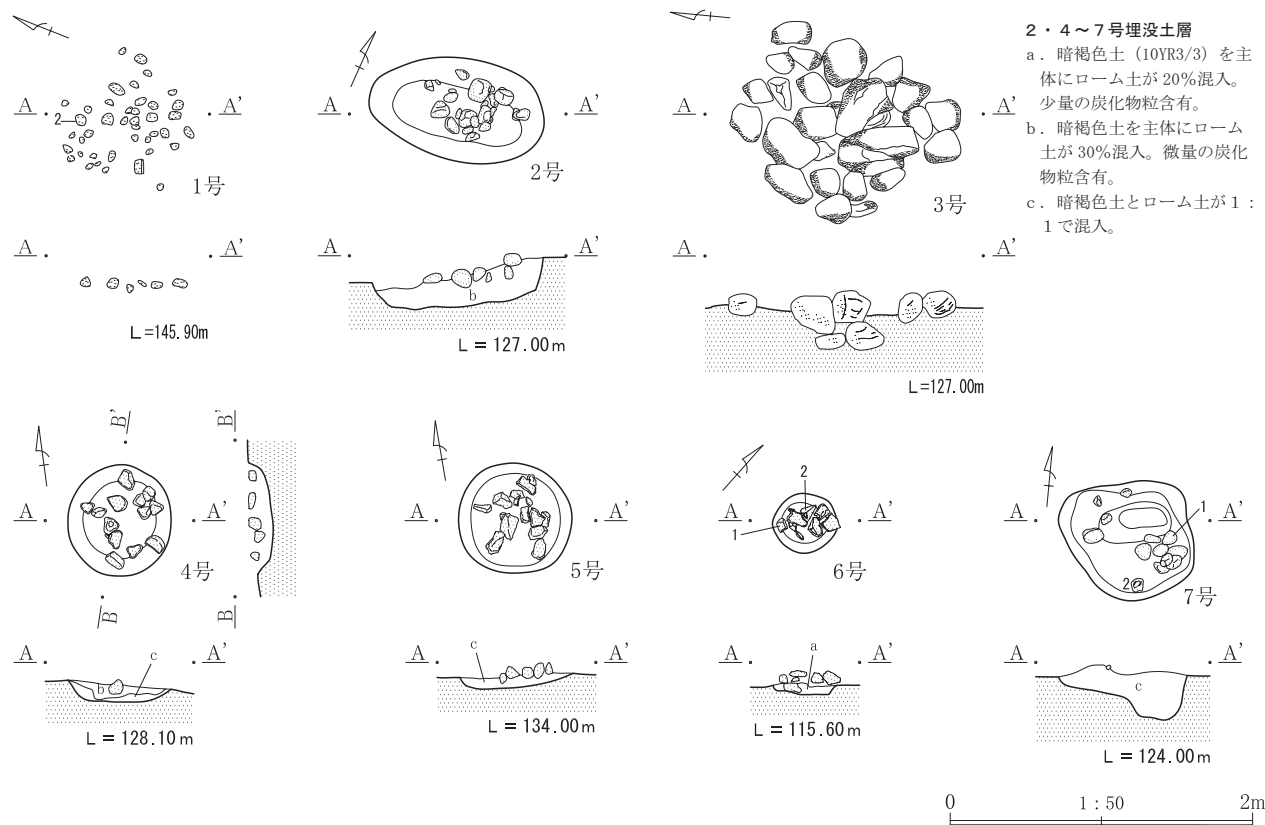
7基が検出されているが、各集石土坑の規模を含めたその内容については、第10表を参照頂き、ここでは特徴的な要素に関して簡単に触れておきたい。

各集石土坑を構成する礫群は、直径5～15cm程度の輝石安山岩の河床礫や亜角礫を素材としており、その多くに被熱による赤化や煤状炭化物の付着が認められる。ちなみに、1～4号では100%、5号は84%、6号は50%、7号は79%の礫に被熱の痕跡を確認することができる。3号は、直径が20～40cm大の礫により構成される点で他の事例とは異なるが、被熱している点では共通している。また、1・3号を除いて、直径40～100cm×深さ10～30cm程度の土坑状の掘り込みを伴うが、その壁面や埋没土中に焚火行為を窺わせる被熱痕や焼土の堆積は認められない。このことは、礫への加熱行為が各集石土坑内

ではなく、別の地点で行われ、そして当該箇所には持ち込まれたと考えられる。1号については34号住居の埋没土中で、また3号についてはIV層中でそれぞれ検出したために、土坑状の掘り込みを確認することが困難であったが、礫の重畳状況から見て他と同様の掘り込みを随伴したことが推定される。尚、各礫群の出土状況に意識的な配置が認められないことや、いずれも下位の土坑底面から10～20cmほど浮上した状態を呈していることなどは、集石土坑の機能・用途を考定する上で注意すべき点であろう。

1～7号の分布は、特定の地点に集中することなく、1・2・5・7区に散在しているが、2・3・7号は草創期後半や前期の遺構分布外縁部に設置され、当該期の集落エリアから大きく外れている点に注意される。

出土遺物は極めて僅少であるために、各集石土坑の帰属時期については確定できないが、1号では諸磯c式の土器片が、4号では諸磯a式が、各々1点



第429図 1号集石土坑～7号集石土坑

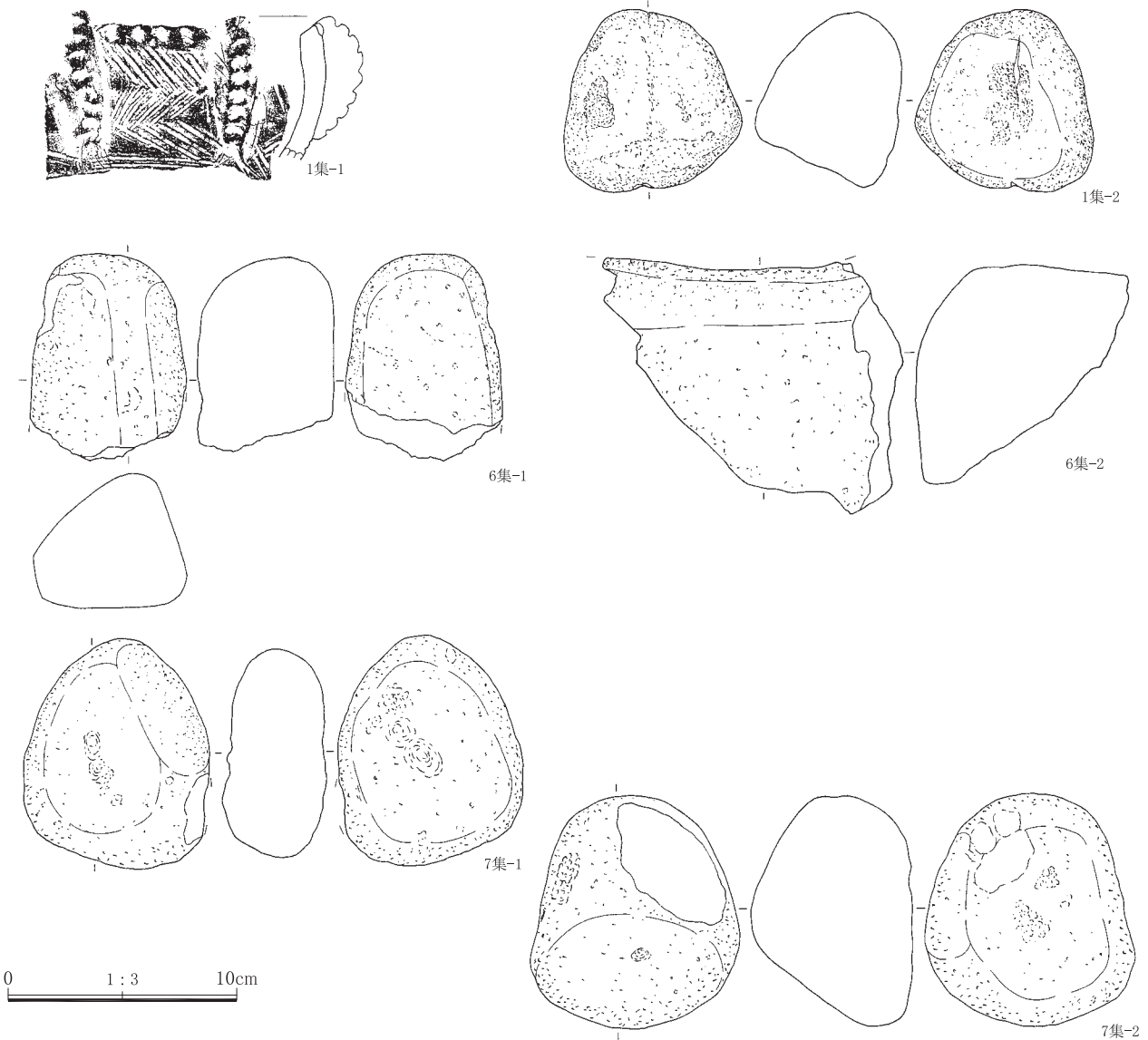
検出され、1・6・7号では焼礫に混在して磨石類が1～2点検出されている。また、1号は諸磯c式期の34号住居の埋没土中に設置されており、時間的に当該住居と近接していることが窺える。さらに、2・4～7号の坑内埋没土は、薄層ながらも黒褐色土を含んでおり、前項で既述した前期土坑の例に類似している。こうした点を踏まえれば、各集石土坑の時期は前期の所産である可能性が高いと言えよう。

尚、集石土坑周辺のグリッドの遺物包含層

(IV・V層)内からは、約400点に及ぶ被熱礫が検出されているが、後世の攪乱等により散逸して原形をとどめない集石土坑も相当数存在したことを窺わせる。

第10表 集石土坑の規模一覧

番号	地区	位置	時期	土坑の平面形・規模 (cm)				石材数
				平面形	長径	短径	深さ	
1	1区	CK-112	諸磯c?	不明	不明	不明	不明	39
2	2区	AU-109	不明	楕円形	115	67	26	26
3	2区	AX-99	不明	不明	不明	不明	不明	27
4	5区	DF-34	諸磯a?	円形	74	68	13	13
5	5区	CQ-44	不明	円形	75	73	8	19
6	5区	DN-19	不明	円形	42	40	6	8
7	7区	BM-68	不明	不整形円形	95	84	33	14



第430図 集石土坑出土遺物

7. 屋外埋設土器

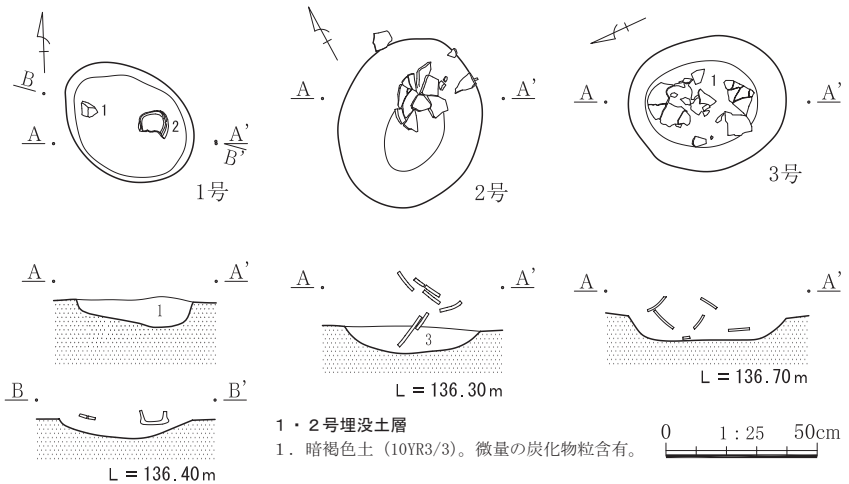
3基が検出されているが、いずれも丘陵斜面東側の5区に集中している。位置的には、掘立柱建物群の南側20～25m付近に散在しているが、1～3号の相互間の距離は30m以内であり、一定のまとまりを見せている。各埋設土器は、樹木や後世の攪乱によって欠損し、1・3号では底部のみとなっているが、基本的には正位の状態で埋設されたことが窺える。また、それらの掘方は、第★表に示したように長径50cm×深さ10cm前後の小規模なものであり、VI層のローム土上面を僅かに掘り窪めるとどまる。

各埋設土器は、いずれも諸磯b式の深鉢土器を使用しており、時間的にかなり限定された範囲

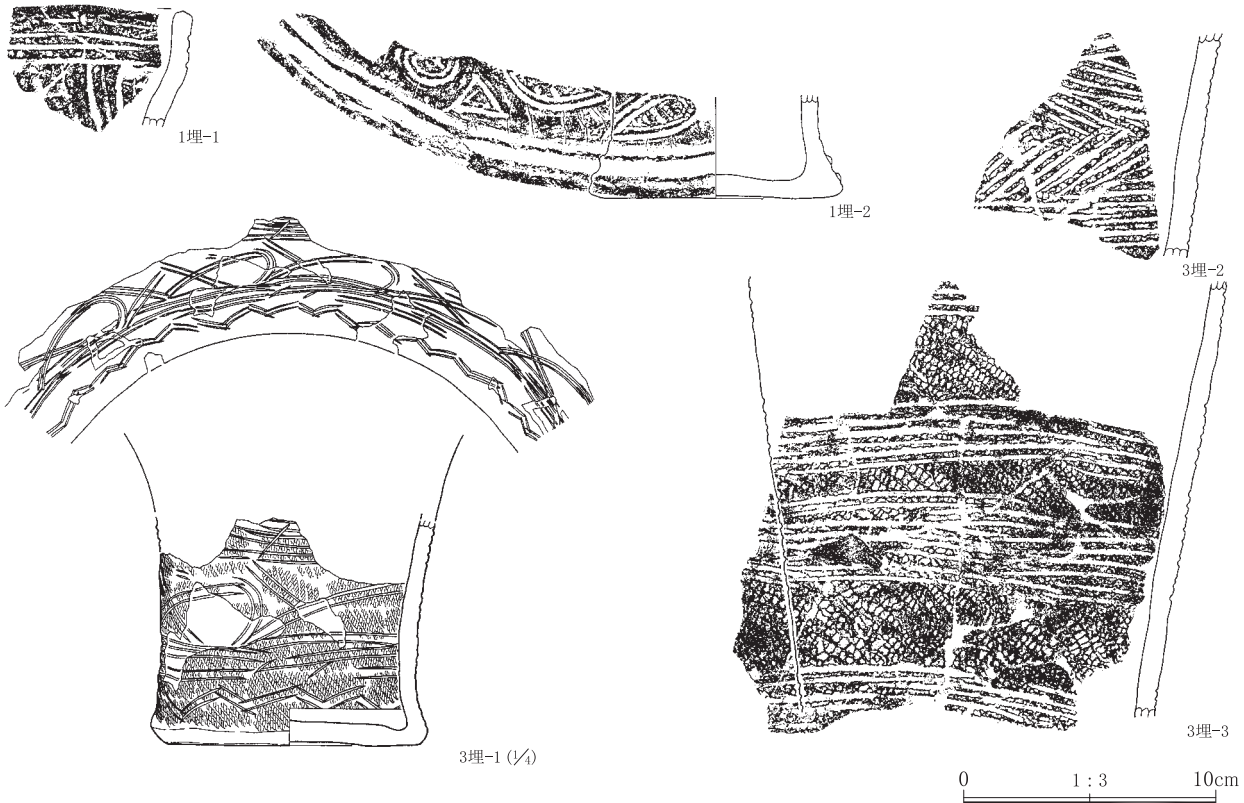
内で設置されていることを示している。尚、2号については盗難により紛失しているが、爪形文により蕨手・渦巻状の文様を施した諸磯b式古段階の深鉢土器である。

第11表 屋外埋設土器規模一覧

番号	地区	位置	時期	掘方の形状・規模 (cm)			
				平面形	長径	短径	深さ
1	5区	CN-51	諸磯b	楕円形	48	36	8
2	5区	CU-50	諸磯b	楕円形	57	46	10
3	5区	CT-53	諸磯b	楕円形	52	44	9



1・2号埋設土層
1. 暗褐色土 (10VR3/3)。微量の炭化物粒含有。 0 1:25 50cm



第431図 1号～3号埋設土器

8. 倒木痕

倒木痕については、VI層のローム上面において、長径2 m前後の不定形な落ち込みとして確認されるものであり、その埋没土中に逆・横転した基本土層の堆積を確認できることが大きな特徴でもある。試掘調査との兼ね合いで検出し得なかった2・3区を除き、1区では8基、4区では7基、5区では65基(52号～60号は欠番)、6区では30基、7区では4基、の合計114基を検出している。

調査方法としては、先の今井三騎堂遺跡と同様に、埋没土と基本土層との対比や、転倒方向を割り出すことを主眼として、ローム層上面にて平面プランと埋没土の分層状態を撮影・図化した。ここでは紙幅の都合により、その代表的な5区の倒木痕についてのみ掲載してある。

5区倒木痕の個々の規模や形状、それに転倒方位については、第12表に記載したとおりであるが、規模的にはその長径が3 mを超える6・12・14・15・18・63号のような大規模なものや、1 m前後の2・9・11・13・16・64・65・68～70号のような小規模なものもあるが、全体としては2 m前後のものが主体を占めている。また、逆・横転した埋没土層を観察すると、①III層以下、②IV層以下、の各層以下を巻き込む2つのタイプに大別することができるが、①タイプは1・72号の2例、比率的には僅か3%に過ぎず、②タイプが全体の97%を占めている。また、横転により巻き上げられた最下層は、Hr-HP軽石層(XVII層)にまで及ぶものも僅かに存在するが、全体的にはAs-BP軽石層(IX層)の前後層までを巻き込むものが約4割弱、暗色帯前後(XII・XIII層)までが約3割強を占めている。

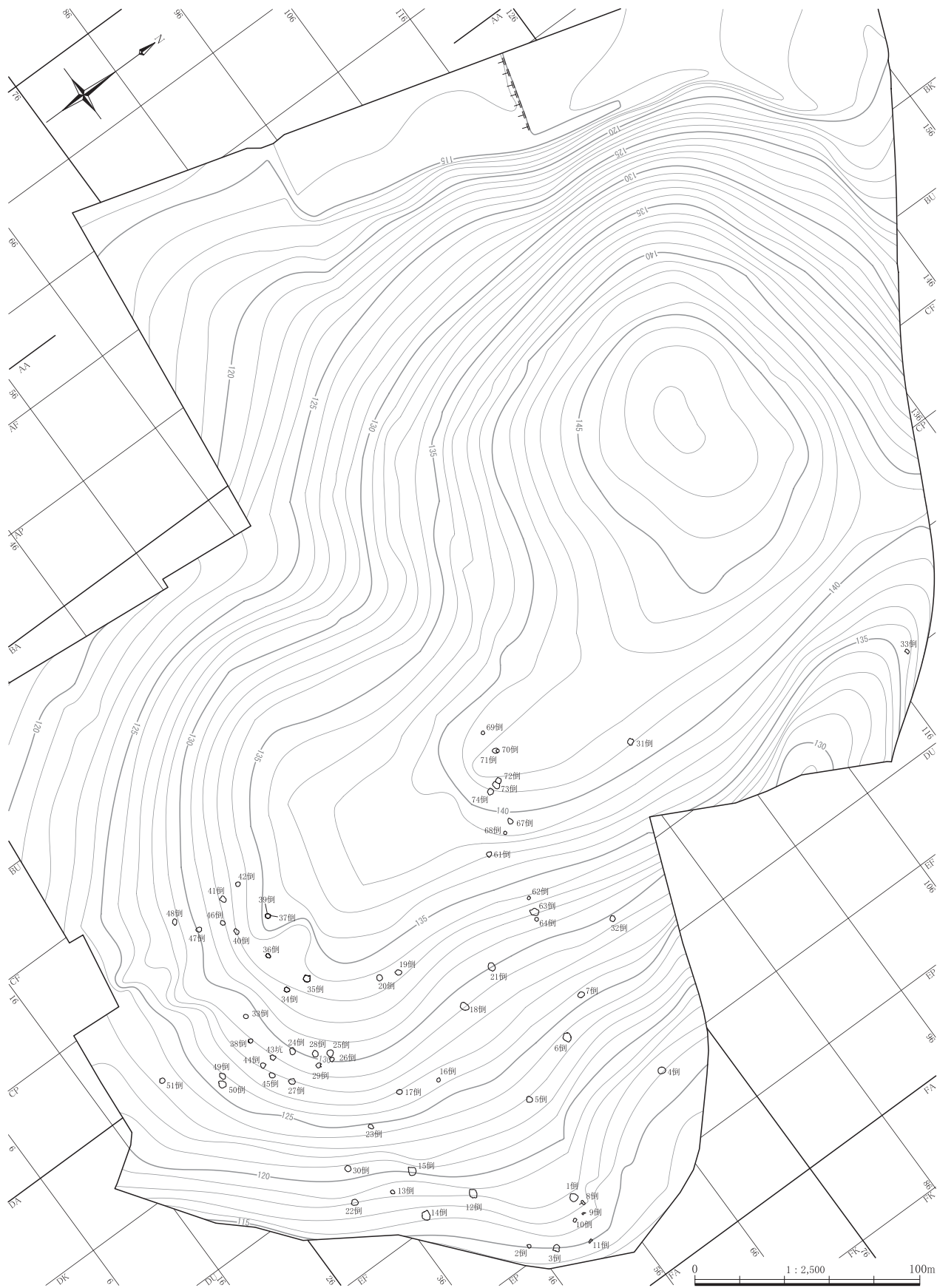
各倒木痕の規模とこの逆転層位深度との相関性は、今井三騎堂遺跡の事例と同様に、長径3 m前後の大規模なものに深層を巻き込む傾向も窺えるが、2 m前後の中規模なものにもXII層の暗色帯を巻き込むものが少なからず存在し、必ずしも明確な関係性を

持たない。これについては、樹木の属種差と相関性を持つと考えられ、水平・垂直方向に延びる樹根の性状差が影響しているものと想定される。

各倒木痕の転倒方向については、逆転層の堆積ラインと直行する軸線が、基本的に風向を示すと考えることができ、これを基本土層と同様に上下方向に正置した場合、下位方向が風上を示すことになる。これを基本に各倒木の転倒方向を推定すると、各倒木痕ともかなりのバラツキが認められるものの、5・13号を除くその大半が、北東から南東という東方向を基軸とした営力(風力)により転倒していることが判る。このような東方向を中心とした方向性をもつ営力は、台風等の強風の可能性が高い。また、西方向からの営力による1・72号の倒木痕の形成も、風向を変えた台風による可能性が高いが、冬季の強風による可能性も考慮される。

各倒木痕の形成時期については、それを確定するに足る資料に乏しいが、花積下層式期の15号住居は倒木痕を切って掘り込まれており、少なくとも縄文時代の当該期まで遡る倒木痕が存在することは確実である。また、逆転堆積層の内容で見れば、その大半が縄文時代前期の遺物包含層であるIV層以下を巻き込んでおり、こうした点も加味すればその大半が縄文時代の前期を中心に形成された可能性が高い。同様に、III層以下を巻き込む1・72号は、弥生～平安時代の間の形成を想定することができる。

III 今井見切塚遺跡の調査

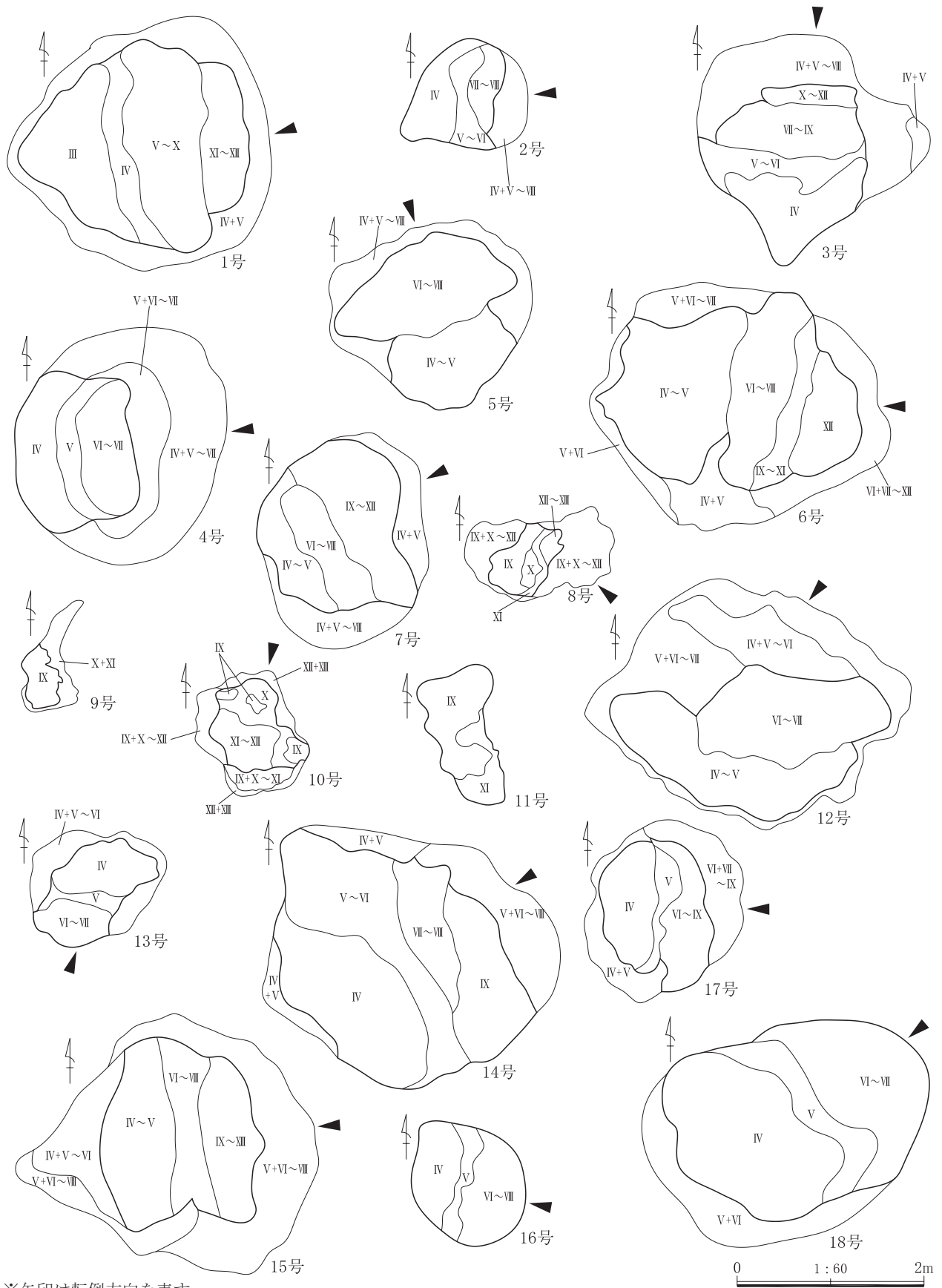


第 432 図 今井見切塚遺跡の倒木痕の分布

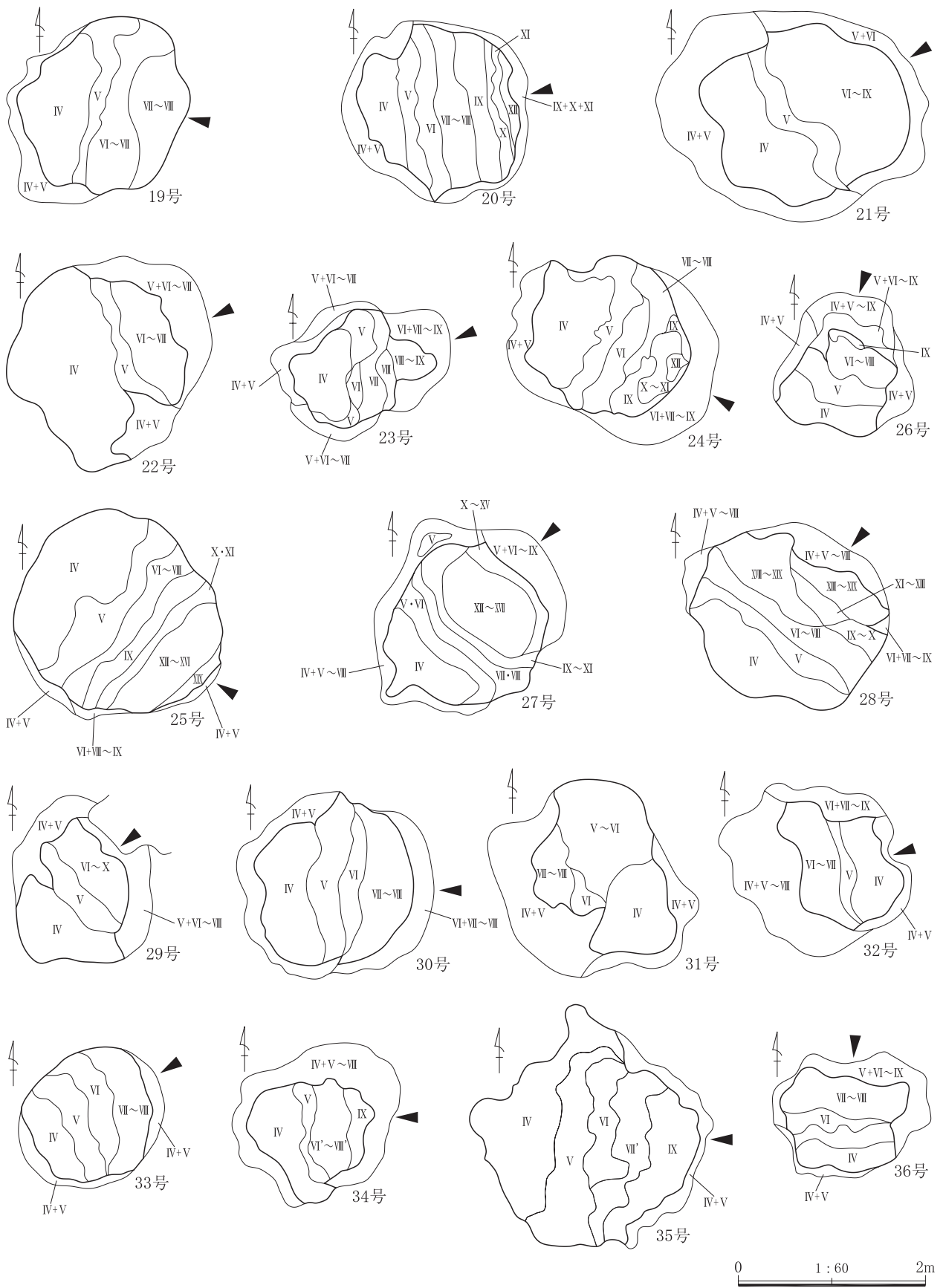
第12表 倒木痕の規模一覧

番号	位置	規模 (cm)	転倒方位	埋没土	番号	位置	規模 (cm)	転倒方位	埋没土
		長径×短径					長径×短径		
1	EL-52	280×260	N107W	Ⅲ～ⅩⅡ	48	CK-35	220×140	N34W	Ⅳ～Ⅷ
2	EN-45	135×115	N96W	Ⅳ～Ⅷ	49	DC-29	245×180	N87W	Ⅳ～ⅩⅥ
3	EP-47	245×245	N176W	Ⅳ～ⅩⅡ	50	DD-28	260×235	N95W	Ⅳ～ⅩⅢ
4	EQ-69	250×225	N98W	Ⅳ～Ⅶ	51	CY-23	190×175	N146W	Ⅳ～Ⅸ
5	EA-55	210×200	N163E	Ⅳ～Ⅷ	61	DA-67	180×165	N118W	Ⅳ～Ⅸ
6	DW-62	310×260	N88W	Ⅳ～ⅩⅡ	62	DH-68	110×102	不明	Ⅳ～Ⅶ
7	DT-66	225×180	N113W	Ⅳ～ⅩⅡ	63	DI-68	305×235	N127W	Ⅳ～ⅩⅡ
8	EN-53	155×80	N49W	Ⅸ～ⅩⅢ	64	DJ-67	130×125	N147W	Ⅳ～Ⅸ
9	EO-52	95×60	不明	Ⅸ	65	CN-48	120×115	N100W	Ⅳ～Ⅷ
10	EO-51	130×120	N167W	Ⅸ～ⅩⅡ	66	CN-48	190×160	N87W	Ⅳ～ⅩⅠ
11	ER-51	145×80	不明	Ⅸ. ⅩⅠ	67	CX-71	205×160	N80W	Ⅳ～Ⅸ
12	EE-43	345×250	N131W	Ⅳ～Ⅶ	68	CY-70	120×110	N103W	Ⅳ. Ⅴ
13	DY-36	140×125	N20E	Ⅳ～Ⅶ	69	CO-75	120×115	N107W	Ⅳ～Ⅸ
14	ED-38	305×270	N123W	Ⅳ～Ⅸ	70	CQ-75	105×100	N120W	Ⅳ～Ⅷ
15	DX-40	325×260	N92W	Ⅳ～ⅩⅢ	71	CQ-75	185×180	N162W	Ⅳ～ⅩⅡ
16	DR-48	125×120	N79W	Ⅳ～Ⅷ	72	CT-72	195×195	N60W	Ⅲ～ⅩⅡ
17	DQ-44	185×170	N88W	Ⅳ～Ⅸ	73	CT-72	265×200	N126W	Ⅳ～ⅩⅢ
18	DM-55	310×210	N130W	Ⅳ～Ⅶ	74	CT-71	205×200	N90W	Ⅳ～ⅩⅢ
19	DF-51	196×185	N78W	Ⅳ～Ⅷ					
20	DE-49	197×194	N106W	Ⅳ～ⅩⅡ					
21	DK-60	290×225	N119W	Ⅳ～Ⅷ					
22	DW-32	220×215	N116W	Ⅳ～Ⅶ					
23	DQ-39	190×145	N115W	Ⅳ～Ⅸ					
24	DE-37	225×175	N62W	Ⅳ～ⅩⅡ					
25	DH-40	225×220	N60W	Ⅳ～ⅩⅨ					
26	DI-40	150×140	N162W	Ⅳ～Ⅸ					
27	DH-35	230×210	N134W	Ⅳ～ⅩⅦ					
28	DG-38	225×190	N139W	Ⅳ～ⅩⅨ					
29	DI-38	175×145	N131W	Ⅳ～Ⅹ					
30	DT-34	205×192	N89W	Ⅳ～Ⅷ					
31	CY-88	210×200	不明	Ⅳ～Ⅷ					
32	DO-74	190×180	N110W	Ⅳ～Ⅶ					
33	CX-35	153×150	N122W	Ⅳ～Ⅷ					
34	CY-40	170×165	N88W	Ⅳ～Ⅸ					
35	CY-43	260×255	N91W	Ⅳ～Ⅸ					
36	CU-41	165×130	N176W	Ⅳ～Ⅷ					
37	CQ-43	180×160	N107W	Ⅳ～Ⅸ					
38	DB-34	160×145	N177W	Ⅳ～ⅩⅢ					
39	CQ-43	167×155	N112W	Ⅳ～ⅩⅠ					
40	CP-39	195×145	N90W	Ⅳ～ⅩⅡ					
41	CL-40	220×165	N98W	Ⅳ～ⅩⅡ					
42	CL-43	165×150	N112W	Ⅳ～ⅩⅡ					
43	DE-34	195×175	N110W	Ⅳ～ⅩⅥ					
44	DE-33	175×165	N125W	Ⅳ～ⅩⅠ					
45	DF-33	200×170	N110W	Ⅳ～ⅩⅠ					
46	CO-39	180×145	N131W	Ⅳ～Ⅸ					
47	CN-36	195×162	N162W	Ⅳ～ⅩⅠ					

III 今井見切塚遺跡の調査



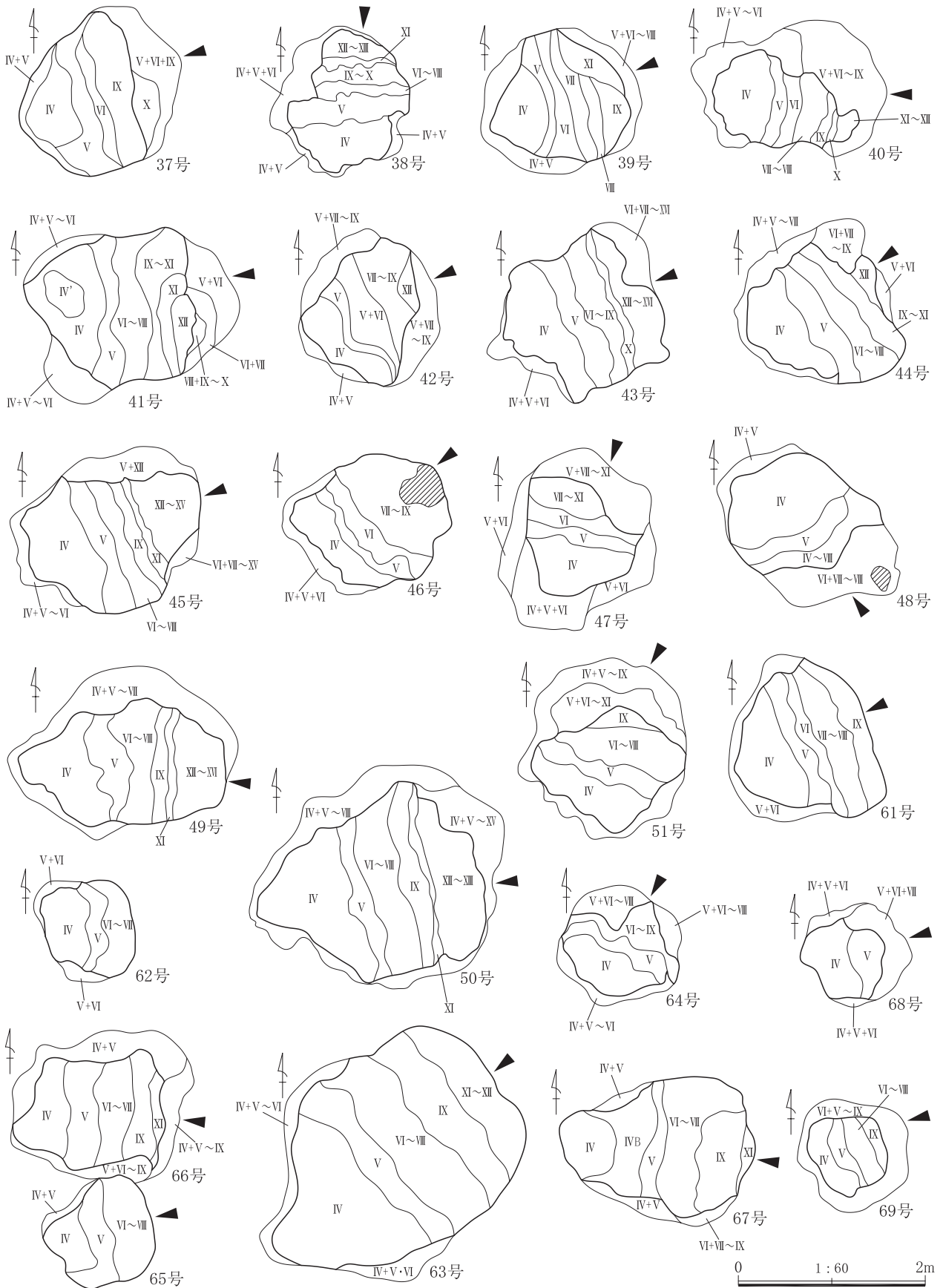
第 433 図 1 号～ 18 号倒木痕



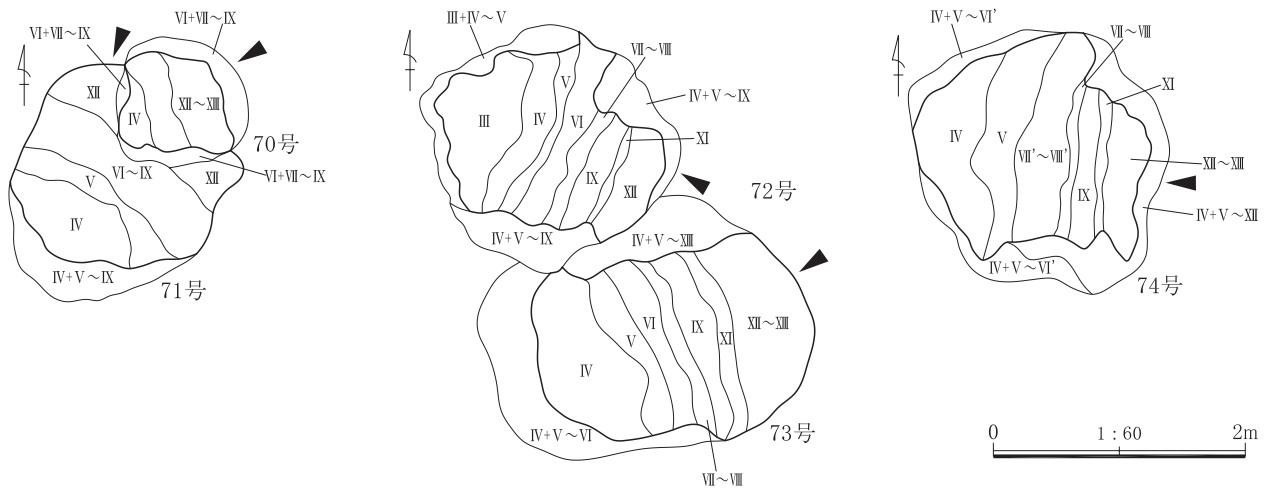
第 434 图 19 号~36 号倒木痕

0 1 : 60 2m

III 今井見切塚遺跡の調査



第 435 図 37 号～ 51 号・ 61 号～ 69 号倒木痕



第 436 図 70 号～74 号倒木痕

9. 包含層の出土遺物

(1) 出土状況

148,500 m²に及ぶ全調査面積の中で、その1/2に相当する1・5区を中心とした約82,600 m²の範囲に、草創期後半や前期後半の遺物包含層が存在する。この包含層は、今井三騎堂遺跡と同様に層厚15～20 cmのIV層（淡色黒ボク土）と、層厚20～30 cmのV層（ローム漸移層）の二層にわたっている。ただし、各時期の遺物は層位的には出土せず、各層ともに各時期の遺物が混在している状況であった。また、出土土器はいずれも破片を主体としており、完形品や一括的な出土状況も認められなかった。

遺物の内訳を総点数で見ると、土器60,577点、剥片や礫塊を含む石器26,019点という膨大な量が存在しており、その分布域も広大であるため、整理の都合上1区と5区の遺物を分割して、各調査区単位で図版化を行っている。また、出土遺物の内容や数量の詳細については、58～585頁の一覧表に掲載しているので、そちらを参照いただきたい。

A. 土器の概要と分布

出土土器の大別時期毎の内訳は、草創期前半7点、同後半2,410点、早期937点、前期32,787点、中期

1,641点、後期731点、晩期3点、時期不明21,442点、土製品26点である。時期不明や土製品を除いた総点数に占める比率は、前期が85%と主体を占め、他は草創期後半が6%、中期が4%に過ぎない。このように前期が突出する傾向については、草創期後半や早期の集落が小規模かつ継続期間の短いことと相関関係にあり、今井三騎堂遺跡と異なる点でもある。

各時期の内容を細別型式単位に、その分布状況も含めて概観してみると、先ず草創期前半は、隆起線文土器2点を含む7点が存在するのみだが、1区の丘陵頂部を中心に分布している。当該期の遺構は存在していないが、同地点には後半期の捺糸文土器群も分布し、いわば縄文時代の先駆的な立地状況を示すと言える。

草創期後半は、井草式990点（I式:205、II式:5、未分類780）、夏島式280点、稻荷台式1,089点、稻荷原式50点などがある。井草式は、前半期の隆起線文土器と同様に、1区の丘陵頂部にあたるBK～CK-105～125グリッド付近を中心に分布し、他の区域への広がりも極めて僅少である。夏島式も井草式とほぼ同一地点に分布するが、最多数を占める稻荷台式は同地点に散布しつつも、その主体は5区の東側斜面部のCP～EA-15～55グリッドへと移行している。こうした動向は、次の稻荷原式へと継続し、1区からはほとんど姿を消すようになる。井草・夏

Ⅲ 今井見切塚遺跡の調査

島式と稲荷台式の分布域が大きく異なるのは、基本的に各時期の竪穴住居の占地地点が異なるためであるが、丘陵頂部を忌避するかのような稲荷台式期の動向の背景が問題となろう。

早期では、東山式1点、押型文46点、三戸・田戸式などの沈線文46点、条痕文844点などがある。これらの分布域は、押型文が5区南東部斜面のDF～DU-20～30グリッド付近の狭い範囲に限定されるのに対し、沈線文や条痕文は前段階の稲荷台式に近似して、5区の南東部斜面を中心にしつつも1区の丘陵頂部にも散布している。条痕文段階では、5区の南東部斜面に集落の立地が認められるが、1区には占地しておらず、相互に異なった行動が展開していた可能性が高い。

前期では、花積下層式4,716点、関山式9点、有尾式2点、黒浜式792点、諸磯a式13,601点、諸磯b式12,437点、諸磯c式1,484点、浮島・興津式236点、十三菩提式33点、大木式系52点、東海系1点などがある。初頭段階の花積下層式は、5区のCK～DP-15～60グリッドを主体として、1区のBP～CK-105～115グリッドの2地点に分散している。このような分布域のあり方は、黒浜式から諸磯b式にかけて踏襲され、ほぼ同一地点を繰り返し継続的に利用している状況が窺える。これは、基本的に各時期の集落占地が5区を中心とした状況を反映したものであるが、黒浜式段階では2基の土坑（7・8号）以外は明確な遺構が存在しないにも関わらず、やはり5区を中心に分布する点は注意される。また、諸磯c式では先とは逆に1区を中心とした展開となるが、これも集落の占地が同区にほぼ限定されていることと相関関係にある。ただし、遺構存在が皆無に近い5区にも少なからず分布する点については、やはり1区とは別の活動が存在した可能性を考慮する必要がある。一方、浮島・興津式を中心とした他系統の土器については、諸磯c式に近似した分布状態を示している。

中期前半は、五領ヶ台Ⅱ式9点、阿玉台Ⅰb式1点、同Ⅱ式3点、同Ⅲ式4点、藤内式13点、井戸尻式8

点、大木8a式系5点、不明936点などがある。全体的な分布状況は、竪穴住居1棟と土坑24基が占地する1区のBK～CP-105～120グリッド周辺を中心とするが、そうした遺構の皆無な5区にも散在している。こうした遺構の形成と直接関連しない遺物分布のあり方は、先の各時期においても認められるが、丘陵頂部から尾根伝いに南側斜面下の沖積地へと続く延長線上でもあり、水場利用をはじめとした日常生活の諸活動の中で、こうした地点にも遺物散布が拡大したと想定される。

中期後半については、加曾利E1式6点、同E2式3点、同E3式8点、同E4式4点、曾利系2点、未分類を含む不明637点などがある。また、後期では称名寺Ⅰ式6点、同Ⅱ式14点、堀之内Ⅰ式13点、同Ⅱ式19点、加曾利B式6点、未分類を含む不明534点などがある。土器の分布域は、中・後期の各型式ともに5区のCK～DP-15～60グリッドのかなり広範囲に及び、1区の丘陵頂部にも散漫な分布が認められる。検出されている各時期の遺構は土坑のみで、加曾利E1式期と堀之内Ⅱ式期が5区に各1基、加曾利E2式期が7区に1基占地することどまっておき、いわば竪穴住居による集落を伴わずに遺物散布地のみが形成されたという状況に近い。

土製品には、土製円盤20点、粘土塊4点、不明2点などがある。土製円盤は、草創期後半の撚糸文系土器や前期の諸磯a式土器の破片を利用したものであり、分布状況も前述の土器と重複関係にある。

B. 石器の概要と分布

総数25,901点を器種別に見ると、磨石類が1,298点と最も多く、次いで削器類が88点、打製石斧622点、石鏃368点、石皿98点、石錐76点、砥石67点、多孔石62点、スタンプ形石器49点、磨製石斧48点、三角錐形石器36点などが主なものである。また、石核・原石943点や石器全体の66%を占める剥片類16,973点も存在し、遺跡内での石器製作行為を窺うことができる。その他に、石器としての調整加工や使用痕が認められない直径5cm前後を主体とした自

然礫4,691点が存在し、その内の3,509点に被熱の痕跡が確認できる。

石材では、石鏃・石錐を除く石匙・削器・石斧などの「打製系列」の石器には黒色頁岩が多用され、総点数で全体の53%を占めている。また、黒色頁岩が石核や剥片に占める比率も36%・49%と近似した値を有しており、「打製系列」における同石材の優位性が際立っている。もう一つは、チャートの占める比率の高さである。「打製系列」の中では、25%と比較的高率を占め、石核・剥片でも36%・48%とやはり高い比率となっている。これを詳細に見れば、石鏃では66%、石錐63%、石匙49%、削器類20%と言うように、黒色頁岩を上回る高い比率でチャートが認められ、ほぼ小型の器種に限定して多用されている状況を看取することができる。これらの器種の中に占める黒曜石の比率はかなり低く、石鏃では11%、石錐・石匙・削器類では2～4%に過ぎない。

一方、打製石斧のような大型の器種では、黒色頁岩が73%と他の石材を圧倒しているが、ホルンフェルス13%や黒色安山岩11%なども認められ、小型器種とは異なった石材選択がなされている。ただし、これらの石材は北毛や東毛域に存在する在地産石材であり、原石素材の大きさや性状を考慮して、各器種に応じた選択性が働いていると言えよう。

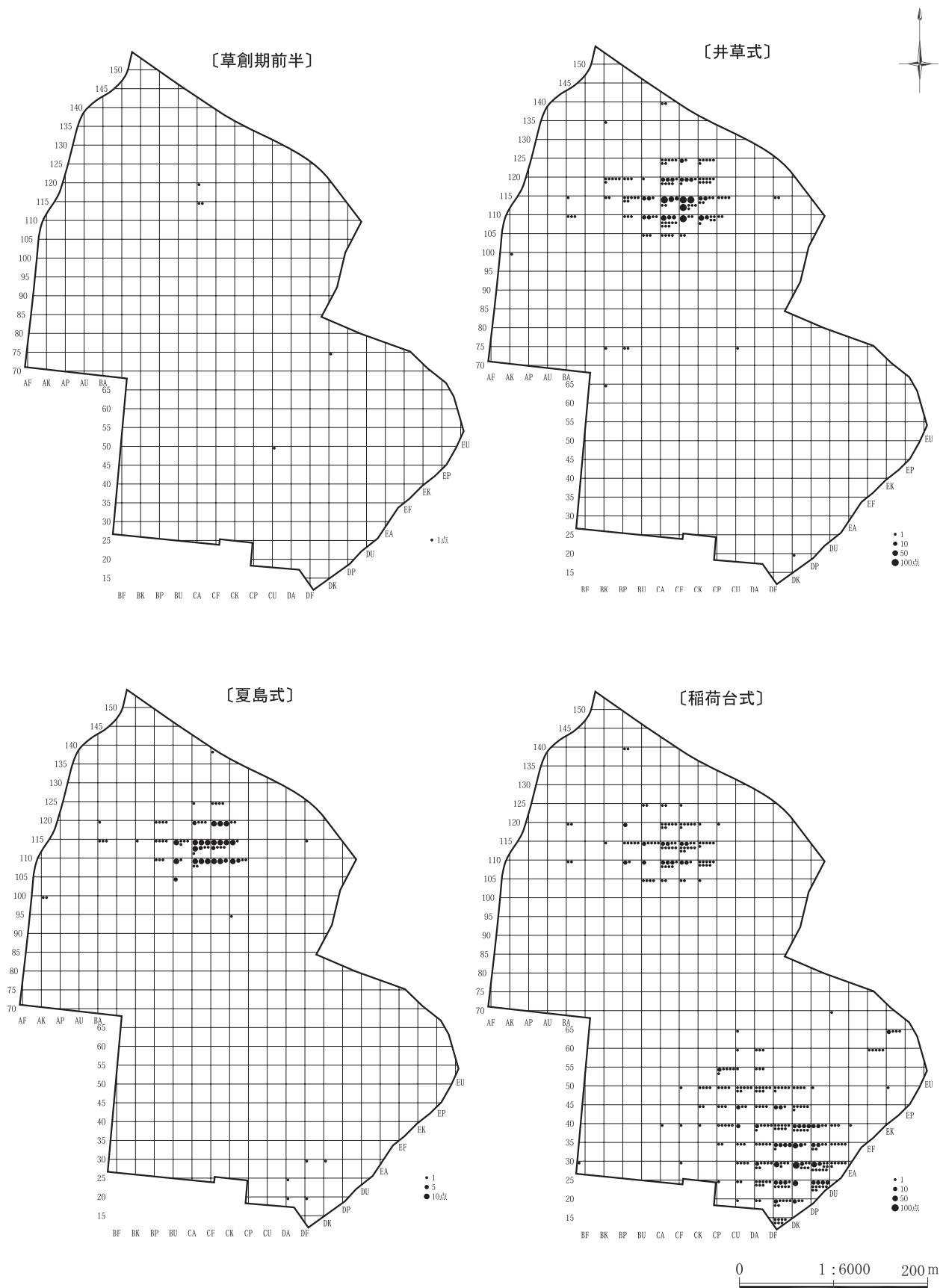
磨石類・石皿等の「使用痕系列」の石器には、粗粒輝石安山岩が86%・65%と多用されており、基本的に当遺跡の近隣河床に産出する石材を調達するという点で、「打製系列」の石材選択とは大きな差異がある。

「複合技術系列」の中で「機能系列」に分類される磨製石斧では、凝灰岩が42%を占め、他に変玄武岩13%や黒色頁岩10%、変質蛇紋岩8%などが主なものである。また、「非機能系列」の多孔石は、「使用痕系列」と同様の粗粒輝石安山岩が100%を占めている。

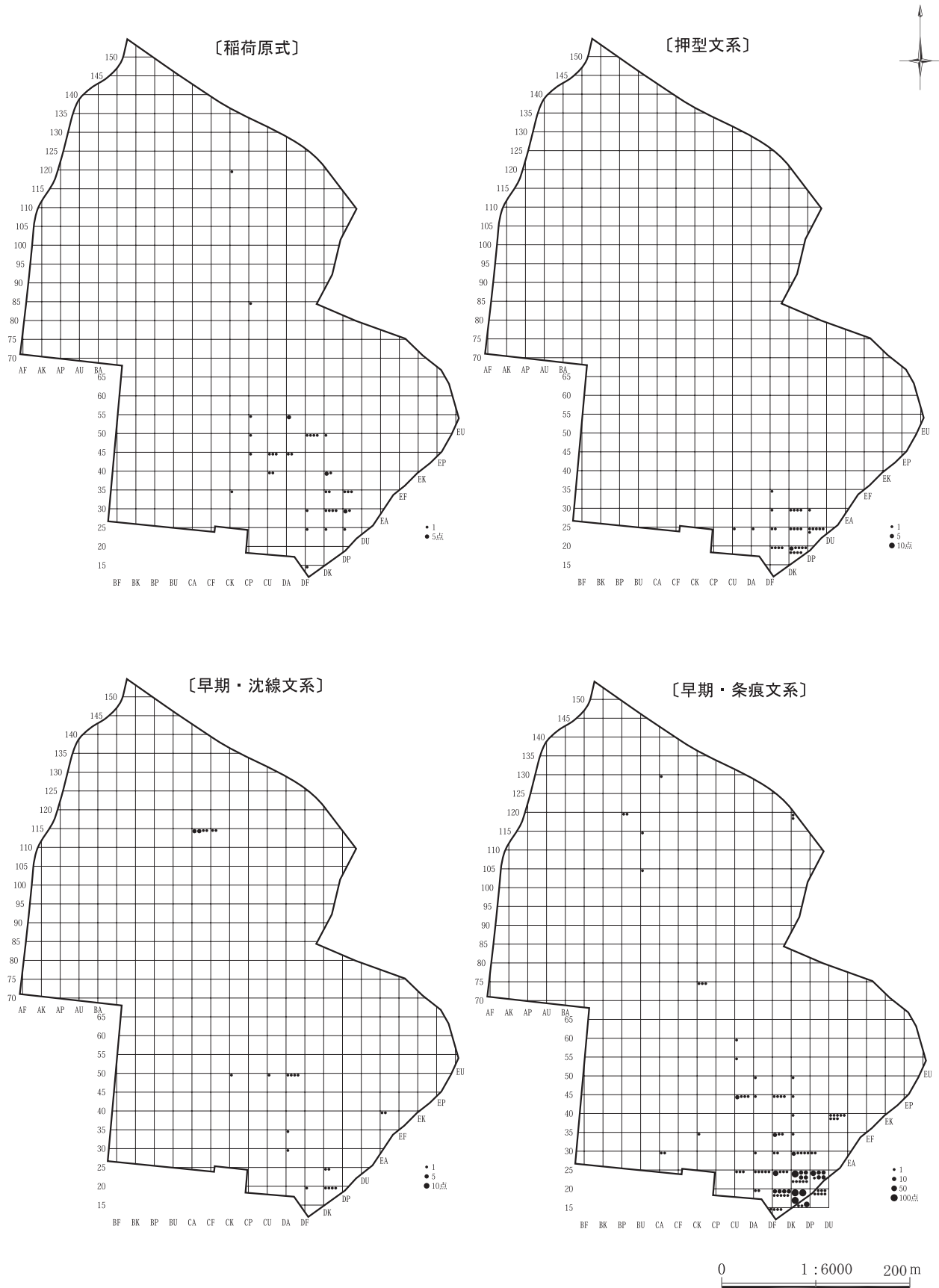
各器種の分布状況は、573～577頁のドットマップに図示してあるが、各器種ともに先述の草創期後半の稲荷台式や前期の諸磯式などの土器分布に類似し

て、5区を中心に1区にも分散する傾向が認められるが、各土器型式との対応関係は判然としない。しかし、石鏃の場合、形態分類単位にその分布状況を見ると、抉りの浅い凹基無茎鏃の2類や鋏形鏃の3・4類は5区を主体に1区に散在するが、平基無茎鏃の1類はほぼ5区に限定されており、形態差が時期差を反映していることも想定される。また、その帰属時期が判明しているスタンプ形石器や三角錐形石器については、稲荷台式土器や同期の遺構が散在する5区を中心に分布しており、基本的に遺構の周辺に廃棄された状況を窺うことができる。その他の器種については、細分類単位で見ても分布的に有意な差異は認められないが、各時期の遺構分布と重複してその範囲から大きく逸脱しないことを考慮すれば、それらの大半のものが草創期後半や前期後半の集落経営の過程で使用・廃棄された遺物と考えられる。

III 今井見切塚遺跡の調査

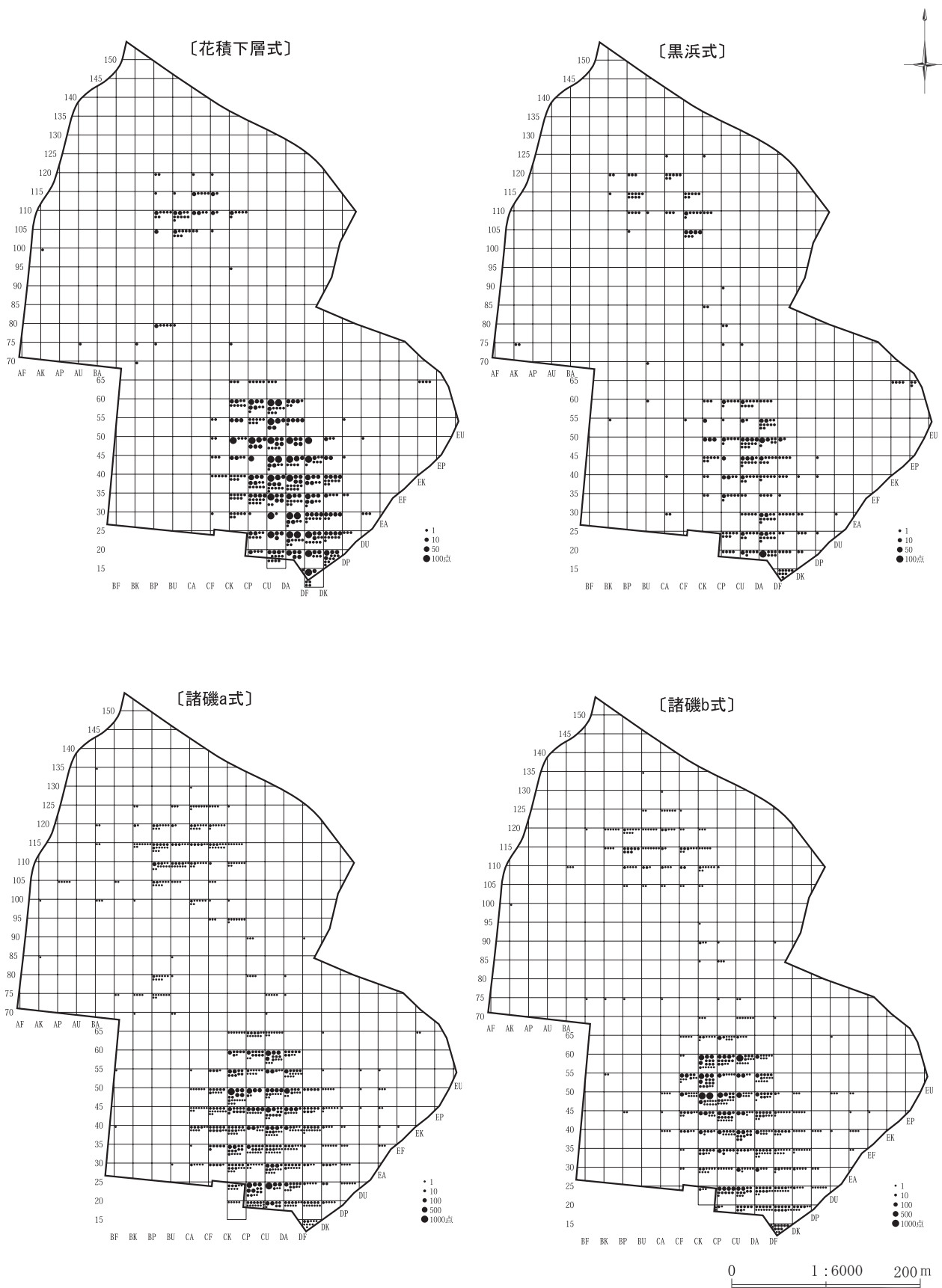


第 437 図 包含層出土土器のグリッド別分布 (1)

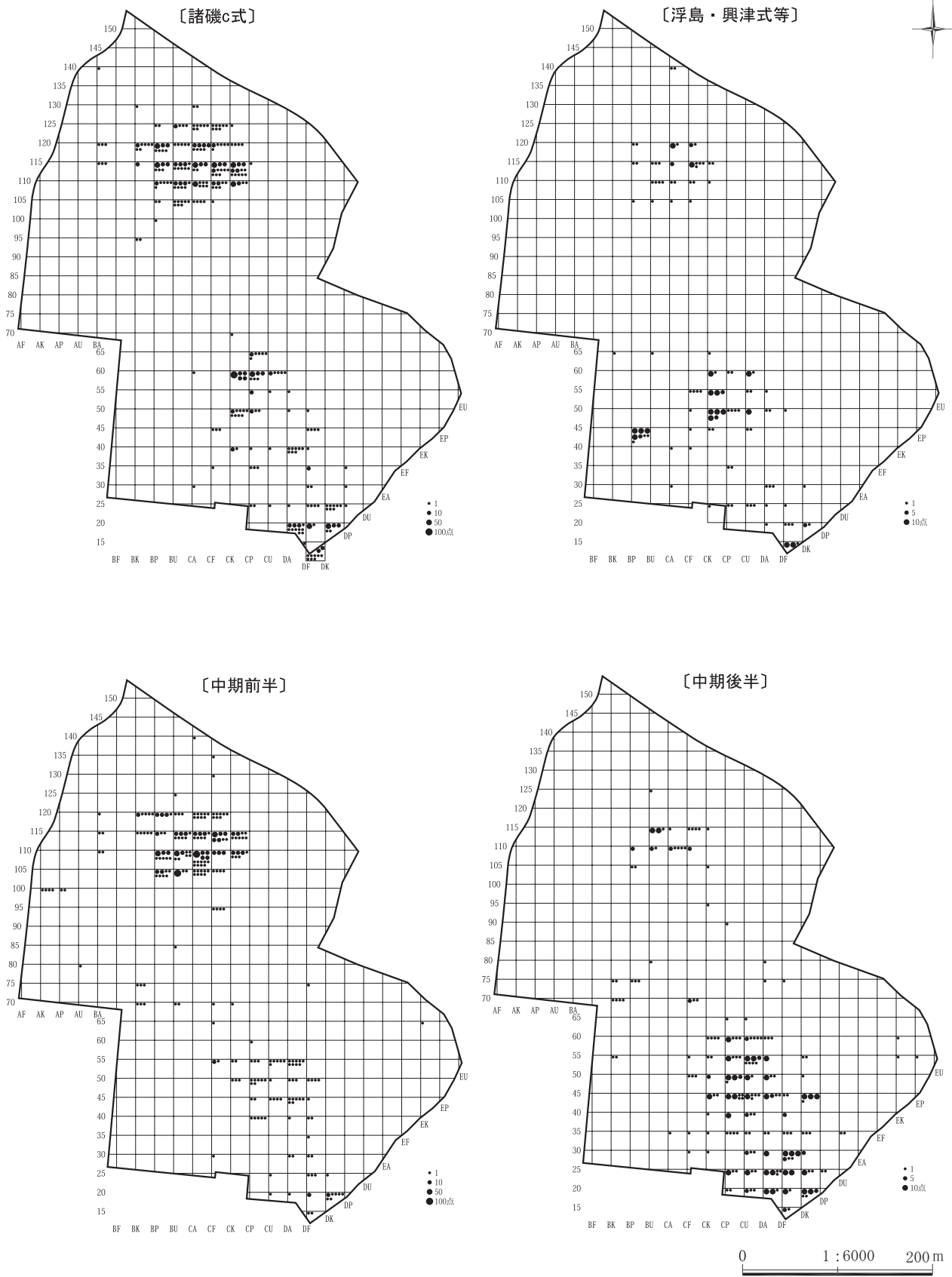


第 438 図 包含層出土土器のグリッド別分布 (2)

III 今井見切塚遺跡の調査

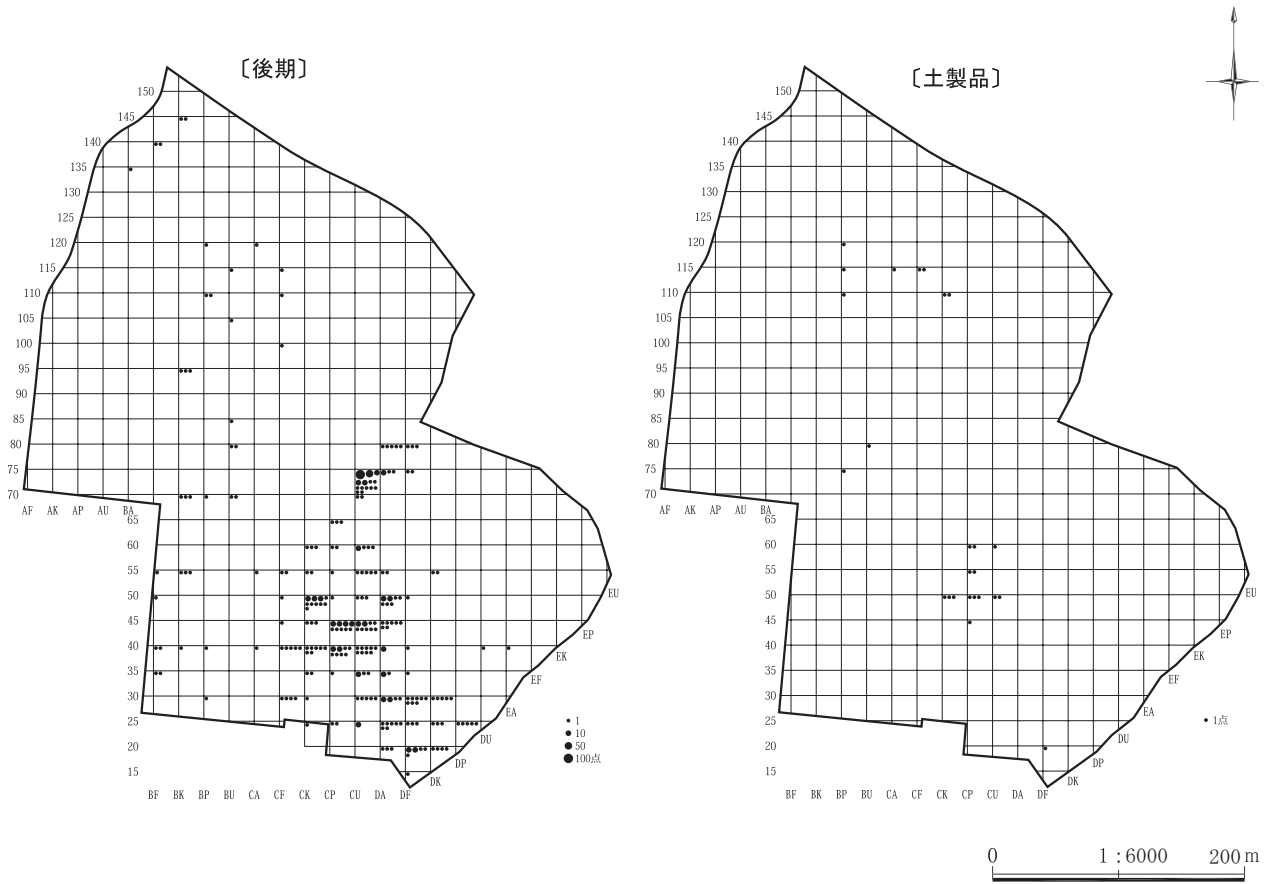


第 439 図 包含層出土土器のグリッド別分布 (3)

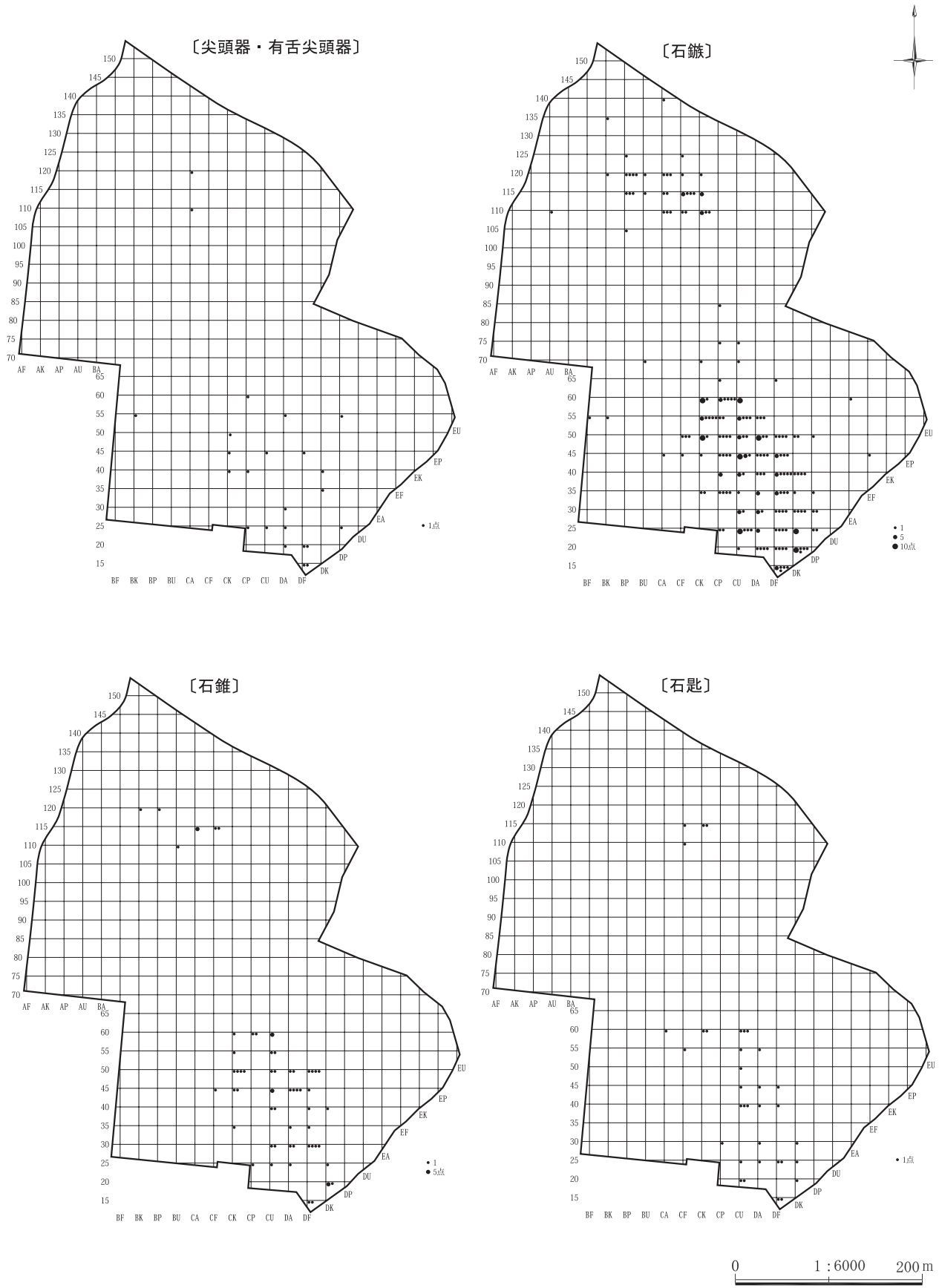


第 440 図 包含層出土土器のグリッド別分布 (4)

III 今井見切塚遺跡の調査

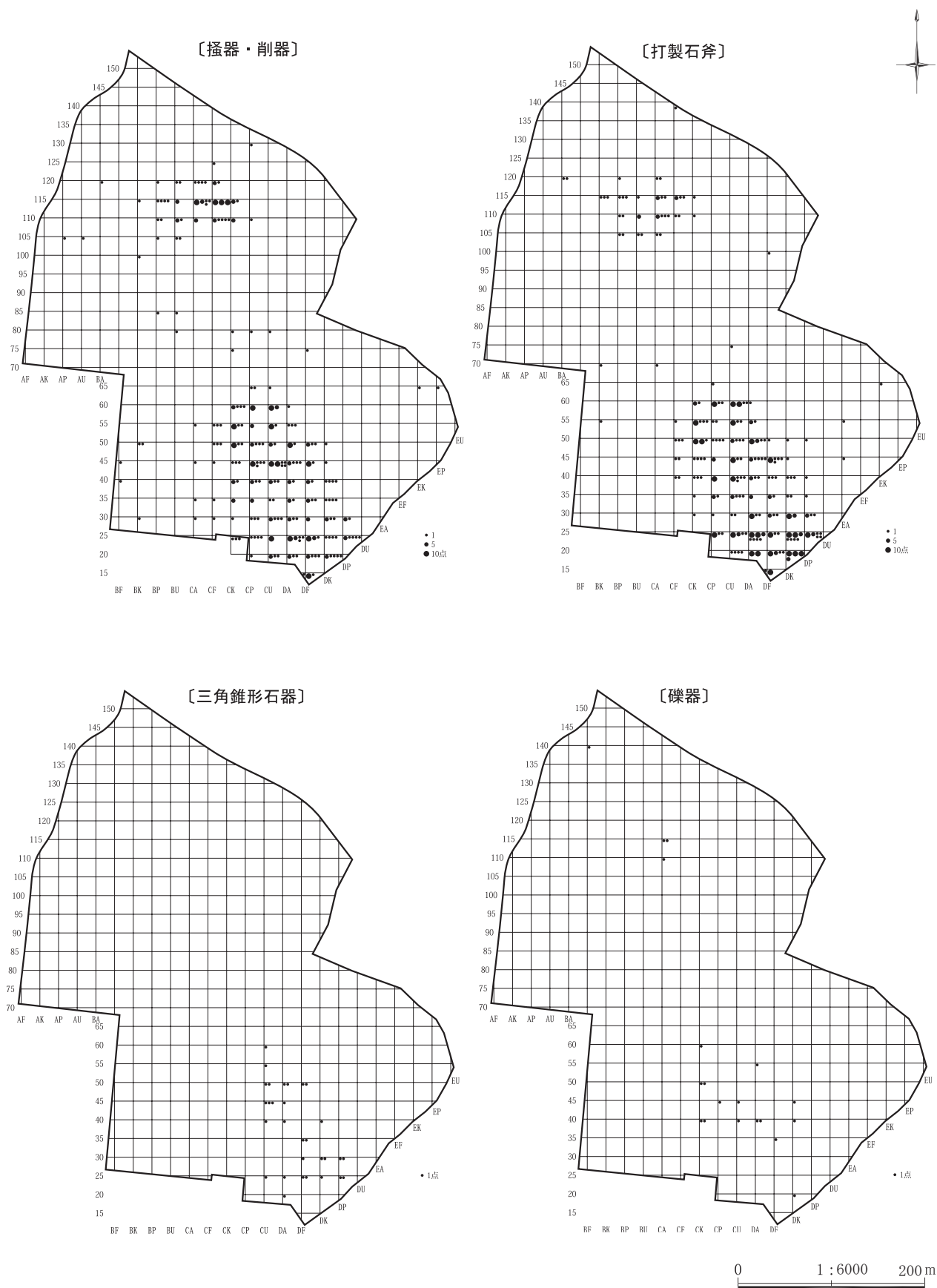


第 441 図 包含層出土土器のグリッド別分布 (5)

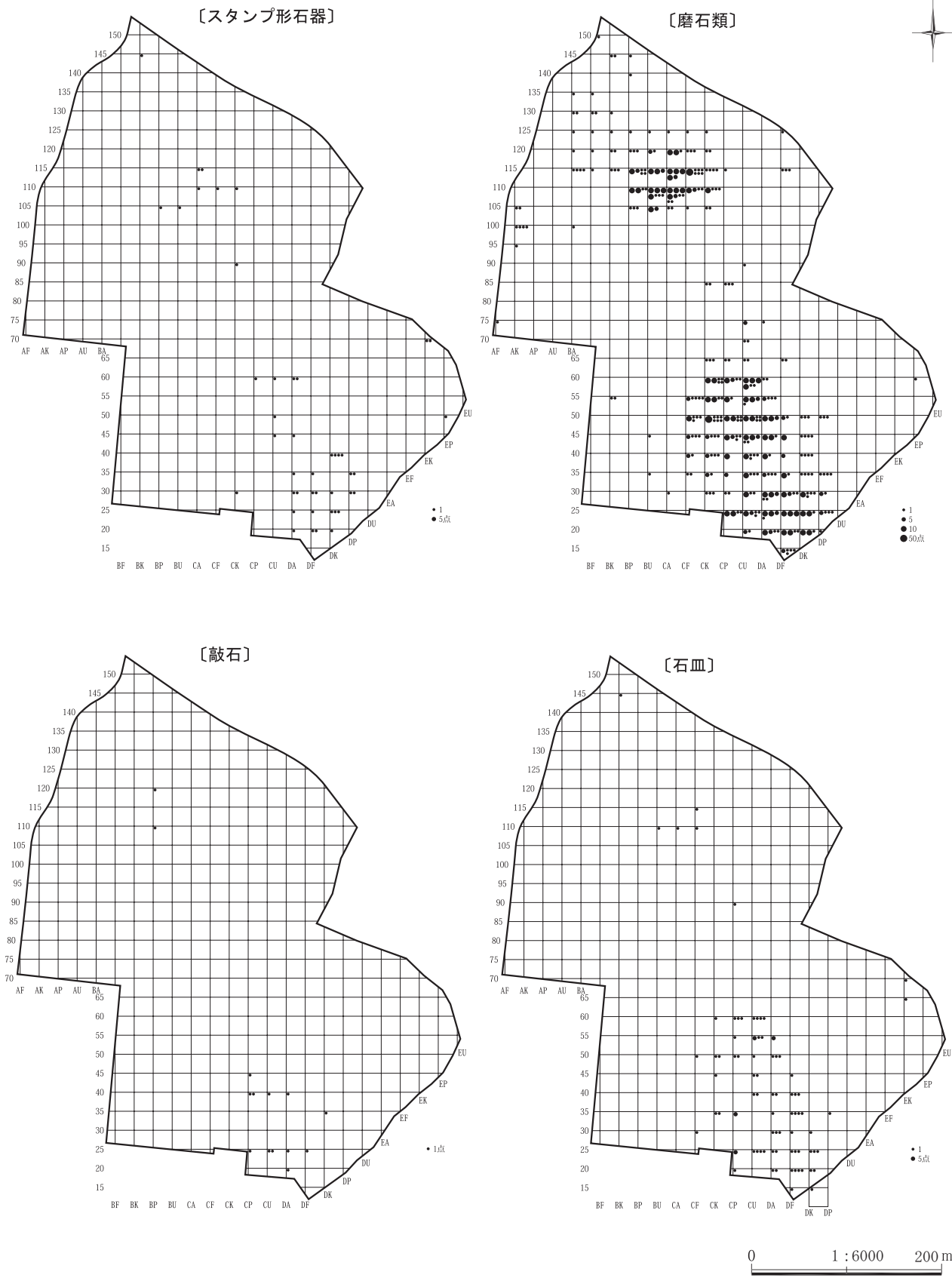


第 442 図 包含層出土石器のグリッド別分布 (1)

III 今井見切塚遺跡の調査

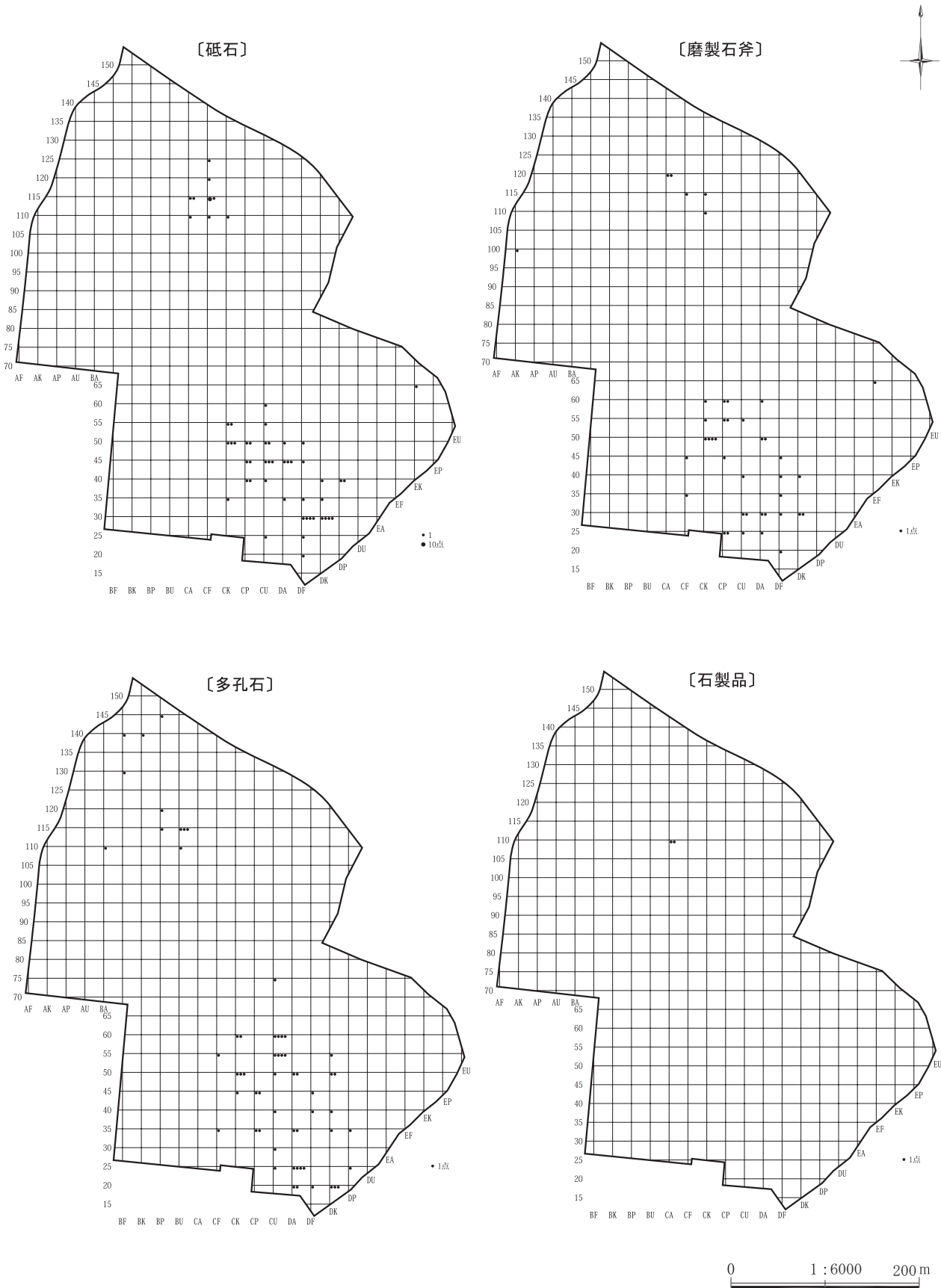


第 443 図 包含層出土石器のグリッド別分布 (2)

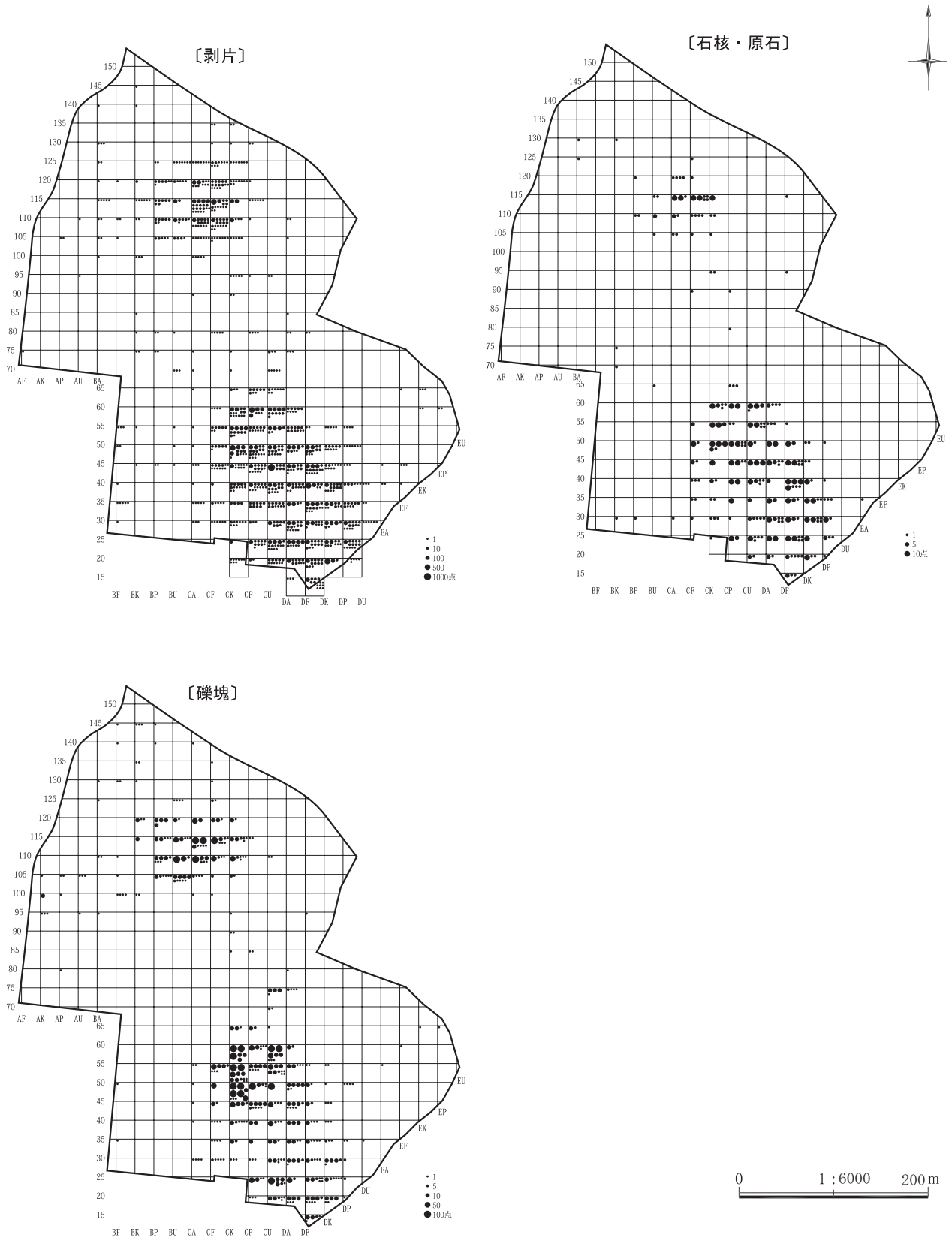


第 444 図 包含層出土石器のグリッド別分布 (3)

III 今井見切塚遺跡の調査



第 445 図 包含層出土石器のグリッド別分布 (4)



第 446 図 包含層出土石器のグリッド別分布 (5)

(2) 出土土器の内容

A. 草創期前半の土器

a. 隆起線文土器 (第 463 図 20・21)

総数 7 点が存在する。細い隆帯を貼付して、横位の直線状や波状のモチーフを描く。表面は篋状工具により、撫で整形されている。胎土は A タイプ。

B. 草創期後半の土器

a. 井草式 (第 447 ~ 451 図 1 ~ 205、227 ~ 230)

総数 210 点を検出し、I 式が 205 点 (第 447 ~ 451 図 1 ~ 45・47 ~ 205)、II 式が 5 点 (第 448・452 図 46・227 ~ 230)、判別不能な体部破片 780 点がある。I 式では、体・底部破片の 3 類を除いて、口縁部に縄文や撚糸文を回転施文する 2 類 (7 ~ 45・47 ~ 51) が主体を占め、原体の側面圧痕を施す 1 類 (1 ~ 6・52・53) は僅少である。縄文は、2 種類の単節原体を用いて口唇上面や口縁部に施文され、口縁部下位では斜方向回転により条が横走するものもある。原体の種類は、単節の RL が最も多く全体の 72% を占めるのに対して、LR は 6% に過ぎない。撚糸文も 10% と僅少であるが、R 縄を主体としており、単節とは 1 段時の基本撚りが異なる原体を使用している。器形は、口縁端部が大きく外反・肥厚して、折り返し状を呈するもの (14 ~ 16・18 ~ 20) も認められる。胎土は、A タイプが 72% と主体を占め、B タイプの 22% の他に結晶片岩礫や雲母粒を含む D・E タイプも僅かながら存在する。尚、第 447 ~ 449 図 3・4、9・11、16・19、52・53、57・58、90・91 などは、各々同一個体である。

II 式は、数的に僅少なために全体的な様相までは把握できないが、2 種類の単節原体を口唇部や口縁部に回転施文する 2 類が 1 点 (46) 存在する。また、地文を施さない無文の 4 類 (227 ~ 230) も認められ、2 類と同様に口縁端部の外反は緩く、肥厚の度合いも少ない。胎土は、いずれも A タイプである。

I・II 式ともに、器面の内側は篋状工具による丁寧な撫でや研磨が施され、指頭状の圧痕を残すもの

は僅少である。

b. 夏島式

総数 279 点が存在するが、胴部の小破片を主体としており、ここでは掲載していない。井草式に較べて、原体の施文密度がやや粗雑なものを夏島式に比定したが、口縁部破片に乏しいことから、井草式あるいは稲荷台式に分類される可能性もあり、型式として欠落することも考慮される。

c. 稲荷台式 (第 451・452 図 206 ~ 226・231 ~ 243、第 463・464 図 22 ~ 74・90)

総数 1,090 点が存在する。内容的には、口縁部文様の無文化やその外端の肥厚が特徴的であり、そのほとんどが新段階に比定される。撚糸文を施文する 2a 類 (206 ~ 209、22 ~ 31・42・43) や、無文の 4 類 (231 ~ 243、52 ~ 74・90)、胴・底部破片の 3 類 (210 ~ 226、32 ~ 41・44 ~ 51) などがある。この他に、不明とした未分類の 1,001 点が存在するが、その大半は撚糸文を施した胴部破片であり、3 類に分類されるものが主体を占める。

施文原体については、分類別の数量把握をしていないが、全体的な傾向は撚糸文の R (206 ~ 215・221、22 ~ 41) が最も多く、次いで撚糸文の L (216 ~ 220、42 ~ 47) や絡条体条痕文 (222 ~ 226)、条痕文 (48 ~ 51) の順となる。

器形は、前述したように口唇部外端の肥厚するものが主体を占めるが、2a 類と 4 類とは撚糸文施文の有無を除けば、基本的に同様の器形を呈し、口縁部が凹線状に窪むものもある。

胎土についても原体と同様に全体的な傾向としては、A タイプが 8 割弱、B タイプが 1 割強を占めており、結晶片岩や花崗岩起源の雲母を含む D・E タイプは 1 割に満たないほど僅少である。

尚、第 451 図 206・208、210・212 は、各々同一個体である。

d. 稲荷原式 (第 464 図 75 ~ 89)

総数 50 点が存在し、粗大かつ条間隔の広い撚糸文を縦位施文する 1 類 (75 ~ 81) と、無地文の 2 類 (82 ~ 89)、それに未分類の 34 点がある。a・b 類とも

に、口縁部に幅狭の横位沈線を引く75・82のような例と、やや幅広の凹線を引く76・83・84のような例がある。また、口唇部から沈線文までの無文部の幅は、2cm前後と広がっている。

原体は、節の粗大な撚糸文Rを主体にしており、同Lは僅少である。器面は、内外面ともに篋状工具により丁寧に研磨され、器肉の厚さも10mm強を測り、とやや厚手となっている。

胎土は、A・B・D・Gタイプがほぼ同程度に認められ、全体的に結晶片岩を含むDタイプの比率が高くなっている。

C. 早期の土器

a. 東山式

総数1点が存在するのみであり、図としては掲載していない。

b. 押型文土器（第465図91～100）

総数46点が存在し、全て1類の山形文で占められている。全体の文様構成を判別できる口縁部破片は少ないが、91では口縁部に1段横位施文して以下を縦位に直交施文し、口唇上面にも施文している。原体幅は30～50mm程度であるが、縦位の施文単位間に無文部が挟在するの否かは判然としない。

胎土は、Aタイプを主体とするが、結晶片岩を含むDタイプも約3割程度認められる。

c. 沈線文系土器（第453図250～261、第465図101～106）

総数46点が存在している。沈線文は、横位の鋸歯状や平行状の集合沈線が、多段に構成されるものを主体としており、細い平行沈線文（250～261、101～104）と太い平行沈線文（105・106）が認められる。両者を含めて、田戸下層式に比定される。内外の器面は、篋状工具により丁寧に研磨され、口縁部付近は横方向に、体部下半は縦方向になされている。

胎土は、Aタイプを主体にGタイプの2種類のみ限定され、結晶片岩や雲母を含むD・Eタイプは認められない。尚、第465図105・106は同一個体である。

d. 条痕文系土器（第453図262～264、第465・466図107～139）

総数844点が存在するが、ここでは鶴ヶ島台式に比定される1類1点（107）、茅山上層式以降の2a類18点（122～139）、同式並行の絡条体圧痕文の2b類5点（108・113～116）、上ノ山式並行の絡条体圧痕文の2c類9点（109～112）、茅山上層式～前期初頭の条痕文の3類3点（262～264）を掲載した。他の808点は、分類不能な胴部破片である。2a類の134～139は貝殻背圧痕文を、2b類の109・110は口唇上面と口縁部に絡条体圧痕文を施している。条痕文の施文原体は、貝殻を用いるもの（262～264、111・112・122～125・130～133）と、絡条体を用いるもの（108～110・113～121・126～129）とがほぼ拮抗している。

胎土は、繊維を含むC・Hタイプのみが認められる。尚、109・110、113・114は、各々同一個体である。

D. 前期の土器

a. 花積下層式（第453図265～302、第461・466～468図1・2・140～224）

総数4,716点が存在する。全体的には、羽状縄文を施す胴部の小破片が主体を占め、全体的な文様構成の識別できるものは少ない。口縁部に原体の側面圧痕を施す1類（265、140～161）、縦位構成の鋭角的な羽状縄文のみで構成される2類（266～272、1・2・162～176）、带状構成の羽状縄文を持つ3類（158・205～217・223）、東海系の「おせんべ土器」の影響を受けた横位隆帯や波状沈線文を持つ4類（218～222）などがある。1類では、2段縄の側面圧痕を施すもの（140～145）と、2種類の1段縄を用いるもの（146～161）が認められる。また2類では、幅3cm前後の粘土帯を貼付して肥厚させた口縁部に、縄文を横走させて文様帯を意識したもの（266、162～166）が多見される。鋭角的な羽状縄文や、縦走縄文を持つ胴部破片の273～302・177～204も、便宜的に2類に分類してあるが、1類の胴部破片も含まれていると思われる。原体は、0段多条のRLやLR縄

Ⅲ 今井見切塚遺跡の調査

文が多用され、他は極めて僅少である。

器形については、202～204の尖底部破片から見て、口縁部が若干外傾気味に開口する砲弾形状と考えられる。胎土はCタイプを基本としている。

尚、218～222は同一個体である。

b. 関山式(第468図225～227)

総数9点が存在するのみである。瘤状貼付文を持つ1類(225)と、文様構成の不明な胴部破片の2類(226・227)が認められる。縄文は、附加条の結束羽状縄文(227)や、非結束の羽状縄文(225・226)が見られる。胎土は、Cタイプである。

c. 黒浜式(第453・454図303～315、第468図228～242)

総数742点が存在する。古段階に比定される1類は存在せず、新段階の2類(303～315、228～230・232・233・236)や3類(231・234・235・237～242)のみが認められる。2類では、平行沈線文のa種(308・309)や、コンパス文のb種(230)、平行爪形文で米字文を構成するc種(303～315、228・229・232・236)、円形竹管文列を施すd種(233)などがある。3類は縄文地文を施すもので、地文のみのa種(231・234・235)と、構成不明の胴部破片のb種(237～242)がある。各類ともに、縄文は菱形形状に構成されるものが目立つ。

原体は単節RL・LRを主にして、附加条第1種(228・232・233)も相当量が認められる。胎土は、Cタイプを主体としているが、花崗岩起源の雲母を含むJタイプも僅かに存在する。尚、314・315、239・242、244・255は、各々同一個体である。

d. 諸磯a式(第454・455図316～373、第461図3・第468～472図243～348)

総計13,601点が存在する。文様構成では、米字文の1類(第468・469図243～255)、肋骨文の2a類(第454図323～327・337、第469図256～270)、平行波状文の2b類(第454図316～322、第469・470図271～284)、縦位円形竹管文の2c類(第454図328～333、第470図285～294)、爪形文や平行沈線文による区画文の2d類(第454図334～336、

第461図3・第470・471図295～305・317)、木葉文の3類(第454図338～340、第471図306～316・318～329)、全面縄文の4a類(第454図341～347、第471図330～334)、北白川下層式系の5類(第472図345～348)などがある。総数の7割弱を、文様構成不明の縄文地文(第454・455図348～373、第471・472図335～344)が占めているが、他の有文土器の数量的な動向は、新段階の2d類や3類が主体的であり、古段階の1類は少数である。

原体は、単節斜縄文RLが約6割強を占め、1段多条や附加条第1種、直前段合撚りなども僅かに存在する。また、北白川下層式系の5類は、貝殻条痕文を施している。

胎土は、Aタイプを主体としているが、結晶片岩や雲母を含むD・Eタイプや、繊維を含有するC・Jタイプなども僅かに認められる。先の文様別分類と胎土との相関関係は、Dタイプに2a・2d類が、Eタイプに4a類が対応する状況にあるが、サンプル数が少ないこともあり断定できない。

尚、第454図316・318、第469図250・251、254・255などは、各々同一個体である。

e. 諸磯b式(第455・456図374～396、第461図4～12・第472～476図349～451)

総数12,437点が存在する。古段階のb1式に比定される1類と、新段階のb2～b3式の2・3類に2大別される。b1式段階では、平行沈線や爪形文により変形木葉文を描く1a類(第455図374、第461図4・5・第472～474図349～350・353・357～359・363・365・370・376～384)、横位多段の波状文の1b類(第473図374・375)、蕨手状渦巻文の1c類(第455図376、第472・473・476図354～356・360～362・364・373・427)、格子目文や肋骨文系の1d類(第461図7・第472・473・476図351・352・366～369・372・428)、区画文のみの1e類(第455図375)などが認められる。b2～b3式段階では、浮線文を用いた変形木葉文の2a類(第474図386・394・395)、渦巻文の2b類(第455図377～383、第461図9・10・第474・475図385・390・391・402～

405・407～409・412～422)、区画文や円形竹管文と組成する2c類(第474図387～389・392・393・400・401)、口縁部に獣面把手や隆帯渦巻文を付す2d類(第474・475図396～399・406)、退化した獣面把手の付く2e類(第475図410・411)、圧縮された横位多段平行状文の2f類(第475図418・423)、背割れ結節沈線文の2h類(第475図424～426)などが認められる。また、平行沈線文を用いた一群には、渦巻文の3a類(第455図388・389、第461図11・12、第476図429～435・437・440～443)、鋸歯状文の3b類(第461図8・第476図436)、横位多段平行状文の3c類(第455図384～387、第476図438・439)などがある。この他に、縄文地文のみで口縁部が外傾する深鉢の4a類(第456図390、第476図444)も認められる。浅鉢は、無文の4c類(第461図6・第476図449～451)の他に、前述の変形木葉文を施す1a類(第473・474図377・381～384)の例もある。

第456図391～396や第476図445～448などの文様構成が不明な9,000点弱の縄文地文土器については、便宜的に4類に分類したが、4a類のような粗製的な深鉢だけでなく、各類の胴部破片も多数混在していると考えられる。

原体については、諸磯a式と同様に単節斜縄文RLが全体の8割弱を占め、次いで同LRが2割弱を占めている。他には、附加条第1種や無節などが僅かに認められるのみで、バラエティに乏しく単節RLを嗜好する状況が顕著である。

胎土は、主体的なAタイプとそれに類似するBタイプで全体の9割以上を占めるが、それらとは異質な結晶片岩・雲母を含むD・Eタイプも1割弱存在している。先の文様別分類と胎土との相関性については、サンプル数が少ないこともあり断定できないが、Dタイプには3a類が、Eタイプには1a類や2a・2b類が対応している。

尚、第455図380～383、第473～475図369・372、378・380、381～383、388・389・393、390・391、406・407、424～426は、各々同一個体である。

f. 諸磯c式(第456・457図397～479、第462図13・第477図452～494)

総数1,484点が存在する。数量的には、平行沈線文を主体として貼付文に乏しい3類(第456・457図410・412・413・425～449・451～457、第462図13・第477図456・462～470)が1,000点と最も多く、次いで口縁部や胴部に耳状・ボタン状・棒状の貼付文を施す1類(第456・457図397～409・411・414～423・450・458～460、第477図452～455・457～461)が300点、結節浮線文を施す2類(第456図424、第477図471～490)が88点、口唇部に貼付文や刻目を持つ全面縄文施文の4b・4c類(第457図461～468)が81点、肉彫的な爪形刺突文の4e類(第457図470～479、第477図491～494)が14点、無文の4d類(第457図469)が1点という順になる。ただし、小破片の場合、1類と3類とは明確に区別することが難しく、3類の中に1類の破片が相当数含まれている可能性が高い。これと同様に、1b1類と4a・4c類にも混在関係がある。2b類の結節浮線文(第457図482～490)は、左右対称の渦巻状のモチーフが描出されるものであろう。また、4e類の爪形刺突文は、興津式に類似した肉彫的なものであり、同式の影響が窺える。

器形については、1類の中で口縁部に大きな耳状貼付文を持つa1種は、口縁部が強く内湾し、胴部上位で著しく屈曲するものが多い。また、1b類や3類・4類は、口縁部が外反して内湾や屈曲の少ないものが主体的である。

縄文原体は、単節斜縄文RLが主体を占め、無節は僅少である。また胎土は、Aタイプを主体にしてBタイプが僅かに認められ、その他の結晶片岩や雲母を含有するD・Eタイプは皆無である。尚、第477図475・476・478・479、485・486は、各々同一個体である。

g. 浮島・興津式(第457図480～505、第477図498～517)

総数236点が存在する。幅広い爪形状のロッキング文を施す1類(第477・478図501～507)、鋸歯

III 今井見切塚遺跡の調査

状のロッキング文を施す2類(第457図493～505、第479図508～517)、段帯状の口縁部に爪起こし状の刻目文を施す4類(第477図498～500)、平行沈線間に梯子状の貝殻腹縁文を施す5類(第457図480～492)などがある。1類・4類は浮島式系、5類は興津式系、2類は両式系の要素を持っている。数量的には、2類の存在が目立つ。

大半が小破片であるために、全体的な器形は不明だが、口縁部が外反あるいは外傾する深鉢が主体を占めている。また、胎土は諸磯各式と同様にAタイプを主体とするが、結晶片岩や雲母を含有するD・Eタイプは皆無である。

尚、第457図480～483、490・491、502～505、第477・478図498～499、508・509、510・511は、各々同一個体である。

h. 十三菩提式(第458図506～515、第477図497)

総数33点が存在する。浮線文を貼付する1類(506)、集合沈線文を施す2類(508、497)、印刻文を伴う集合沈線文を施す3類(508～511)、印刻文を伴う集合結節浮線文を施す4類(513)、縄文を施す6類(514・515)などがある。6類の縄文は、単節RLを横位に施文している。

胎土はAタイプが主体的であるが、花崗岩起源の雲母粒を含むEタイプの存在が特徴的である。尚、508～509は同一個体である。

i. 大木式系(第458図512・516～525、第477図495・496)

総数52点が存在する。ここでは、横位の波状隆線文を施す大木5式系2点(第477図495・496)、胴部から底部にかけて結束縄文を縦位に施文する大木6式系11点(第458図512・516～525)を掲載した。大木5式系のもは、諸磯c式に波状隆線文のモチーフを採用しているものである。大木6式系は、無節Lの結節縄文を縦位施文するもの(512)と、結束第1種RL+LRを縦位施文するもの(516～525)とが認められる。

胎土は、ともにAタイプであり、結晶片岩や雲母

粒を含有するD・Eタイプは存在しない。尚、516・518、521～523は、各々同一個体である。

E. 中期の土器

a. 前半期(第458・459図526～558・562・563、第478図518～523・525～529)

総数979点が存在する。ここに掲載したものは、五領ヶ台Ⅱ式13点(第458図526～533、第478図518・526～529)、阿玉台Ⅰb式1点(第459図565)、同Ⅱ式2点(第458図538・539)、同Ⅲ式5点(第458図534～537、第478図519)、藤内式13点(第458・459図540～552)、井戸尻式8点(第459図553～558、第478図520・523)、大木8a式系5点(第459図562・563、第478図521・522・525)である。他の932点については、胴部の小破片を主体としており、未分類である。

縄文原体は、五領ヶ台Ⅱ式では開端部を自縄自縛した結節縄文を施すもの(第478図526～529)があり、藤内式では単節斜縄文が主体的であるが、井戸尻式や、大木8a式系では単節の他に撚糸文が認められる。

胎土は、井戸尻式や大木8a式ではAタイプを主体とするが、五領ヶ台Ⅱ式や阿玉台Ⅱ・Ⅲ式では雲母粒を含有するEタイプが目立ち、藤内式ではこれに結晶片岩を含有するDタイプが加わる。尚、第478図521・522は同一個体である。

b. 後半期(第459・460図559～561・564・567・571・592、第462図14～17・第478図524・530～539)

総数660点が存在するが、ここでは加曽利E1式(第459図559、第462図14～17・第478図524)、同E2式3点(第478図530～532)、同E3式8点(第459図561・564・566・567、第478図533～535・538)、同E4式4点(第459図560・571、第478図536・537)、曾利式系2点(第460図592、第478図539)を掲載した。他の胴部破片を中心とした637点については、未分類である。

縄文原体は、E1式～E3式にかけては単節RLを主

体にして僅かに撚糸文Lを交えるが、E4式では単節RLと同LRとが併存している。胎土については、いずれもAタイプを主体とするが、E3式では結晶片岩を含有するDタイプが僅かに存在する。

F. 後期の土器

a. 初頭期（第459図572～579、第462図18・第478・479図540～550）

総数176点が存在する。称名寺式I式6点（第478図540～545）、同II式14点（第459図572～579、第462図18・第478・479図540～550）の他に、胴部小破片を中心とした未分類の637点がある。

縄文原体は、いずれも繊細な単節LRを用いている。また、胎土はAタイプである。

b. 前半期（第459・460図568～570・581～591、第462図19・第479図551～566）

総数572点が存在する。堀之内1式13点（第459・460図568～570・581・582、第479図551～553・564・565）、同2式19点（第460図582～587、第462図19・第479図554～563・566）、加曾利B式6点（第460図588～591）の他は、胴部小破片を中心とした未分類の534点である。堀之内1式の縄文を施すもの（第459・460図568～570・581・582、第479図551・552）は、「茂沢類型」に比定されるものが主体を占める。

縄文原体は、各型式ともに単節LRを主体として同

RLや無節Lが僅かに併存する。胎土は、前半期の称名寺式と同様に、Aタイプによって占められているが、堀之内1式や加曾利B式では、結晶片岩や雲母を含有するD・Eタイプが僅かながら混在する。尚、第479図562・563は同一個体である。

G. 晩期の土器

総数3点が存在するが、いずれも小破片のために掲載していない。また、細別型式についても不明である。

H. 時期不明の土器

総数21,442点が存在する。目立った特徴を持たない胴部の小破片を主体としており、明確に型式分類することが困難な一群である。縄文を施す1類150点、無文の2類2,622点、細片の3類18,603点などに分類されるが、内容的にはそのほとんどが草創期後半の撚糸文土器群や前期の諸磯式に比定される破片類と考えられる。

I. 土製品

a. 土製円盤（第452図244～249、第479図567～576）

土器の小破片を素材として、その周縁部を研磨することにより円盤状に整形したものであり、総数20点が存在する。素材となる破片の土器型式と点数は、

出土土器の型式別数量一覧

型式	草創期前半		草創期後半							早期				前期
	隆起線文	不明	井草I	井草II	井草	夏島	稻荷台	稻荷原	不明	東山	押型	沈線	条痕	花積下層
合計	2	5	205	5	780	279	1090	50	1	1	46	46	844	4716

型式	前期										中期前半			
	関山	有尾	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	浮・興	十三菩提	大木系	東海系	不明	五領ヶ台II	阿玉台Ib	阿玉台II
合計	9	2	792	13601	12437	1484	236	33	52	1	2	13	1	3

型式	中期前半					中期後半						後期			
	阿玉台III	藤内	井戸尻	大木8a	不明	加曾利E1	加曾利E2	加曾利E3	加曾利E4	曾利	不明	称名寺I	称名寺II	称名寺	堀之内I
合計	4	13	8	5	932	6	3	8	4	2	637	6	14	156	13

型式	後期			晩期	時期不詳	土製品	総計
	堀之内2	加曾利B	不明				
合計	19	6	534	3	21442	26	60577

III 今井見切塚遺跡の調査

草創期後半の撚糸文土器 6 点 (244 ~ 249)、前期の諸磯 a 式 9 点 (567・569 ~ 576)、中期前半 1 点 (568) などが認められる。他時期の土器片を転用する可能性も皆無ではないが、基本的に各土器型式がその使用時期を示すものと考えられる。各土製円盤の大きさは、草創期後半のものが 4 ~ 8 cm であるのに対し

て、前・中期のものは 2 ~ 3 cm 前後と小振りである。

胎土は、各型式の土製円盤ともに A タイプである。

b. 不明土製品

土器製作の過程で産出したと推定される、粘土塊 6 点が存在するが、ここでは掲載していない。

各種土器の分類別点数(1)

草創期			井草 I 式				井草 II 式			夏島式		稲荷台式														
分類	a	不明	分類	1	2	3	不明	分類	2	4	分類	不明	分類	2a	3	4	不明									
合計	2	5	合計	8	44	151	2	合計	1	4	合計	279	合計	16	37	35	1001									
稲荷原式			東山式		押型文系		沈線文系		黒浜式																	
分類	1	2	不明	分類	不明	分類	1	不明	分類	1	不明	分類	1類				3類									
合計	7	9	34	合計	1	合計	10	36	合計	18	28	種別	a	b	c	d	不明									
有尾式系			条痕文系				花積下層式				黒浜式															
分類	1類	2類	分類	1	2			3	不明	分類	1類		2類			3類		4類	不明							
合計	1	1	合計	1	a	b	c	3	808	種別	a	b	不明	a	b	不明	a	c	不明	不明	不明					
諸磯 a 式			諸磯 a 式																							
分類	1類				2類																					
種別	a	b	c	不明	a				b				c				d				不明					
合計	3	2	10	163	16	4	3	31	10	7	5	2	2	14	2	1	3	8	2	3	10	3462				
諸磯 b 式												諸磯 b 式														
分類	1類											2類														
種別	a			b			c			d			e	不明	a			b			c					
合計	13	11	4	6	2	24	2	21	1	2	7	1	1	2797	2	1	1	4	26	12	8					
諸磯 c 式																	諸磯 c 式									
分類	1類						2類				3類				4類											
種別	a		b		不明		a	b	不明	a	c	不明	b	c	d	e	不明									
合計	6	1	2	29	262	11	10	67	3	40	955	5	3	1	14	73										
関山式			浮島・興津式系				十三菩提式					前期大木式系														
分類	1	2	不明	分類	1	2a	4	5	不明	分類	1	2	3	4	6	不明	種別	2	4	不明						
合計	1	2	6	合計	7	23	3	13	190	合計	1	2	4	1	2	23	合計	2	11	39						
時期不詳				土製品			晩期		時期不詳																	
分類	1類	2類	3類	不明	分類	1類	3類	合計	3																	
合計	150	2623	18621	48	合計	20	6																			

各種土器の胎土別点数

胎土	型式	隆起線文	井草 I	井草 II	夏島	稲荷台	稲荷原	押型	沈線	条痕	花積	関山	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c
A		2	147	5	—	69	4	7	16	—	—	—	—	167	141	121
B		—	44	—	—	12	4	—	—	—	—	—	—	9	17	6
C		—	—	—	—	—	—	—	—	28	130	3	25	2	—	—
D		—	10	—	—	5	5	3	—	—	—	—	—	5	3	—
E		—	3	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	4	—
F		—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	3	1	—
G		—	—	—	—	—	3	—	2	—	—	—	—	—	2	—
H		—	—	—	—	—	—	—	—	8	3	—	—	—	—	—
J		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3	—	—

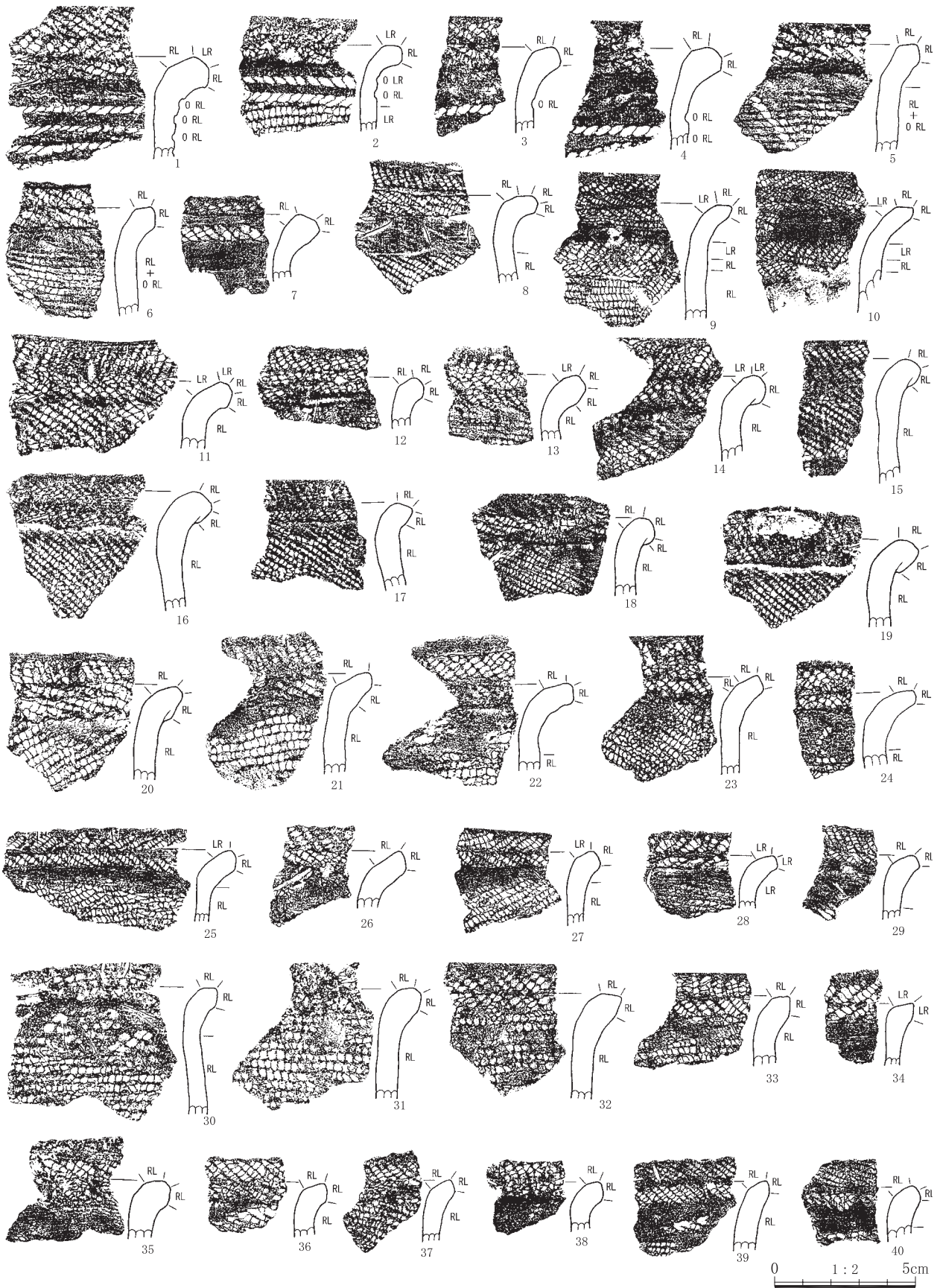
胎土	型式	浮・興	十三菩提	前期大木系	五領ヶ台II	阿玉台I b	阿玉台II	阿玉台III	籐内	井戸尻	大木8a	加曾利E1	加曾利E2	加曾利E3	加曾利E4
A		34	7	13	4	1	1	1	4	8	4	5	3	7	4
B		7	1	—	1	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—
C		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
D		—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—	1	—
E		—	2	—	4	—	1	3	3	—	—	—	—	—	—
F		—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
G		5	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—
H		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

胎土	型式	曾利系	称名寺 I	称名寺 II	堀之内1	堀之内2	加曾利B	土製円盤	胎土	型式	曾利系	称名寺 I	称名寺 II	堀之内1	堀之内2	加曾利B	土製円盤
A		2	6	14	10	17	3	16	F		—	—	—	—	—	—	—
B		—	—	—	—	—	—	—	G		—	—	—	—	—	—	—
C		—	—	—	—	—	—	—	H		—	—	—	—	—	—	—
D		—	—	—	1	—	—	—	J		—	—	—	—	—	—	—
E		—	—	—	—	—	1	—			—	—	—	—	—	—	—

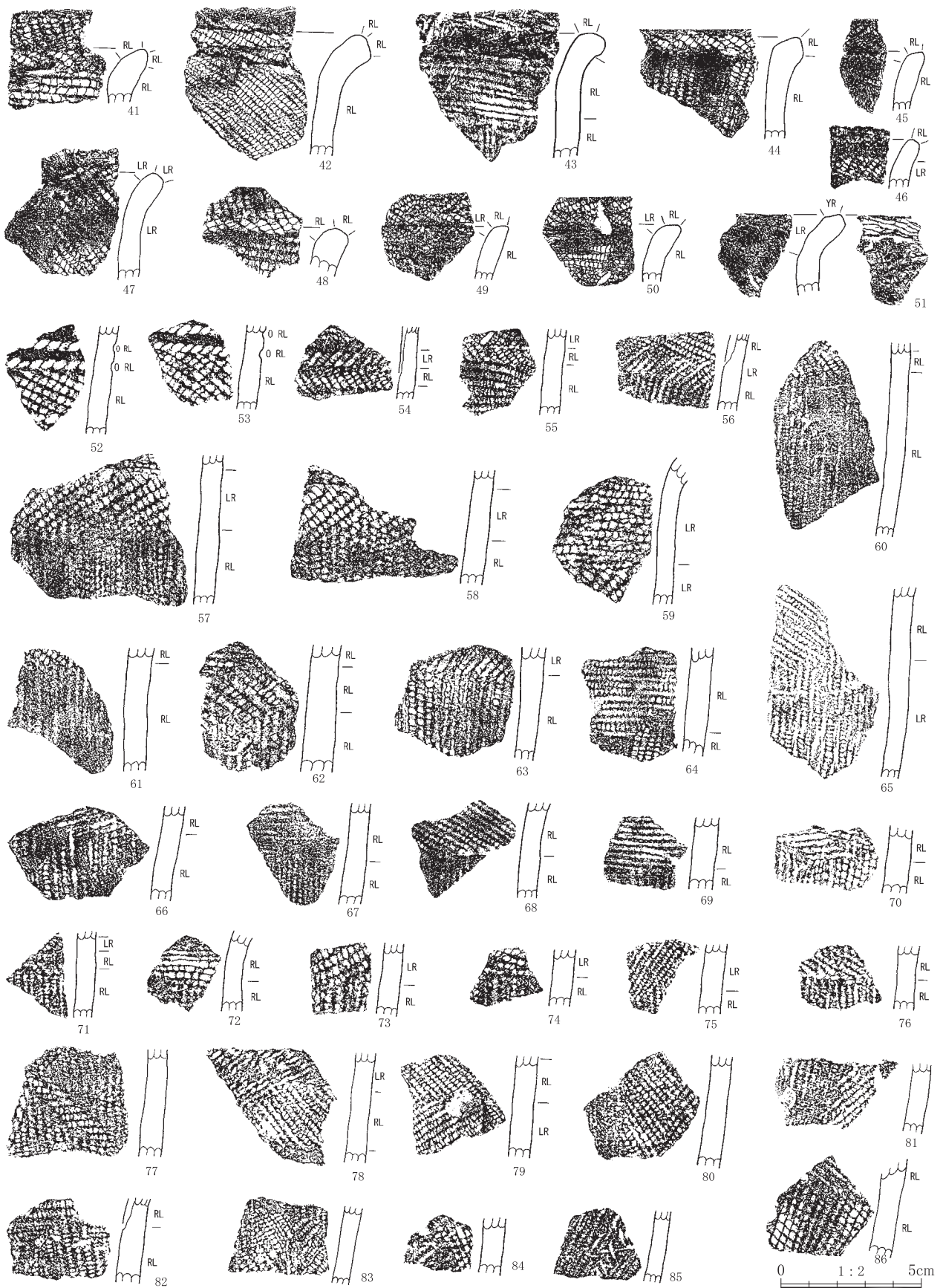
各種土器の縄文原別点数

隆起線文系		井草 I 式								井草 II 式			夏島式										
分類	18	分類	2a	2ab	2a9b	2ab・21c	2b・21c	2b	9a	9b	分類	2ab	18	分類	18								
合計	2	合計	12	22	1	2	5	143	6	14	合計	1	4	合計	1								
稲荷台式					稲荷原式				押型文系		沈線文系		条痕文系										
分類	9a	9b	18	19b	19d	分類	9b	18	分類	18	分類	18	分類	21e	21f	18	19a	19b	20b				
合計	11	32	36	5	4	合計	7	9	合計	10	合計	18	合計	5	7	1	13	4	6				
花積下層式														黒浜式									
分類	2ab	2b	4a	4ab	4c	4cd	4d	2a・21ab	4a・21ab	4a・21c	4b・21ab	4c・21ab	21ab	18	分類	2a	2ab	2b	7b	7f	7fg	7g	18
合計	2	1	55	2	33	9	1	1	9	6	1	1	5	7	合計	5	2	8	1	1	3	2	6
諸磯a式												諸磯b式											
分類	1b	2a	2ab	2b	2b6a	5a	5b	7a	7b	7f	14c	17	18	20a	分類	1a	2a	2b	7b	17	18		
合計	1	14	3	98	1	2	12	2	5	2	1	5	34	4	合計	2	19	83	3	10	36		
諸磯c式			関山式				浮島・興津式系			十三菩提式		大木式系											
分類	1a	2b	18	分類	2b4d	11c	12a	分類	18	分類	2b	18	分類	4c	11a	18							
合計	1	10	116	合計	1	1	1	合計	46	合計	2	8	合計	1	10	2							
五領ヶ台 II 式				阿玉台 I b 式		阿玉台 II 式		阿玉台 III 式		藤内式													
分類	1b	2b	18	10ab	10b	分類	2b	分類	18	分類	1b	2a	2b	18									
合計	1	1	7	2	2	合計	1	合計	3	合計	1	2	1	9									
井戸尻式				大木8a式			加曾利E1式			加曾利E2式		加曾利E3式											
分類	1a	2b	9b	18	分類	1a	9a	9b	分類	2b	4d	9a	9b	分類	2b	9a	18						
合計	2	1	1	4	合計	2	2	1	合計	1	1	1	3	合計	3	6	1	1					
加曾利E4式		曾利式系		称名寺 I 式		称名寺 II 式		堀之内1式															
分類	2a	2b	分類	18	分類	2a	2b	分類	2a	18	分類	1a	2a	2b	18								
合計	2	2	合計	2	合計	5	1	合計	1	13	合計	1	8	1	3								
堀之内2式					加曾利B式		土製円盤																
分類	1a	2a	2b	17	18	分類	2a	分類	1a	2a	2b	9b	17										
合計	3	6	1	1	7	合計	4	合計	1	5	7	2	1										

III 今井見切塚遺跡の調査

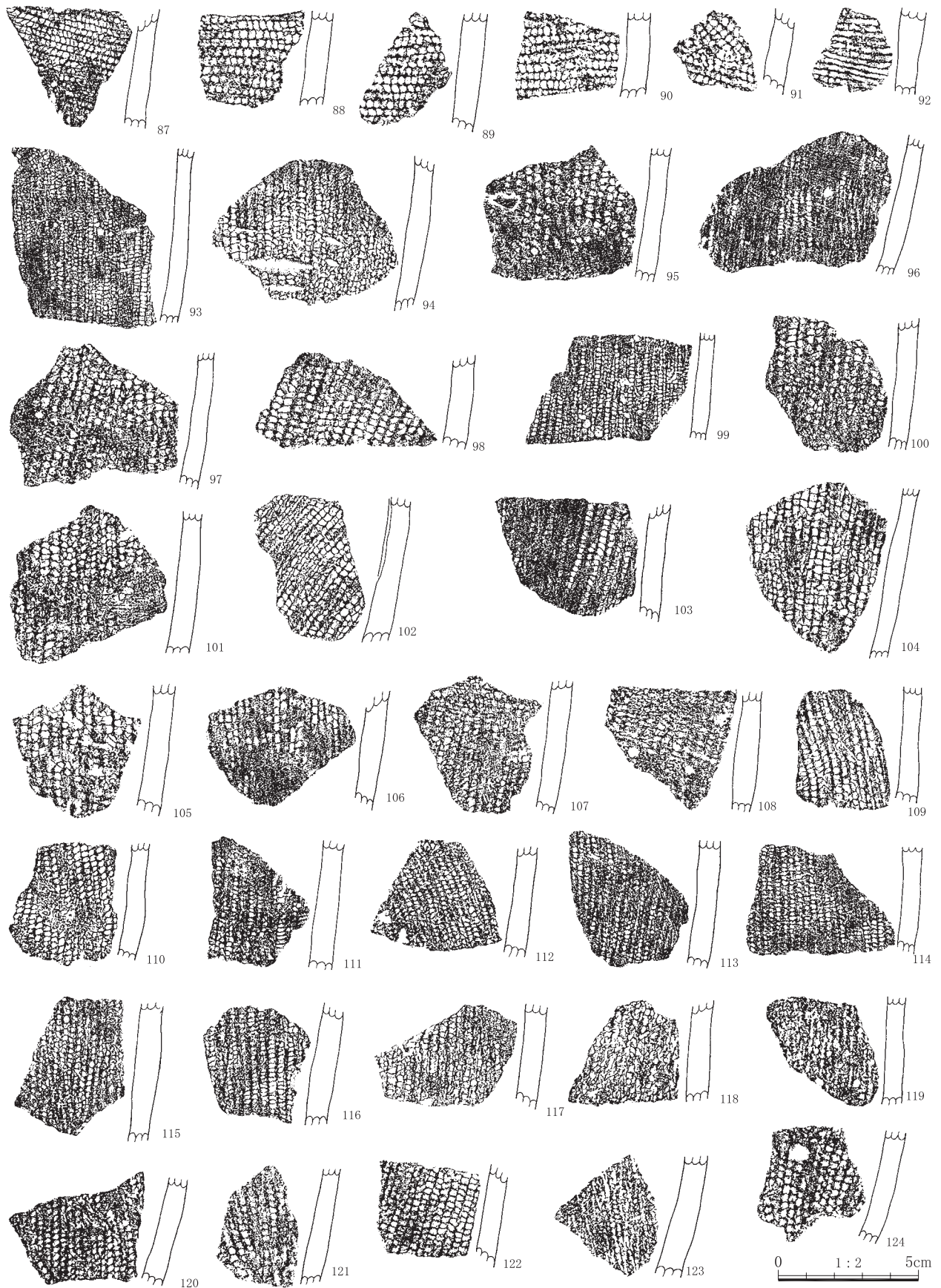


第 447 図 1 区包含層の出土の土器 (1)

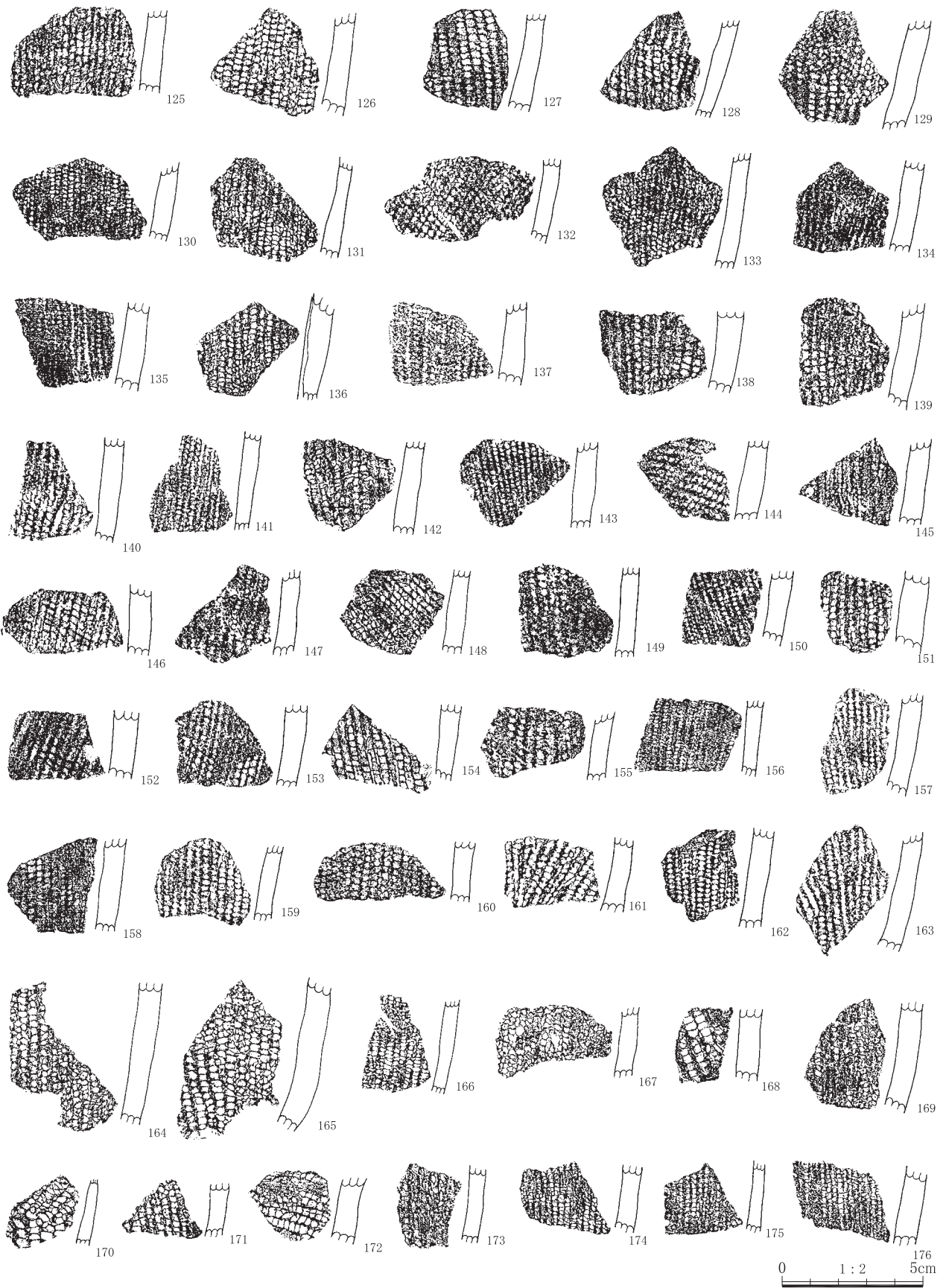


第 448 図 1 区包含層の出土の土器 (2)

III 今井見切塚遺跡の調査

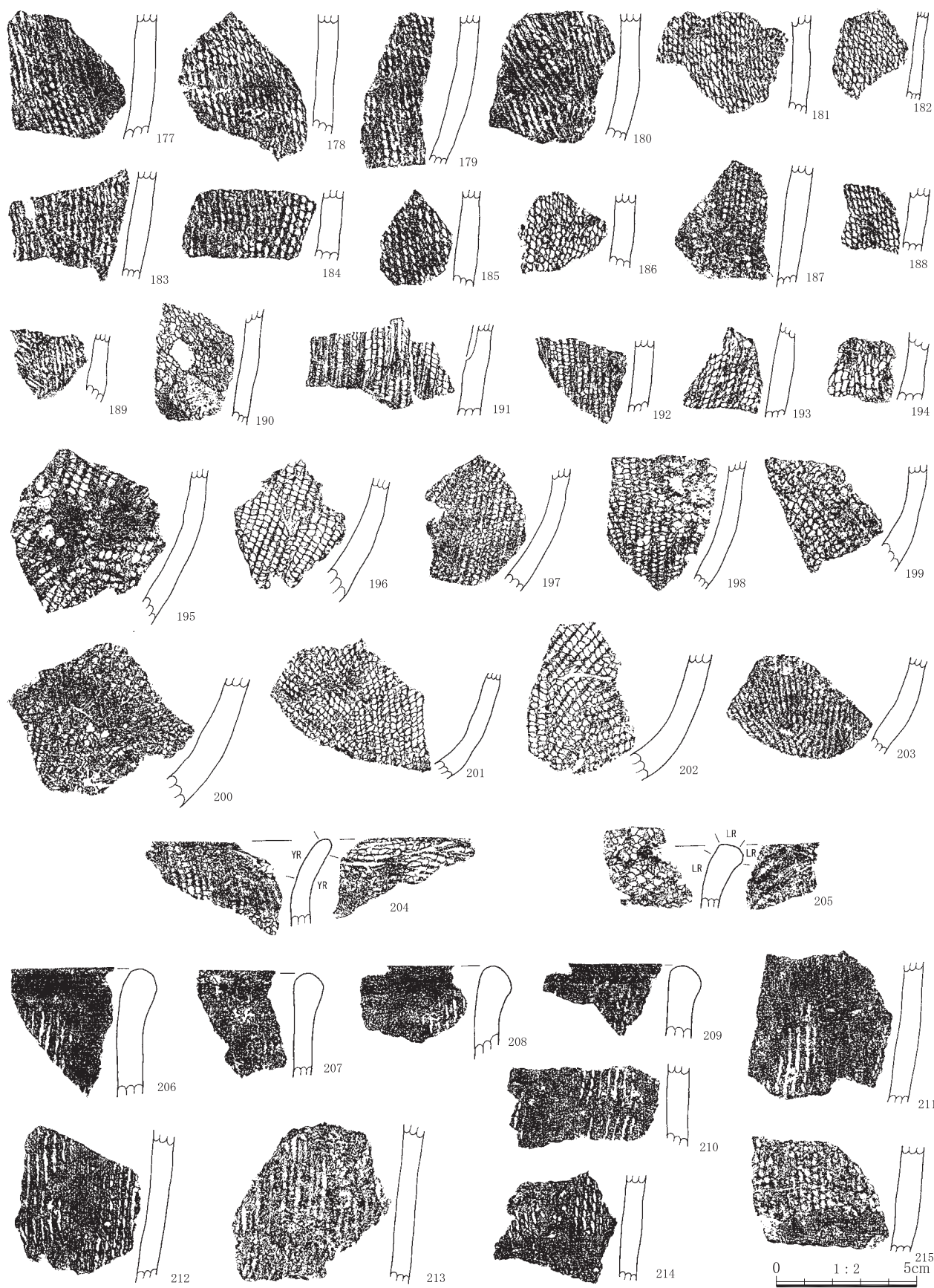


第 449 図 1 区包含層出土の土器 (3)

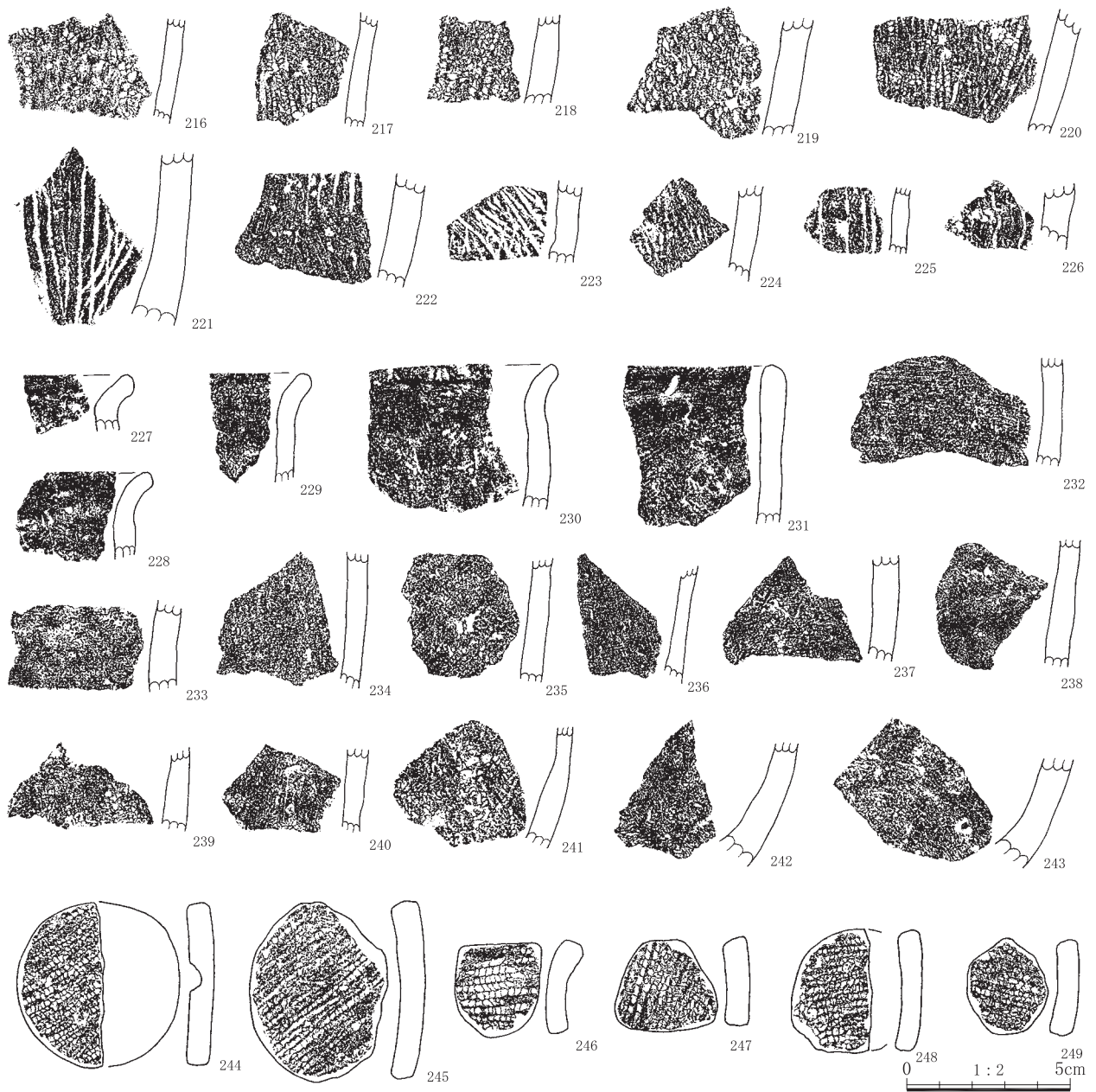


第 450 図 1 区包含層出土の土器 (4)

III 今井見切塚遺跡の調査

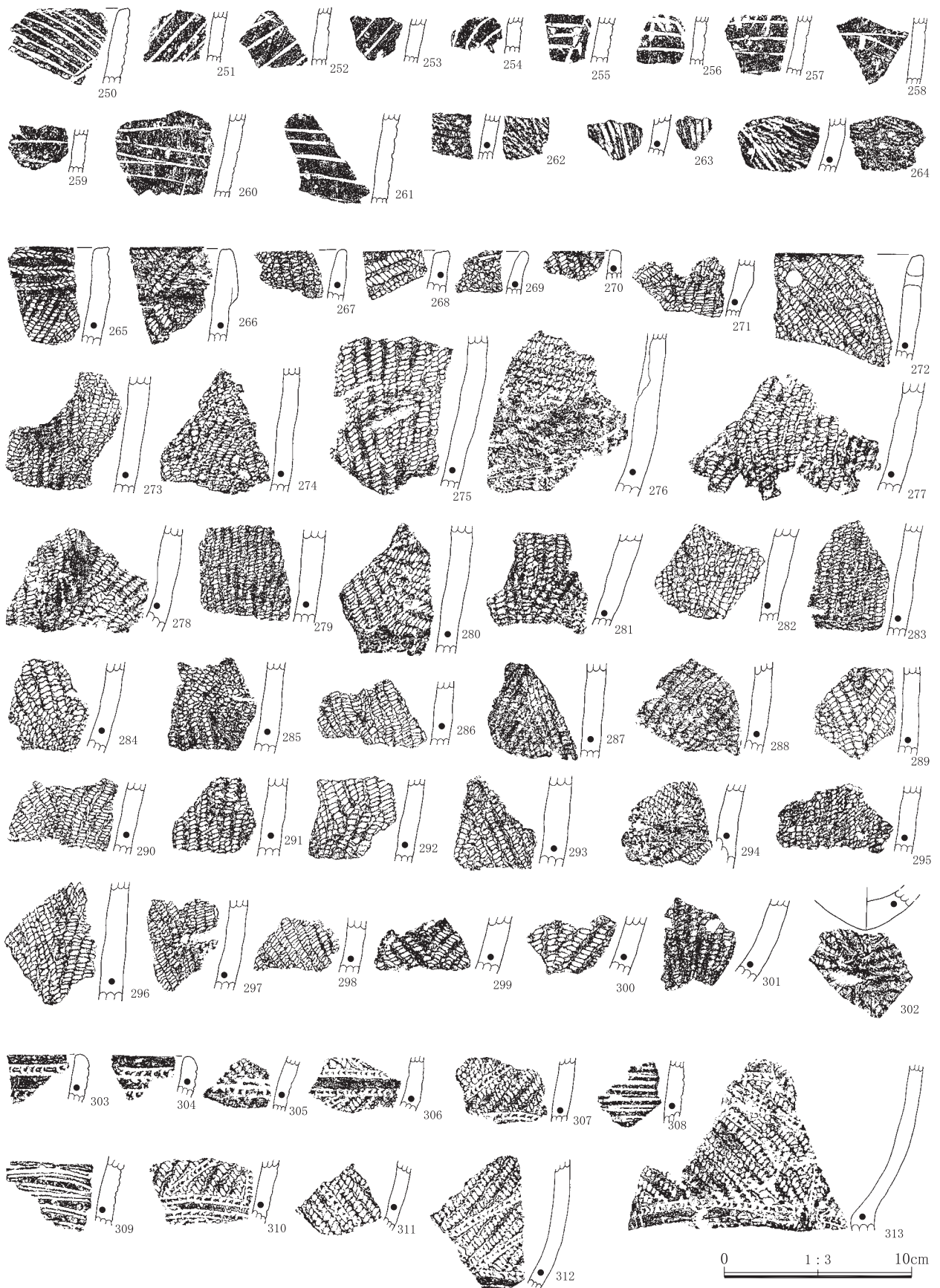


第 451 図 1 区包含層出土の土器 (5)

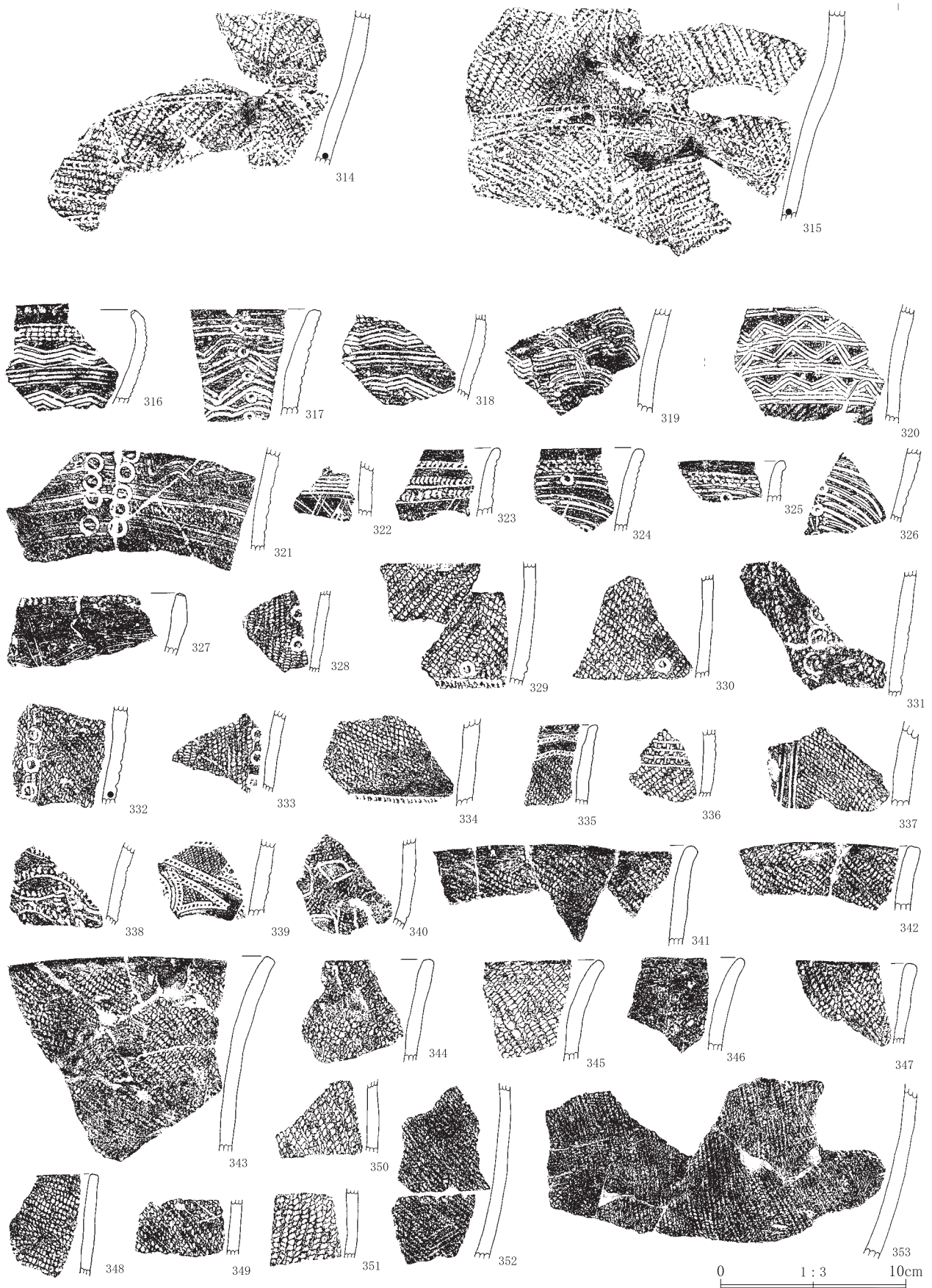


第 452 図 1 区包含層出土の土器 (6)

III 今井見切塚遺跡の調査

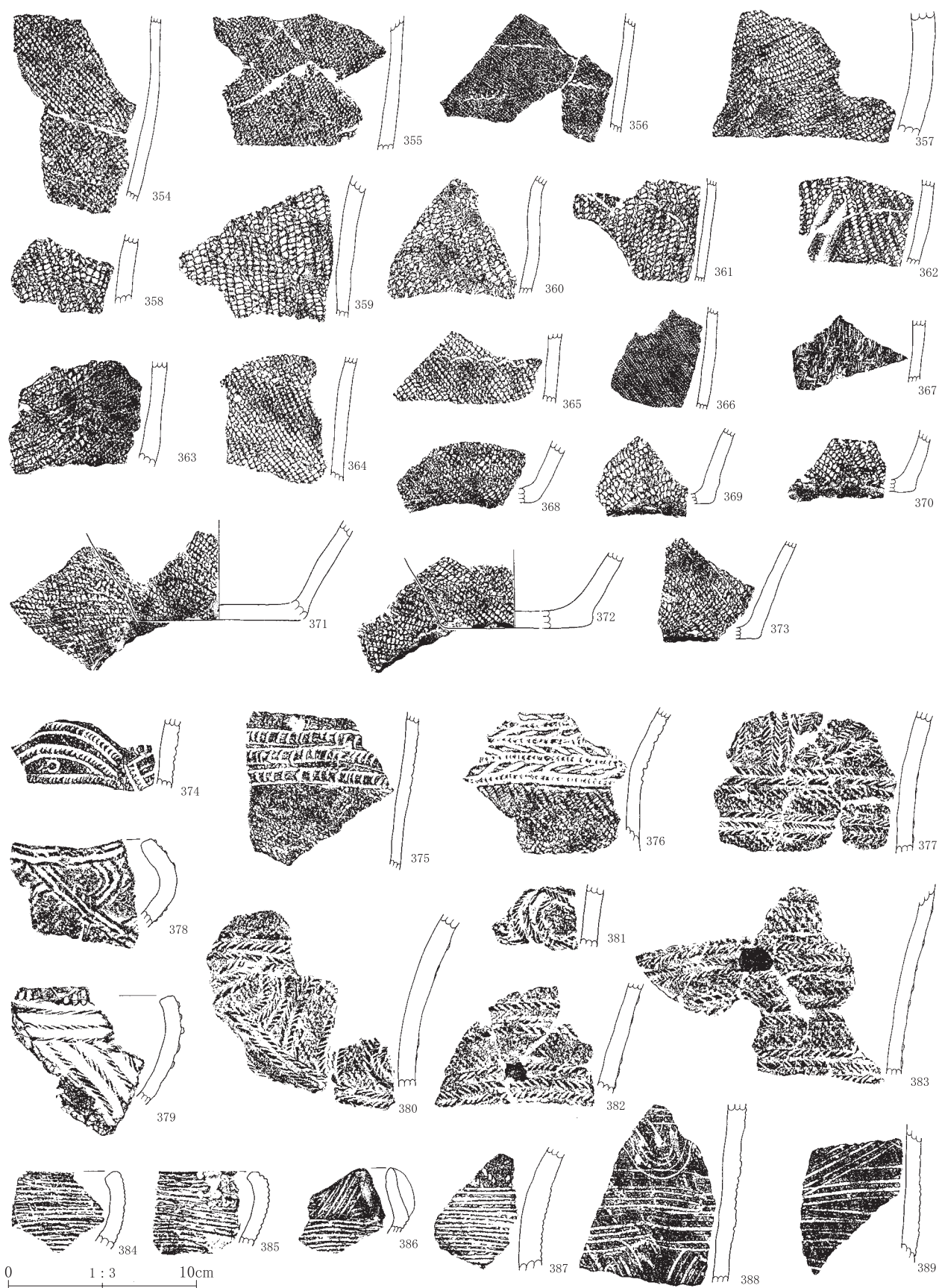


第 453 図 1 区包含層出土の土器 (7)

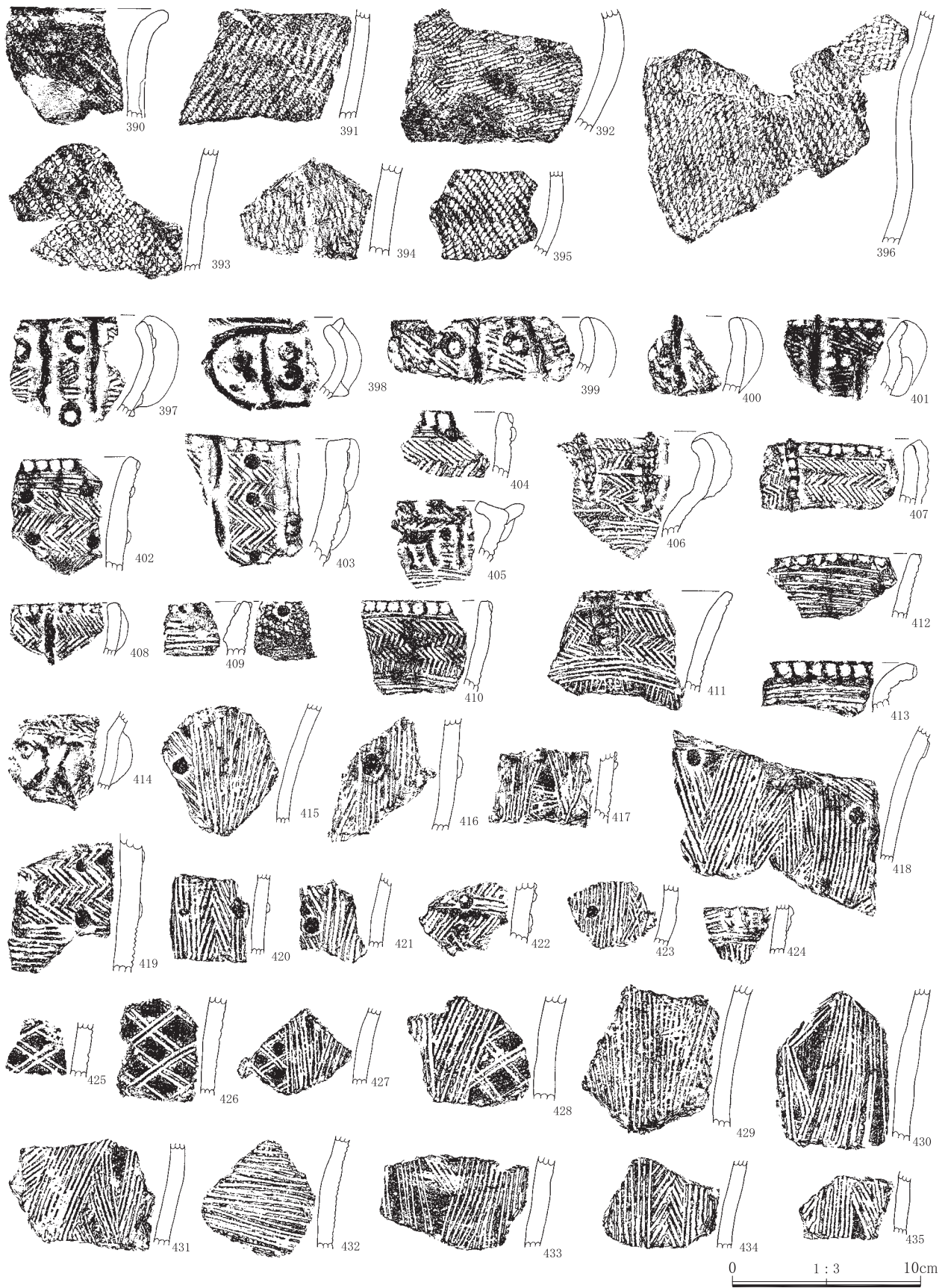


第 454 図 1 区包含層出土の土器 (8)

III 今井見切塚遺跡の調査

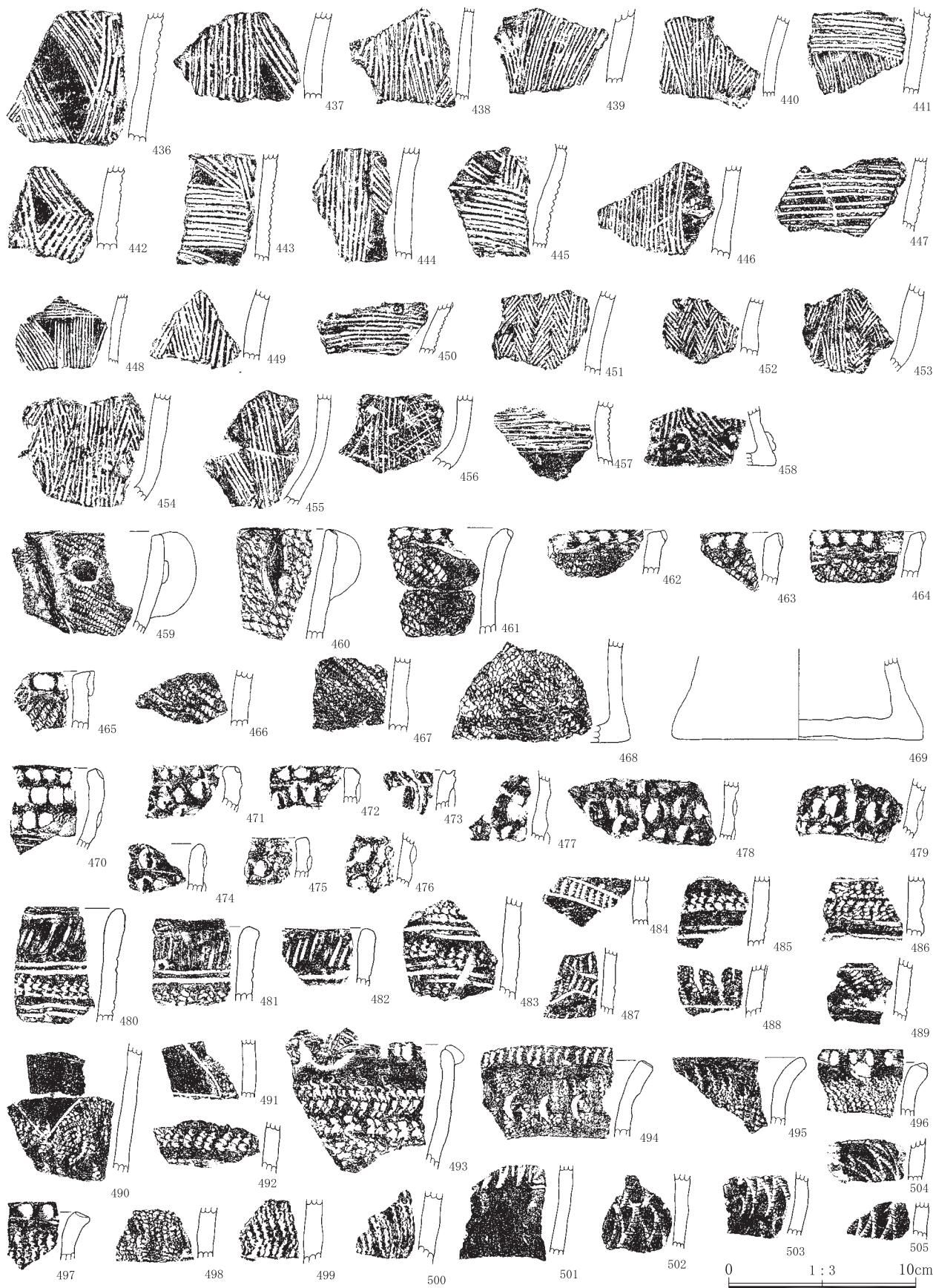


第455図 1区包含層出土の土器(9)

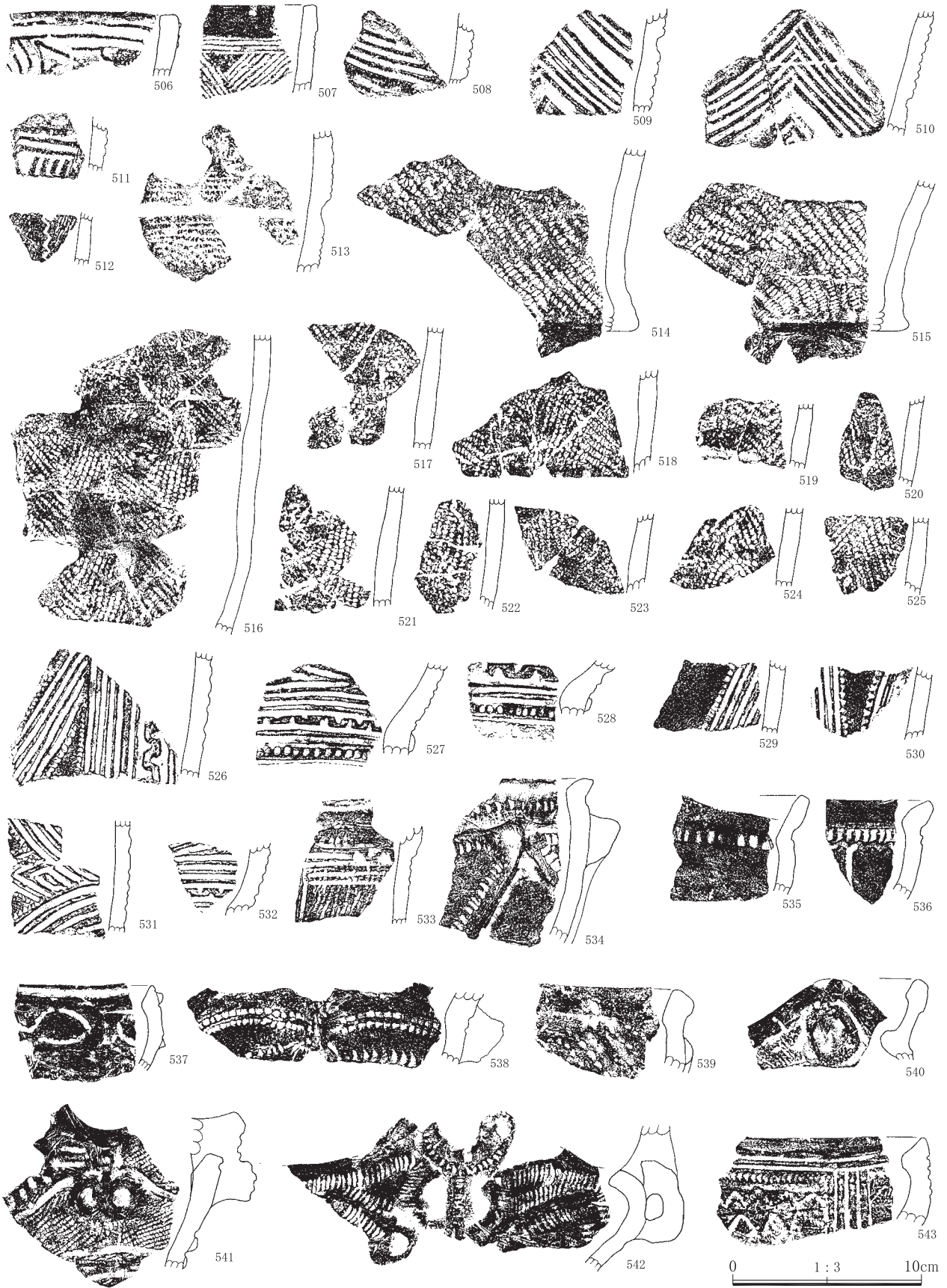


第 456 図 1 区包含層出土の土器 (10)

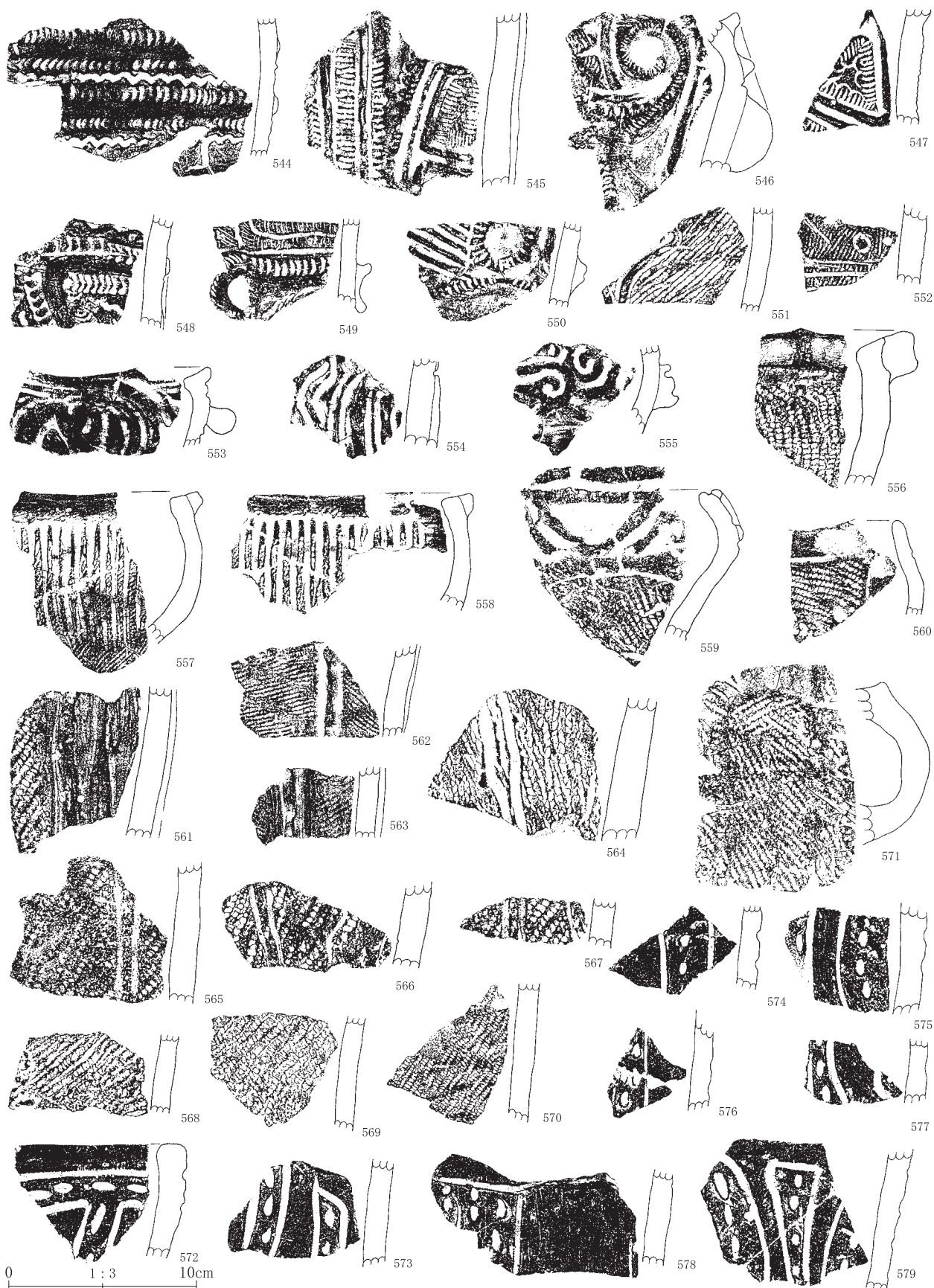
III 今井見切塚遺跡の調査



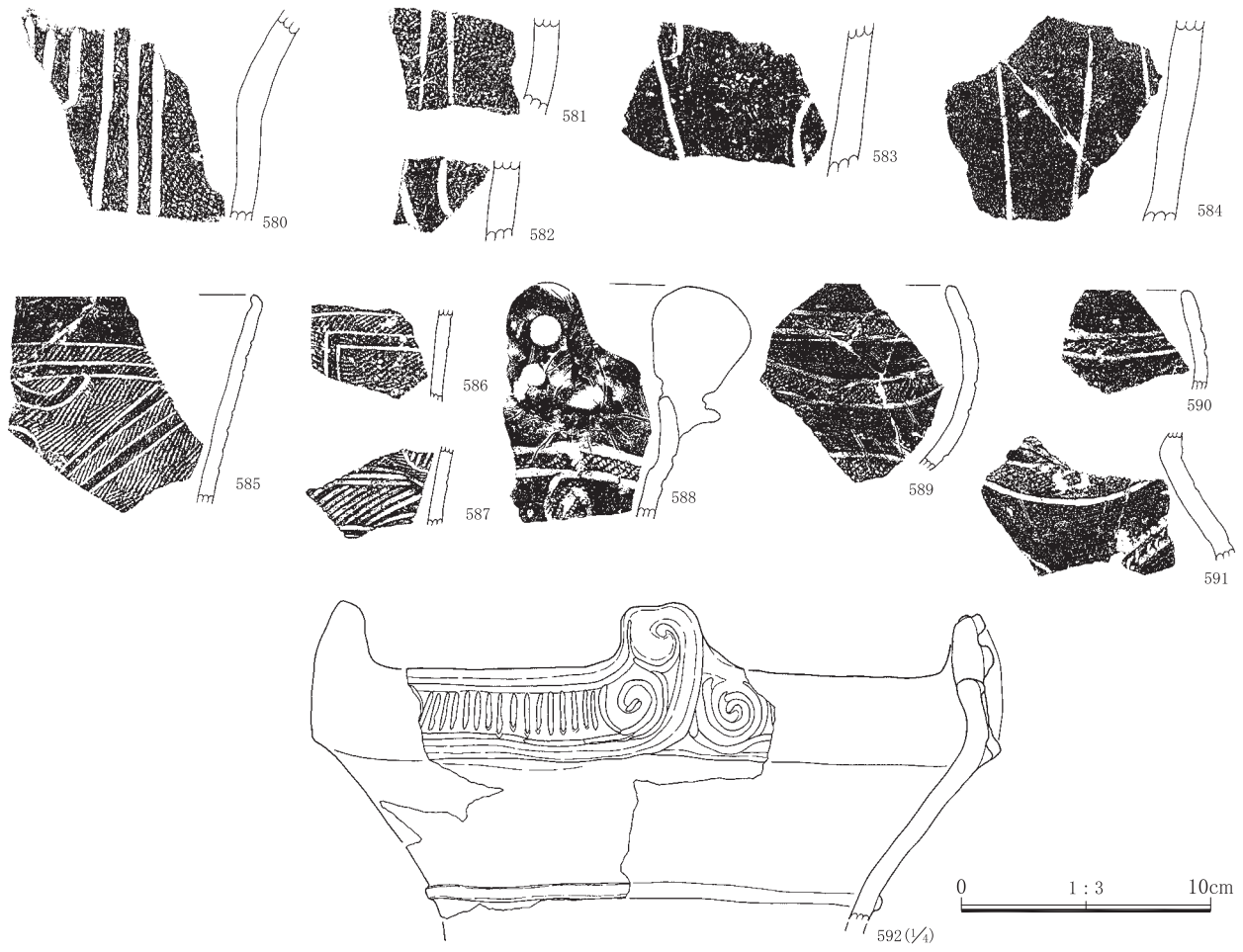
第 457 図 1 区包含層出土の土器 (11)



第 458 図 1 区包含層出土の土器 (12)

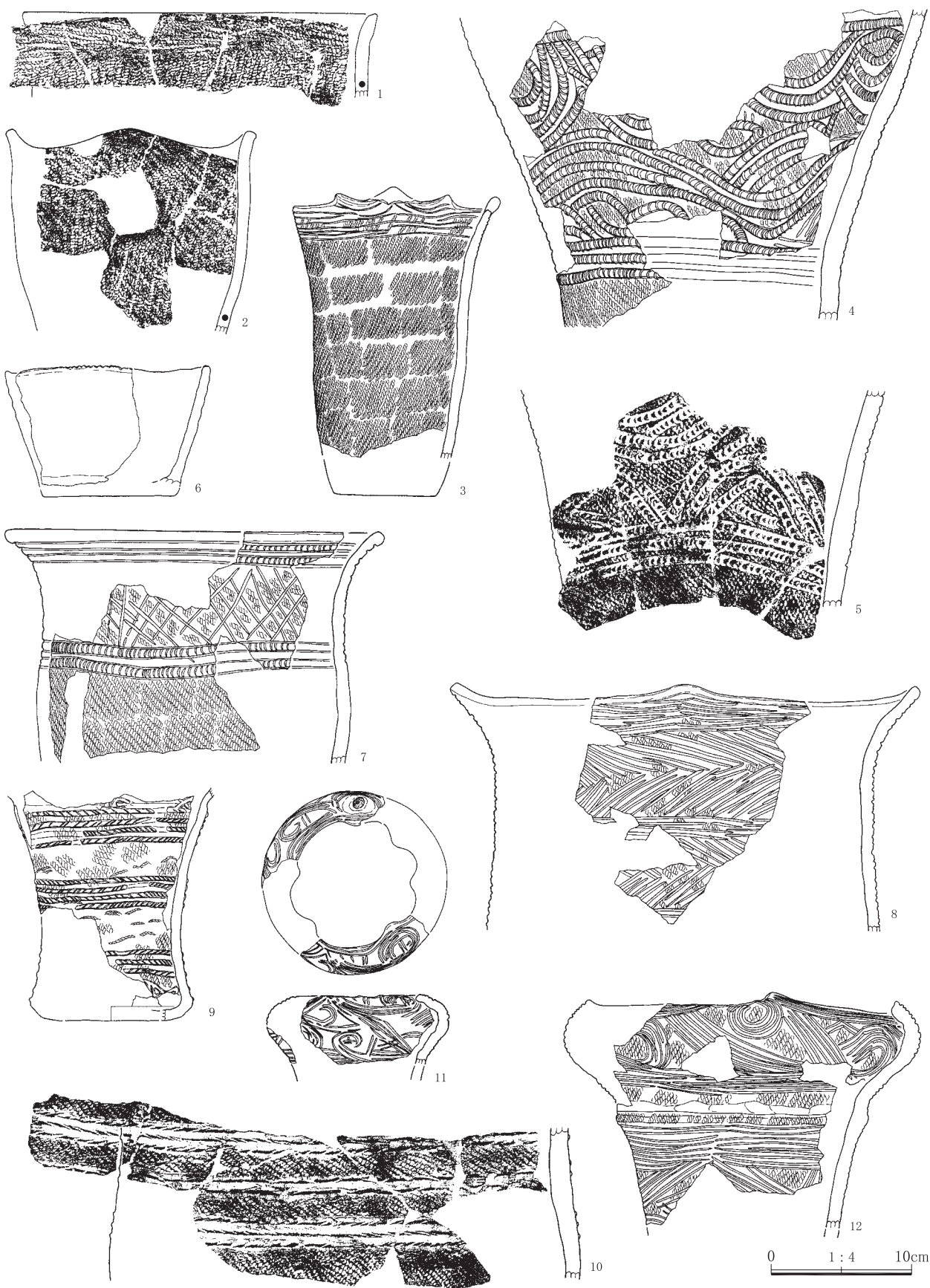


第459図 1区包含層出土の土器(13)



第460図 1区包含層出土の土器(14)

III 今井見切塚遺跡の調査

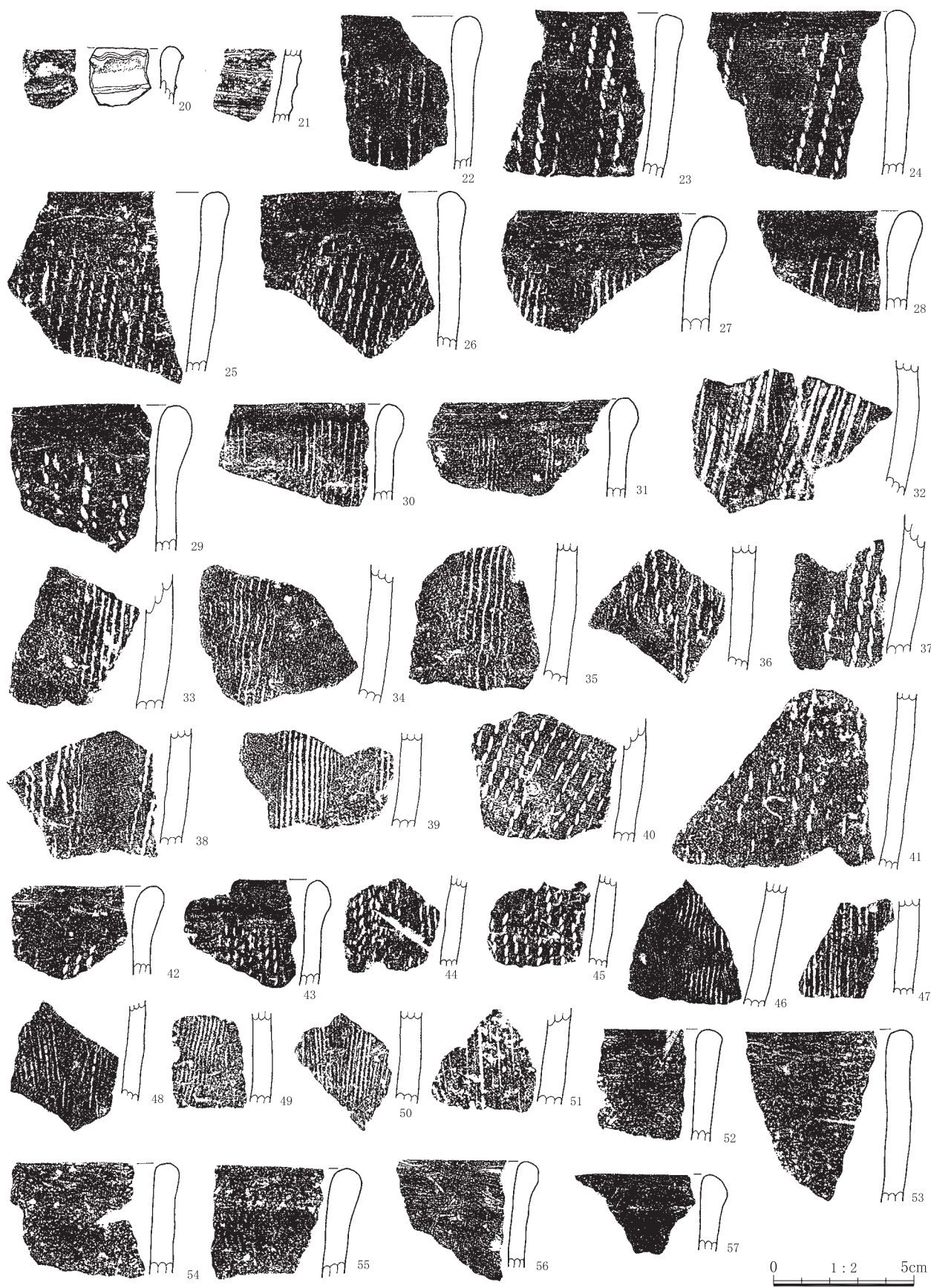


第 461 図 5 区包含層出土の土器 (1)

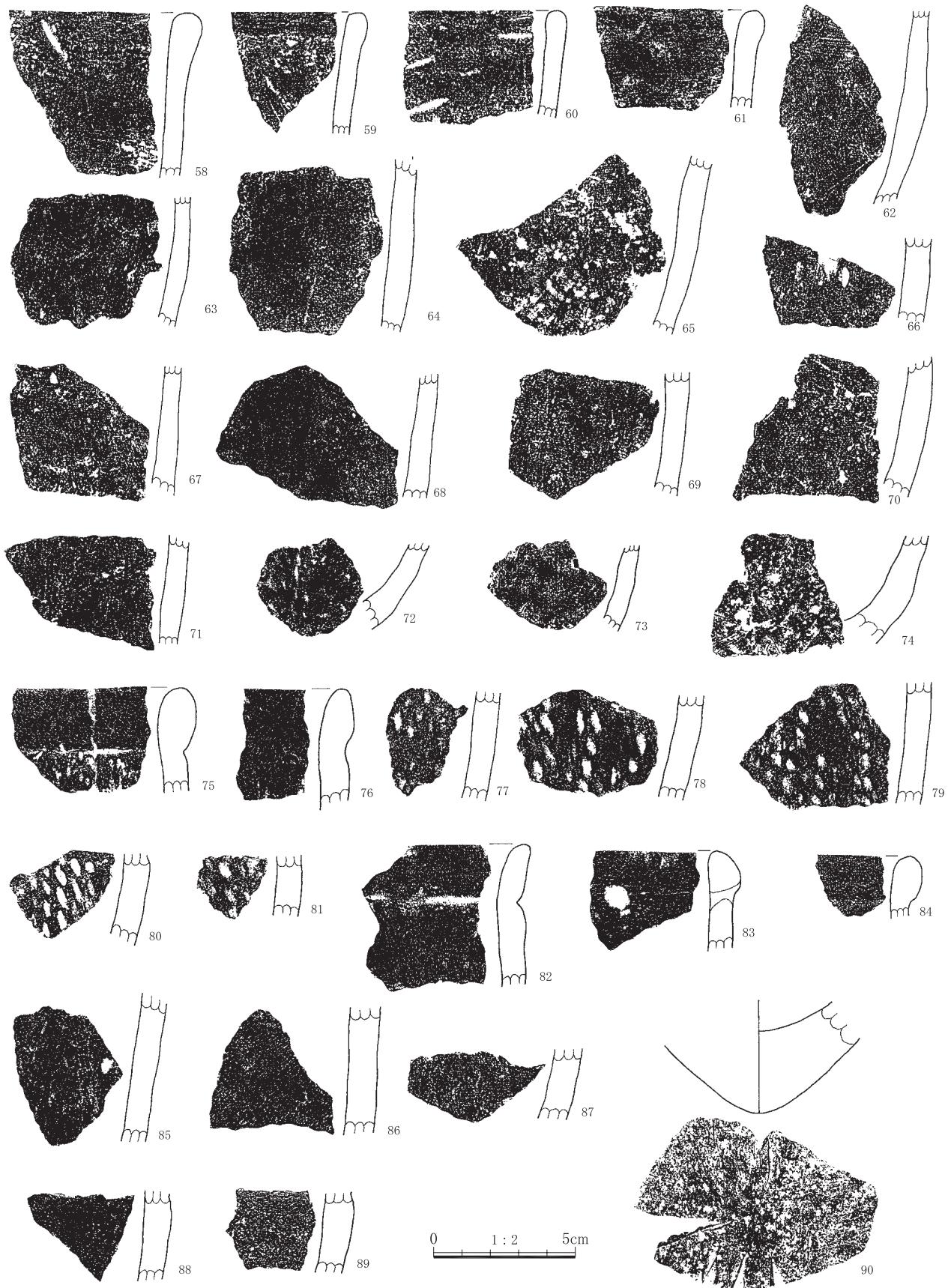


第 462 図 5 区包含層出土の土器 (2)

III 今井見切塚遺跡の調査

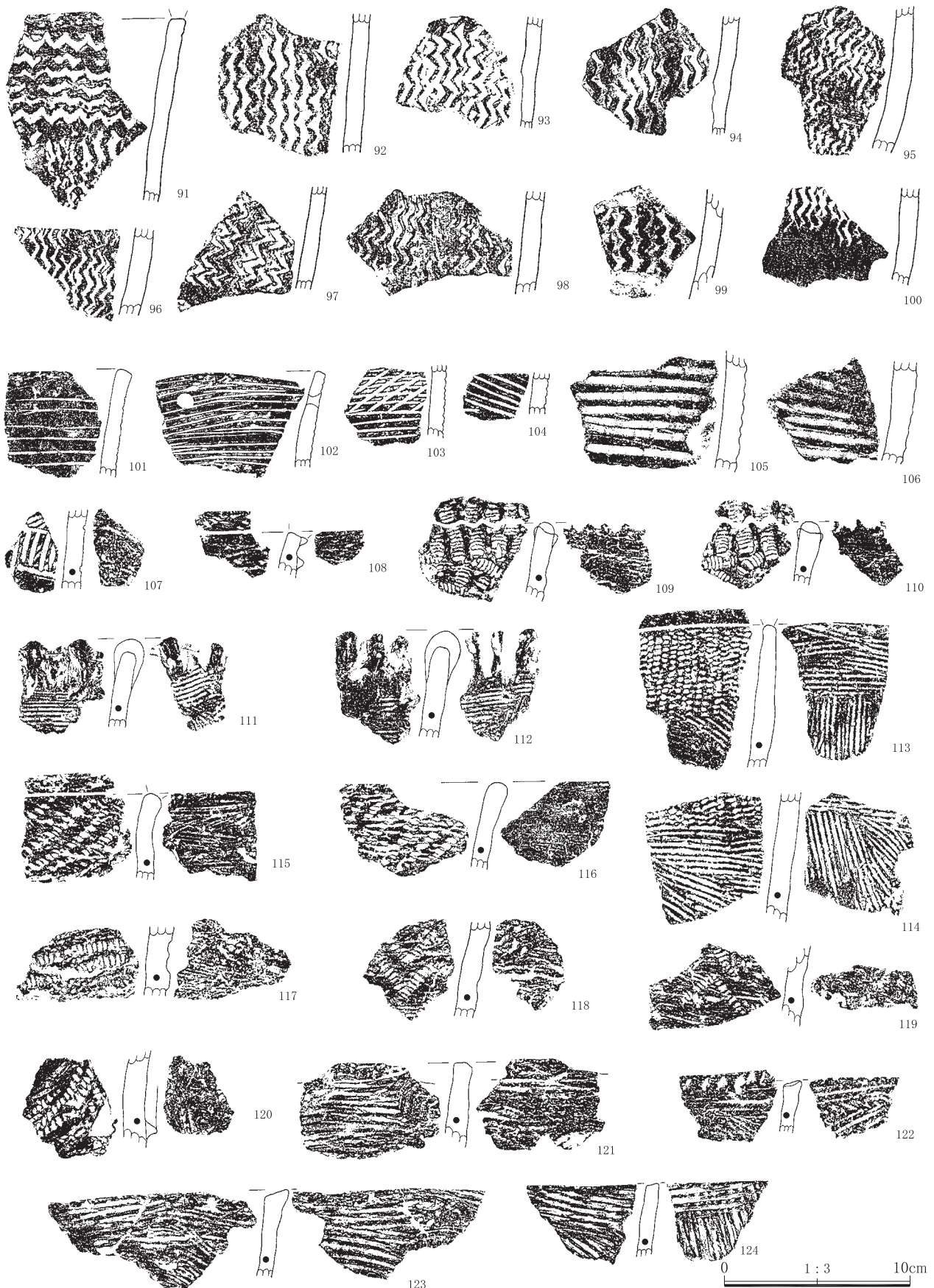


第 463 図 5 区包含層出土の土器 (3)

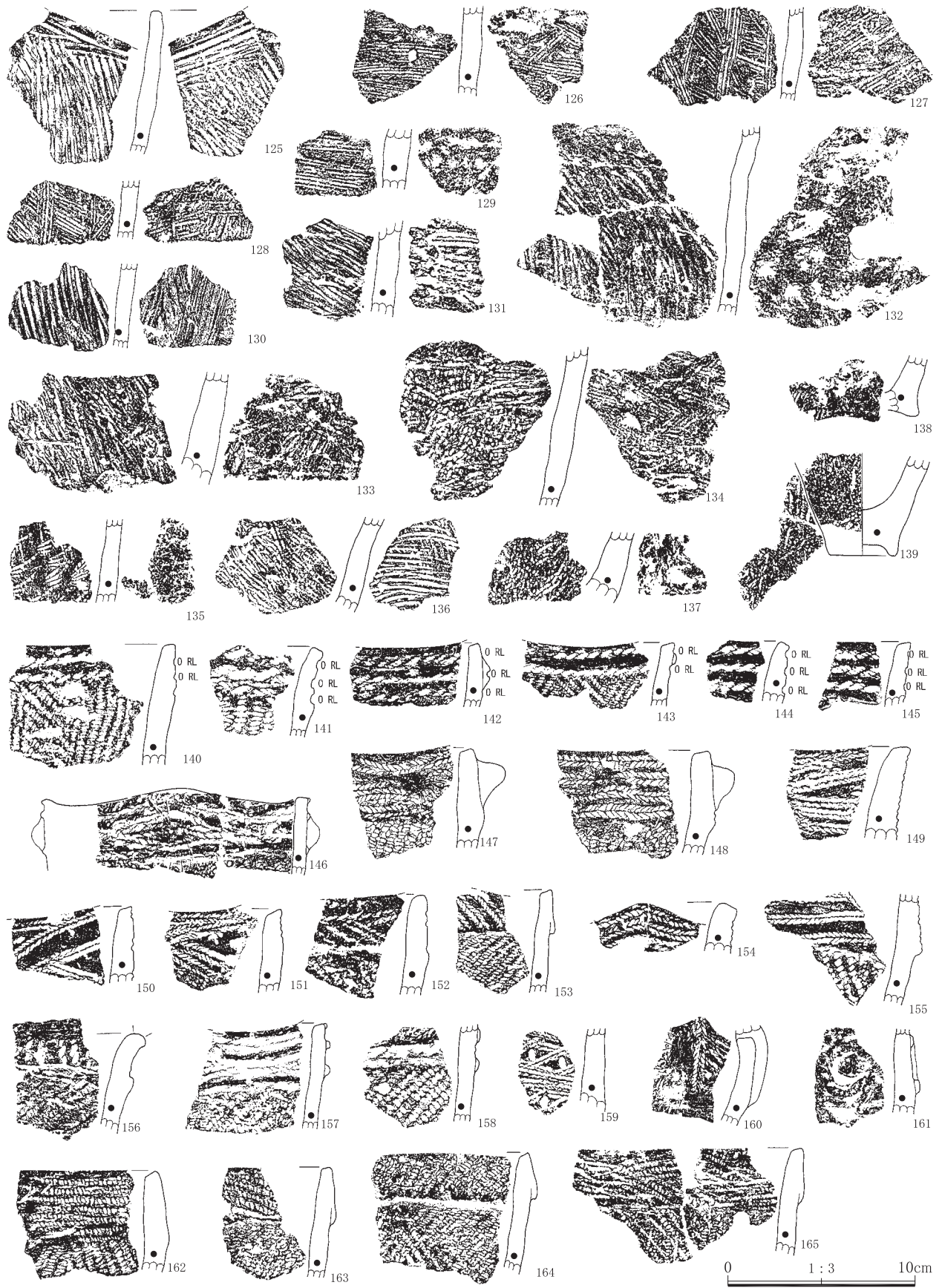


第 464 図 5 区包含層出土の土器 (4)

III 今井見切塚遺跡の調査

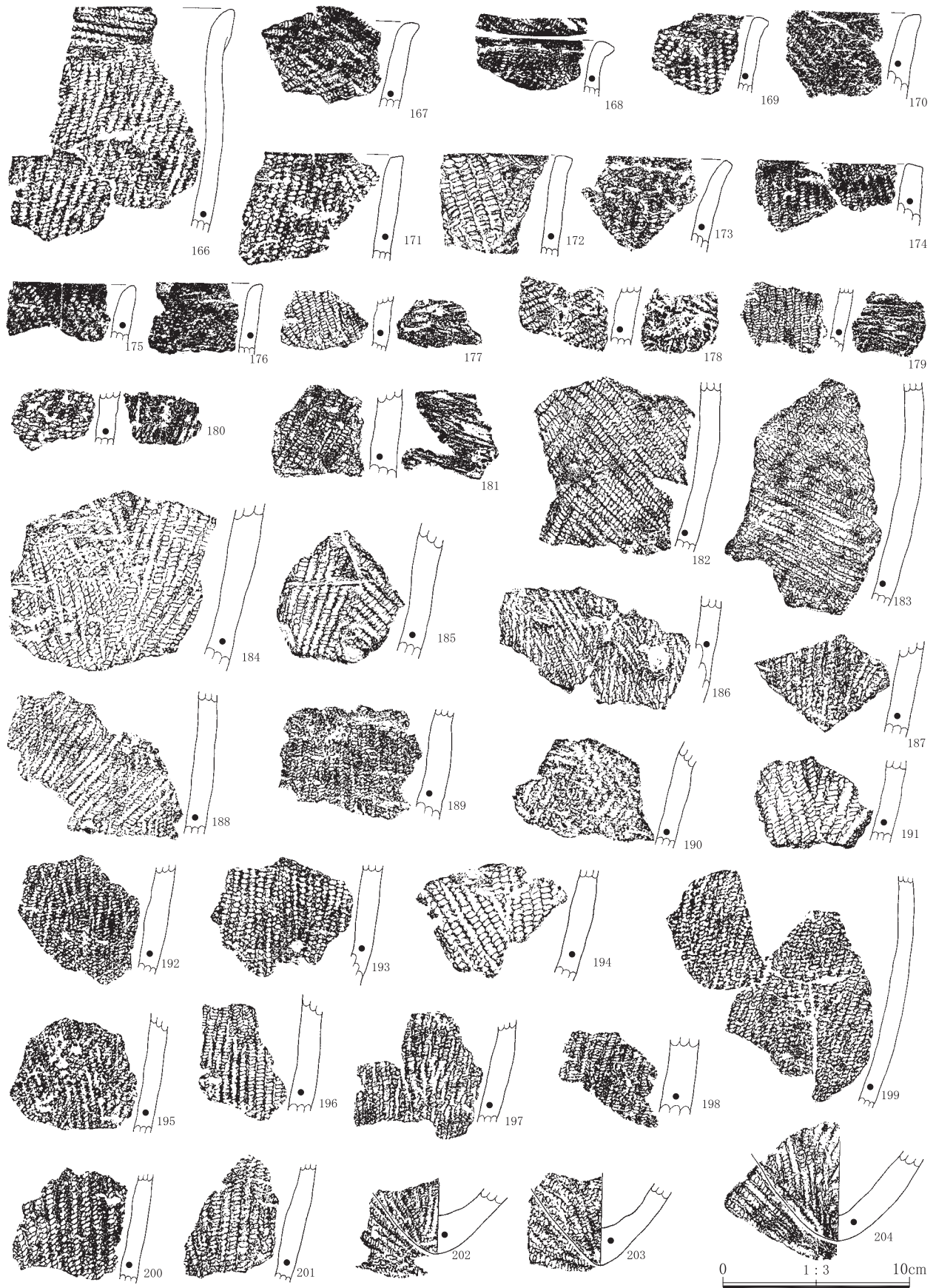


第 465 図 5 区包含層出土の土器 (5)

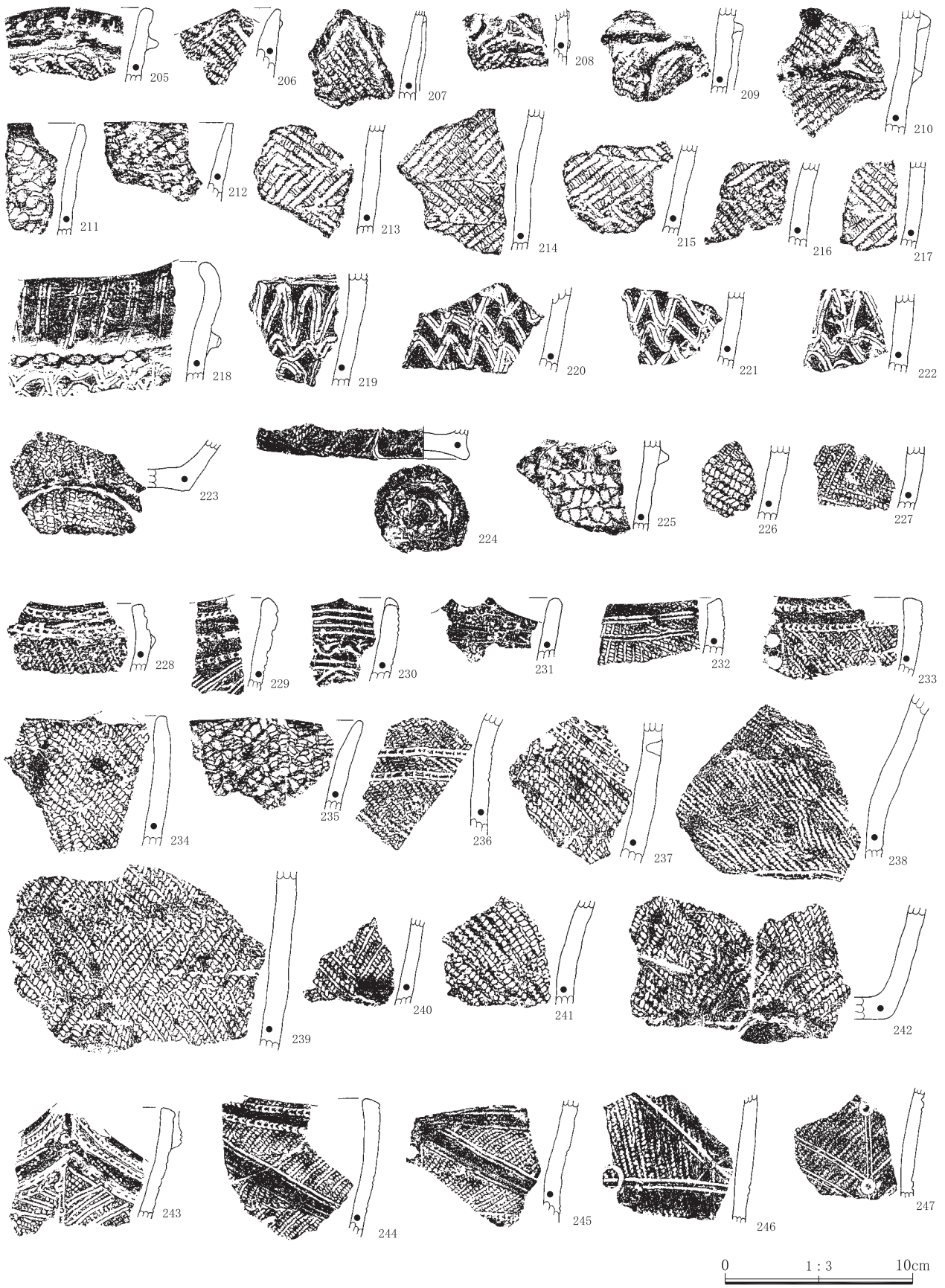


第466図 5区包含層出土の土器(6)

III 今井見切塚遺跡の調査

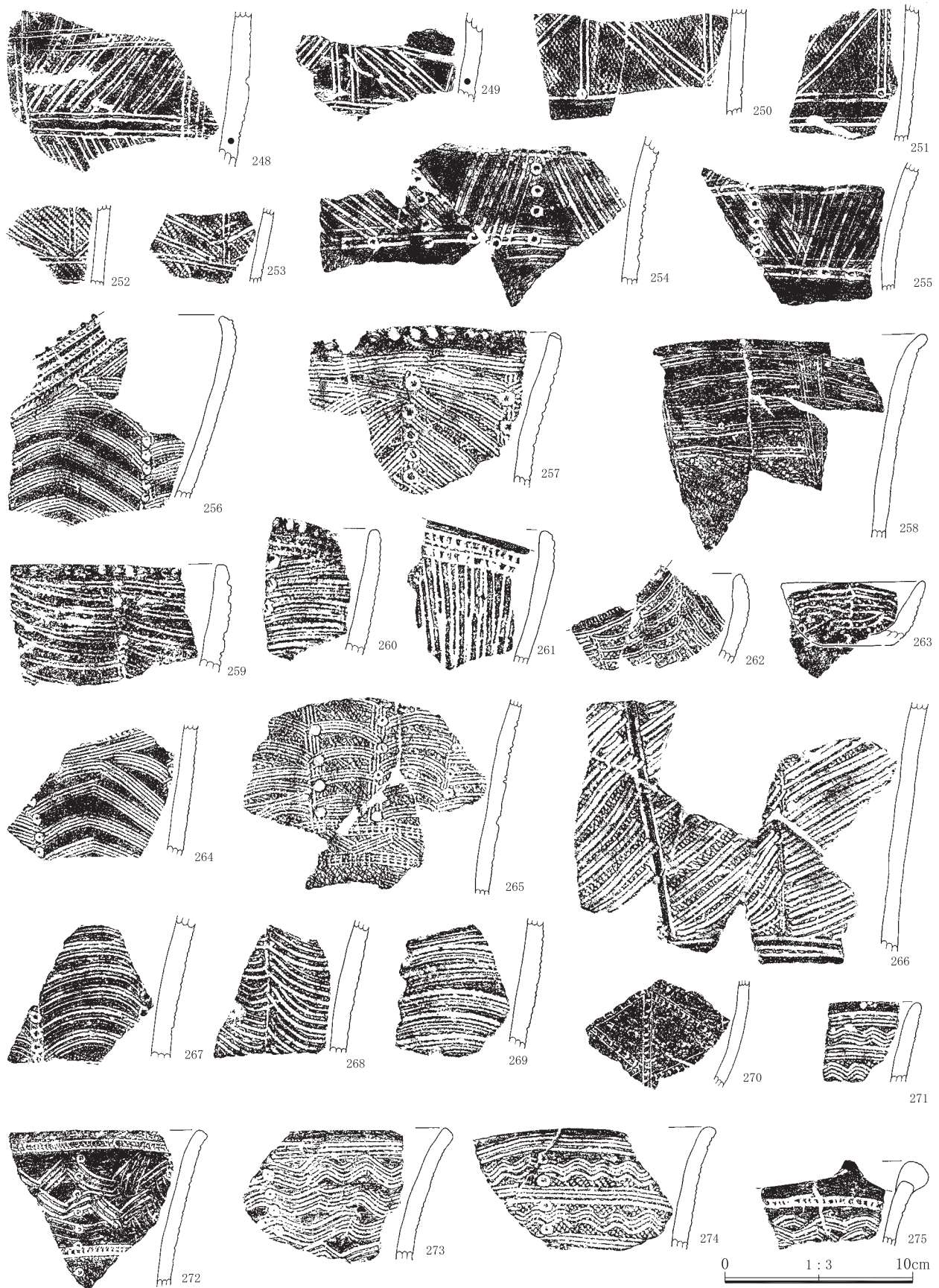


第 467 図 5 区包含層出土の土器 (7)

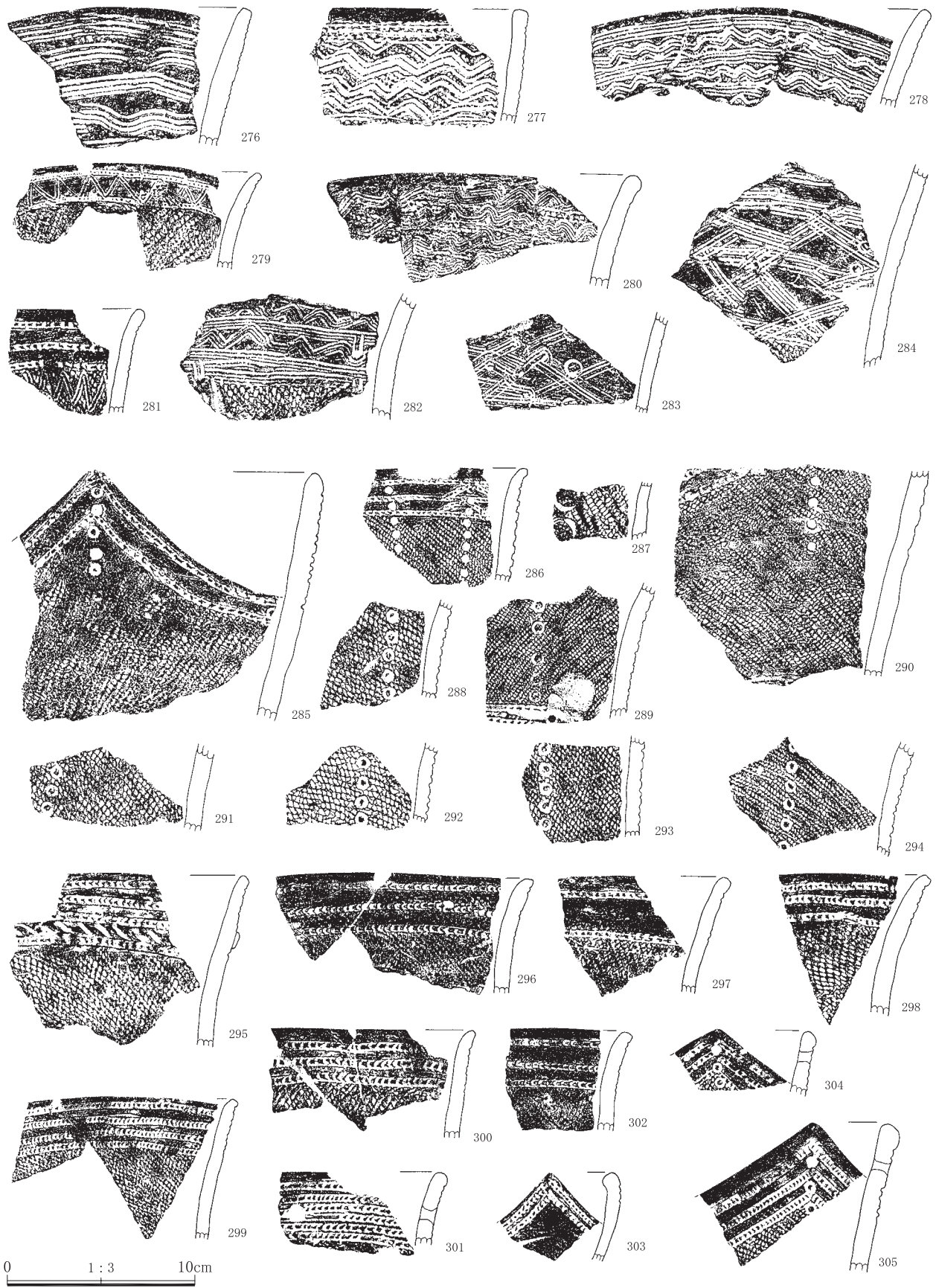


第 468 図 5 区包含層出土の土器 (8)

III 今井見切塚遺跡の調査

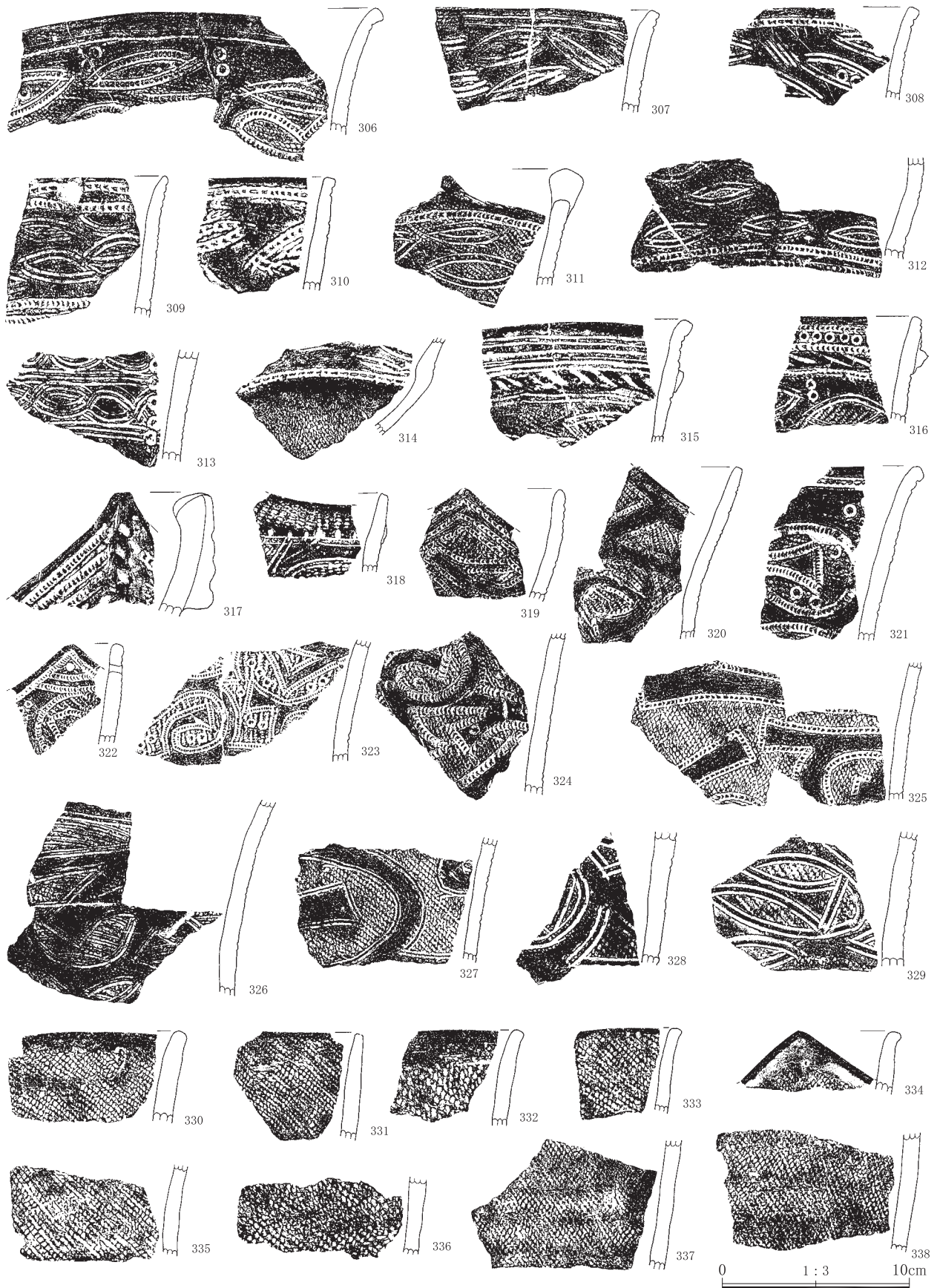


第469図 5区包含層出土の土器(9)

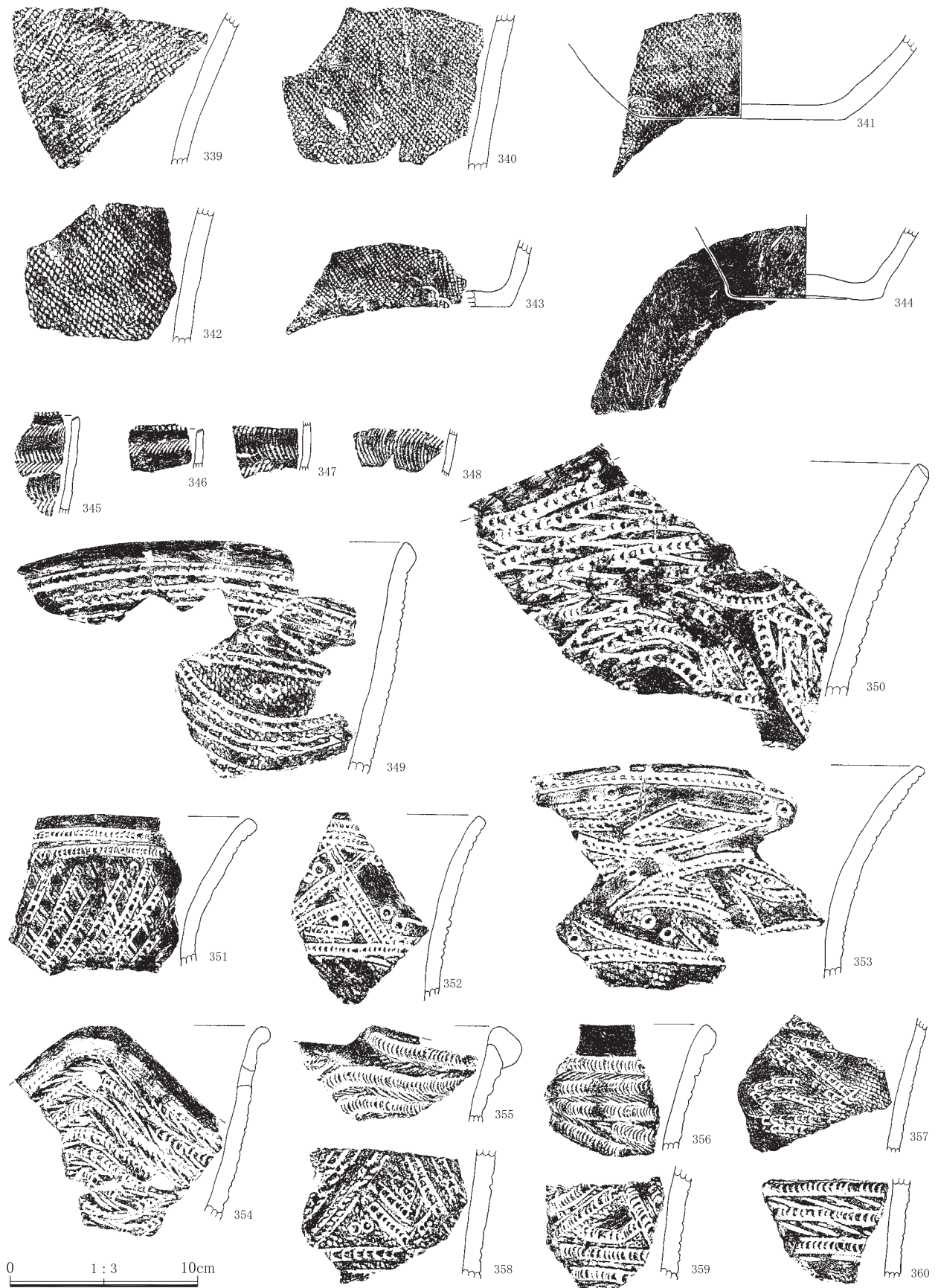


第470図 5区包含層出土の土器(10)

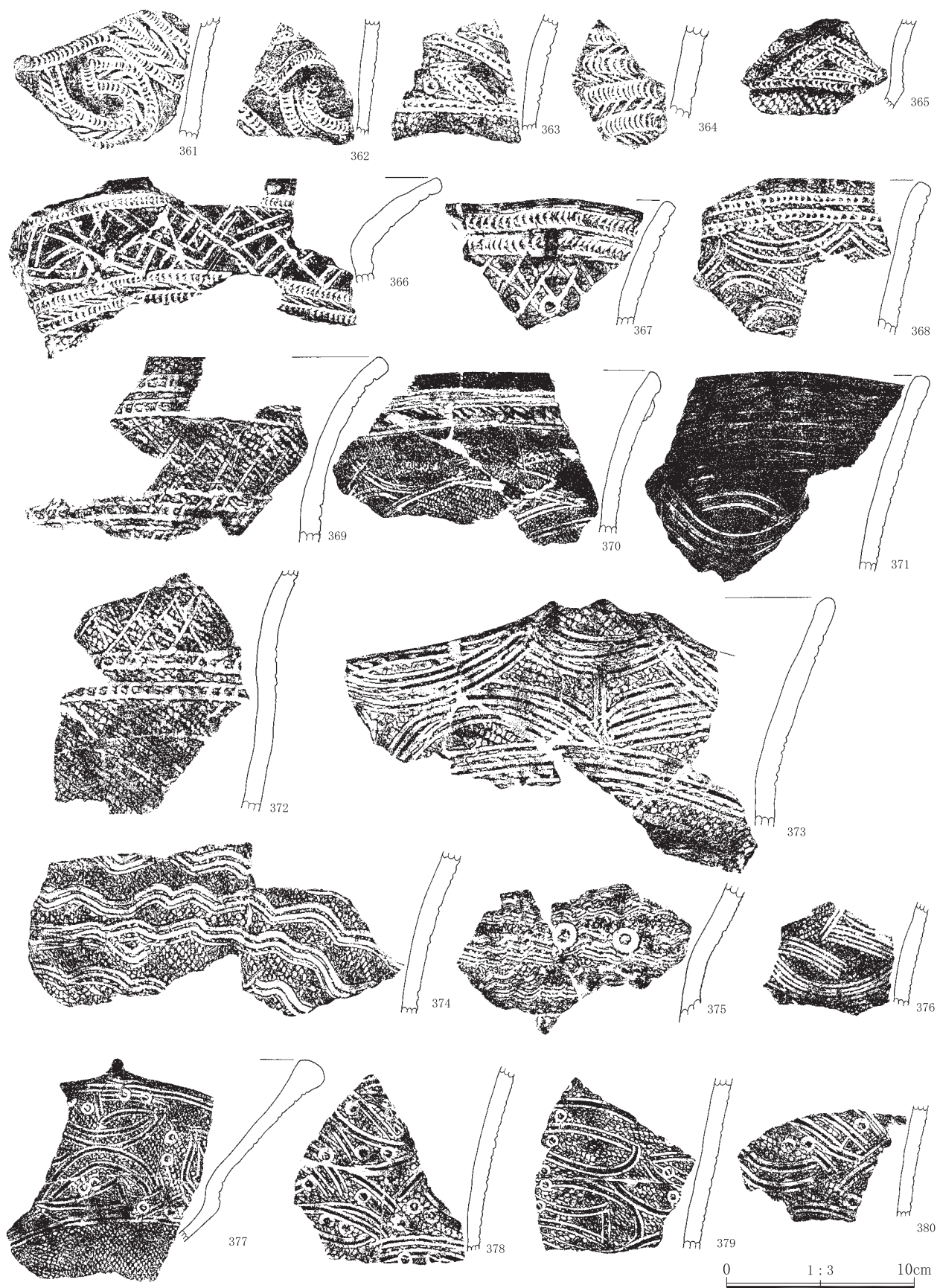
III 今井見切塚遺跡の調査



第471図 5区包含層出土の土器(11)



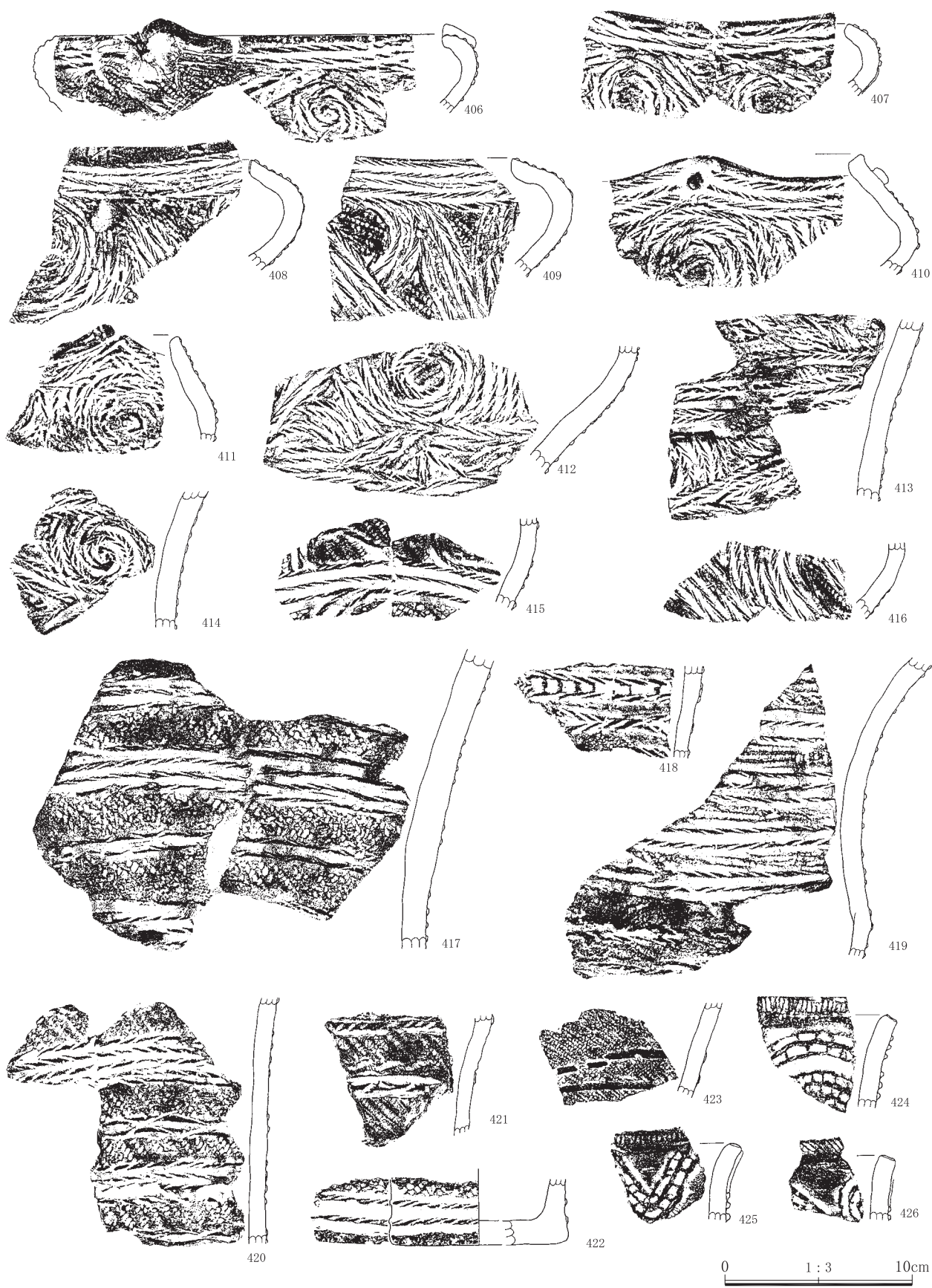
第 472 図 5 区包含層出土の土器 (12)



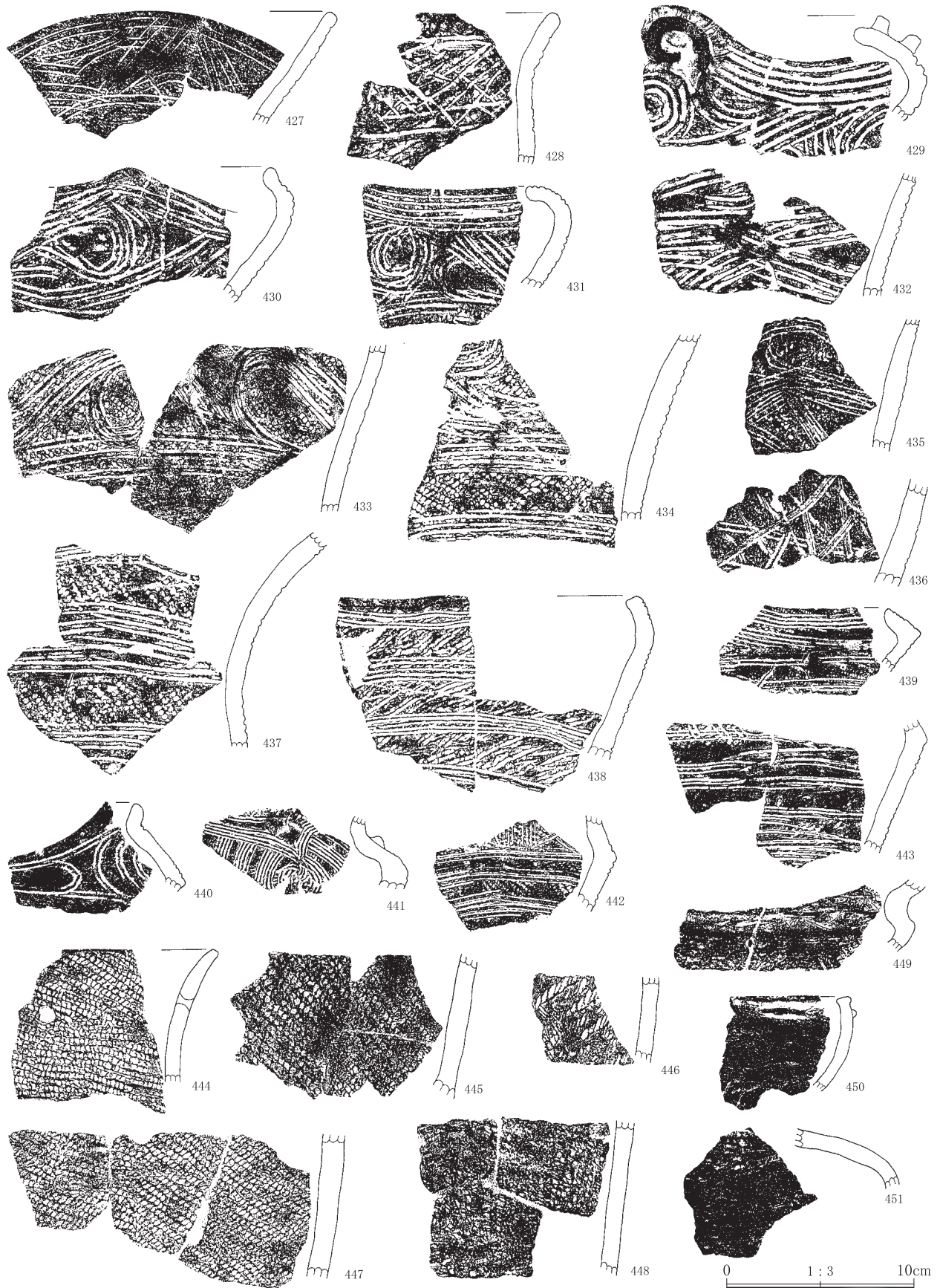
第473図 5区包含層出土の土器(13)



第 474 図 5 区包含層出土の土器 (14)

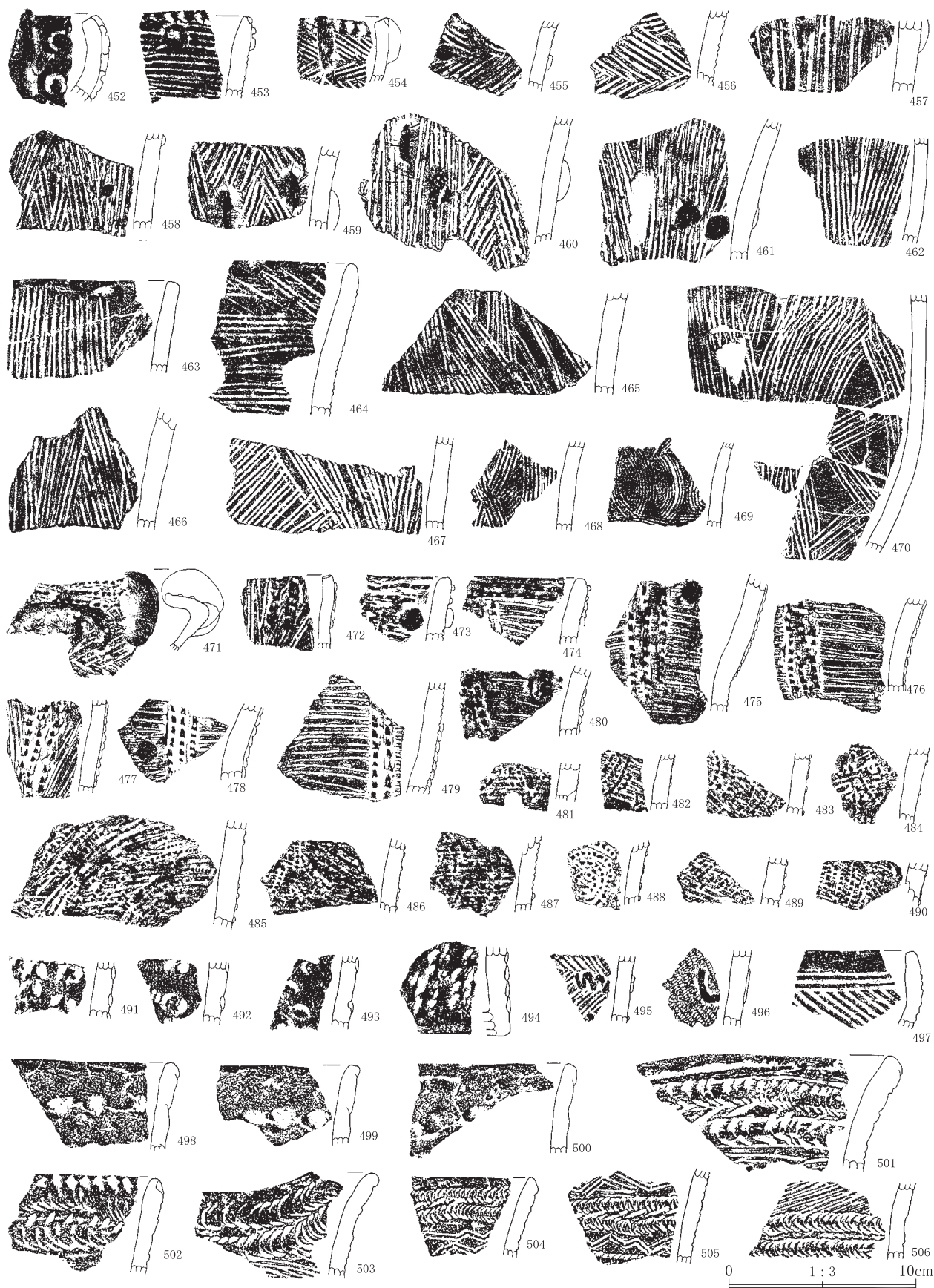


第 475 図 5 区包含層出土の土器 (15)

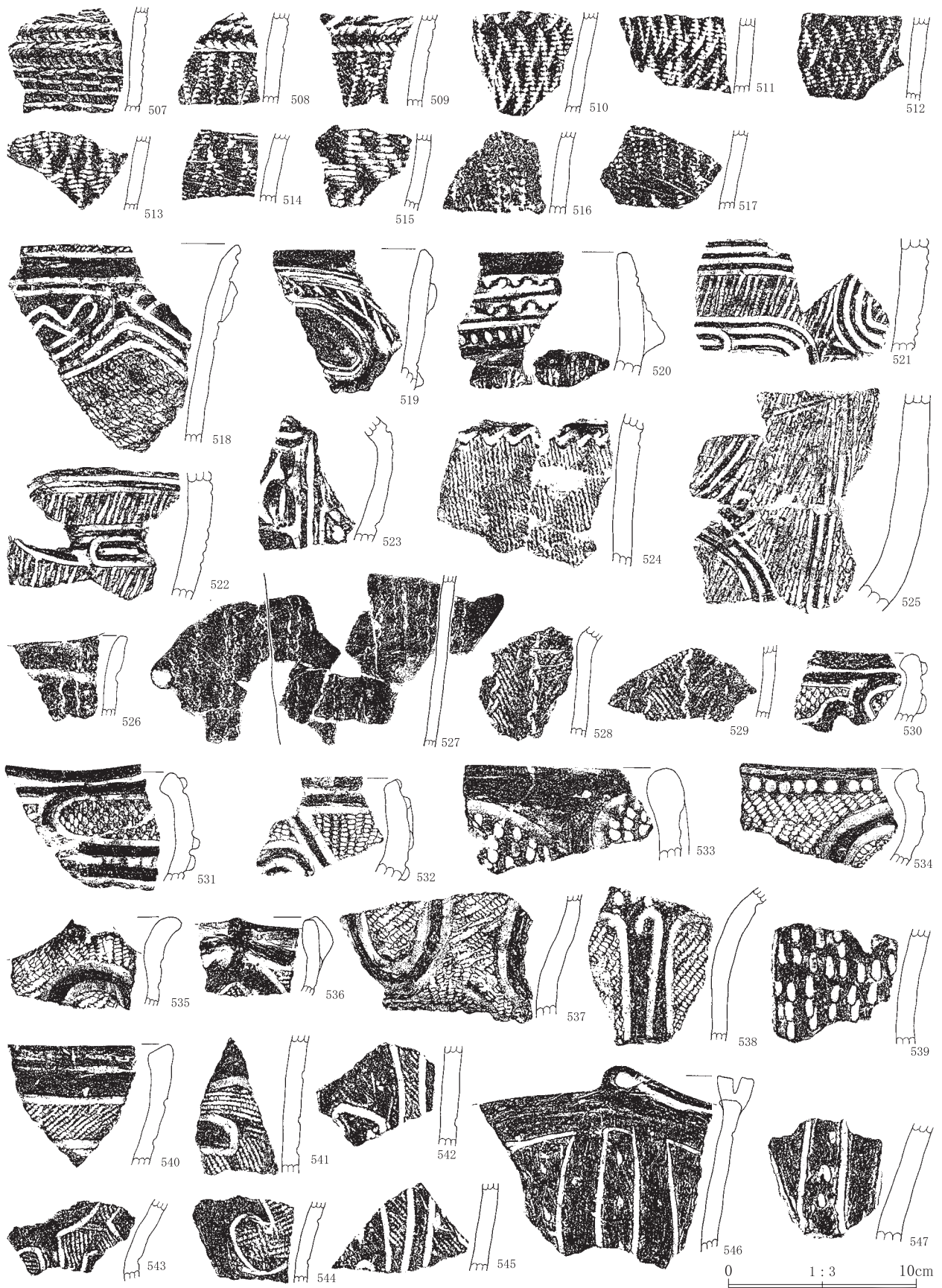


第 476 図 5 区包含層出土の土器 (16)

III 今井見切塚遺跡の調査

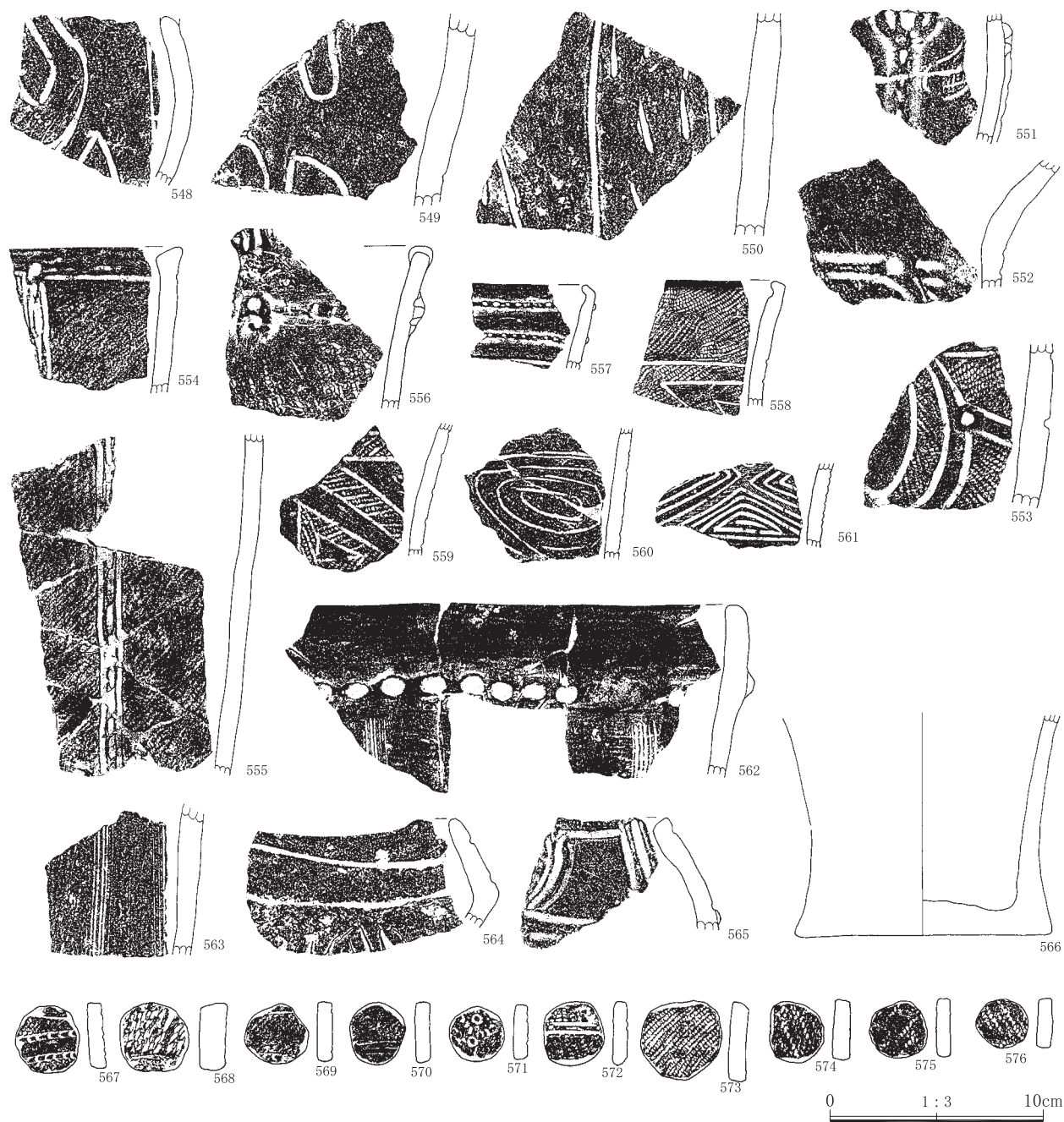


第 477 図 5 区包含層出土の土器 (17)



第478図 5区包含層出土の土器(18)

III 今井見切塚遺跡の調査



第 479 図 5 区包含層出土の土器 (19)

(3) 出土石器の内容

A. 打製系列

a. 尖頭器 (第 482 図 1・2、第 492 図 1～6)

総数 20 点が存在する。縦長や横長の剥片を素材として、両側縁に押圧剥離を施しているが、第 482 図 1・2 や第 492 図 3 はやや粗雑な調整加工により厚手であるのに対して、第 492 図 1・2・4～6 は丁寧かつ薄身である。第 482 図 1 や第 492 図 1～4 は、体部中位に最大幅を持ち、第 492 図 5 は基部に持っている。体長としては、第 492 図 4・5 のような 5 cm 前後の小形品と、他の 8～10 cm の大形品に二分される。

石材は、黒色頁岩が 50% を占め (第 482 図 1・2、第 492 図 3・6)、次いで珪質頁岩が 20% (第 492 図 1・2・4・5)、チャートが 15%、ホルンフェルスが 10% となる。

b. 有舌尖頭器 (第 492 図 7～9)

総数 3 が存在する。ともに、表裏両面に丁寧な押圧剥離を施し、薄手に仕上げられている。9 は基部が左右に突出し、有茎鏃的な形態を持つ。石材は、黒色頁岩 2 点 (8・9) と珪質頁岩 1 点 (7) である。

c. 石鏃 (第 482 図 3～37、第 492・493 図 10～75)

総数 368 点が存在する。形態別では、抉りの浅い凹基無茎鏃の 2 類が 146 点 (第 482 図 7～9・15～22・25・28・32・33、第 492・493 図 14・17～20・23～27・31～36・38～40・43・47・51・52・54・58～64・66・67) と最も多く、次いで平基無茎鏃の 1 類 47 点 (第 482 図 31、第 492・493 図 21・22・37・41・42・45・46・48～50・55～57)、U 字状に抉れる凹基無茎鏃の 3 類 34 点 (第 482 図 5・10～13・26・27・29、第 492 図 15・16)、V 字状に抉れる凹基無茎鏃の 4 類 10 点 (第 482 図 14・23・24・30、第 493 図 28・53)、基部が円弧状の 5 類 4 点 (第 493 図 71～73)、凹基有茎鏃の 7 類 4 点 (第 482 図 3・4、第 492 図 11)、凸基有茎鏃の 8 類 2 点 (第 492 図 12・13)、平基有茎鏃の 6 類 1 点 (第 492 図 10) な

どの他に、未製品の 9 類 58 点 (第 482 図 34～37、第 493 図 74・75) などがある。

大きさについては、サンプル数の少ない 6～8 類を除いて 1～5 類の平均値を見ると、長さ 21～23 mm、基部幅 14～17 mm と相互に大差が認められないが、重量では 2～4 類が 0.9～1.1 g であるのに対して、1・5 類は 1.4～1.5 g とやや重く、前者が後者に比べて薄身に作られている。9 類の未製品では、長さ 31 mm、幅 23 mm、重さ 6.5 g であり、先の製品に比べて長さで 1.5 倍、重量で約 6 倍となっている。

石材は、チャートが全体の 66% を占め、黒色安山岩と黒曜石が各 12%、黒色頁岩が 9% となる。他に珪質頁岩・細粒輝石安山岩・赤碧玉・流紋岩なども見られるが、僅少である。形態と石材との間には、特定の関係を見出すことはできず、やはり先の石材比率が各形態に認められる。

尚、黒曜石製 42 点のうち 5 点について、X 線回折試験による産地同定を実施し、和田峠系 2 (星ヶ塔) 4 点 (第 482 図 34・35)、和田峠系 1 (東餅屋・西餅屋) 1 点 (第 482 図 36) という結果を得ている。

各類の帰属時期については、押型文土器段階に特徴的な鏃形鏃が 3 類 (第 482 図 10～14、第 493 図 44・68・70) や 4 類 (第 482 図 29・30) の一部に認められ、また後期段階と推定される有茎鏃の 6・7 類や草創期後半段階の可能性のある小形品 (第 493 図 54～61) などを除けば、その大半が前期に比定されるものであろう。

d. 石錐 (第 483・484 図 38～47、第 495・496 図 76～85)

総数 76 点が存在する。横長あるいは縦長の不定形剥片を素材として、全体的に押圧剥離を施して細身の体部や機能部を作出する摘み部を持たない 1 類 31 点 (46・47、81～84) と、機能部を中心に押圧剥離を施して摘み部を持つ 2 類 43 点 (38～45、76～80・85) がある。2 類は、機能部以外の調整加工をあまり行わず、素材剥片の形状を留めるものも多見されるが、機能部の長さが 5 mm 前後の短いもの (38～43・45、80) と、10 mm 以上の長いもの (76～

Ⅲ 今井見切塚遺跡の調査

79・85) が存在する。前者は、後者の機能部が欠損した再生品の可能性もあるが、40・42・43などの機能部は剥片の先端部を余り加工せずに素材形状をとどめており、精・粗製品の両者が作出されたと考えられる。

石材は、チャートが48点と最も多く、他に黒色頁岩21点、黒曜石3点、ホルンフェルス2点、珪質頁岩と黒色安山岩が各1点などが存在するが、先の類別と石材選択との関係には有意な差異が認められない。

e. 石匙 (第483図48～51、第494・495図86～100)

総数37点が存在する。横型の1類が14点(第483・485図51・86～92)、縦型の2類が15点(第483図48～50、第495図93～100)、欠損品で分類不明な4類が8点などである。1・2類ともに、不定形な剥片を素材として押圧剥離により機能部が作出されているが、二次加工はやや粗雑で周縁部に限定されるものが多く、深奥部にまで及ぶ精緻なものは見当たらない。また摘み部は、素材剥片の打瘤部側に当てる傾向も認められる。

これら各類を詳細に見ると、1類では摘み部を除く長幅比が2.5:1前後の横長タイプ(86～90)と、1:1程度の正三角形に近いタイプ(91・92)が存在する。一方、2類では3:1前後の細身のタイプ(93・94)と、2:1前後の幅広タイプ(95～100)が認められる。また、大きさ的にも両類にはバラエティが存在し、1類では横幅3cm未満の小型品(87)、4～6cm未満の中型品(88・90～92)、6cm以上の大型品(86・89)などがある。2類では、体長4cm以下の小型品(100)、5～6cm未満の中型品(94～96・99)、7cm以上の大型品(97・98)に分けられる。尚、1類の92と2類の98は未製品の可能性もある。

石材は、チャートが18点と最多を占め、次いで黒色頁岩が10点、黒色安山岩が4点、ホルンフェルスが2点、黒曜石・頁岩・褐色碧玉が各1点である。

f. 削器類 (第483・484図52～78、第495・496図104～116)

総数588点が存在する。不定形の横長剥片や縦長剥片を用材として、その縁辺部に粗雑な刃部加工を施すものと、刃こぼれ状の使用痕をもつ2つのタイプがあるが、両者とも類似した部位に機能部を有することから、ここでは区別していない。また、僅かながら存在する先端の刃部角度が60度を超える搔器的なものについても、削器類として一括した。

「打製系列」の中では、打製石斧に次いで点数が多く、横長剥片を使用する1類が133点(57・59・60・62・63・66～73、105・109～116)、縦長剥片の2類が419点(52～56・58・61・64・74～78、104・106～108)存在し、縦長剥片を利用する頻度が高い。剥片形状と機能部位の関係については、正確に把握をしていないが、横長剥片は下縁部を、また縦長剥片は両側縁部を機能部とすることが一般的である。

平均的な大きさ(長さ×幅)や重量は、横長剥片系が60mm×53mm、重さ52g、縦長剥片系が56mm×42mm、重さ43gとなり、両者ともに類似した大きさをもつが、こうした点は後述する黒色頁岩を中心とした剥片の様相と軌を一にしており、両者の相関関係を看取できる。また、57～61・107のような小形品にはチャートが使用されている点も、先と同様の関係が窺える。

ところで、素材剥片の様態に関して、器面の片面あるいは縁辺に原礫面を残すものが多見されるが、これは表皮に近い副次的な調整剥片を利用していることを示唆している。こうした原礫面を残す資料の全体的な比率についてはカウントしていないが、掲載した資料の約6割に認めることができる。

石材は、黒色頁岩が65%と最多数を占め、次いでチャートが20%、黒色安山岩7%、ホルンフェルス4%、黒曜石2%などが主なものである。これらの他に、砂岩・細粒輝石安山岩・珪質頁岩・変質玄武岩を含めて、9種類の石材が利用されている。

g. 打製石斧 (第484～486図82～108、第497～500図129～170)

総数622点が確認されている。形態的には、撥形の2類が165点(82・87・92・95・96・101～103・

105 ~ 107、134 ~ 136・138・139・141・142・148 ~ 152・156 ~ 168) と最も多く、次いで短冊形の1類が73点(86・88・89・91・93・99、129 ~ 133)、撥形の両側面に浅い抉りが入る3類が21点(97・100・104、137・140・145 ~ 147・153)、尖頭状の7類が19点(85・90、143・144)、両測縁に浅い抉りが入る分銅形の4類が14点(108、154・155)、未製品の6類が6点(83・84・94、169・170)、欠損品の8類324点などがある。未製品の中で、83は4類の分銅型の製作途中品と考えられる。尚、1類とした129 ~ 133は、素材の原礫形状を留めたまま刃部のみを加工する一群であり、また2類の中には156 ~ 160・165 ~ 169などのように、刃部加工が片面の一方から行われるトランシェ的なものも存在していることから、内容的にはさらに細かい形態分類が可能である。

欠損品を除いた各類の大きさ(長さ×刃部幅)や重量の平均値は、1類が87mm×45mm・106g、2類が90mm×51mm・111g、3類が117mm×66mm・203g、4類が94mm×74mm・235g、7類が100mm×54mm・203gである。また、未製品の6類は150mm×88mm・579gであり、他の製品に比べて体長で1.5倍、重量で約2~5倍の差異が認められる。重量的に見れば、1類と2類、3類・4類・7類が各々共通性を持つと言える。また、各類ともに、リダクションなどの機能部再生品を含めて大・小形品が存在している。

二次加工のあり方では、水平回転技法によるa類、垂直打撃技法によるb類、a・b類の両技法が併存するc類に分けられる。この技法と形態との関係を見ると、a類では撥形の2類が98点(60%)と最多を占め、次いで1類が45点(28%)、7類が14点(8%)、3類が6点(4%)で、4類は認められない。b類もa類とほぼ同様であり、2類が37点(61%)、1類と3類が各11点(18%)、7類が2点(3%)となる。c類は、2類が23点(42%)、1類が15点(27%)、4類が12点(22%)、3類が4点(7%)、7類が1点(2%)となり、4類の占める比率が高

いことと7類が極めて僅少な点が特徴的である。このように、短冊形の1類や撥形の2・3類には、水平回転技法や垂直打撃技法および両技法の併用を含めて全技法が存在するが、分銅形の4類には両技法の併用例のみが存在し、また尖頭形の7類にはその併用が欠落する傾向にあるなど、技法的な偏在性が看取される。

素材の面では、幅広の大形剥片を用いるとともに、その主剥離面が石斧の長軸に対して横位あるいは斜位になるように調整加工を施すケースが、各類ともに主体を占めている。また、原礫面の残存状況は、片面に原礫面を残す②類が248点(73%)に及び、その状態から見て大きな原礫からの素材剥片を用いていると考えられる。他に、表裏両面が剥離面で構成される①類が77点(23%)、両面に原礫面を残す③類が15点(4%)それぞれ認められる。先の形態分類との関係で見れば、②類で最多となるのは撥形の2類の74点(52%)であり、次いで短冊形の1類37点(26%)、撥形の3類18点(13%)、分銅形の4類7点(5%)、尖頭形の7類6点(4%)となる。また、①類でも2類が23点(70%)と最も多いが、4類と7類の各3点(9%)がこれに次ぎ、3類と2類が各2点(6%)となる。③類については、総数10点と僅少で全体的な傾向把握には無理があるが、1類が6点と最多を占め、2類2点、4類・7類が各1点で3類が存在しない。

刃部形状については、円刃のA類が全体の65%を占め、直刃のB類が17%、偏刃のC類が18%となる。先の形態分類との関係では、A類には1~4・7類の全てが、またB類には1~3類のみが各々認められ、C類では4類が欠落する。リダクション等も考慮すれば、両者の相関性は不明確だが、B・C類については、欠損後に粗雑な再加工をしたものが含まれており、A類の形状が基本的なものと考えられることができる。

使用による磨耗痕については、全点の状況観察をなし得ていないが、およそ約4~5割に認めらる。短冊形や撥形の1~3類の磨耗痕は、表裏両面の刃

Ⅲ 今井見切塚遺跡の調査

部から体部中央にかけて縦方向に残るが、その程度はどちらかの片面が弱い。また、4類の分銅形は表裏両面にやはり縦方向を主体とする摩耗痕と、挟入部を横断するものが残る。1～3類の場合は、棒柄に密着する内側とその外側という装着面の差異を反映していると考えられる。

全体の欠損品の比率は66%に及ぶが、破断面での欠損方向は基部から刃部への長軸方向の平坦面に対して、垂直方向からの加力によって折れたものが多い。また残存部位の比率は、基部だけのⅡ6類が各167点(41%)、刃部のみⅡ4類が73点(18%)、体部中位のみⅡ8類が52点(13%)、刃部から体部中位のⅡ2類が37点(9%)、体部中位から刃部のⅡ3類と部位不明の小破片のⅡ9類が各26点(6%)、刃部を欠損するⅡ5類が18点(4%)、片側縁部のみのⅡ7類が7点(2%)、基部を欠損するⅡ1類が2点(0.5%)となる。Ⅱ1類とⅡ6類、Ⅱ2類とⅡ3類、Ⅱ4類とⅡ5類は、各々補完的な対応関係にあるが、相互に接合する例は極めて少ない。Ⅱ6類が全体の4割を占める残存部位の偏在性は、今井三騎堂遺跡でのあり方とは異なるが、欠損品が完形品を凌駕している点を重視すれば、棒柄に装着したまま欠損品を集落内に持ち帰ったことや、打製石斧の使用場所が集落内にも存在したことが想定される。

石材は黒色頁岩が73%を占め、他にホルンフェルス13%や黒色安山岩12%が主要なものである。これら以外に、砂岩・細粒輝石安山岩・変玄武岩などを含めて10種類の石材が用いられるが、それらを合計しても2%に過ぎない。このような黒色頁岩を主体とする用材傾向は、他の「打製系列」の石器群の中でも際だつていると言える。

これら石斧の帰属時期については、今井三騎堂遺跡で既述したように、竪穴住居での伴出例を考慮すれば、2類の中でトランシェ様一群は花積下層式段階に、垂直打撃技法を多用する3類は諸磯式段階に、分銅形の4類は中期後半以降に比定される可能性が高い。

h. 三角錐形石器(第502・503図180・185～187)

総数36点が存在する。欠損品の中には、石核や剥片との識別が難しいものもあり、数量的には先の倍以上が存在すると想定される。整形加工を加味した分類では、体部に1～2面の原礫面を残して底面が複数の剥離面により構成される2類が30点(180・185～187)、2類と同様の大部加工と底面が1回の打割・剥離面で構成される1類5点(未掲載)、体部に原礫面を残さない3類1点(未掲載)に分類される。機能部の底面と背面との角度が、60度前後のもの(180・185・186)と、90度に近いもの(187)があり、前者は背面との鋭角部を利用しての搔くなどの機能が、後者はフラット面を利用しての磨る・敲くなどの機能が想定される。

大きさや重量の平均値は、長さ10cm、幅5cm、重さ302gであるが、180のように長さ16cm、重さ587gの大形品に対して、186のように長さ8cm、重さ133gの小形品も存在し、その格差が大きい。これは、使用過程で底面の機能部再生を繰り返した結果と考えられる。

石材は、全て黒色頁岩を使用しており、形態的には類似するスタンプ形石器との大きな差異でもある。帰属時期的は、草創期後半の稲荷台式を中心とした段階と考えられる。

i. 礫器(第486図109～111、第501図171・172)

総数23点が存在する。片面に原礫面を残す剥片を素材として、機能部の側縁にかなり粗い二次加工を施し、刃部角度が約45～60度を測るものが多い。形態的には、半月形状のもの(109～111、172)を主体に、楕円形状のもの(171)も認められる。平均的な大きさは、長さ9cm、幅8cm、厚さ4cm、重さ460g前後であり、肉厚となる。石材は、黒色頁岩が70%を占め、他にホルンフェルスや黒色安山岩が利用されるなど、先の打製石斧と同様に「打製系列」の中でも大形器種に特有のあり方を示す。

j. 楔形石器(第495図101～103)

総数3点が存在するのみである。全点ともに、縦長剥片の上下両端に対向する剥離痕が認められる。石材は、チャート・黒曜石・赤碧玉を各々使用する。

B. 使用痕系列

a. スタンプ形石器 (第 487・488 図 116 ~ 124、第 501・502 図 177 ~ 179・181 ~ 184)

総数 49 点が存在し、体部側面や底面部の加工状態から 1 ~ 8 類に分類される。主体を占めているのは、両側縁部の加工と底面が 1 回の打割で形成される 5 類 37 点 (124、183) であり、次いで 5 類と同様の底面加工を施して体部側縁が無加工の 1 類 29 点 (116 ~ 121、177 ~ 179)、一側縁部への加工と 5 類と同様の底面を持つ 3 類 6 点 (122・123、182)、両側縁部の加工や底面にも複数回の整形加工を施す 4 類 2 点 (181)、両側縁部が無加工で底面に複数回の整形加工を施す 2 類 1 点 (184) などの他に、小破片で分類不能な 8 類が 4 点存在する。

側縁部の整形加工の有無は、素材として用いる石材の大きさに規定されているが、両側縁の加工が必要な 5 類が最多を占める状況は、その選択性にかなり幅があることを示している。しかし、1 類も相当数が存在することを加味すれば、その幅はさほど大きくはなく、基本的には加工不要な適度の大きさの棒状礫を選択する指向性が看取される。また、底面部は 1・3・5 類のように 1 回の打割による形成を基本としており、2・4 類のように複数回の加工が施される例は少ない。

底面部の使用痕については、全点観察がなされていないが、掲載した 3 点 (120・121、177) の凸面部分に磨耗痕が認められるのみであり、総体的には約 2 割程度と少ない。また、体部やその上端部に敲打痕を持つ例も僅少である。

平均的な大きさは、体長 11 cm、底面幅 7 cm、重量 525 g であり、各個体間の差異が少ないことから、使用過程での再加工が基本的に行われていないことが窺える。

石材は、石英閃緑岩が 18 点 (37%) と最も多く、次いで粗粒輝石安山岩 9 点 (18%)、変質安山岩 5 点 (10%)、黒色安山岩 4 点 (8%) などが主なものである。この他に、砂岩・溶結凝灰岩や細粒輝石安山

岩など 7 種類の石材が認められるが、それらを合計しても 23% に過ぎない。基本的に、粒度のやや粗い石材を選択しており、三角錐形石器をはじめ「打製系列」の石器とは、大きな差異が認められる。

b. 磨石類 (第 488 ~ 490 図 130 ~ 145、第 504 ~ 506 図 200 ~ 222)

総数 1,298 点が存在する。円形や楕円形状の扁平な河床礫を素材として、その表面に使用による凹み穴・敲打痕や磨り面 (磨耗痕) を有するものを一括した。凹み穴と磨り面は複合することがかなりの頻度で認められ、また周縁部に敲打痕を持つものも多い。凹み穴は、基本的に多数回に及ぶ微細な敲打痕の集合により形成されているが、錐揉み状の回転動作によって形成された挿り鉢状を呈するものも希に存在する。

素材形状による分類では、小破片のために分類不能な 5 類 607 点を除くと、不定形の 4 類が 483 点 (70%) と最多で、楕円形の 2 類が 110 点 (15%)、棒状の 3 類が 52 点 (8%)、円形の 1 類が 47 点 (7%) となる。

凹み穴・磨り面・敲打痕の形成状況は、磨り面と敲打痕が複合する ac 類が 225 点 (33%)、凹み穴・磨り面・敲打痕が複合する abc 類が 171 点 (25%)、磨り面だけで構成される a 類が 165 点 (24%)、凹み穴と磨り面が複合する ab 類が 113 点 (16%) となる。他に、凹み穴のみの b 類 10 点や、凹み穴・磨り面が複合する bc 類 7 点などもあるが、僅少である。こうした使用痕と形態分類との関係を見ると、片面に 2 個以上の凹み穴を持つ例は、楕円形の 2 類や不定形の 4 類に偏在する傾向にあり、掌に握って使用する際の重心位置と敲打点とが関連すると考えられる。

凹み穴と磨り面・敲打痕の形成段階における時間的先後関係については、全体の詳細な観察を行っていないために不明だが、掲載資料の多くは凹み穴の形成後に磨り面が形成されるケースが目立つ。

平均的な大きさは、1 類が長径 79 mm × 短径 59 mm、重さ 236 g、2 類が長径 103 mm × 短径 76 mm、重さ 450 g、3 類が長径 142 mm × 短径 56 mm、重さ 428 g、

Ⅲ 今井見切塚遺跡の調査

4類が長径96mm×短径72mm、重さ442gであり、重量的には2～4類はほぼ同一である。

石材は、粗粒輝石安山岩が1,110点(86%)と最多を占め、他に石英閃緑岩71点(5%)、砂岩39点(3%)、溶結凝灰岩27点(2%)など12種類の石材が認められるが、僅少である。粗粒輝石安山岩は、当遺跡の近縁を流れる河床に豊富に存在しており、これらを石材として利用していることが想定される。

c. 敲き石(第488図128・129、第503図195～199)

総数14点が存在する。長さ7～13cm、幅3～6cm、重さ60～450gの棒状礫を素材として、その先端部を中心に敲打痕や衝撃による剥離痕を持つ。石器製作のハンマーストーンと考えられる。129・195のような小形品と、196のような大形品があり、バラエティに富んでいる。また、体部は全体的に手ずれ状の磨耗が認められ、平滑である。

石材は、黒色頁岩7点とホルンフェルス3点が主なものであり、他に珪質頁岩・砂岩・変質安山岩・石英閃緑岩が各1点認められ、磨石類などの使用痕系列に較べて粒度が細密で硬質の石材を選択している。

d. 砥石(第488図125～127、第503・506図188～194・223)

総数67点が存在する。内容的には、溝状の使用痕を持つ2類が44点(125～127、191～194)、砥面が平坦で溝状の使用痕を持たない1類が18点(188～190、223)、分類不能の小破片が5点である。2類の溝状使用痕は、幅5～10mm、深度1～2mm前後でなだらかなU字状の断面形を持つ直線的なものが主体的であるが、一定方向に複数本が並行する場合と、不規則に走向して相互に切り合う状態のものがある。193は溝の深度が5mm前後と深く、V字状の断面形を持つ点で他とは異なる。一方、1類は砥面がカーブ状に幅広く湾曲するものを主体としているが、194や223はやや平坦な状態である。

完形品に見る大きさは、長さ60～80mm・幅40～90mm・厚さ10～20mm・重さ30～90gの小形品(127、

188～190)と、長さ100～150mm・幅60～90mm・厚さ30～40mm・重さ150～450gの中形品(194)、それに長さ400mm・幅170mm・重さ9,500gの大形品(223)が認められる。

石材は、砂岩が46点と最も多く、次いで粗粒輝石安山岩の10点、牛伏砂岩の5点などが主なものである。この他に、黒色頁岩・黒色安山岩・ひん岩・流紋凝灰岩・凝灰岩・絹雲母片岩などが各1点存在する。先の小形品には、牛伏砂岩を用いるものが多い。

e. 石皿(第491図148～150、第508～510図226～231)

総数98点が存在する。形態的には、その周縁部に縁付加工される4類が28点(148、227・228・230)、不定形な3類が4点(149・150、226・231)、楕円形状の2類が1点(229)、分類不能な小破片の5類が65点となる。4類には、周縁突端部の片側が片口状に開口するもの(228)と、しないもの(229)とがある。また、同類には裏面を中心にして、多孔石に類似した錐揉み状の凹み穴が付されるものも多見される。欠損品の割合は96%に達しており、使用用途での破損というよりも、むしろ意識的な破損行為の存在を考慮する必要があるだろう。

完形品に見る大きさは、149のように長径16cm、短径15cm、重さ2kgの比較的小形なものと、229のように長径50cm、短径27cm、重さ15kgの大形品があり、その差異が大きい。全体的には、不定形の3類に小形品が多く、定形的な4類に大形品が多い傾向が認められる。

石材は、いずれも扁平な河床礫を素材としているが、粗粒輝石安山岩を用いるものが64点と最も多く、他に近隣の河川では産出しない緑泥片岩19点や、石英閃緑岩5点、絹雲母片岩4点などを含めて、8種類の石材が認められる。

各石皿の帰属時期については判然としないが、4類の縁付に関しては前期の所産と考えられ、また3類の小形品については草創期後半の撚糸土器に伴う可能性が高い。

C. 複合技術系列

a. 磨製石斧（第 484 図 78～81、第 496・497 図 117～128）

総数 48 点が存在する。形態的には、定角的な 2 類が 15 点（79、117～119・121・123～127）と主体を占め、乳棒状の 1 類が 5 点（80、122）、礫素材の局部磨製の 3 類が 1 点（128）の他に、未製品の 4 類 4 点と分類不能の小破片の 5 類 18 点（81、120）などがある。1 類は基部が尖頭状となる点で特徴的であるが、2 類の 121・123 など側縁部の平坦化が顕著ではなく、両者の差は小さい。また、4 類の未製品については、いずれも欠損しているために 3 類と明確に区別しにくいものもあり、そのいくつかは 3 類に分類される可能性もある。127 や 128 は片面に原礫面を残すが、前者は各面を定角状に研磨するのに対して、後者は剥離面を大きく残して刃部付近のみを研磨することとまっている。製作技法的には、1・2 類に直接打撃→敲打→研磨などの工程が窺えるが、23 号住居の柱穴内から出土した小形磨製石斧（第 482 図 19）は、擦り切り技法により製作されており、2 類の小形品には同様の技法が採用されていた可能性もある。

欠損品の比率は 85% に及ぶが、欠損部位の状況は上半部欠損の II 2 類と刃部のみ残存の II 4 類が各 5 点と最多であり、次いで基部残存の II 6 類が 4 点、基部欠損の II 1 類や刃部から体部中位を欠損する II 3 類および刃部欠損の II 5 類が各 1 点、それに小破片の II 9 類が 23 点となる。

完形品の大きさ（長さ×幅・重量）を 2 類で見ると、40 mm×10～20 mm・3～7 g の小形品（117～119）、100 mm×40～70 mm・150～200 g の中形品（121・126・128）、240 mm×70 mm・1,000 g の大形品（123）などが存在する。

石材は、凝灰岩が 20 点と最多であり、次いで変玄武岩の 6 点、黒色頁岩の 5 点、変質蛇紋岩の 4 点などが主なものである。この他に、変輝緑岩・緑泥片岩・絹雲母片岩をはじめとして、9 種類もの多様な石材

を使用している。凝灰岩や変玄武岩・変質蛇紋岩などの石材については、その調整剥片や石核は皆無に近い状況であり、1・2 類のほとんどの製品が遺跡外から完成品としてもたらされたことを窺わせる。

b. 多孔石（第 490 図 146・147、第 507 図 224・225）

総数 62 点が存在する。不定形の亜角礫を素材として、基本的に整形加工を施さずに用いている。各個体ともに、表裏面を中心にして多数の凹み穴が付されており、穴の形状は錐揉み状の回転運動による逆円錐形を呈するものが主体的であるが、凹み石に類似した集合打痕状の穴も僅少なながら認められる。また、225 を除いて表面に僅かな磨り面が存在するが、石皿のような使用による磨耗痕というよりも、整形過程での研磨面に近い。

全体の 68% が欠損品であり、石皿と同様に意図的な破損が想定される。

大きさは、長径 10～40 cm、短径 10～30 cm、重さ 0.5～9 kg と多様であるが、石材は全て粗粒輝石安山岩を使用している。

c. 装飾品類（第 491 図 151・152、第 511 図 232～237）

塊状耳飾り 5 点（151、232～234）、管玉 1 点（152）、玉 2 点（236・237）、垂飾 1 点（235）と、垂飾に類似した貫通孔をもつ石製品（153）などが存在する。塊状耳飾りは欠損品が多く、全体形状の判別できるものは少ないが、232 のような中央孔が大きい「浮輪形」と、233 のような「金環形」の 2 タイプを認めることができる。管玉・玉類も欠損品が多く、穿孔状況を把握しにくいのが、237 などは両面からの穿孔である。

石材は、塊状耳飾りが蛇紋岩と葉ろう石、管玉と垂飾が葉ろう石、玉が蛇紋岩と言うように、相互に共通した石材を使用しているが、153 の石製品は牛伏砂岩を用いている点で異なる。どちらかと言えば、砥石に近似しており、転用品の可能性もある。

これらの装飾品類の時期については、232 の塊状耳飾りが花積下層式期の 11 号住居の埋没土上層と想定

Ⅲ 今井見切塚遺跡の調査

される位置から出土しており、同期に帰属する可能性が高い。また、これ以外の管玉や玉類も同期に近接した時期と推定される。

D. その他

a. 石核・原石（第 486・487・491 図 112～115・154・155、第 501 図 173～176）

石核が 927 点、原石が 5 点（154・155）存在する。剥片の剥離方法は、原礫平坦面や分割礫の剥離平坦面を打面にして、ほぼ一定方向に剥離を繰り返すものが主体的であり、対向辺に打点を移動させたり、周縁からの求心的な剥離を行っているものは少ない。掲載した資料も、173 を除いてそのほとんどが、上記のような剥片剥離を行っている。また、173 は打点を移動しながら周縁部を削ぎ落とすような、剥片剥離をする例である。

各石核の大きさは、第 480 図に示したように、石材によりかなり大きな差異が認められるが、ここでは数量的に多数を占める黒色頁岩をはじめ、ホルンフェルス・黒色安山岩・チャート・黒曜石について見てみよう。黒色頁岩は、長径 4～8 cm・短径 2～7 cm・重さ 30～200 g のサイズが中心的であるが、長径 8 cm 以上・重さ 200 g 以上も 1 割強認められ、最大サイズには長径 12 cm・短径 10 cm・重さ 1,100 g が存在する。点数は少ないが、ホルンフェルスもこれに類似しており、長径 13 cm・短径 11 cm・重さ 2,000 g の最大サイズがある。黒色安山岩もこれらに近似するが、一回り小振りなものが主体的であり、最大サイズも長径 8 cm・短径 7 cm・重さ 290 g にとどまる。チャートは、長径 2～5 cm・短径 1～3 cm・重さ 5～40 g を主体としており、前出の三石材に比べてその小型振りが顕著であるが、長径 5 cm 以上・重さ 40 g 以上が 1 割弱存在し、最大サイズは長径 10 cm・短径 4 cm・重さ 170 g を測る。黒曜石は、長径 1～4 cm・短径 1～2.5 cm・重さ 3～10 g を主体とし、最大サイズも長径 6 cm・短径 5 cm・重さ 76 g と他の石材に比べて、その小ささが際立っている。

これらの石核は、廃棄されたものが主体を占める

と考えられ、その大きさも使用当初の状況を示すものではないが、およそ黒色頁岩・ホルンフェルス・黒色安山岩が小～中形剥片を、またチャート・黒曜石が小形剥片を作出したことが看取される。大きさ的には、前者からは三角錐形石器や石匙・削器・小形打製石斧の素材剥片が作出可能であるが、体長 15 cm を超えるような打製石斧の素材剥片は作出できない。一方、後者からは石鏃・石錐や小形の石匙・削器などの素材剥片の作出が精一杯のところであり、実際に黒曜石ではほぼ石鏃に限定されている。154・155 は、黒曜石の角礫状の原石であるが、それぞれ長径 5.0 cm・短径 4.2 cm・重さ 40 g と長径 6.2 cm・短径 4.6 cm・重さ 76 g に過ぎない。黒曜石の場合には、こうした原石のサイズから見ても、石鏃という器種に特化して用いられた可能性が高い。

石材別の数量・重量（数量比率・重量比率）については、チャート 448 点・8,438 g（48%・14%）、黒色頁岩 337 点・40,716 g（36%・67%）、黒色安山岩 60 点・3,787 g（6%・6%）、黒曜石 40 点・396 g（4%・1%）、ホルンフェルス 36 点・7,394 g（4%・12%）などが主なもので、他に石英・瑪瑙・砂岩・石英閃緑岩・緑泥片岩・結晶片岩・黒色片岩・雲母石英片岩など 8 種類の石材が認められる。重量比率では、黒色頁岩とチャートとが高率を占めているが、「打製系列」石器における同石材の卓越性と整合的であり、他の石材を含めて原石を搬入した石器製作の存在を示している。ただし、サイズの全長が 15 cm を超えるような打製石斧の素材剥片を取ることは困難であり、ある程度加工された素材剥片の搬入も想定される。

尚、2 点の黒曜石製石核について X 線回折試験による産地同定を実施したところ、和田峠系 2（星ヶ塔）が 1 点（未掲載、分析番号 153）、高原山系 1 点（未掲載、分析番号 147）という結果を得ている。

b. 剥片

図としては掲載していないが、素材・調整剥片を含めて総数 16,973 点（137,129 g）が検出されている。

石材別の数・重量（数量比率・重量比率）については、

黒色頁岩 8,249 点・92,502 g (49%・67%)、チャート 6,035 点・17,557 g (36%・12%)、黒色安山岩 1,410 点・12,388 g (8%・9%)、ホルンフェルス 655 点・9,635 g (4%・7%)、黒曜石 444 点・379 g (3%・0.2%)、砂岩 80 点・1,345 g (0.4%・1%) などが主なものであり、その他に 11 種類の石材が認められる。黒色頁岩を筆頭にして、チャート・ホルンフェルス・黒色安山岩を中心とした状況は、先の「打製系列」石器や石核の石材の様相と一致しており、そのほとんどが同系列石器の製作に付随して作出あるいは排出されたものと言えよう。また、今井三騎堂遺跡でも触れておいたが、磨製石斧や装飾品類などの「複合技術系列」石器に多用される変玄武岩・変輝緑岩・砂質頁岩・変質安山岩・凝灰岩・蛇紋岩などは、これらの剥片中に皆無かあるいは極めて僅少であり、完成品として当遺跡外からの搬入されたことを示している。

主要石材の大きさ(長さ×幅)を相関図(第 481 図)で見ると、黒色頁岩では 20～60 mm×10～50 mm のものが主体を占めるが、長さ 60～100 mm サイズが 10% も認められ、また僅少なながらも 100 mm 以上が 0.3% 存在する。最大サイズは、142×79 mm を測る。全体的に見れば、中形剥片を中心にして小・大剥片までのバリエーションを持つ点特徴的である。ホルンフェルスと黒色安山岩は、ともに 15～60 mm×10～

40 mm を主体としており、黒色頁岩よりも若干小振りとなる。長さ 60～100 mm サイズは、ホルンフェルスが 12%、黒色安山岩が 6% であり、100 mm 以上が 0.4% と 0.2% になる。最大サイズは、前者が 139×101 mm、後者が 118×59 mm である。チャートでは、10～50 mm×5～30 mm サイズが主体的であり、長さ 50～70 mm が 14%、70 mm 以上が 0.1% に過ぎない。最大サイズは 95×16 mm で、先の三石材に較べれば明らかに小形剥片化している。黒曜石は 5～30 mm×5～20 mm サイズが主体を占め、長さ 30 mm 以上は 5% にとどまる。最大サイズは 51×14 mm であり、チャートよりもさらに小形化が著しい。

総体的に見れば、黒色頁岩は「打製系列」の全器種対応型石材であり、ホルンフェルス・黒色安山岩もこれに近似するが、チャートや黒曜石は小形器種限定型の石材であることが窺える。

c. 礫塊

総数 4,691 点が存在するが、調査中に石器以外の遺物として取り上げなかったものも相当量存在し、実際にはこの 10 数倍の数量が想定される。図としては掲載していないが、河床礫や亜角礫により構成されており、長径 1～10 cm 以下が全体の 92% を占め、10～20 cm が 7%、20 cm 以上が 1% となる。また、火熱によりその表面に赤化や煤状炭化物の付着が認められるものが 3,520 点存在し、10 cm 以下のものに

出土石器の器種別数量一覧

	打製系列									使用痕系列					
	尖頭器	舌有尖頭器	石鏃	石錐	石匙	削器類	打斧	くさび形	三角錐形	礫器	スタンプ形	磨石類	敲石	石皿	砥石
合計	20	3	368	76	37	588	622	3	36	23	49	1298	14	98	67

複合技術系列							その他				総計
磨斧	多孔石	管玉	玉	垂飾	袂状耳飾	石製品	剥片	石核	原石	礫塊	
48	62	1	2	1	5	2	16973	927	5	4691	26019

各種石器の分類別数量一覧(1)

石鏃

分類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	9類	10類
合計	47	146	34	10	4	1	4	2	58	62

石錐

分類	1類	2類	4類
合計	31	43	2

石匙

分類	1類	2類	4類
合計	14	15	8

播器・削器

分類	1類	2類	3類
合計	133	419	36

打製石斧

分類	1類	2類	3類	4類	6類	7類	8類
合計	73	165	21	14	6	19	324

三角錐形石器

分類	6類
合計	5

スタンプ形石器

分類	1類	2類	3類	4類	5類	8類
合計	29	1	6	2	37	4

III 今井見切塚遺跡の調査

各種石器の分類別数量一覧(2)

磨石類

分類	1類			2類				3類				4類					5類						
形態	a	ac	bc	a	abc	ac	bc	a	abc	ac	bc	a	ab	abc	ac	b	bc	a	ab	abc	ac	b	不明
合計	45	1	1	17	23	69	1	18	12	21	1	85	113	136	134	10	4	212	65	128	169	4	29

敲石

分類	2類	3類	4類	8類
形態	c	ac	c	c
合計	4	5	2	1

石皿

分類	2類	3類	4類	5類
合計	1	4	28	58

砥石

分類	1類	2類	不明
合計	44	18	5

磨製石斧

分類	1類	2類	3類	4類	5類
合計	5	15	1	4	23

多孔石

分類	4類				5類	
形態	a	abc	b	bc	abc	bc
合計	1	4	47	8	1	1

各種石器の石材別・重量一覧(1)

尖頭器

コード	1	2	3	5	7
点数	10	3	2	4	1
重量	174	9	108	68.4	7.2

有舌尖頭器

コード	1	5
点数	2	1
重量	5.9	6

石鏃

コード	1	2	5	6	7	12	45	46
点数	34	243	3	1	43	42	1	1
重量	61.4	548.1	4.3	1.6	90	34.3	0.5	0.8

石錐

コード	1	2	3	5	7	12
点数	21	48	2	1	1	3
重量	114.8	130	10.6	4.4	5.2	2.7

石匙

コード	1	2	3	7	12	24	44
点数	10	18	2	4	1	1	1
重量	221	115	256	45.7	5.2	4	7.5

搔器・削器

コード	1	2	3	4	5	7	9	11	12	16	24	28	34	38
点数	380	116	26	2	2	39	4	2	12	1	1	1	1	1
重量	20441	1098	2365	61.8	81.4	1704	303	80.4	46.5	219	32.2	110	74.5	3.5

打製石斧

コード	1	2	3	4	5	6	7	9	10	16	18	28	33
点数	454	2	78	2	2	3	70	5	2	1	1	1	1
重量	40103	87.4	10846	422	151	930	6642	227	658	353	151	183	26.6

くさび形石器

コード	2	12	45
点数	1	1	1
重量	16.2	未入力	7.5

三角錐形石器

コード	1
点数	36
重量	9085

礫器

コード	1	3	7	18
点数	16	5	1	1
重量	5554	1814	266	1628

石皿

コード	1	4	9	10	13	18	19	33	34
点数	1	64	2	1	1	1	5	19	4
重量	14500	52627	41.6	7054	17500	614	12568	8900	5152

スタンプ形石器

コード	3	4	6	7	9	15	16	18	19	43	47
点数	1	9	2	4	3	5	1	3	18	2	1
重量	465	3530	834	1490	1188	2731	670	1899	8885	884	525

磨石類

コード	1	3	4	7	9	15	18	19	25	31	33	34	40
点数	17	7	1110	15	39	1	27	71	1	2	3	4	1
重量	2911	1667	409060	1946	8329	452	8729	17591	185	36	206	239	48.1

敲石

コード	1	3	5	9	15	19
点数	7	3	1	1	1	1
重量	832	414	225	58.3	188	448

砥石

コード	1	4	7	9	20	23	29	31	34
点数	1	10	1	46	1	5	1	1	1
重量	13	1007	209	1771	9500	236	148	49.1	123

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

9. 包含層の出土遺物

磨製石斧

コード	1	3	4	6	9	10	13	21	31	33	34	41	42
点数	5	1	2	1	1	6	1	2	20	2	2	1	4
重量	328	26.3	27.4	58.4	28.3	1354	26.2	398	839	71.9	30.6	1.2	37.5

多孔石	石製品	管玉	玉	垂飾	玦状耳飾	原石
コード	コード	コード	コード	コード	コード	コード
4	23	53	41	54	41 53	1 8 12 14
点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数
62	2	1	2	1	3 2	1 1 2 1
重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量
127711	32.2	1.4	12.2	4.4	38.6 12	132 56.3 116 18.5

剥片

コード	1	2	3	4	5	7	8	9	12	13	18	19	24	31	33	34	38
点数	8249 (8223)	6035 (5900)	655	26	5	1410 (1405)	1	81	444 (416)	4	9	17	3	11	5	3	8
重量	(92502)	(17557)	9635	2094	46.6	(12388)	13.6	1347	(379)	24.3	381	458	28.6	181	50.1	1	67.7

剥片

コード	39	51	不明
点数	1	5	2(1)
重量	4.3	11.6	(2)

石核

コード	1	2	3	7	9	12	19	33	34	38	51
点数	336	448	36	60	1	38	1	1	1	3	2
重量	40584	8438	7394	3787	285	253	342	31.5	109	41.2	3.9

礫塊

コード	1	2	3	4	7	9	18	19	31	33	34	35	38	52
点数	24	139	38	3820	8	45	110	19	2	141	85	7	48	1
重量	1376	4735	3729	695285	541	2820	32509	1927	163	3956	1947	221	1452	2.7

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊における被熱・非被熱数量一覧

(1=被熱 2=非被熱)

分類	1	2	不明	総計
合計	3509	977	1	4487

被熱した石材別・重量一覧

コード	1	2	3	4	7	9	18	19	33	34	35	38
点数	13	70	10	3278	4	24	62	3	19	9	3	14
重量	617	2182	1574	499240	281	1457	28626	221	853	162	85.8	820

各種石器の長さ・重量一覧

剥片

長さ(mm)	~3.000	3.001~6.000	6.001~9.000	9.001~12.000	12.001~	重量(g)	~5.0	5.1~20.0	20.1~100.0	100.1~300.0	300.1~
合計	9928	5847	950	90	9	合計	10867	4055	1674	92	4

石核(黒曜石)

長さ(mm)	~2.0	2.1~3.0	3.1~4.0	4.1~5.0	5.1~	重量(g)	~1.0	1.1~5.0	5.1~10.0	10.1~20.0	20.1~
合計	8	13	11	4	1	合計	2	16	12	5	2

石核(黒曜石以外)

長さ(mm)	~2.0	2.1~4.0	4.1~6.0	6.1~8.0	8.1~	重量(g)	~10.0	10.1~100.0	100.1~200.0	200.1~500.0	500.1~
合計	16	344	272	163	84	合計	191	500	113	67	8

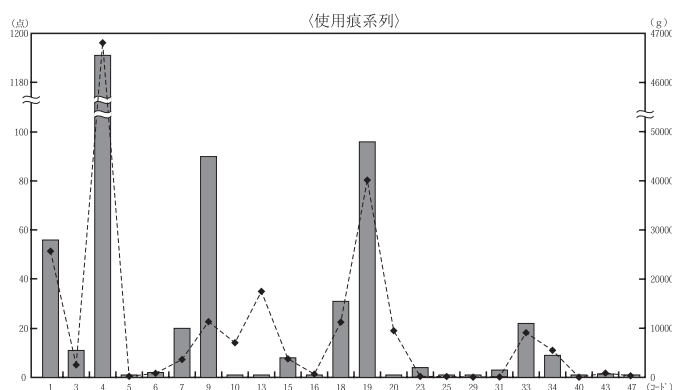
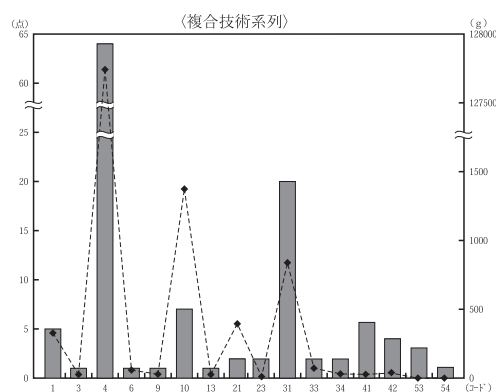
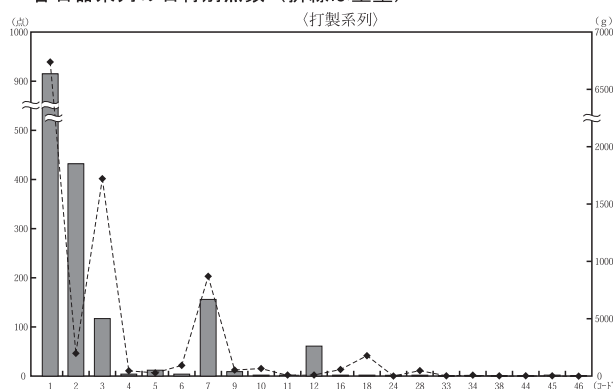
III 今井見切塚遺跡の調査

ついではその90%に被熱痕が認められる。重量については、1～100 g未満が2,792点(62%)と主体を占め、100 g～200 g未満が911点(20%)、200～300 g未満が285点(6%)、300 g以上が472点(10%)となる。

石材は、粗粒輝石安山岩が3,820点と最も多く、緑泥片岩141点、チャート139点、溶結凝灰岩110点、絹雲母片岩85点などの他に、9種類の石材が認められる。火熱を受けている礫塊の93%(3,278点)が粗粒輝石安山岩で占められているが、「打製系列」の石器で多用される黒色頁岩・黒色安山岩・ホルンフェルス・チャートなどの原石も含まれており、石器素材から除外されたものが転用されたものと考えられる。

こうした被熱礫は、前述したように長径10 cm以下の大きさを主体としているが、集石土坑から出土している礫塊とも類似しており、相互に何らかの関係性を有すると思われる。しかし、被熱礫の多量さに比べて集石土坑はあまりにも僅少であり、こうした点を考慮すれば、加熱処理された礫塊が掘り込みを伴わない状態で使用された可能性が高い。集石土坑を含めて、これらの礫塊は屋外での調理に関連すると思われるが、前期の竪穴住居内の炉には活発な使用状況に乏しいものも多数存在しており、基本的な調理が屋外で行われたことを示唆している。

各石器系列の石材別点数(折線は重量)



9. 包含層の出土遺物

出土石器の系列・石材別重量一覧

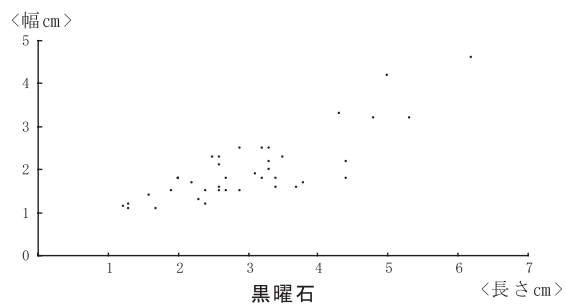
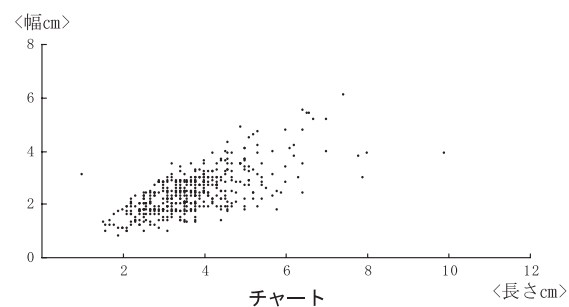
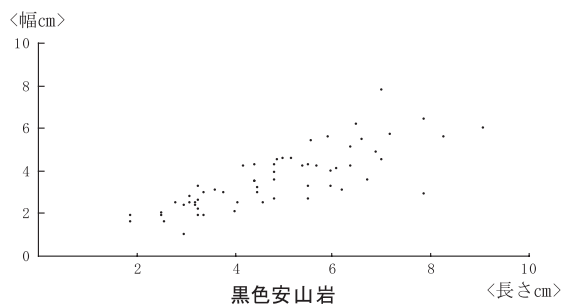
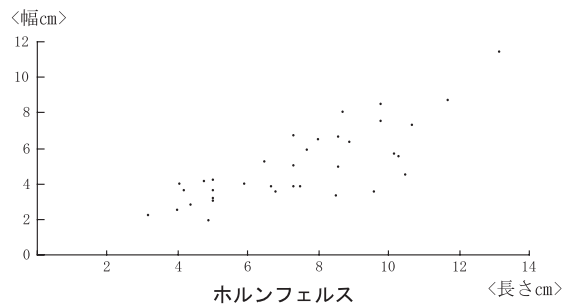
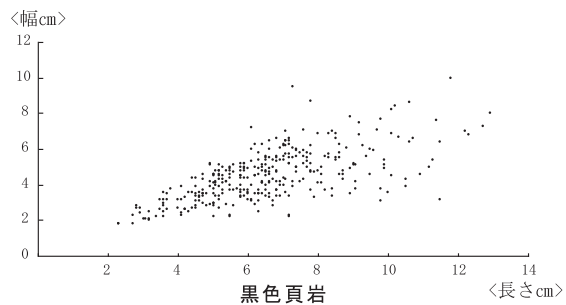
(単位：g)

石材名	石材 コード	打製系列		使用痕系列		複合技術系列		剥片		石核	
		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
黒色頁岩	1	963	75760.1	26	18255.9	5	327.7	8249(8223)	(92502.3)	336	40583.6
チャート	2	431	2002.7	0	0	0	0	6035(5899)	(17556.5)	448	8437.6
ホルンフェルス	3	115	15399.7	11	2545.9	1	26.3	655	9634.8	36	7394.4
粗粒輝石安山岩	4	4	483.9	1193	466224.3	64	127737.9	26	2094.4	0	0
珪質頁岩	5	13	315.3	1	225.2	0	0	5	46.6	0	0
細粒輝石安山岩	6	4	931.8	2	834.3	1	58.4	0	0	0	0
黒色安山岩	7	159	8759.4	20	3643.6	0	0	1410(1405)	(12387.7)	60	3787.0
黒色片岩	8	0	0	0	0	0	0	1	13.6	0	0
砂岩	9	9	529.9	91	11387.4	1	28.3	81	1346.9	1	284.7
変玄武岩	10	2	658.0	1	7054.4	6	1354.2	0	0	0	0
変質玄武岩	11	2	80.4	0	0	0	0	0	0	0	0
黒曜石	12	59(58)	(88.7)	0	0	0	0	444(410)	(379)	38	253.0
緑色片岩	13	0	0	1	17500.0	1	26.2	4	24.3	0	0
雲母石英片岩	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
変質安山岩	15	0	0	7	3370.5	0	0	0	0	0	0
灰色安山岩	16	2	572.2	1	670.1	0	0	0	0	0	0
石英斑岩	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
溶結凝灰岩	18	2	1778.6	31	11241.1	0	0	9	380.5	0	0
石英閃緑岩	19	0	0	95	39491.8	0	0	17	457.9	1	342.4
ひん岩	20	0	0	1	9500.0	0	0	0	0	0	0
変輝緑岩	21	0	0	0	0	2	397.5	0	0	0	0
砂質泥岩	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
牛伏砂岩	23	0	0	5	235.7	2	32.2	0	0	0	0
頁岩	24	2	36.2	0	0	0	0	3	28.6	0	0
角閃石安山岩	25	0	0	1	184.6	0	0	0	0	0	0
安山石	26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
砂質頁岩	27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
点紋頁岩	28	2	293.2	0	0	0	0	0	0	0	0
流紋凝灰岩	29	0	0	1	147.8	0	0	0	0	0	0
輝緑凝灰岩	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
凝灰石	31	0	0	3	85.1	20	838.5	11	180.5	0	0
雲石片岩	32	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
緑泥片岩	33	1	26.6	22	9105.3	2	71.9	5	50.1	1	31.5
絹雲母片岩	34	1	74.5	9	5513.9	2	30.6	3	1.0	1	109.0
結晶片岩	35	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
点紋緑泥片岩	36	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
片岩	37	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
石英	38	1	3.5	0	0	0	0	8	67.7	3	41.2
石英脈	39	0	0	0	0	0	0	1	4.3	0	0
閃緑脈	40	0	0	1	48.1	0	0	0	0	0	0
蛇紋岩	41	0	0	0	0	6	52.0	0	0	0	0
変質蛇紋岩	42	0	0	0	0	4	37.5	0	0	0	0
輝緑岩	43	0	0	2	883.5	0	0	0	0	0	0
褐色碧玉	44	1	7.5	0	0	0	0	0	0	0	0
赤碧玉	45	2	8.0	0	0	0	0	0	0	0	0
流紋岩	46	1	0.8	0	0	0	0	0	0	0	0
文象斑岩	47	0	0	1	525.0	0	0	0	0	0	0
粘板岩	48	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
礫岩	49	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
デイサイト	50	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
瑪瑙	51	0	0	0	0	0	0	5	11.6	2	3.9
滑石	52	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
葉ろう石	53	0	0	0	0	3	13.4	0	0	0	0
ひん輝石質岩	54	0	0	0	0	1	4.4	0	0	0	0
二ッ岳軽石	55	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明		0	0	0	0	0	0	2(1)	2.0	0	0
合計		1776 (1775)	(107811.0)	1526	608673.5	121	131037.0	16973 (16771)	(137168.3)	927	61268.3

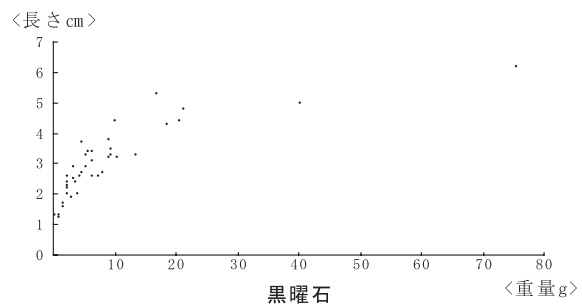
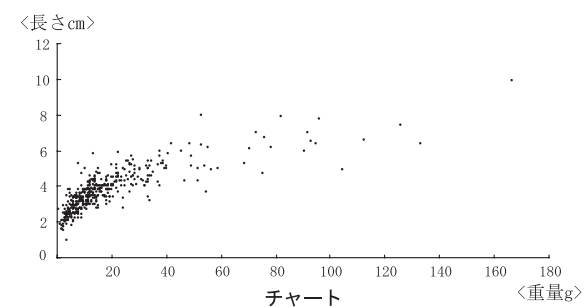
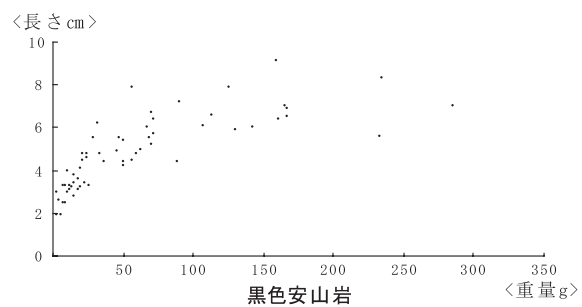
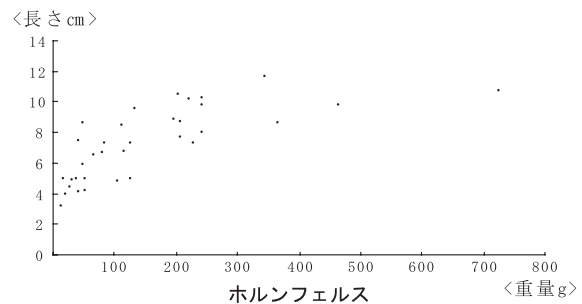
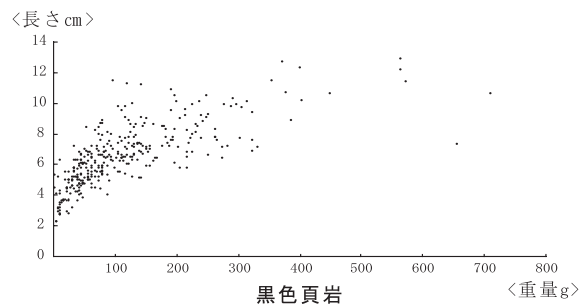
()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

III 今井見切塚遺跡の調査

[長・幅]



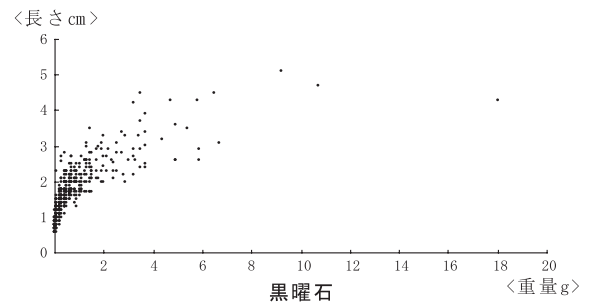
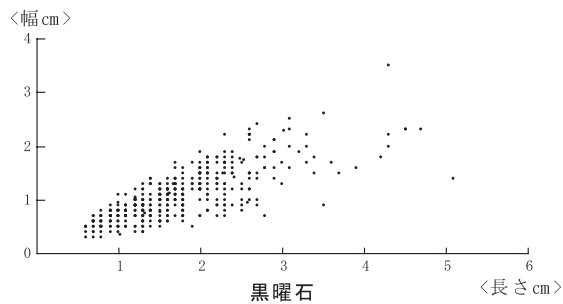
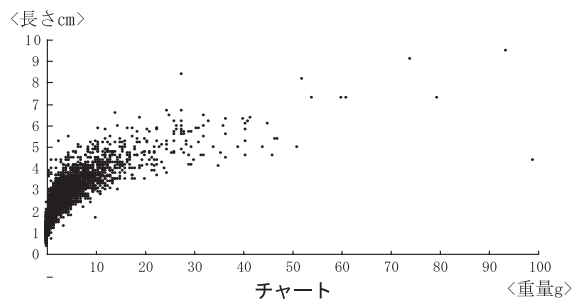
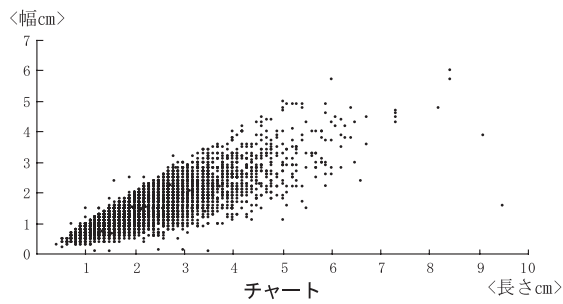
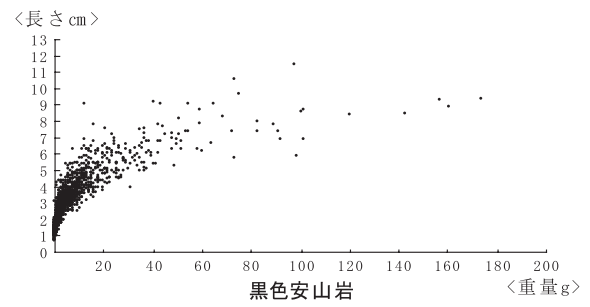
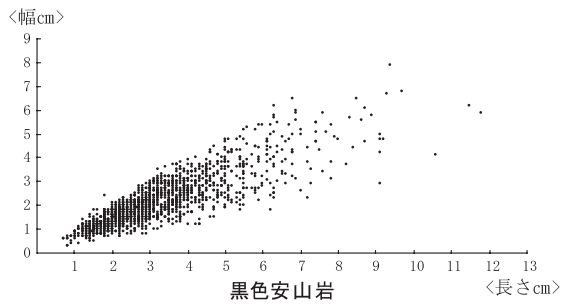
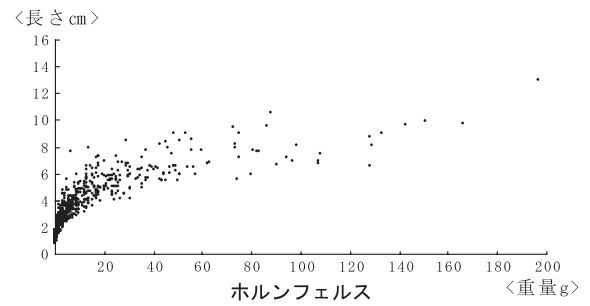
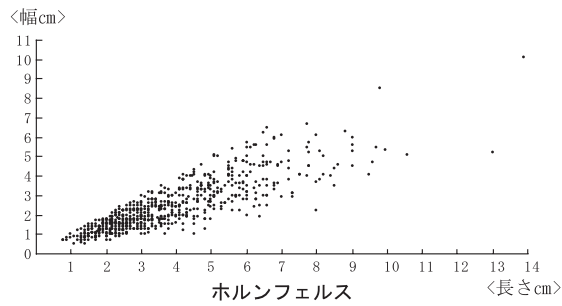
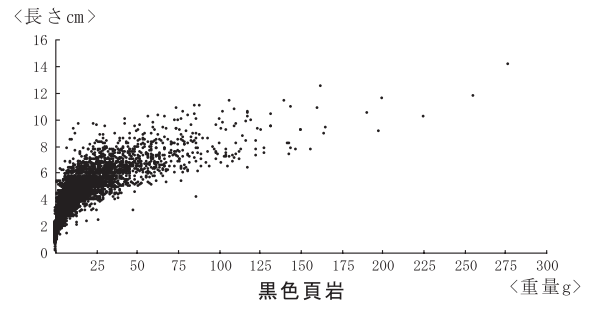
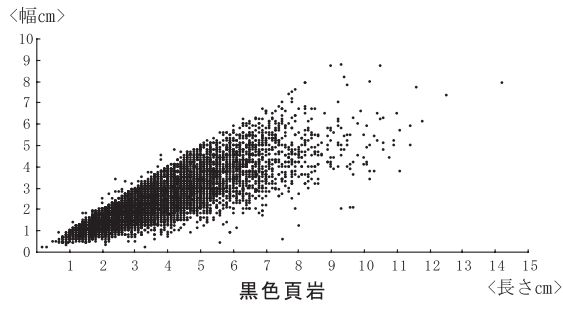
[長・重量]



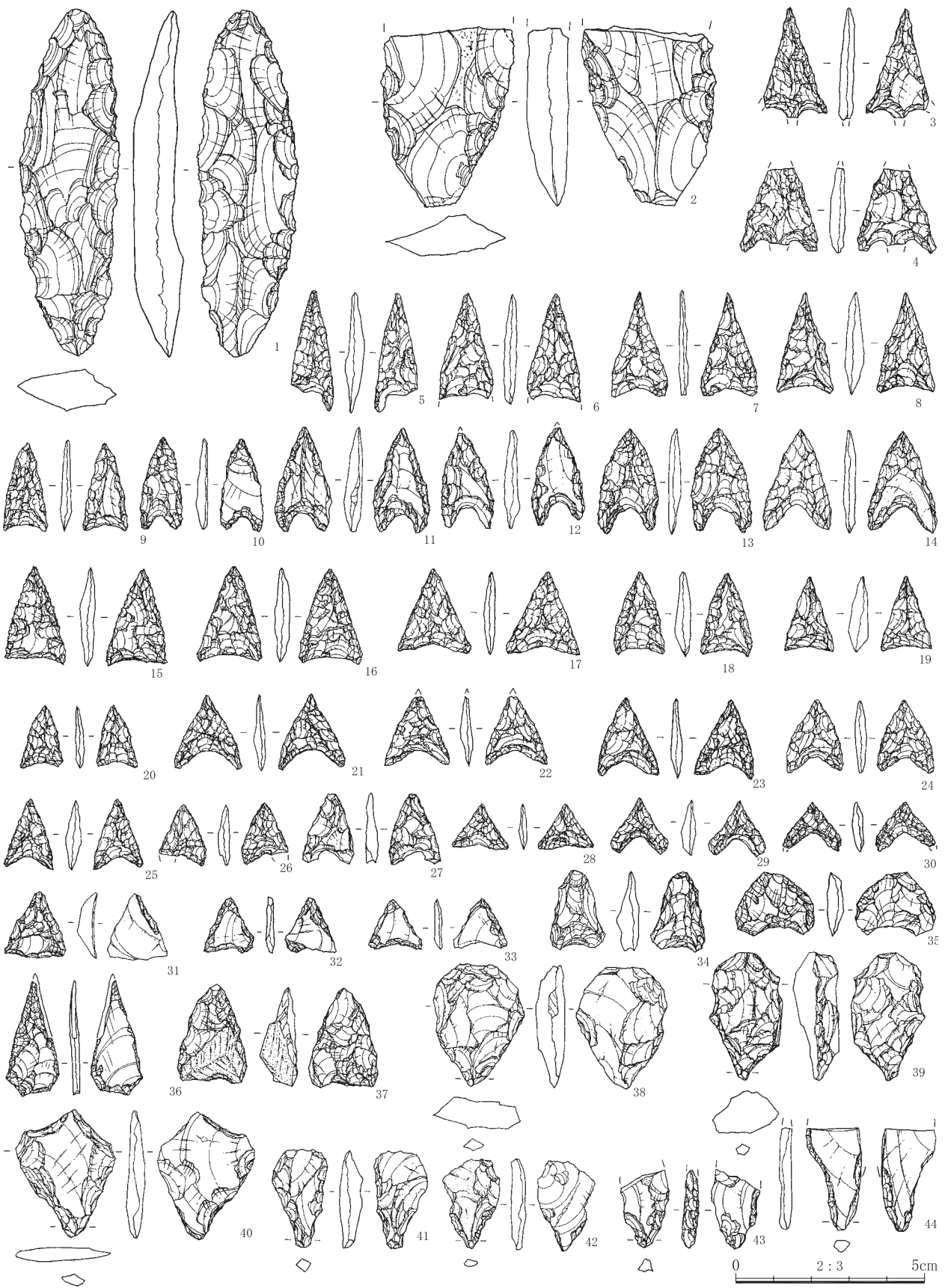
第 480 図 石核の長・幅・重量の相関図

[長・幅]

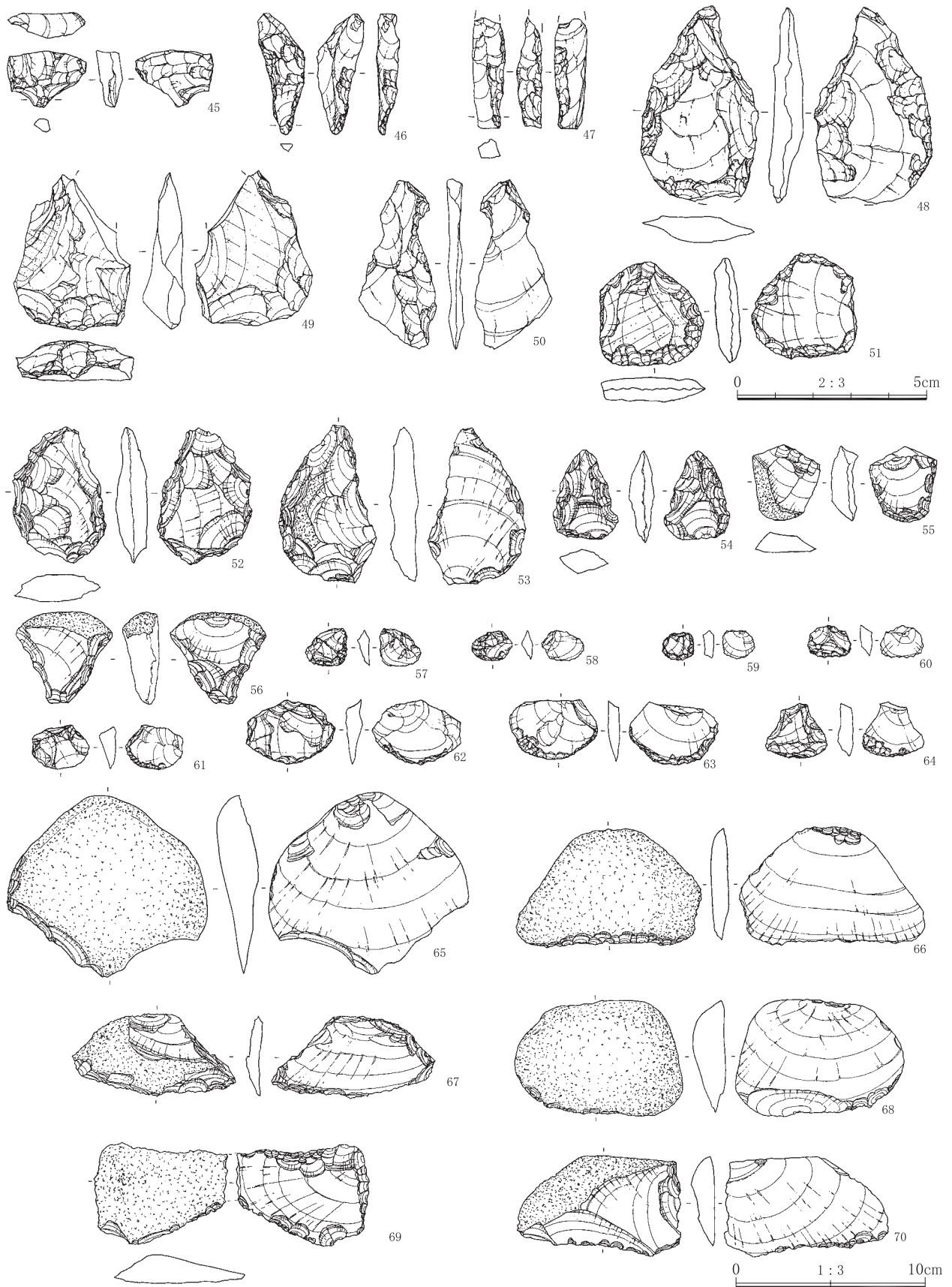
[長・重量]



第 481 図 剥片の長・幅・重量の相関図



第 482 図 1 区包含層出土の石器 (1)



第 483 図 1 区包含層出土の石器 (2)

III 今井見切塚遺跡の調査



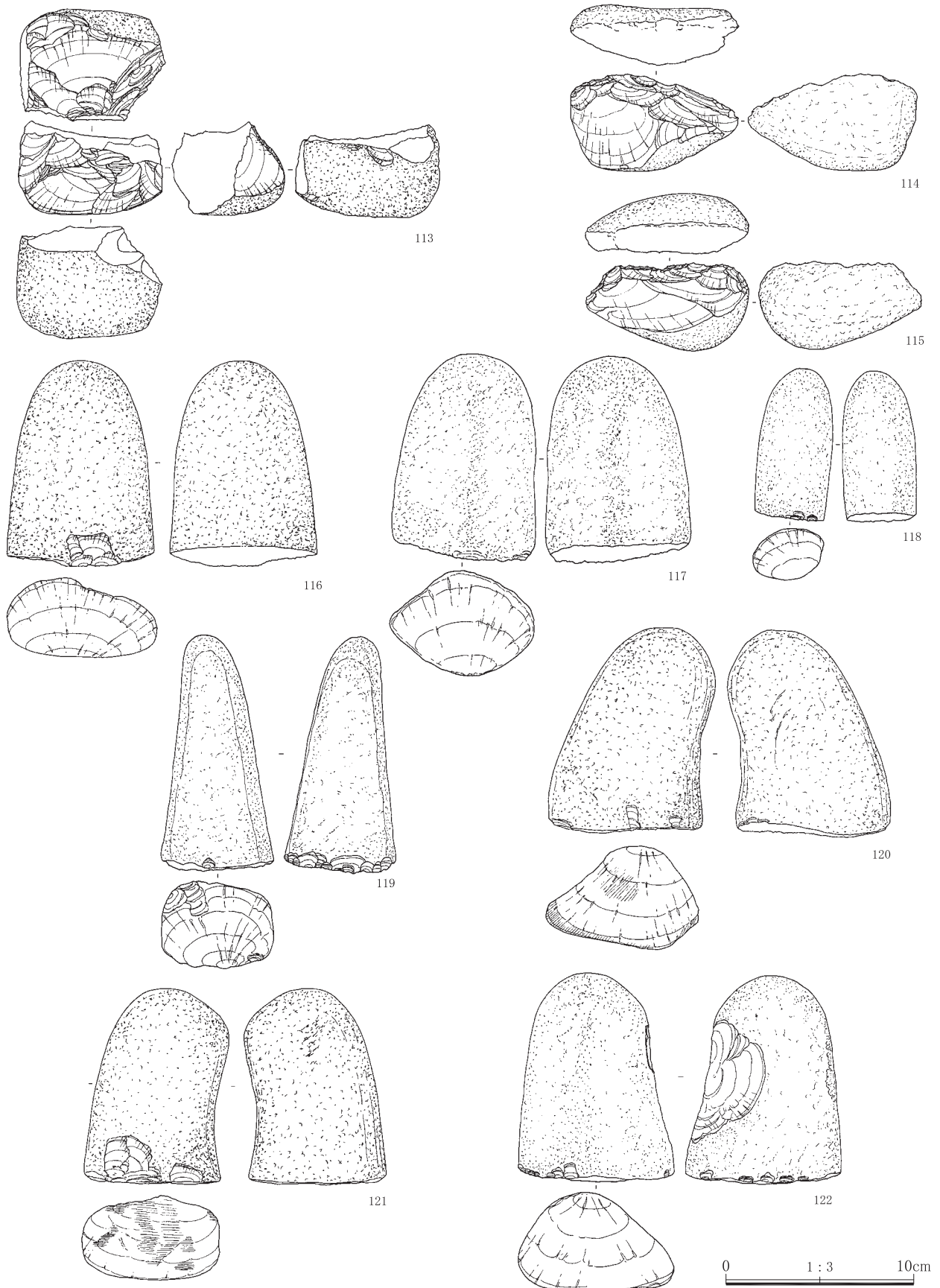
第 484 図 1 区包含層出土の石器 (3)



第 485 図 1 区包含層出土の石器 (4)

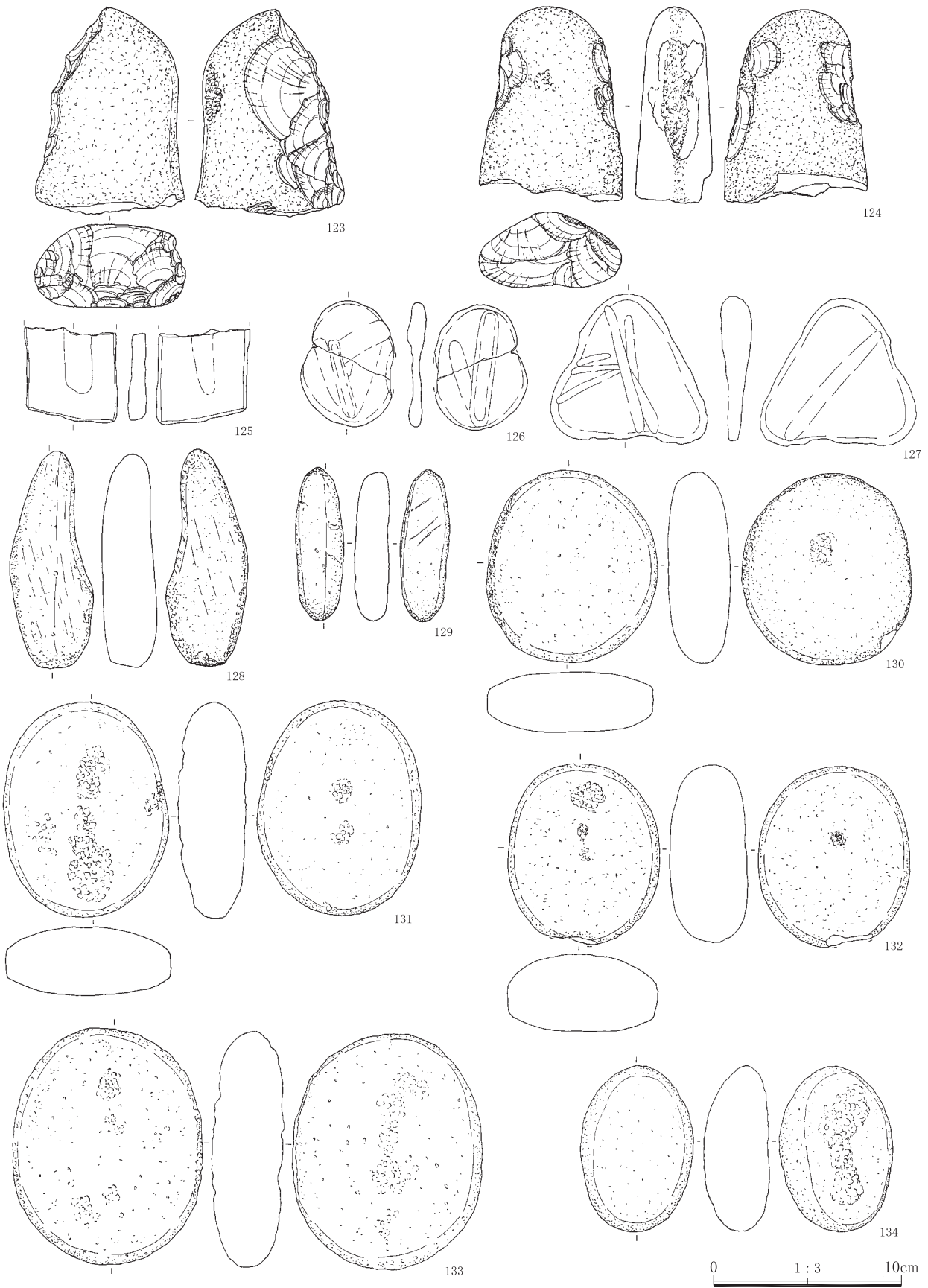


第 486 図 1 区包含層出土の石器 (5)

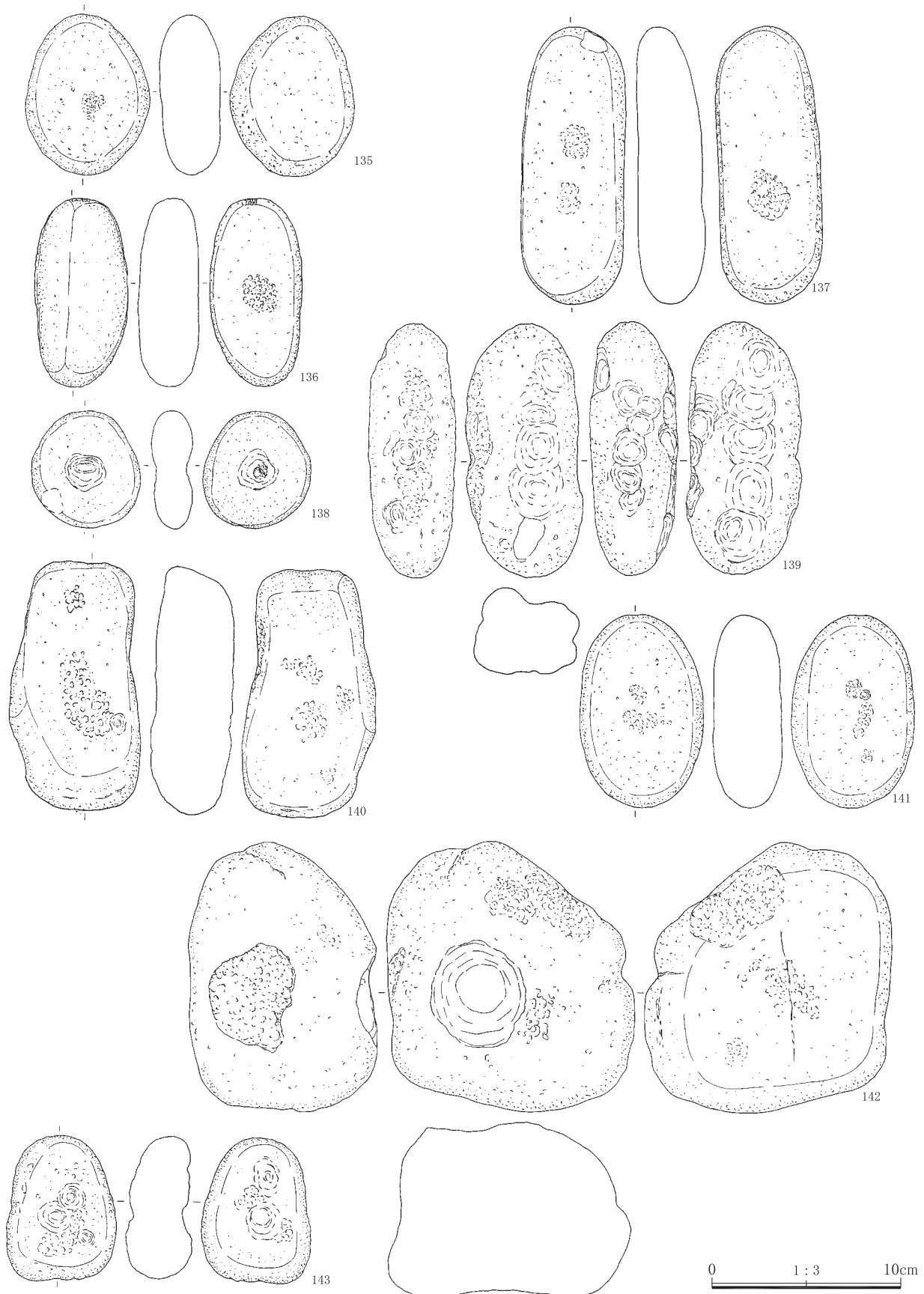


第 487 図 1 区包含層出土の石器 (6)

III 今井見切塚遺跡の調査



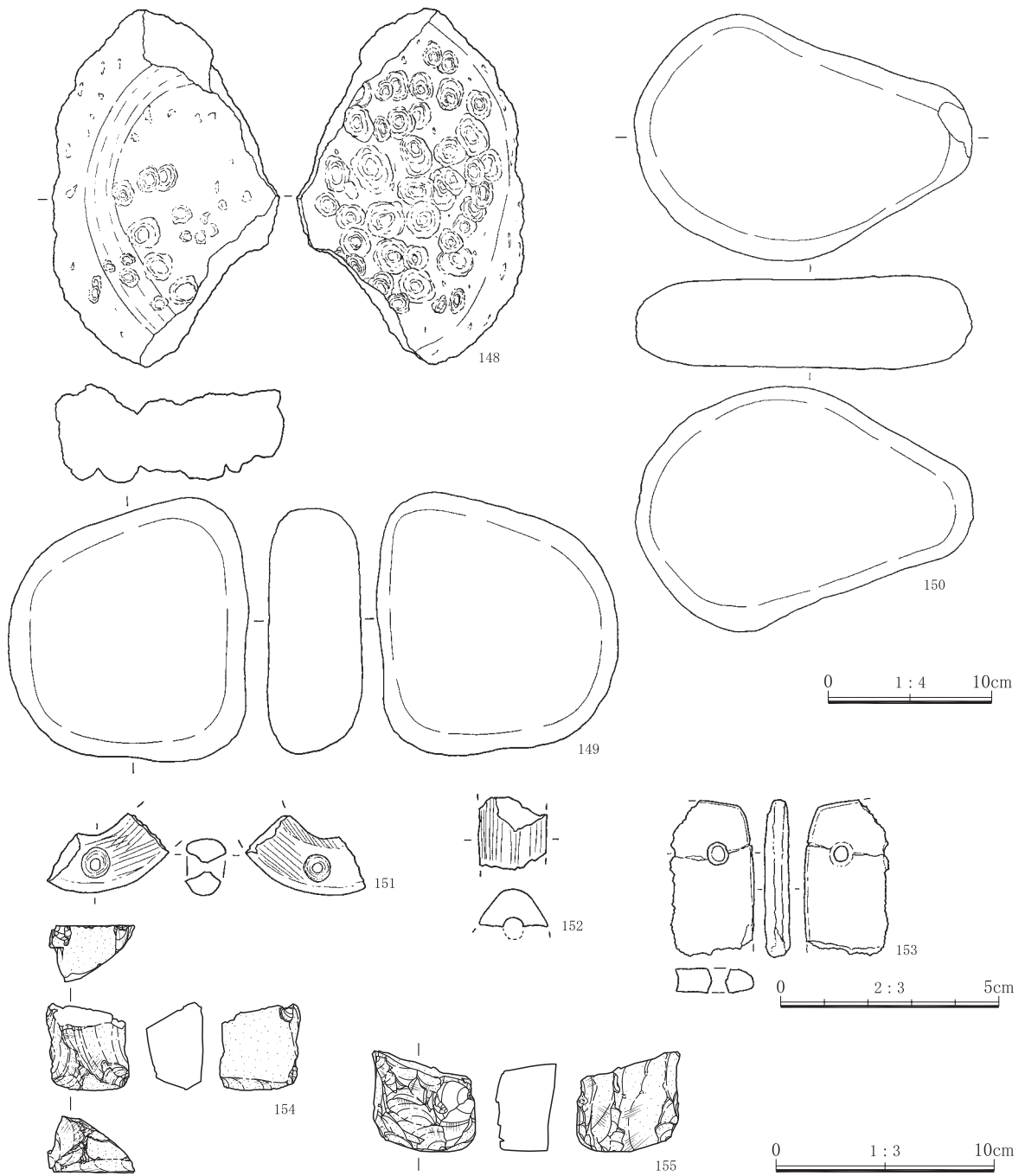
第 488 図 1 区包含層出土の石器 (7)



第 489 図 1 区包含層出土の石器 (8)

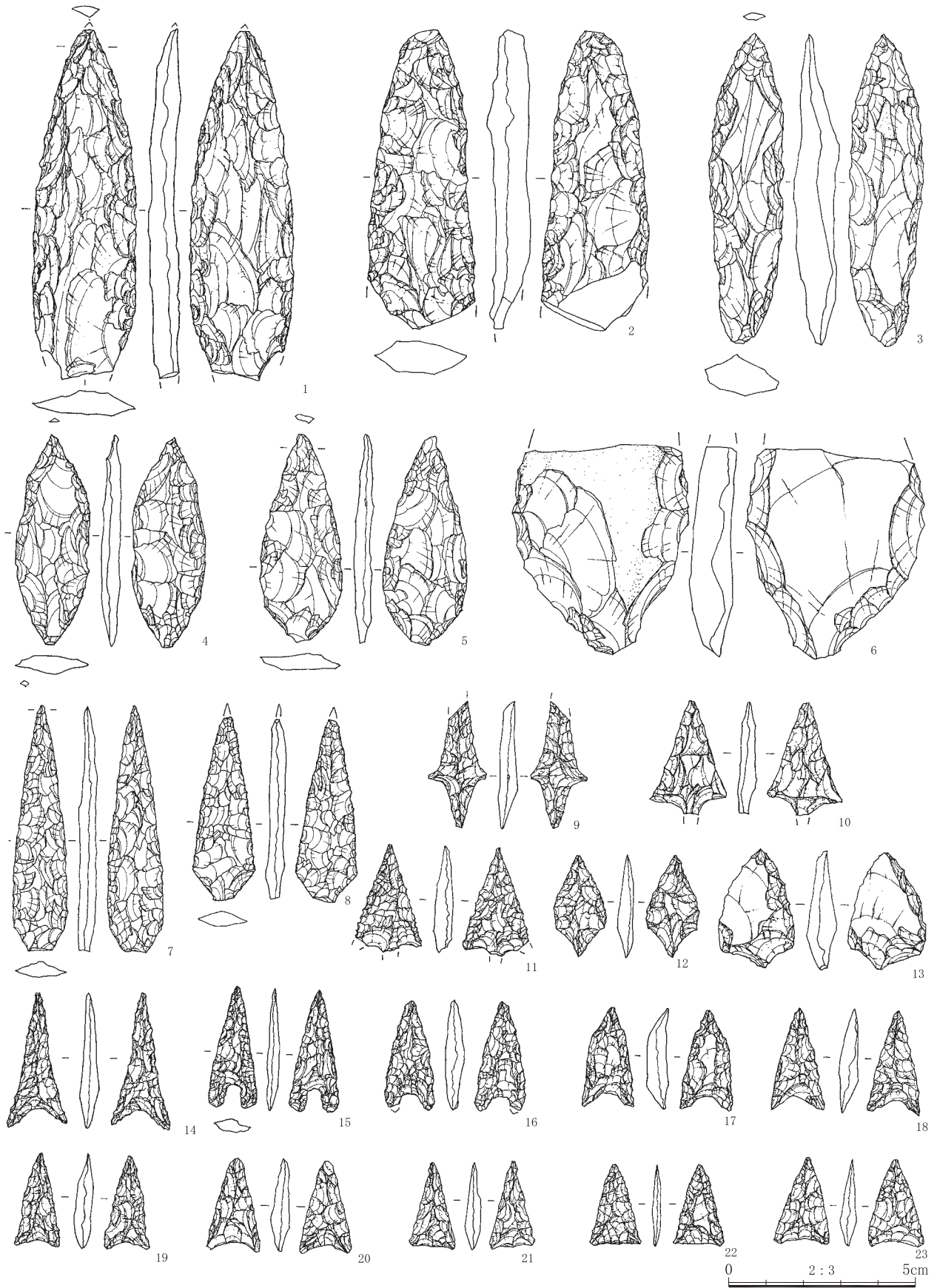


第 490 図 1 区包含層出土の石器 (9)

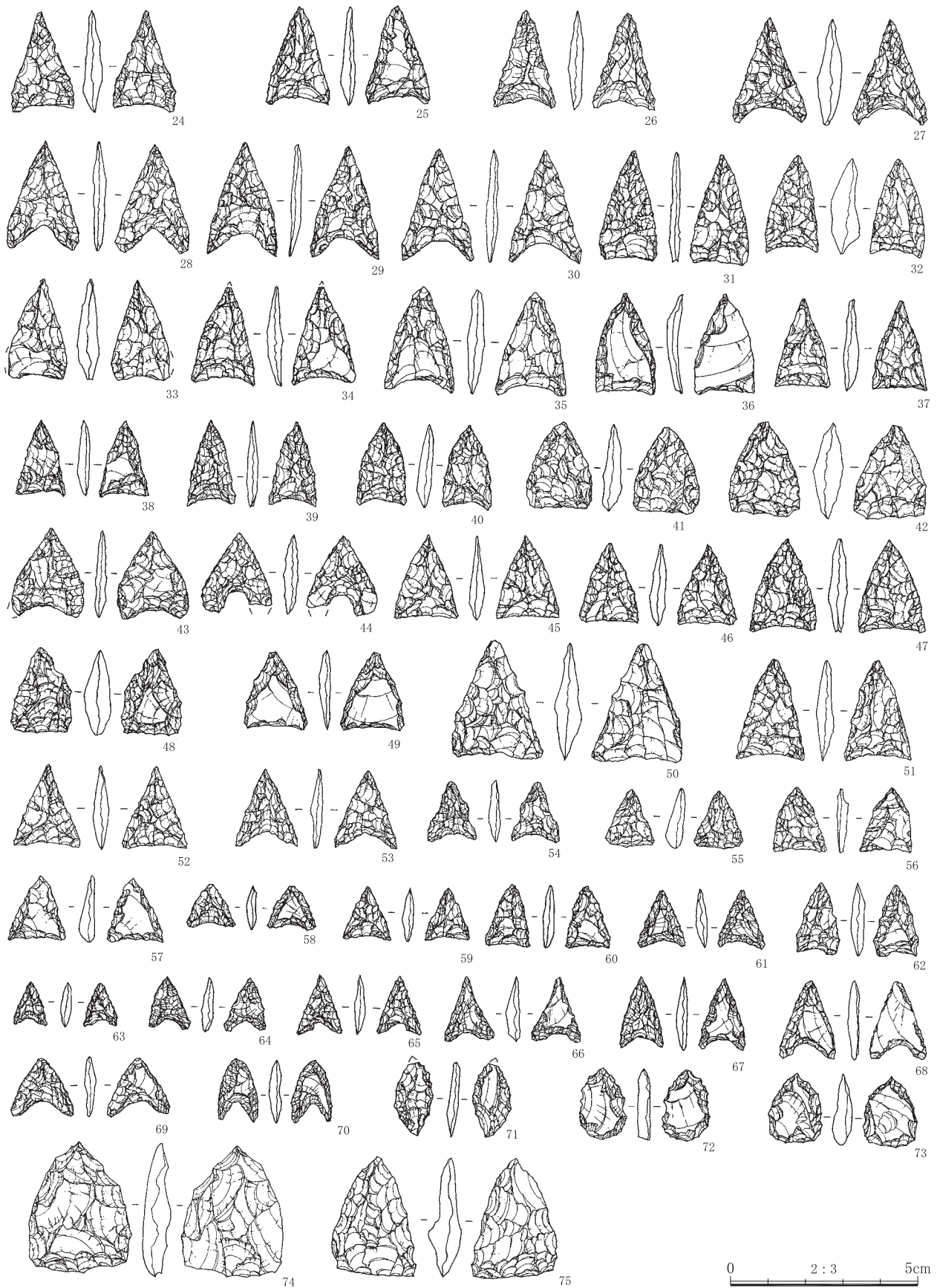


第 491 図 1 区包含層出土の石器 (10)

III 今井見切塚遺跡の調査

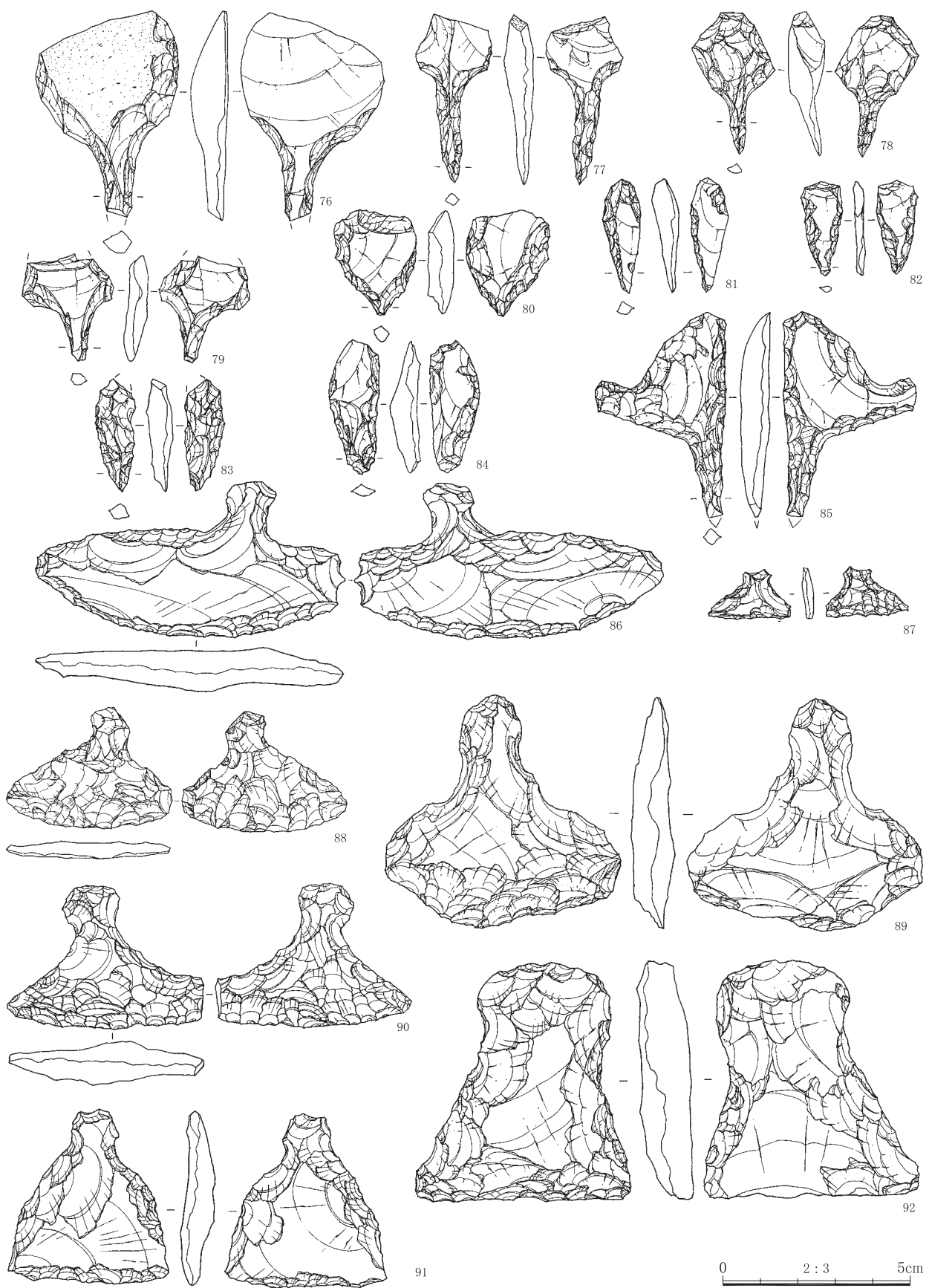


第 492 図 5 区包含層出土の石器 (1)

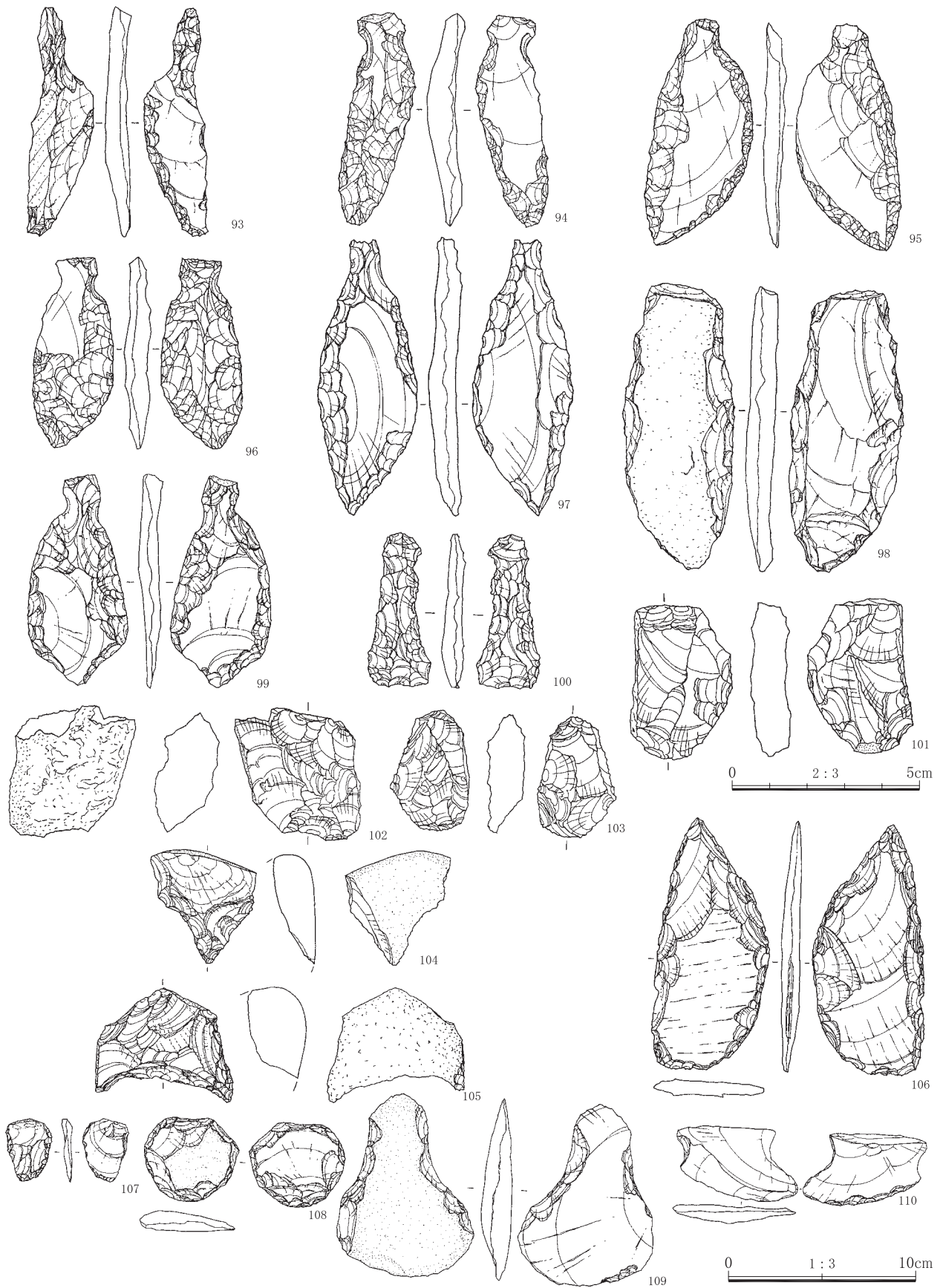


第 493 図 5 区包含層出土の石器 (2)

III 今井見切塚遺跡の調査

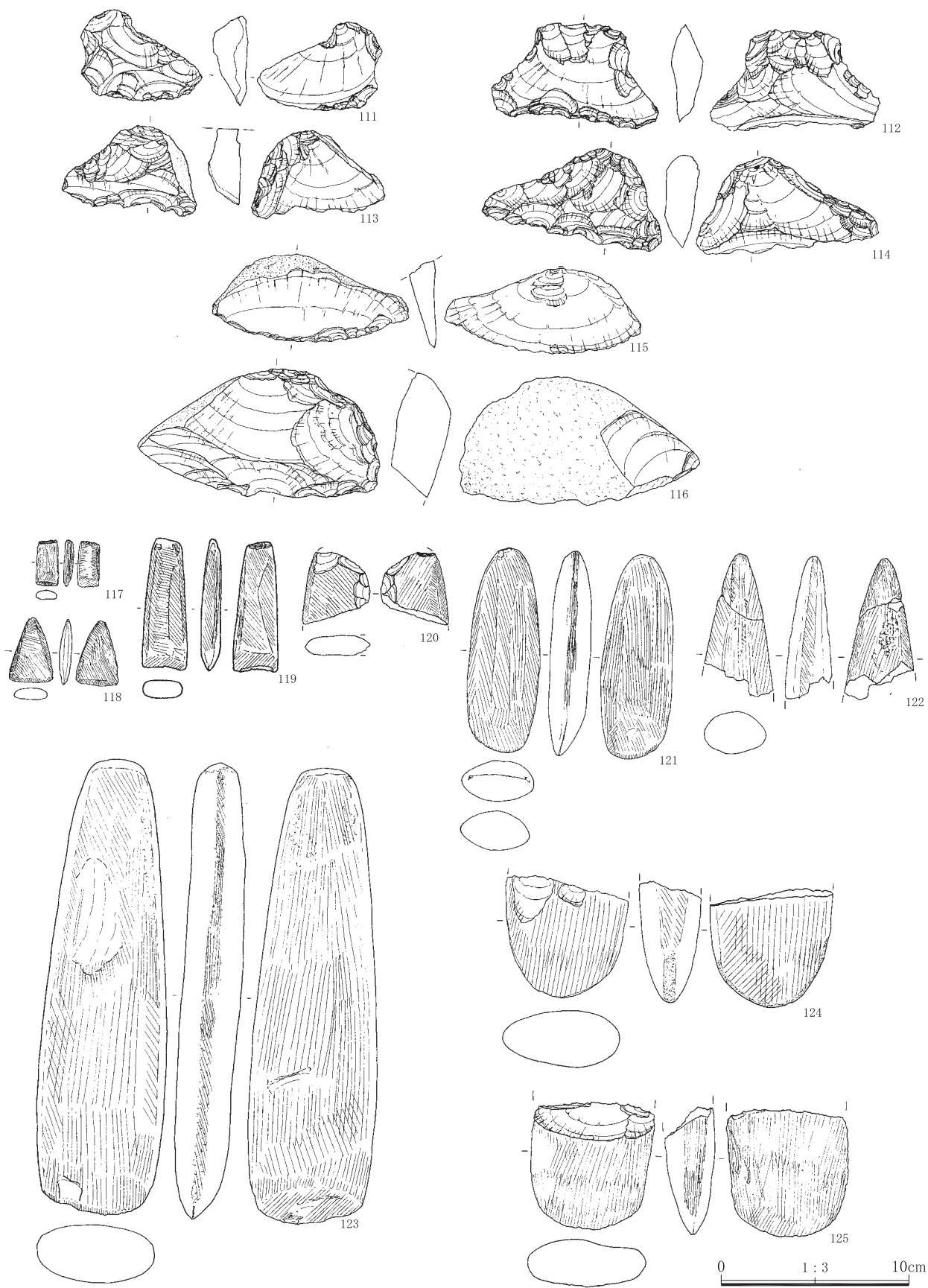


第 494 図 5 区包含層出土の石器 (3)



第 495 図 5 区包含層出土の石器 (4)

III 今井見切塚遺跡の調査



第 496 図 5 区包含層出土の石器 (5)



第 497 図 5 区包含層出土の石器 (6)

III 今井見切塚遺跡の調査

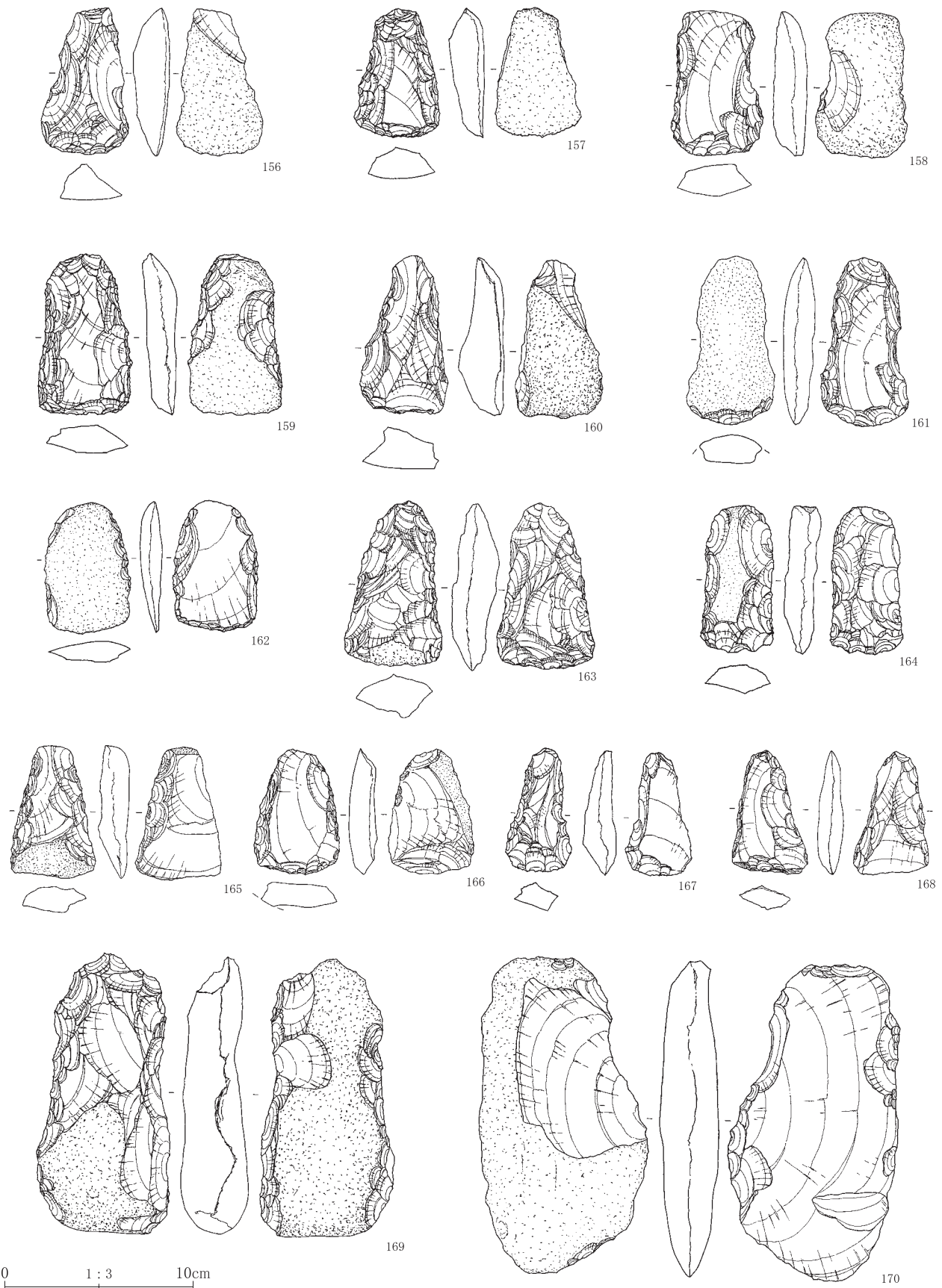


第 498 図 5 区包含層出土の石器 (7)

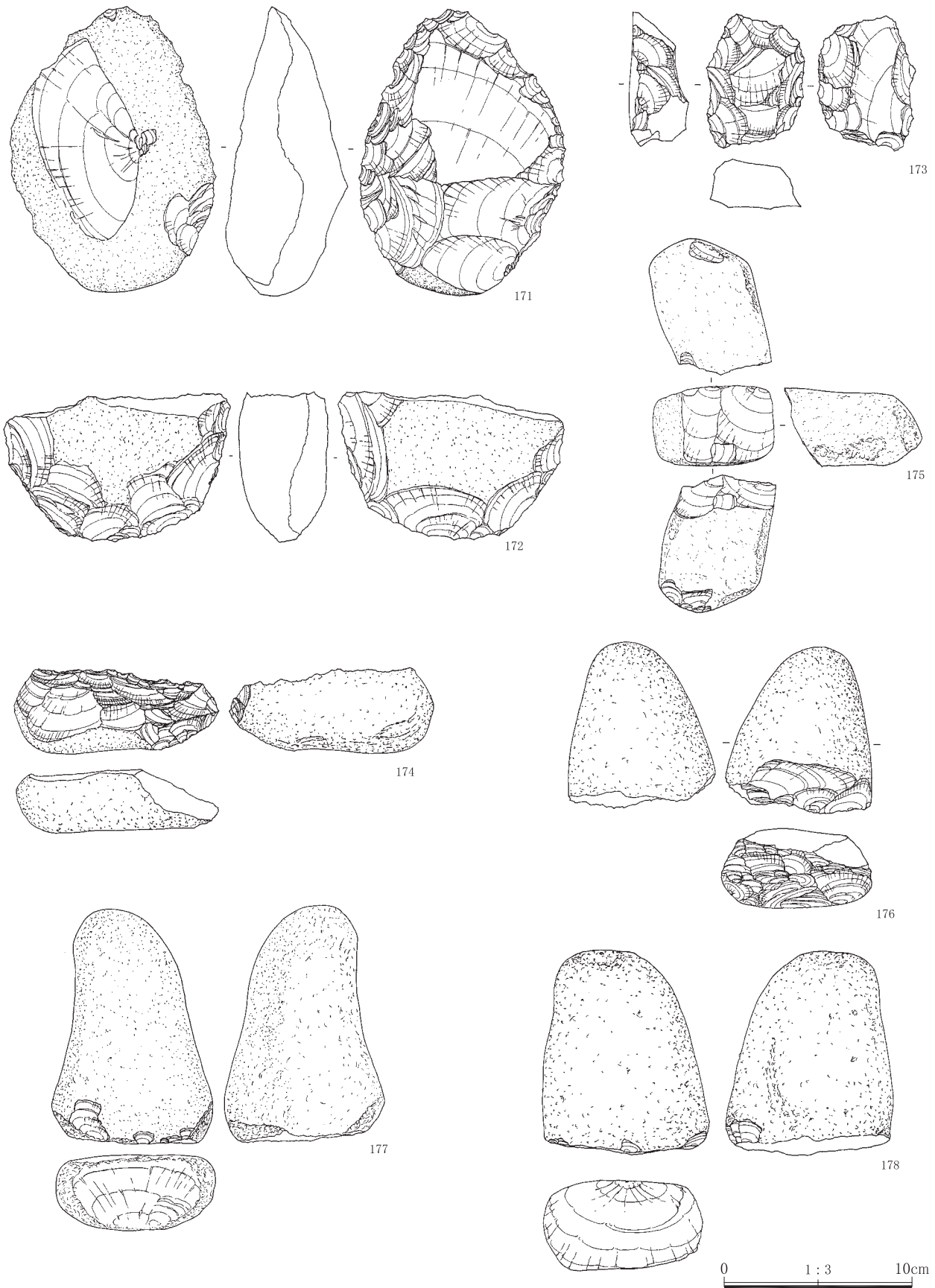


第 499 図 5 区包含層出土の石器 (8)

III 今井見切塚遺跡の調査

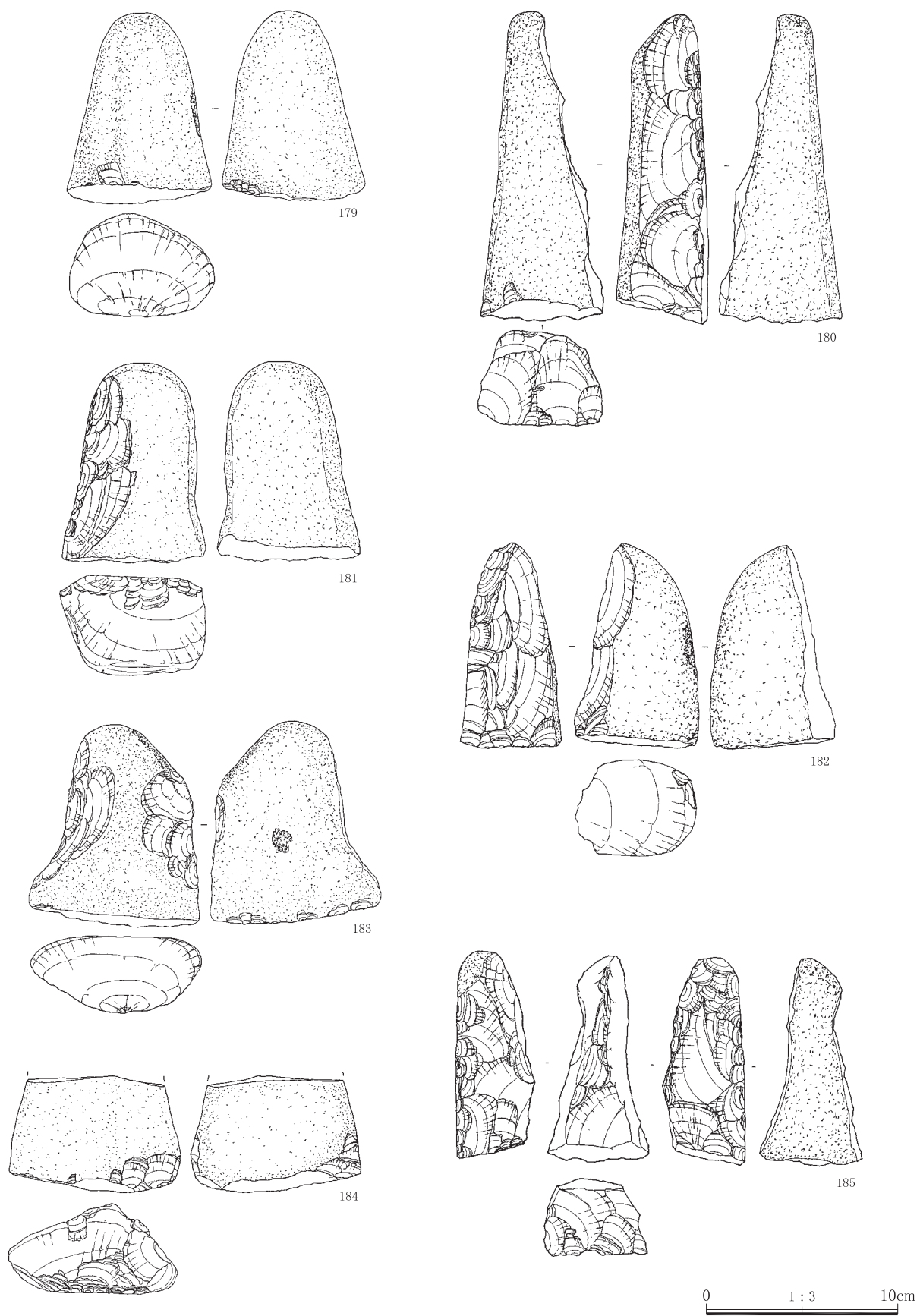


第 500 図 5 区包含層出土の石器 (9)



第 501 図 5 区包含層出土の石器 (10)

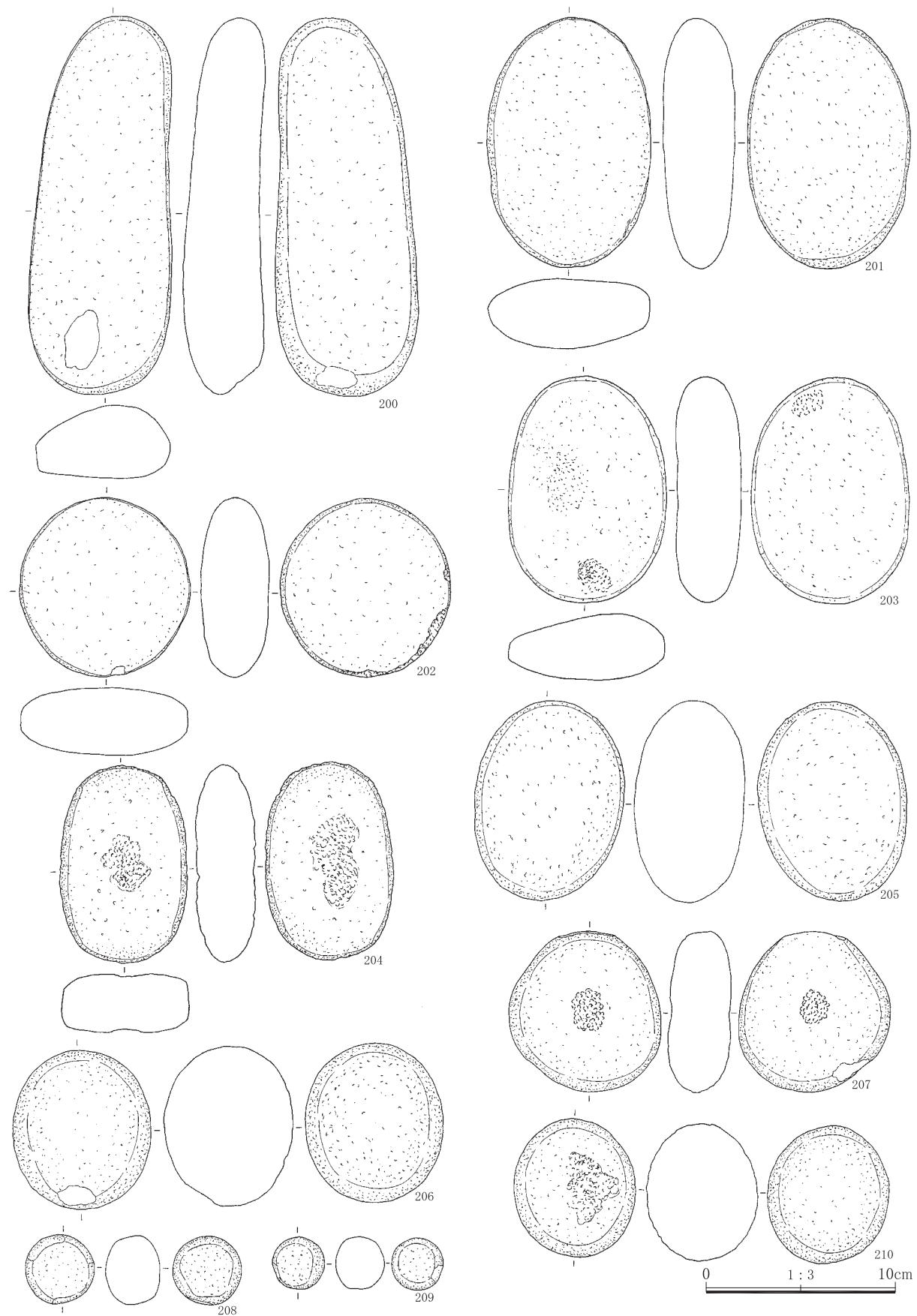
III 今井見切塚遺跡の調査



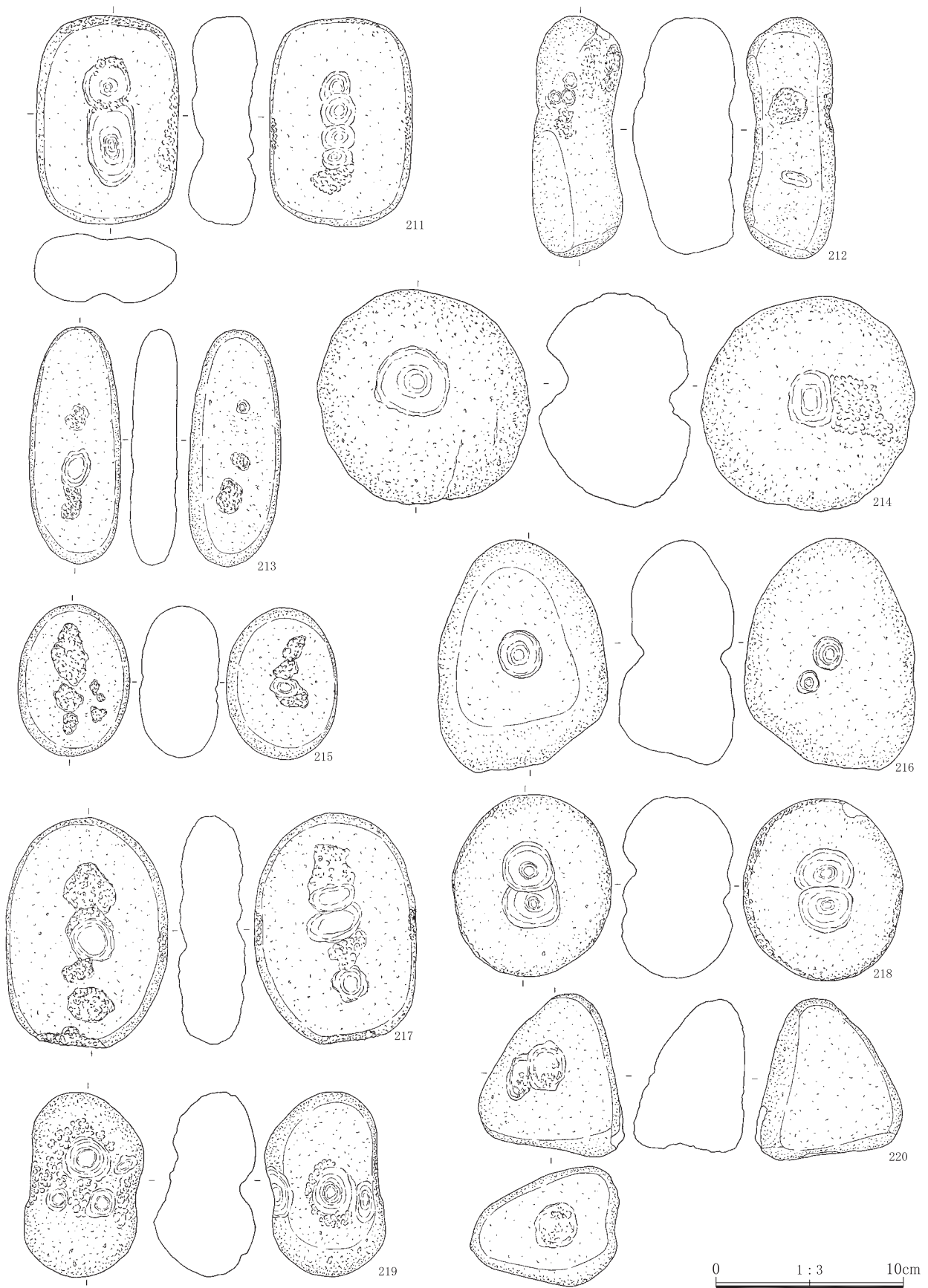
第 502 図 5 区包含層出土の石器 (11)



第 503 図 5 区包含層出土の石器 (12)



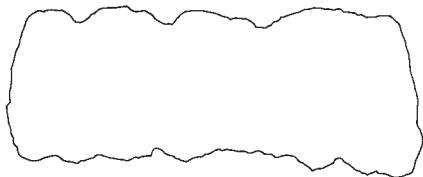
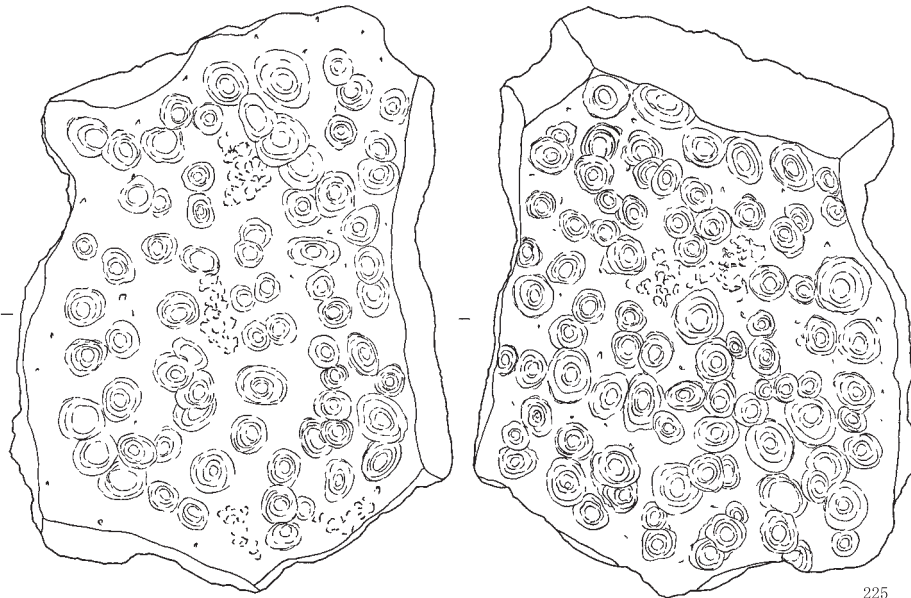
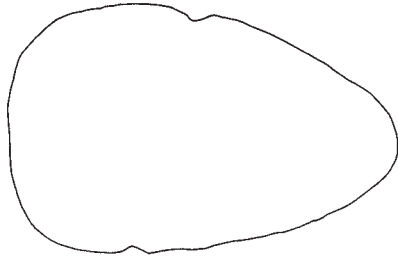
第 504 図 5 区包含層出土の石器 (13)



第 505 図 5 区包含層出土の石器 (14)



第 506 図 5 区包含層出土の石器 (15)

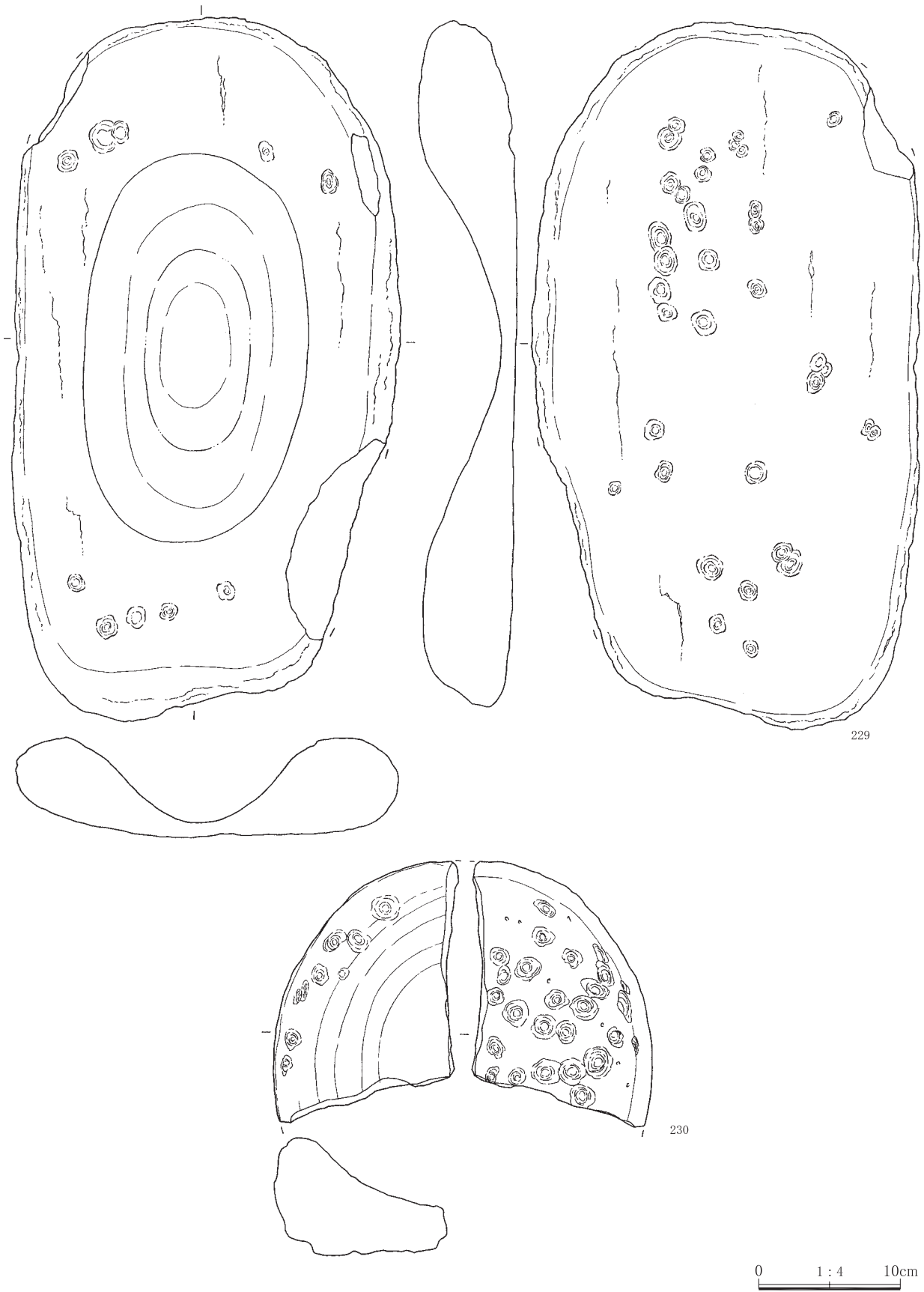


0 1:4 10cm

第 507 図 5 区包含層出土の石器 (16)



第 508 図 5 区包含層出土の石器 (17)

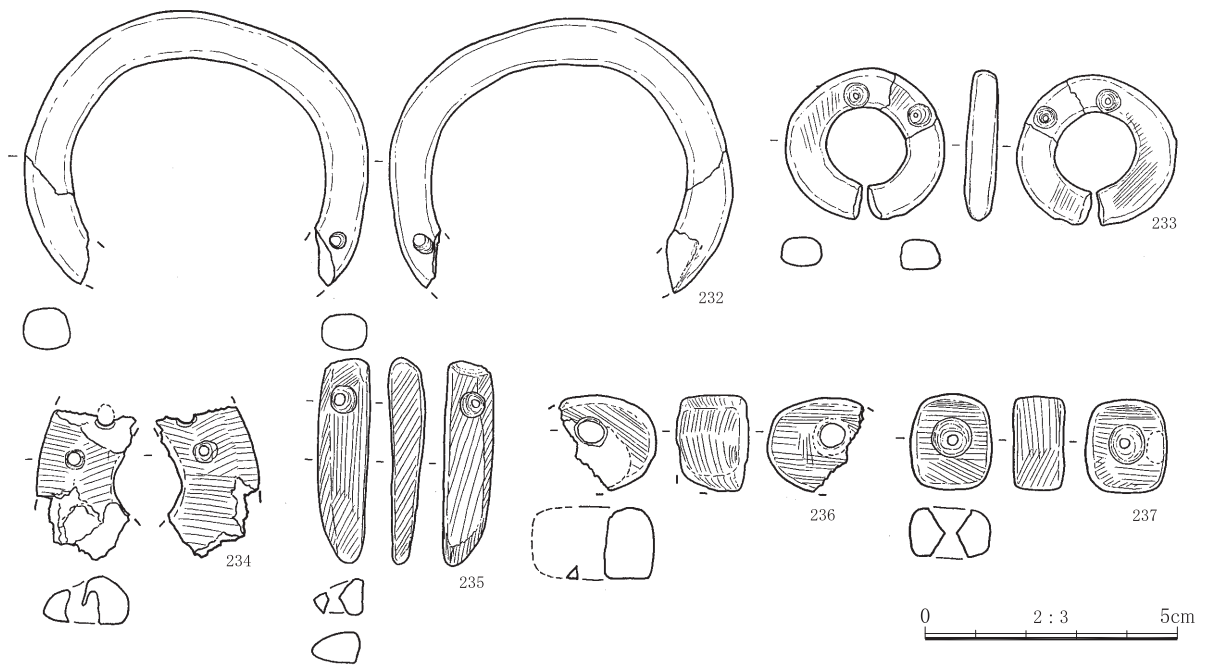


第 509 図 5 区包含層出土の石器 (18)



0 1:4 10cm

第510図 5区包含層出土の石器(19)



第 511 図 5 区包含層出土の石器 (20)